

つる い むら
鶴居村

しも ほろ ろ
下幌呂 1 遺跡

— 釧路鶴居弟子屈線(A交-57)交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成23年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

つる い むら
鶴居村

しも ほろ ろ
下幌呂 1 遺跡

— 釧路鶴居弟子屈線(A交-57)交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成23年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 調査区全景（平成 21 年空中撮影）

口絵 2



1. 調査状況（平成 19 年）



2. 調査状況（平成 21 年）



1. 住居跡群検出 (H-15 ~ 19)



2. 住居跡群検出 (H-14・26)

口絵 4



1. 平地住居跡黄色土検出 (H-16)



2. 平地住居跡炭化材・焼土調査状況 (H-26)



1. 平地住居跡炭化材出土状況 (H-14)



2. 平地住居跡炭化材出土状況 (H-15)



1. 竪穴住居跡炭化材・焼土検出 (H-3)



2. 竪穴住居跡炭化材・焼土検出 (H-23)



1. 大型竪穴住居跡 (H-12)



2. 炉 (H-12HF-1)



3. 出入口付近炭化材・焼土検出 (H-12)



4. 四脚付浅鉢土器出土状況 (H-12)



5. 壁際土器出土状況 (H-12)

口絵 8



1. 炉 (H-4HF-1)



2. 炉 (H-10HF-1)



3. 炉 (H-18HF-1)



4. 炉 (H-27HF-1)



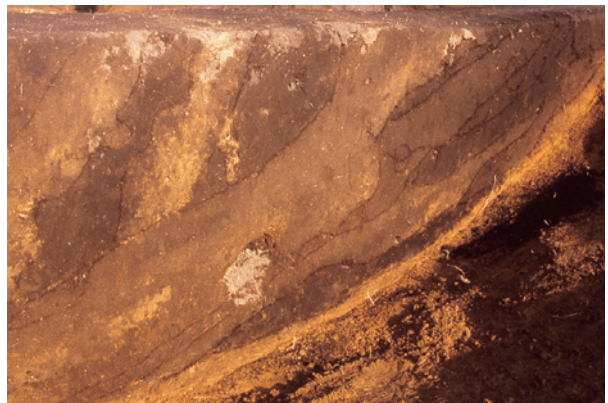
5. V層焼土 (F-32)



6. ベンガラ層断面 (P-78)



7. 焼土・ベンガラ検出 (H-2)



8. 竪穴住居跡土層断面 (H-2)



1. 袋状土坑 (P-46)



3. 長楕円形の土坑 (P-35 ~ 37・85)



2. U字形の土坑 (P-80 ~ 82)



4. 礫集中を含む土坑 (P-66)



5. 土坑覆土土器出土状況 (P-16)



6. 土坑炭化材出土状況 (P-33)



7. 土坑墓 (P-58)



1. 出土土器（縄文時代早期浦幌式）



2. 出土土器（縄文時代早期中茶路式）



1. 出土土器（縄文時代中期～後期北筒式）



2. 出土土器（縄文時代後期甑澗式・堂林式）



Photo by T.Ogawa

1. 小型注口土器 (H-5)

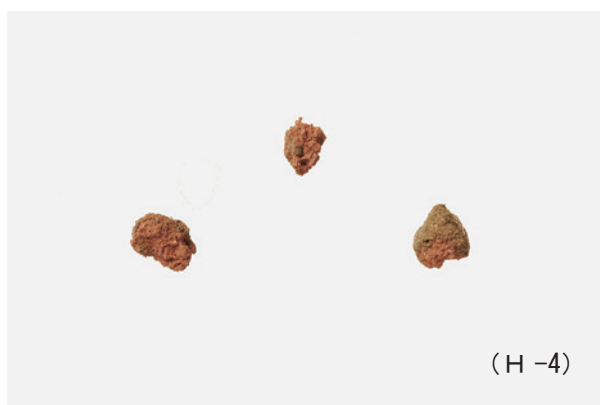


Photo by T.Ogawa

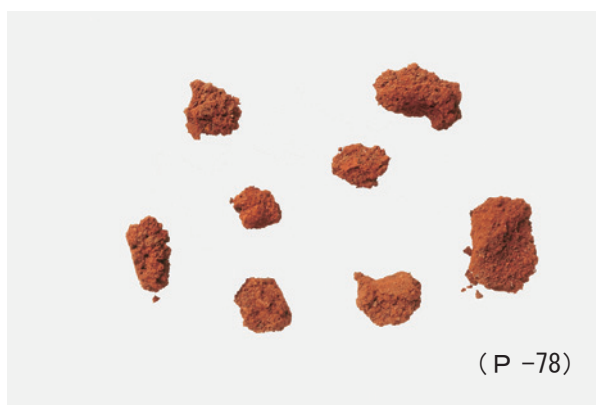
2. 四脚付浅鉢土器 (H-12)



1. 漆塗櫛



2. ベンガラ (1)



3. ベンガラ (2)



4. スタンプ形土製品



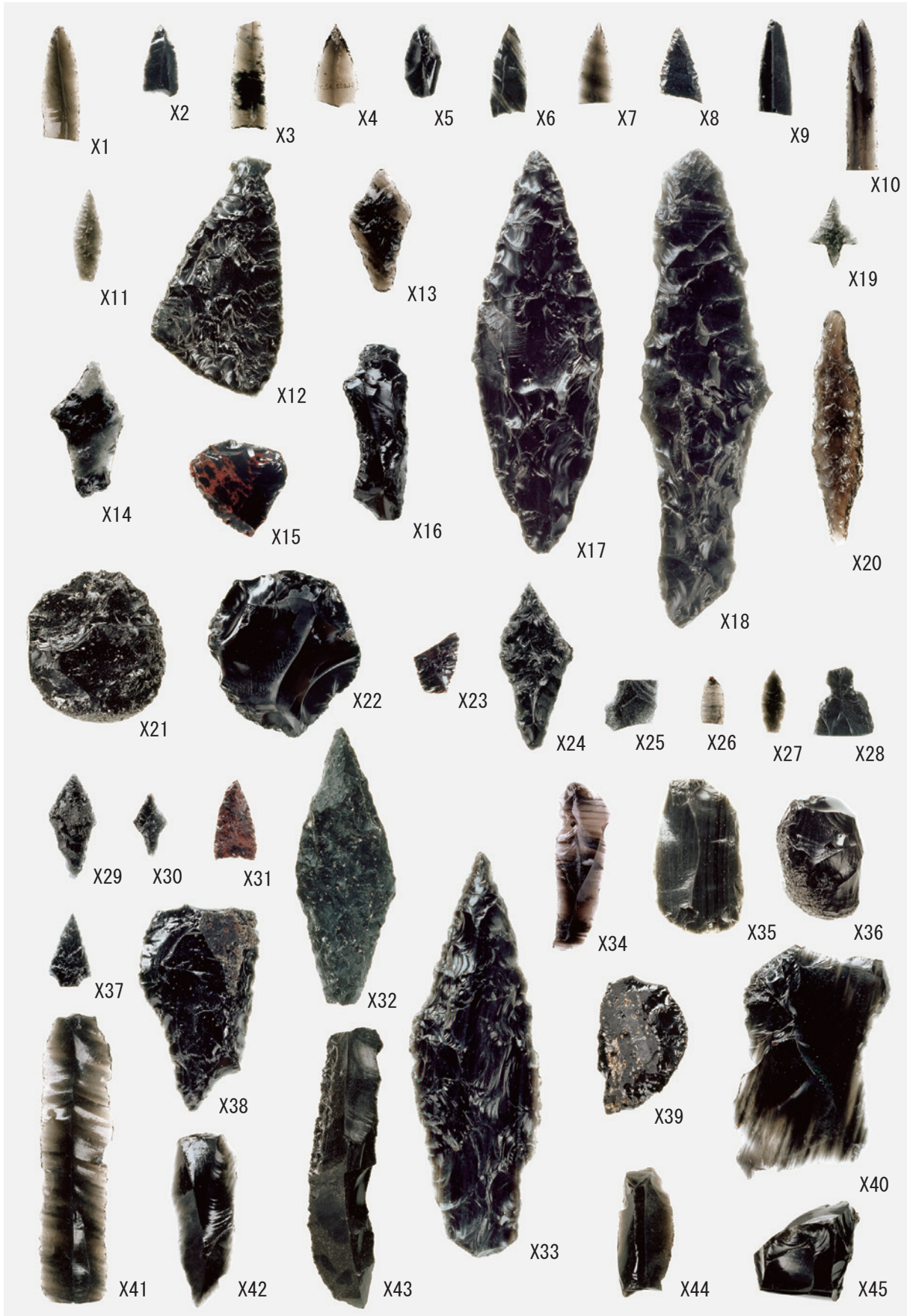
5. 赤色顔料付着土器



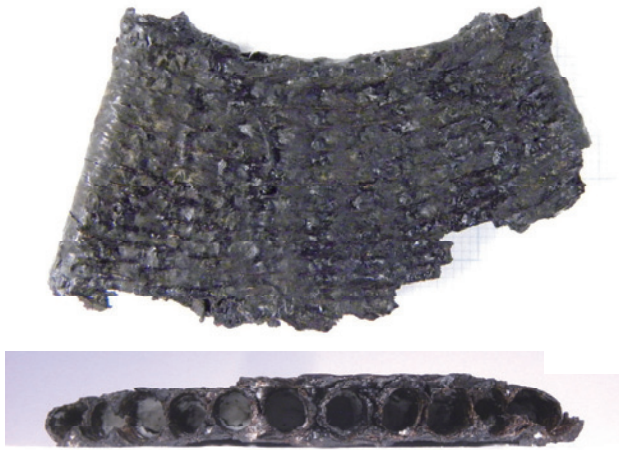
1. 石刃鏃（背面）



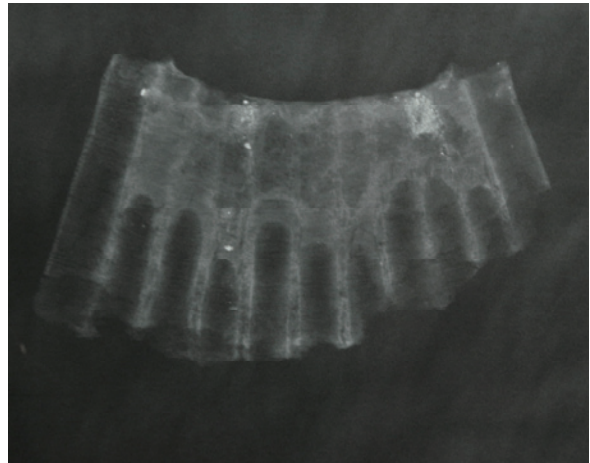
2. 石刃鏃（腹面）



1. 黒曜石原産地分析試料



1 漆塗結歯縦櫛の表面と櫛歯



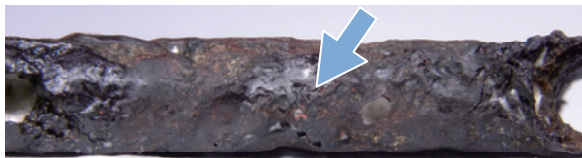
2 漆塗結歯縦櫛のX線透視画像



3 上端部横架材と櫛歯結束状況



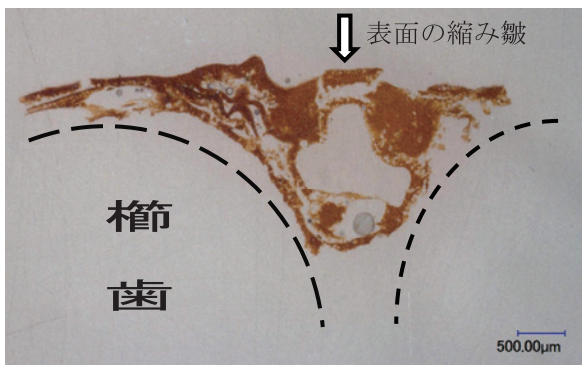
4 櫛歯結束横糸と漆膜面縮み皺



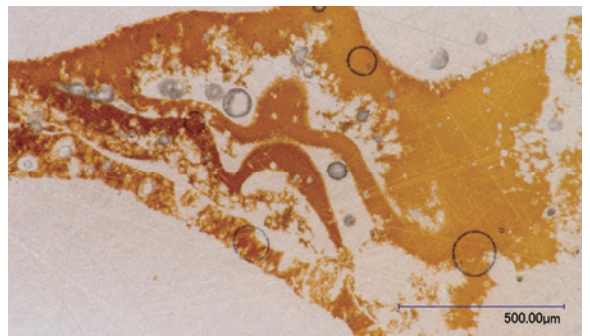
5 赤色顔料の付着痕 1



6 赤色顔料の付着痕 2



7 漆膜面の断面構造（全体）



8 漆膜面の断面構造（部分拡大）

例 言

1. 本書は、北海道釧路支庁（現釧路総合振興局）が行う道道釧路鶴居弟子屈線改良工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成19・21（2007・2009）年に発掘調査を実施した鶴居村下幌呂1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第2調査部第4調査課（平成19年度）・第2調査部第2調査課（平成21年度）が担当した。
3. 本書の執筆は、佐藤和雄・笠原興・鈴木宏行・阿部明義が行い、編集は阿部が担当した。
4. 整理作業の担当は、石器等が鈴木・笠原・阿部、土器が工藤研治・阿部、その他が阿部である。
5. 現場の写真撮影は越田雅司・鈴木・影浦寛・笠原・阿部、遺物の写真撮影は第1調査部第1調査課 吉田裕吏洋が行った。なお口絵12は、小川忠博氏が撮影し、提供を受けたものである。
6. 石器などの石材鑑定は、過年度の調査出土遺物などを参照して鈴木・笠原・阿部が行った。
7. 漆製品の保存処理および蛍光X線分析等は、第1調査部第1調査課 田口尚が行った。またV章1の図版1は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長 高妻洋成氏が撮影し、提供を受けたものである。
8. 各種分析・同定は下記に委託・依頼した。
 - 黒曜石原材産地分析：(有)遺物材料研究所
 - 炭化材樹種同定：(株)古環境研究所、(株)パレオ・ラボ
 - 炭化種実同定：(株)古環境研究所
 - 放射性炭素¹⁴C年代測定：(株)加速器分析研究所
9. 調査にあたっては、下記の諸機関および人々の指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。
 - 北海道教育庁生涯学習部文化・スポーツ課
 - 鶴居村教育委員会 国安修一・田中春樹・中尾義則
 - 釧路市教育委員会 松田 猛・石川 朗・高橋勇人・澤田恭平
 - 釧路町教育委員会 山本文男
 - 標茶町教育委員会 坪岡 始
 - 厚岸町教育委員会 熊崎農夫博
 - 斜里町教育委員会 松田 功・村本周三・門真 勇・原 靖寿
 - 北見市ところ埋蔵文化財センター 武田 修・山田 哲
 - 帯広市埋蔵文化財センター 北沢 実・山原敏朗
 - 七飯町教育委員会 山田 央
 - 御所野縄文博物館 高田和徳・菅野紀子
 - 東北大学大学院文学研究科考古学研究室 小原一成
 - とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 江原 英
 - 東海大学文学部 宮原俊一
 - 日本大学 小元久仁夫
 - (有)文化財サポート 豊原熙司
 - 釧路市 西 幸隆
 - 札幌市 大沼忠春
 - 荒井建設(株)

記号等の説明

1. 遺構は以下の記号によって表記し、発掘調査順に番号および記号を付した。

「H」：竪穴住居跡・平地住居跡

「HP」：住居跡の土坑・柱穴状小ピット 「HF」：住居跡の炉・焼土

「M」：盛土遺構 「P」土坑・土坑墓 「SP」：柱穴状小ピット

「F」：焼土 「FC」：フレイクチップ集中 「S」：礫集中

2. 遺構図には方位記号を付した。方位は真北を示す。発掘区の基線（北-南、アルファベットのライン）は真北に対して西偏7度14分である。レベルは標高（単位m）を示す。

3. 遺構の規模は、「確認面での長軸×確認面での短軸／底面での長軸×底面での短軸／厚さ（深さ）」の順で記した。一部破壊されているものや不明確なものについては、現存長を「（ ）」で、不明のものは「-」で示した。

4. 掲載した遺構図等の縮尺は原則的に以下のとおりとし、スケールを付した。また変則的なものについても随時スケールを入れている。

遺構実測図 1：40（大型住居跡等はさらに縮小）

遺物出土分布図 1：100 遺物出土詳細図 1：20

土器実測図・拓影図 1：3（大型土器の一部は1：4）

剥片石器実測図 1：2 礫石器実測図 1：3（大型の石器等の一部は1：4）

土製品・石製品 1：2

5. 石器実測図中で、敲打痕は \vee — \vee 、すり痕は \leftarrow — \rightarrow で範囲を表した。

6. 礫・礫石器の被熱した部分は、実測図に赤色のトーンで示した。

7. 遺物写真の縮尺は原則的に以下のとおりである。

土器 約1：3 剥片石器 約1：2 礫石器 約1：3 土製品・石製品 約1：2

8. 出土遺物分布図等での表示は、遺物の種類別に略記号やシンボルマークで示した。

9. 土層の混合状態を表現するために、以下のように表記してある。

A+B：AとBが同量混じる。 A>B：AにBが少量混じる。

A≫B：AにBが微量混じる。

10. 土層の色調には『新版標準土色帖』19版（小山・竹原1997）および『土壤調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロジー学会編1997）を使用し、カラーチャートの番号を付したものがある。また、土層の記述には下記の記号・略称を用いた場合がある。

Ko-c₂：駒ヶ岳c₂降下火山灰

Ta-c：樽前c降下火山灰

目 次

口絵

例言・記号等の説明

目次

挿図目次・表目次・写真図版目次

I 章. 調査の概要	1	
1. 調査要項		
2. 調査体制		
3. 調査に至る経緯		
4. 発掘区の設定と調査の経過		
(1) 発掘区の設定	(2) 発掘調査の方法と過程	(3) 整理作業の方法と過程
5. 土層		
6. 遺物の分類		
(1) 土器等	(2) 石器等	(3) その他の遺物
7. 調査結果の概要		
II 章. 遺跡の立地と周辺の遺跡	17	
1. 遺跡の立地と環境		
(1) 位置と地名の由来	(2) 遺跡周辺の地形・環境	
2. 下幌呂1遺跡と周辺の遺跡		
(1) 下幌呂1遺跡の発見と踏査	(2) 下幌呂地区の遺跡	(3) その他周辺の主な遺跡
III 章. 遺構の調査と出土遺物	31	
1. 住居跡		
2. 盛土遺構		
3. 土坑		
4. 柱穴状小ピット		
5. 焼土		
6. フレイクチップ集中		
7. 礫集中		
8. フローテーション法等による微細遺物の調査		
IV 章. 包含層の調査と出土遺物	273	
1. 包含層の調査と遺物出土状況		
2. 土器・土製品		
3. 石器		

V章. 自然科学的分析・鑑定	319
1. 漆塗櫛の構造調査と製作技法について	
2. 下幌呂1遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析	
3. 鶴居村下幌呂1遺跡出土炭化材の樹種同定	
4. 下幌呂1遺跡出土炭化材の樹種同定	
5. 鶴居村下幌呂1遺跡における種実同定	
6. 下幌呂1遺跡における放射性炭素年代測定（AMS測定）	
7. 放射性炭素年代測定（液体シンチレーション法）	
VI章. まとめ	385
1. 遺構	
(1) 各時期の遺構の特徴	(2) 根釧網地域の平地住居跡
2. 遺物	
(1) 土器	(2) 四脚付土器
(3) 石刃鎌石器群	
(4) そのほかの石器群	(5) 漆塗櫛
引用・参考文献	
写真図版	405
・現地調査状況	
・出土遺物	

報告書抄録

挿図目次

図Ⅰ－１ 遺跡の位置…………… 3	図Ⅲ－34 H－12(3)……………76
図Ⅰ－２ 調査範囲・発掘区設定図…………… 5	図Ⅲ－35 H－12(4)……………77
図Ⅰ－３ 基本土層…………… 7	図Ⅲ－36 H－12(5)……………78
図Ⅰ－４ 調査区土層断面(1)…………… 8	図Ⅲ－37 H－12出土の遺物(1)……………79
図Ⅰ－５ 調査区土層断面(2)…………… 9	図Ⅲ－38 H－12出土の遺物(2)……………80
図Ⅰ－６ 遺構位置図……………15	図Ⅲ－39 H－12出土の遺物(3)……………81
	図Ⅲ－40 H－13……………83
図Ⅱ－１ 遺跡周辺の地形(1)……………18	図Ⅲ－41 H－13出土の遺物……………84
図Ⅱ－２ 遺跡周辺の地形(2)……………19	図Ⅲ－42 H－14(1)……………86
図Ⅱ－３ 下幌呂遺跡A地点出土の遺物……………21	図Ⅲ－43 H－14(2)……………87
図Ⅱ－４ 下幌呂1遺跡採集遺物(1)……………22	図Ⅲ－44 H－14(3)……………88
図Ⅱ－５ 下幌呂1遺跡採集遺物(2)……………23	図Ⅲ－45 H－14(4)……………89
図Ⅱ－６ 下幌呂1遺跡採集遺物(3)……………24	図Ⅲ－46 H－14出土の遺物(1)……………90
図Ⅱ－７ 周辺の遺跡……………28	図Ⅲ－47 H－14出土の遺物(2)……………91
	図Ⅲ－48 H－15(1)……………92
図Ⅲ－１ H－1……………32	図Ⅲ－49 H－15(2)……………93
図Ⅲ－２ H－2・3(1)……………34	図Ⅲ－50 H－15(3)……………94
図Ⅲ－３ H－2・3(2)……………35	図Ⅲ－51 H－15(4)……………95
図Ⅲ－４ H－2・3(3)……………36	図Ⅲ－52 H－15出土の遺物……………96
図Ⅲ－５ H－2・3(4)……………37	図Ⅲ－53 H－16(1)……………98
図Ⅲ－６ H－2・3(5)……………39	図Ⅲ－54 H－16(2)……………99
図Ⅲ－７ H－2・3(6)……………40	図Ⅲ－55 H－16(3)……………100
図Ⅲ－８ H－2・3(7)……………41	図Ⅲ－56 H－16(4)……………101
図Ⅲ－９ H－2・3出土の遺物(1)……………42	図Ⅲ－57 H－16(5)……………102
図Ⅲ－10 H－2・3出土の遺物(2)……………43	図Ⅲ－58 H－16出土の遺物(1)……………103
図Ⅲ－11 H－4(1)……………45	図Ⅲ－59 H－16出土の遺物(2)……………104
図Ⅲ－12 H－4(2)……………46	図Ⅲ－60 H－17(1)……………107
図Ⅲ－13 H－4(3)……………47	図Ⅲ－61 H－17(2)……………108
図Ⅲ－14 H－4出土の遺物(1)……………48	図Ⅲ－62 H－17(3)……………109
図Ⅲ－15 H－4出土の遺物(2)……………49	図Ⅲ－63 H－17出土の遺物……………110
図Ⅲ－16 H－5(1)……………51	図Ⅲ－64 H－18(1)……………111
図Ⅲ－17 H－5(2)……………52	図Ⅲ－65 H－18(2)……………112
図Ⅲ－18 H－5出土の遺物(1)……………53	図Ⅲ－66 H－18出土の遺物……………113
図Ⅲ－19 H－5出土の遺物(2)……………54	図Ⅲ－67 H－19(1)……………114
図Ⅲ－20 H－6……………55	図Ⅲ－68 H－19(2)……………115
図Ⅲ－21 H－7……………57	図Ⅲ－69 H－19出土の遺物……………116
図Ⅲ－22 H－8……………59	図Ⅲ－70 H－20……………118
図Ⅲ－23 H－8出土の遺物……………60	図Ⅲ－71 H－20出土の遺物……………119
図Ⅲ－24 H－9……………62	図Ⅲ－72 H－21(1)……………120
図Ⅲ－25 H－9出土の遺物(1)……………63	図Ⅲ－73 H－21(2)・H－21出土の遺物……………121
図Ⅲ－26 H－9出土の遺物(2)……………64	図Ⅲ－74 H－22……………123
図Ⅲ－27 H－10(1)……………66	図Ⅲ－75 H－22出土の遺物……………124
図Ⅲ－28 H－10(2)・H－10出土の遺物(1) ……………67	図Ⅲ－76 H－23(1)……………126
図Ⅲ－29 H－10出土の遺物(2)……………68	図Ⅲ－77 H－23(2)……………127
図Ⅲ－30 H－11(1)……………70	図Ⅲ－78 H－23(3)……………128
図Ⅲ－31 H－11(2)・H－11出土の遺物……………71	図Ⅲ－79 H－23出土の遺物……………129
図Ⅲ－32 H－12(1)……………74	図Ⅲ－80 H－24……………130
図Ⅲ－33 H－12(2)……………75	図Ⅲ－81 H－25……………132
	図Ⅲ－82 H－25出土の遺物……………133

図Ⅲ-83	H-26(1).....	134	図Ⅲ-133	土坑(17) P-59~62	213
図Ⅲ-84	H-26(2).....	135	図Ⅲ-134	土坑(18) P-63~67	214
図Ⅲ-85	H-26(3).....	136	図Ⅲ-135	土坑(19) P-68~72	215
図Ⅲ-86	H-26(4).....	137	図Ⅲ-136	土坑(20) P-73~76	216
図Ⅲ-87	H-26出土の遺物(1).....	138	図Ⅲ-137	土坑(21) P-77・78	217
図Ⅲ-88	H-26出土の遺物(2).....	139	図Ⅲ-138	土坑(22) P-79~83	218
図Ⅲ-89	H-27(1).....	141	図Ⅲ-139	土坑(23) P-84・86~88	219
図Ⅲ-90	H-27(2).....	142	図Ⅲ-140	土坑出土の遺物(1)	220
図Ⅲ-91	H-27出土の遺物.....	143	図Ⅲ-141	土坑出土の遺物(2)	221
図Ⅲ-92	H-28.....	144	図Ⅲ-142	土坑出土の遺物(3)	222
図Ⅲ-93	H-28出土の遺物.....	145	図Ⅲ-143	土坑出土の遺物(4)	223
図Ⅲ-94	H-29.....	146	図Ⅲ-144	土坑出土の遺物(5)	224
図Ⅲ-95	H-30(1).....	148	図Ⅲ-145	土坑出土の遺物(6)	225
図Ⅲ-96	H-30(2).....	149	図Ⅲ-146	SP-1・2・10~17	227
図Ⅲ-97	H-30出土の遺物.....	150	図Ⅲ-147	焼土(1) F-1~8	234
図Ⅲ-98	H-31.....	151	図Ⅲ-148	焼土(2) F-9~14	235
図Ⅲ-99	H-32.....	153	図Ⅲ-149	焼土(3) F-15~20	236
図Ⅲ-100	H-32出土の遺物	154	図Ⅲ-150	焼土(4) F-21~26	237
図Ⅲ-101	H-33	155	図Ⅲ-151	焼土(5) F-27~32	238
図Ⅲ-102	H-33出土の遺物	156	図Ⅲ-152	焼土出土の遺物	239
図Ⅲ-103	H-34(1)	157	図Ⅲ-153	フレイクチップ集中FC-1~8 ..	241
図Ⅲ-104	H-34(2)	158	図Ⅲ-154	フレイクチップ集中出土の遺物 ..	242
図Ⅲ-105	H-34出土の遺物	159	図Ⅲ-155	礫集中S-1~5	244
図Ⅲ-106	H-35	160			
図Ⅲ-107	H-35出土の遺物	161	図Ⅳ-1	発掘区別遺物出土分布図(1).....	275
図Ⅲ-108	H-36	163	図Ⅳ-2	発掘区別遺物出土分布図(2).....	276
図Ⅲ-109	H-37	164	図Ⅳ-3	発掘区別遺物出土分布図(3).....	277
図Ⅲ-110	H-38(1)	165	図Ⅳ-4	発掘区別遺物出土分布図(4).....	278
図Ⅲ-111	H-38(2)	166	図Ⅳ-5	発掘区別遺物出土分布図(5).....	279
図Ⅲ-112	H-38(3)	167	図Ⅳ-6	包含層出土の土器(1).....	283
図Ⅲ-113	H-38出土の遺物(1)	168	図Ⅳ-7	包含層出土の土器(2).....	284
図Ⅲ-114	H-38出土の遺物(2)	169	図Ⅳ-8	包含層出土の土器(3).....	285
図Ⅲ-115	M-1(1)	172	図Ⅳ-9	包含層出土の土器(4).....	286
図Ⅲ-116	M-1(2)・M-1出土の遺物 ..	173	図Ⅳ-10	包含層出土の土器(5).....	287
図Ⅲ-117	土坑(1) P-1~4	197	図Ⅳ-11	包含層出土の土器(6).....	288
図Ⅲ-118	土坑(2) P-5~7	198	図Ⅳ-12	包含層出土の土器(7).....	289
図Ⅲ-119	土坑(3) P-8~10・17・18	199	図Ⅳ-13	包含層出土の土器(8)・土製品.....	290
図Ⅲ-120	土坑(4) P-11~13	200	図Ⅳ-14	包含層出土の石器(1).....	297
図Ⅲ-121	土坑(5) P-14~16	201	図Ⅳ-15	包含層出土の石器(2).....	298
図Ⅲ-122	土坑(6) P-20~25	202	図Ⅳ-16	包含層出土の石器(3).....	299
図Ⅲ-123	土坑(7) P-19・26・28	203	図Ⅳ-17	包含層出土の石器(4).....	300
図Ⅲ-124	土坑(8) P-29~34	204	図Ⅳ-18	包含層出土の石器(5).....	301
図Ⅲ-125	土坑(9) P-35~37・85・SP-3~9	205	図Ⅳ-19	包含層出土の石器(6).....	302
図Ⅲ-126	土坑(10) P-35~37・85・SP-3~9	206	図Ⅳ-20	包含層出土の石器(7).....	303
図Ⅲ-127	土坑(11) P-38~42	207	図Ⅳ-21	包含層出土の石器(8).....	304
図Ⅲ-128	土坑(12) P-43~45	208	図Ⅳ-22	包含層出土の石器(9).....	305
図Ⅲ-129	土坑(13) P-46~50	209	図Ⅳ-23	包含層出土の石器(10).....	306
図Ⅲ-130	土坑(14) P-51~53	210	図Ⅳ-24	包含層出土の石器(11).....	307
図Ⅲ-131	土坑(15) P-54~56	211	図Ⅳ-25	包含層出土の石器(12).....	308
図Ⅲ-132	土坑(16) P-57・58	212	図Ⅳ-26	包含層出土の石器(13).....	309
			図Ⅴ-1	蛍光X線分析チャート (XRF)	320

図V-2	黒曜石原産地	331	図V-16	暦年較正年代グラフ(6)	381
図V-3	黒曜石製遺物産地分析試料(1)	340	図V-17	年代測定結果	382
図V-4	黒曜石製遺物産地分析試料(2)	341	図VI-1	時期別遺構位置図(1)	386
図V-5	黒曜石製遺物産地分析試料(3)	342	図VI-2	時期別遺構位置図(2)	387
図V-6	試料採取位置と樹種同定結果(1)	352	図VI-3	平地住居跡例	391
図V-7	試料採取位置と樹種同定結果(2)	353	図VI-4	復元土器集成(1)	393
図V-8	試料採取位置と樹種同定結果(3)	354	図VI-5	復元土器集成(2)	394
図V-9	下幌呂1遺跡出土炭化材の復元直径	357	図VI-6	復元土器集成(3)	395
図V-10	試料採取位置と樹種同定結果(4)	359	図VI-7	四脚付土器関連図	398
図V-11	暦年較正年代グラフ(1)	376	図VI-8	石刃鎌石器群	401
図V-12	暦年較正年代グラフ(2)	377	図VI-9	石刃剥離技術	401
図V-13	暦年較正年代グラフ(3)	378	図VI-10	石刃鎌製作技術	401
図V-14	暦年較正年代グラフ(4)	379	図VI-11	石刃変形過程	401
図V-15	暦年較正年代グラフ(5)	380	図VI-12	縄文時代後期中葉の漆塗櫛	403

表目次

表I-1	遺構数	14	表III-27	遺構出土掲載石器一覧(6)	272
表I-2	出土遺物集計	16	表IV-1	包含層出土遺物集計	310
表II-1	鶴居村の遺跡一覧(1)	29	表IV-2	包含層出土掲載土器一覧(1)	311
表II-2	鶴居村の遺跡一覧(2)	30	表IV-3	包含層出土掲載土器一覧(2)	312
表III-1	フローテーション結果(1)	246	表IV-4	包含層出土掲載土器一覧(3)	313
表III-2	フローテーション結果(2)	247	表IV-5	包含層出土掲載土器一覧(4)	314
表III-3	動物遺存体一覧	248	表IV-6	包含層出土掲載石器一覧(1)	315
表III-4	遺構一覧(1)	249	表IV-7	包含層出土掲載石器一覧(2)	316
表III-5	遺構一覧(2)	250	表IV-8	包含層出土掲載石器一覧(3)	317
表III-6	遺構一覧(3)	251	表IV-9	包含層出土掲載石器一覧(4)	318
表III-7	遺構出土遺物集計(1)	252	表V-1-1	各黒曜石の原産地における原石群 の元素比の平均値と標準偏差値	332
表III-8	遺構出土遺物集計(2)	253	表V-1-3	黒曜石製遺物群の元素比の平均値 と標準偏差値	334
表III-9	遺構出土遺物集計(3)	254	表V-2	湧別川河口域の河床から採取した247個 の黒曜石円礫の分類結果	335
表III-10	遺構出土遺物集計(4)	255	表V-3	常呂川(中ノ島～北見大橋)から採取 した661個の黒曜石円礫の分類結果	335
表III-11	遺構出土遺物集計(5)	256	表V-4	サナブチ川から採取した44個の黒曜石 円礫の分類結果	335
表III-12	遺構出土遺物集計(6)	257	表V-5	下幌呂1遺跡出土黒曜石製遺物の非破 壊不定形塊状分析による化学組成結果	336
表III-13	遺構出土遺物集計(7)	258	表V-6	下幌呂1遺跡出土黒曜石製石器の 元素比分析結果	336
表III-14	遺構出土掲載土器一覧(1)	259	表V-7	鶴居村下幌呂1遺跡出土黒曜石遺物 産地分析結果	338
表III-15	遺構出土掲載土器一覧(2)	260			
表III-16	遺構出土掲載土器一覧(3)	261			
表III-17	遺構出土掲載土器一覧(4)	262			
表III-18	遺構出土掲載土器一覧(5)	263			
表III-19	遺構出土掲載土器一覧(6)	264			
表III-20	遺構出土掲載土器一覧(7)	265			
表III-21	遺構出土掲載土器一覧(8)	266			
表III-22	遺構出土掲載石器一覧(1)	267			
表III-23	遺構出土掲載石器一覧(2)	268			
表III-24	遺構出土掲載石器一覧(3)	269			
表III-25	遺構出土掲載石器一覧(4)	270			
表III-26	遺構出土掲載石器一覧(5)	271			

表V-8	鶴居村下幌呂1遺跡における樹種 同定結果(1)……………	347	表V-12	下幌呂1遺跡出土炭化材の樹種 同定結果一覧……………	358
表V-9	鶴居村下幌呂1遺跡における樹種 同定結果(2)……………	348	表V-13	鶴居村下幌呂1遺跡における種実 結同定果……………	366
表V-10	下幌呂1遺跡出土炭化材の樹種 同定結果……………	355	表V-14	測定結果……………	370
表V-11	下幌呂1遺跡出土炭化材の樹種と 割れ方……………	356	表V-15	暦年較正……………	371
			表V-16	年代測定結果(液体シンチレーション) ……………	383

写真図版目次

●口絵

口絵1

1. 調査区全景(平成21年空中撮影)

口絵2

1. 調査状況(平成19年)
2. 調査状況(平成21年)

口絵3

1. 住居跡群検出(H-15~19)
2. 住居跡群検出(H-14・26)

口絵4

1. 平地住居跡黄色土検出(H-16)
2. 平地住居跡炭化材・焼土調査状況(H-26)

口絵5

1. 平地住居跡炭化材出土状況(H-14)
2. 平地住居跡炭化材出土状況(H-15)

口絵6

1. 竪穴住居跡炭化材・焼土検出(H-3)
2. 竪穴住居跡炭化材・焼土検出(H-23)

口絵7

1. 大型竪穴住居跡(H-12)
2. 炉(H-12HF-1)
3. 出入口付近炭化材・焼土検出(H-12)
4. 四脚付浅鉢土器出土状況(H-12)
5. 壁際土器出土状況(H-12)

口絵8

1. 炉(H-4HF-1)
2. 炉(H-10HF-1)
3. 炉(H-18HF-1)
4. 炉(H-27HF-1)
5. V層焼土(F-32)
6. ベンガラ層断面(P-78)
7. 焼土・ベンガラ検出(H-2)
8. 竪穴住居跡土層断面(H-2)

口絵9

1. 袋状土坑(P-46)
2. U字形の土坑(P-80~82)
3. 長楕円形の土坑(P-35~37・85)
4. 礫集中を含む土坑(P-66)
5. 土坑覆土土器出土状況(P-16)

6. 土坑炭化材出土状況(P-33)

7. 土坑墓(P-58)

口絵10

1. 出土土器(縄文時代早期浦幌式)
2. 出土土器(縄文時代早期中茶路式)

口絵11

1. 出土土器(縄文時代中期~後期北筒式)
2. 出土土器(縄文時代後期甕淵式・堂林式)

口絵12

1. 小型注口土器(H-5)
2. 四脚付浅鉢土器(H-12)

口絵13

1. 漆塗櫛
2. ベンガラ
3. ベンガラ
4. スタンプ形土製品
5. 赤色顔料付着土器

口絵14

1. 石刃鎌(背面)
2. 石刃鎌(腹面)

口絵15

1. 黒曜石原産地分析試料

口絵16

1. 漆塗結歯竪櫛の表面と櫛歯
2. 漆塗結歯竪櫛のX線透視画像
3. 上端部横架材と櫛歯結束状況
4. 櫛歯結束横糸と漆膜面縮み皺
5. 赤色顔料の付着痕1
6. 赤色顔料の付着痕2
7. 漆膜面の断面構造(全体)
8. 漆膜面の断面構造(部分拡大)

●V章 自然科学的分析・鑑定

[V章-1]

図版1. 漆塗櫛のX線透視画像(XCR)

[V章-3]

図版1. 鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材I

図版2. 鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材II

図版3. 鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材III

〔V章-4〕

- 図版1. 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)
図版2. 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)
図版3. 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)・樹皮巻製品?全形写真

〔V章-5〕

- 図版1. 鶴居村下幌呂1遺跡の種実

●図版

図版1

1. 遺跡遠景(空中撮影・合成)

図版2

1. 調査区近景(空中撮影)
2. 調査区近景(空中撮影)

図版3

1. IV層上面(平成21年)
2. 基本土層断面(I5区)
3. 21ライン断面(M22区・H-9付近)
4. 中央部付近調査状況
5. 東側斜面部調査状況

図版4

1. H-1検出
2. H-1調査状況
3. H-1東西断面
4. H-1南北断面
5. H-1完掘

図版5

1. H-2・3検出
2. H-2・3覆土調査状況
3. H-2・3東西断面
4. H-3南北断面
5. H-2南北断面(1)
6. H-2南北断面(2)

図版6

1. H-3炭化材出土状況
2. H-2炭化材出土状況
3. H-2覆土ベンガラ検出
4. H-2床面ベンガラ検出
5. H-2・3完掘

図版7

1. H-4東西断面
2. H-4南北断面
3. H-4土器出土状況(1)
4. H-4土器出土状況(2)
5. H-4床面検出

図版8

1. H-5検出
2. H-5覆土焼土検出
3. H-5東西断面
4. H-5南北断面

図版9

1. H-5小型注口土器出土状況(1)
2. H-5小型注口土器出土状況(2)
3. H-5遺物出土状況
4. H-5HF-1断面
5. H-5完掘(H-11検出)

図版10

1. H-6南北断面
2. H-6東西断面
3. H-6完掘
4. H-7南北断面
5. H-7完掘

図版11

1. H-8検出
2. H-8断面
3. H-8石刃出土状況
4. H-8完掘
5. H-9東西断面
6. H-9南北断面
7. H-9HF-1検出
8. H-9完掘

図版12

1. H-10覆土遺物出土状況
2. H-10断面
3. H-10床面付近遺物出土状況
4. H-10HF-1断面
5. H-10完掘

図版13

1. H-11炭化材出土状況
2. H-11完掘

図版14

1. H-12検出
2. H-12覆土Ta-c検出
3. H-12南北断面
4. H-12東西断面
5. H-12炭化材・焼土検出
6. H-12HF-1断面

図版15

1. H-12四脚付浅鉢土器出土状況(1)
2. H-12四脚付浅鉢土器出土状況(2)
3. H-12土器出土状況
4. H-12漆塗櫛出土状況
5. H-12HP-1断面
6. H-12HP-2断面
7. H-12HP-3断面
8. H-12HP-10断面
9. H-12HP-6断面
10. H-12HP-7・8断面

図版16

1. H-12完掘(1)
2. H-12完掘(2)
3. H-13礫出土状況

4. H-13東西断面
 5. H-13完掘
- 図版17
1. H-14・26検出
 2. H-14~15断面
 3. H-14東西断面
 4. H-14黄色土検出
- 図版18
1. H-14炭化材出土状況(1)
 2. H-14炭化材出土状況(2)
 3. H-14炭化材出土状況(3)
 4. H-14炭化材出土状況(4)
 5. H-14炭化材出土状況(5)
- 図版19
1. H-14炭化材(草本)出土状況
 2. H-14HP-1断面
 3. H-14HF-1断面
 4. H-14HF-2断面
 5. H-14完掘
- 図版20
1. H-15検出
 2. H-15断面
 3. H-15炭化材出土状況(1)
 4. H-15炭化材出土状況(2)
 5. H-15HF-1断面
- 図版21
1. H-15・16覆土調査状況
 2. H-16黄色土検出
- 図版22
1. H-16南北断面
 2. H-16東西断面
 3. H-16~H-19断面
 4. H-16~H-20断面
 5. H-16遺物出土状況
 6. H-16HM3層炭化材出土状況
 7. H-16HF-1断面
 8. H-16HF-2断面
- 図版23
1. H-17・20調査状況
 2. H-17遺物出土状況
 3. H-17南北断面
 4. H-17東西断面
 5. H-17HF-1断面
 6. H-17HF-3断面
- 図版24
1. H-17HP-1断面
 2. H-17HP-5断面
 3. H-17HP-2断面
 4. H-17HP-3断面
 5. H-17HP-4断面
 6. H-17完掘
- 図版25
1. H-18南北断面
 2. H-18東西断面
 3. H-18石槍出土状況
 4. H-18炭化材出土状況
 5. H-18HF-1断面
 6. H-18HP-1断面
 7. H-18完掘
- 図版26
1. H-19東西断面
 2. H-19南北断面
 3. H-19HF-1断面
 4. H-19HF-2断面
 5. H-19完掘
- 図版27
1. H-20東西断面
 2. H-20南北断面
 3. H-20完掘
 4. H-20HP-1
 5. H-21東西断面
 6. H-21南北断面
 7. H-21HF-1断面
 8. H-21完掘
- 図版28
1. H-22・P-43~45検出
 2. H-22東西断面
 3. H-22南北断面
 4. H-22遺物出土状況
 5. H-22床面
- 図版29
1. H-23東西断面
 2. H-23覆土焼土・黄色土検出
 3. H-23炭化材出土状況(1)
 4. H-23炭化材・黄色土断面
 5. H-23炭化材出土状況(2)
 6. H-23炭化材出土状況(3)
- 図版30
1. H-23石槍出土状況
 2. H-23掘上土断面
 3. H-23HP-1断面
 4. H-23HF-1・2断面
 5. H-23完掘
- 図版31
1. H-24東西断面
 2. H-24南北断面
 3. H-24HF-1断面
 4. H-24完掘
 5. H-25黄色土検出
 6. H-25東西断面
 7. H-25南北断面
 8. H-25完掘
- 図版32
1. H-26断面

2. H-26土器①出土状況(1)
3. H-26土器①出土状況(2)
4. H-26土器②出土状況
5. H-26フレイクチップ出土状況

図版33

1. H-26覆土焼土断面
2. H-26HF-1断面
3. H-26HP-1断面
4. H-26HP-3断面
5. H-26HP-5断面
6. H-26炭化材出土状況

図版34

1. H-27南北断面
2. H-27東西断面
3. H-27床面
4. H-27HF-1断面
5. H-27炭化材出土状況

図版35

1. H-28南北断面
2. H-28完掘
3. H-29東西断面
4. H-29HF-1断面
5. H-29完掘

図版36

1. H-30検出
2. H-30調査状況
3. H-30南北断面
4. H-30東西断面

図版37

1. H-30炭化材・遺物出土状況
2. H-30土器出土状況
3. H-30HF-1検出
4. H-30HP-1断面
5. H-30完掘

図版38

1. H-31完掘
2. H-32南北断面
3. H-32東西断面
4. H-32HP-5断面
5. H-32完掘

図版39

1. H-33南北断面
2. H-33東西断面
3. H-33壁際炭化材出土状況

図版40

1. H-33床面炭化材出土状況
2. H-33HF-1断面
3. H-33HP-1断面
4. H-33HP-2断面
5. H-33HP-3・4断面
6. H-33完掘

図版41

1. H-34南北断面
2. H-34東西断面
3. H-34HP-1断面
4. H-34HP-3断面
5. H-34HP-5断面
6. H-34床面

図版42

1. H-35東西断面
2. H-35南北断面
3. H-35完掘
4. H-36完掘
5. H-37東西断面
6. H-37南北断面
7. H-37完掘

図版43

1. H-38調査状況
2. H-38東西断面
3. H-38南北断面(1)
4. H-38南北断面(2)

図版44

1. H-38HP-1断面
2. H-38HP-2断面
3. H-38HP-3断面
4. H-38HP-4断面
5. H-38HP-5断面
6. H-38HP-6断面
7. H-38完掘

図版45

1. 盛土遺構(M-1)検出
2. 盛土遺構(M-1)調査状況
3. 盛土遺構(M-1)焼土検出
4. 盛土遺構(M-1)断面(1)
5. 盛土遺構(M-1)断面(2)

図版46

1. P-1断面
2. P-2断面
3. P-3断面
4. P-4断面
5. P-5断面・遺物出土状況
6. P-6断面
7. P-7断面
8. P-9断面

図版47

1. P-8断面・P-17・18
2. P-10断面
3. P-11断面
4. P-12・13断面
5. P-14断面

図版48

1. P-15断面
2. P-16検出
3. P-20断面

4. P-21完掘
5. P-22~24完掘

図版49

1. P-28断面
2. P-28完掘
3. P-29・30完掘
4. P-30土器出土状況
5. P-31断面
6. P-32断面
7. P-33断面
8. P-34断面

図版50

1. P-35~37・85調査状況
2. P-35~37・85完掘
3. P-36断面
4. P-37断面
5. P-36遺物出土状況
6. P-37遺物出土状況

図版51

1. P-38断面
2. P-40完掘
3. P-41断面
4. P-42断面
5. P-43~45

図版52

1. P-46断面
2. P-47断面
3. P-48断面
4. P-49断面
5. P-50炭化材・遺物出土状況
6. P-51完掘
7. P-52断面
8. P-53完掘

図版53

1. P-54断面
2. P-55断面
3. P-56断面
4. P-57遺物出土状況
5. P-58断面
6. P-58遺体層調査状況
7. P-58断面人骨頭部
8. P-58断面人骨出土状況

図版54

1. P-59断面
2. P-60断面
3. P-62断面
4. P-63断面
5. P-64断面
6. P-65完掘
7. P-66断面
8. P-67断面

図版55

1. P-68完掘
2. P-69完掘
3. P-70断面
4. P-71断面
5. P-72断面
6. P-73完掘
7. P-74・75断面
8. P-74完掘

図版56

1. P-76断面
2. P-77断面
3. P-78東西断面
4. P-78南北断面
5. P-78ベンガラ層検出
6. P-79断面
7. P-80・81断面
8. P-82断面

図版57

1. P-80・82完掘
2. P-84断面
3. P-86断面
4. P-87断面
5. P-88断面

図版58

1. SP-1断面
2. SP-2断面
3. SP-3断面
4. SP-5断面
5. SP-6~9断面
6. SP-10断面
7. SP-12~14断面
8. SP-15断面
9. SP-16断面
10. SP-17断面

図版59

1. F-1断面
2. F-2断面
3. F-4断面
4. F-6断面
5. F-7断面
6. F-12検出
7. F-15断面
8. F-16断面

図版60

1. F-19・20検出
2. F-21~23検出

図版61

1. F-17断面
2. F-18検出
3. F-26断面
4. F-27断面
5. F-28断面

- 6. F-29断面
 - 7. F-30断面
 - 8. F-32断面
- 図版62
- 1. FC-1 検出
 - 2. FC-4 検出
 - 3. FC-5 検出
 - 4. FC-6 検出
 - 5. S-1 検出
 - 6. S-3 検出
 - 7. S-4 検出
 - 8. S-5 検出
- 図版63
- 1. 包含層土器出土状況 (N24区・浦幌式)
 - 2. 包含層土器出土状況 (N23区・浦幌式)
 - 3. 包含層土器出土状況 (P23区・中茶路式)
 - 4. 包含層土器出土状況 (L21区・北筒Ⅱ式)
 - 5. 包含層石槍出土状況 (L11区)
 - 6. 包含層大型石核出土状況 (M17区)
 - 7. 包含層石斧・砥石出土状況 (N22区)
 - 8. V層石斧出土状況 (L18区)
- 図版64
- 1. 完掘 (平成19年)
 - 2. 完掘 (平成21年)
- 図版65
- 1. H-1 出土の遺物
 - 2. H-2・3 出土の土器
- 図版66
- 1. H-2・3 出土の石器(1)
 - 2. H-2・3 出土の石器(2)
 - 3. H-4 出土の土器(1)
 - 4. H-4 出土の土器(2)
- 図版67
- 1. H-4 出土の土器(3)
 - 2. H-4 出土の土器(4)
 - 3. H-4 出土の土器(5)
 - 4. H-4 出土の石器
- 図版68
- 1. H-5 出土の土器(1)
 - 2. H-5 出土の土器(2)
 - 3. H-5 出土の土器(3)
 - 4. H-5 出土の土器(4)
 - 5. H-5 出土の石器
 - 6. H-6 出土の石器
- 図版69
- 1. H-8 出土の土器(1)
 - 2. H-8 出土の土器(2)
 - 3. H-8 出土の土器(3)
 - 4. H-8 出土の石器
- 図版70
- 1. H-9 出土の遺物(1)
 - 2. H-9 出土の遺物(2)
 - 3. H-10 出土の土器(1)
- 図版71
- 1. H-10 出土の土器(2)
 - 2. H-10 出土の土器(3)
 - 3. H-10 出土の土器(4)
 - 4. H-10 出土の土器(5)
 - 5. H-10 出土の石器
- 図版72
- 1. H-11 出土の遺物
 - 2. H-12 出土の土器(1)
 - 3. H-12 出土の土器(2)
 - 4. H-12 出土の土器(3)
 - 5. H-12 出土の土器(4)
 - 6. H-12 出土の土器(5)
- 図版73
- 1. H-12 出土の土器(6)
 - 2. H-12 出土の石器
- 図版74
- 1. H-13 出土の遺物
 - 2. H-14 出土の土器
- 図版75
- 1. H-14 出土の石器
 - 2. H-15 出土の遺物
- 図版76
- 1. H-16 出土の土器(1)
 - 2. H-16 出土の土器(2)
 - 3. H-16 出土の土器(3)
 - 4. H-16 出土の土器(4)
- 図版77
- 1. H-16 出土の石器
 - 2. H-17 出土の遺物
- 図版78
- 1. H-18 出土の遺物
 - 2. H-19 出土の遺物
- 図版79
- 1. H-20 出土の土器
 - 2. H-20 出土の石器
 - 3. H-21 出土の遺物
 - 4. H-22 出土の遺物(1)
 - 5. H-22 出土の遺物(2)
- 図版80
- 1. H-23 出土の遺物
 - 2. H-24 出土の遺物
 - 3. H-25 出土の遺物
 - 4. H-26 出土の遺物(1)
 - 5. H-26 出土の遺物(2)
- 図版81
- 1. H-26 出土の遺物(3)
 - 2. H-27 出土の遺物
 - 3. H-28 出土の遺物
- 図版82

1. H-29出土の遺物
 2. H-30出土の遺物(1)
 3. H-30出土の遺物(2)
 4. H-31出土の遺物
 5. H-32出土の遺物
- 図版83
1. H-33出土の遺物
 2. H-34出土の遺物
 3. H-35出土の遺物(1)
 4. H-35出土の遺物(2)
 5. H-36出土の遺物
- 図版84
1. H-38出土の土器(1)
- 図版85
1. H-38出土の土器(2)
 2. H-38出土の土器(3)
 3. H-38出土の土器(4)
 4. H-38出土の土器(5)
 5. H-38出土の石器
 6. M-1出土の遺物
- 図版86
1. 土坑出土の土器 [P-5]
 2. 土坑出土の土器 [P-9]
 3. 土坑出土の遺物 [P-4~14]
- 図版87
1. 土坑出土の遺物 [P-15~34]
 2. 土坑出土の土器 [P-16]
 3. 土坑出土の土器 [P-21]
 4. 土坑出土の土器 [P-30]
- 図版88
1. 土坑出土の土器 [P-36]
 2. 土坑出土の遺物 [P-35~37]
 3. 土坑出土の土器 [P-37]
 4. 土坑出土の土器 [P-37]
- 図版89
1. 土坑出土の遺物 [P-39~67]
- 図版90
1. 土坑出土の土器 [P-81]
 2. 土坑出土の遺物 [P-74~83]
 3. 焼土出土の遺物
 4. フレイクチップ集中出土の遺物
- 図版91
1. 包含層出土の土器(1)
 2. 包含層出土の土器(2)
 3. 包含層出土の土器(3)
 4. 包含層出土の土器(4)
 5. 包含層出土の土器(5)
- 図版92
1. 包含層出土の土器(6)
- 図版93
1. 包含層出土の土器(7)
- 図版94
1. 包含層出土の土器(8)
 2. 包含層出土の土器(9)
 3. 包含層出土の土器(10)
 4. 包含層出土の土器(11)
- 図版95
1. 包含層出土の土器(12)
- 図版96
1. 包含層出土の土器(13)
- 図版97
1. 包含層出土の土器(14)
 2. 包含層出土の土器(15)
 3. 包含層出土の土器(16)
 4. 包含層出土の土製品(1)
 5. 包含層出土の土製品(2)
- 図版98
1. 包含層出土の石器(1)
- 図版99
1. 包含層出土の石器(2)
- 図版100
1. 包含層出土の石器(3)
- 図版101
1. 包含層出土の石器(4)
- 図版102
1. 包含層出土の石器(5)
- 図版103
1. 包含層出土の石器(6)
 2. 包含層出土の石器(7)

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名：釧路弟子屈線交安1種（統合）工事（中央帯）に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成19・20年度）

釧路鶴居弟子屈線（新交-61）交付金工事（幌呂原野地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成22年度）

釧路鶴居弟子屈線（A交-57）交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成23年度）

委託者：北海道釧路支庁（～平成22年3月）

北海道釧路総合振興局（平成22年4月～）

受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：下幌呂1遺跡（北海道教育委員会登録番号M-08-16）

所在地：阿寒郡鶴居村字幌呂原野基線29-1

調査面積：2,200㎡

調査期間：平成19年8月1日～平成20年3月31日（現地調査平成19年9月1日～10月31日）

平成21年4月1日～平成22年3月31日（現地調査平成21年5月7日～8月28日）

平成22年8月1日～平成23年3月31日

平成23年8月1日～平成24年3月30日

2. 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重 楯一（～平成20年5月31日）

坂本 均（平成20年6月1日～）

専務理事 佐藤 俊和（～平成21年5月31日）

松本 昭一（平成21年6月1日～）

常務理事 畑 宏明

平成19年度

第2調査部 部長 西田 茂

第2調査部第4調査課 課長 工藤 研治（発掘担当者）

主査 越田 雅司（発掘担当者）

主任 鈴木 宏行（発掘担当者）

主任 影浦 覚

平成21年度

第2調査部 部長 西田 茂

第2調査部第2調査課 課長 佐藤 和雄（発掘担当者）

主査 笠原 興（発掘担当者）

主査 土肥 研晶

主任 阿部 明義（発掘担当者）

平成22年度

第2調査部	部長	西田	茂
第2調査部第3調査課	課長	村田	大
	主査	阿部	明義

平成23年度

第1調査部	部長	千葉	英一
第1調査部第3調査課	課長	土肥	研晶
	主査	阿部	明義

3. 調査に至る経緯

鶴居村を南北に縦貫する主要道道釧路鶴居弟子屈線は、道東の拠点都市釧路市と阿寒国立公園を擁する弟子屈町を結ぶ幹線であり、釧路湿原を挟んで東側に位置する国道391号線とともに、道東の太平洋沿岸と網走・北見地区などのオホーツク海沿岸地域とを連絡する主要な路線でもある。そのため通行車両も多く、全路線舗装完了後も道路を所管する北海道釧路支庁（現釧路総合振興局）は、交通難所などの改良工事を逐次行ってきた。なお、この路線は国立公園にも指定されている釧路湿原の西縁の丘陵地を縫うように設定されており、路線に隣接して国指定の史跡である北斗遺跡（釧路市）をはじめとして、多くの遺跡が存在している。

このような中で、釧路土木現業所は鶴居村下幌呂地区の路線改良工事を実施するにあたり平成14年に事前協議書を提出した。北海道教育委員会による試掘調査の結果、新たな埋蔵文化財包蔵地が発見され、下幌呂15遺跡として登録された。現状保存は困難との結論に達し、平成15～16年の2か年にわたり下幌呂15遺跡の発掘調査が行われることとなった。鶴居村教育委員会には発掘調査の担当職員がいないため、釧路町教育委員会の山本文男氏が担当した。平成18年3月まで整理事業が行われ、報告書が刊行された（鶴居村教育委員会2006『下幌呂15遺跡発掘調査報告書』）。

一方幌呂原野基線地区においては、周知の埋蔵文化財包蔵地である下幌呂1遺跡が路線改良工事の用地範囲に含まれた。釧路土木現業所は改良工事を実施するにあたり、平成18年に事前協議書を鶴居村教育委員会を經由して北海道教育委員会宛に提出した。この協議を受けて北海道教育委員会は、平成18年12月6日に当該地区において試掘調査を実施した。その結果、明確な遺構の落ち込みを複数確認し、遺物が多数出土した。保存状態が良好で遺構出現頻度が高いと予想されたことから、関係機関間で協議がもたれたが、工事箇所の変更や工事方法の変更などによる現状保存は困難との結論に達し、調整の結果、平成19・20年の2か年で当センターが発掘調査を実施することとなった。調査面積は、調整の結果2,200㎡となった。

平成19年度は9月～10月に1,500㎡の調査を予定した。幌呂川にかかる橋脚建設のため調査区北側を優先して調査を行った。その結果、当初予想よりも遺構・遺物とも濃密に検出された。期間内に終了することが困難なため、関係各機関と協議の上、面積を610㎡に減じて調査を終えた。

残りの調査は平成20年に予定していたが、揮発油税等の暫定税率特例措置が一時撤廃されるという政治的事情により、事業自体の予算確保が不透明となり凍結された。翌平成21年5～8月、調査区中央～南側の1,590㎡の調査を行い、全面積を完了した。

(阿部明義)

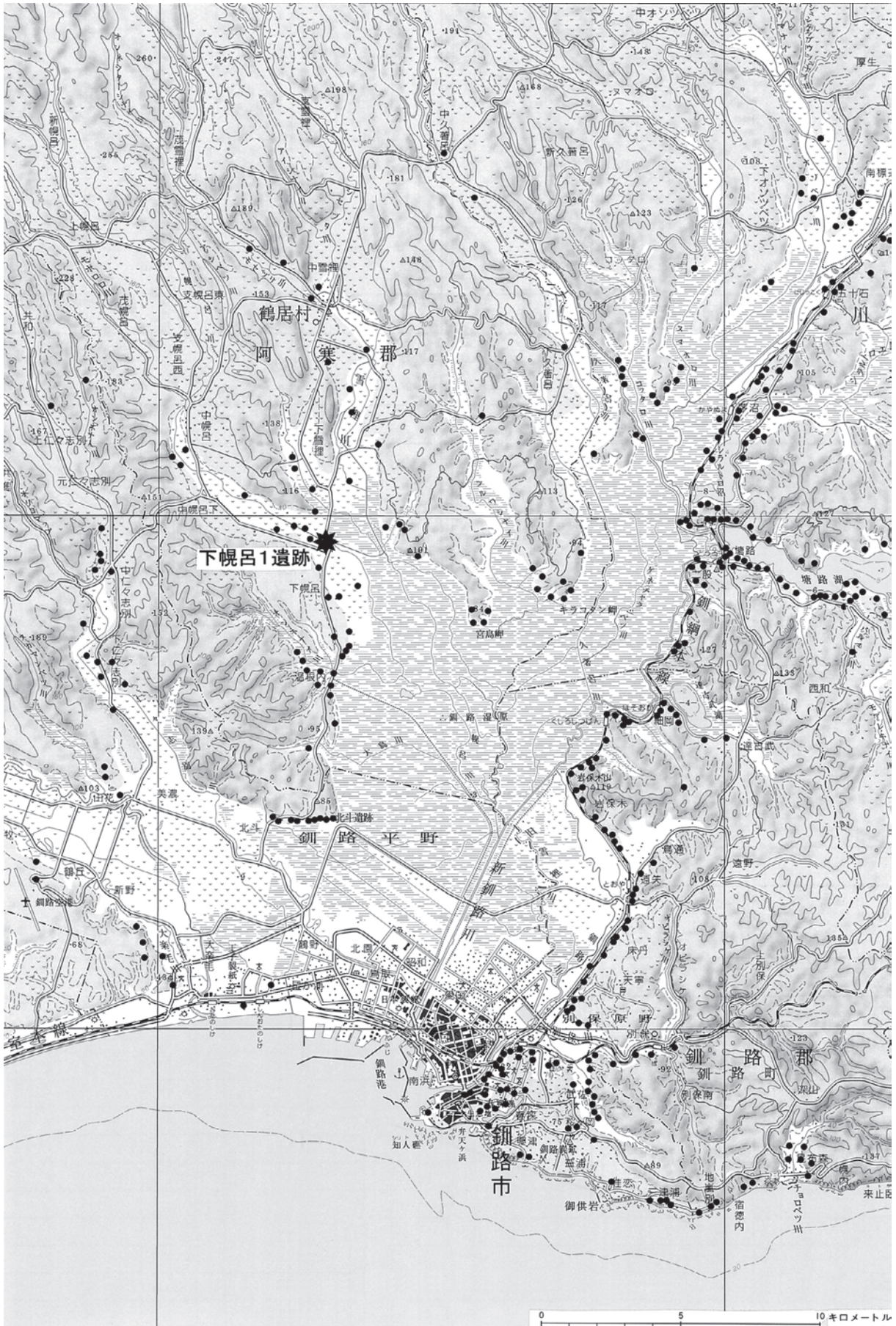


図 I - 1 遺跡の位置

国土地理院20万分の一地勢図「鉏路」(2009年発行)を使用

4. 発掘区の設定と調査の経過

(1) 発掘区の設定 [図I-2]

発掘区の境界となるグリッド線は、建設道路のセンターラインにおけるポイント27100・27200を直線で結んだ線を基線とした。全調査区域をカバーするよう、調査区内のポイント27100を「M5」、調査区外北側のポイント27200を「M30」とし、4mごとにラインを設けメッシュを組んだ。南から北に向かい0、1、2、3……同じく西から東に向かいH、I、J……、としてアルファベットと算用数字を組み合わせて各交点の名称とした。各交点に杭を打ち、4m×4mで区画された正方形のマス各発掘区とし、その北西側の交点を発掘区の名称とした。南北のグリッド線は、真北から7°13'50"西側へ傾いている。なお設定に当たっては、周辺の2級基準点を基に3級基準点等を設置し、利用した。

基準杭の座標値の成果は以下に記した(世界測地系)。座標系は平面直角座標系第XⅢ系である。

ST27100 (M5杭)	X = -93,711.490m	Y = 6,141.800m
ST27200	X = -93,612.688m	Y = 6,129.265m
H19-3-1 (三級基準点)	X = -93,698.292m	Y = 6,126.939m

(阿部)

(2) 発掘調査の方法と過程

平成19年度の調査

調査時の状況は原野で、北海道教育委員会(以下「道教委」と記す)の試掘調査の結果によると、発掘予定範囲は耕作の痕跡が無く、保存状態が良好であった。また、Ta-c火山灰(Ⅲ層)より上層での遺物や遺構は確認されていなかったため、調査はTa-c火山灰まで重機によって除去し、杭打ちを行った後に開始した。

表土除去段階で南側に直径30mほどの規模のマウンド状の高まり(平成21年度調査で平地住居跡と判明)、北側にKo-c₂?の落ち込みなどが検出されていた。16ライン以北で25%調査を開始したが、調査3日目には多くのグリッドで遺構とみられるTa-c火山灰の落ち込みを確認し、その数が予想を大きく超えるものであったため速やかに道教委に連絡を行い、関係機関との協議の上で当初予定1,500㎡の調査面積を20ライン以北の610㎡に縮小することとした。

Ⅳ層上面では一部の遺構が確認可能であったが、25%調査の際にⅤ層上面まで下げて確認できる遺構が検出されたため、全体的にⅤ層上面まで掘り下げた段階で遺構を検出することにした。

大型の遺構については土層確認用の十字ベルトを設定し、それ以外の遺構については半截、断面図作成後、完掘し、図面を作成した。遺物は床面や坑底面の主要なものについては図面に記載し、覆土中のものについては覆土単位で取り上げ、包含層の遺物はグリッド単位で層位ごとに取り上げた。焼土やベンガラ、炭化物集中については土ごと取り上げ微細遺物の回収に努めた。調査終了時には20ライン上に土嚢袋を積み並べ、表土除去により包含層がむき出しになっていた10~20ラインの範囲の表面を保護するためにブルーシートを敷き、その上に埋め戻しを行って今回の調査に備えた。

(鈴木)

平成21年度の調査

平成19年度調査で残った890㎡は、埋め戻し土およびブルーシートを除去した。調査区南部の新規の700㎡において、表土~Ta-c火山灰を重機により除去した。

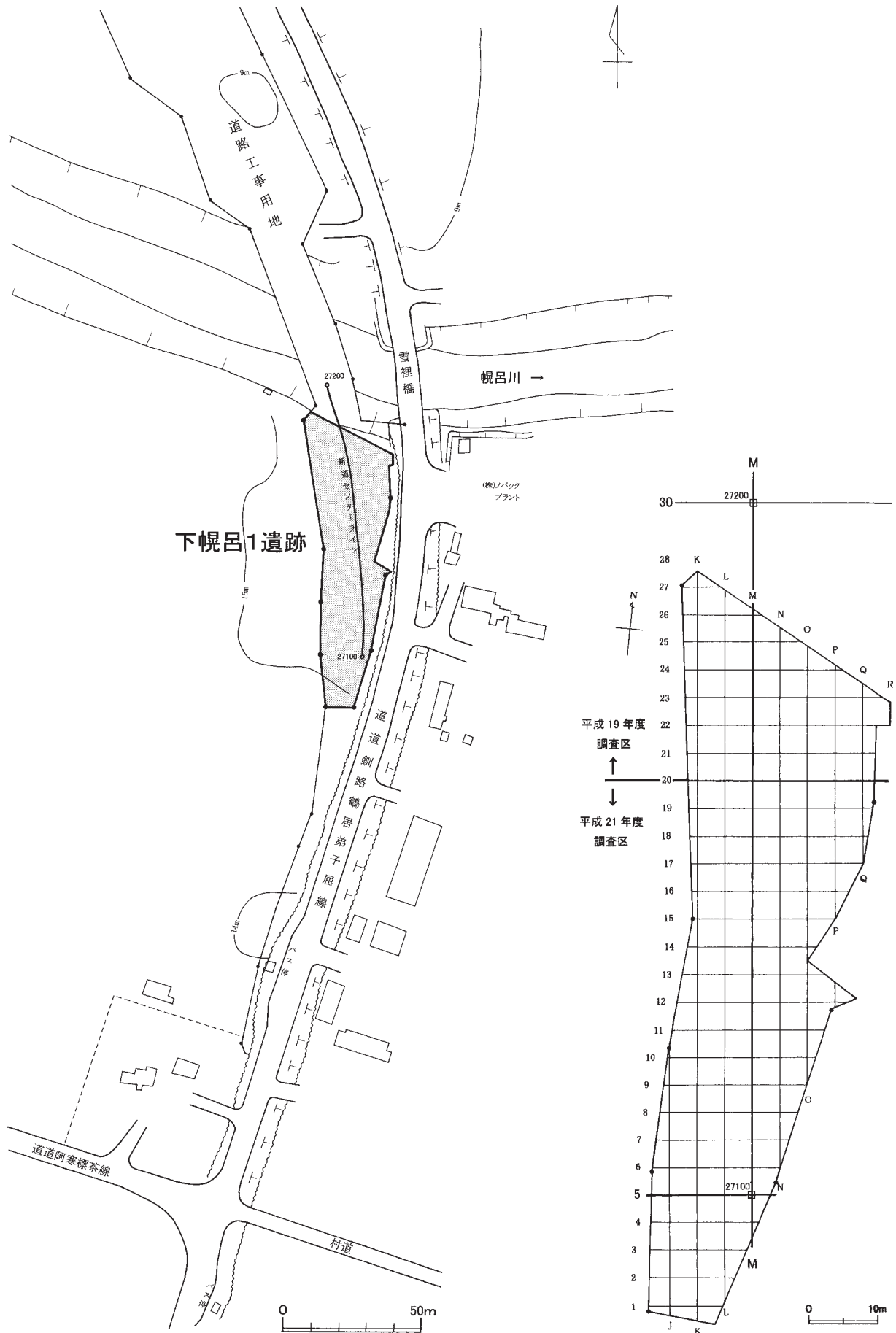


図 I - 2 調査範囲・発掘区設定図

IV層黒色土上面の精査を行ったところ、Ta-c火山灰が下位に続く範囲が各地に広がっていた。また前回調査で設定した調査区中央部のトレンチを延長・拡張して、遺構の分布状況を把握することに努めた。その結果、当初盛土遺構が広域に分布すると目されていた範囲に多数の住居跡などの遺構が存在することがわかった。

IV層以下を移植ゴテ等により掘り下げた。出土した遺物は、発掘区ごと・層位ごとに取り上げた。検出された遺構は、随時土層観察用のベルトを設けるなどして調査を行った。遺物は、まとめて出土したものは出土状況を図化するなど出土地点を計測した。

住居跡から出土した炭化材は、出土状況の図化・写真撮影後、一部をサンプル採取し残りもすべて取り上げた。H-23から出土した一部の炭化材について、応急処置を施した後、土壌ごと切り取り回収した。

遺跡の空中撮影は、調査終了近い8月12日に荒井建設㈱により行われ、デジタルデータの提供を受けた。

記録類

地形測量図・土層断面図・遺構平面図・遺構断面図・遺物出土状況図などを作成した。写真撮影は、リバーサル35mm判・6×7判、モノクローム6×7判のほか、デジタルカメラを用いた。

(3) 整理作業の方法と過程

一次整理

現地で水洗・分類・遺物注記・遺物台帳作成などを行った。注記は土器小片・石器剥片および礫を除く、すべての土器・石器等に行った。

※遺物注記内容

「遺跡名」、「遺構名」または「発掘区」、「遺物番号」、「層位」

例； (遺構) シ1. H-12. 27. フク5

(包含層) シ1. M23. 5. IV

一方、採取した土壌サンプルについて、フローテーション法により水洗選別した。そのうち残渣に含まれる微細な土器・石器ほかについては、肉眼による選別により回収した。

二次整理

江別市の北海道埋蔵文化財センター整理作業棟で行った。土器等は、接合・復元作業を行い、接合データが得られ、39個体の土器を復元した。また300点あまりについて拓本作業を行った。復元された土器の実測作業、図版作成・一覧表作成・写真撮影を行った。石器等は分類を見直し、報告書掲載用石器の選り出しを行った。また石刃鎌石器群について選り出し、可能な限り母岩別に分け接合を試みた。併行して実測・トレースを進め、図版作成・一覧表作成・写真撮影を行った。

フローテーション法による水洗選別資料は、浮遊物について光学顕微鏡等を用いて種子や骨片など微細な遺物を選別回収した。

漆塗櫛は観察などの後、第1調査部第1調査課田口尚が保存処理および蛍光X線分析等を行った。また竪穴住居跡H-23出土の炭化材についても保存処理を施した。

そのほか遺構図面の作成、遺物の写真撮影、表作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を行った。遺物図版作成においては写真フィルムを高解像度のスキャナーにてデジタル化し、個々の遺物を版面

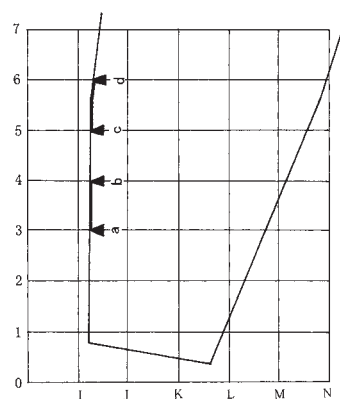
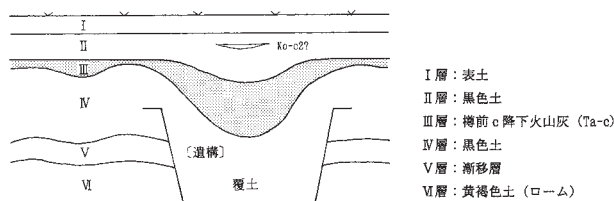
にレイアウトし作成した。

遺物・記録類の保管

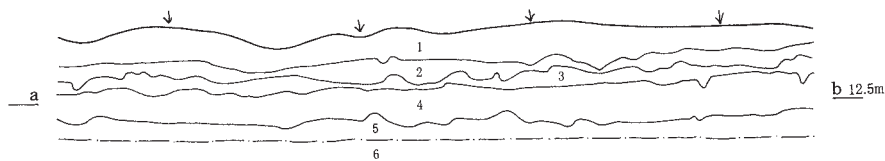
整理終了後の遺物は「報告書掲載遺物」と「非掲載遺物」に区分してダンボール箱（復元土器）およびコンテナに収め、「遺物収納台帳」に記載した。本報告書刊行後、鶴居村教育委員会に移管予定である。

写真・図面等の記録類は、当センターで保管される。

●基本土層模式図

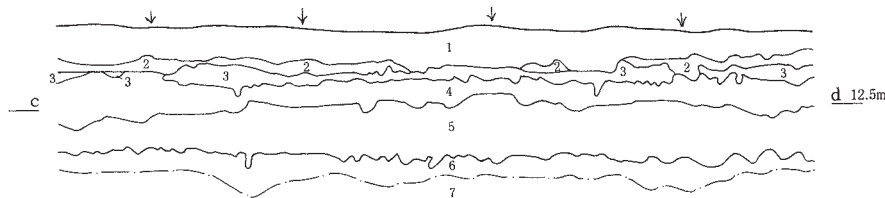


●基本土層断面



13区 西壁土層断面

- 1 褐灰色(7.5YR 4/1) [I層表土]
- 2 黒褐色(7.5YR 3/1) [II層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L) 晩期後半以降の包含層。
- 3 灰黄褐色(10YR 5/2) [III層 Ta-c] 堅密度:軟 粘着性:なし
- 4 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L) 縄文時代早期~晩期の包含層。
- 5 暗褐色(7.5YR 3/4) [V層漸移層] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 6 明褐色(7.5YR 5/6) [VI層] 堅密度:軟 粘着性:弱



15区 西壁土層断面

- 1 褐灰色(7.5YR 4/1) [I層表土] 下にKc-c2火山灰?が混じる部位がある。
- 2 黒褐色(7.5YR 3/1) [II層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L) 晩期後半以降の包含層。
- 3 灰黄褐色(10YR 5/2) [III層 Ta-c] 堅密度:軟 粘着性:なし
- 4 黒褐色(5YR 3/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L) 縄文時代早期~晩期の包含層。
- 5 暗褐色(7.5YR 3/4) [V層漸移層] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 6 明褐色(7.5YR 5/6) [VI層] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 7 にぶい 橙色(7.5YR 6/4) [VII層] 堅密度:堅 粘着性:弱 小礫(G)含む。



図 I - 3 基本土層

21ライン

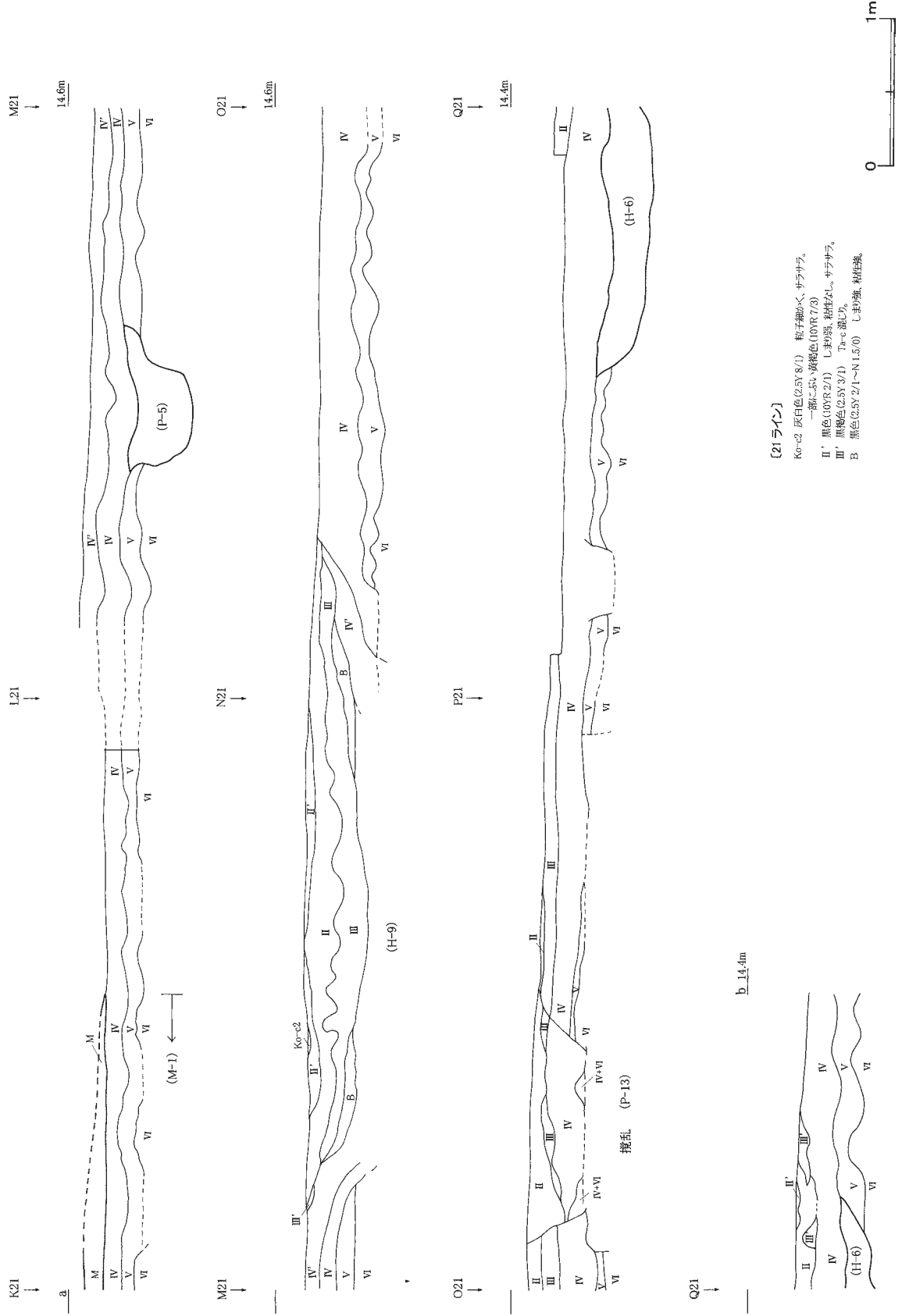


図 I - 4 調査区土層断面(1)

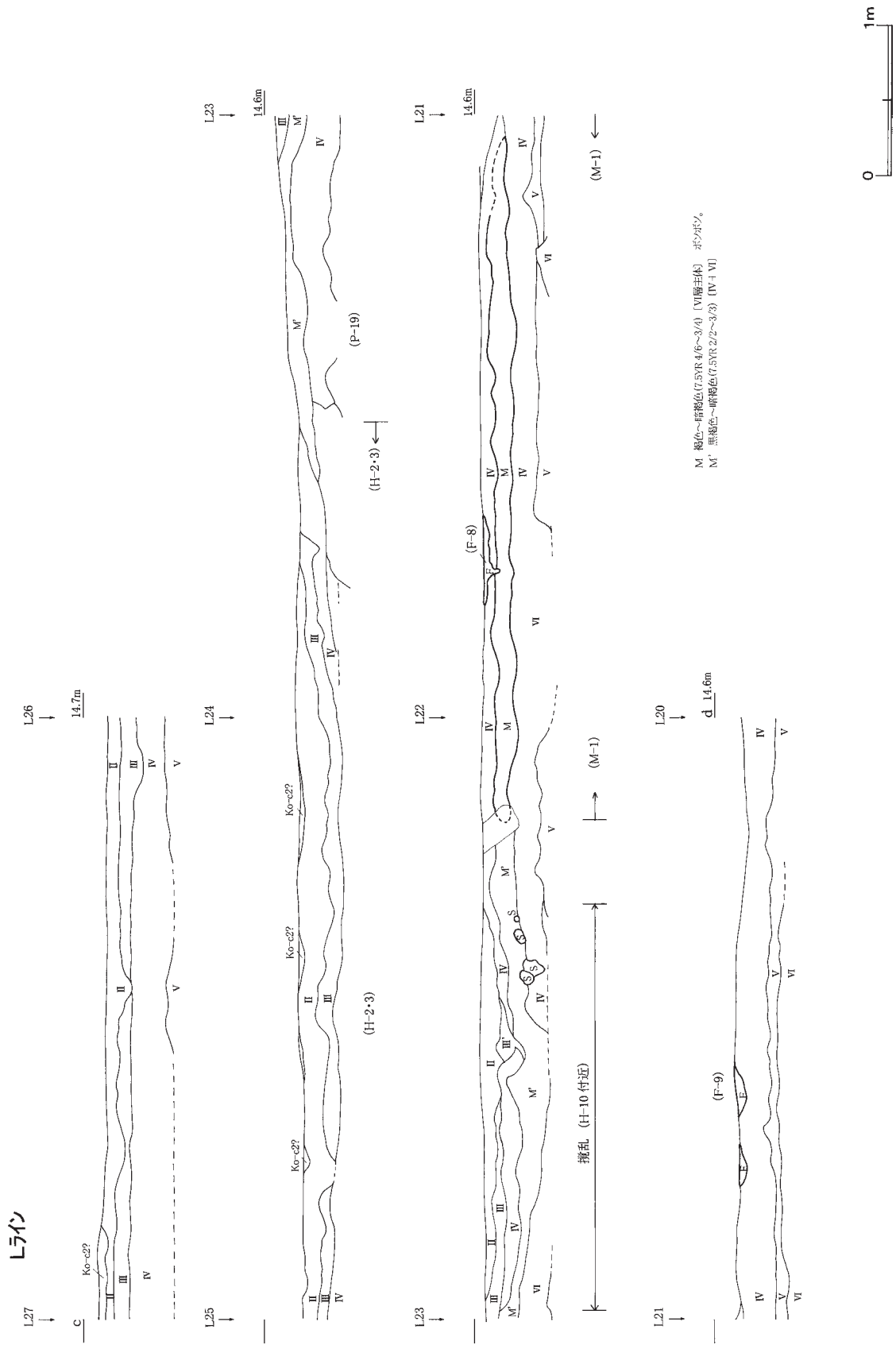


図 I - 5 調査区土層断面(2)

5. 土層

基本土層は表土をI層、地山のローム層をVI層とし、色調や堆積物の差により以下の通り区分した。なお基本土層断面図は、調査区南西部のI3区・I5区で作成した。また平成19年度調査区で作成した、東西の21ラインおよび南北のLラインの土層断面を図示した〔図I-3～5〕。

I層：表土

褐灰色～黒褐色（7.5YR 4/1～10YR 2/2）の腐植土。層厚10～40cm。ササなどの草木の根が繁茂している。調査区東部の攪乱部や中央部の現代のゴミ穴などもI層とした。

II層：黒色土

縄文時代晩期以降の形成層。黒褐色（7.5YR 3/1～10YR 2/2）を呈し、粘性は弱く、しまりはやや強い。調査区全域に残存するが、一部欠落している。層厚は5～30cmであり、遺構のくぼみなどII層が厚いところではKo-c₂とみられる火山灰が堆積している。下端層界はやや明瞭で、おおむね平坦である。

※駒ヶ岳c₂火山灰〔Ko-c₂〕

道南にそびえる駒ヶ岳から1,694年に噴出した、シルト～細砂のテフラ。灰白色（2.5Y 8/1）で、部分的ににぶい黄褐色（10YR 7/3）を呈する。粒子が非常に細かく、サラサラしている。分布は限定的で、層厚は0～5cm程度、最大12cm（H-12覆土）である。

III層：樽前c降下火山灰〔Ta-c〕

約2,500年前の樽前山噴火により降下した粒子の細かいテフラの堆積層。色調は灰黄褐色（10YR 5/2）～にぶい黄褐色（10YR 6/2）である。層厚は0～10cm程度、最大32cm（H-12覆土）である。調査区全域に分布するが連続しておらず、風倒木痕や遺構のくぼみに厚く堆積する。下端層界は明瞭である。

IV層：黒色土

縄文時代早期～晩期の形成層。壤土。色調は、黒色（10YR 2/1）～黒褐色（7.5YR 3/1）を呈する。粘性は中～やや強で、しまりは中程度。調査区全域に分布し、層厚は調査区北部～中央部が30～50cm、南部が10～30cmで、幌呂川河畔に近い方が厚く、調査区中央南部の10ライン付近から急に厚さを減じる。下端層界はやや不明瞭で、波状をなす。

V層：漸移層

色調は、黒褐色～褐色（10YR 2/2～4/4）で不均質である。粘性はやや強く、しまりは中～やや弱。黒褐色土と褐色土が不均質に混じる部分が多い。層厚は10cm前後。下端層界はやや不明瞭で波状をなす。縄文時代早期の遺物が含まれ、焼土が形成されている箇所がある。

VI層：ローム層

黄褐色（10YR 5/6～5/8）のローム層。粘性は弱く、やや砂質で水はけがよい。調査区全域に厚く堆積している。

（VII層：砂質ローム）

にぶい橙色（7.5YR 6/4）の砂質土。粘性は弱く、しまりが強い。小礫を多く含む。土坑の坑底面や竪穴住居跡の柱穴などで観察される。

※「M層」・「HM層」

色調は、黄褐色～黒褐色（10YR 4/6～10YR 2/2）と多様で、IV～VI層が混じる層。基本的にはVI層ロームが主体で、黒色土が混じる。しまりは弱い。盛土遺構（M層）や竪穴住居跡の掘上土、平地住居跡の堆積層（HM層）にみられる。

6. 遺物の分類

(1) 土器等

I群 縄文時代早期に属する土器群。

a類：貝殻腹縁文・条痕文・沈線文のある土器群。テンネル式・浦幌式などに相当するもの。

b類：撚糸文・絡条体圧痕文・短縄文などが施される土器群。東釧路系土器群。

b-1類：東釧路Ⅱ式に相当するもの。

b-2類：東釧路Ⅲ式に相当するもの。

b-3類：コッタロ式に相当するもの。

b-4類：中茶路式に相当するもの。

b-5類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

II群 縄文時代前期に属する土器群。今回の調査では出土していない。

a類：縄文尖底土器・押型文尖底土器など。網文式・朱円式・温根沼式などに相当するもの。

b類：刺突文土器・押型文平底土器など。網走式・シュブノツナイ式などに相当するもの。

III群 縄文時代中期に属する土器群。

a類：刺突文土器・押引文土器・押型文平底土器など。常呂川河口遺跡押型文I群、智東式などに相当するもの。

b類：モコト式・北筒Ⅱ式の古段階などに相当するもの。

IV群 縄文時代後期に属する土器群。

a類：北筒Ⅱ式の新段階、北筒Ⅲ式・Ⅳ式・Ⅴ式などに相当するもの。

b類：手稲式・鮎澗式・エリモB式などに相当するもの。

c類：堂林式・御殿山式・栗沢式などに相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属する土器群。

a類：大洞B・BC式に併行するもの。

b類：幣舞式などに相当するもの。

c類：緑ヶ岡式などに相当するもの。

※北筒式土器の細分と編年的位置付けについては諸説あるが、ここでは当センターが調査を行った釧路町天寧1遺跡などの分類を基本とした。すなわち大沼忠春（1989）による8段階区分およびそれを一部修正した工藤研治（2008）の区分である。その中で、北筒Ⅱ式の第1・2段階まで（古段階）を縄文時代中期、第3・4段階以降（新段階）を縄文時代後期としている。ただし破片資料では判別が困難なため、本書では図・表などで北筒式土器を一括して「Ⅲb～Ⅳa」と表記することがある。

土製品

土製円盤（土器片加工円盤）

スタンプ形土製品

土製品

ミニチュア土器

焼成粘土塊

(2) 石器等

以下の器種に分類した。

剥片石器

〔石刃鋸石器群〕

石刃鋸 : 石刃を素材として主に腹面縁辺を加工し尖頭部を作り出した石器。

錐形石器 : 素材の端部に錐状の尖頭部を作り出した石器。

削器 : 素材の側縁に連続的な二次加工を施した石器。

搔器 : 素材の端部に連続的な二次加工を施した石器。

彫器 : 素材の端部に一条から数条の槌状剥離を施した石器。

削片 : 彫器の彫刀面作出時などに剥離されたと考えられる剥片(彫器削片)。

二次加工ある石刃 : 素材に二次加工を施した石刃で、上記石器に分類されないもの。

石刃 : 両側縁がほぼ平行し、それに平行する稜がある縦長の剥片。

石刃核 : 石刃を剥離したと考えられる石器。

〔その他の石器〕

石鋸 : 素材を細かく扁平加工し、端部に尖頭部を作り出したおおむね5cm以下の石器。

石槍(またはナイフ) : 素材の両面を加工し、尖頭部を作り出した5cm以上の石器。

石錐 : 素材の端部に錐状の尖頭部を作り出した石器。

つまみ付きナイフ : 素材端部にノッチ状の加工でつまみ部を作り出した石器。

ナイフ : 素材の片面を加工して尖頭部を作り出した5cm以上の石器。

スクレイパー : 素材の側縁を中心に連続的な二次加工を施した石器。エンドスクレイパーは、素材の端部に連続的な二次加工を施した石器。

両面調整石器 : 素材の両面を加工したもので、石鋸・石槍などに分類されない石器。

石核 : 石器の素材となる剥片を剥離したと考えられる石器。

二次加工ある剥片 : 素材に二次加工を施したもので、定形的な石器に分類されない剥片。

微細剥離ある剥片 : 刃部に微細な剥離痕がみられる剥片。

剥片 : 石核・定形的石器などから剥離された不定形な石器片。

礫石器

石斧 : 打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した石器。

石のみ : 打ち欠き・敲打・研磨により、斧状の刃部を作り出した細身で小型の石器。

擦り切り残片 : 石斧や石のみなどの製作時に、幅広の扁平な素材を分割する際に生じた石器片。

矢柄研磨器 : 軽石等の礫の平坦面に磨痕のある直線の溝がある石器。

砥石 : 礫の片面もしくは両面に磨痕が観察される石器。

たたき石 : 礫に潰打痕が観察される石器。

すり石 : 小型礫に磨痕が観察される石器。

石錘 : 礫の長軸両端にノッチ状の加工を施した石器。

台石・石皿 : 平坦面をもつ大型礫に打撃痕や磨痕が観察される石器。

加工痕ある礫 : 礫に加工を施したもので、定形的な石器に分類されない石。

原石 : 石器の素材として利用されることが考えられる石。

礫 : 石器の石材として利用されないと考えられる石。

(3) その他の遺物

木製品

櫛

自然遺物

骨片

炭化材

ベンガラ

このほか、陶磁器片・家畜獣骨・ビン類などの現代遺物が少数ある。

7. 調査結果の概要 [図 I-6、表 I-1・2]

平成19年度の調査では、遺構は竪穴住居跡11軒・土坑26基・焼土14か所・盛土遺構1か所・フレイクチップ集中2か所が検出され、遺物は土器・石器等4万7千点あまりが出土した。平成21年度の調査では、遺構は住居跡27軒（竪穴住居跡および「平地住居跡」）・土坑61基（墓含む）・柱穴状小ピット17基・焼土18か所・フレイクチップ集中6か所・礫集中5か所が検出された。遺物は、土器・石器等4万3千点あまりが出土した。出土点数が多い土器型式は、縄文時代早期後葉の中茶路式（約33%）、中期末～後期前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式（約25%）、後期中葉の鱈潤式（約10%）である。以下に時期ごとに遺構・遺物の特徴を記す。

【縄文時代早期】

幌呂川寄りの平成19年度調査区から、浦幌式土器と石刃鎌石器群がまとまりをもって出土した。

東釧路Ⅲ式土器を伴う円形の竪穴住居跡が1軒検出された。覆土の黄色土は厚く堆積しており、非常に硬質である。やや不明瞭なベンチ状構造をもつ。

中茶路式土器を伴う、小型の土坑が数多く検出された。円形・楕円形の袋状土坑が多数あり、ほかにU字形や細長い形状などの特徴的な土坑がある。

【縄文時代中期末～後期前葉】

当遺跡の主体時期であり、20軒以上の住居跡が検出された。また単独の土坑墓2基がこの時期と推察され、うち1基は横臥屈葬とみられる人骨を検出した。各住居跡および周辺包含層から、北筒Ⅱ～Ⅲ式土器が出土した。石器等は黒曜石の剥片が多数を占め、定形的石器では大型の石槍が目立つ。ほかに素材となる剥片をわずかに加工したスクレイパー類が多い。礫石器は小型の石斧または石のみなどが少量ある。

竪穴住居跡は、平面形が楕円形を基本とするが、やや不整形のものも多い。竪穴の深さは多様であり、床面が平坦でないものも目立つ。検出された炉は、地床炉で周辺施設のないものがほとんどであるが、小土坑の中に形成されたものもある。柱穴は確認できたものが少ない。また屋根を構築していたとみられる炭化材や、屋根の葺き土と推定される黄色土が残る住居跡がある（H-3・23・30ほか）。炭化材の中には、繊維状のものも含まれている（H-23・27ほか）。また幌呂川寄りの竪穴住居では、覆土の下位（床面付近）にベンガラとみられる赤褐色の土壌が堆積するものがある（H-2ほか）。なお竪穴住居跡H-30の黄色土（覆土）から、北筒Ⅲ式の個体土器が出土している。

一方、壁が不明瞭でわずかにくぼみのある「平地住居跡」が4軒あり、それぞれ周縁部を重複させ

ている。屋根を構成していたとみられる炭化材や屋根の葺き土と推定される黄色土が残っており、斜里町来運1遺跡の「焼けた土葺伏屋式平地建物跡」（斜里町教育委員会2006）に類するものがある。炭化材は中央部にはほとんど残っておらず、周縁部に広がっていた。

【縄文時代後期中葉～後葉】

鯨澗式期の竪穴住居跡が少なくとも4軒検出され、うち2軒は重複している。

大型竪穴住居跡H-12は長軸約9mの楕円形を呈し、東側に出入口構造をもち、主柱穴のほか周辺にも支柱穴がある。壁際から完形の「四脚付浅鉢」のほか、漆塗りの櫛、深鉢形の個体土器などの遺物が出土した。また住居跡H-4から注口土器および小型の深鉢形土器、住居跡H-5から欠損箇所のない完形の小型注口土器が出土している。

【縄文時代晩期】

小規模な活動の跡が見られる。縄文中期や後期の竪穴住居の覆土から焼土が検出され、緑ヶ岡式土器が出土した。

(阿部)

表 I - 1 遺構数

遺構	平成19年度	平成21年度	計
住居跡	11	27	38
(竪穴)	(11)	(23)	(34)
(平地)		(4)	(4)
盛土遺構	1		1
土坑	26	61	87
土坑墓		(2)	(2)
柱穴状小ピット		17	17
焼土	14	18	32
フレイクチップ集中	2	6	8
礫集中		5	5



図 I - 6 遺構位置図

表 I - 2 出土遺物集計

種別	分類	遺構 計	包含層 計	合計
土器	I a	203	1494	1697
	I b	80	452	532
	I b-1	726	1739	2465
	I b-2	1101	51	1152
	I b-3	4		4
	I b-4	4337	4252	8589
	III b	196	87	283
	III b~IV a	3130	2672	5802
	IV a	437	438	875
	IV b	1918	976	2894
	IV c	135	52	187
	V c	408	877	1285
	不明	608	923	1531
土製品	焼成粘土塊	15	6	21
	土製円盤	4	7	11
	スタンプ形土製品	2	2	4
	ミニチュア土器	4	6	10
	土製品	1		1
土器等合計		13329	14034	27363
石器	石刃鎌	3	27	30
	錐形石器	3	6	9
	削器	20	23	43
	搔器	2	10	12
	彫器	28	127	155
	削片	29	83	112
	二次加工ある石刃	25	63	88
	石刃	12	59	71
	石刃核	0	1	1
	石鎌	200	137	337
	石槍（またはナイフ）	96	147	243
	石錐	34	27	61
	つまみ付きナイフ	88	46	134
	ナイフ	2	2	4
	スクレイパー	337	219	556
	両面調整石器	132	99	231
	くさび形石器	0	1	1
	石核	32	15	47
	二次加工ある剥片	267	240	507
	微細剥離痕ある剥片	183	67	250
	剥片	32801	24057	56858
	石斧	42	27	69
	石のみ	4	2	6
	擦り切り残片	0	1	1
	矢柄研磨器	0	2	2
	砥石	166	103	269
	たたき石	10	5	15
	すり石	6	11	17
	石錘	17	10	27
	台石・石皿	406	71	477
	加工痕のある礫	1	2	3
石器合計		34946	25690	60636
礫	原石	9	3	12
	礫	2306	375	2681
遺物合計		50590	40102	90692

II 遺跡の立地と周辺の遺跡

1. 遺跡の立地と環境 [図 I-1、II-1・2]

(1) 位置と地名の由来

下幌呂 1 遺跡は、鶴居市街地から約 8 km 南、釧路市街地からは約 20 km 北西の位置にある。

遺跡が所在する鶴居村は、北海道東部、釧路管内のほぼ中央に位置する。北東は弟子屈町、東は釧路川の支流の久著呂川を境として標茶町に接し、南東は釧路町、南～西は釧路市に接している。酪農を主産業とする、人口約 2,600 人の村である。またかつて絶滅が危惧された特別天然記念物のタンチョウの保護に行政・民間とも長年取り組んでおり、現在ではその数も増して、村内各地でその優雅な姿をみせている。

鶴居村は、昭和 12 年（1937 年）に旧舌辛村（現在の釧路市阿寒町と鶴居村を合わせた領域）から分村して成立した自治体である。「鶴居」の名は、この分村独立の際に誕生したものである。当初は「三川村」ほかの村名の候補も上がったが、紆余曲折の末、前述のようにタンチョウ保護の機運が高まり始めた時期でもあり、住民のタンチョウ鶴に対する誇りといたわりを由来とする鶴居の名称が村名に定まった。

遺跡の所在する「下幌呂」の「幌呂（ほろろ）」は、アイヌ語の「ホル・ル」から転訛したものとされる。「ホル」は「ホロ」と同義で「大きい」という意味で、「ル」は「道」を指しており、「ホル・ル」は大きい道である。しかし幌呂原野には広い道はなかった。この大きい道について、「幌呂は昔、密林であり陸路の通行は大変苦勞した。そこで川の真ん中の浅いところを選んで道路がわりに歩いた」という下雪裡に住んでいた古老の話があり（鶴居村 1987 『鶴居村史』）、幌呂川伝いの道、あるいは幌呂川そのものを指していたようである。

(2) 遺跡周辺の地形・環境

鶴居村域の地形は、北西部は阿寒カルデラの外輪山から連続する標高 100 m 以上の丘陵麓、中央部は北西部から連続する鶴居丘陵、そして南西部は釧路湿原の一部となっている。村内を流れる主要な河川は、阿寒カルデラ外輪山麓を源としてほぼ南東方向に複数平行して流下しており、鶴居丘陵を源とする小河川を含め久著呂川・雪裡川・幌呂川に集約されて釧路湿原の中を流れ、最終的には釧路川に合流して太平洋に注いでいる。鶴居村域の主要三河川の両岸には、それぞれ久著呂原野・雪裡原野・幌呂原野と称する広大な地形が展開している。

下幌呂 1 遺跡は、釧路湿原北西縁辺部にあり、比較的大きな河川である幌呂川の河畔に位置する。遺跡は幌呂川に沿って 1.5 km にわたり広がっており、標高は 6 ～ 20 m である。現況は笹などの生い茂る原野・道路・宅地・牧草地などとなっている。

調査区内はほぼ平坦であるが、表土では幌呂川寄りの調査区北部～中央部がやや高い。一方、ローム面では幌呂川上流側の調査区西側の方がやや高く、東側が低い。ローム面での標高は約 14 m である。東側（旧道側）は緩やかな崖にあたり、幌呂川の旧流路の河岸段丘崖である可能性がある。調査区中央部の一部で以前の工事による掘削跡がある。さらにその東側は現代の地形改変を若干受けているものと見られる。調査区西側は平坦な原野が続き、約 100 m 離れた位置には調査区にほぼ平行して旧鶴居軌道の痕跡が南北に残る。



図II-1 遺跡周辺の地形(1) 2万5千分一北海道「釧路國阿寒郡ホロコ・雪裡原野区画図」(1896年発行)を使用



図Ⅱ-2 遺跡周辺の地形(2)

国土地理院2万5千分の一地形図「下幌呂」(1994年発行)を使用

2. 下幌呂1遺跡と周辺の遺跡 [図Ⅱ-3～7 表Ⅱ-1・2]

国立公園に指定されている釧路湿原を取り巻く丘陵地およびそこを流れる大小の河川の流域には、多くの遺跡の存在が知られている〔図Ⅰ-1〕。鶴居村をはじめ釧路市・釧路町・標茶町にある500か所近くの遺跡の大部分は、最終氷期における海水面の低下とその後の海水面上昇による内湾化（縄文海進、古釧路湾）、再度の海退による湿原化、という釧路湿原の変遷による地形的・気象的環境の変化と、それに伴う生物環境の変化などに呼応しながら、生活を営んだ人々が残したものである（鶴居村教育委員会2006）。

鶴居村で確認されている遺跡は、現在73か所である。ここでは、下幌呂1遺跡の存在する下幌呂地区および周辺に位置する遺跡について、その概略を説明する。なお鶴居村の遺跡については、澤四郎氏らの踏査に始まり、釧路市立博物館中心となって実施した釧路川流域や釧路湿原の総合調査などで調査研究が行われており、それらの結果をもとに「先史時代の鶴居」がまとめられている（澤四郎・西幸隆・松田猛1987）。各遺跡の説明は、この成果と下幌呂15遺跡報告書（鶴居村教育委員会2006）の記述を引用・参考にしたものである。

（1）下幌呂1遺跡の発見と踏査

鶴居村における遺跡の分布調査は、昭和35年（1960年）澤四郎氏により行われた踏査に始まる。

本遺跡は昭和45年（1970年）、釧路湖陵高校考古学部員によって発見され、釧路第一高校考古学部員が踏査し、遺物を採集した。その後釧路湿原総合調査の際に、昭和47年（1972年）澤氏らが本遺跡を踏査し、概要を報告（澤ほか1973）、採集遺物の報告を行った（澤・西1974）。昭和60年（1985年）、釧路市博物館が釧路湿原西縁の台地における未踏査箇所分布調査を行い、下幌呂地区も対象とした。その結果、新たに17か所の遺跡が追加登録され、過去に採集した遺物とあわせて報告している（澤ほか1986）。

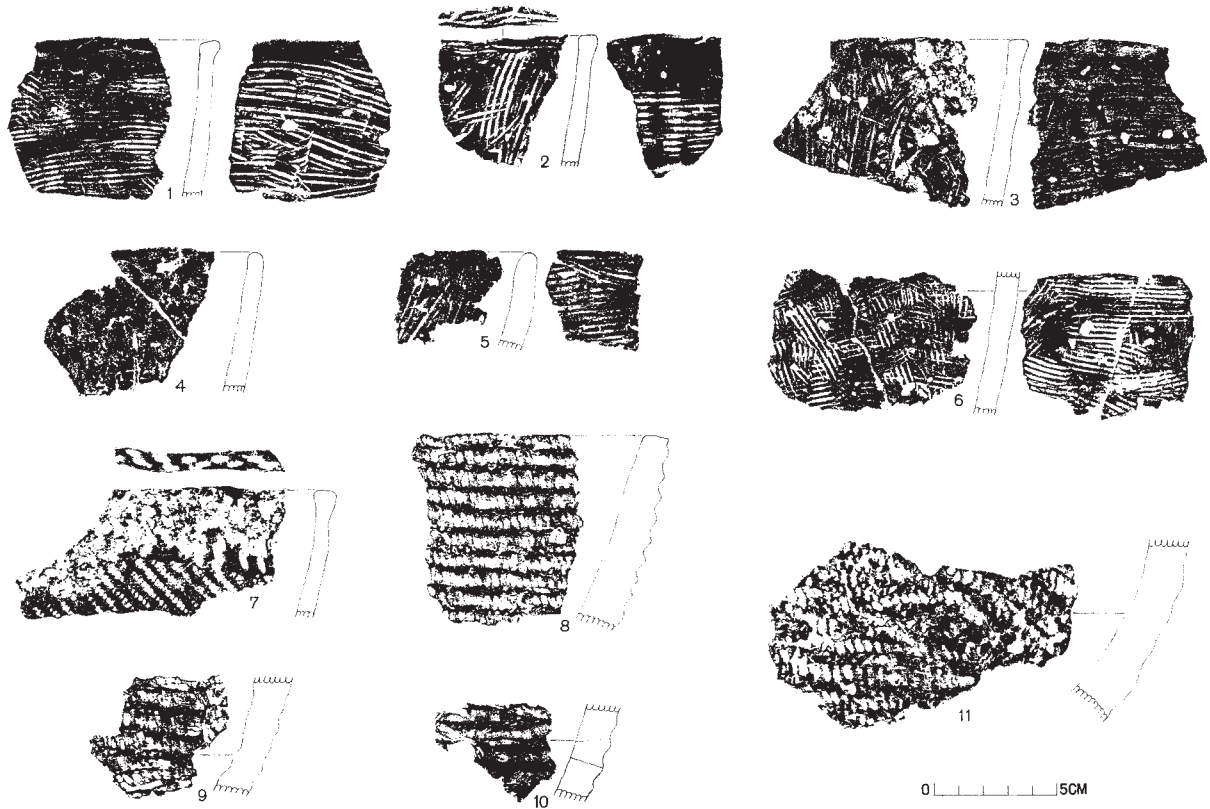
これらの成果をもとにした下幌呂1遺跡の概要について、鶴居村史に以下の内容が記載されている。

…

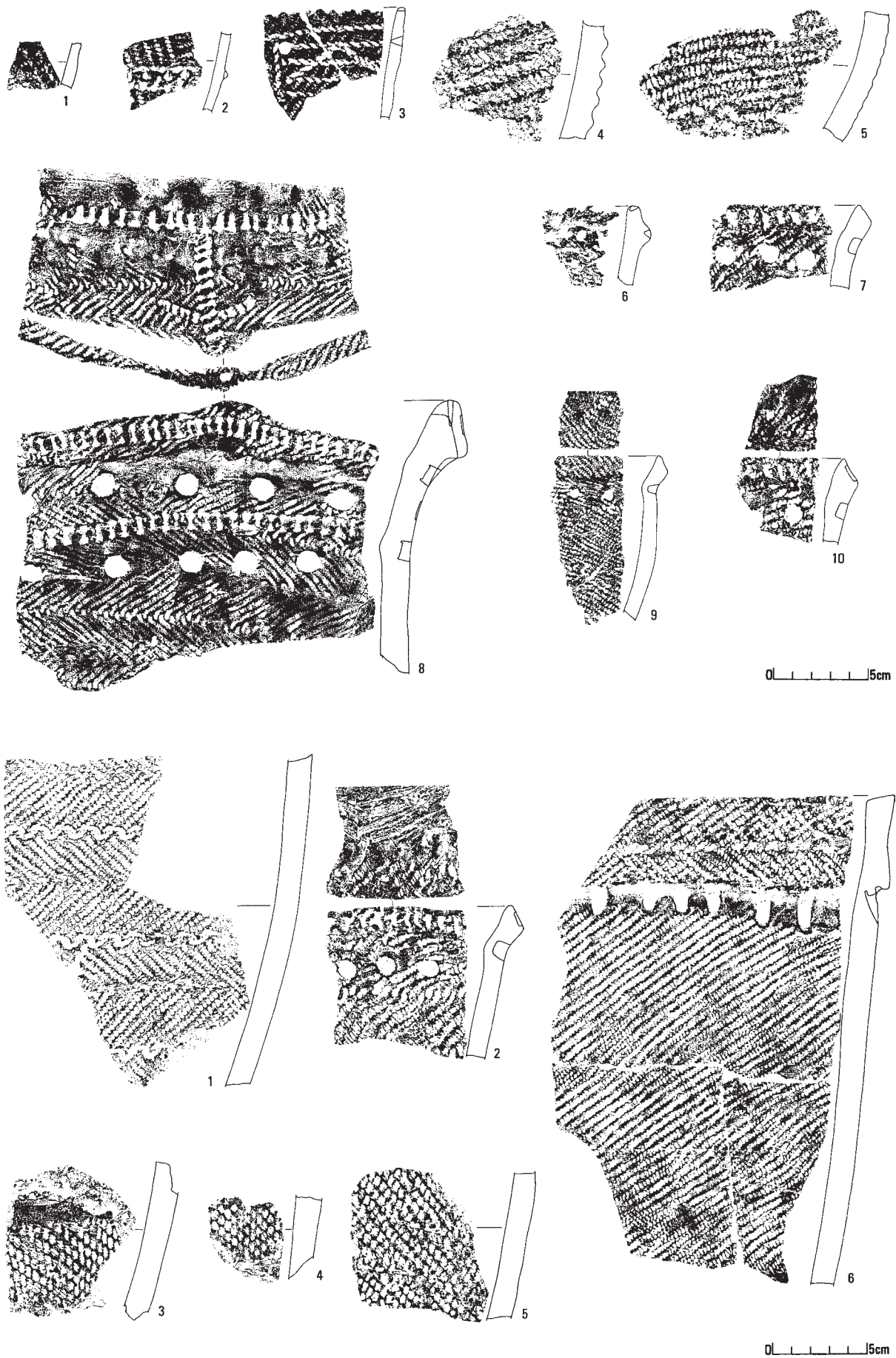
下幌呂市街地の北側に位置し、幌呂川が台地から離れて湿原域に流入する付近から南西に1.5km、幅250～300mで湿原に沿って展開している大規模な遺跡。標高6～20mで、さらに低地一帯に連続している可能性もある。この低湿地での遺跡の存在は、湿原西縁の遺跡立地を検討する上で極めて重要な意味をもつことを指摘している。

大規模な草地改良のための暗渠・明渠工事により、カッティングから多量の遺物が採集されており、竪穴住居跡の落ち込みも多数発見されている。採集遺物は、縄文時代早期の石刃鏃文化期の遺物、東釧路Ⅲ式、前期の綱文式、中期の北筒Ⅱ～Ⅴ式土器、後期末晩期初頭の土器、晩期の土器など、ほぼ縄文時代の各時期にわたる。石刃鏃文化期では、土器は条痕文土器と無文土器があり、絡条体圧痕文を有する浦幌式土器は伴っていない。石器は石刃鏃のほか石刃・削器・彫器・蛇紋岩質の擦切磨製石斧などがある。

遺跡一帯には縄文時代中期の遺構・遺物が広い範囲にわたって確認されており、特に標高6～7mの低地には、この時期の住居跡が相当数存在するとみられる。採集資料からみると、このあたりは縄文時代中期から晩期にかけての集落跡と位置づけられる。道道を挟んで西側にも竪穴住居跡の落ち込みがあり、幌呂川に面する標高16m前後の平坦な台地にも、縄文時代中期と思われる径4mの浅い落ち込みが4か所あり、さらに西側の遺跡へと続いている。



図Ⅱ-3 下幌呂遺跡A地点出土の遺物 (澤・西 1974)



図Ⅱ-4 下幌呂1遺跡採集遺物(1)(澤・西ほか 1986)

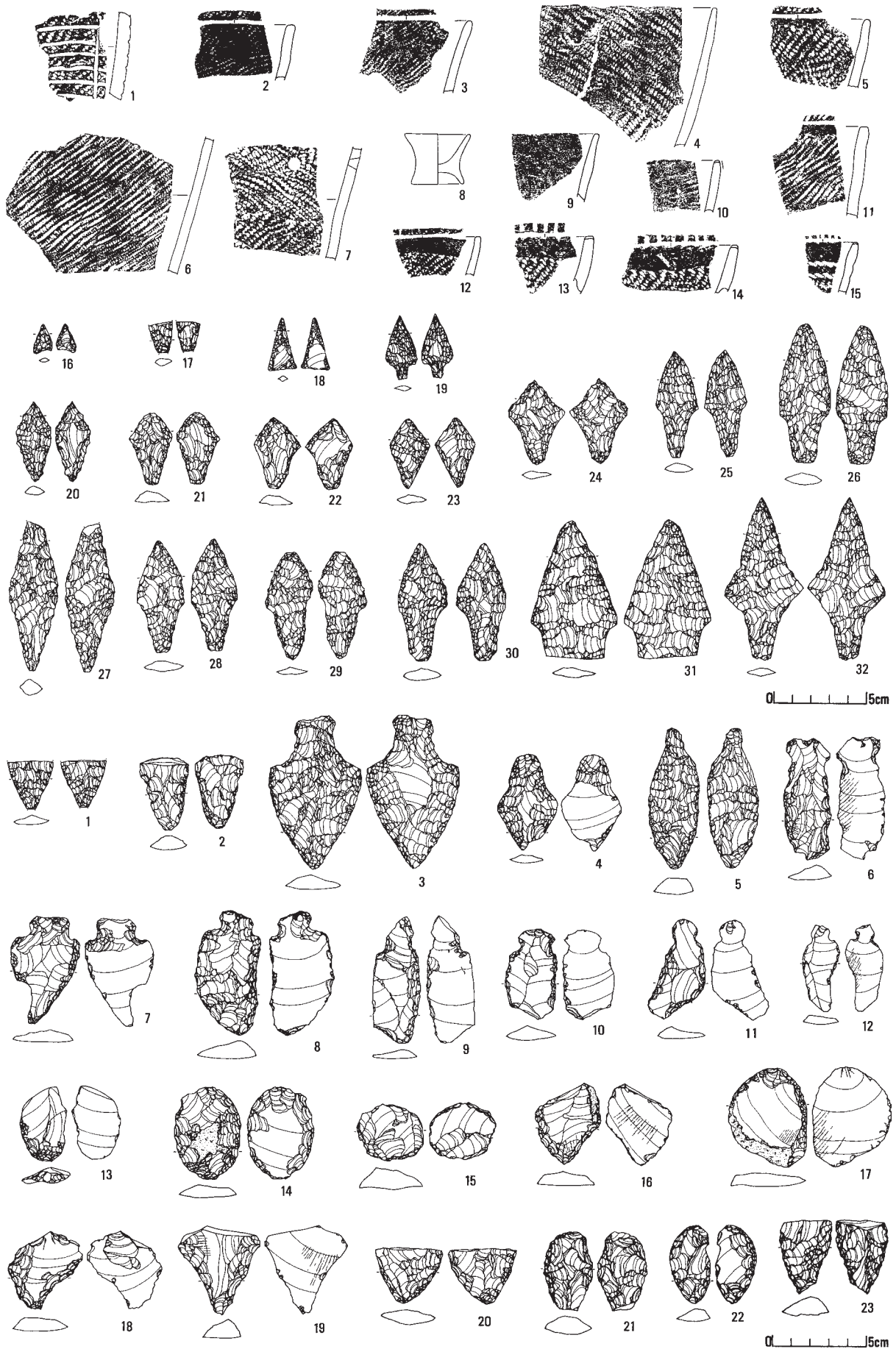


図 II - 5 下幌呂 1 遺跡採集遺物(2) (澤・西ほか 1986)



図 II - 6 下幌呂 1 遺跡採集遺物(3) (澤・西ほか 1986)

a) 下幌呂遺跡A地点採集遺物から〔図Ⅱ-3、澤・西1974〕

遺跡の東部、幌呂川河岸段丘の崖沿いの崩落土砂からの限られた範囲での採集遺物である。

土器は11点が図示されている。4群にまとめられ、第Ⅰ群土器（1～5）：「条痕文・無文の平底鉢形土器群」、第Ⅱ群土器（6）：東釧路Ⅲ式、第Ⅲ群土器（7～10）：網文式、第Ⅳ群土器：北筒式としている。第Ⅰ群は浦幌式に相当するが、絡条体圧痕文・刺突文の土器がみられないことや、繊維の混入がないことなど、他遺跡の石刃鎌文化期に伴う土器との相異を指摘している。前期の網文式は、今回の当センターが行った遺跡西部での発掘調査では出土しておらず、主に遺跡東部から出土するようである。

石器は28点が図示されている。石鎌（1～4）、石槍（5）、石錐（6）、「石小刀」（7・8）、石刃鎌（10）、石刃（11～21・24～28・31・32）、削器（22・23・29・30・33）、彫器（35～38）、磨製石斧（39）がある。彫器は石刃折損後、端部からの削片剥離が行われたとみられ、今回調査で出土したのも同様の形状である。

全体的に石刃鎌石器群が多数を占めている。「石小刀」とするつまみ付きナイフについても、「石刃鎌文化の中に求めることはあながち否定できない」、と述べられている。

b) 下幌呂1遺跡採集遺物から〔図Ⅱ-4～6、澤・西ほか1986〕

前述の報告以後の採集遺物である。道道を挟んで西側に遺跡が広がることが確認されたため、今回の発掘調査区に近い範囲からも採集されているものと思われる。

土器は33点が図示されている。東釧路Ⅲ式〔図Ⅱ-4の1～3〕、網文式（4・5）、モコト式（6）、北筒Ⅱ式（7～10、下段1・2）、北筒Ⅲ式（3～5）、北筒Ⅳ式（6）がある。図Ⅱ-5の1～15は口唇上にも縄文や刻みが施され、晩期が多いものとみられる。8は小型の「盃形土器」で、今回の発掘調査でも同様のものが出土している。中期～後期の土器は、北筒Ⅱ・Ⅲ式の前後まで幅がある。晩期の土器は、今回の調査を考慮すると、道道周辺で採集された可能性がある。

石器は67点が図示されている。石鎌〔図Ⅱ-5の16～19〕、石槍（20～30・32）、削器（下段1・2）、「石匙」（上段31・下段3～12）、搔器（13）、削器（14～23、図Ⅱ-6の1～11）、二次加工のある剥片（12～18）、砥石（19）、磨製石斧（20～21・下段1～6）がある。「石匙」は、当報告書ではつまみ付きナイフとしている。全体的に、石刃鎌石器群は影を潜め、大型の石槍などの剥片石器から、北筒式土器に伴うものが多く占めている。小型の石槍は菱形の形状のものが多く、やはり該期の様相である。またやや小型の磨製石斧や、角柱状の砂岩を素材とした砥石など、今回の発掘調査での出土石器も同様の形状のものが多く。

（2）下幌呂地区の遺跡

「下幌呂」の名を冠する遺跡のうち、下幌呂1遺跡を除く14か所の遺跡について記す。

[26] 下幌呂2遺跡（遺物包含地）

当遺跡の立地は、下幌呂地区の他の遺跡が湿原に面する台地先端部や湧水をもつ沢に接しているのとは異なり、比較的高い位置にあり、標高35～40mである。既に大部分が工事により壊滅している。縄文時代早期の東釧路Ⅲ式、中期の北筒Ⅱ式土器が採集されている。

[27] 下幌呂3遺跡（遺物包含地）

標高35m前後。本来は沢を取り囲むようにして遺跡が展開していたと考えられる。道路のカッティングより、縄文時代早期のものと中期の北筒式の土器片が採集されている。

[28] 下幌呂 4 遺跡 (遺物包含地)

湿原に面した標高25m前後の舌状台地にある。台地北側の道路のカッティングから縄文時代早期の東釧路Ⅲ式、後期末晩期初頭の土器が採集されている。遺跡の東側に平坦面が広がり湿原域に接しており、下幌呂 1 遺跡の例からこれらの低地帯にも遺跡が広がる可能性がある。

[29] 下幌呂 5 遺跡 (遺物包含地)

標高25m前後の平坦面より遺物が採集されているが、時期や遺跡の広がり是不明である。

[31] 下幌呂 6 遺跡 (遺物包含地)

現在、草地改良により整地されている。部分的に黒色土が露出している。かつて、縄文期の遺物が採集されている。

[32] 下幌呂 7 遺跡 (遺物包含地)

草地改良により整地されている。縄文時代前期の網文式、晩期の緑ヶ岡式土器が採集されている。

[33] 下幌呂 8 遺跡 (遺物包含地)

草地改良により整地されている。かつて、縄文期の遺物が採集されている。

[34] 下幌呂 9 遺跡 (遺物包含地)

温根内川水面との比高20m前後の台地平坦面に位置する。東西200m、南北40mの範囲に口径 5 m 前後、深さ0.3~0.5mの円形の落ち込みが11か所、やや深い4×5mの方形のものが2か所存在している。ここからは、縄文時代中期の北筒Ⅲ・Ⅳ式土器、後期末晩期初頭の土器、晩期の緑ヶ岡式土器が採集されている。円形の浅い落ち込みは、縄文時代中期もしくはそれ以降のものとみられ、下幌呂 10遺跡も含んだ大きな広がりをもって展開する集落跡の可能性はある。

[35] 下幌呂10遺跡 (遺物包含地)

温根内川が湿原域へ流下する付近の左岸に位置し、標高20~30mの台地上にある。土砂採取により大部分が破壊されている。破壊をまぬがれた南側の台地先端部近くに径 6 m、深さ0.5mの円形竪穴様の落ち込みがあり、東側に入る沢の奥まった位置にも径 4 m、深さ0.6mの落ち込みが観察される。東釧路Ⅳ式土器、北筒Ⅲ式土器、擦文土器、石鍬、磨製石斧などが採集されている。

[58] 下幌呂11遺跡 (集落跡)

幌呂川に面し、水面との比高10m前後の台地上にある。浅い円形竪穴住居跡が 4 か所確認でき、本来は下幌呂12遺跡と連続していた可能性がある。

[59] 下幌呂12遺跡 (集落跡)

下幌呂11遺跡と小さな沢を挟んで隣接する。径 4 mの浅い円形竪穴住居跡が 3 か所ある。

[60] 下幌呂13遺跡 (集落跡)

幌呂川に向かって舌状に張り出した台地平坦面にある。東西200m、南北100mの範囲である。縄文時代早期の東釧路Ⅲ式、晩期の斜行縄文が施された土器が採集されている。西側台地に浅い円形の竪穴住居跡が 2 か所ある。

[61] 下幌呂14遺跡 (遺物包含地)

幌呂川に面した標高15mの台地一帯。道路のカッティングより縄文時代中期の北筒Ⅱ式と晩期の土器片、黒曜石の剥片が採集されている。

[73] 下幌呂15遺跡 (遺物包含地)

道道改良工事に伴い新たに確認された遺跡。平成15~16年に発掘調査が行われ、竪穴住居跡 1 軒、土坑 2 基、焼土多数などを検出した。縄文時代早期・前期・中期・晩期の土器・石器等のほか、有舌尖頭器が出土した。鶴居村内における本格的な行政発掘調査は、この遺跡が初めてである。

(3) その他周辺の主な遺跡

[25] アシベツ川右岸遺跡 (遺物包含地)

湿原に向かって伸びる台地先端部にあり、標高は10~20mである。土砂採取により主体部は消滅している。縄文時代早期の石刃鎌文化期の土器・石器類や東釧路IV式土器、中期の北筒式土器が採集されている。残存部分に方形竪穴住居跡が3か所、浅い楕円形の落ち込みが1か所残されている。それぞれ擦文文化期、縄文時代中期のものと思われる。

[71] 下雪裡第4竪穴群 (集落跡)

アシベツ川沿いに東西1.4km、幅300m以上の範囲にある大規模な遺跡である。標高10mに満たない低湿地まで広がる。遺跡中央部において、29か所の竪穴住居跡の落ち込みがある。竪穴住居跡は、台地上では一辺5m前後の方形で深さは1mを超える。川に接した低地側では、一辺4m程度の方形で深さは30~50cmである。前者は擦文期、後者は擦文期もしくは若干古いものとみられる。遺物は、東釧路Ⅲ式、綱文、北筒Ⅱ・Ⅲ式、晩期初頭の突瘤文・爪形文の施された土器、擦文土器がある。そのほか縄文時代後期の手稲式の口縁部片が1点含まれており、釧路地方では初の確認事例である。

[5] 下雪裡第2竪穴群 (集落跡)

雪裡川に面して南北に延びる低位の河岸段丘と下幌呂1遺跡に面する低湿地にある。南北2km、東西最大500m。かつて100軒をこえる擦文期の竪穴群が存在したといわれている。遺物は、東釧路Ⅲ式、北筒Ⅱ・Ⅲ式、縄文時代後期末晩期初頭の土器、続縄文期の下田ノ沢Ⅰ式、後北C₂式土器が過去に採集されている。特に鯨澗式の口縁部片が1点含まれており、釧路地方では初の確認事例である。

[4] 下雪裡第1竪穴群 (集落跡)

湿原に面した台地上にあり、台地に接して雪裡川が蛇行して流れる。標高70mの尾根頂部とその両端部、および湿原よりの標高15mの平坦面に擦文文化期の竪穴住居跡が計121軒分布している。竪穴は4~5mの方形で、深さは1~2mと深く、ほぼ300m四方の範囲に分布している。

[3] 下雪裡1チャシ跡 (チャシ跡)

湿原に沿って南東方向に延びる標高80mの丘陵平坦面を利用して構築。壕は2本のC字状のものが連結。頂部平坦面は楕円形。高低差をもつ2段の面により構成される。壕により囲まれた範囲は、東西約50m・南北約15mである。

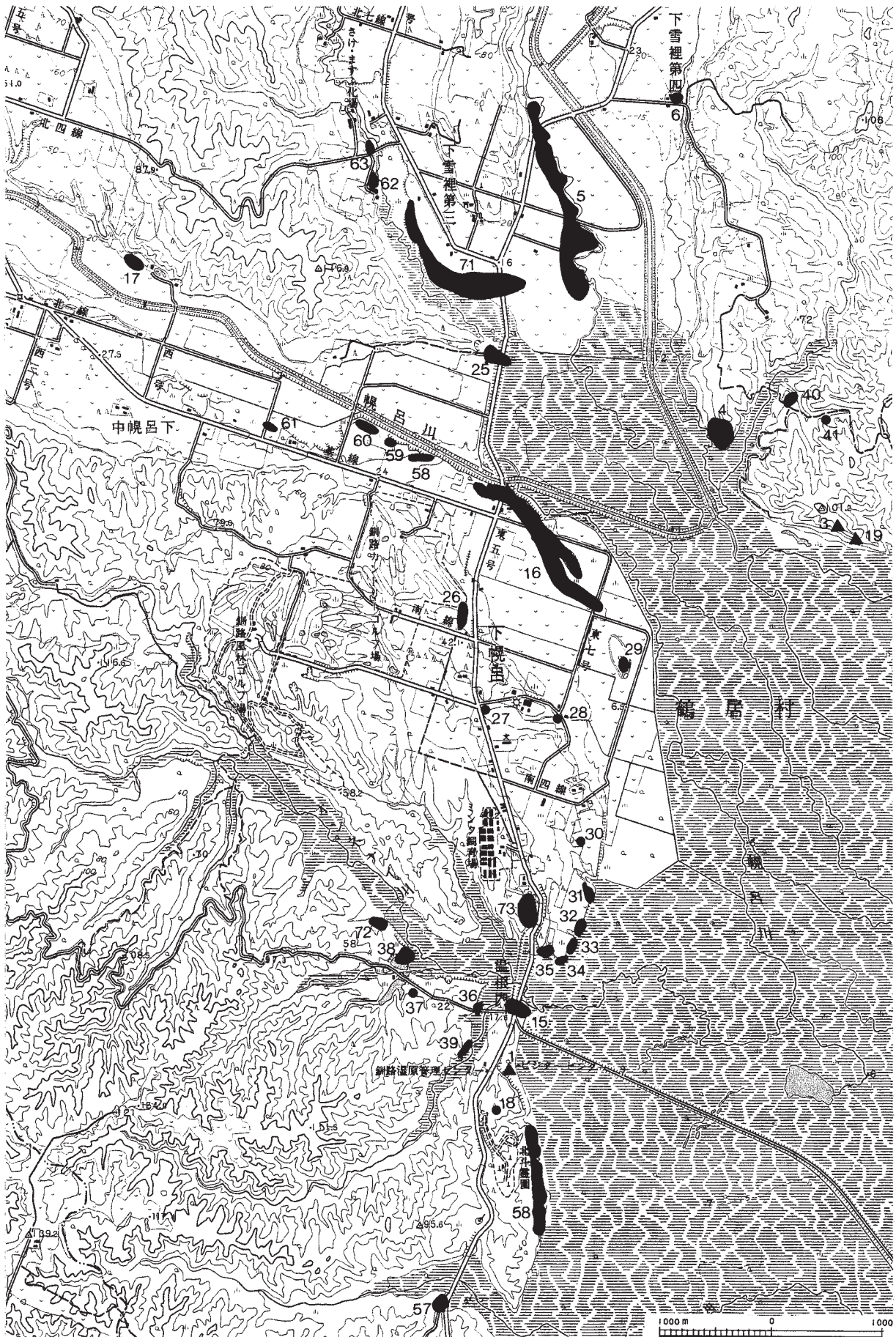
[29] ポンポン山遺跡 (集落跡)

「ポンポン山」は、湿原に面した台地から800mほど離れた標高5m前後の低地に存在する、東西100m、南北300mの独立した孤島状の台地である。標高10~13mの平坦面に人為的な20×30mほどの大きな方形の落ち込みが3か所認められるが、遺物は得られていない。(墓域の可能性を示唆する記述が見られる。)

[56] 温根内第1竪穴群 (集落跡)

湿原に面する標高25~30mの大島川左岸台地上にある。南北1.1km、東西100mの範囲に、縄文時代中期及び擦文文化期の竪穴住居跡の落ち込みが114軒ある。擦文文化期の方形の竪穴住居跡は、平均5~6m、深さ50~100cmで、小さな沢の平坦面にそれぞれまともしてみられる。縄文時代中期とみられる円形の竪穴は数少ないが、北側部分にまとまる傾向がある。径6m前後、深さ30~50cmを測る。

(阿部)



図Ⅱ-7 周辺の遺跡

国土地理院 5 万分の一地形図「鶴居」(1994 年発行)・「大楽毛」(2003 年発行)を使用

表Ⅱ-1 鶴居村の遺跡一覧(1)

掲載番号	遺跡名	種別	時期	土器型式・石器器種	標高(m)	備考
1	温根内チャシ	チャシ	アイヌ		40~50	臨川性、土砂採集により消滅
2	久著呂太チャシ	チャシ	アイヌ		50~60	臨川性、丘先式、3段
3	下雪裡1チャシ	チャシ	アイヌ		約80	臨川性、面崖式、C字状壕
4	下雪裡第1竪穴群	集落跡	擦文		15~70	方形竪穴121
5	下雪裡第2竪穴群	集落跡	縄文早・中・後・晩期、 続縄文、擦文	東釧路Ⅲ、北筒Ⅱ・Ⅲ、 鮎澗、下田ノ沢Ⅰ、後 北C ₂ 、擦文	10	
6	下雪裡1遺跡	遺物包含地	アイヌ		約20	タシロ1点
7	下雪裡2遺跡	遺物包含地	旧石器、縄文中~後期	有舌尖頭器、北筒	35前後	
8	四号の沢遺跡	遺物包含地	縄文	石鏃・石槍・石斧	55	
9	茂雪裡1遺跡	遺物包含地	縄文	石鏃・石槍	60	
10	茂雪裡2遺跡	遺物包含地	縄文		約80	
11	茂雪裡3遺跡	遺物包含地	アイヌ			脇差1振
12	茂雪裡4遺跡	遺物包含地	縄文		約100	
13	茂雪裡5遺跡	遺物包含地	縄文	石鏃	約110	
14	茂雪裡6遺跡	遺物包含地	縄文		190	
15	温根内1遺跡	遺物包含地	縄文後期、擦文	北筒Ⅲ・Ⅴ、擦文	10前後	
16	下幌呂1遺跡	集落跡	縄文早・前・中・後・晩期	石刃鏃、条痕文、東釧 路Ⅲ、綱文、北筒Ⅱ・ Ⅲ、鮎澗	6~20	円形竪穴4以上(低湿地に もあり)2007・2009道埋文 発掘調査、2012報告書刊行
17	中幌呂1遺跡	遺物包含地	縄文	石鏃・石斧	25	
18	温根内2遺跡	遺物包含地	縄文		50前後	
19	下雪裡2チャシ	チャシ	アイヌ		約50	臨川性、面崖式、C字状壕
20	中雪裡チャシ	チャシ	アイヌ		35	
21	下雪裡第3竪穴群	集落跡	擦文		20前後	方形竪穴6、円形竪穴様窪 地2
22	下雪裡3遺跡	遺物包含地	縄文中		約20	
23	中幌呂2遺跡	遺物包含地	縄文中~後・晩期	スクレイパー	約30	
24	中幌呂竪穴群	集落跡	擦文		25	方形竪穴2
25	アシバツ川右岸遺跡	集落跡	縄文早期、擦文	石刃鏃、条痕文、東釧 路Ⅳ	10~20	方形竪穴3、円形竪穴1
26	下幌呂2遺跡	遺物包含地	縄文早・中期	東釧路Ⅲ、北筒Ⅱ	35~40	
27	下幌呂3遺跡	遺物包含地	縄文早・中~後期		35前後	
28	下幌呂4遺跡	遺物包含地	縄文早・後~晩期	東釧路Ⅲ	10~15	
29	ボンボン山遺跡	集落跡			13	山頂部に竪穴様窪地
30	下幌呂5遺跡	遺物包含地	縄文		25前後	
31	下幌呂6遺跡	遺物包含地	縄文		20	
32	下幌呂7遺跡	遺物包含地	縄文前・晩期	綱文、緑ヶ岡	20	
33	下幌呂8遺跡	遺物包含地	縄文		20	
34	下幌呂9遺跡	集落跡	縄文後・晩期	北筒Ⅲ・Ⅳ、緑ヶ岡系	20	方形竪穴2、円形竪穴11
35	下幌呂10遺跡	集落跡	縄文早・中~後期、擦文	東釧路Ⅳ、北筒	20~30	円形竪穴2
36	温根内3遺跡	遺物包含地	縄文早期	東釧路Ⅲ	10前後	
37	温根内4遺跡	遺物包含地	縄文		10~15	
38	温根内5遺跡	遺物包含地	縄文		10前後	
39	温根内6遺跡	遺物包含地	縄文早・中期	東釧路Ⅲ、北筒Ⅱ	10~15	
40	下雪裡4遺跡	遺物包含地	縄文			
41	下雪裡5遺跡	遺物包含地	縄文	石鏃		
42	宮島岬1遺跡	集落跡	縄文		80	円形竪穴
43	宮島岬2遺跡	遺物包含地	縄文後期	北筒Ⅳ	10~20	
44	宮島岬3遺跡	遺物包含地	縄文中~後期	北筒	約50	
45	チルワツナイ川4遺跡	集落跡	擦文		50	方形竪穴29
46	アキアジ沼竪穴群	集落跡	擦文		10~20	方形竪穴6、円形竪穴6
47	チルワツナイ川遺跡	遺物包含地	縄文中・晩期、続縄文	北筒Ⅱ、緑ヶ岡、興津、 下田ノ沢Ⅰ	10	

表Ⅱ－2 鶴居村の遺跡一覧(2)

掲載番号	遺跡名	種別	時期	土器型式・石器器種	標高(m)	備考
48	チルワツナイ堅穴群	集落跡	縄文		約20	堅穴10以上
49	キラコタン堅穴群	集落跡	縄文		20	円形堅穴2
50	キラコタンチャシ	チャシ	アイヌ		約40	
51	キラコタン1遺跡	遺物包含地	縄文		10前後	
52	キラコタン2遺跡	遺物包含地	縄文		10～20	
53	キラコタン3遺跡	遺物包含地	縄文		40	
54	キラコタン4遺跡	遺物包含地	縄文		10～50	
55	下久著呂スキー場遺跡	遺物包含地	縄文早・中～後期、続縄文	中茶路、北筒Ⅱ・Ⅲ、興津、後北C ₂	20	
56	温根内第1堅穴群	集落跡	縄文中～後期、擦文		25～30	方形・円形堅穴114
57	大島川1遺跡	集落跡	縄文中～後期	搔器	15～30	円形堅穴5
58	下幌呂11遺跡	集落跡	縄文			円形堅穴4
59	下幌呂12遺跡	集落跡	縄文			円形堅穴3
60	下幌呂13遺跡	集落跡	縄文早・晩期	東釧路Ⅲ		方形堅穴2
61	下幌呂14遺跡	遺物包含地	縄文中・晩期		約15	
62	下雪裡6遺跡	集落跡	擦文			方形堅穴5
63	下雪裡7遺跡	遺物包含地	縄文早・後期、続縄文	石刃鏃、北筒Ⅲ、後北C ₂		
64	中幌呂3遺跡	遺物包含地	縄文早・中～後・晩期	中茶路、北筒Ⅱ・Ⅲ		
65	中雪裡2遺跡	遺物包含地	縄文後期	北筒Ⅲ	20～25	
66	中雪裡1遺跡	遺物包含地	縄文後期	北筒Ⅲ		
67	宮島岬4遺跡	集落跡	縄文	石槍・石斧	約50	
68	チルワツナイ川3遺跡	集落跡	縄文		約20	円形堅穴4
69	チルワツナイ川2遺跡	遺物包含地	縄文		20前後	
70	キラコタン第2堅穴群	集落跡	縄文		20～75	円形堅穴8
71	下雪裡第4堅穴群	集落跡	縄文早・前・中・後・晩期、擦文	東釧路Ⅲ、綱文、北筒Ⅱ・Ⅲ、手稲		方形堅穴34
72	温根内7遺跡	遺物包含地	縄文	削器	10前後	
73	下幌呂15遺跡	遺物包含地	旧石器、縄文早・前・中・晩期	有舌尖頭器、東釧路Ⅲ、北筒Ⅱ、緑ヶ岡	35前後	2003・2004年鶴居村教育委員会発掘調査、2006年報告書刊行、堅穴住居1、焼土29

Ⅲ 遺構の調査と出土遺物

遺構は、住居跡38軒（H-1～38、うちH-14・15・16・26の4軒は平地住居跡、それ以外は竪穴住居跡）・盛土遺構1か所（M-1）・土坑87基（P-1～26・28～88、P-27は欠番）・柱穴状小ピット17基（SP-1～17）・焼土32か所（F-1～32）・フレイクチップ集中8か所（FC-1～8）・礫集中5か所（S-1～5）が検出され〔図Ⅲ-6〕、この順で記載する。章末に遺構一覧表〔表Ⅲ-4～6〕・遺構出土遺物集計表〔表Ⅲ-7～13〕・遺構出土掲載遺物一覧表〔表Ⅲ-14～27〕を付した。

1. 住居跡

H-1〔図Ⅲ-1、図版4・65〕

位置：K27区

平面形：円形

規模：2.68×2.40/2.28×2.06/0.25m

長軸方位：N-69°W

確認・調査：I層除去後、IV層上面でTa-c火山灰の落ち込みを確認した。周辺をV層まで掘り下げたところで黒色土の落ち込みの中心に直交するように土層観察用のベルトを設定してトレンチ調査を行った。その結果、約20cm掘り下げたところで黄褐色土の床面と壁面の立ち上がりを確認した。覆土を掘り下げた結果、中央に焼土を検出したため、小型の住居と認定した。

覆土：上面はTa-c火山灰が確認され、その下位にIV層主体の黒褐色土（覆土1）が堆積する。床面直上には炭化物の混じる汚れた褐色土（覆土2）がほぼ全体に分布している。壁近くに堆積する覆土2は壁上部の崩落や掘り上げ土が流入したものと考えられ、厚い黒褐色土（覆土1）は自然堆積層とみられることから、住居廃絶後、壁周辺に掘り上げ土等が堆積し、さらに、黒色土が堆積したと推定される。その埋没過程で、IV群b類土器が、さらに時間を経過して浅い窪地の状態でV群c類土器が残されたと考えられる。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所（HF-1）を検出した。

炉跡とみられるHF-1は床面ほぼ中央に位置し、柱穴は確認できなかった。北部、北西部にはそれぞれP-1・2が検出されたが、両土坑とも本住居跡以前に構築されたものと判断した。

遺物出土状況：出土遺物の総数は286点で、土器が247点・石器等が38点・礫が1点である。土器はI群b-4類2点・Ⅲ群b類～IV群a類1点・IV群b類173点・V群c類60点などで、石器等は石錘13点・剥片類25点が出土している。V群c類土器は覆土1の上部でややまとまりをもって出土し、その下位からIV群b類が出土した。8～10cm程度の楕円形の扁平な河原石を利用して、側縁中央に簡単な打ち欠きのある石錘が、床面から1点、住居立ち上がり西側から12点まとまって出土した。

掲載遺物：1・2は鯿潤式。1は口縁部に2列の刻み列があり、刻みの幅は比較的広い。2は1と同一個体の可能性がある。3・4は緑ヶ岡式。深鉢口縁部で、口唇部に3には縄文が、4には縄の圧痕が施される。5～7は石錘。8～10cm程度の楕円形の扁平な河原石を素材として、側縁中央に打ち欠きによって抉りが作出される。

重複・時期：P-1・2と重複し、当遺構が新しい。HF-1出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果、3,530±40yrBPの年代値が得られている。遺物出土状況・覆土の堆積状況や住居の形態を勘案して、縄文時代後期中葉の鯿潤式期と考えられる。（鈴木）

H-2・3 [図Ⅲ-2～10、図版5・6・65・66、口絵6・8]

位置：K24・25・26、L24・25・26、M25・26区 平面形：不整楕円形(H-2)、隅丸方形(H-3)

規模：10.41×4.98/9.98×4.78/0.85m 長軸方位：N-39° E

確認・調査：I層除去後、IV層上面のL24杭周辺でTa-c火山灰の分布を確認した。周辺をV層まで掘り下げるとTa-c火山灰の分布が北東側(M25杭の方向)に移動し、北東方向に落ち込んでいくのが確認できた。黒色土の輪郭がK24・25、L24・25区では隅丸形状であるのに対し、その北東側(L26、M25・26区)では歪な楕円形であることが判明し、二つの遺構が切り合うものと予想し、北東側をH-2、南西側をH-3として調査を開始した。H-3の中軸を通るように南西-北東方向(a-b)にトレンチを設定し、それに直交するように北西-南東方向にH-2はc-d、H-3はe-fのトレンチを設定した。a-bトレンチでH-3の立ち上がりが明瞭には確認できず、両者を区別するのは困難であった。

トレンチに対応したベルトを残して覆土の掘り下げを行うとH-3では炭化材・焼土がその壁際を中心として検出され、それらは床面から若干上位の層から出土している。これらの炭化材の向きは壁の輪郭に沿った長軸方向と直交する方向があり、規則性が認められることから屋根材などの構造材の可能性が考えられ、焼土が伴うことから焼失住居の可能性もある。それらを除去し、検出した床面は平坦ではなく、凹凸がある。

H-2を掘り進めると南東部では焼土層、ベンガラ層などが重層的に検出され、最終的に長軸約3m、短軸2.5mの床面が確認され、床面やその周辺からは細い柱穴状の小ピットが18基検出された。また、北西部では2か所の土坑状の窪みが確認された。焼土層・ベンガラ層はそれぞれ土壌を採取し、後にフローテーションによる微細遺物の回収を行った。

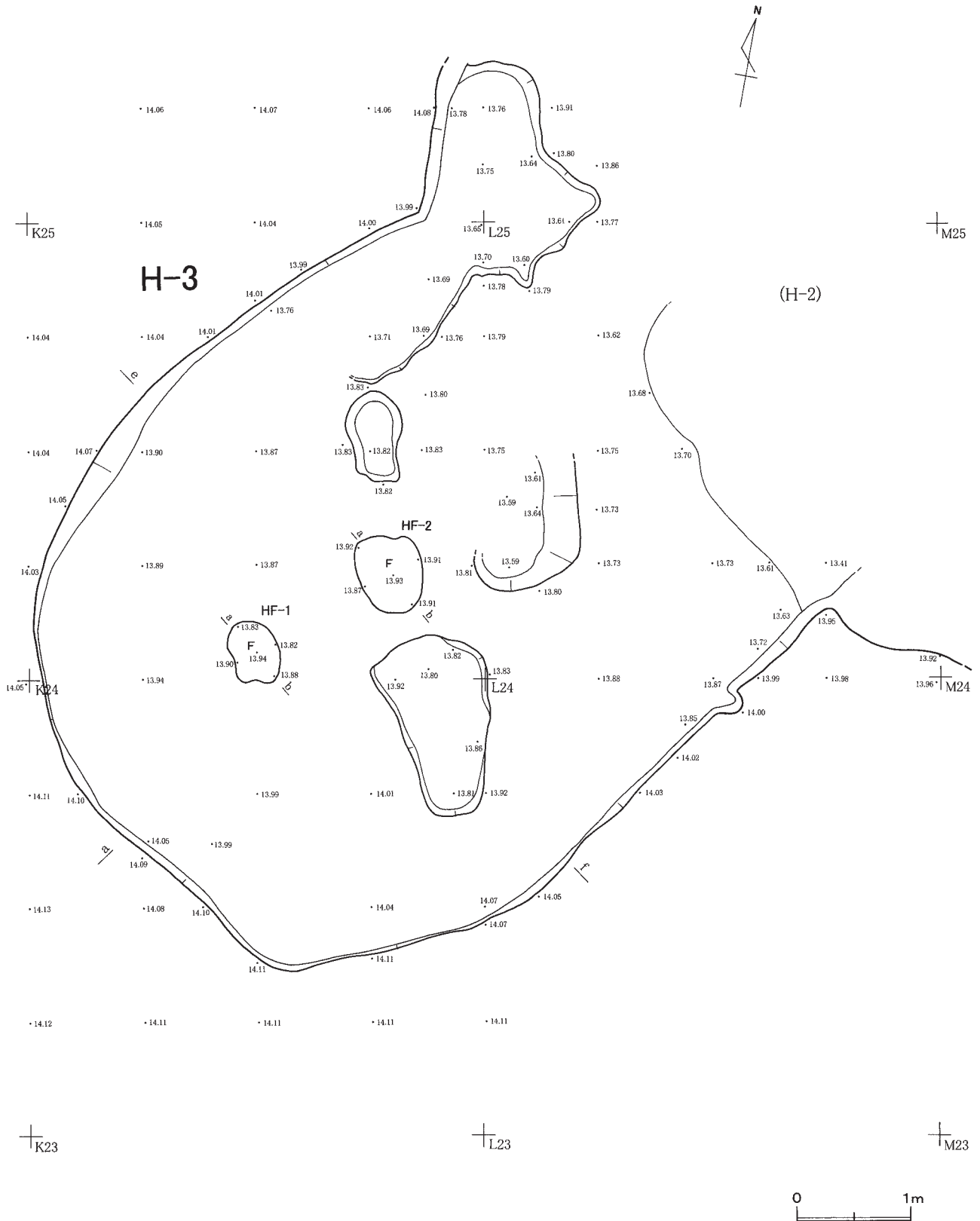
覆土：H-2上部はH-3に比較的類似した堆積状況を示し、暗褐色土や黒褐色土が不均質に堆積する。中位より下部は炭化物層、焼土層、ベンガラ層が薄くほぼ水平に堆積し、南東部の壁際は垂直に覆土が堆積している。北西部の土坑状の窪みの覆土はやや不均質である。以上のことから判断するとH-2南東部に住居が形成され、ベンガラ層や焼土層などが繰り返し形成された後、土坑状の落ち込みやH-3が形成され、最終的にH-3が焼失して廃棄された可能性が考えられる。

床面・壁：H-2南東部の床面は比較的平坦で、中央に焼土層、床面全体にベンガラ層が形成される。IV層類似などの覆土堆積後、さらに焼土・ベンガラ層が形成される。壁は、南東側はなだらかに立ち上がり、覆土37下部・29下部・25下部など不自然な堆積状況の見られるところで複数回、壁が形成された可能性がある。ベンガラ層が複数枚検出される住居跡は大楽毛1遺跡(第4号住居跡など)(釧路市埋蔵文化財調査センター2001)で類例がある。

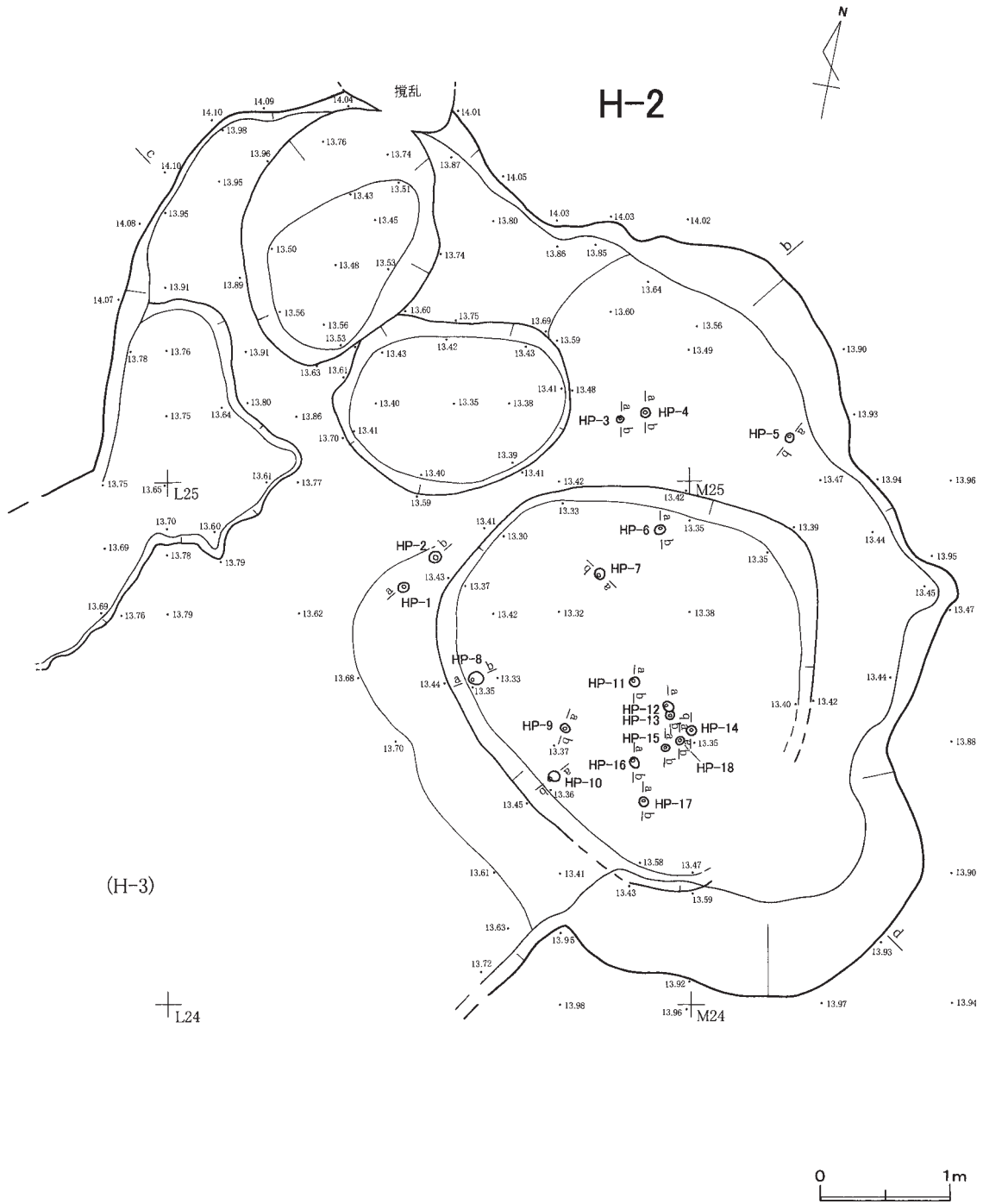
付属遺構：H-2には床面中央に焼土1か所、床面全体にベンガラ層が、床面とその周辺に柱穴が18か所ある。柱穴は直径10cm以下で小型のもので規則性は無く、中央南東側に偏在する。直立するものが多いが、一部内側に傾くものがある。このような特徴も大楽毛1遺跡(第7号住居跡など)で見られるものである。

H-3には中央とその南西の2か所に焼土があり、柱穴は確認できなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数はH-2・3合わせて3,170点で、土器が961点・石器等が2,164点・礫が45点である。土器はI群a類40点・I群b-1類20点・I群b-4類36点・Ⅲ群b類~Ⅳ群a類384点(うちⅢ群b類3点、Ⅳ群a類48点)・Ⅳ群b類293点などのほか、H-3からスタンプ形土製品が2点出土している。石器等は石刃石器群に含まれるものが少なくとも11点あり、錐形石器・削器・彫器・削片などが出土している。ほかに石鏃11点・石槍11点・つまみ付きナイフ5点・スクレイパー

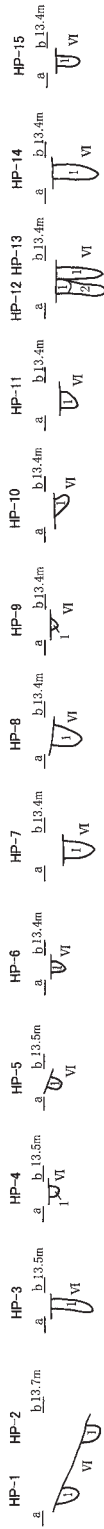


図Ⅲ-2 H-2・3(1)



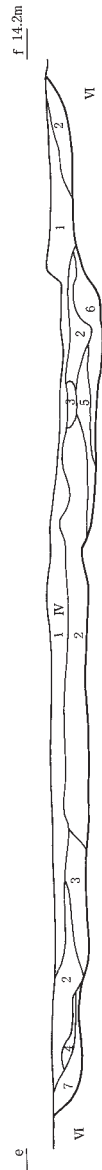
図III-3 H-2・3(2)

H-2 HP



- HP-1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV) 粘性强、しり弱。
- HP-2 1 黒褐色(10YR 2/1)シルト (IV) 粘性强、しり弱。
- HP-3 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV) 粘性强、しり弱。
- HP-4 1 黒褐色(10YR 2/1)シルト (IV>VI) 粘性中、しり弱。
- HP-5 1 黒色(10YR 4/0)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-6 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-7 1 暗褐色(10YR 3/3)シルト (IV<VI) 粘性中、しり弱。
- HP-8 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-9 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-10 1 黒色(10YR 2/1)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-11 1 暗赤褐色(5YR 2/3)シルト (黄土) 粘性中、しり弱。
- HP-12 1 暗褐色(10YR 3/3)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-13 1 暗褐色(10YR 4/6)シルト (IV<VI) 粘性中、しり弱。
- HP-14 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV>VI) 粘性中、しり弱。
- HP-15 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト (IV) 粘性强、しり弱。
- HP-16 1 暗褐色(10YR 2/3)シルト (IV>VI) 粘性中、しり弱。
- HP-17 1 黒褐色(10YR 2/3)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。
- HP-18 1 黒色(10YR 2/1)シルト (IV+VI) 粘性中、しり弱。

H-3 断面



H-3 HF



- H-3 HF-1 1 黄褐色(5YR 4/6)シルト (黄土) 粘性中、しり弱。IV層強し。
- H-3 HF-2 1 暗赤褐色(2.5YR 2/2)シルト (黄土) 粘性中、しり弱。炭化物混入。
- 2 明赤褐色(2.5YR 5/8)シルト (黄土) 粘性中、しり弱。
- 3 H-2-3断面図の2層

図III-5 H-2・3(4)

9点・両面調整石器3点・石核1点・石斧2点・砥石1点・台石等4点・剥片類2,105点が出土している。34の砥石はH-2の南東部中位焼土上から出土した。

H-2の焼土層からは焼骨片が出土しているがほとんどが魚類の棘や部位不明の小さなもので、同定可能なものではサケ科椎骨が出土している。

H-2中位炭化物層(覆土31層)中の炭化材5点(試料番号C091~C095)、H-3覆土下位出土炭化材20点(試料番号C096~C115)について樹種同定を行った(V章4)。その結果、H-2では1点がコナラ属コナラ節、1点がトネリコ属シオジ節、1点がハコヤナギ属、1点がニシシギ属、1点が樹皮、H-3では12点がコナラ属コナラ節、3点がトネリコ属シオジ節、2点がハコヤナギ属、2点がニレ属、1点が散孔材と判定された。復元可能なものの直径は全て1~3cmと細いものであった。H-2は全て異なる樹種で、H-3はコナラ属コナラ節が多く、偏る傾向があった。H-2は配列に規則性がみられない出土状況から燃料材とみられ、H-3は規則的な配列から屋根材と考えられ、H-2・3の樹種構成の違いはそれぞれの性格の違いを示している可能性が高い。

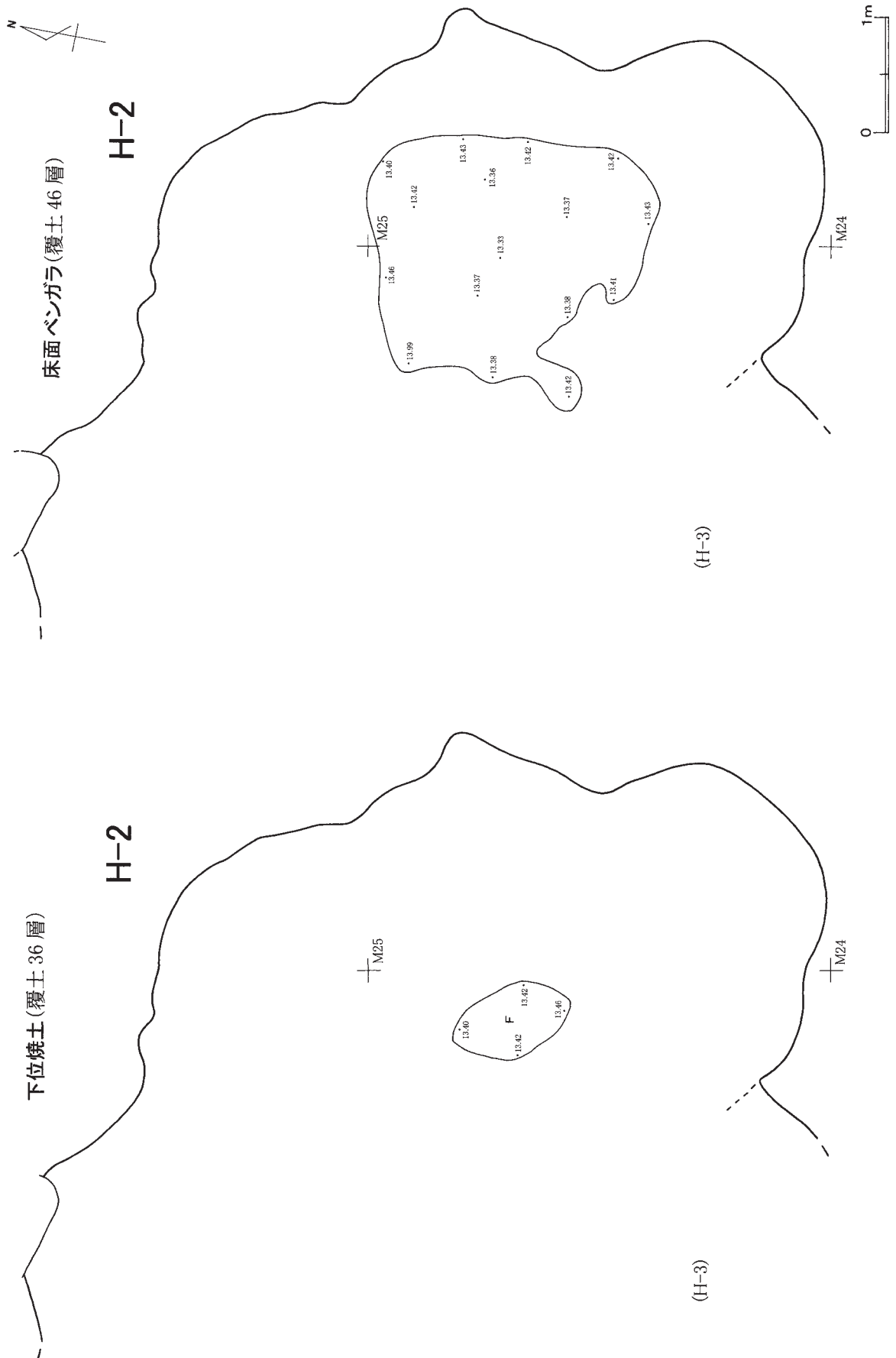
掲載遺物：1・2は東銘路Ⅱ式。1は貼付帯上に斜位の刻みが連続する。2は底部。平底で張り出し部に指頭押捺が連続する。

3~8は北筒Ⅱ~Ⅲ式。3は口唇に刻みがあるもの。口縁部の肥厚帯はなく、径の小さい円形刺突が巡る。内面の縄文に黒色物質が付着している。北筒Ⅱ式の古い段階に相当するものと思われる。4は大型の深鉢。波状口縁をなし、口唇上に刻みが連続する。口縁部肥厚帯上に縦位の細沈線が密に施されている。肥厚帯上に補修孔が穿たれている。肥厚帯直下に径1.5cmほどの浅い円形刺突が巡る。胴部は、LR・RLの2本の原体によりきれいな羽状縄文が全面展開しており、RL縄文は縄端部の押捺が明瞭である。単位境界は撚糸圧痕により区画されている。北筒Ⅱ式の新しい段階に相当する。5はやや小型の深鉢で、口縁部肥厚帯を欠き、平縁の口唇上にも縄文が施文されている。口唇直下に径1.5cmほどの浅い円形刺突が巡る。刺突中央部に地文が残る。胴部はわずかにふくらみ、口縁はやや外反する。内面は平滑に成形されており凹凸が目立つ。肥厚帯を欠くが、刺突の大きさや器形から、4と同時期のもの、またはやや新しいものと考えられる。6は結束羽状縄文、7は4と同様の胴部片。8はやや凹み底となっている。

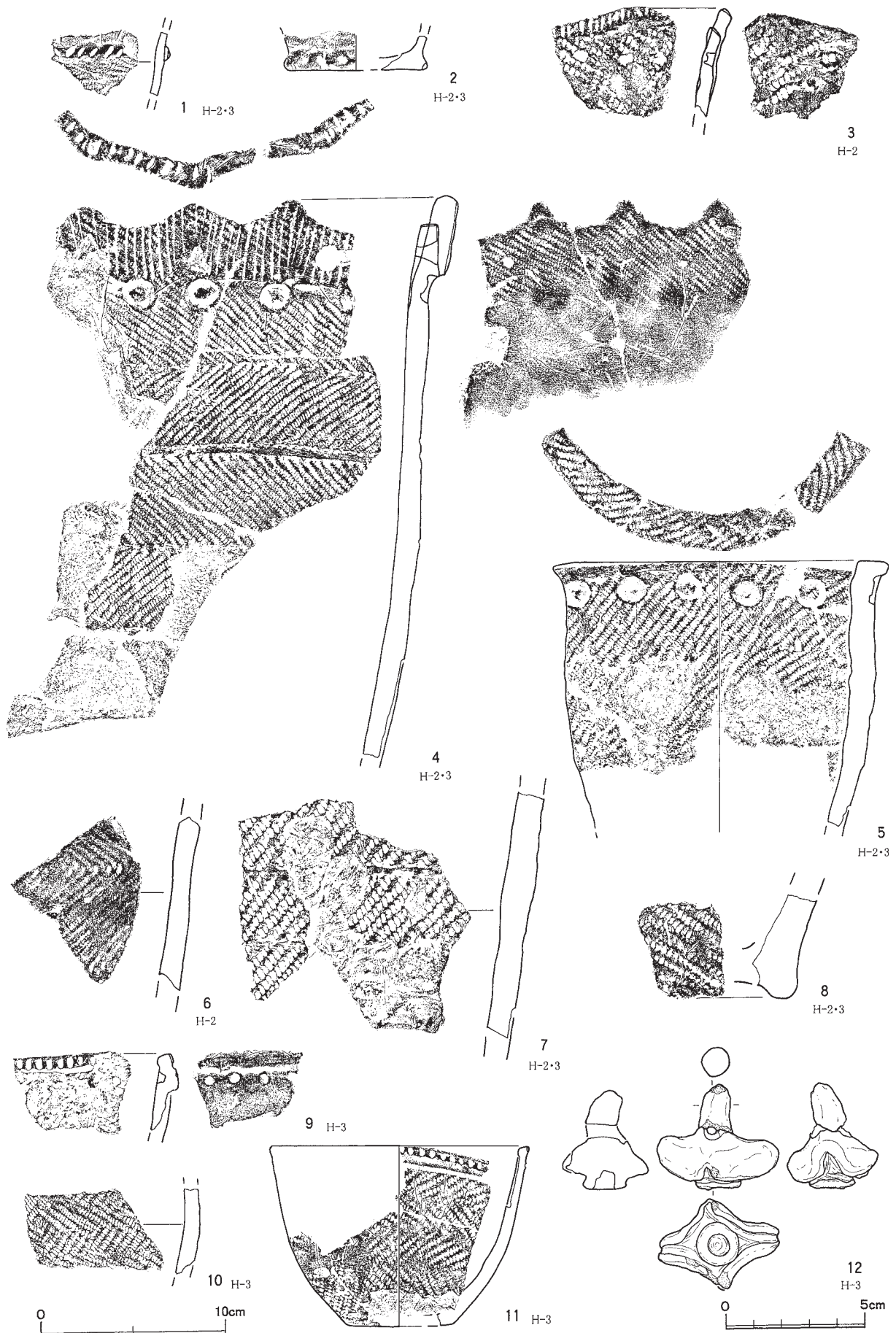
9~11は鯨濶式またはエリモB式。9は口縁部に一列の刻みとI→Oの突瘤が伴う。切出形口唇で、内面に1条の沈線が巡る。11は鉢。12はスタンプ形土製品。H-3覆土から出土したものが接合した。つまみ部下位に貫通孔がある。版面は貼付粘土紐で菱文中に円文を設け、中央部を刺突している。

13~22は石鏃。13・14は小型柳葉形。16~22は返しが不明瞭で、21・22は菱形を呈する。23は石錐。24は石槍。尖頭部が尖るがやや短く、再調整した可能性がある。25は搔器。26~29はつまみ付きナイフ。30は石刃素材の削器。31はスクレイパー類。32・33は石核。34は砥石。13・14はその形態から縄文時代早期、15~22・24は中期後葉~後期前葉、25・28・30は石刃鏃石器群とみられる。25は右側縁に彫刀面があり、石刃折損後彫刀面打撃がなされ、この技術は石刃鏃石器群に一般的に見られるものである。27・29は縦長剥片素材であるが、反りが強く小型の原石から剥離されたもので、北筒式期に伴うものと思われる。31~33は転礫面が残り、転礫素材である。32・33は打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離が行われた石核である。34は長大な角柱状の砥石で、風化により非常に脆い。13・22・27・32については産地分析を行い(V章2)、13・22は「所山」、27は「置戸」、32は「十勝」と判定された。

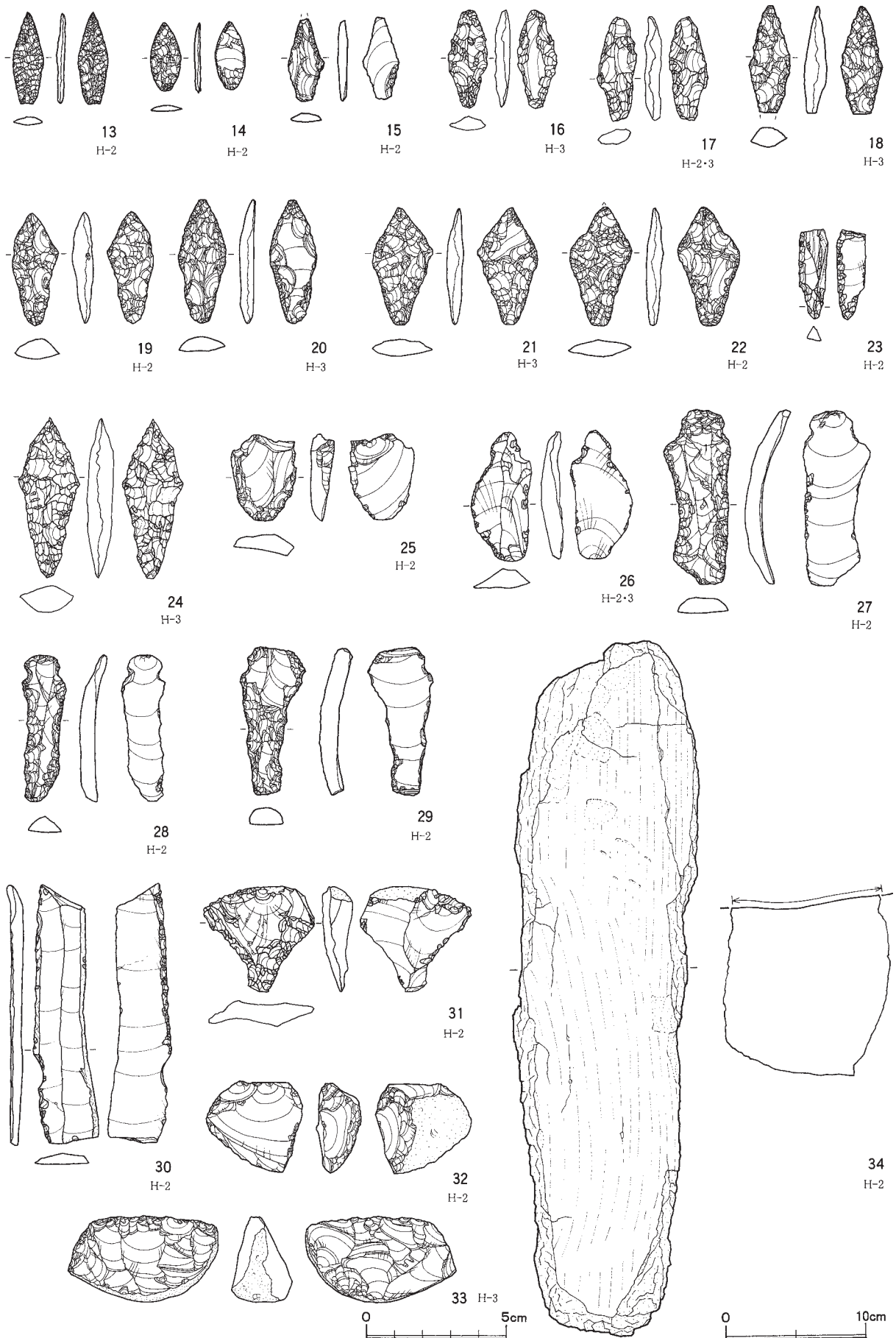
時期：放射性炭素年代測定の結果、H-2は $3,730 \pm 40$ yrBP(中位炭化物(覆土31層)、IAAA-91742)、 $3,790 \pm 30$ yrBP(上位焼土(覆土21層)、IAAA-102472)、 $3,820 \pm 30$ yrBP(下位焼土(覆



図III-8 H-2・3(7)



図Ⅲ-9 H-2・3出土の遺物(1)



図Ⅲ-10 H-2・3出土の遺物(2)

土36層)、IAAA-102473)、3,830±30yrBP(下位焼土(覆土36層)、IAAA-102474)、3,710±30yrBP(覆土下位、IAAA-102475)、3,700±30yrBP(覆土下位、IAAA-102476)、H-3は3,810±40yrBP(覆土、IAAA-91743)、3,650±30yrBP(覆土下位、IAAA-102477)の年代値が得られている。概ね3,700~3,830yrBPで、3,700年と3,800年前後が多い。

竪穴住居跡の形状や覆土・炭化材の検出状態および出土遺物から、縄文時代中期末から後期前葉の北筒Ⅱ~Ⅲ式期と考えられる。(鈴木)

H-4 [図Ⅲ-11~15、図版7・66・67、口絵8]

位置：N24・25区

平面形：円形

規模：3.95×3.66/3.66×3.48/0.68m

長軸方位：N-16°W

確認・調査：I層除去後、IV層上面でKo-c₂?火山灰の散漫な分布を確認した。土層観察用のベルト(e-f)を残し、周辺をV層上面まで掘り下げたところでTa-c火山灰の落ち込みを確認したため、その中心を直交するように土層観察用のベルトをさらに設定して覆土を掘り下げた。V層上面のレベルから約40cmの深さで床面を確認し、北東部には入口構造との関連が見られる方形の張り出しが確認されたため、調査区のクリアランス部を拡張し記録を行った。床面検出後、柱穴調査を行ったが検出されなかった。

覆土：床面上には壁際に三角堆積、炭化材・焼土を含む不均質な層が堆積し、その上面は皿状に窪む。その上に自然堆積層である黒色土、Ta-c火山灰、黒色土、そして最上位にKo-c₂?火山灰が堆積し、その上面はほぼ平坦である。炭化材・焼土は①壁際に厚く堆積し、中央に薄く堆積する不均質な層の中位から下部にかけてその傾斜に沿って検出されていること、②柱材と見られるやや太い材が出土していることから焼失した際に上部の屋根土の崩落によって覆土10下位の土層が形成された可能性があり、土葺きの住居であったと考えられる。その窪みに鯨潤式の土器が廃棄された後、自然堆積による土壌の形成が進行し、Ta-c火山灰、黒色土の堆積後、Ko-c₂?火山灰の降下によってほぼ平坦になる。Ta-c火山灰は窪地であったため非常に厚く堆積したと思われる。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

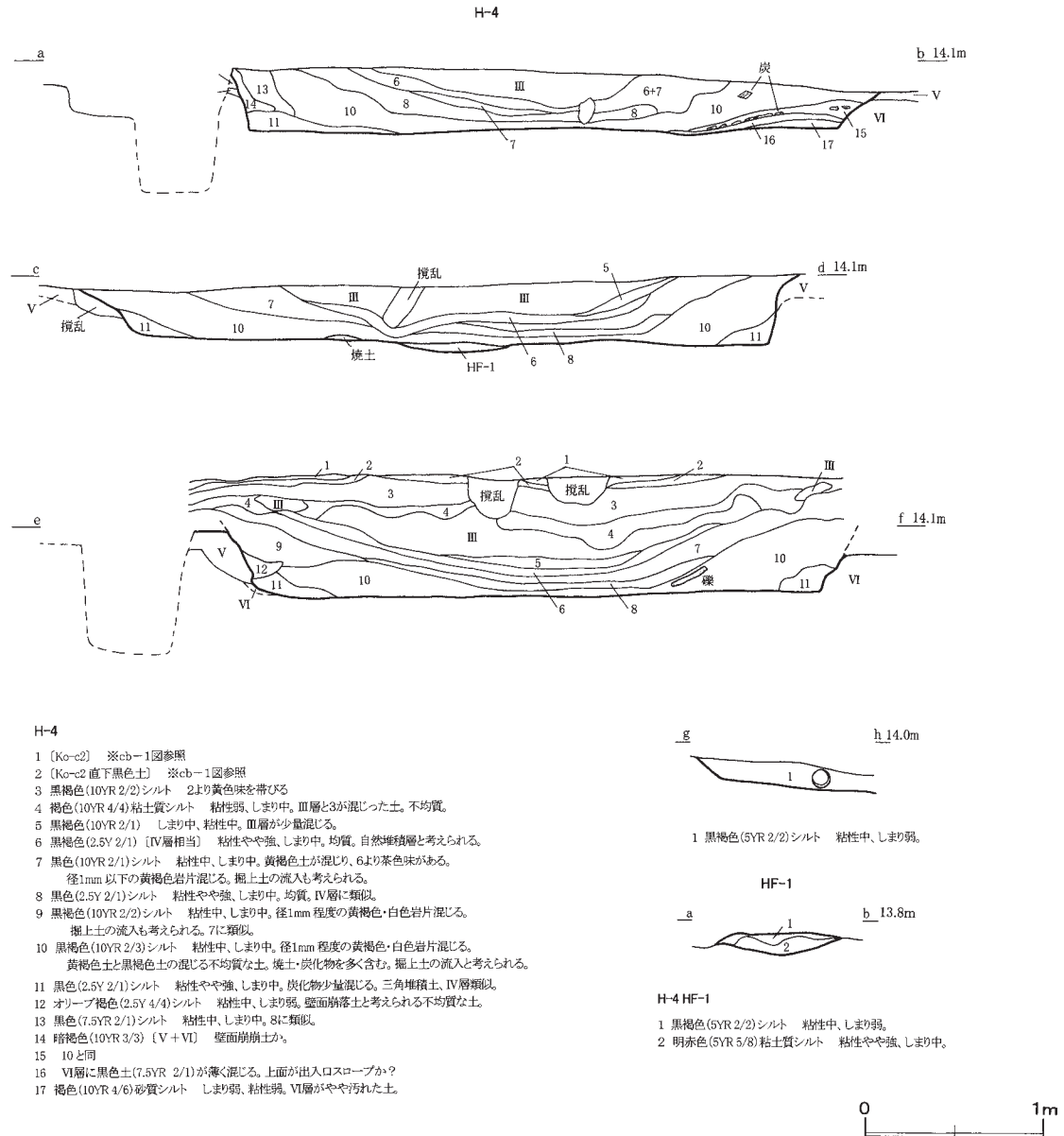
付属遺構：床面中央に焼土1か所、北東部に入口構造がある。北東部の内湾部が入口構造と見られ、その北西側には方形の張り出しがみられる。

遺物出土状況：遺物の総数は1,493点で、土器が1,269点・石器等が221点・礫が3点である。土器はI群a類83点・I群b-1類13点・I群b-4類40点・Ⅲ群b類~IV群a類22点・IV群b類1,079点・IV群c類12点・V群c類6点などが出土している。石器等は彫器2点・石刃等6点・石鏃4点・石槍3点・つまみ付きナイフ1点・スクレイパー4点・両面調整石器3点・たたき石1点・すり石2点・石錘1点・台石片等39点・剥片類154点が出土している。

7は住居焼失後、皿状に窪んだ覆土10の上面から面的な広がりをもって出土した。床面からは小型の鯨潤式土器が、壁から40~50cm内側から点々と4個体出土した。3・4は正立、5は横向きで、6は潰れた状態であった。3個体は口縁部を欠き、1個体は底部を欠く。割れ面が打ち欠きによるものとみられ、口縁部破片などが調査区内から出土しなかったことから故意に打ち欠き、床面に残置されたものと思われる。このような出土状況と焼失住居を考えると、故意に焼失させた可能性が高い。床面からは、それら以外にスクレイパー等の石器が出土している。

掲載遺物：1は浦幌式。2は中茶路式。いずれも覆土中に混入したと考えられるものである。

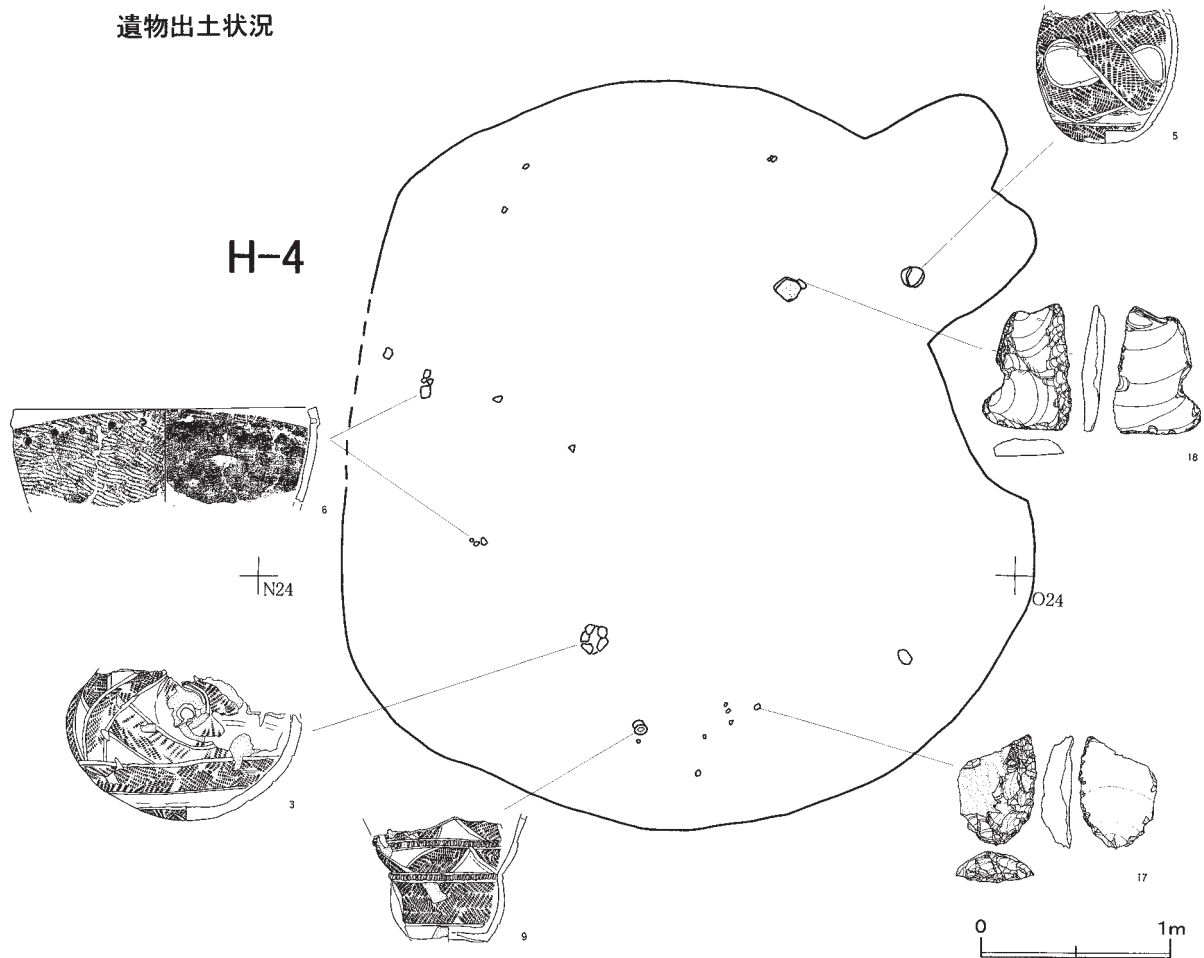
3~5・7~9は鯨潤式。3は大型の注口土器。器壁は比較的厚い。横位の帯状文により文様帯が



図III-12 H-4(2)

区画され、胴部中央に曲線帯状文の組み合わせによる文様がえがかれている。底面には親指大の浅いくぼみがある。4・5は長胴壺。欠損部が多いが、下部単孔壺の可能性はある。入組帯状文が展開する。磨消がていねいに行われている。5は色調がやや灰黒色を呈している。7は口径40cmをこえる大型深鉢。5単位の波状口縁で、やや丸みを帯びる口唇部である。口唇下と胴部くびれに2列の刻みが巡り、無文帯を区画している。内面調整はていねいで、内面口縁部にはスズ状黒色物質が多量付着している。8は波状口縁で切出形口唇である。対向弧線文の組み合わせによる文様がえがかれている。9は凸面体を有する深鉢。2か所のくびれ部にそれぞれ刻み列が配されている。6は堂林式。床面上から出土している。平縁で、角形に近い切出形口唇である。口唇下に円形の突瘤が巡る。

遺物出土状況

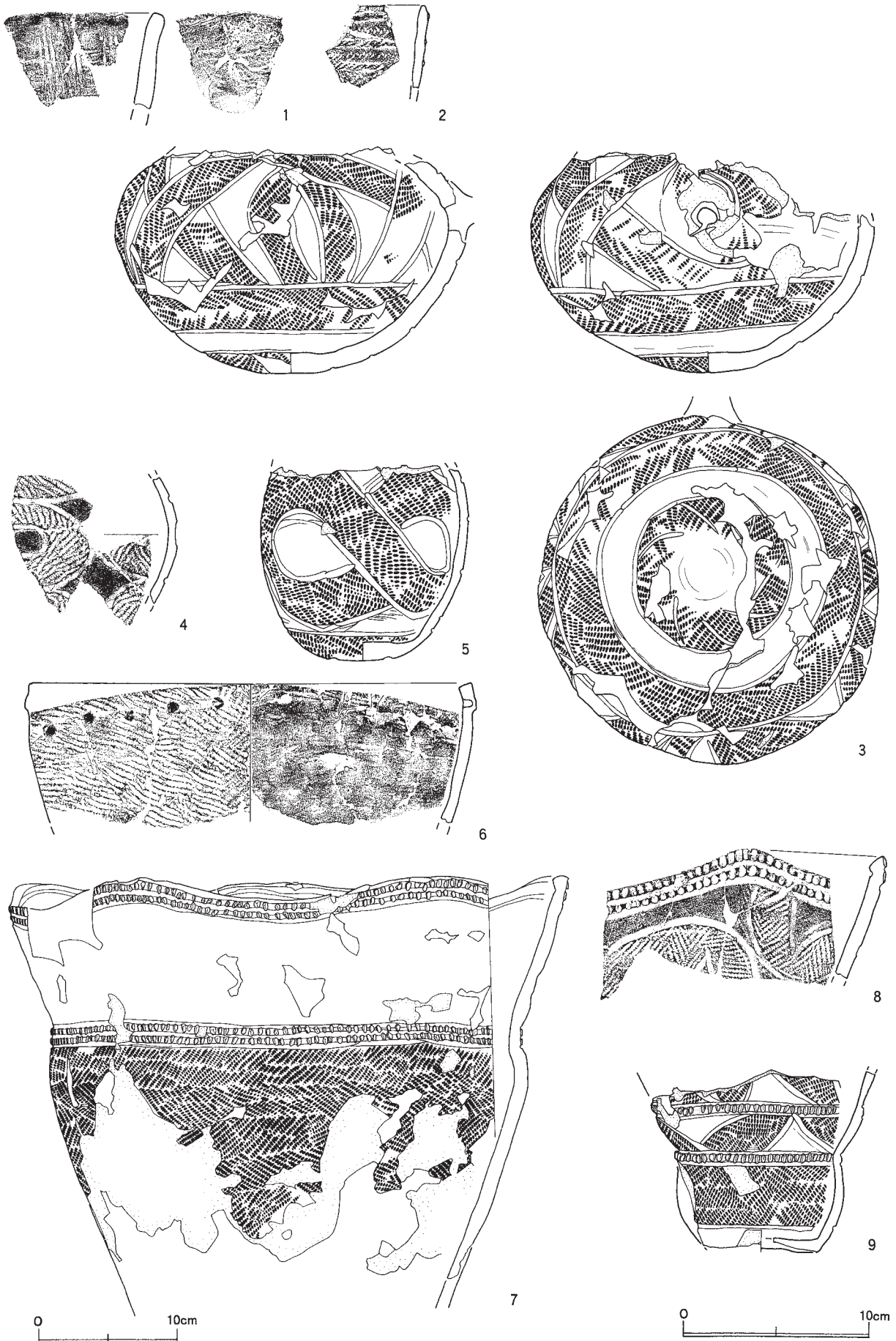


図Ⅲ-13 H-4(3)

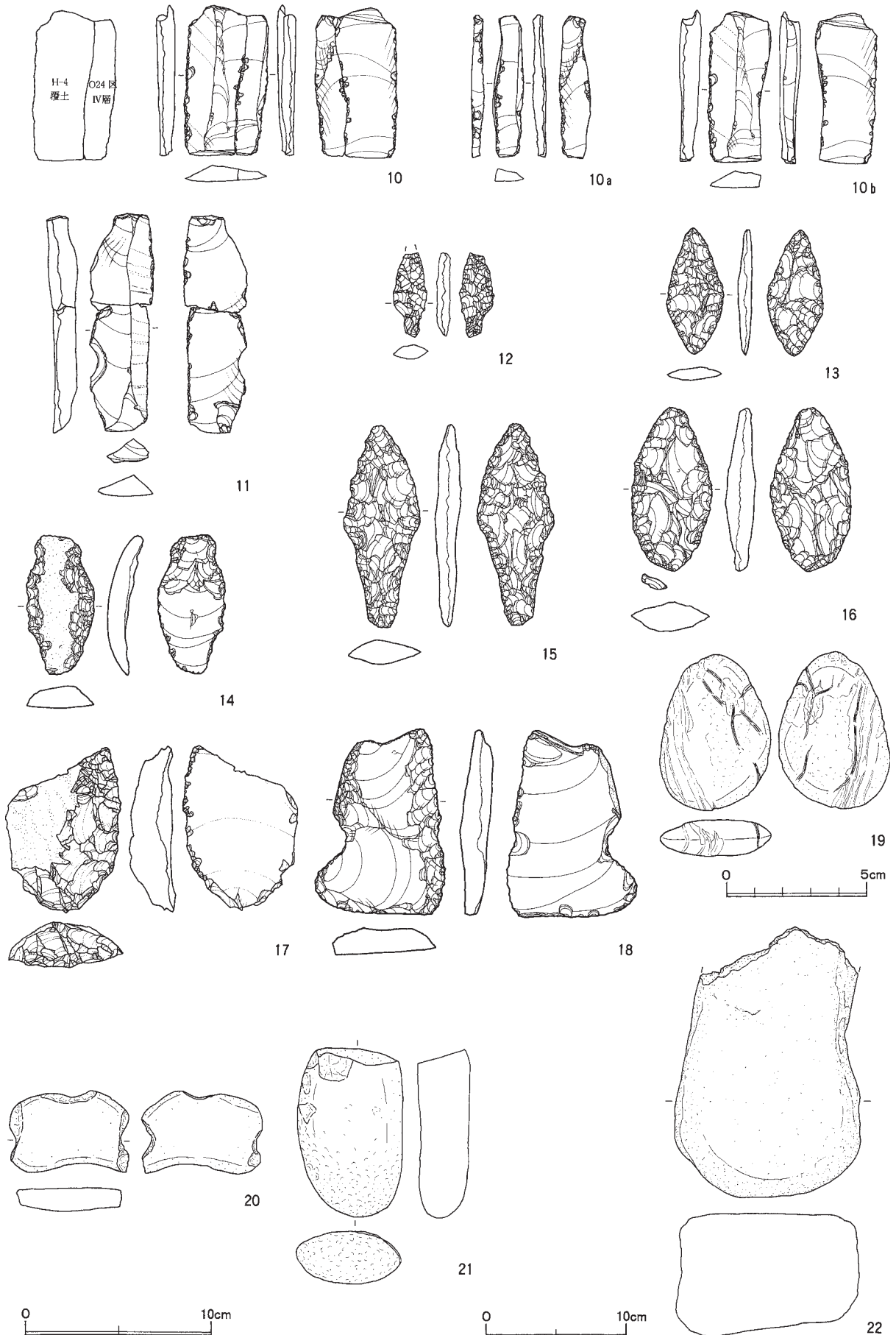
10は彫器削片 (10 a) と彫器 (10 b、包含層出土)、11は彫器と石刃の接合資料である。両者とも石刃鎌石器群で、石刃を素材として折損後に折れ面打面から側縁に彫刀面剥離が行われる。12・13は石鎌。14はつまみ付きナイフ。15・16は石槍。12・15は有茎、13・16は菱形ないし木葉形。17はエンドスクレイパー。18はスクレイパー。19は線刻のみられる泥岩の扁平礫。20は石錘。長軸両端のほか短軸にも打ち欠きがある。21はたたき石。楕円体の礫の長軸端部に多数の敲打痕が観察される。22は台石。17・18は床面出土で鯨潤式～堂林式期とみられる。

時期：HF-1 出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果、 $3,340 \pm 40 \text{yrBP}$ (IAAA-91744) の年代値が得られている。床面・覆土出土遺物、覆土の堆積状況や住居の形態を勘案して、縄文時代後期後半の鯨潤式期～堂林式期と考えられる。

(鈴木)



図Ⅲ-14 H-4出土の遺物(1)



図III-15 H-4出土の遺物(2)

H-5 [図Ⅲ-16~19、図版8・9・68、口絵12]

位置：P23・24、Q23・24区

平面形：円形

規模：(3.80)×(4.12)／(3.49)×(3.54)／0.36m 長軸方位：N-9° E

確認・調査：I層除去後、IV層上面でTa-c火山灰の落ち込みを確認した。周辺をV層まで掘り下げたところでTa-c火山灰を中心としたドーナツ状に分布する黄褐色土を確認し、その円の中心を直交するように土層観察用のベルトを設定してトレンチ調査を行った。その結果、ドーナツ状の黄褐色土の分布より一回り大きい住居の壁とそれに対応する床面を確認し、さらにその下位からほぼ同心円状の直径3分の2程度の小型の住居跡を検出した。上位の住居跡をH-5、下位の住居跡をH-11として調査を行った。H-5は北側を調査範囲のクリアランスとして残したため調査できたのは全体の3分の2程度で、また、東側も削平を受けて壁の不明な部分があった。

覆土：床面から10cm程度IV層が堆積し、その上に炭化物を含む焼土(覆土2・3)が広く分布する。さらにその上位にIV層・Ⅲ層(Ta-c火山灰)が堆積する。小型土器が床面上に点々と出土する状況や覆土中位の面的な焼土の堆積などH-4と共通点が多く、床面直上のIV層とした層を屋根土と見なせば焼失住居である可能性がある。また、後述するが、H-11の上部が削平されており、H-11廃絶後、一回り大きく円形に掘り込みを行い、本住居跡を構築したと思われる。

床面・壁：H-11覆土とは明瞭に区別できる床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

付属遺構：中央に1か所焼土があり、柱穴は確認できなかった。また、入口構造については同時期の住居跡であるH-4・12とともに北東部にあることから調査できなかった北東側にあった可能性が高い。

遺物出土状況：出土遺物の総数は1,097点で、土器が116点・石器等が977点・礫が4点である。土器はI群b-1類2点・I群b-2類1点・I群b-4類34点・Ⅲ群b類~IV群a類1点・IV群b類65点などで、石器等は石鏃2点・石槍1点・つまみ付きナイフ2点・スクレイパー6点・石錐1点・両面調整石器2点・石核9点・台石片等310点・剥片類643点が出土している。

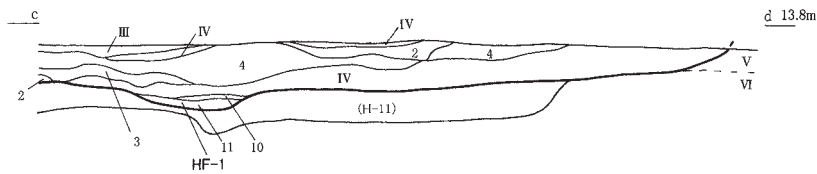
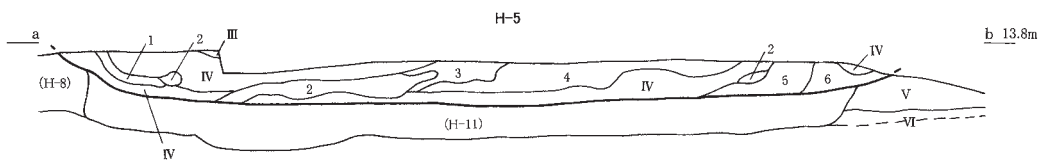
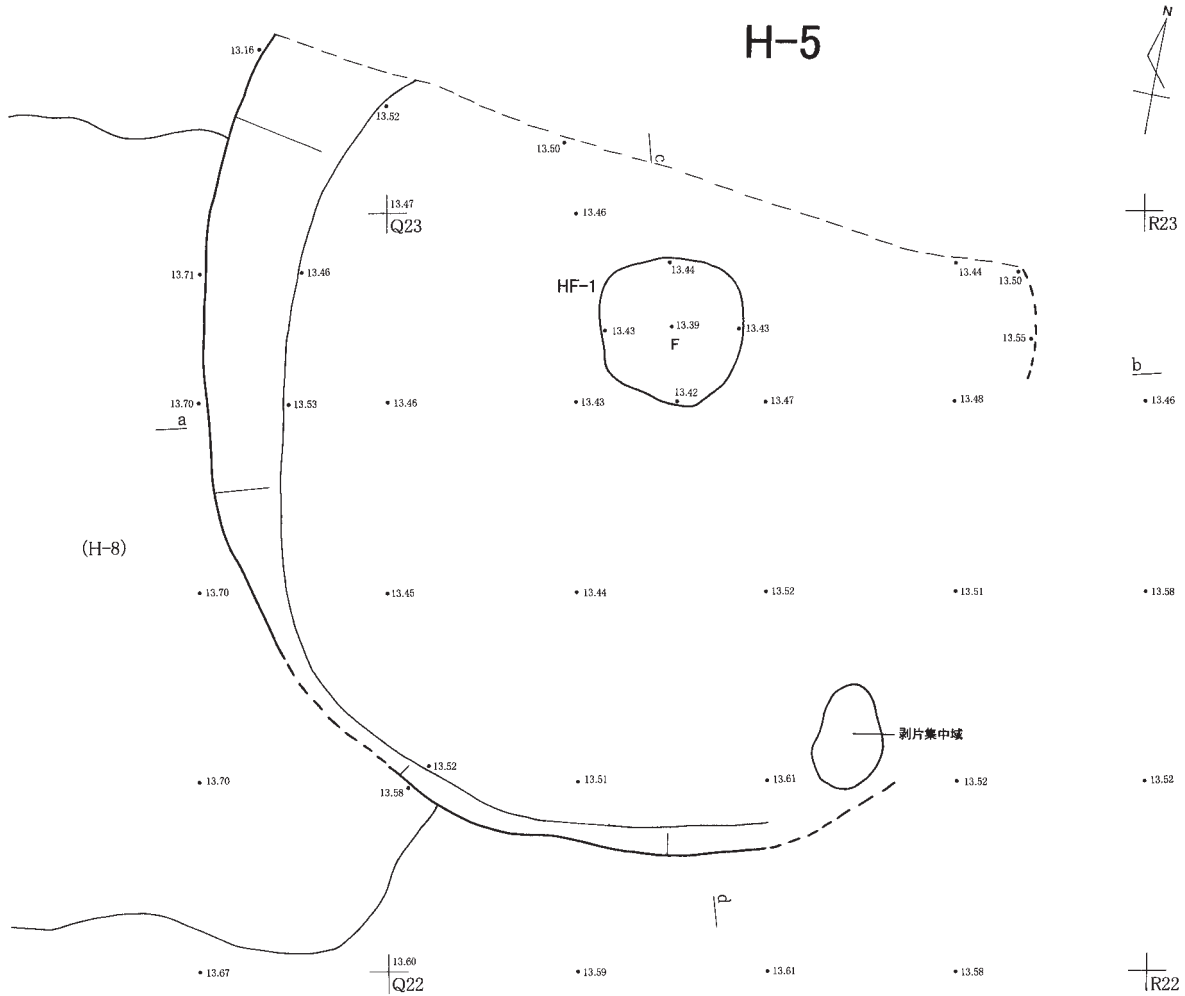
床面付近からは主に南側の壁際を中心に遺物が分布し、注口土器や鉢形土器はそれぞれ倒立、正立の状態以南西部の台石の周辺から、石鏃・スクレイパー・石核・剥片集中など剥片石器類が南東部からまとまって出土している。

掲載遺物：1は鯨潤式の小型注口土器。完形で出土した。体部の径は7cmで高さは5cmに満たない。半球形の体部に横口頸部および注口部が配される、「水差し形」である。上面は閉じている。内部の観察は困難であるが、重量感があり中実に近い。横口頸部から注口部にかけて、それぞれ斜方向に空洞があり貫通している。文様は、注口部や瘤を起点とし、磨消縄文により木葉文が4単位でえがかれている。口頸部は刻み列による区画帯が設けられている。

2はミニチュア土器。全形は不明である。3~6は鯨潤式。3・5は大型の鉢。口唇下に刻み列がめぐり、5は胴部に対向弧線による入組帯状文がクランク状に配されている。胎土に白色粒子を含む。4は壺または注口土器、6は深鉢の胴部でいずれも縄文のみの破片である。7は中茶路式。

8・9は石鏃。10は石錐。11はつまみ付きナイフ。12・13はスクレイパー。11~13はやや大型の剥片素材で、12の背面には角礫面が残る。14・15は石核。10cm程度の小型の転礫素材で正面側の平坦面で求心状の剥片剥離が行われる。多方向の背面構成を持ち、平面形状が三角形に近く、反りの比較的少ない剥片が剥離されたものと推定される。16は被熱礫。10・14・15については産地分析を行い、10は「所山」、14は「十勝」、15は「美蔓」と判定された。

重複・時期：H-8・11と重複し、当遺構が新しい。床面・覆土出土遺物、覆土の堆積状況や住居の形態を勘案して、縄文時代後期中葉の鯨潤式期と考えられる。(鈴木)



H-5

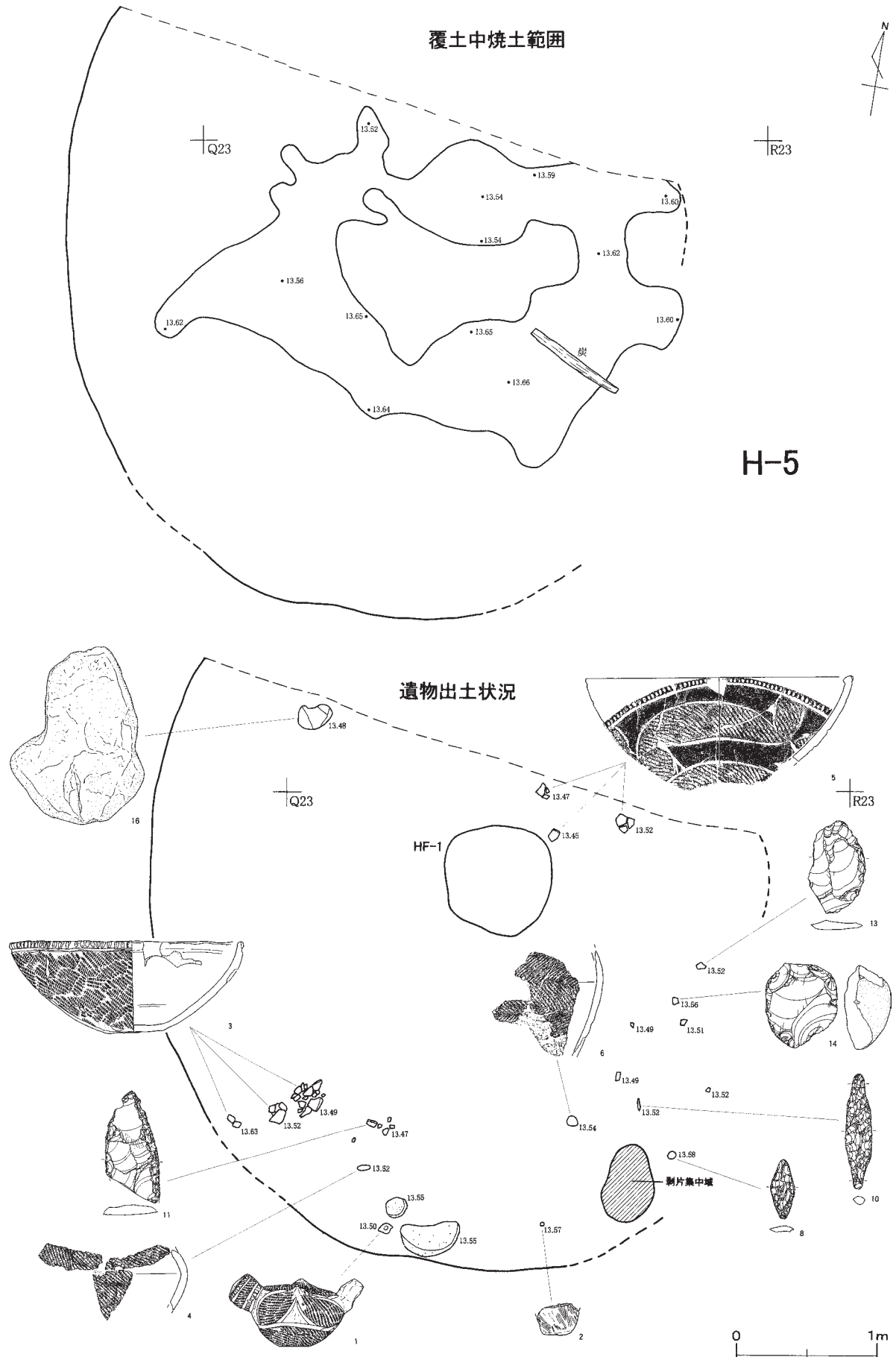
- 1 暗褐色(10YR 2/3)シルト [(IV<VI) 粘性中、しまり中。
- 2 明褐色(7.5YR 5/8)粘土質シルト 粘性中、しまり中。焼土・炭化物含む。
- 3 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性中、しまり中。2と4の中間の色。
被熱の弱い焼土・炭化物を含む。
- 4 黒色(10YR 2/1)シルト 粘性中、しまり中。炭化物含む。
IV層が若干赤みを帯びる(3より黒い)
- 5 黒褐色(10YR 2/2)シルト [(IV>VI) 粘性中、しまり中。
- 6 褐色(10YR 4/4)粘質シルト 粘性中、しまり弱。

H-5 HF-1

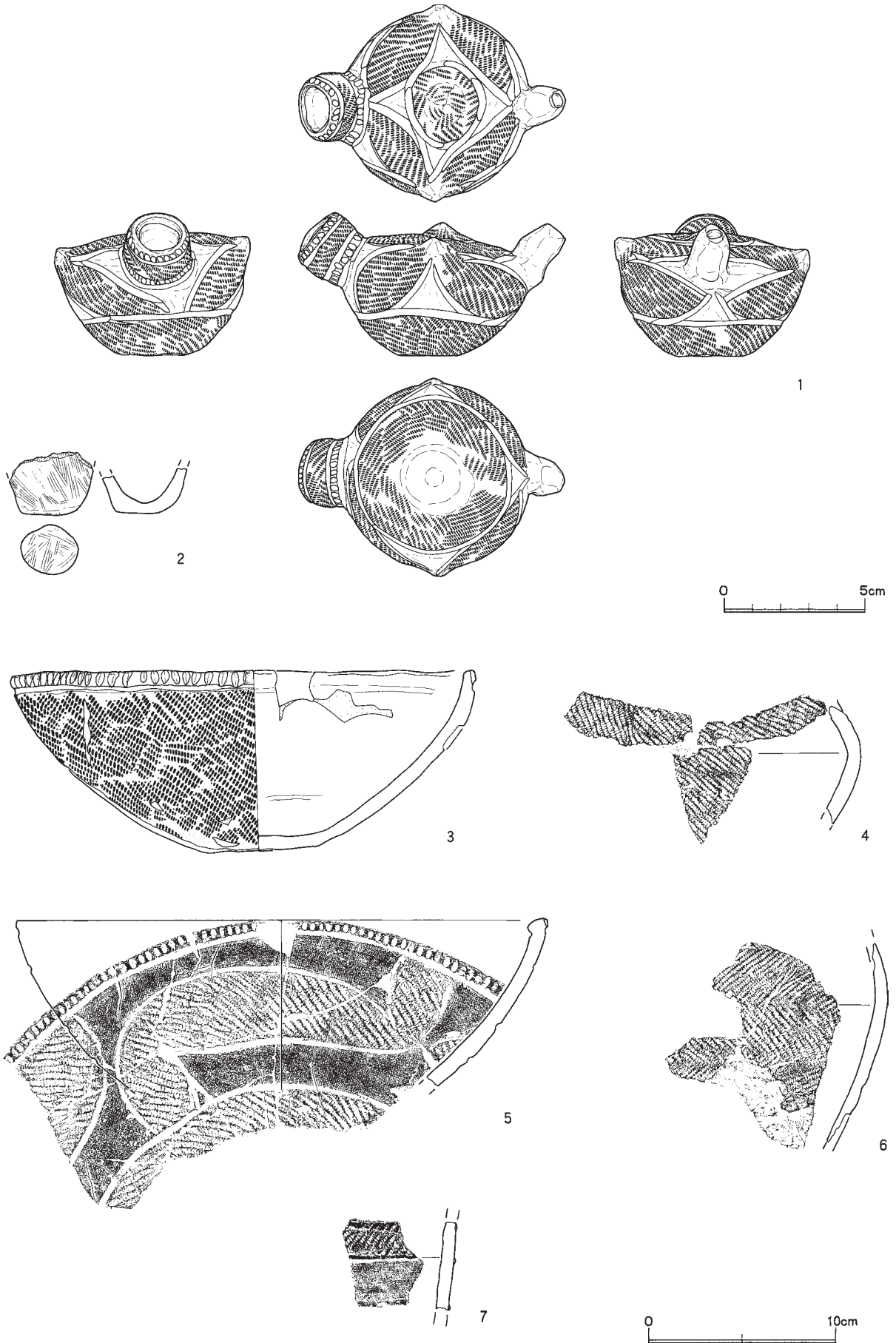
- 10 暗褐色(2.5YR 3/3)シルト (焼土) 粘性中、しまり弱。炭化物量じり。
- 11 明赤褐色(5YR 5/8)シルト (焼土) 粘性中、しまり中。



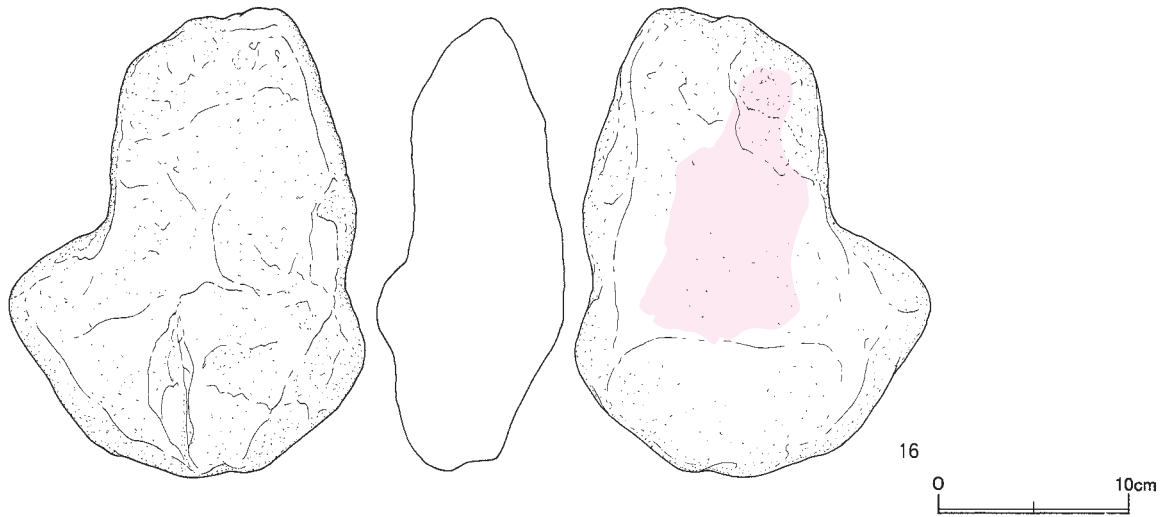
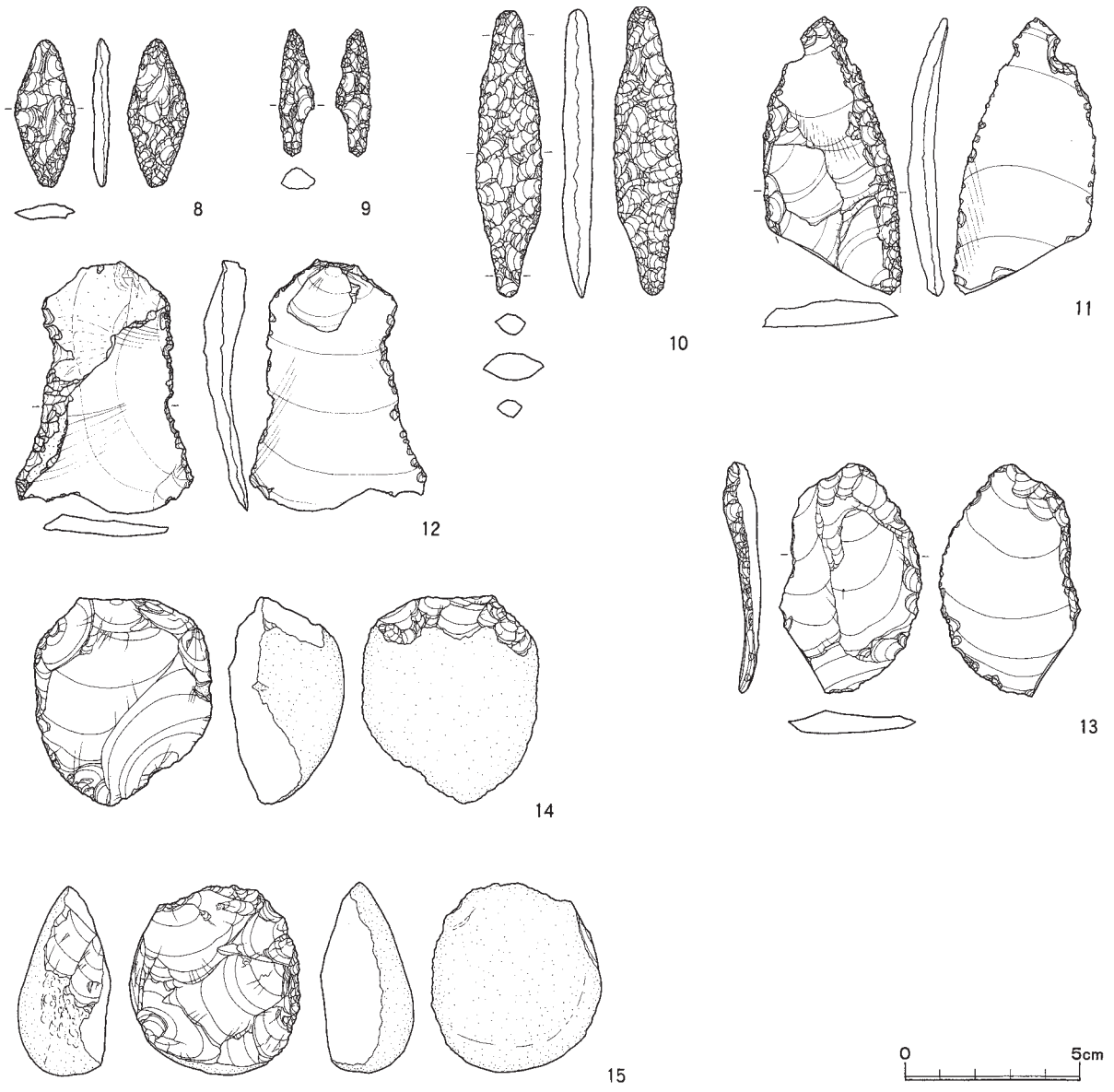
図III-16 H-5(1)



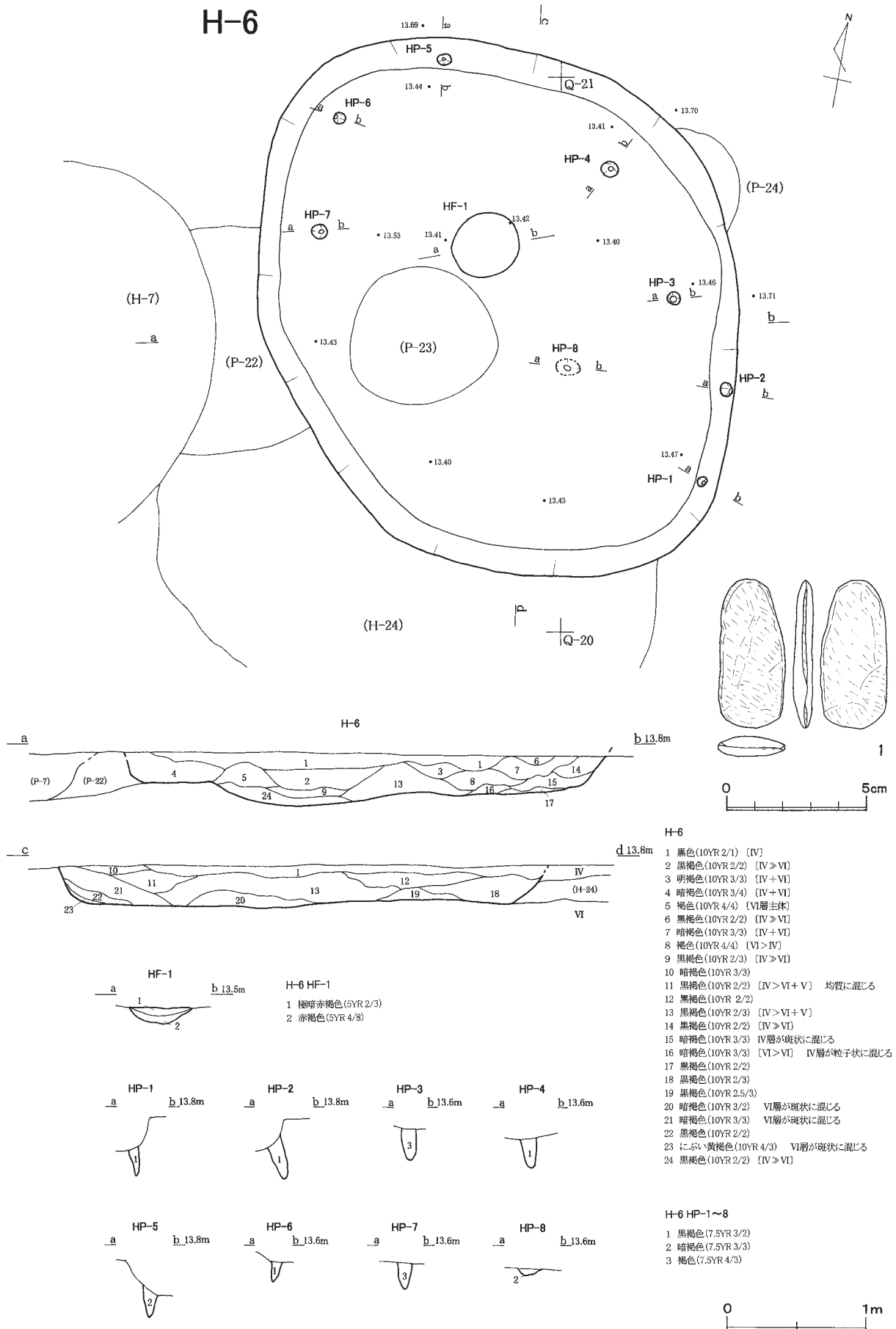
図Ⅲ-17 H-5(2)



図III-18 H-5出土の遺物(1)



図Ⅲ-19 H-5出土の遺物(2)



図III-20 H-6

H-6 [図Ⅲ-20、図版10・68]

位置：P・Q21区

平面形：楕円形

規模：4.30×3.41/3.92×3.00/0.38m

長軸方位：N-46° W

確認・調査：遺跡全体の土層観察用の東西トレンチ（21ライン）で黒色土の落ち込みを検出した。周辺を精査したところ、Ta-c火山灰の分布を確認し、その中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また同焼土出土の炭化材の年代測定を行った（V章6）。

覆土：IV～VI層が混じる土層で、断面観察では東西断面で14層、南北断面で11層に細分できる。上位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）で、中位～下位の2層以下は黒褐色土にロームが混じる土壌が主体であるものの、褐色～暗褐色土がブロック状に堆積しているところも多く見られる。

床面・壁：床は大きな高低差はないが、凹凸がありやや不安定である。壁との境界は明瞭であるが、やや湾曲して立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所（H-6 HF-1）、柱穴状ピット8基（H-6 HP-1～8）を検出した。

〔炉〕H-6 HF-1は、住居跡中央からわずかに北東寄りの位置にある地床炉である。大きさ49×43cmの楕円形で、被熱層はVI層、層厚は12cm。上面は極暗褐色で炭化物を含む焼成面で、下位は明度の高い赤褐色の被熱層である。

〔柱穴〕H-6 HP-1～7は、80～100cm程度の間隔で南東-北-西の壁際付近から検出された。径は10cm前後、深さは20cm前後で先端はやや尖るものが多い。壁面付近にあるHP-2は住居跡中央側に傾いており、深さは24cmである。HP-8は床面中央に近い位置から検出された浅い小ピットである。遺物出土状況：出土遺物の総数は59点で、土器が1点・石器等が46点・礫が12点である。土器はⅢ群b類～IV群a類で、石器等は彫器・削片がそれぞれ1点・石刃2点、石槍・スクレイパー・石斧がそれぞれ1点、剥片が36点出土している。全体的に散漫な出土状況である。

掲載遺物：1は完形で小型の石斧。やや淡い緑色の扁平な泥岩が素材で、両面ともよく研磨されている。刃部は鋭い。基部は丸みをもつ。

重複・時期：H-24およびP-22・23・24と重複し、いずれも当遺構の方が新しい。時期は住居の形状や床面の状態などから、縄文時代後期初頭～前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式期と考えられる。

H-7 [図Ⅲ-21、図版10]

位置：O・P21区

平面形：おおむね円形

規模：2.94×2.85/2.28×2.07/0.74m

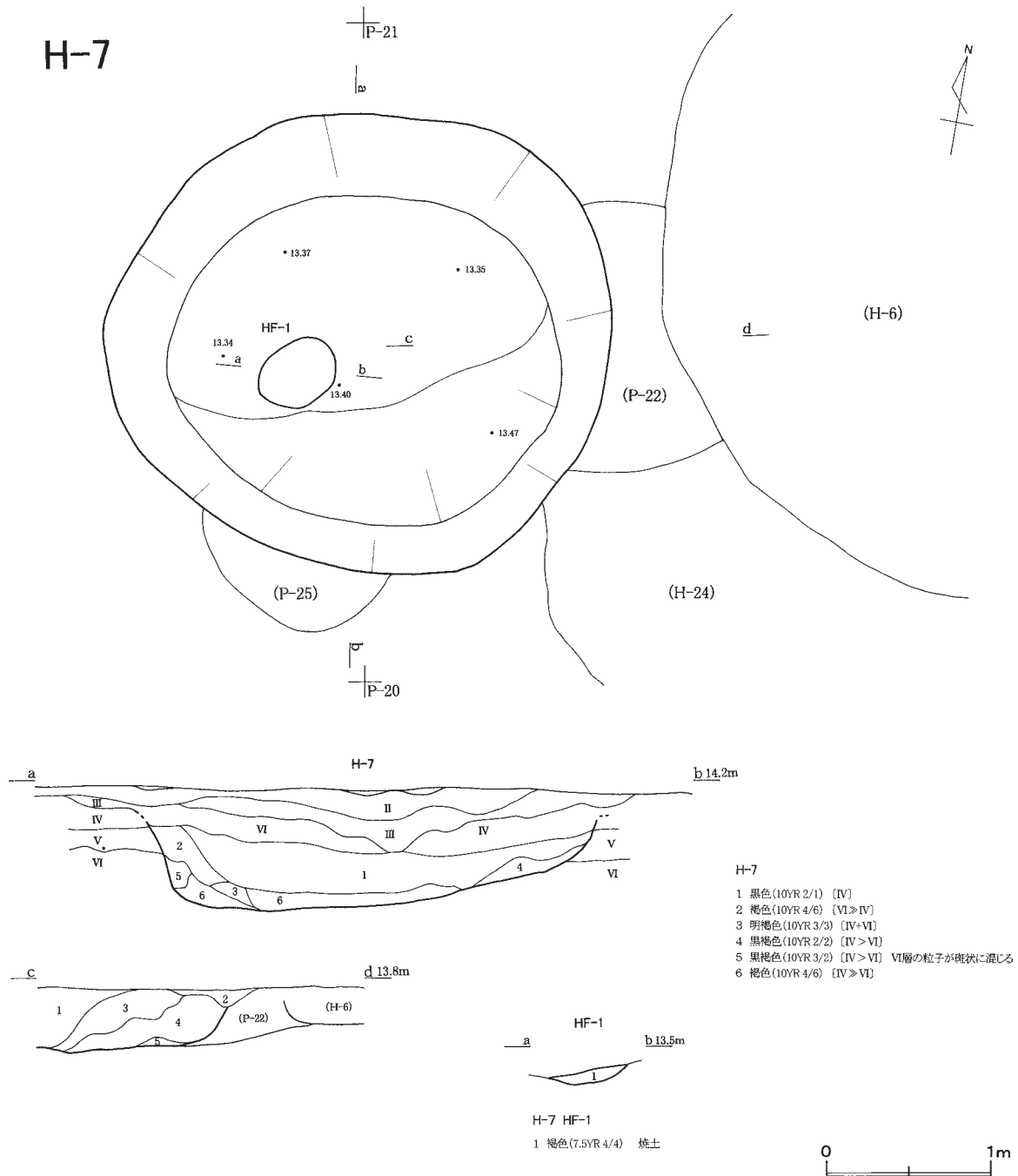
長軸方位：N-72° W

確認・調査：O21区の包含層調査中、Ta-c火山灰の落ち込みを確認した。包含層調査の壁面を利用し、落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。順次掘り下げ、床と壁の立ち上がりを確認した。床面を精査したところ、柱穴は確認されなかった。

床面検出の焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った。

覆土：上位～中位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）で、下位および壁面付近の2層以下は黒褐色土とロームが混じる土壌である。後者の土層は床面付近で10cm程度であるが、壁際付近、特にH-6に近い東側では、褐色～暗褐色土がやや厚く堆積している。

床面・壁：床はやや椀状で、南東側から北西側へ傾斜しており、中央付近に弱い段がある。壁は北西側でやや急に立ち上がり、南西側は緩やかである。



図III-21 H-7

付属遺構：焼土1か所（H-7 HF-1）を検出した。

〔炉〕H-7 HF-1は、住居跡中央からわずかに西寄りの位置にある地床炉である。大きさ51×38 cmの楕円形。被熱層はVI層中で褐色を呈し、層厚は8 cmである。

遺物出土状況：出土遺物の総数は15点で、I群b-4類2点・剥片11点・原石1点などが出土している。

重複・時期：H-24、P-22・25と重複し、いずれも当遺構の方が新しい。時期は、住居の形状や床面の状態、周辺の遺構との関係などから、縄文時代後期初頭～前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式期と考えられる。

（阿部）

H-8 [図Ⅲ-22・23、図版11・69]

位置：P22・23区

平面形：不整長方形

規模：4.14×(2.82)／3.86×(2.30)／0.38m

長軸方位：N-6° E

確認・調査：H-5調査の際、V層上面で黒色土がH-5の壁の外側である西側に広がることが確認された。そのため切り合う遺構があることを想定して黒色土の分布の外側までトレンチを延長し、さらにそれに直交するように土層観察用のベルトを残して調査を開始した。ベルトの東側はH-5と切り合う（H-5が新しい）ため、その調査が終了し次第、覆土掘り下げを行うこととして西側の調査を先行した。南西部では、壁より若干覆土を挟むがほぼ貼り付くように二次加工ある石刃や石刃素材の彫器などの石刃鎌石器群が出土した。

H-5調査終了後、残りの東側の調査に着手したが、既に東西ベルトにおいて床面から6cmほど上位で焼土（HF-1）、さらにその2～3cmほど上位で中茶路式土器片が潰れるように出土していたためその広がりを確認しながら調査を進めた。最終的には焼土（HF-1）面をさらに掘り進んだ段階で床面（VI層）が検出された。床面より上位から南西部で石刃鎌石器群、中央部で中茶路式土器群が出土し、壁の立ち上がりは分かりにくいものであったが、その大きさや形状から住居跡と判断した。

覆土：最下部には広い範囲に厚さ6cm程度不均質な暗褐色土が堆積し、その上に焼土（HF-1）が形成され、さらにその上位に暗褐色土（覆土2）が厚く堆積している。

床面・壁：床面は平坦で、壁はあまり明瞭ではなく、その輪郭も不安定である。

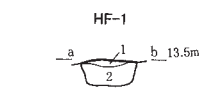
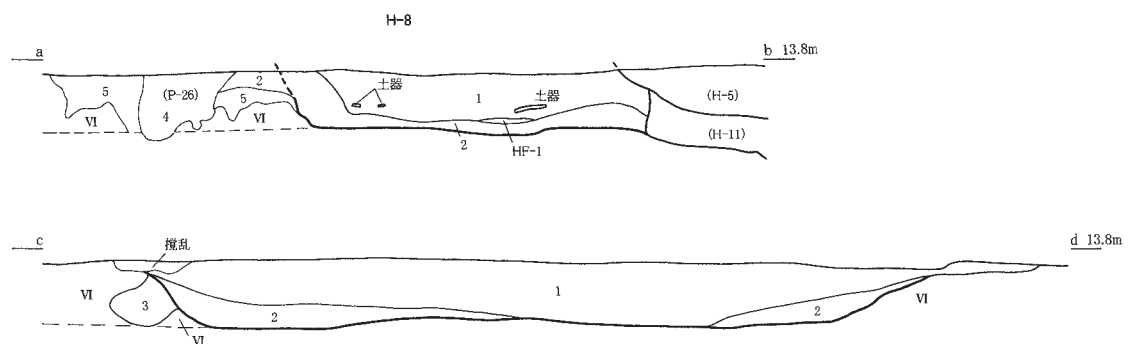
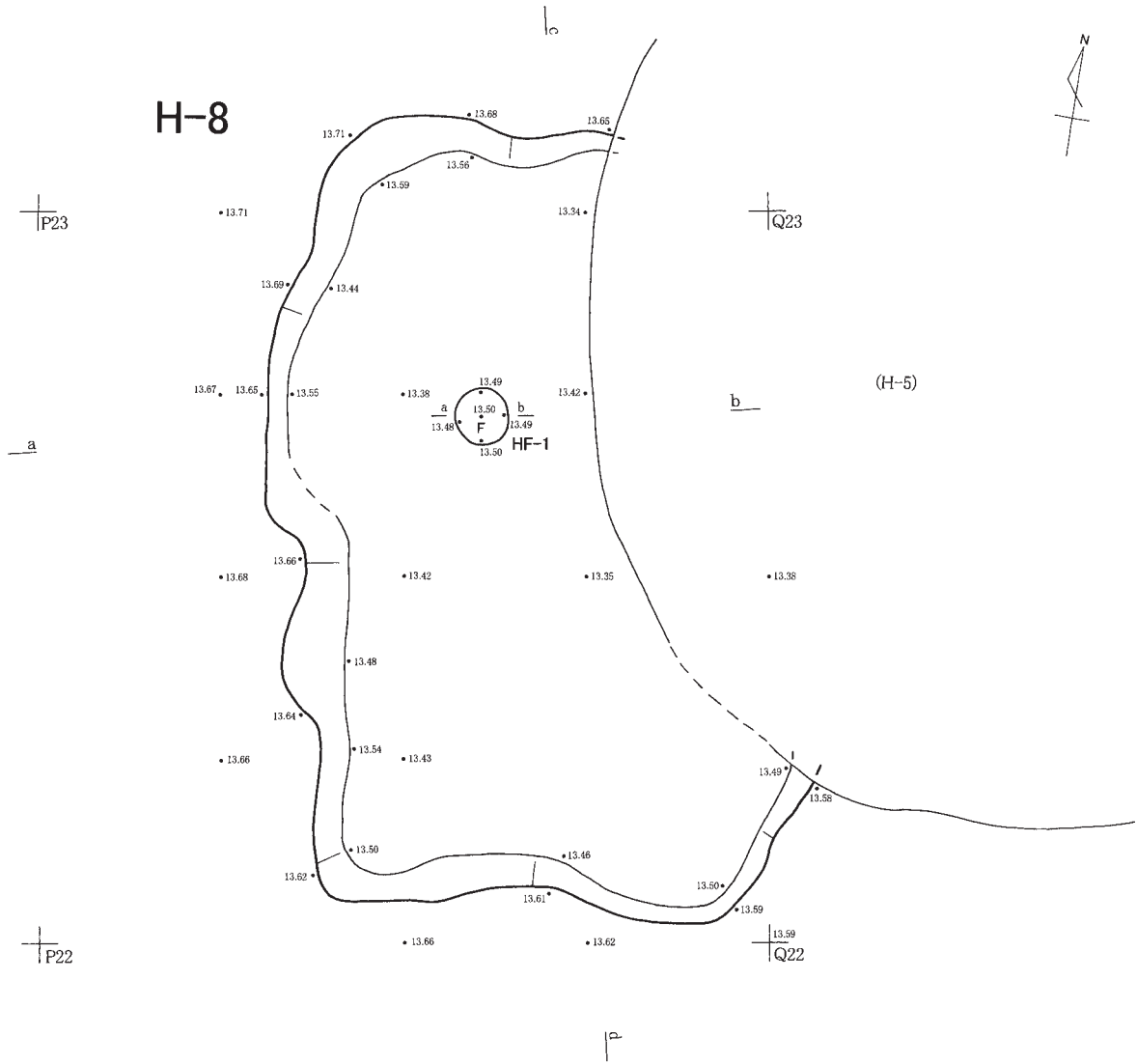
付属遺構：中央に焼土（HF-1）が検出されているが、前述のとおり、床面より上位からの検出である。柱穴は確認されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は751点で、土器等が657点・石器等が94点である。土器等はI群a類4点・I群b-4類651点のほか、ミニチュア土器が1点出土している。石器等は石錐2点・彫器3点・削片2点・二次加工ある石刃8点・石鎌2点・つまみ付きナイフ3点・スクレイパー2点・両面調整石器1点・剥片類71点が出土している。二次加工ある石刃や彫器などの石刃鎌石器群は主に南西部の壁際、覆土2からの出土で、中茶路式土器群（I群b-4類）はほぼ中央部、焼土の上位である覆土1からの出土である。

掲載遺物：1～7は中茶路式。1は口縁部が無文地である。2・5の細貼付帯は、横位のほか縦位や弧線のものが見られる。3・4の細貼付帯の頂部は縄文施文により平坦化している。6は器高30cmを超える比較的大型の深鉢。土器片223点から復元した。緩やかな波状口縁で、胴部はややふくらむ。細貼付帯の間隔は密で、胴上半には縦位にも配される。細貼付帯間に絡条体圧痕が密に充填されている。7は細貼付帯間に幅の狭い縦位の絡条体圧痕が連続する区画帯と、施文されない区画帯がある。8はミニチュア土器。口径は推定4cmほどのやや丸みをもつ平底の小型鉢で、1/4程度が残存する。

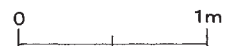
9はスクレイパー。10・11は石錐。12はつまみ付きナイフ。13～15は二次加工ある石刃。10・11・13～15は石刃鎌石器群で、全て縁辺に不規則な微細剥離が連続する。10は尖頭部が作出され、11は折損後、側縁で槌状の剥離が行われ、下端の尖頭部には潰れが見られる。13は上部が折損している。14には打面が残存し、複剥離打面で、作業面と打面の角度は90度に近い。先端部は欠損するが、側面形は非常に直線的である。15は完形で、約14cmの大型の石刃である。先端部には反りがあり、末端には原礫面が残り、剥離された石刃核の高さに対応する。13・15には角礫面が残る。12は頁岩製でI群b-4類の時期に相当すると考えられる。

重複・時期：H-5と重複し、当遺構が古い。HF-1出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果、5,590±40yrBP（IAAA-91746）の年代値が得られている。石刃鎌石器群や中茶路式土器の出土状

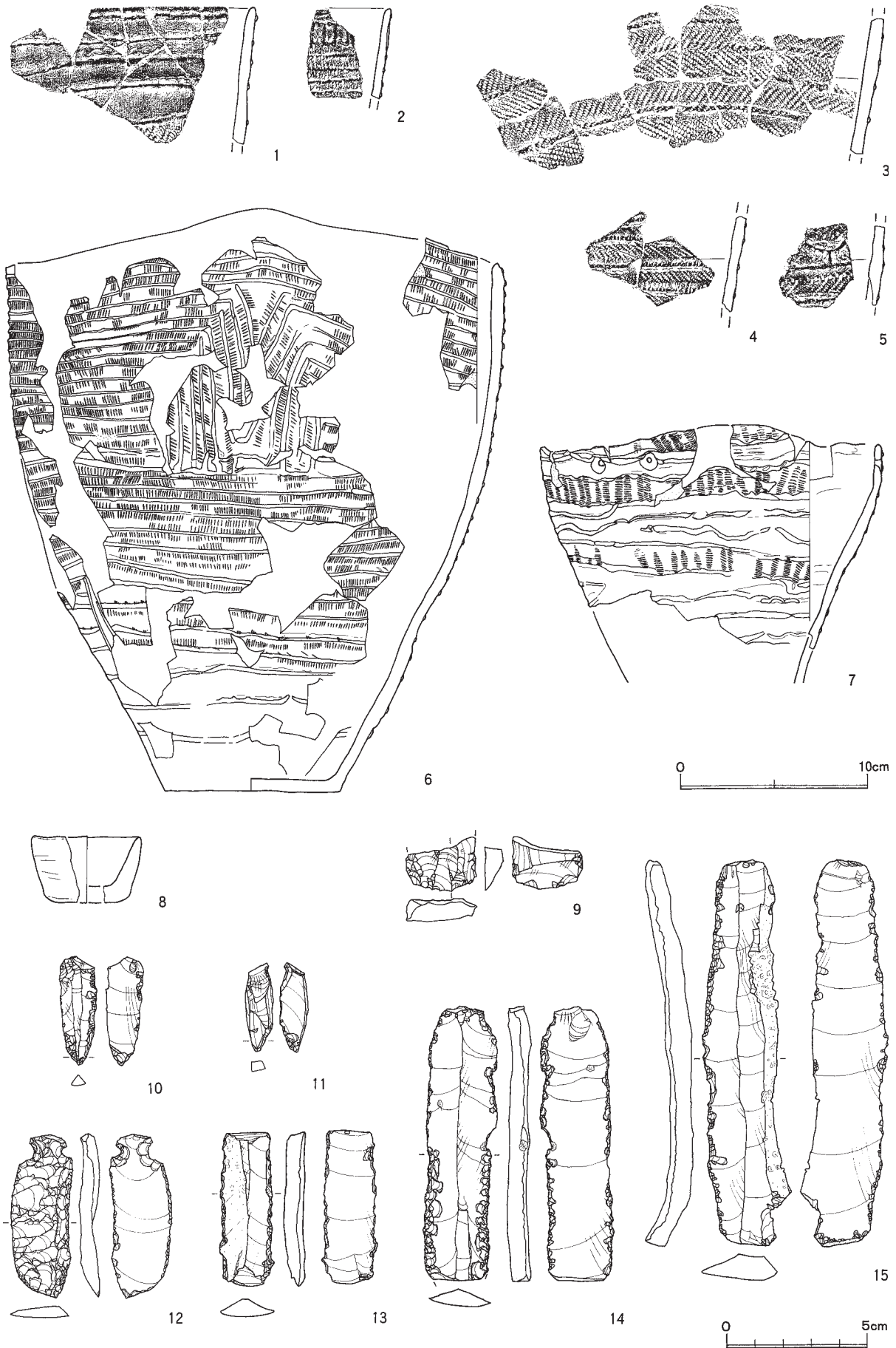


H-8 HF-1
 1 明赤褐色(5YR 5/8) [焼土] 粘性やや弱、しまり強
 2 暗褐色(10YR 3/4)シルト [H-8の2]

- H-8
- 1 暗褐色(10YR 3/3)シルト 粘性中、しまり弱。径1~5mmの白色岩片多量に含む。
 - 2 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性中、しまり中。5とVI層が不均質に混じる。径1mmの岩片含む
 - 3 褐色(10YR 4/6)粘土質シルト 粘性弱、しまり中。5とVI層が混じる。径1~5mmの白色岩片多量に含む。木根攪乱?
 - 4 黒褐色(10YR 3/2)シルト 粘性弱、しまり中。5とVI層が不均質に混じる。径1~5mmの白色岩片混じる。(P-26)
 - 5 褐色(10YR 4/6)粘土質シルト 粘性弱、しまり中。VI層に1が少量混じる。径1mmの白色岩片少量含む。



図III-22 H-8



図Ⅲ-23 H-8出土の遺物

況から判断して縄文時代早期中葉～後葉とみられる。

(鈴木)

H-9 [図Ⅲ-24～26、図版11・70]

位置：M21・22区

平面形：おおむね楕円形

規模：4.24×2.98/3.58×2.50/0.55m

長軸方位：N-19° W

確認・調査：遺跡全体の土層観察用の東西トレンチ（21ライン）で黒色土の落ち込みを検出した。周辺を掘り下げ、Ta-c火山灰の範囲を確認した。その中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。その際、下位に遺構が存在することも確認された（P-15）。順次掘り下げ、床面および壁面を検出した。

覆土（掘上土）：床面や壁に沿って皿状に堆積している土層が多い。上位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）で、中位および壁面付近の2～5・7層はロームと黒色土が混じる土壌である。床面付近5cm程度は黒色土の薄層である。中位にはロームを主体とした層が厚く堆積している。土葺き屋根の一部や他の遺構の掘り上げ土などが想定される。

なお住居跡の東～南の外縁部には、V層にローム粒や黒色土が混入する不均質な層が広がる。掘上土が想定されたが、掘り下げた結果底面が凹凸であり、風倒木などの攪乱部と判断した。

床面・壁：床面はおおむね平坦であるが、南側がやや高く、北側が低い。壁の立ち上がりは、北側がやや急で、そのほかは緩やかである。

付属遺構：焼土1か所（H-9HF-1）を検出した。

〔炉〕H-9HF-1は、住居跡中央から南寄りの位置にある地床炉である。大きさ32×26cmの不整楕円形。被熱層はVI層中でにぶい赤褐色を呈し、層厚は2cm程である。

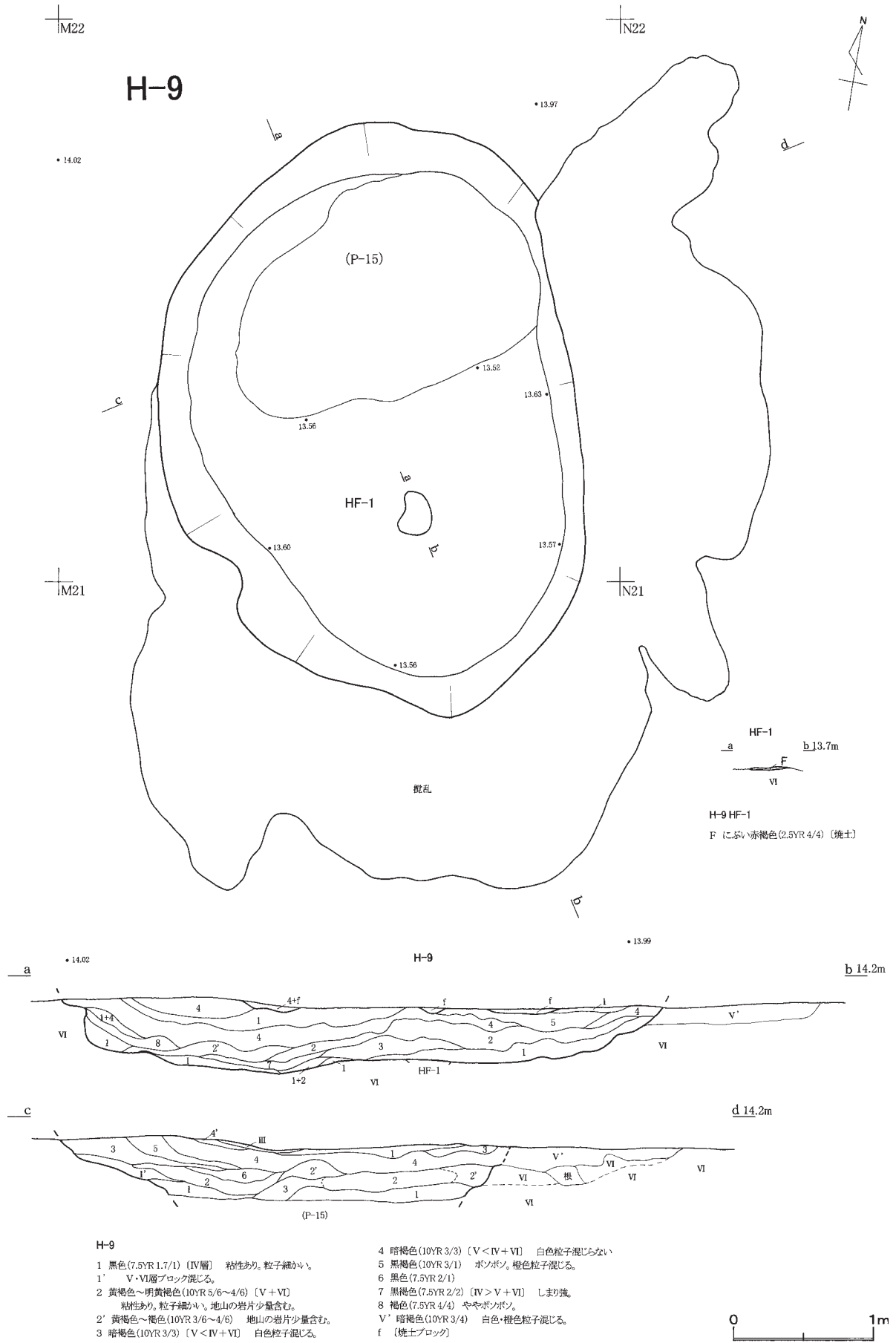
遺物出土状況：覆土上位～下位にかけて遺物が出土している。微細な剥片が多い。床面からはⅢ群b類～Ⅳ群a類とみられる小片が出土している。

出土遺物の総数は586点で、土器が137点・石器等が442点・礫が7点である。土器はⅠ群a類49点・Ⅰ群b-4類22点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類27点（うちⅣ群a類3点）・Ⅳ群b類9点で、石器等は搔器2点・彫器3点・削器1点・削片3点・石刃2点・石鏃2点・石槍2点・両面調整石器1点・スクレイパー4点・石核1点・石斧3点・砥石片43点・台石片1点・剥片類374点が出土している。

掲載遺物：1は鯨潤式の小型深鉢。周辺の包含層出土片と接合した。口縁部は、刻み列で区画された無文帯である。内面口唇下にやや深い1条の沈線がめぐる。

2～5は石刃鏃石器群。2a・2bはともに彫器で、折れ面接合した（2）。2aは左側縁、2bは右側縁に彫刀面がある。3は彫器。右側縁に斜方向に彫刀面がある。4は搔器。湾曲する石刃の下端部に細かい調整が連続する。5は削器。一部原石面が残る石刃が素材で、下位にえぐりがある。6・7は石鏃。かえしは弱く、基部が丸みを帯びた形状である。8は両面調整石器。9・10はスクレイパー。10は原石面の残る扁平な剥片を素材としたもの。周縁、特に下端部に細かい剥離痕が連続する。11は石核。転礫に剥離痕が多数みられる。12は石斧。基部を欠き、刃部側も折損している。やや厚みのある短冊形で、全面研磨されているとみられる。刃部はすべて潰打されており、使用によるものと思われる。13は砥石。湾曲する長大な角柱状の砂岩製で、風化により脆い。14は台石とした。

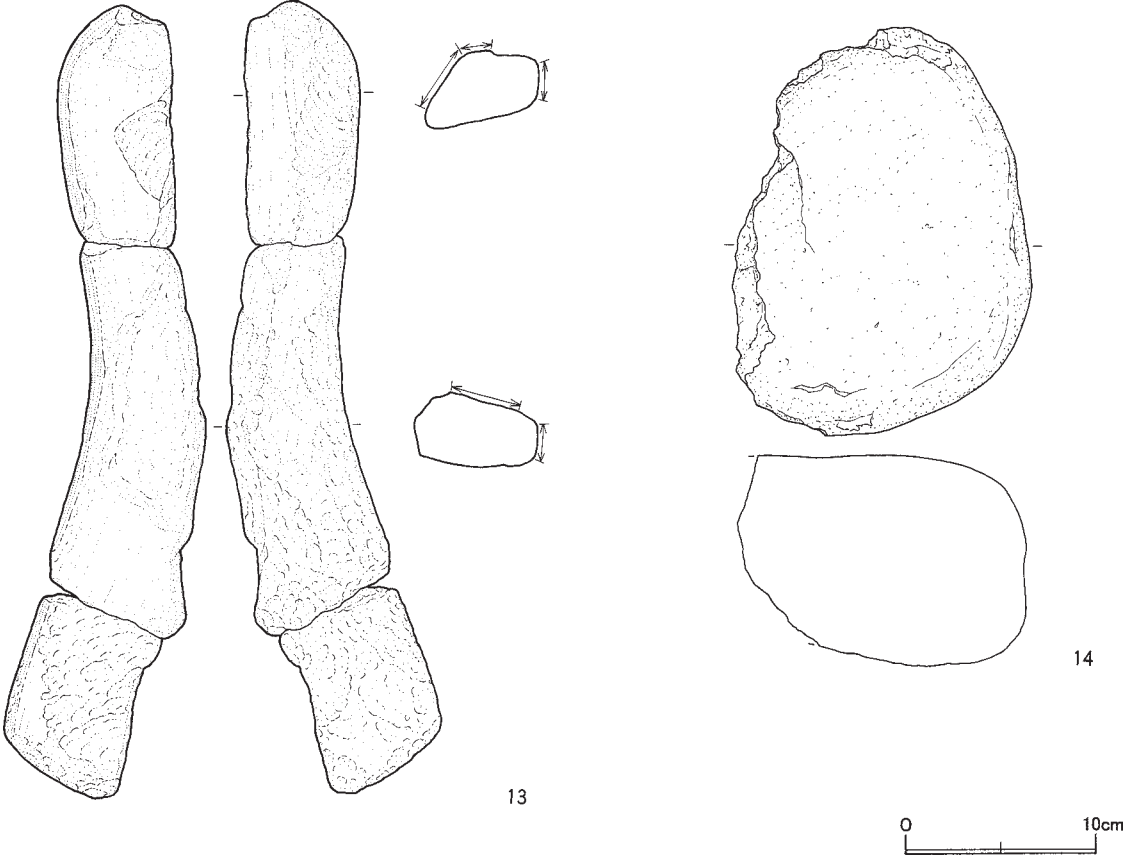
時期：竪穴住居跡の形状などから、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と思われる。



図Ⅲ-24 H-9



図III-25 H-9出土の遺物(1)



図Ⅲ-26 H-9出土の遺物(2)

H-10 [図Ⅲ-27~29、図版12・70・71]

位置：L22・23・24、M23区

平面形：楕円形

規模：5.27×4.66/4.64×4.30/0.52m

長軸方位：N-66° W

確認・調査：包含層調査中、黒色土の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを南北方向に設定し、掘り下げた。床面と壁の立ち上がりを検出し、竪穴住居跡とした。

床面検出の焼土から土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また同遺構出土の炭化材の年代測定を行った（Ⅴ章6）。

覆土：上位の1層は自然堆積の黒色土（Ⅳ層）で、中位～下位の2～8層はロームと黒色土が混じる土壌である。ロームが主体の不均質で締まりのない土層が厚く堆積する。埋土または土葺き屋根の一部などが想定される。

床面・壁：床面はやや凹凸があるもののおおむね平坦で、壁面との境界は明瞭である。

付属遺構：焼土1か所（H-10HF-1）を検出した。

〔炉〕H-10HF-1は、住居跡のほぼ中央に位置する地床炉である。大きさ32×26cmの楕円形。被熱層はⅥ層中で明赤褐色を呈し、層厚は4cm程である。また周囲に炭化物を含む暗赤褐色の土層がある。

遺物出土状況：床面のHF-1付近から、北筒Ⅱ式土器の個体がつぶれた状態で出土した。

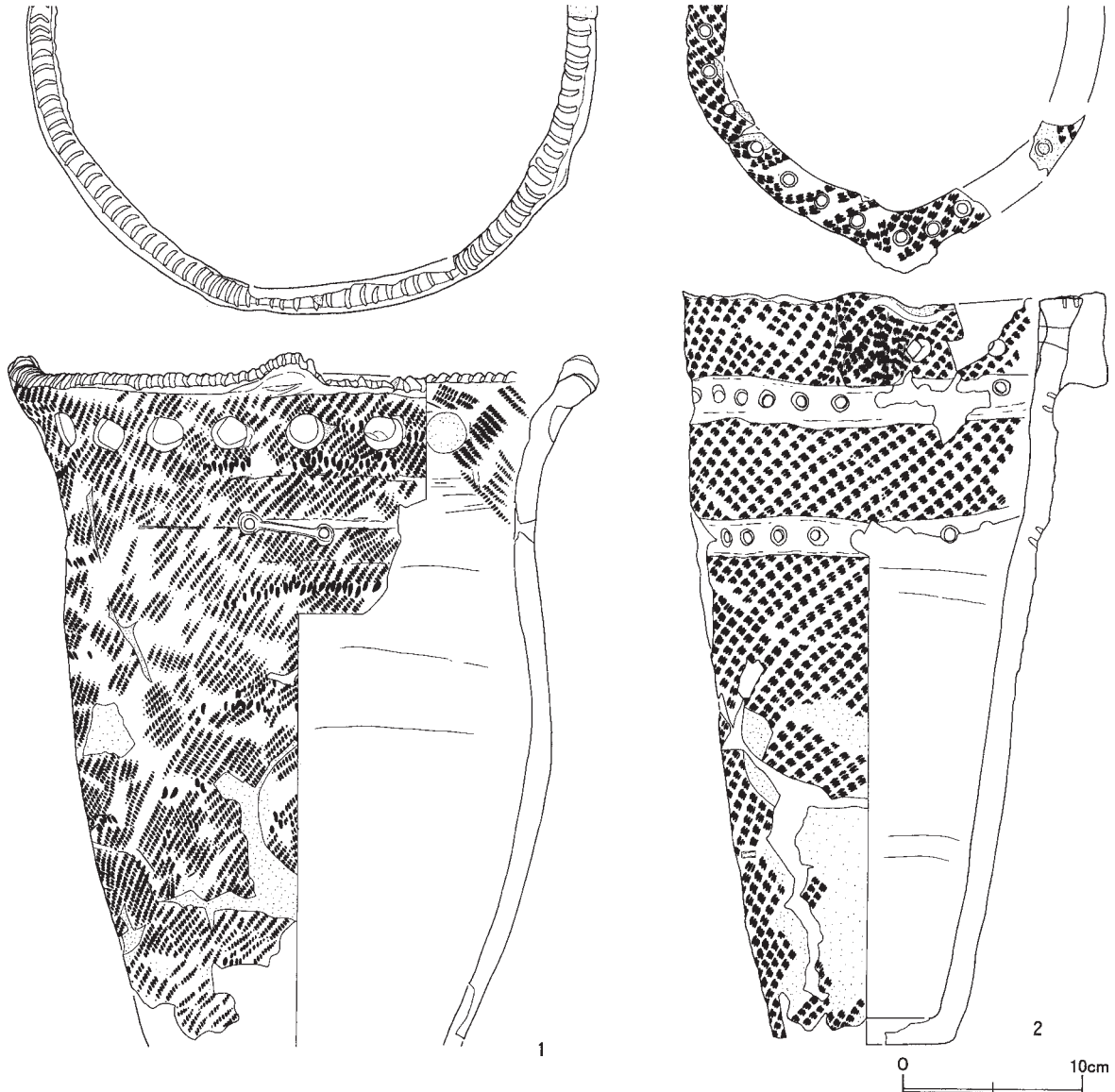
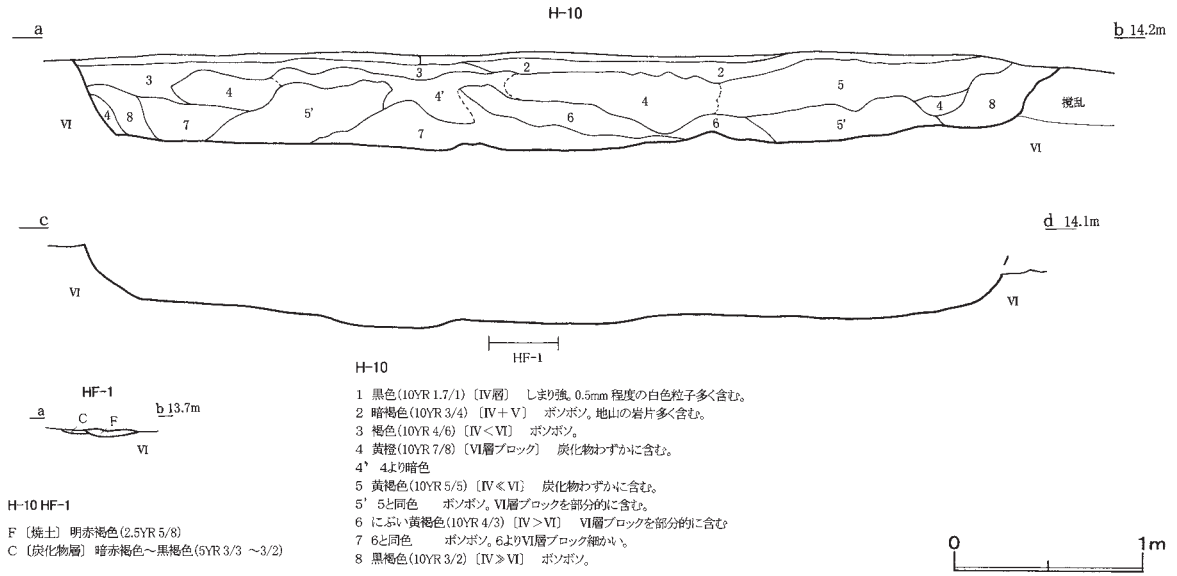
出土遺物の総数は526点で、土器が285点・石器等が241点である。土器はⅠ群a類3点・Ⅰ群b-1類6点・Ⅰ群b-4類17点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類162点・Ⅳ群b類96点などで、石器等は彫器1点・石刃等1点・石鏃3点・スクレイパー1点・両面調整石器2点・剥片類233点が出土している。

掲載遺物：1は北筒Ⅱ式。床面付近から出土した。口径は30cmをこえる。胴部が膨らみ、口縁部は外反する。平縁で5単位の弱い山形突起がある。口唇上に三日月形の刻みが連続する。口縁部に径2cm程の浅い円形刺突がめぐる。北筒Ⅱ式の古い段階に属するものと思われる。2は北筒Ⅲ式。円筒形の深鉢で、器高は40cmをこえる。平縁で、口唇上にも地文の複節縄文が施文され、小型の円形刺突列がめぐる。口縁部に縦位の肥厚帯、その下に浅い凹帯上が2列配され、小型の管状刺突列がめぐる。3は中茶路式。4～7は鯨濶式。4は口縁部には刻み列で区画された無文帯が設けられ、胴部には平行沈線にS字状の沈線が縦断する。5は胴部のくびれが強い深鉢。くびれ部の刻みはやや間隔があいている。6は波状口縁の深鉢の波頂部。突起の左右口唇上にも小型の突起が設けられている。やや丸みをもつ切出形口唇である。7はくびれ部に刻みがみられ、胴部の凸面帯とみられる。8は縄文のみが施文された深鉢。角形口唇で、内面調整はていねいである。エリモB式～堂林式のものと思われる。

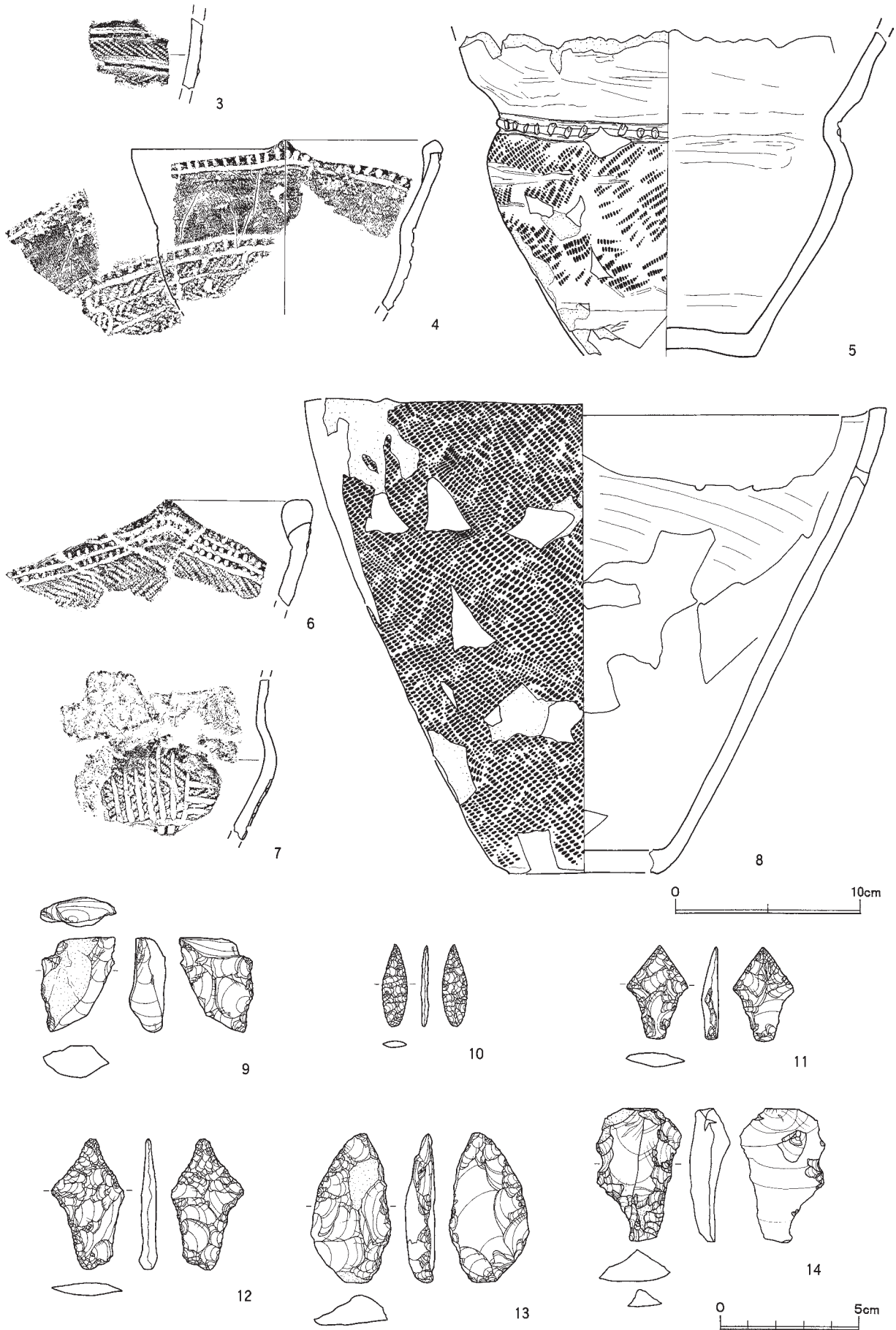
9は彫器。斜方向に彫刀面がみられる。10～12は石鏃。10は小型柳葉形。11・12は菱形に近い。13は両面調整石器。柳葉形で、背面に原石面が残る。14は不定形なスクレイパー。

時期：床面出土遺物などから、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期とみられる。

（阿部）



図III-28 H-10(2)・H-10出土の遺物(1)



図Ⅲ-29 H-10出土の遺物(2)

H-11 [図III-30・31、図版13・72]

位置：P23・24、Q23・24区

平面形：円形

規模：(3.04)×3.90/(2.84)×3.60/0.20m

長軸方位：N-15° E

確認・調査：H-5のトレンチ調査中、その下部にほぼ同心円状に一回り小型の住居跡があることが判明し、H-5の調査終了後、調査を行った。H-5同様、北側を調査範囲のクリアランスとして残したため調査できたのは全体の3分の2程度であった。本来の遺構上部はH-5に削平されたものと思われる。

覆土：主な覆土は一枚(覆土7)で20cm程度の厚さである。V層とVI層が混じったもので、その下位(主に遺構中央部)から中位(壁際)にかけて屋根材と見られる大型の炭化物を含む層が確認された。H-4・5と異なり、焼土や床面からの小型土器の出土はなかったが、両住居跡と同様に焼失住居の可能性はある。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構：床面中央に焼土1か所(HF-1)、南西部に土坑1基(HP-1)、西部に土坑1基(HP-2)、焼土西側に柱穴1か所(HP-3)、東～南側の壁際に柱穴6か所(HP-4～9)が検出された。

HP-1は0.9×1.0mの方形の浅い落ち込みで不均質な黒色土が堆積していた。HP-2は壁を挟るように検出され、底面には礫や土器が出土した。土器がI群b-4類で、他の同時期の遺構の特徴(不整形)と類似することから住居に伴うものではなく、I群b-4類の時期に構築されていた可能性が高い。

柱穴は、HP-3は直径14cm、深さ30cmでしっかりしたものであるが、壁際のもの(HP-4～9)は直径10cm以下、深さ10cm以下の細いものである。

遺物出土状況：出土遺物の総数は1,374点で、土器が74点・石器等が1,300点である。土器はI群a類2点・I群b-1類1点・I群b-4類64点・IV群b類5点などで、石器等は削片1点・石槍2点・スクレイパー4点・石斧1点・すり石1点・台石片等17点・剥片類1,274点が出土している。

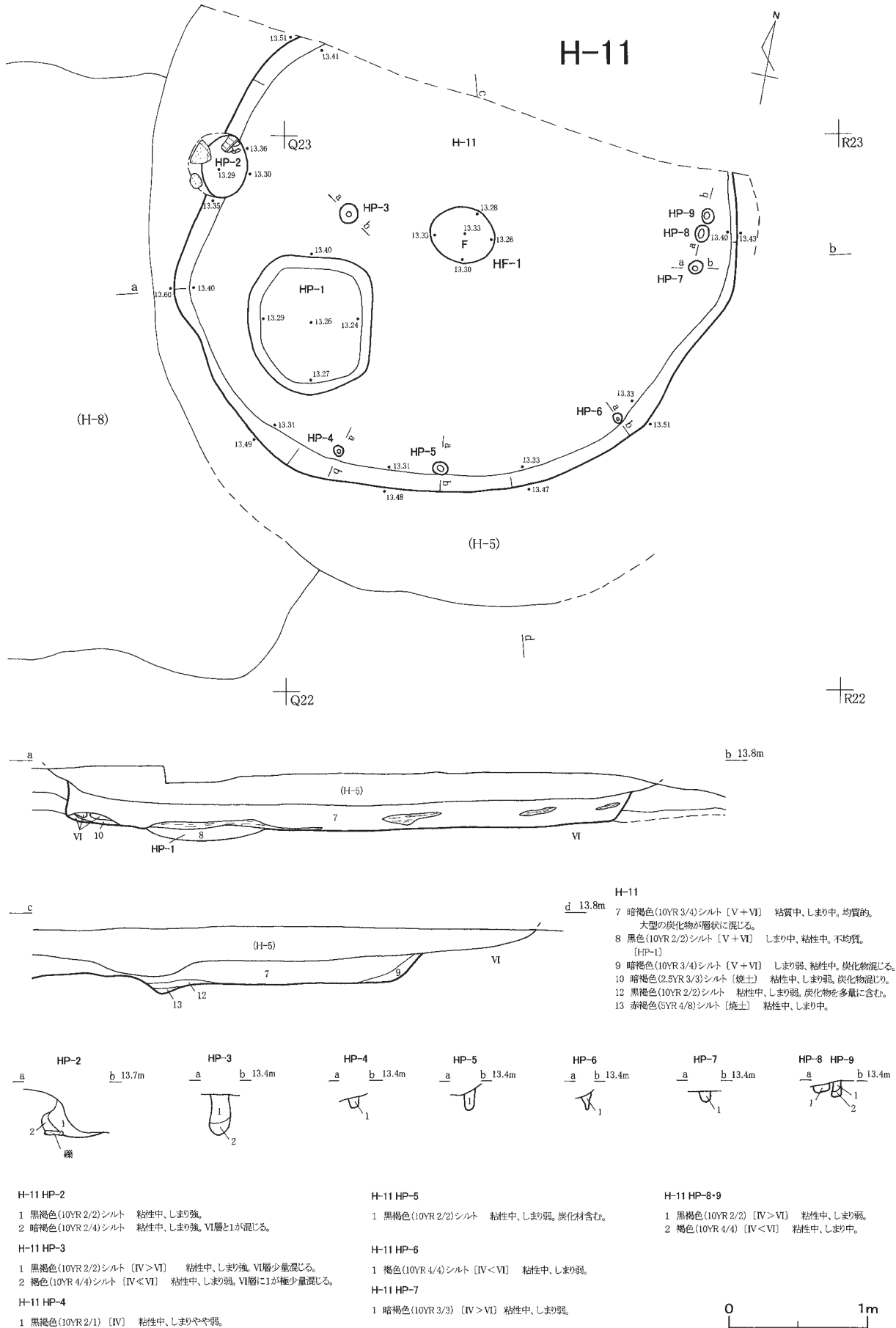
I群b-4類はその多くが住居跡に先行すると思われるHP-2出土である。本住居跡は鯨潤式期と考えられるがH-4・5と異なり、床面からの小型土器の出土は見られなかった。覆土中の炭化材5点(V章4、C116～C120)について樹種同定を行った結果、4点がコナラ属コナラ節、1点がトネリコ属シオジ節と判定された。また、復元直径は1～2cmと細いもので、年輪幅も狭い。コナラ属コナラ節に偏る傾向は、時期は異なるがH-3に類似し、住居の構造材としての傾向を示す可能性がある。

掲載遺物：1・2は中茶路式。2は極めて細い貼付帯が2本単位で施されている。横位平行および波状で、縦位との組み合わせではしご状の文様を構成したものがある。

3はスクレイパーで、小型の転礫を利用した石核から剥離された剥片を素材としている。4は石斧。完形で全面研磨されている。短冊形を呈し、刃部は鋭利で、基部は丸みをもつ面が作り出されている。5はすり石。扁平な楕円体の礫の長軸側縁にすり面がある。

重複・時期：H-5と重複し、当遺構が古い。床面直上出土炭化物の放射性炭素年代測定の結果、3,480±30yrBP (IAAA-91748)の年代値が得られている。覆土出土遺物、覆土の堆積状況や住居の形態を勘案して、縄文時代後期中葉の鯨潤式期と考えられる。

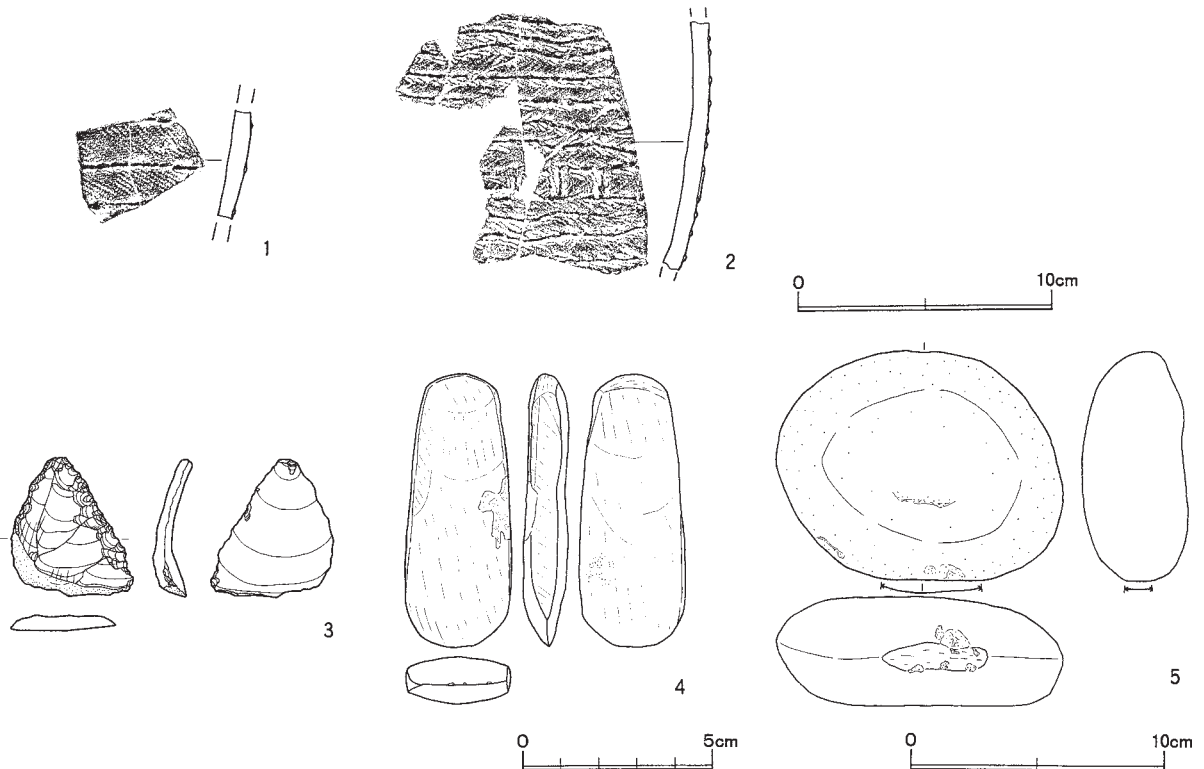
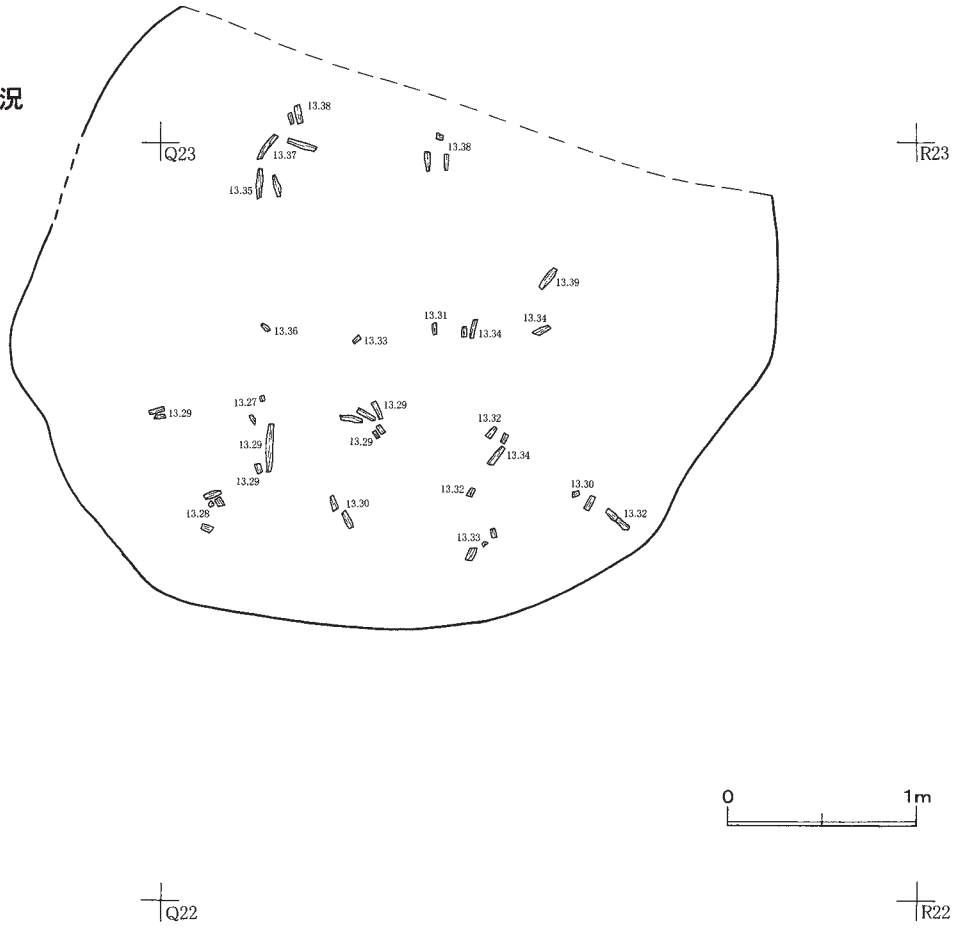
(鈴木)



図III-30 H-11(1)

H-11

炭化材出土状況



図Ⅲ-31 H-11(2)・H-11出土の遺物

H-12〔図Ⅲ-32~39、図版14~16・72・73、口絵7・12・13〕

位置：N17・18・19、O17・18・19、P17・18・19区 平面形：楕円形

規模：8.86×7.60/8.25×7.16/0.95m 長軸方位：N-7° E

確認・調査：平成19年度の25%調査で遺構覆土の一部とみられる黒色土を検出し、平成21年度に調査を行った。周辺のIV層上面を精査し、IV層とは異なる黒色土の範囲を把握した。断面観察用のベルトは長軸1本・短軸2本で「キ」字状に設定し、それに沿ってトレンチ調査を行った。床面および壁の立ち上がりを検出した。その後遺構全体を順次掘り下げた。途中、厚く堆積するTa-c上面を検出した。Ta-cは遺構の周縁部を除く範囲で検出され、色調は均質だが、かなりの凹凸が観察された。覆土を掘り下げたところ、ブロック状の焼土が検出され、炭化材が出土した。細かな検出作業を行い実測し、一部サンプルを採取した後すべて取り上げた。床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

床面および覆土中で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また床面の焼土および住居跡覆土出土の炭化材の年代測定を行った（Ⅴ章6）。炭化材については、6点のサンプルの樹種同定を委託した。比較的太い材はトネリコ属、そのほかはコナラ属コナラ節・ノリウツギが同定された（Ⅴ章3）。

覆土（掘上土）：覆土は自然堆積を含めると最大80cmに達する。1~4層は自然堆積層で、5~8層は黒色土とロームが混じる流入土である。

1はKo-c₂?とみられる火山灰を多量含む約10cmの堆積層である。2・3・4層は包含層のⅡ・Ⅲ・Ⅳ層で、それぞれ最大25cm・30cm・20cmである。住居跡中央部で樽前c火山灰が厚く堆積する。5・6層は黄色土混じりの黒褐色土層で、壁際付近では色調のやや異なる薄層やブロック状の土壌が堆積する。炭化材やブロック状の焼土を含む。7・8層は壁際のいわゆる三角堆積である。

竪穴住居跡の南西外縁に、不均質な暗褐色の薄層が広がっている。幅は4~7mである。掘上土または竪穴住居跡から流出した土壌と考えられる。

床面・壁：床面は全体的には平坦であるが、中央部の4×3mほどの範囲は凹凸が目立つ。当初は出入口部同様、当時から掘り残した部分と考えていた。しかし他の遺構の状況などを含め検討した結果、この範囲は自然堆積層を除く覆土が薄い部分で、凍上現象などの地形変化があったと推測される。

壁の立ち上がりは急で、垂直に近い部分もある。東部は崖面のため不明瞭な箇所がある。

東部にローム層の張り出し部があり、出入口と推定した。念のため当遺構の調査終了後に半截したところ、プライマリーなVI層が現れ、当時から掘り残した部分であることを確認した。

付属遺構：焼土1か所（H-12HF-1）、土坑2基（H-12HP-4・5）柱穴状小ピット12基（H-12HP-1~3・6~14、HP-9は欠番）を検出した。

〔炉〕H-12HF-1は、住居跡中央部よりわずかに東寄りにある地床炉である。大きさ85×70cmの楕円形で、被熱層はIV層、被熱層のみの層厚は4cmであり、その上に黒褐色土が堆積する。上面は炭化材としまりの弱いブロック状の焼土が堆積する。焼成面は掘り込んで形成しており、明赤褐色を呈し強く被熱している。

〔土坑〕H-12HP-4・5は、住居跡中央部にある浅い土坑。前述の地形変化により生じた可能性もある。

〔柱穴〕H-12HP-1・2・3・10は支柱穴。竪穴住居跡中央部に位置し、柱穴間距離は南北3.5m、東西2.2m（北辺）・2.8m（南辺）である。HP-1は径15cmの柱部分の痕跡があり、周縁を黄褐色で埋め戻している。HP-10も周縁の埋戻し土が住居跡床面と同様の色調・堅密度を呈し、発見に時間がかかった。HP-2・3は住居跡内側にわずかに傾いている。HP-6・7・8は壁際の補助的な柱

穴。北から南へ50°前後傾いている。HP-11~14は竪穴外で検出した柱穴。住居跡外縁から1~1.5m離れている。上屋構造を支える補助的な柱穴である可能性がある。

遺物出土状況：壁際から四脚付浅鉢土器、つぶれた状態の個体土器、漆塗りの櫛などが出土した。また覆土上位~下位から遺物が多数出土した。床面出土遺物は、上記以外ではスクレイパー2点など数少ない。

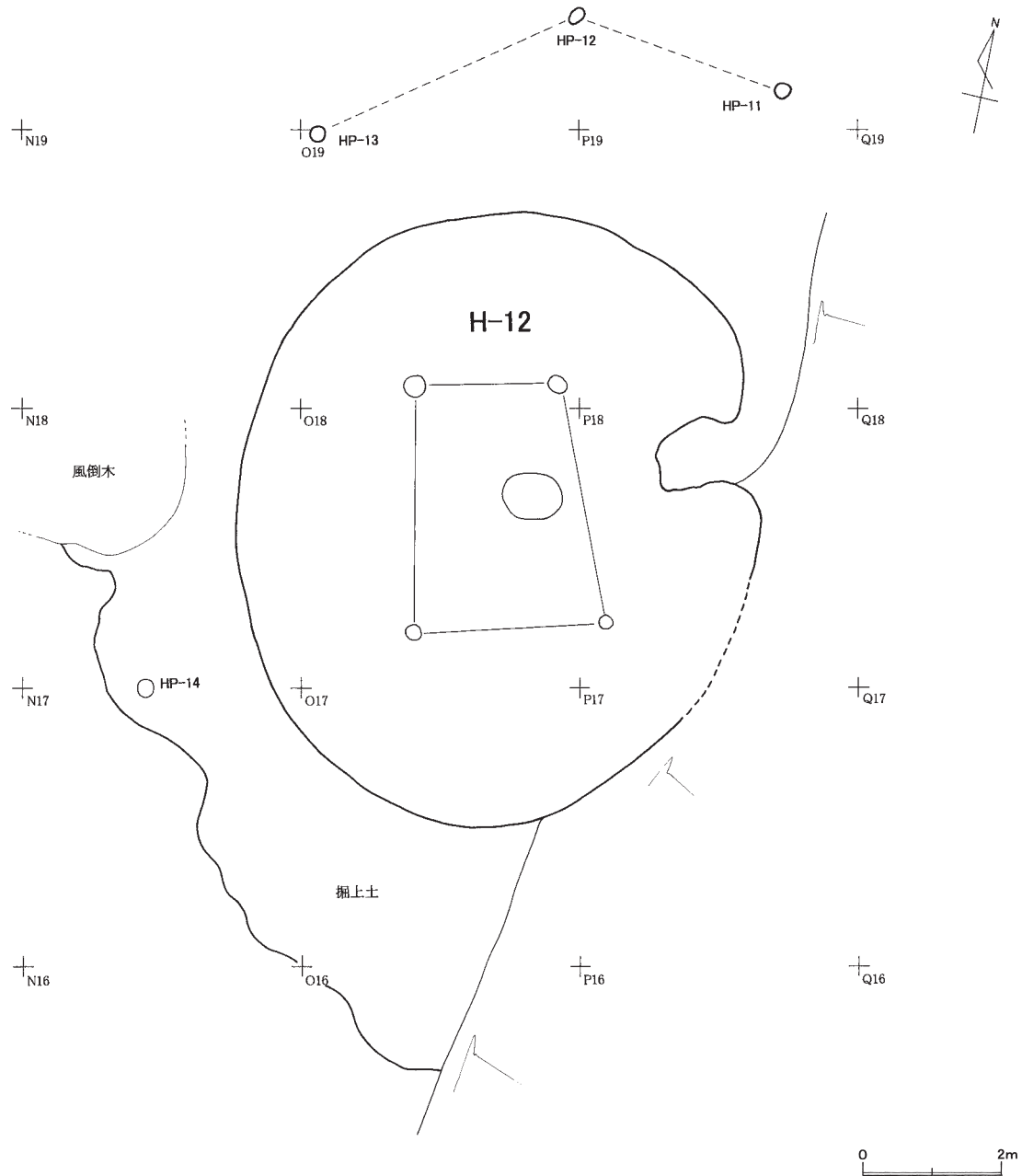
出土遺物の総数は1,609点で、土器が1,007点・石器等が579点・礫が23点である。土器はI群b-1類66点・I群b-2類2点・I群b-4類428点・Ⅲ群b類~Ⅳ群a類44点（うちⅣ群a類15点）・Ⅳ群b類61点・Ⅳ群c類122点・Ⅴ群c類225点などが出土しており、後期~晩期が主体である。石器等は削器3点・削片2点・石刃2点・石鏃8点・石槍2点・石錐2点・つまみ付きナイフ3点・スクレイパー12点・両面調整石器22点・石核2点・石斧2点・砥石1点・たたき石3点・剥片類515点が出土している。

※炭化材 住居跡東部の出入口付近を中心に、炭化材が多数出土した。壁際から住居中央部に向かって傾斜して分布する。また北西部・北東部・南部からもわずかながら出土している。

径2~3cmの枝状の材が最も多く、径5cm程のやや太い材も目立つ。幅5~10cmで厚さ1cm程の板状の材も見うけられる。

掲載遺物：1は四脚付浅鉢土器。鯨濶式。脚を除いた浅鉢部分の大きさは、外形で口縁部が12.6×9.8cm、底面9.2×6.6cm、内法で口縁部10.7×8.0cm、底面8.9×6.4cm、深さ2.7cmを測る。脚はそれぞれ径約1.5cm、高さ約2cmで、土器全体の高さは6.5cmである。口縁は平縁だが、四辺それぞれの中央部を5mm程度下げ、くぼみを設けている。口唇はやや内傾する。底面は平坦で、斜方向に立ち上がる。脚は棒状の粘土紐を浅鉢底面に貼り付けたもので、粘土を引き延ばして底面と接合したことが観察される。下端は丸みを帯びる。脚はやや傾斜しているものが多く、平坦な場所に置いて不安定である。また浅鉢部分もわずかに湾曲している。いずれも製作時の乾燥による収縮とみられる。文様は外面側面にみられ、口縁部および底部との境界に1列の刻み列が設けられ、間を羽状縄文で充填している。表面に炭化材由来と考えられる黒色物質が薄く付着している部分が器面の各所に斑状にみられる。

2は東釧路Ⅱ式。同じ原体で方向を変えて施文している。3は東釧路Ⅲ式。口唇部は指頭押捺が連続する。4~7は中茶路式。4は平底で、胴部は急に立ち上がる。5~7は同一個体と思われる。器壁は薄く、胴部はやや膨らみ、口縁部は直立する。口縁部および胴下部に横位平行・波状の細貼付帯を配し、その間を縦位の細貼付帯で区画している。細貼付帯上に細かい刻みが施されている。8・9は北筒Ⅲ式。8は平縁で、口縁部に縦位の貼付帯があり、小型の円形刺突がめぐる。地文はやや太いLR縄文。9は器壁が薄く、RL縄文が内外に施文され、小型の刺突がある。北筒Ⅳ式に近い。10~15は鯨濶式またはエリモB式。10は下部単孔壺。平底だがやや丸みを持ち、胴部はわずかに膨らむ。平縁で角形口唇である。器壁が薄く、内面調整はややていねいである。胴部に磨消縄文による帯状弧線文を対向させており、文様の結節部の下位に1か所焼成前の貫通孔が設けられている。11は小型深鉢の波頂部。12~14は注口土器の口頸部および胴部。12は細い頸部から口縁部が大きく外反し、頸部との境に刻み列が2段設けられている。堂林式にもみられる形状である。15は出入口付近から出土した。平底で、内面中央部が高まる。16・17は堂林式。平縁で、口縁部がわずかに内湾する深鉢。17は突瘤の瘤が外れ、貫通孔になっている箇所が多くみられる。平底だが、底面がわずかにくぼむ。18は緑ヶ岡式。復元器高が42cmをこえる大型の深鉢。底部は径8cmほどでやや丸みを持ち、胴下部は徐々に膨らみ、胴部中央でわずかにすぼみ、口縁部はほぼ直立する。弱い刺突列で口縁部の文様体を区画し、綾絡文が多段施文されている。内面口縁部に3条の沈線が施され、口唇下に縦位の沈線を間隔をあけ



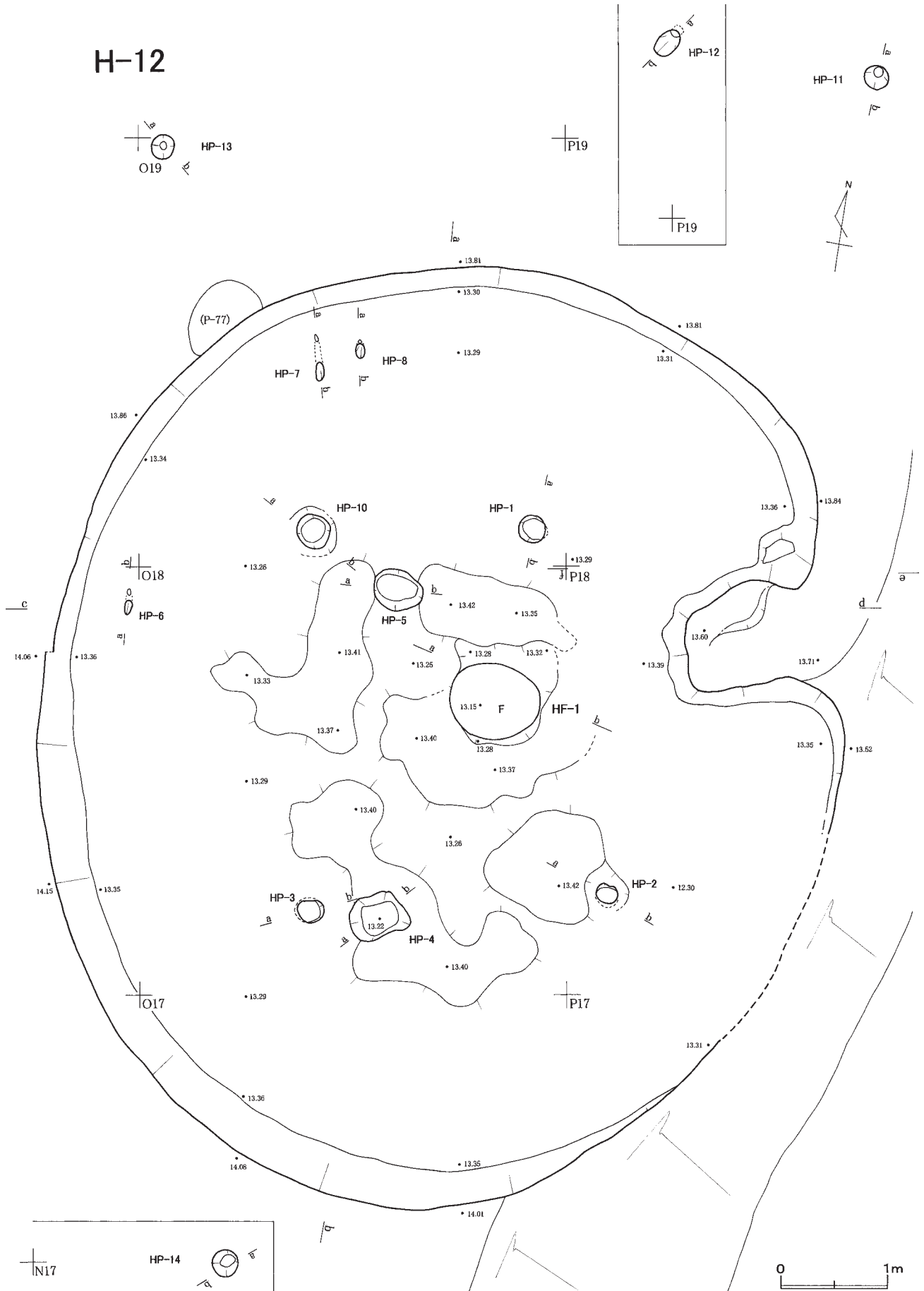
図Ⅲ-32 H-12(1)

て施している。

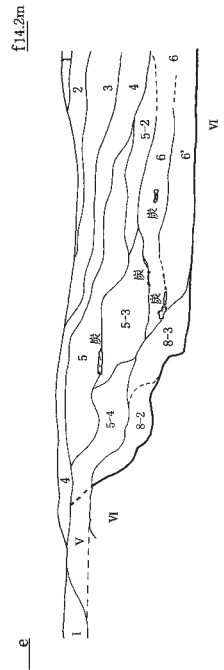
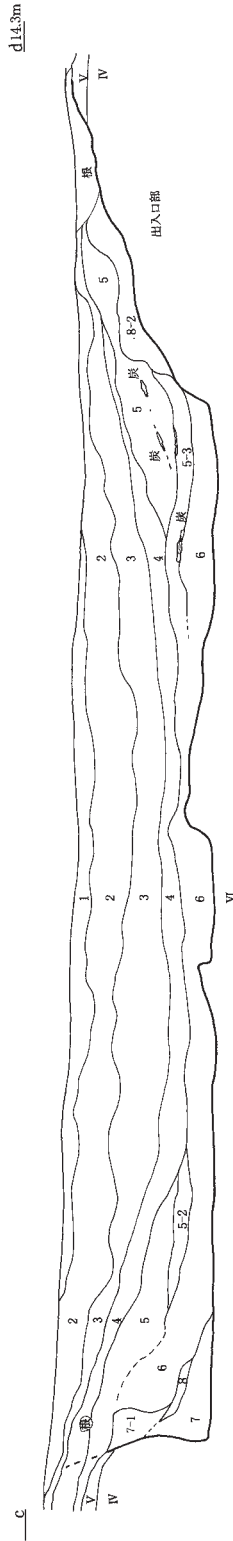
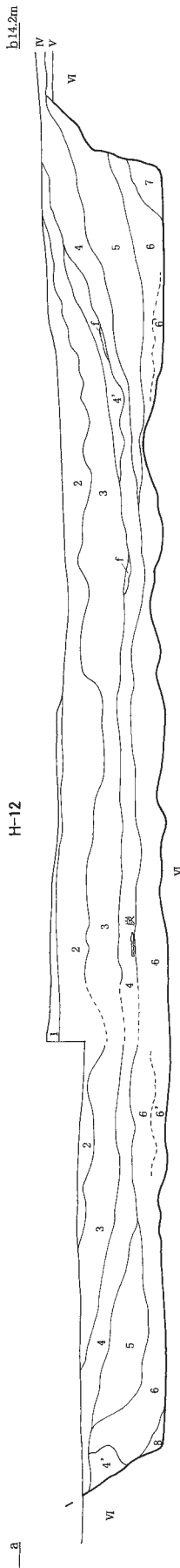
19～22は石鏃。19は柳葉形、20は小型のもの、21は有茎、22は無茎、と各形状がみられる。23は両面調整石器。頂部と下端に細かい調整が施され、両側縁にえぐりが入る。24は石槍。半損品で、基部の可能性はある。25・26は石錐。26は大型石器の未成品を利用したものと思われる。27～30はスクレイパー。27は背面に原石面が残る。曲線の右側縁に細かい調整が施されている。28・30は床面出土。左右平行の大型の剥片が素材である。29は石槍やナイフ類の未成品を利用したものであろうか。31はたたき石。表裏側縁にそれぞれ敲打痕が複数観察され、下端は剥落している。

32は漆塗櫛。結歯式である。歯に相当する部分は残存していない。径約4mmの棒状の櫛11本を細かい繊維で編み込んでいたと観察される。11本のうち両端の2本はさらに上部に突き出ている。全体的に黒褐色を呈しわずかに光沢があり、漆塗りであるとみられた。X線写真撮影・蛍光X線分析などの構

H-12



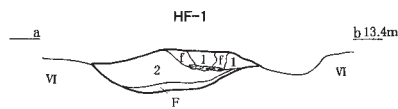
図III-33 H-12(2)



- H-12
- 1 灰黄褐色(10YR 6/2) [K<e2>] しまり強、粒子非常に細い、火山灰の混入は不明。
 - 2 黒褐色(10YR 2/2~2/3) [II層] しまり中、粘性中、均質的、下位はやや明色強い、下部境界不明。
 - 3 におい、黄褐色(10YR 6/2) [III層 Ta~c] しまり弱、均質的、下部境界不明、粒子非常に細い。
 - 4 黒色(10YR 2/1) [IV層] しまりやや弱、粘性中、均質的。
 - 4' 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまりやや強、粘性やや弱、地山の粒子混り、やや不均質。
 - 5 黒褐色(10YR 2/3) [IV+V] しまり強、粘性中、黒色土・ローム粒混り、やや不均質。
 - 5-2 黒褐色(10YR 2/2) 5より暗色、やや均質的、ロームブロック多量を含む。
 - 5-3 暗褐色(10YR 3/4) 5より明色、炭化物多量、ロームブロック多量を含む。
 - 5-4 黒褐色(10YR 4/3) しまりなし、フカフカ、やや不均質。
 - 6 暗褐色~黒褐色(10YR 3/3~2/3) [IV+V+VI] しまりやや強、粘性やや強、黒色土・ローム粒混り、やや不均質。
 - 6' 暗褐色~黒褐色(10YR 3/3~2/3) [IV+V+VI] 不均質、ロームブロック、炭化物多量。
 - 7 黒褐色(10YR 2/2) [IV+VI] しまりなし、粘性やや強、やや不均質、ロームブロック含む。
 - 8 褐色(10YR 4/4) [IV>V] しまりなし、粘性やや強、やや不均質。
 - 8-2 暗褐色(10YR 3/4) [IV>V] 8より暗色で暗褐色度がやや均質的に混じる。
 - 8-3 暗褐色(10YR 3/4) [IV>V] しまりなし、フカフカ。
 - f 明赤褐色(5YR 5/8) しまり強、粘厚やや明色、均質的、ブロック状。



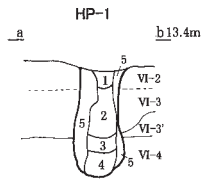
図III-34 H-12(3)



H-12 HF-1

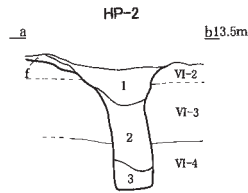
f 明赤褐色(5YR 5/8) 境界明瞭、均質、ブロック状の部分的な堆土。
 F 明赤褐色(5YR 5/8)～赤褐色(5YR 4/6) 境界やや明瞭、漸遷。

- 1 黒褐色(10YR 2/3) (IV + V) しまりやや弱、炭化材多量含む、やや均質的。
- 2 黒褐色(10YR 2/2) (IV + V) しまり中、炭化材少量含む、やや均質的。



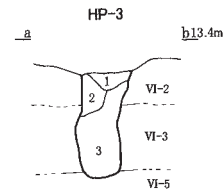
H-12 HP-1

- 1 黒褐色(10YR 2/2) (IV > VI) しまりやや弱、均質。
- 2 暗褐色(10YR 3/3) (V > VI) しまりなし、やや不均質。VI層粒子多く含む。
- 3 黄褐色(10YR 5/6) (VI > V) しまりなし、均質的。
- 4 暗褐色(10YR 3/4) (V > VI) しまりなし、粘性やや強、やや均質。VI層粒子多く含む。
- 5 黄褐色(10YR 5/6) (VI) しまりなし(上部はやや弱)、均質的、やや粗い粒子。
- VI-2 黄褐色(10YR 5/6) しまり中、やや砂質。
- VI-3 明黄褐色(10YR 6/8) しまりやや強。
- VI-3' 暗褐色(5YR 3/6)
- VI-4 明褐色(7.5YR 5/8) しまり強、砂質。



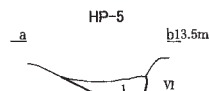
H-12 HP-2

- 1 黒褐色(10YR 2/2) (IV > VI) しまりやや弱、均質。ローム粒少量含む。
- 2 暗褐色(10YR 3/4) (VI > V) しまりなし、フカフカ、やや均質。
- 3 黒褐色(10YR 2/3) (VI + VI) しまりなし、フカフカ。粘性やや強、ローム粒多く含む。
- f 赤褐色(5YR 4/6) 境界明瞭、フカフカした堆土。



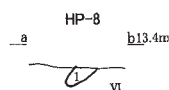
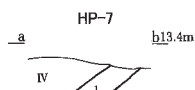
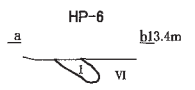
H-12 HP-3

- 1 黒褐色(10YR 2/3) (VI > VI) しまり弱、やや均質。
- 2 黄褐色(10YR 5/6) (VI) しまり弱、均質的。
- 3 褐色(10YR 4/4) (IV + VI) しまりなし、フカフカ、やや均質。
- VI-5 雑混じり



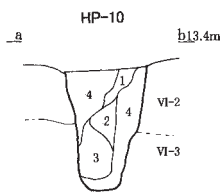
H-12 HP-4・5

- 1 黒褐色(10YR 2/2) (IV > VI) しまり中、やや均質。



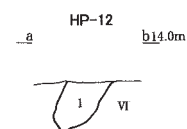
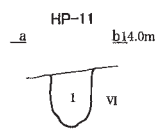
H-12 HP-6~8

- 1 黒色(10YR 2/2) (VI > VI) しまりなし、粘性やや強、ローム粒子やや均質的(を含む)。



H-12 HP-10

- 1 濃い黄褐色(10YR 4/3) (VI < V) しまり中、やや不均質。
- 2 黒褐色(10YR 2/3) (IV > VI) しまりなし、やや不均質。
- 3 暗褐色(10YR 3/4) + 黒褐色(10YR 2/2)の互層 (VI > VI)
- 4 明褐色(10YR 5/6) (VI) しまりやや弱、粘性やや強、やや均質。



H-12 HP-11~14

- 1 黒褐色(10YR 2/2) (IV > VI) しまりやや弱、均質的。

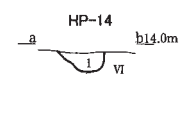
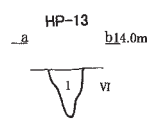
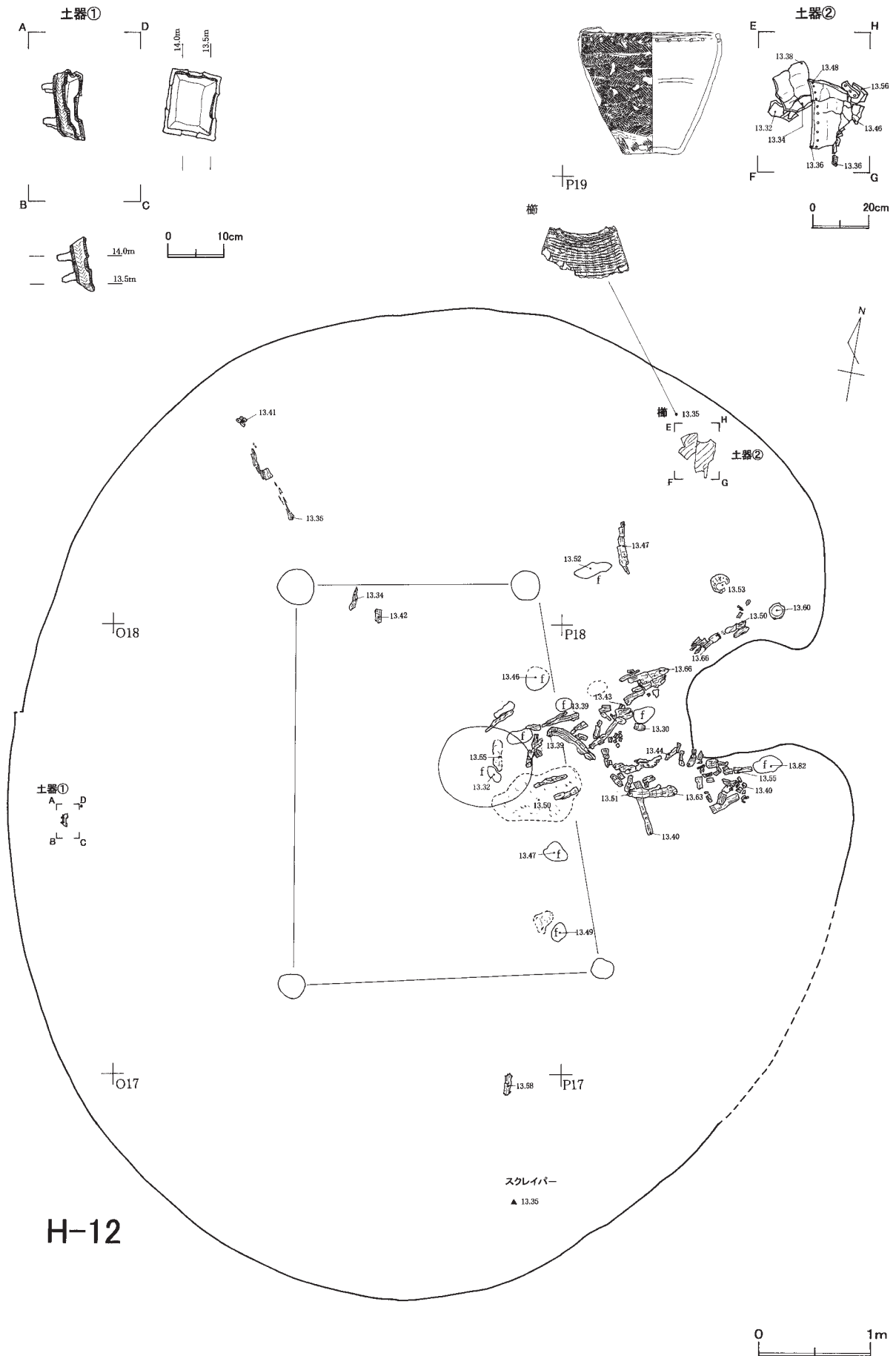
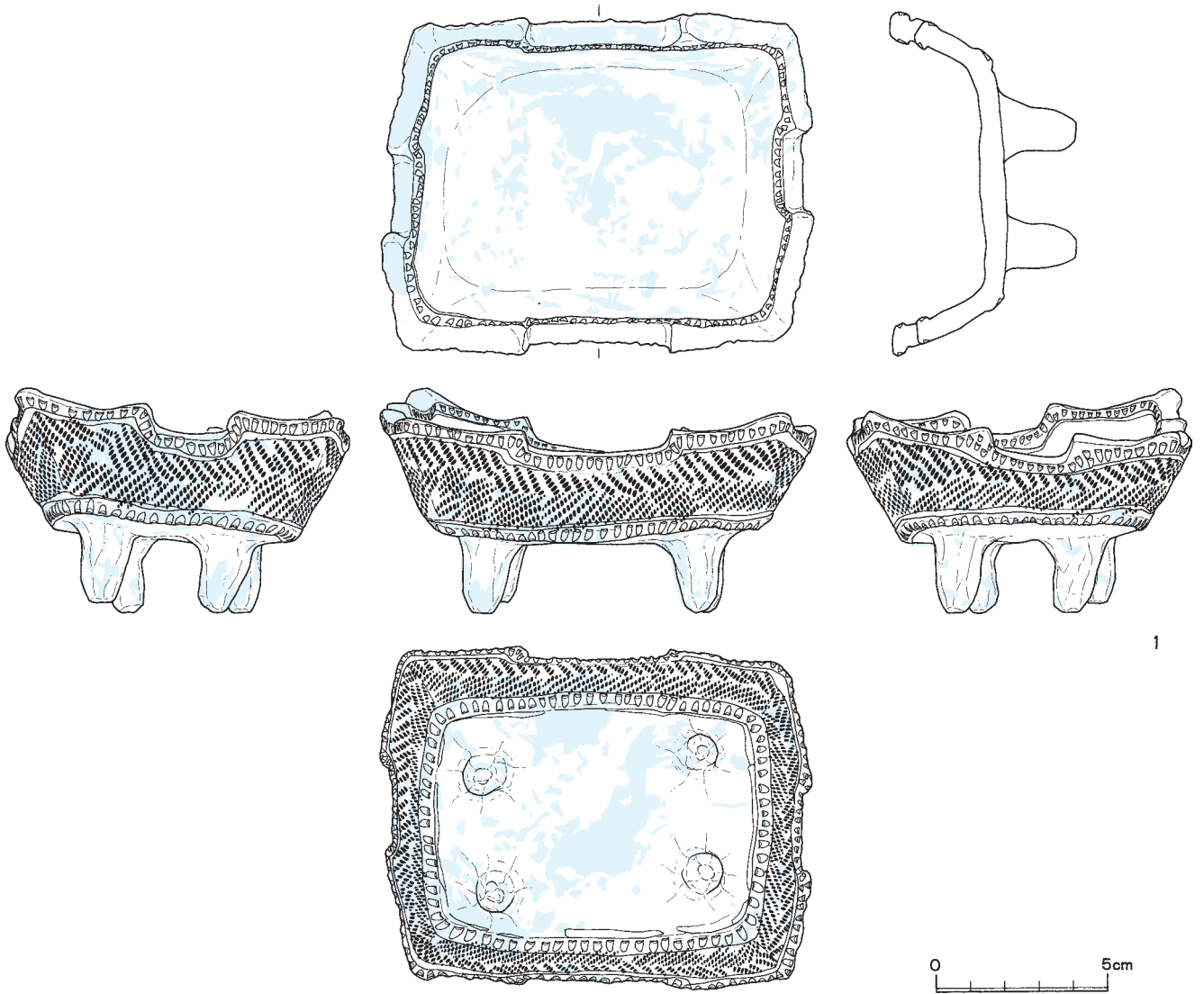


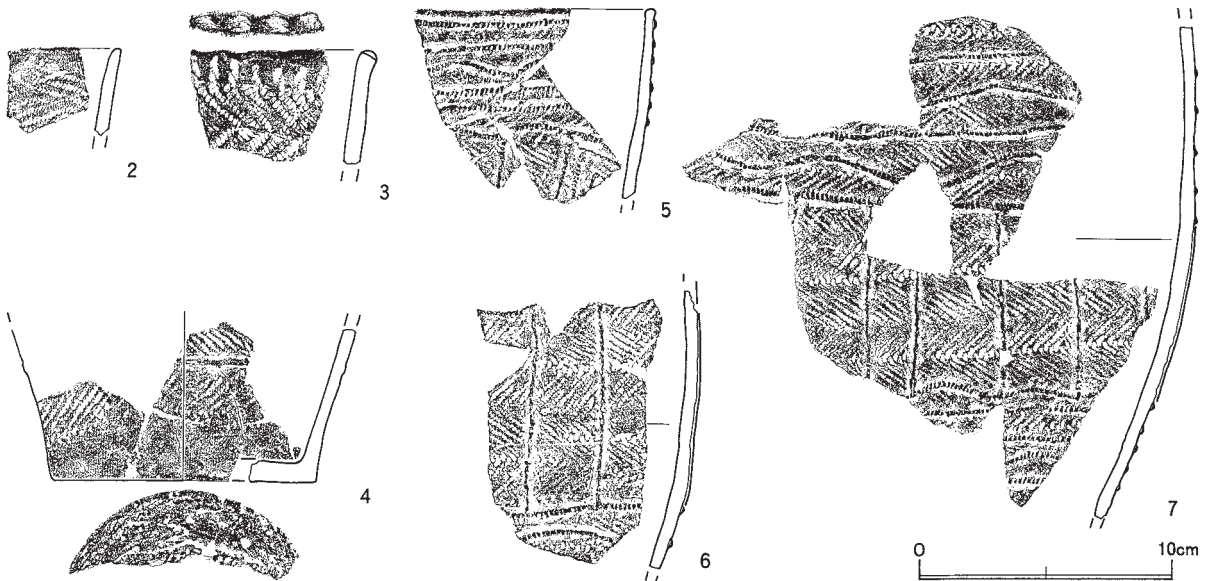
図 III-35 H-12(4)



図Ⅲ-36 H-12(5)

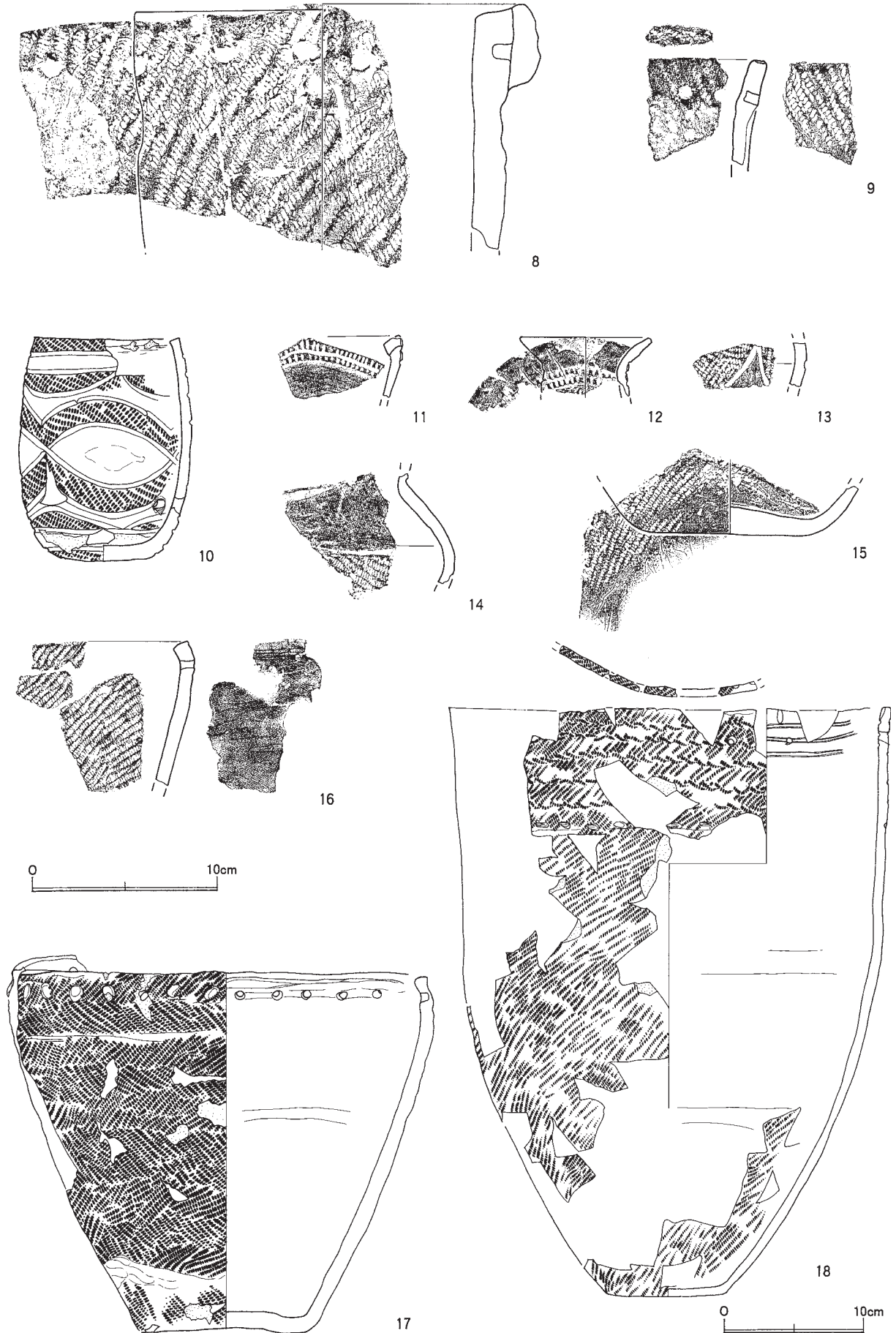


1

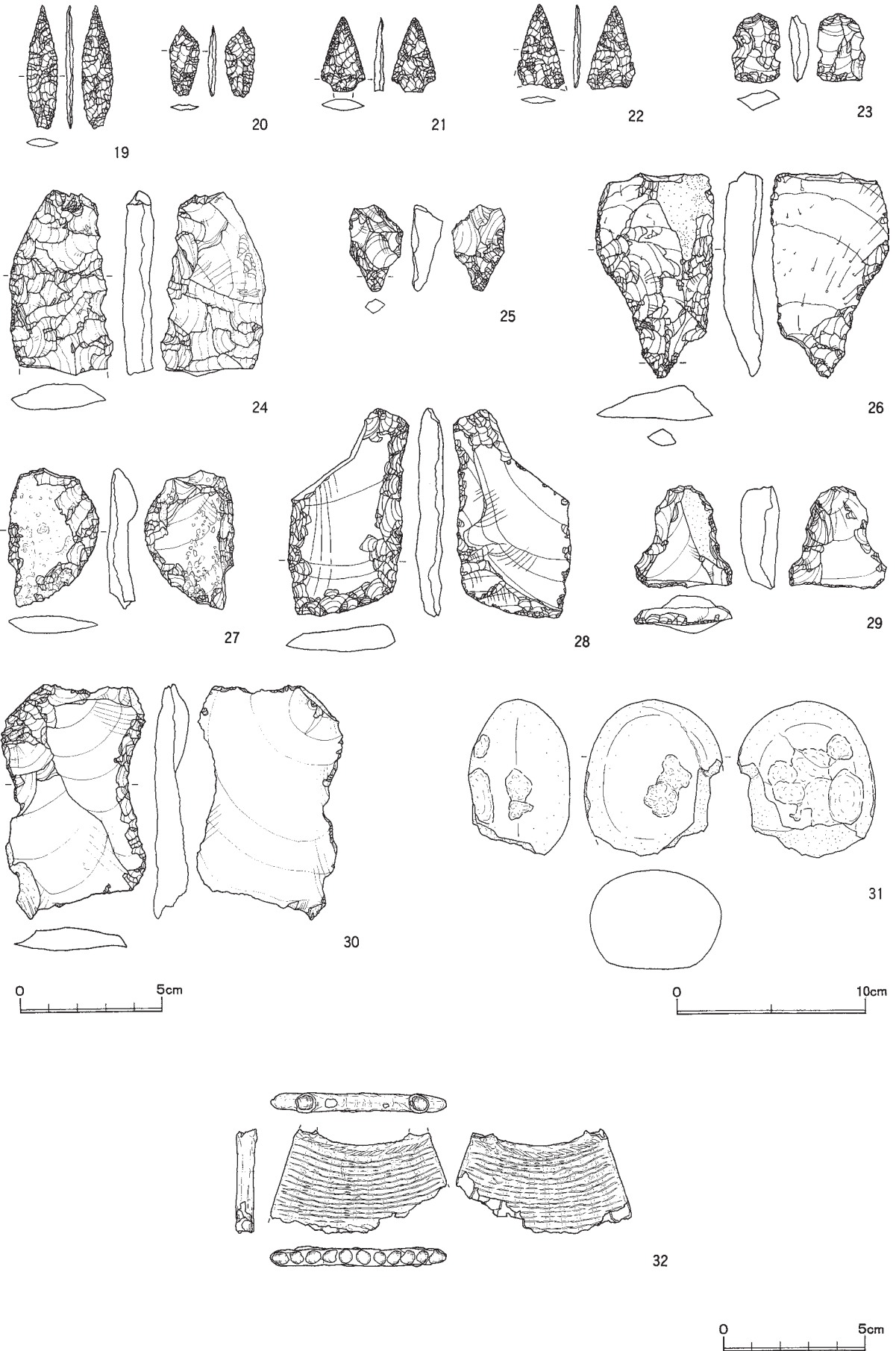


図III-37 H-12出土の遺物(1)

※青色は黒色物質付着部分



図Ⅲ-38 H-12出土の遺物(2)



図III-39 H-12出土の遺物(3)

造分析を行った（V章1）。

重複・時期：P-76・77と重複し、いずれも当遺構の方が新しい。当遺構は掘り込みが深いため、他の遺構を相当数掘り込んで構築されていると推定される。

時期は住居跡の構造や出土遺物から、縄文時代後期中葉～後葉とみられる。（阿部）

H-13〔図Ⅲ-40・41、図版16・74〕

位置：J17・18、K17・18区

平面形：楕円形（推定）

規模：5.58×(3.48)／5.03×(3.26)／0.58m

長軸方位：N-35° W

確認・調査：Kラインの土層断面で黒色土や褐色土の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを調査区境の壁面に直交するラインに設定した。トレンチ調査を行い、床面と壁の立ち上がりを検出した。その後順次掘り下げ、H-31の壁の立ち上がりを検出した。調査区境界の壁面を精査し、当遺構がH-31に切られることを確認した。床面を検出し、付属遺構を調査した。竪穴住居跡の1/3程度は西側の調査区外に広がるとみられる。

覆土：上位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）で、下位にロームの混じる暗褐色土が堆積する。他の遺構（H-31など）からの流入土と考えられる。中位の3・4層は締まりの弱い暗褐色土および褐色土でロームが主体である。最大層厚は26cmである。下層の5層は層厚10～15cmで、細かいロームを多く含む黒色土である。壁際には暗褐色土が堆積する（6層）。

床面・壁：床面は北東部が高く、一段下がって南西部が低い。それぞれの面はおおむね平坦である。壁面との境界は丸みをもつが、壁は急に立ち上がる。

遺物出土状況：覆土上位～下位から多数の遺物が出土している。特に礫が多く、覆土下位から出土した主な礫の出土状況を図示した〔図Ⅲ-40〕。こぶし大ほどの安山岩の不定形な礫が主体である。また細かく破碎した礫碎片（破碎礫）がまとまって出土している地点がある。被熱しているものも多く含まれている。床面付近からは、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器が少数出土した。

出土遺物の総数は2,905点で、土器等が861点・石器等が390点・礫が1,654点である。土器等はI群b-1類25点・I群b-4類32点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類721点（うちⅣ群a類28点）・Ⅳ群b類61点などのほか、焼成粘土塊が1点出土している。石器等は削器2点・削片1点・石鏃8点・石槍1点・石錐1点・つまみ付きナイフ5点・スクレイパー9点・両面調整石器2点・石斧1点・砥石4点・台石片1点・剥片類355点が出土している。

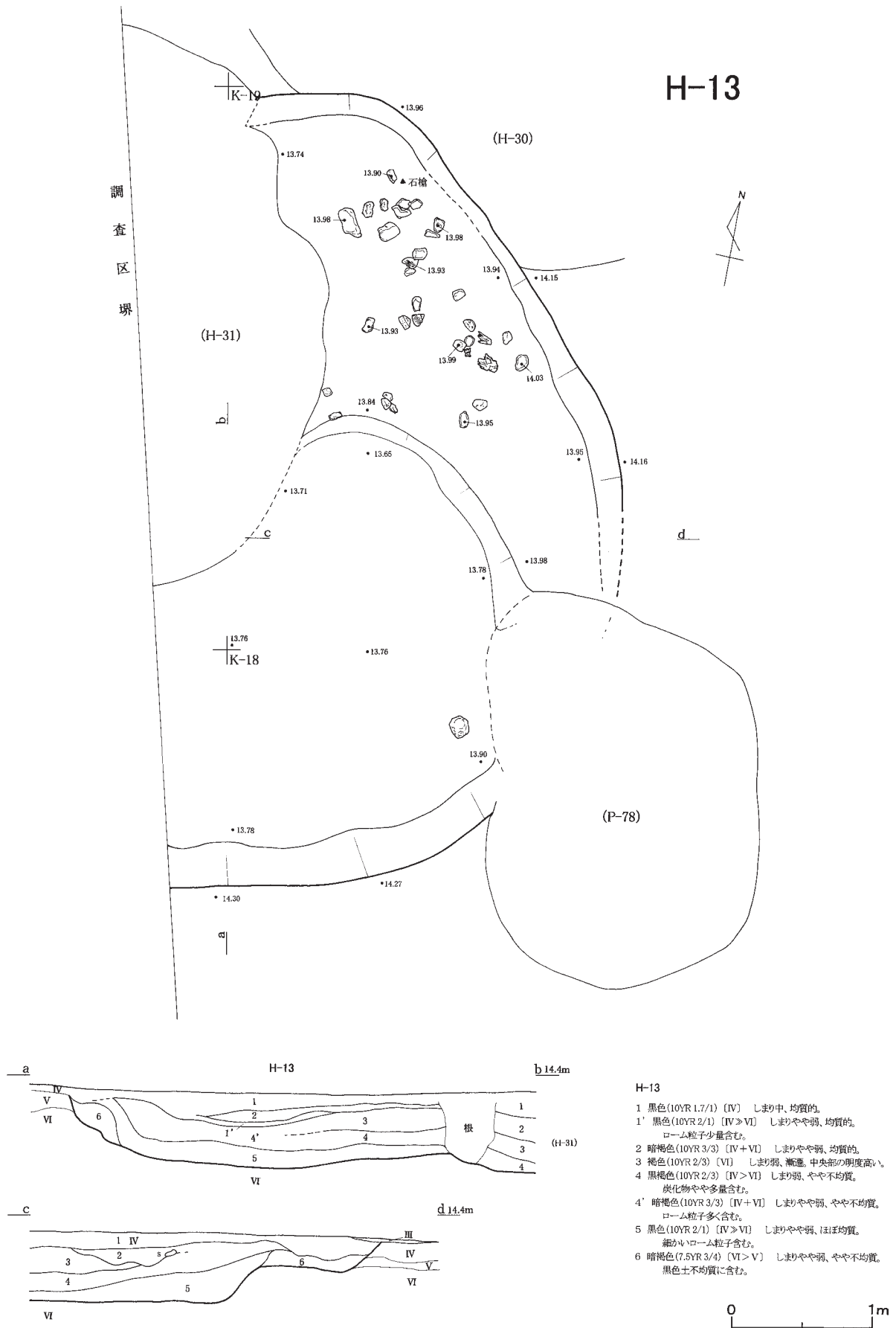
掲載遺物：3は覆土下位から出土しており、それ以外は覆土の上位から出土したもの。

1は中茶路式。2・3は北筒式。2は複節縄文が強く押捺されている。3は結束羽状縄文がみられる。4～6は鯨潤式またはエリモB式。4は角形口唇。器壁がやや薄い。5は口縁部が内傾する深鉢。平縁で角形口唇。口縁部に2列の刻み列と突瘤がめぐる。20m以上離れたM23・24区出土の土器片と接合した。6は大型深鉢の胴部。内面調整がていねいである。一部方向を変えて縄文が施文されている。

7・8は石鏃。菱形に近い形状で、8はかえしがやや明瞭である。9はつまみ付きナイフ。背面側縁に細かい調整が連続する。つまみ部もていねいに整えられている。10はスクレイパー。11は石斧。平滑な扁平礫を素材とし、周縁部および下端部を磨き刃部を作り出している。右側縁および基部に敲打痕が連続する。12は台石としたもの。角柱状の礫。

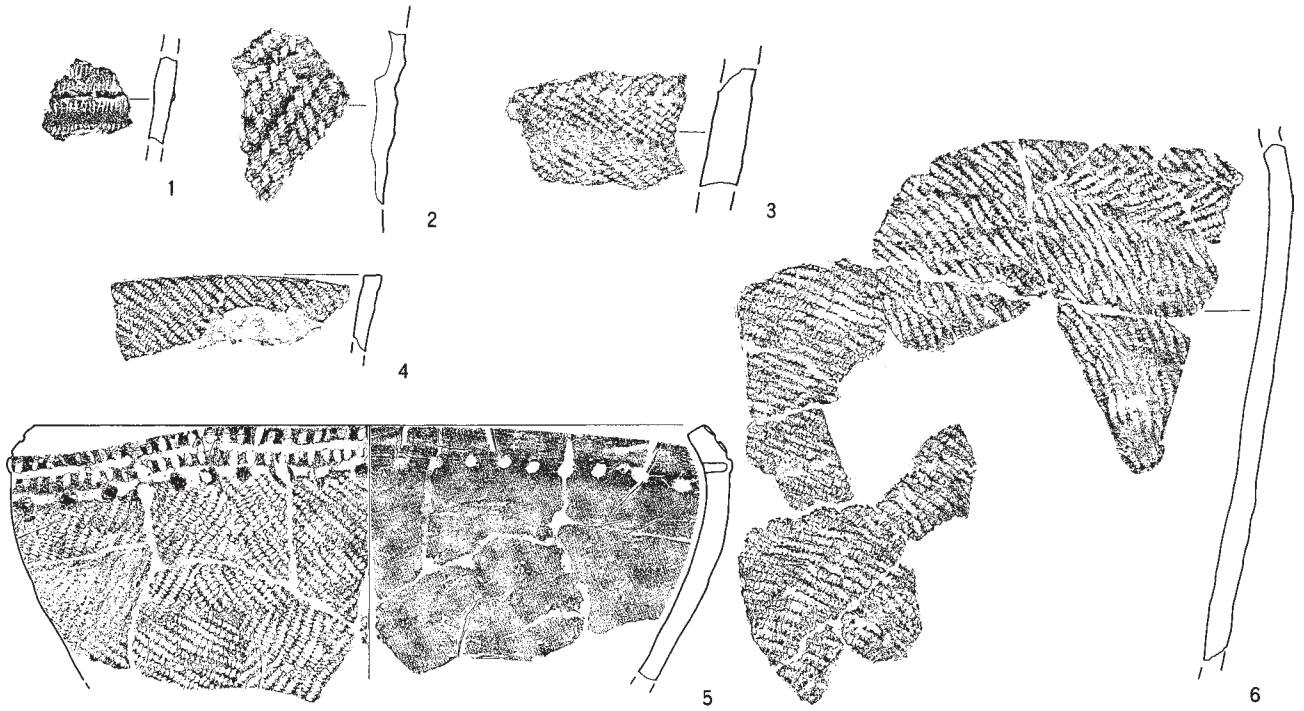
重複・時期：H-31およびP-78と重複し、いずれも当遺構の方が古いとみられる。住居跡の形状や掘り込み面、出土遺物などから、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。

（阿部）

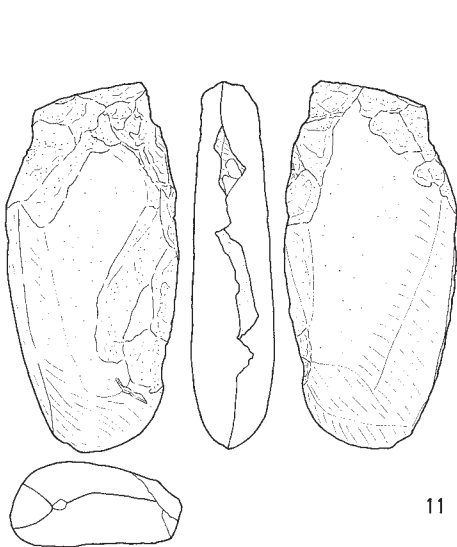
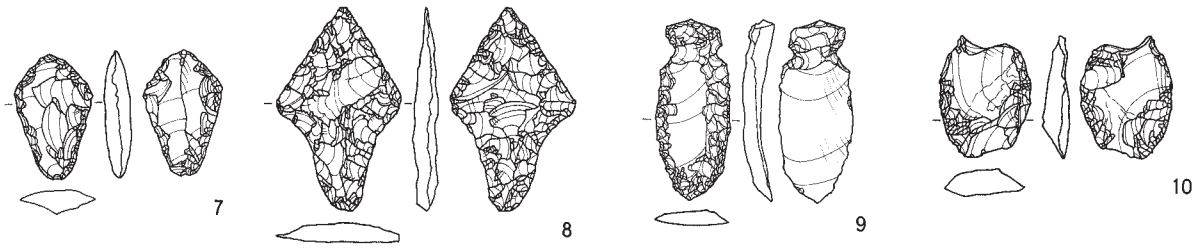


- H-13
- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV] しまり中、均質的。
 - 1' 黒色(10YR 2/1) [IV>VI] しまりやや弱、均質的。
ローム粒子少量含む。
 - 2 暗褐色(10YR 3/3) [IV+VI] しまりやや弱、均質的。
 - 3 褐色(10YR 2/3) [VI] しまり弱、漸進、中央部の明度高い。
 - 4 黒褐色(10YR 2/3) [IV>VI] しまり弱、やや不均質。
炭化物やや多量含む。
 - 4' 暗褐色(10YR 3/3) [IV+VI] しまりやや弱、やや不均質。
ローム粒子多く含む。
 - 5 黒色(10YR 2/1) [IV>VI] しまりやや弱、ほぼ均質。
細かいローム粒子含む。
 - 6 暗褐色(7.5YR 3/4) [VI>V] しまりやや弱、やや不均質。
黒色土不均質に含む。

図Ⅲ-40 H-13



0 10cm



0 5cm

0 10cm

図Ⅲ-41 H-13出土の遺物

H-14 [図Ⅲ-42~47、図版17~19・74・75、口絵5]

位置：K16・17、L16・17区

平面形：楕円形

規模：8.84×6.36／－×－／0.23m

長軸方位：N-1° E

確認・調査：表土除去後IV層上面を精査したところ、ドーナツ状の黄褐色土が連続し、その内側にそれぞれ黒色土の円形のまとまりを検出した。H-15・16のトレンチを延長・拡張し、さらにTa-cのまとまりの中央部を通るラインとそれに直交するラインで土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行ったところ、土層の落ち込みがなく、黒色土中に黄色土が堆積する土層が検出された。先に行ったH-15・16の調査から、この範囲にも平地住居跡があると判断した。

IV層黒色土を掘り下げ、黄色土上面を検出した。地形測量を行い黄色土の調査を行った。上位では微細な剥片が多数出土し、剥片集中域を「FC-5」「FC-6」とした(Ⅲ章6)。下位からは炭化材が多量に出土し、細かな検出作業を行った。多角的に写真撮影を行い、詳細な実測を行った。サンプルを100点採取した後すべて取り上げた。床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った(Ⅲ章8)。また同焼土出土の炭化材の年代測定を委託した。測定値は2点とも3,860±40yB.P.であった(Ⅴ章6)。黄色土出土の炭化材については、50点のサンプルの樹種同定を委託した。材の形状にかかわらず、コナラ属コナラ節が大部分を占め、ハンノキ属・トネリコ属・クマシデ属・ノリウツギほか少数含まれていた(Ⅴ章3)。土層：覆土は自然堆積のIV層黒色土である。黄色土はマウンド状であり、「HM層」とした。黄色土上面の地形をみると〔図Ⅲ-42上段〕、住居跡中央部が楕円形にくぼみ、西-南-東側は土手状の高まりがあり、H-26のある南東側が高い。高低差はH-26側を除くと最大で15cmである。東側はH-26の黄色土が重複している。また黄色土の厚さをみると〔図Ⅲ-42下段〕、15~20cmの厚い堆積範囲が東部-南部にある。中央部は5cm以下の薄い堆積である。

HM層は暗・明の色調で2層に分けられる。HM1層は黒褐色~暗褐色で、暗色でやや不均質である。しまりはやや弱い。主に住居跡中央部に分布する。HM2層は褐色で明るい色調である。ロームを主体としおおむね均質で、しまりはやや弱い。住居跡周縁部にドーナツ状に分布する。

床面・壁：周辺地形は全体的に南から北へ約15cm緩やかに傾斜しているが、床面は平坦である。〔図Ⅲ-84〕。住居跡南部の境界付近でわずかにゆるやかな段がある。壁は観察されない。東部はH-26のHM層が堆積し高まっている。

付属遺構：焼土1か所(H-14HF-1)、柱穴状小ピット1基(H-14HP-1)を検出した。

〔焼土〕H-14HF-1は、住居跡の中央南寄りの位置で検出した地床炉。大きさ約40cmの円形で、被熱層はIV層、層厚は6cm。赤褐色の被熱層で周縁部は漸遷する。また北部に位置するHM層中の焼土にHF-2の番号を付した。

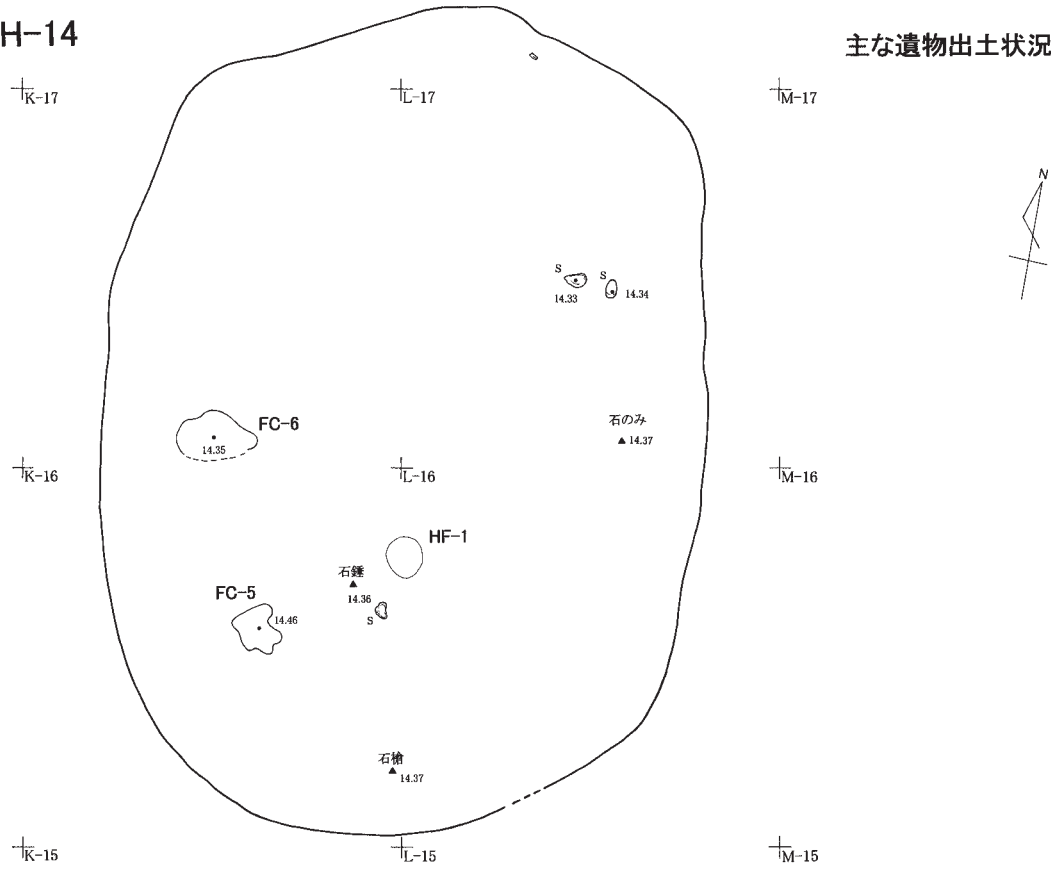
〔柱穴〕H-14HP-1は径9cm、深さ9cmの小型のもの。

遺物出土状況：覆土およびHM層から遺物が多数出土しているが、大部分は微細な剥片である。

出土遺物の総数は1,999点で、土器等が405点・石器等が1,456点・礫が148点である。土器等はI群b-2類7点・I群b-4類40点・Ⅲ群b類~IV群a類286点(うちIV群a類32点)・IV群b類6点などのほか、焼成粘土塊が1点出土している。石器等は石刃鎌1点・削器1点・彫器1点・削片2点・石刃1点・石鎌21点・石槍15点・石錐4点・つまみ付きナイフ7点・スクレイパー41点・両面調整石器28点・石核2点・石斧6点・砥石片24点・石錘1点・台石片20点・剥片類1,281点が出土している。※炭化材 主にHM2層から多量の炭化材が出土した。住居跡とした範囲の中央部を除いた内周に分布する。一部トレンチ調査による欠落部分があるものの、形状を保った材はほぼすべて検出した。全

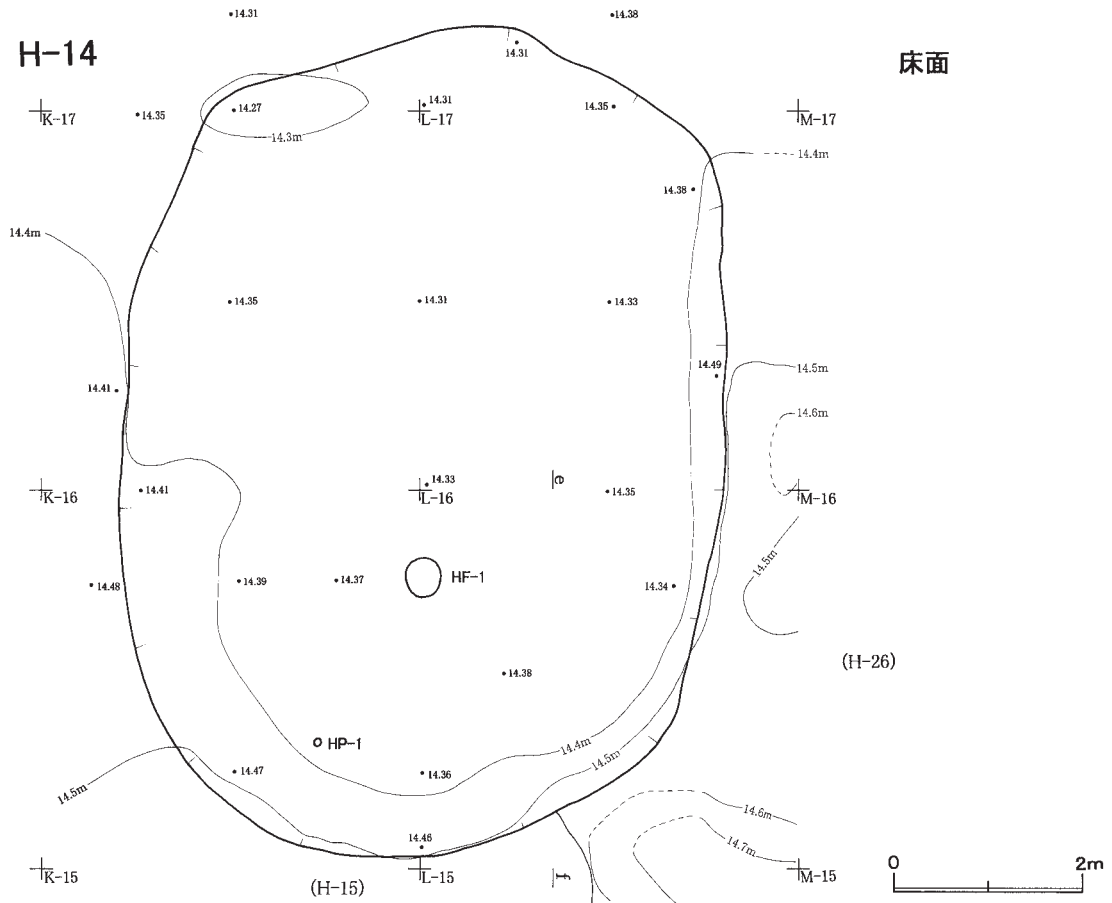
H-14

主な遺物出土状況



H-14

床面



図Ⅲ-43 H-14(2)

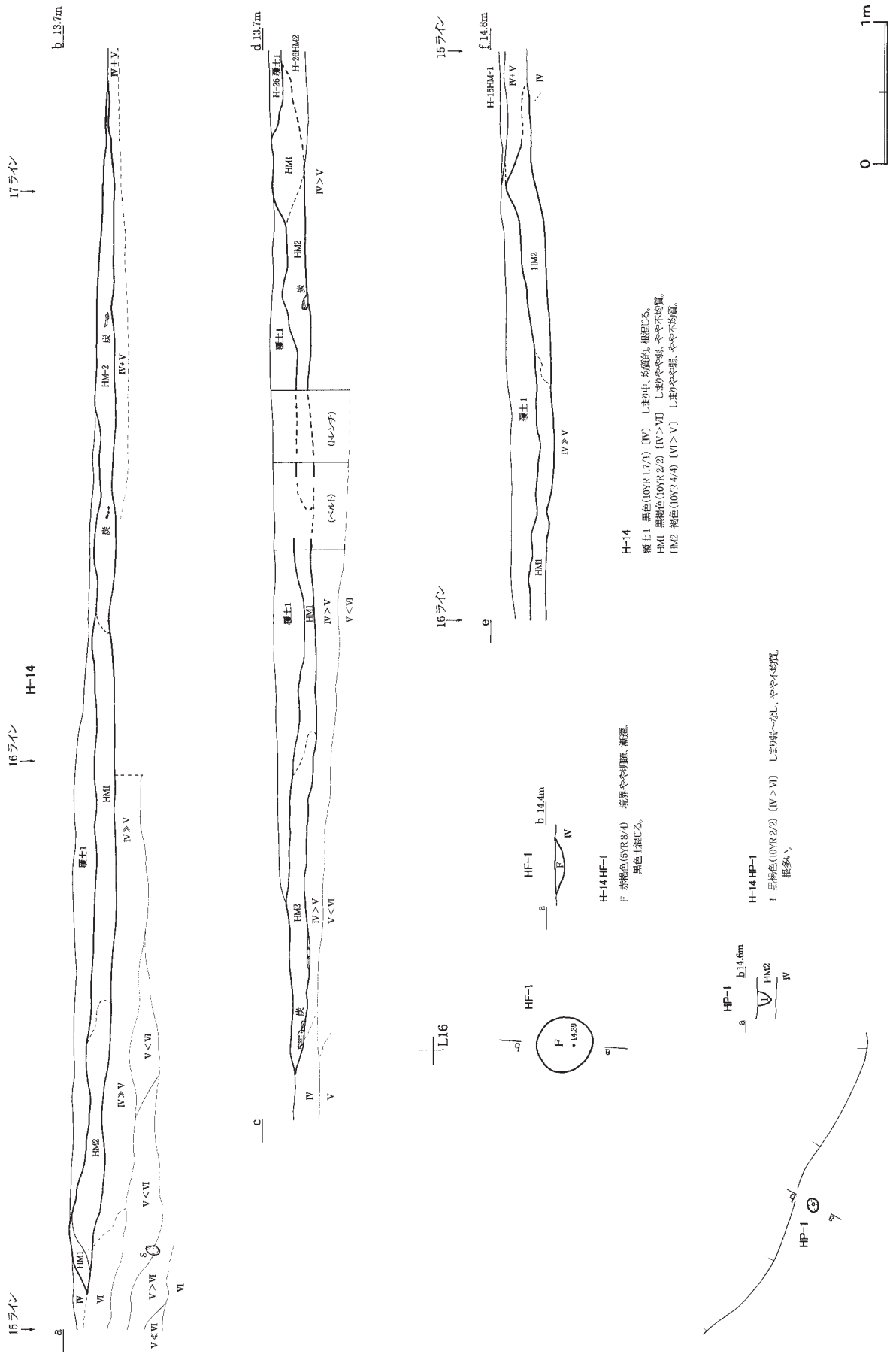
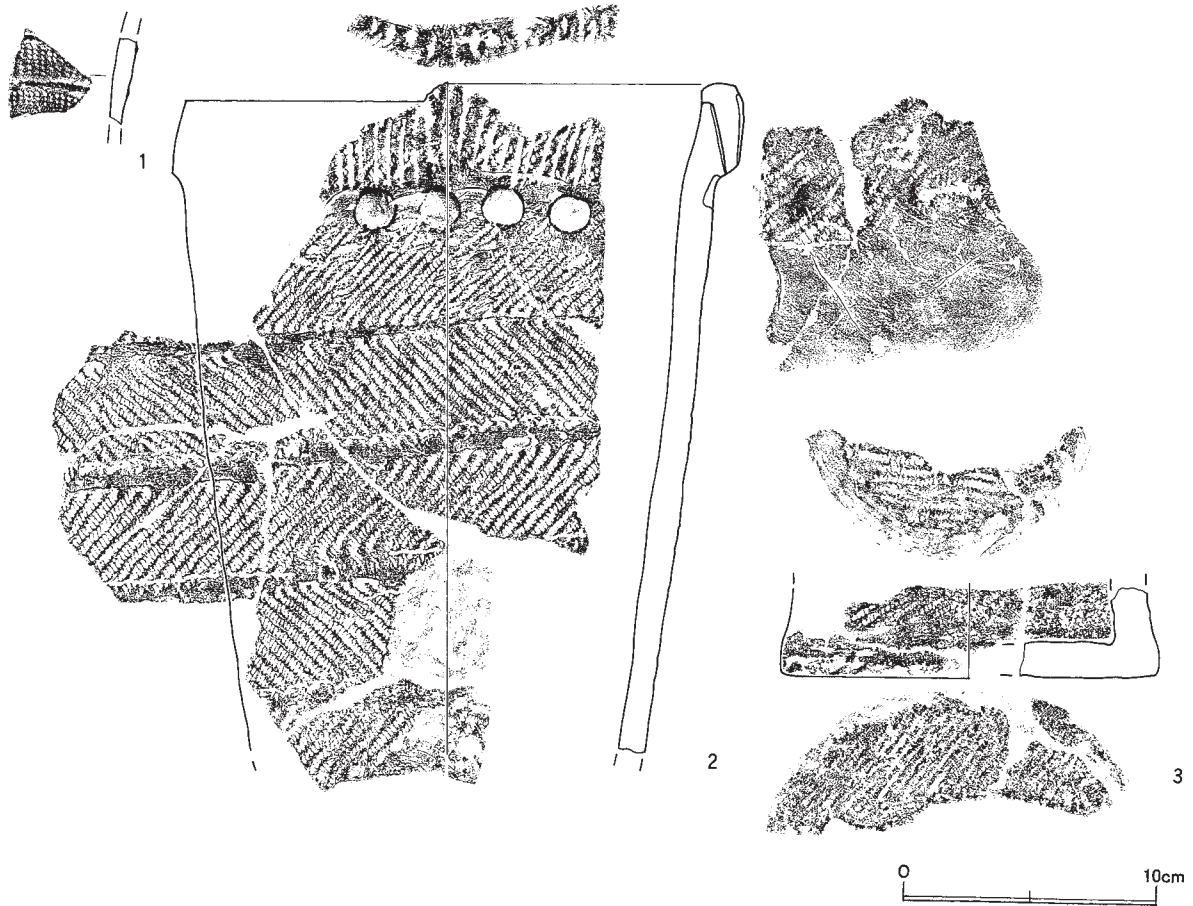


図 III-44 H-14(3)

H-14



図Ⅲ-45 H-14(4)



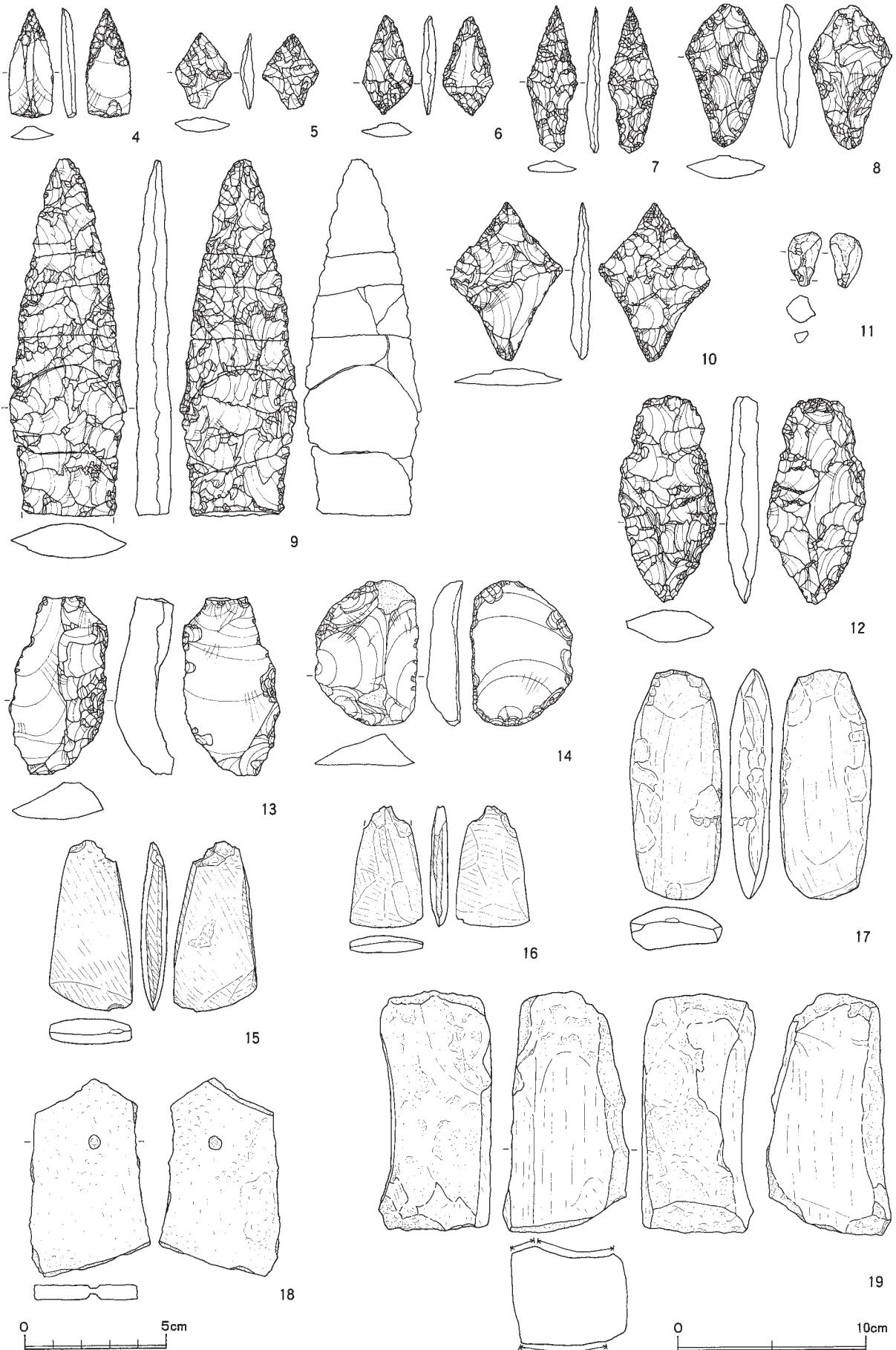
図Ⅲ-46 H-14出土の遺物(1)

周に分布するが、単位をもって分布している。主なものでは、①南部2.2×1.2m、②東部2.0×1.3m、③北西部1.6×1.4m、④西部2.2×1.2m、⑤南西部2.2×1.2mのまとまりがある。特に①・②は密である。径2～3cmの棒状または枝状の材が最も多い。これらの材を縦横に組み合わせ、蔓状の草木類で縛っていたとみられる。垂直の状態で見出された材が住居跡外周付近にあり、これらの構造材が立っていた可能性がある。ほかに幅5～10cmで厚さ1cm程の板状の材も見つけられる。またヨシ状の細かい材も南東部で少数検出されている。

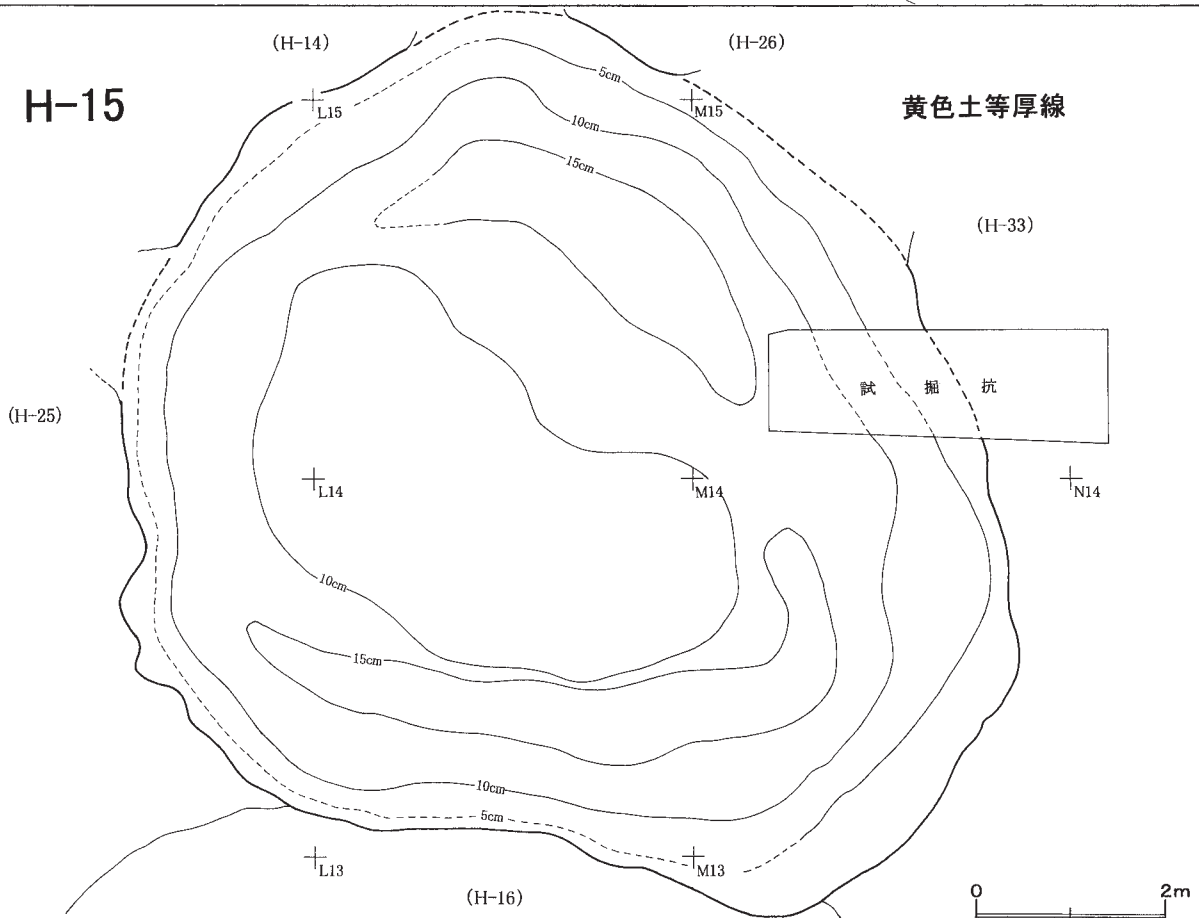
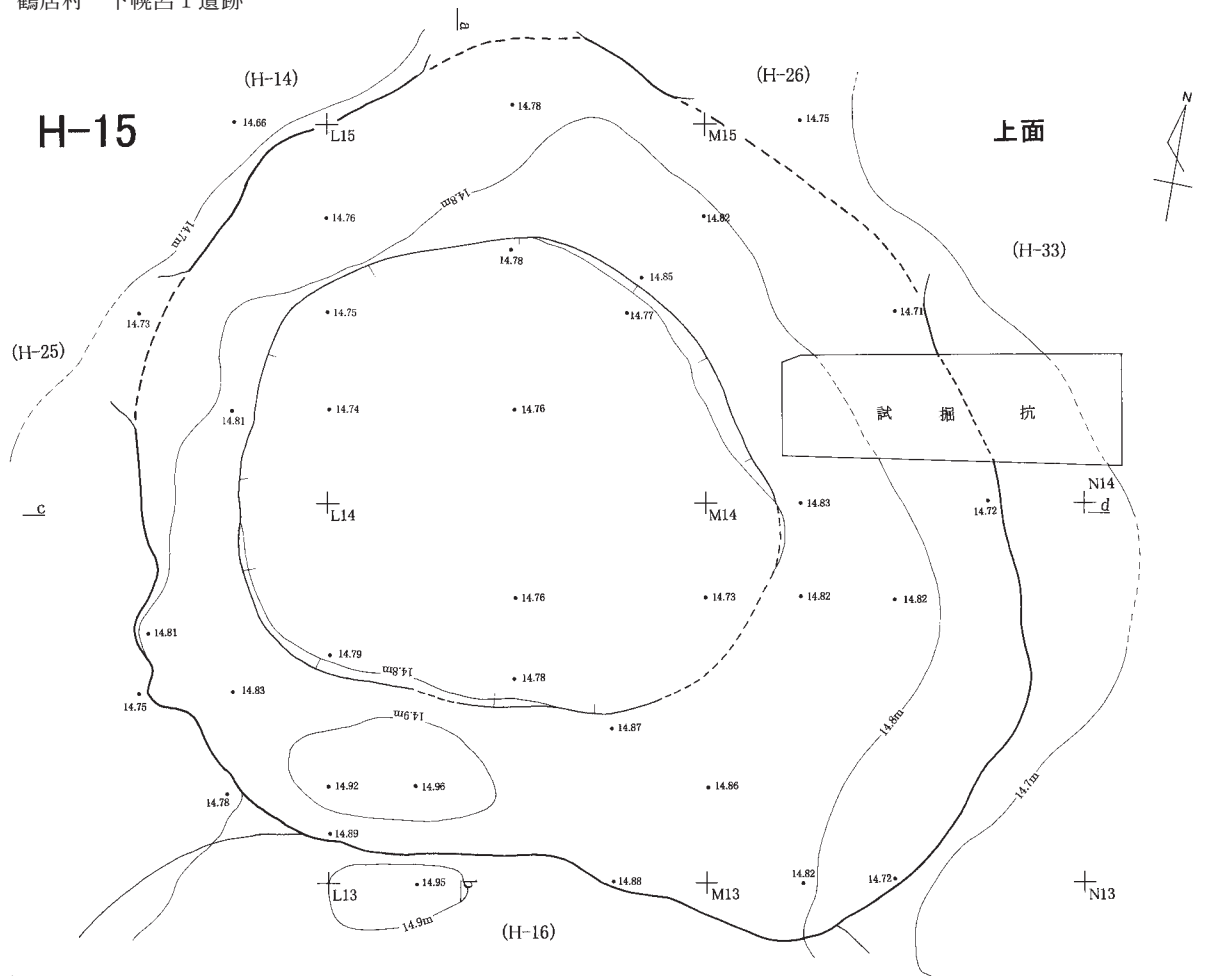
掲載遺物：1は中茶路式。2は北筒Ⅱ式新段階の深鉢。肥厚帯上に縦沈線、その下にやや大型で浅い円形刺突がめぐる。胴部は羽状縄文が細かい無文帯を挟み多段に配されている。3は北筒式の底部で、やや外に張り出す。底面内外面にも縄文が施文されている。

4は石刃鎌。小型で、背面に平行する2条の稜がある。5～7は石鎌。いずれも菱形に近い形状である。8～10は石槍。9は10点が接合した。ほぼ形を保ったまま分割して出土した。10は幅広の菱形を呈する。11は石錐。小粒の礫が素材である。12はつまみ付きナイフとした。両面調整で、両側縁に弱いえぐりがある。13・14はスクレイパー。13は腹面側が内湾する。14は転礫を半割した素材が用いられている。15～17は石斧類。15・16は小型のもの。片岩製で全面研磨が行き届いている。17は泥岩製の石製品。全面磨製で、敲打痕もみられる。18は硬質の扁平な砂岩に表裏ともほぼ同じ位置に刺突がある。貫通はしていない。19は砥石。角柱状の砂岩の2面を作業面としている。

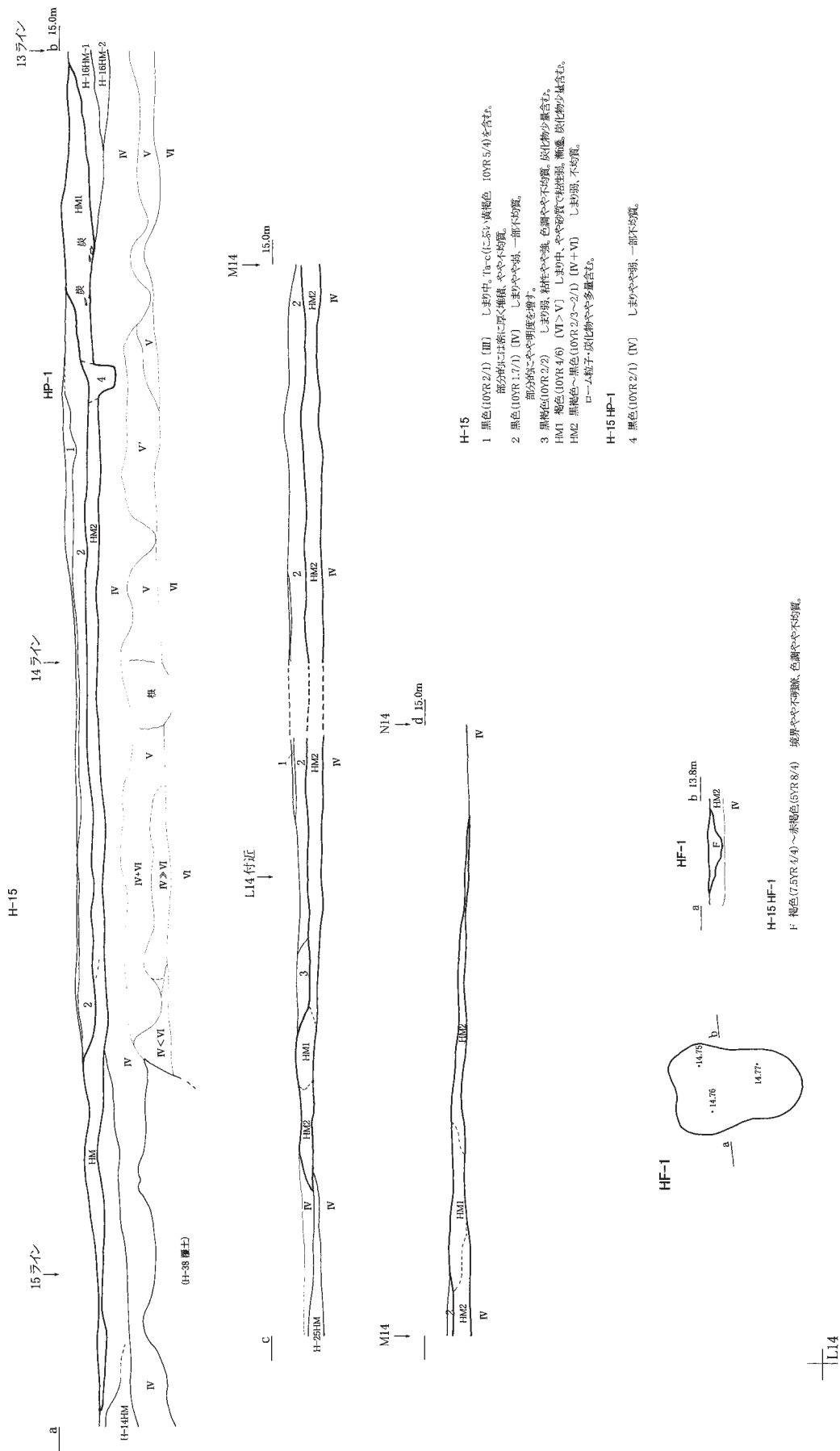
重複・時期：H-15・26とHM層が重複している。当遺構は、H-15より古くH-26より新しい。時期は切り合い関係や出土遺物などから、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期とみられる。(阿部)



図III-47 H-14出土の遺物(2)

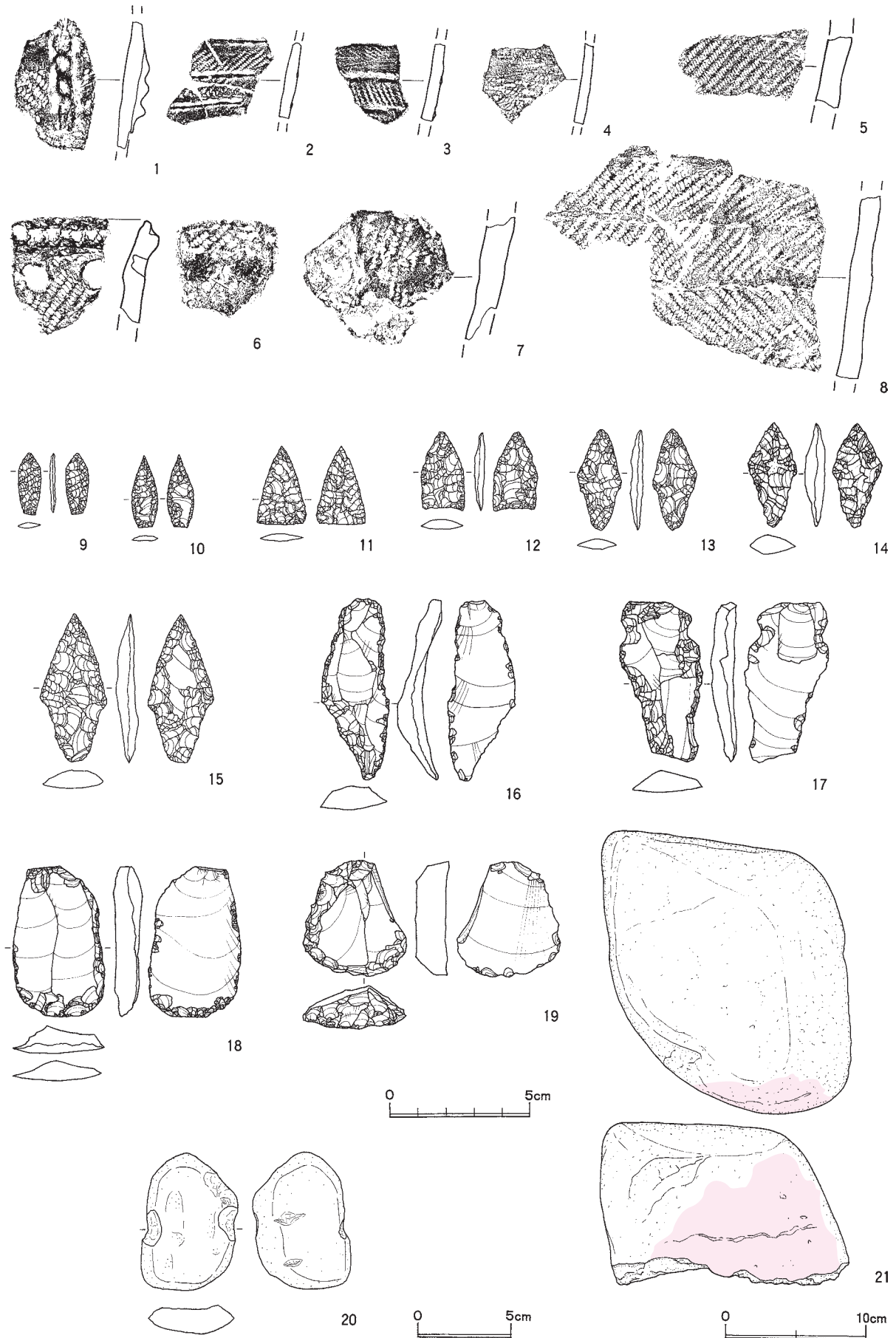


図Ⅲ-48 H-15(1)



- H-15
- 1 黒色(10YR 2/1) (III) しまり中、(Ibc)にふい、黄褐色、10YR 5/4)を含む。部分的には密に厚く細線、やや不均質。部分的にやや明度を増す。
 - 2 黒色(10YR 1/1) (IV) しまりやや弱、一部不均質。
 - 3 黒褐色(10YR 2/2) しまり弱、粘土やや強、色調やや不均質、炭化物少量含む。HM1 褐色(10YR 4/6) (VI>V) しまり中、やや砂質で粘性强、漸進、炭化物少量含む。HM2 黒褐色~黒色(10YR 2/3~2/1) (IV+VI) しまり弱、不均質。ローム粒子・炭化物やや多量含む。
- H-15 HP-1
- 4 黒色(10YR 2/1) (IV) しまりやや弱、一部不均質。

図 III-50 H-15(3)



図Ⅲ-52 H-15出土の遺物

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また黄色土出土の炭化材の年代測定を委託した。測定値は3,800±40yB. P.、3,890±40yB. P.であった（Ⅴ章6）。8点の炭化材サンプルの樹種同定を委託し、すべてコナラ属コナラ節と同定された（Ⅴ章3）。

土層：覆土は自然堆積のⅢ層Ta-cおよびⅣ層黒色土である。覆土3層は炭化物を含む黒褐色土である。黄色土はマウンド状であり、「HM層」とした。黄色土上面の地形をみると〔図Ⅲ-48上段〕、住居跡中央部が楕円形にくぼみ、周囲は土手状の高まりがあり南側が高い。高低差は最大20cmである。東側は周辺地形が低くなる。また黄色土の厚さをみると〔図Ⅲ-48下段〕、15cm以上の厚い堆積範囲が北部および南部に帯状に広がる。中央南部は10cm以下の薄い堆積である。

HM層は明・暗の色調で2層に分けられる。HM1層は褐色で明るい色調である。ロームを主体としおおむね均質で、ややしまりがある。主に住居跡東-南部に分布する。HM2層は黒褐色～暗褐色で、暗色でやや不均質である。しまりはやや弱い。東-南部を除く大部分の範囲に分布する。また分層できない範囲はHM層とした。

床面・壁：床面は平坦であるが、周辺地形からわずかにくぼんでいる〔図Ⅲ-93〕。境界付近でゆるやかな段が観察されるところがある。壁面は観察されない。

付属遺構：焼土1か所（H-15HF-1）、柱穴状小ピット1基（H-15HP-1）を検出した。

〔焼土〕H-15HF-1は、住居跡のほぼ中央部で検出した。大きさ44×31cmの不整楕円形で、被熱層はHM2層、層厚は9cm。赤褐色の被熱層で周縁部は漸遷する。

〔柱穴〕H-15HP-1は住居跡南部に位置する。径20cm、深さは13cmで先端は平らである。

遺物出土状況：覆土およびHM層から遺物が多数出土した。特に、微細な剥片が多数出土した。まとめて出土した遺物はない。

出土遺物の総数は1,003点で、土器等が393点・石器等が599点・礫が11点である。土器等はI群b-1類53点・I群b-4類221点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類77点（うちⅢ群b類1点、Ⅳ群a類13点）・Ⅳ群b類17点などのほか、焼成粘土塊が2点出土している。石器等は削片3点・石鏃13点・石槍1点・つまみ付きナイフ6点・ナイフ1点・スクレイパー8点・両面調整石器3点・石核1点・石斧1点・砥石片15点・すり石1点・石錘2点・台石片1点・剥片類543点が出土している。

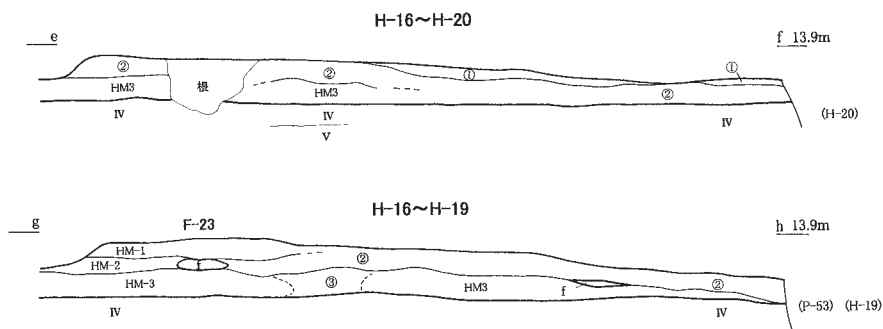
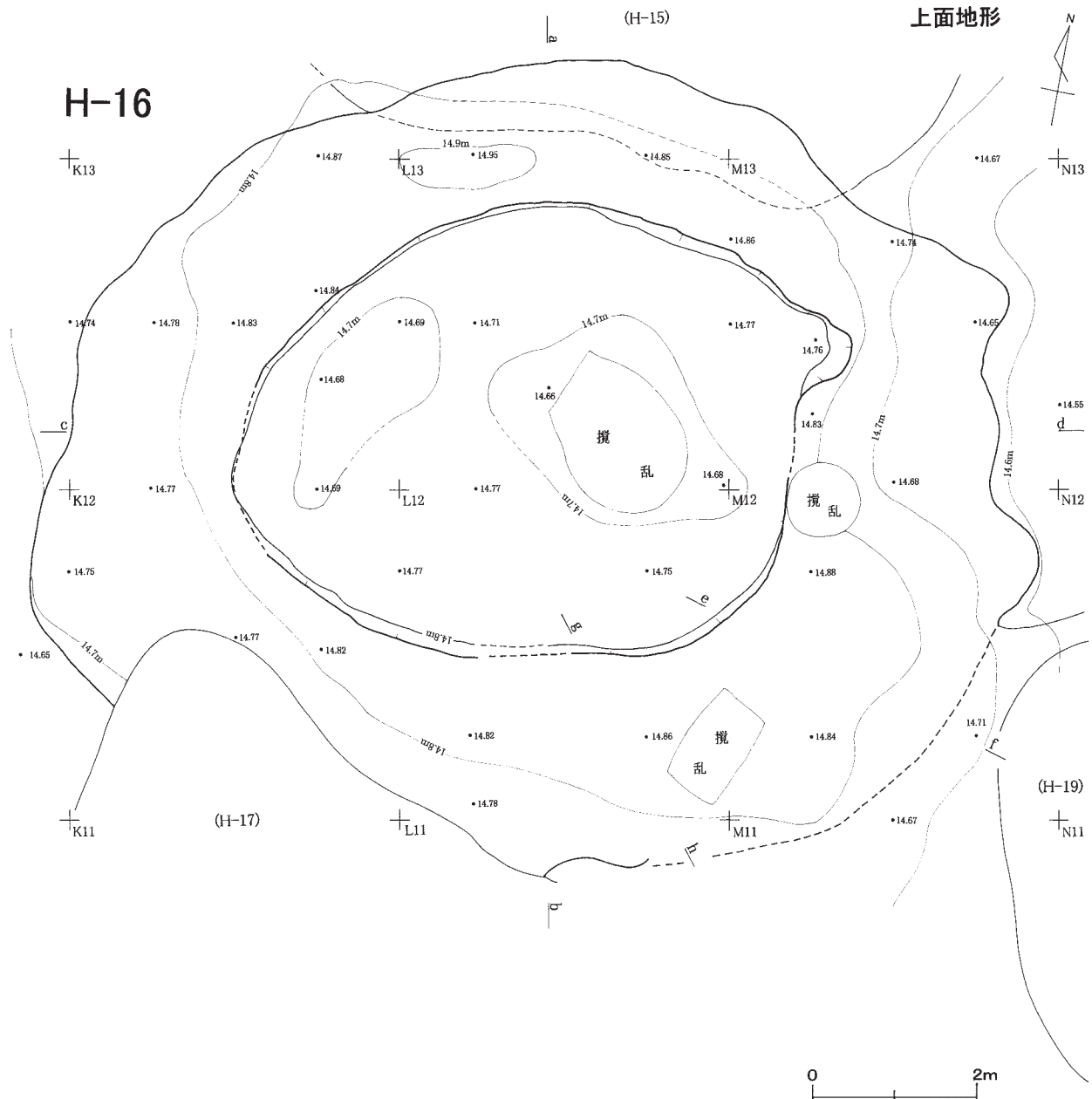
※炭化材 HM層から多量の炭化材が出土した。住居跡とした範囲のおおむね全周に分布するが、特に東半が密である。主に北東部（2.2×1.2m）と南東部（4×2m）のブロックに分けられ、前者は径2～3cmの枝状の材が最も多い。後者も径2～3cmの枝状の材が多いが、幅5～10cmで厚さ1cm程の板状の材も多く見うけられる。

掲載遺物：1は東釧路Ⅱ式。縦位の貼付帯上（口唇上）に縄端圧痕が連続する。2～4は中茶路式。5～8は北筒Ⅱ式。6は断面三角形の肥厚帯上に押引による刺突列がある。肥厚帯下には円形刺突が穿たれる。8は羽状縄文が施文されている。内面は凹凸が目立つ。

9～15は石鏃。9・10は小型柳葉形。11・12は平基。13～15は菱形に近い形状である。16はナイフ。腹面側が内湾する。17はつまみ付きナイフ。下端部を欠く。つまみ部は幅広である。18・19はエンドスクレイパー。18はやや薄身の縦長の剥片が素材で、下端部に細かい調整が施されている。19は厚みのある素材で下端部に細かい調整が施されている。20は石錘。21は台石とした。被熱している。

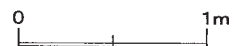
時期：H-14・16とHM層が重複している。いずれも当遺構の方が新しい。時期は切り合い関係や出土遺物などから、縄文時代後期初頭の北筒式期とみられる。

（阿部）

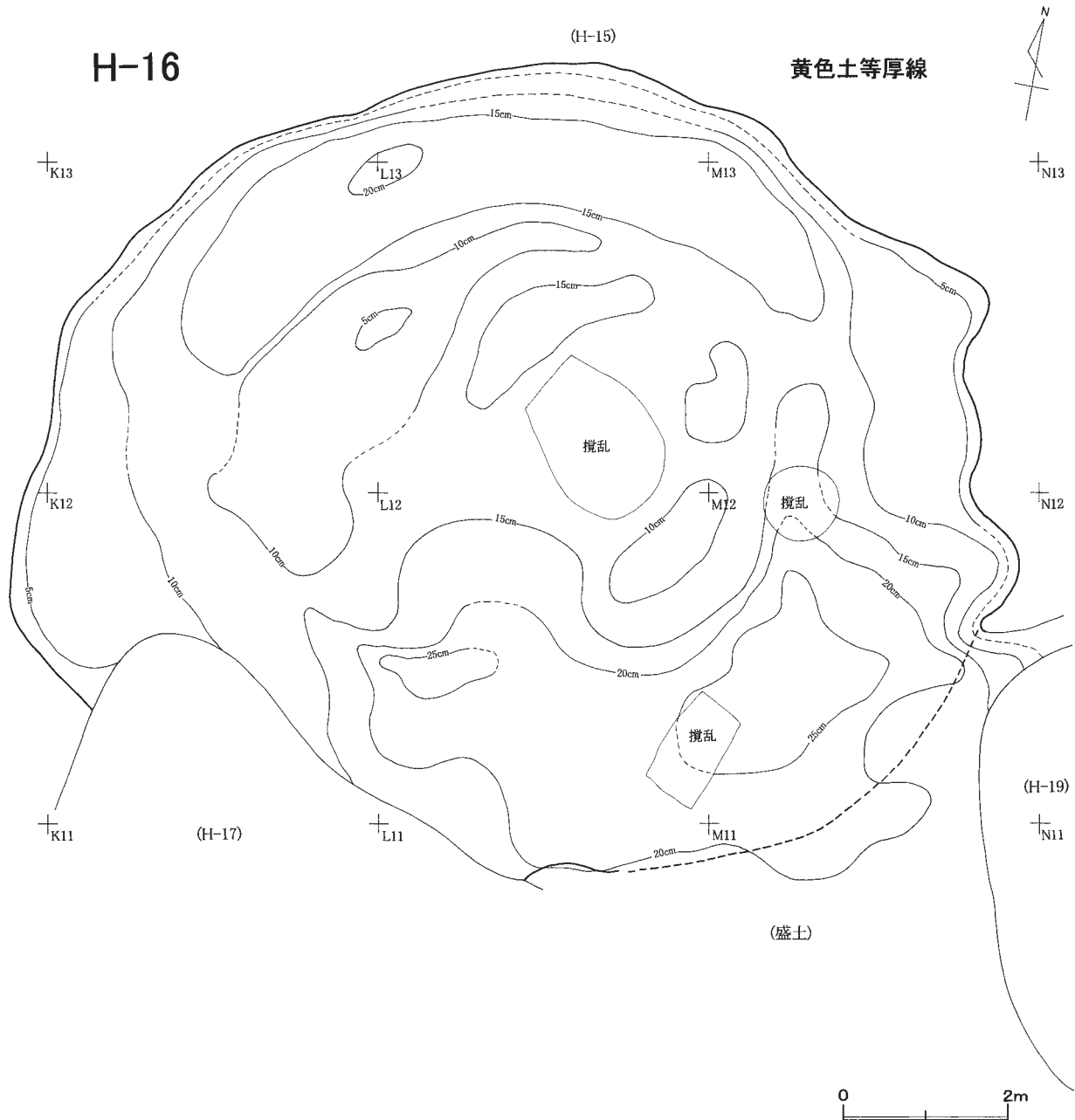


H-16~H-20・H-16~H19

- HM1 褐色(10YR 4/4) しまりやや弱、均質的、炭化物少量含む。
- HM2 黒褐色(10YR 3/2) しまりやや弱、やや均質、炭化材やや多く含む。
- ① 黒褐色~暗褐色(10YR 3/3~2/3) [HM2>HM3] しまりやや弱、やや不均質。
- ② 暗褐色(10YR 3/4) [HM2<HM3] しまりやや弱、やや不均質、炭化材やや多く含む。
- HM3 褐色(10YR 4/6) しまりやや弱、やや均質的、ブロック状に明るい土壌がある。
漸遷、炭化材やや多く含む。
- ③ 暗褐色(10YR 3/4) しまりやや弱、やや均質的、漸遷、炭化材やや多く含む。



図Ⅲ-53 H-16(1)



図Ⅲ-54 H-16(2)

H-16〔図Ⅲ-53～59、図版21・22・76・77、口絵4〕

位置：K12・13、L12・13、M12・13区

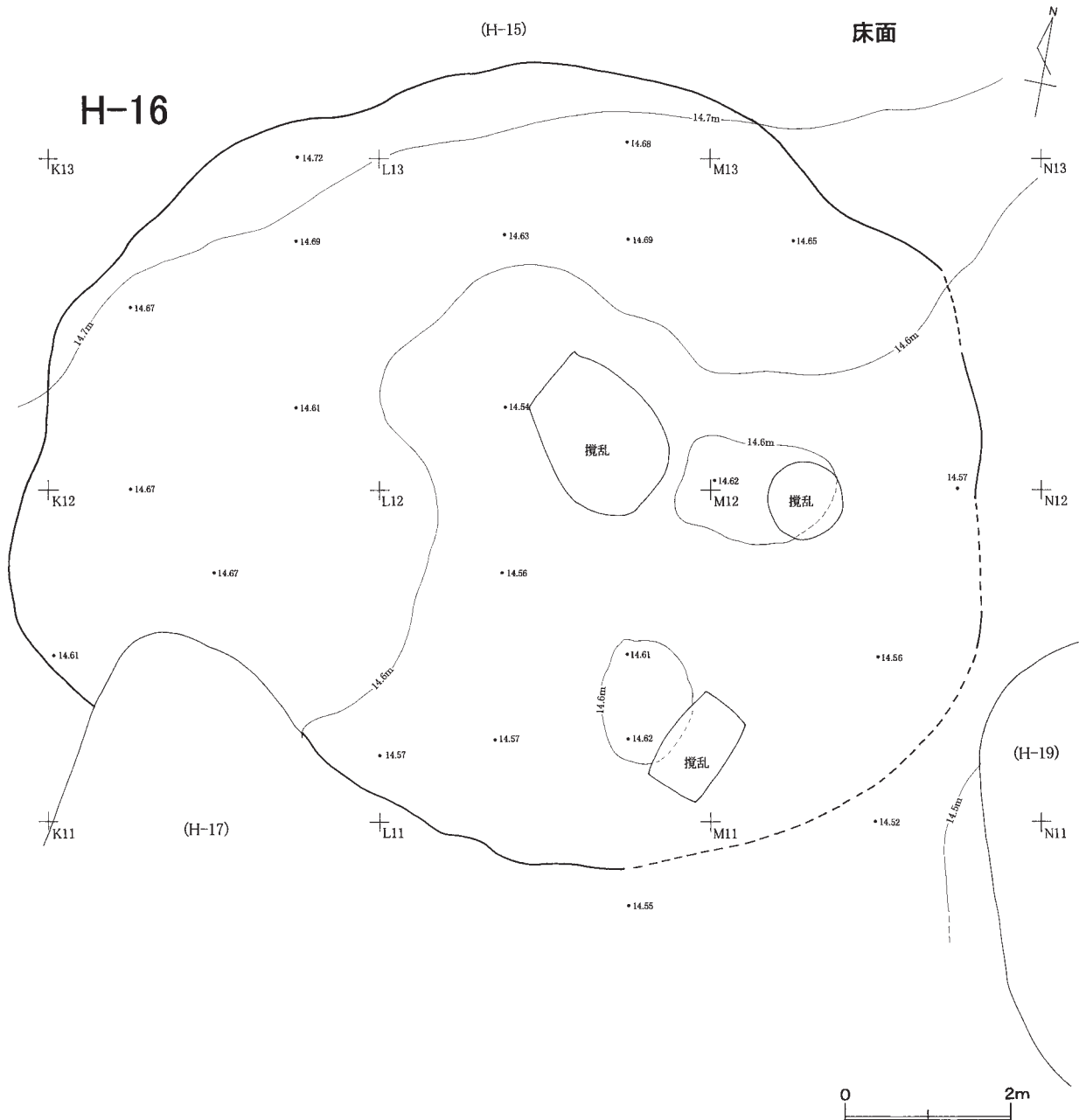
平面形：おおむね楕円形

規模：11.84×9.72／－×－／0.29m

長軸方位：N-72° E

確認・調査：平成19年度の調査で、調査区中央部に黄褐色土の広がりを検出した。盛土遺構を想定し、トレンチを設定し一部を掘り下げた。全面調査は平成21年に行った。

表土除去後Ⅳ層上面を精査したところ、ドーナツ状の黄褐色土が連続し、その内側にそれぞれTa-cおよび黒色土の円形のまとまりを検出した。前述のトレンチとそれに直交するラインで土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行ったところ、土層の落ち込みがなく、黒色土中に黄色土が堆積する土層が検出された。当初はH-15とともに、盛土遺構上に住居跡が構築された、と判断して調査を行った。覆土のⅣ層黒色土を掘り下げ、黄色土上面を検出した。「床面」は不安定で「壁」の

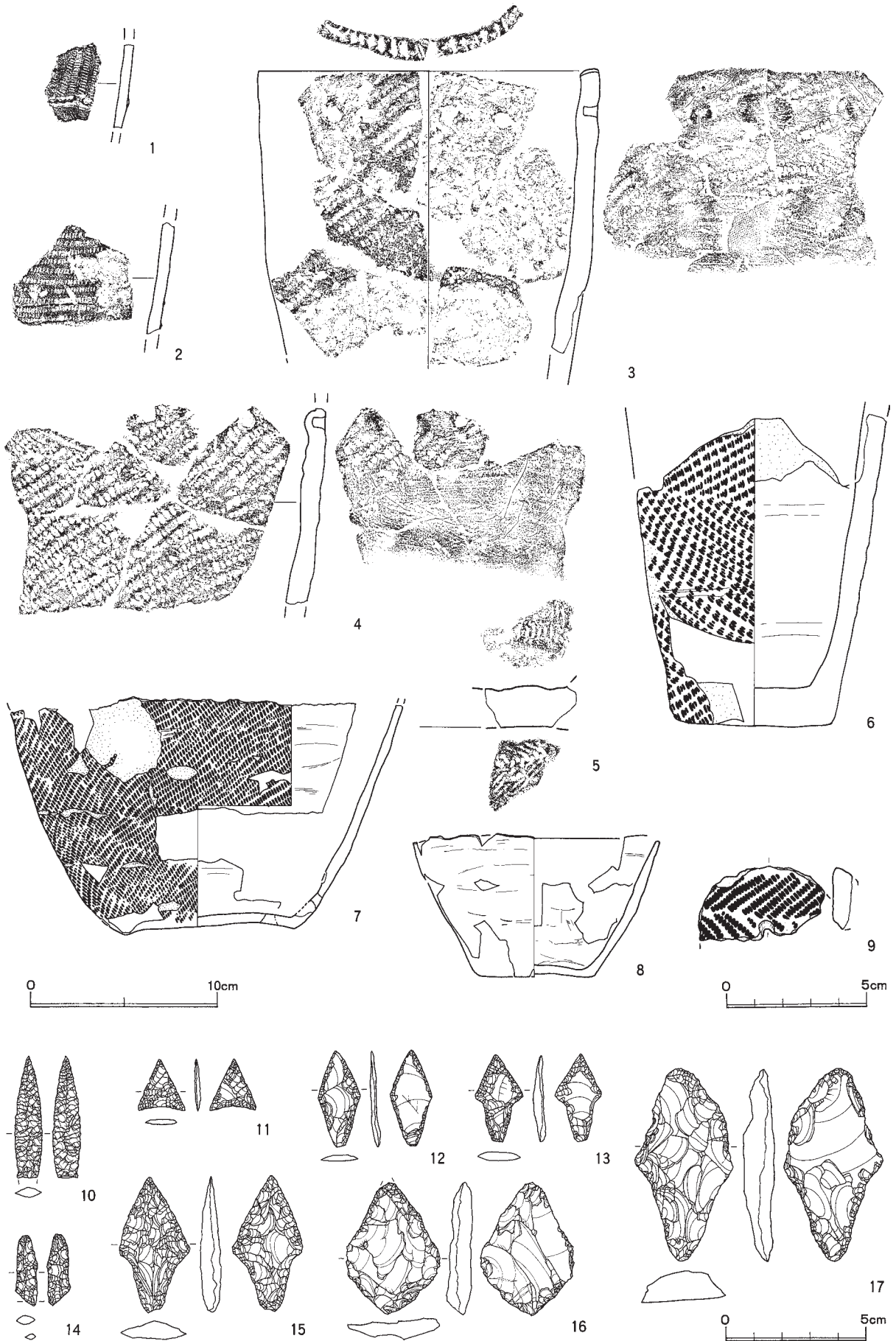


図Ⅲ-56 H-16(4)

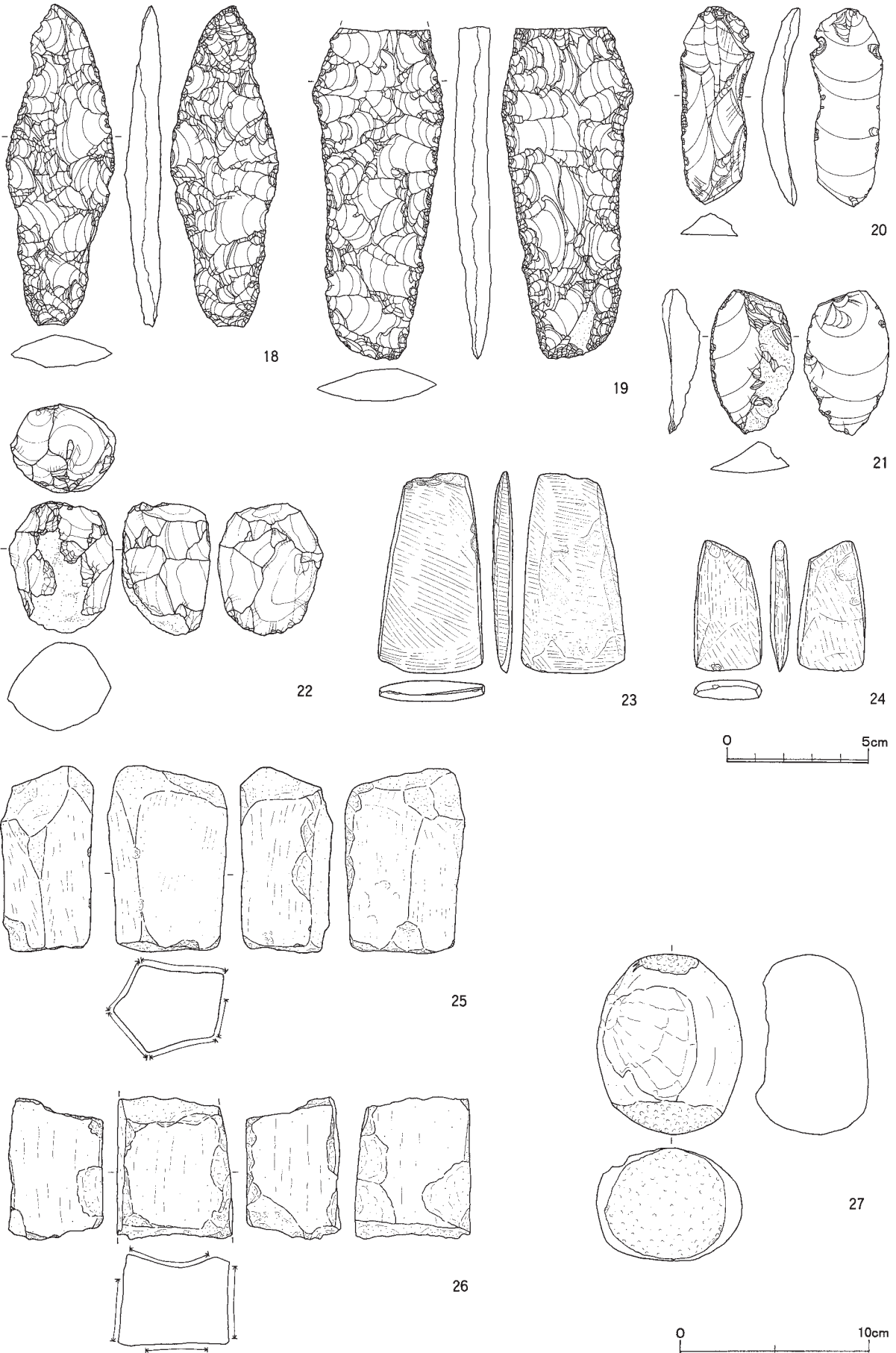
立ち上がりが明瞭に確認できなかった。写真撮影および実測の後、さらに下位の黄色土の調査を行った。微細な剥片が多数出土し、ブロック状の焼土が各所で検出された。範囲が明瞭なものは遺構番号を付した (F-21~25)。炭化材は少数出土した。西部で検出した礫集中箇所は「S-2」として調査を行った。以上の結果とH-15の調査から、黄色土で覆われた平地住居跡と認定した。

黄色土は南-東に広がることから、周辺遺構との重複関係の確認のため南西側に2本の土層確認用のベルトを追加設定し掘り下げた。床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った (Ⅲ章8)。また覆土および黄色土出土の炭化材の年代測定を委託した。測定値は、覆土黒色土の材で $3,750 \pm 30$ yB. P.、HM3層の材で $3,940 \pm 30$ yB. P.であった (Ⅴ章6)。炭化材については、上記2点のサンプルの樹種同定を委託し、コナラ属コナラ節およびハンノキ属ハンノキ節と同定された (Ⅴ章3)。



図III-58 H-16出土の遺物(1)



図III-59 H-16出土の遺物(2)

土層：覆土は1層がⅢ層Ta-cで2層がⅣ層黒色土である。ただし2層は炭化物を多く含み、黒褐色を呈する部分がある。黄色土はマウンド状であり、「HM層」とした。黄色土上面の地形をみると〔図Ⅲ-53〕、住居跡中央部がくぼみ、周囲には土手状の高まりがあり北側が高い。高低差は最大30cmである。北側はH-15の黄色土が重複している。南側はH-17に切られている。また黄色土の厚さをみると〔図Ⅲ-54〕、20cm前後の厚い堆積範囲が南部の広い範囲および北部に帯状にみられる。中央北西部および南東部は10cm以下の薄い堆積である。

HM層は明・暗・明の色調で3層に分けられる。HM1層は褐色～黄褐色で最も明るい色調である。ロームを主体としおおむね均質で、ややしまりがある。住居跡北部～西部に分布する。HM2層は暗褐色で、やや暗色で不均質である。しまりはやや弱い。ほぼ全域に分布する。HM3層は褐色のやや不均質な土層で、ブロック状のロームを含む。住居跡中央付近から南西部の大部分に堆積する。

床面・壁：床面はおおむね平坦であるが中央部がくぼむ。周辺地形を含め全体的に北西から南東へ約20cm緩やかに傾斜している〔図Ⅲ-56〕。壁は観察されない。

付属遺構：焼土2か所（H-16HF-1・2）を検出した。

〔焼土〕H-16HF-1は、住居跡の中央西側で検出した。大きさ37cm程の不整円形で、被熱層はHM2～3層、層厚は11cm。にぶい赤褐色の被熱層である。HF-2は、住居跡の中央南側で検出した。大きさ30×22cmのほぼ楕円形で、被熱層はHM2～3層、層厚は4cm。にぶい赤褐色の被熱層である。

また前述のとおり、F-21～25・S-2が当遺構に関連する。

遺物出土状況：覆土およびHM層から遺物が多数出土した。特に、微細な剥片が多数出土した。住居跡南西部のHM3層で、深鉢土器の底部付近の破片がまとまって出土した〔図Ⅲ-55〕。

出土遺物の総数は1,695点で、土器等が350点・石器等が1,321点・礫が24点である。土器等はI群b-1類6点・I群b-4類118点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類139点（うちⅣ群a類24点）・Ⅴ群c類80点などのほか、焼成粘土塊2点・土製円盤1点が出土している。石器等は削器4点・彫器1点・石鏃22点・石槍13点・石錐4点・つまみ付きナイフ17点・スクレイパー49点・両面調整石器4点・石核7点・石斧等3点・砥石片5点・たたき石1点・台石片2点・剥片類1,189点が出土している。このほか、HM層から炭化材が少数出土した。

掲載遺物：1・2は中茶路式。絡条体圧痕が充填されている。3～6は北筒式。3は円筒形の深鉢。平縁の口唇上に刻み列が連続する。口縁部に小型の円形刺突がめぐる。5は底面内外面にも結束羽状縄文が施文されている。6は深鉢の胴～底部。厚い平底で、立ち上がりは急である。複節縄文が胴部に施文されている。7・8は晩期の土器と思われる。7は深鉢の底部。器壁が薄い。8は無文の鉢。やはり器壁が薄い。9は土製円盤。東釧路Ⅲ式土器が加工されている。半損している。

10～13は石鏃。10は柳葉形、11は三角鏃。12は菱形を呈する。13は比較的かえしが明瞭である。14は石錐。両面調整の小型のもの。15～19は石槍。15～17は菱形に近い形状である。18・19は大型のもの。両面調整が行き届いている。19は先端部側が折損する。20・21はスクレイパー。20は縦長の剥片、21は転礫が素材とみられる。22は石核。転礫から剥離が行われている。23・24は石斧類。全面磨製の完形品。片面は黒色で光沢があり、被熱シス等が付着したものと考えられる。24は小型のもの。25・26は砥石。いずれも角柱状の砂岩製で、25は5面、26は4面の作業面がある。27はたたき石。乳白色の珪岩の長軸両端に敲打痕が明瞭に残る。

時期：H-15・26とHM層が重複している。当遺構は、H-15より古くH-26より新しい。時期は切り合い関係や出土遺物などから、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期とみられる。

（阿部）

H-17〔図Ⅲ-60～63、図版23・24・77〕

位置：K10・11・12、L10・11・12区

平面形：隅丸方形

規模：7.61×4.36/6.54×3.40/0.66m

長軸方位：N-50° W

確認・調査：I層を除去した後に、IV層の上面でTa-c火山灰が堆積する落ち込みを確認した。Ta-c火山灰はK10・11区からL10区にかけて分布しており、この落ち込みの中心に直交するように土層観察用のベルトを設定してトレンチ調査を行った。その結果、約60cm掘り下げたところで黄褐色土の床面と壁面の立ち上がりを確認した。平面形は隅丸方形と考えられるが、全体的に歪んでいるように見られる。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また同焼土および床面出土の炭化材片の年代測定を行った（Ⅴ章6）。

覆土：上面はTa-c火山灰の混じる黄橙色土で覆われ、これより下位はIV層が主体の黒褐色土で構成されている。南東側の覆土中には褐色から暗褐色の掘上土が混じる。

床面・壁：床面はK11区で特に大きく盛り上がり、全体が波をうつように凸凹がある。北西側と南東側が急角度で立ち上がっている。

付属遺構：焼土が3か所、柱穴様ピットが3か所、土坑が2基である。

焼土HF-1とHF-2は床面の中央よりやや南側で検出した。本来一つの焼土であった可能性がある。HF-3は床面南東端の壁際で確認した。床面で検出した柱穴様ピットは西端のHP-4だけである。HP-2・3は竪穴の外側で検出した。この施設に関連するものか判然としない。HP-1とHP-5は床面の南端で検出した。HP-1・5は共に壁面に沿うように掘り窪められており、HP-1は壁際が深くなっている。HP-5は浅く、わずかにHP-1に切られる。

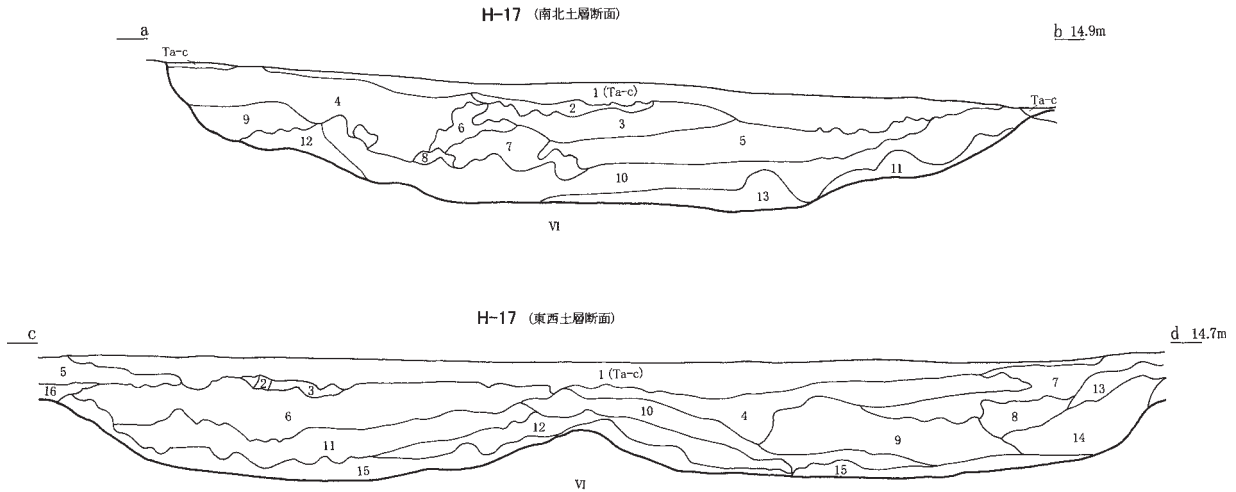
遺物出土状況：出土遺物の総数は562点で、土器が123点、石器等が363点である。内訳はI群b類土器が93点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器が28点である。I群b類土器は床面出土のものが1点で、残る92点は覆土中から出土した。Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器で床面出土のものは7点である。石器等では石鏃が4点・スクレイパー14点・石斧1点・たたき石1点・台石1点・剥片類330点などである。床面出土のものはスクレイパーやエンドスクレイパー、台石がある。

掲載遺物：1・2は中茶路式。3～6は北筒式。3は北筒Ⅱ式の口縁部で、断面三角形の肥厚帯上（口唇上）に押引文が連続し、口縁部に小型の円形刺突がある。4は縦位に刺突列（押引）がある、北筒Ⅱ式の前段階のもの。5は内面にケズリ調整痕が粗く残る。6は底部がやや張り出す。底面にも羽状縄文が施文されている。

7・8は石鏃。7は三角形。8はかえしが弱い。9はつまみ付きナイフ。両側縁に弱いえぐりを入れたもの。10はスクレイパー。不整形で、背面に原石面が残る。つまみ付きナイフの未成品の可能性もある。11・12はエンドスクレイパー。11は湾曲する素材の下端部に細かい調整が行われている。上部にはつまみ部が作り出されているようにも見える。12も下端部に細かい調整がみられる。13は床面付近から出土した台石。表面に敲打痕が2か所みられる。

時期：出土遺物等から判断すると、縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。

（笠原）

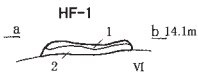


H-17 南北土層断面

- 1 にぶい黄褐色(10YR 6/4) 堅密度:軟 粘着性:なし Ta-C 火山灰。
- 2 褐色(7.5YR 4/3) 堅密度:軟 粘着性:弱。
- 3 黒褐色(7.5YR 3/1) 堅密度:軟 粘着性:弱。
- 4 黒褐色(7.5YR 3/2) 堅密度:軟 粘着性:弱 IV > V+VI層。
- 5 黒色(7.5YR 2/1) 堅密度:軟 粘着性:中 IV層主体。
- 6 明褐色(7.5YR 5/6) 堅密度:堅 粘着性:中 V+VI層。
- 7 黒褐色(7.5YR 3/1) 堅密度:堅 粘着性:中 IV層主体。
- 8 黒褐色(10YR 3/1) 堅密度:軟 粘着性:中 IV層主体。
- 9 黒褐色(10YR 2/2) 堅密度:軟 粘着性:中 IV > V+VI層。
- 10 黒色(10YR 2/1) 堅密度:堅 粘着性:弱 IV層主体。
- 11 明褐色(7.5YR 5/6) 堅密度:堅 粘着性:弱 V+VI層。
- 12 褐色(7.5YR 6/6) 堅密度:堅 粘着性:弱 VI層。
- 13 黒色(10YR 2/2) 堅密度:軟 粘着性:弱 IV > V+VI層。

H-17 東西土層断面

- 1 灰白色(10YR 8/2) [Ta-c] 堅密度:軟 粘着性:なし
- 2 明褐色(7.5YR 5/6) [VI層] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 3 褐灰色(7.5YR 4/1) 堅密度:軟 粘着性:中。
- 4 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 5 黒色(10YR 1.7/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 6 黒色(7.5YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 7 暗褐色(7.5YR 3/3) 堅密度:軟 粘着性:弱 H-20の掘り上げ土か。
- 8 褐色(7.5YR 4/3) 堅密度:軟 粘着性:弱 H-20の掘り上げ土か。
- 9 黒褐色(5YR 3/1) 堅密度:軟 粘着性:中
- 10 黒色(10YR 2/1) 堅密度:軟 粘着性:弱
- 11 黒褐色(7.5YR 3/1) 堅密度:軟 粘着性:中
- 12 黒褐色(10YR 3/2) [IV > V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 13 黒色(10YR 2/1) [IV > V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 14 黒色(7.5YR 1.7/1) [IV > V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 15 褐色(7.5YR 4/6) [V+VI層] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 16 にぶい褐色(7.5YR 5/4) (漸移層) 堅密度:堅 粘着性:弱



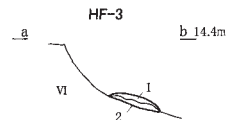
H-17 HF-1

- F 赤色(7.5R 4/6) 堅密度:軟 粘着性:弱
f 暗赤褐色(7.5R 3/2) 堅密度:軟 粘着性:弱



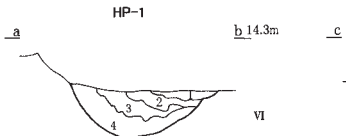
H-17 HF-2

- F 赤色(7.5R 4/6) 堅密度:軟 粘着性:弱
f 暗赤褐色(7.5R 3/2) 堅密度:軟 粘着性:弱



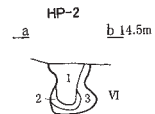
H-17 HF-3

- F 赤色(7.5R 4/6) 堅密度:軟 粘着性:弱
f 暗赤灰色(7.5R 3/1) 堅密度:軟 粘着性:弱



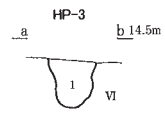
H-17 HP-1

- 1 暗赤褐色(5YR 3/2) [IV > VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 2 黒色(7.5YR 1.7/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 3 黒褐色(7.5YR 3/2) [IV > VI] 堅密度:軟 粘着性:中
- 4 にぶい褐色(7.5YR 5/4) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:中



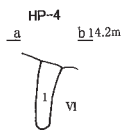
H-17 HP-2

- 1 黒褐色(10YR 3/2) [IV > VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 2 褐色(7.5YR 6/8) [VI層] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 3 暗褐色(7.5YR 3/3) [VI > IV] 堅密度:堅 粘着性:弱



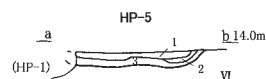
H-17 HP-3

- 1 黒褐色(10YR 2/3) [IV > VI] 堅密度:軟 粘着性:弱



H-17 HP-4

- 1 黒色(10YR 2/1) 堅密度:しよ 粘着性:なし。

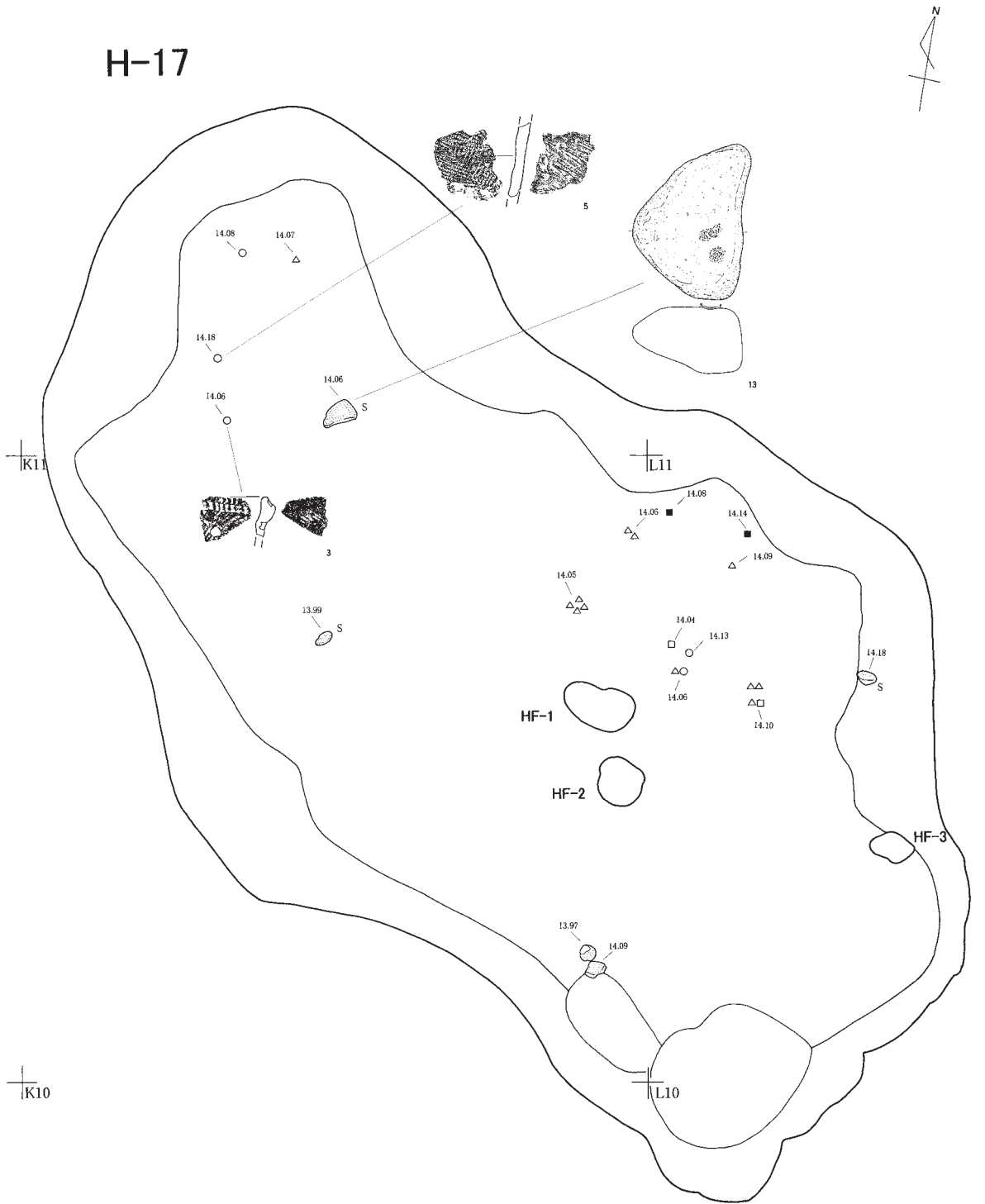


H-17 HP-5

- 1 にぶい褐色(7.5YR 5/4) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 2 黒褐色(10YR 3/1) [VI > IV] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 3 褐色(7.5YR 6/8) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱



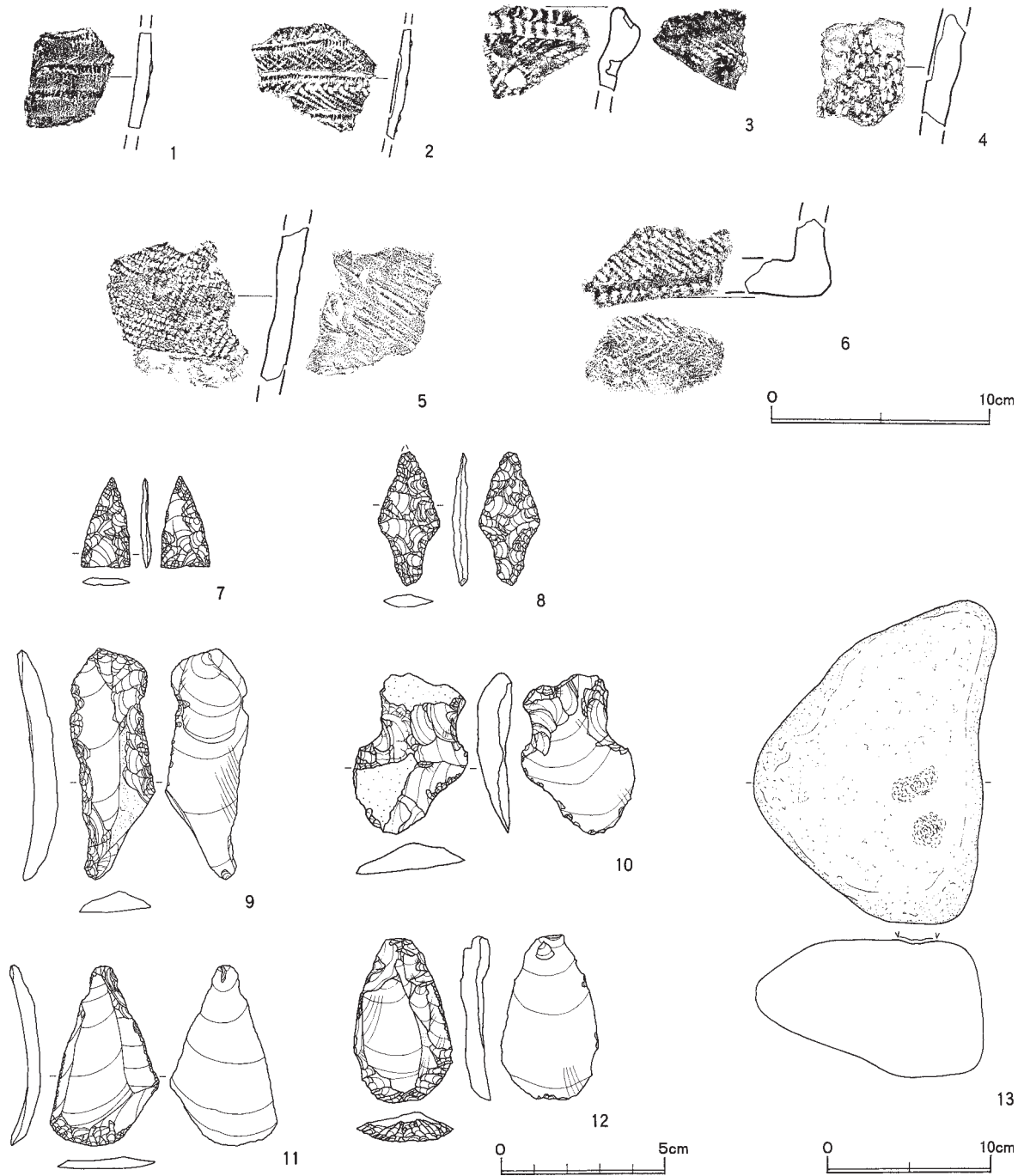
図 III-61 H-17(2)



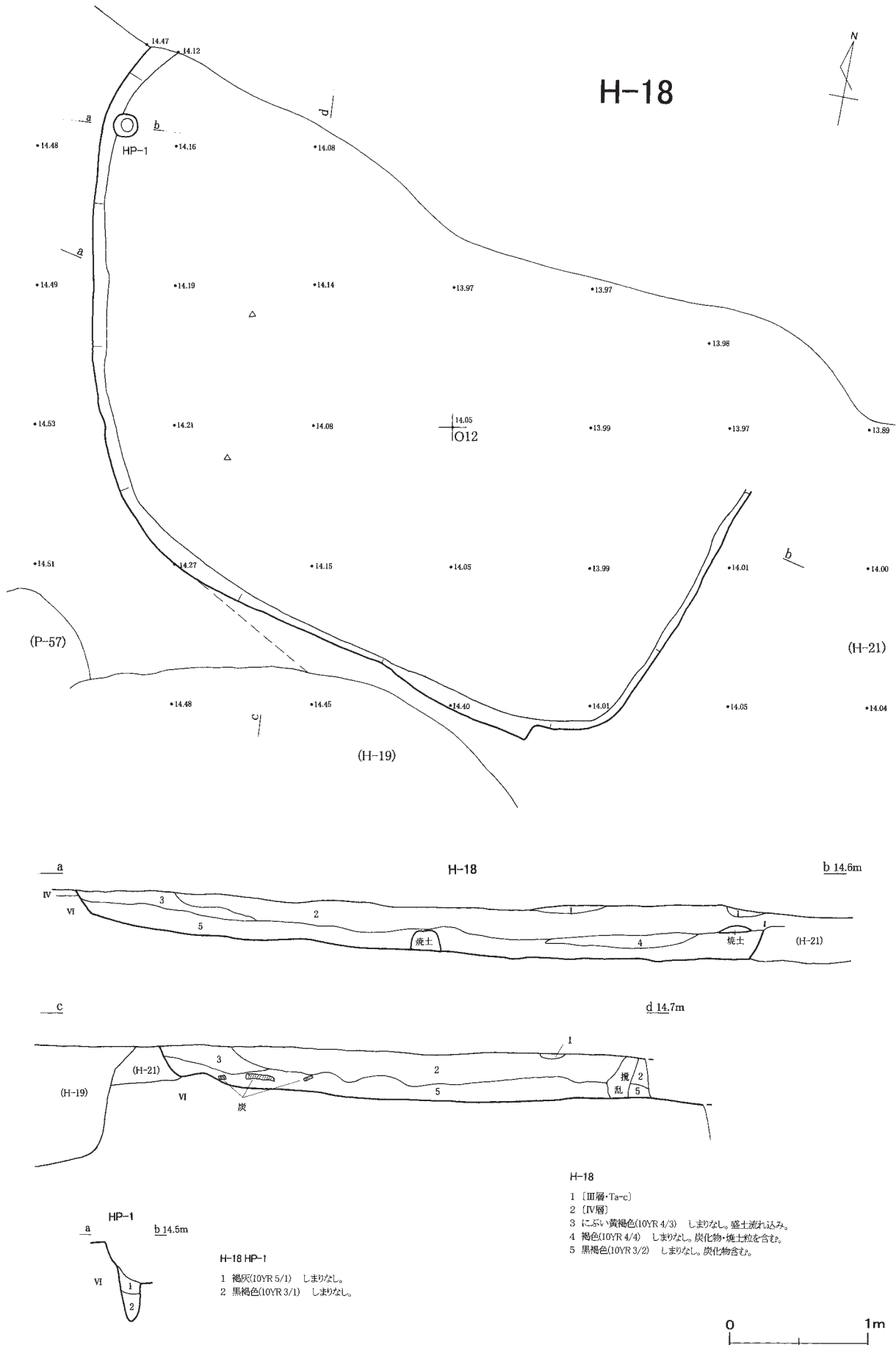
- ...土器片
- ▲△...剥片石器・剥片
- ...礫石器・礫

※白ヌギは床面直上出土

図Ⅲ-62 H-17(3)



図Ⅲ-63 H-17出土の遺物



図III-64 H-18(1)

H-18 炭化材・遺物出土状況図



図Ⅲ-65 H-18(2)

H-18 [図Ⅲ-64~66、図版25・78、口絵8]

位置：O12・13、N12・13区

平面形：不整形

規模：5.30×(3.14)／5.16×(3.00)／0.54m

長軸方位：N-59° W

確認・調査：1層を除去した段階で、黒色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

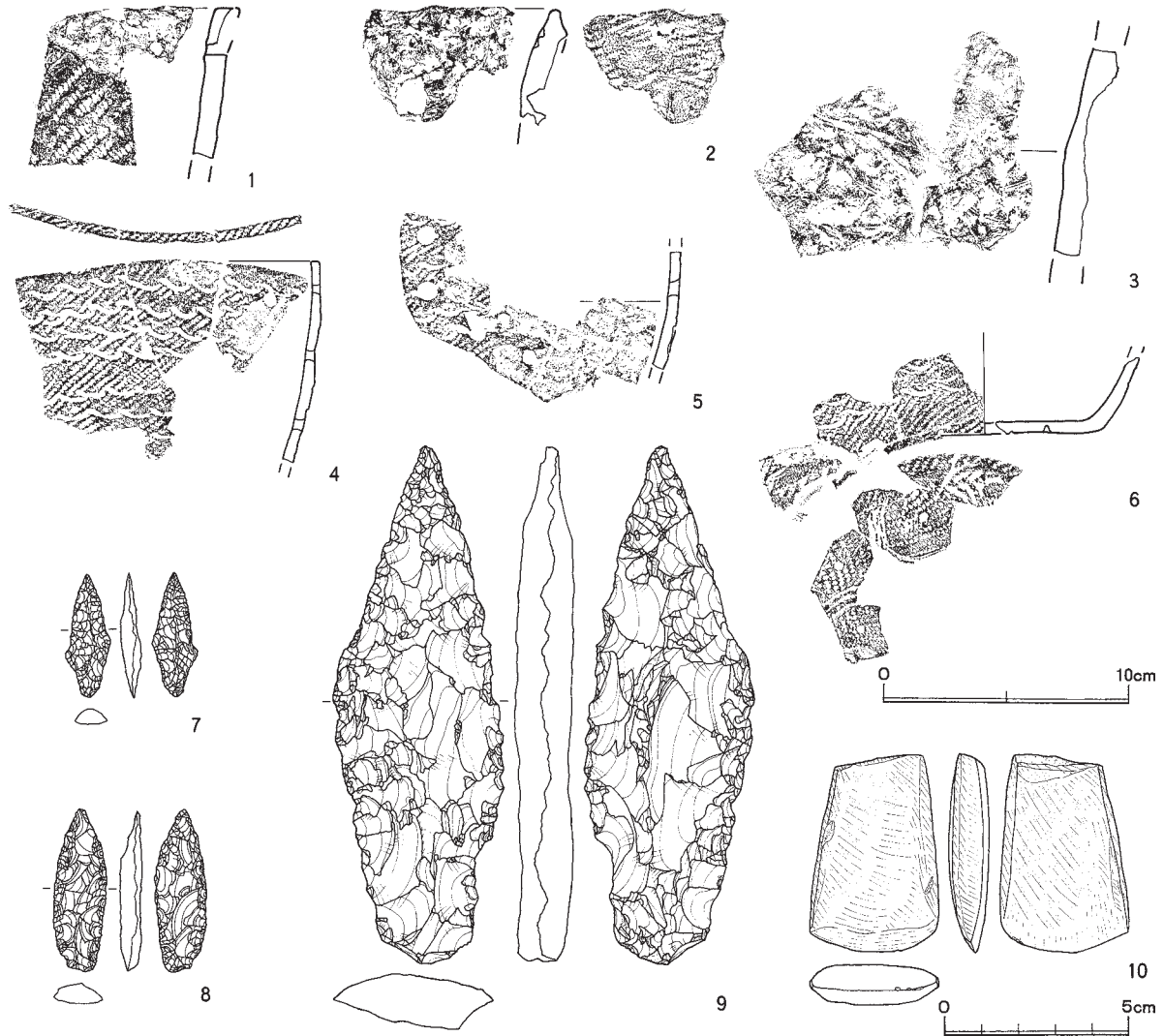
覆土：上位（1・2層）は自然堆積層で、下位（4・5層）は焼土粒や炭化物を含む層が床面まで堆積している。

床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急に立ち上がる。壁の南・東側はH-21住居の床を壊して造られている。床・壁の北側は崩落により失われている。

付属遺構：北西側で小ピットが検出された（HP-1）。断面が杭状で、柱穴とみられる。

遺物出土状況：西側の床直上から石槍・石斧がそれぞれ1点出土した。

出土遺物の総数は97点で、土器等が60点・石器等が35点・礫が2点である。土器等はI群b-1類5点・I群b-4類8点・Ⅲ群b類~Ⅳ群a類9点・V群c類36点などのほか、焼成粘土塊1点が出土している。石器等は上記のほか、石鏃2点・石錐3点・スクレイパー1点・剥片類27点が出土して



図Ⅲ-66 H-18出土の遺物

いる。

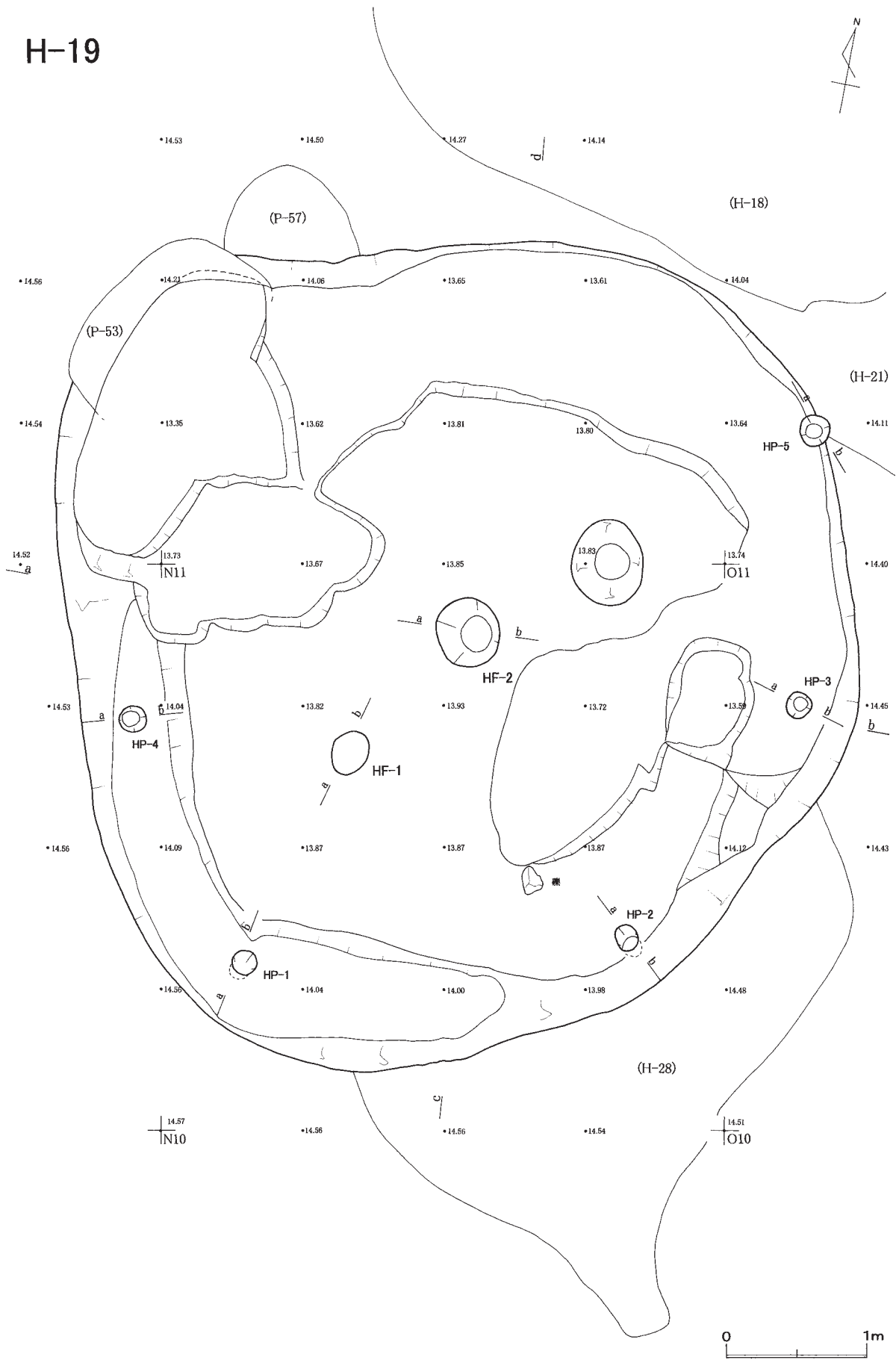
炭化材は床面の中央から東側にみられる。井桁状に出土したものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、全てコナラ属である。

掲載遺物：1～3は北筒式。表面が剥落しているものが多い。2は断面三角形の口縁部で、北筒Ⅱ式である。3は全面が剥落しており胎土が観察できる。繊維を多量に含んでいる。4～6は緑ヶ岡式。同一個体の可能性がある。器壁が薄く、内面調整は丁寧である。4は角形口唇上にも細かい撚りの縄文が施文されている。4・5には補修孔が多数観察される。6の底面には刺突を中心とした沈線による円文が複数施されている。

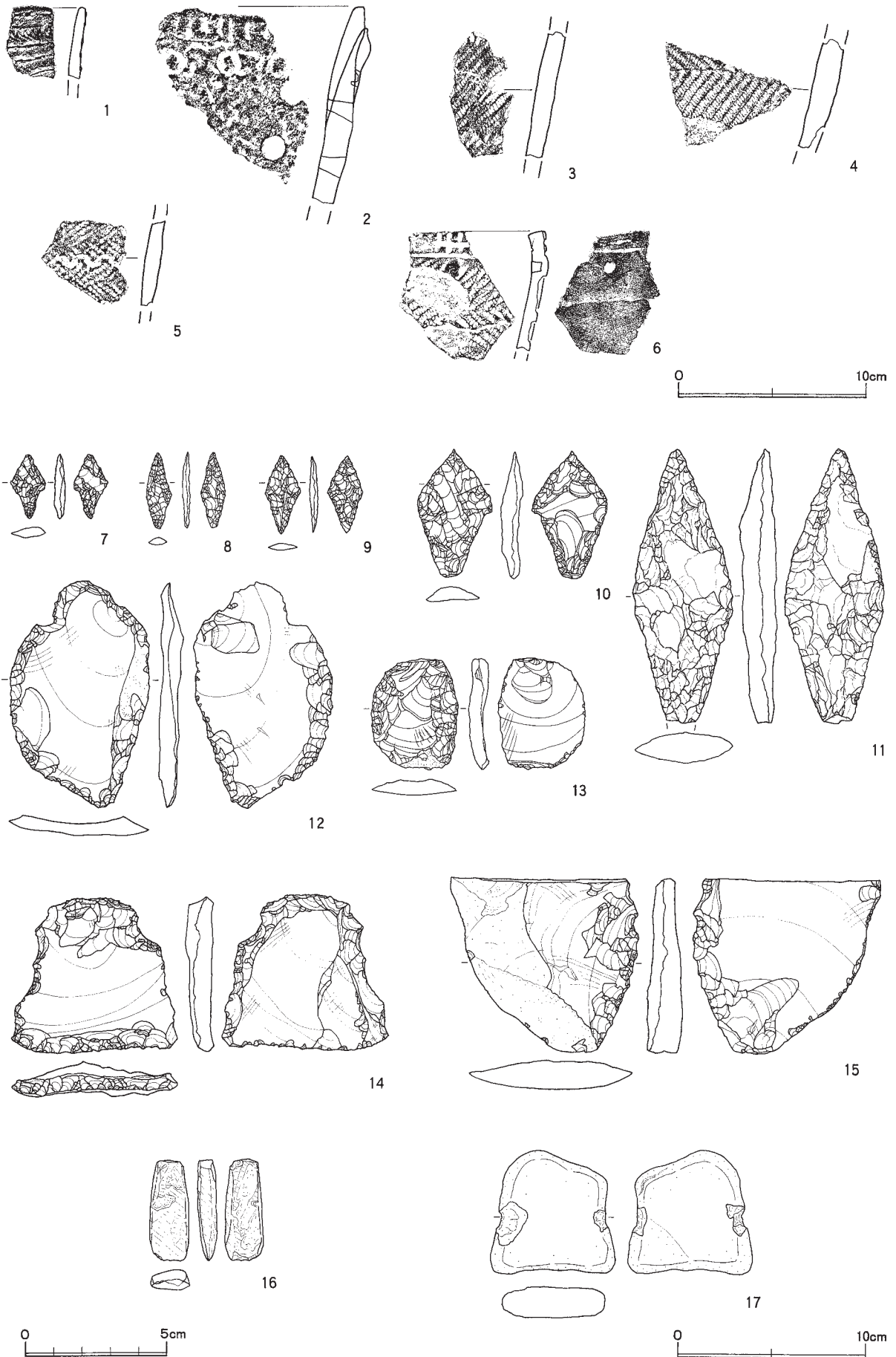
7・8は石鏃。7は小型のもので、かえしの位置が左右非対称である。8は細身で厚みがある。石錐の可能性もある。9は大型の石槍。両面調整であるが、全体的に比較的粗い調整である。10は床面直上から出土した石斧。全面磨製で、刃部は鋭利である。基部には擦り切り痕があり、当初の長さを減じたものかもしれない。

重複・時期：H-21住居跡と重複する。本住居跡が新しい。時期は出土した石器から判断して、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。
(佐藤)

H-19



図Ⅲ-67 H-19(1)



図Ⅲ-69 H-19出土の遺物

H-19 [図III-67~69、図版26・78]

位置：M11・12、N11・12、O11・12区

平面形：隅丸方形

規模：6.20×5.95/6.12×5.52/0.96m

長軸方位：N-22° E

確認・調査：I層を除去した段階で、Ta-c火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：上位（1・2・3層）は自然堆積層で、下位（6・7層）は炭化物を含む層が堆積している。

床面・壁：床は凹凸があり、北・東側は大きく窪む。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構：北側を除く壁際から柱穴とみられる小ピットが検出された（HP-1~5）。床からは炉跡と見られる焼土が2か所検出された（HF-1・2）。いずれも浅い掘り込みをもつ。

遺物出土状況：覆土下位から、スクレイパーが9点出土した。

出土遺物の総数は617点で、土器等が74点・石器等が534点・礫が9点である。土器等はI群b-2類1点・I群b-4類54点・III群b類~IV群a類16点（うちIV群a類2点）・IV群b類2点のほか、焼成粘土塊1点が出土している。石器等は石鏃7点・石槍3点・つまみ付きナイフ5点・スクレイパー20点・両面調整石器9点・石斧等2点・砥石1点・剥片類487点が出土している。

掲載遺物：1は中茶路式。2~5は北筒式。2は断面三角形の肥厚帯上（口唇上）に縦位の沈線（刺突）が連続する。口唇下に環状の円形刺突がめぐる。4は羽状縄文、5は綾絡文がみられる。6は刻み列と突瘤が施される、エリモB式の口縁部。角形口唇である。

7~10は石鏃。いずれも菱形に近い形状である。7~9は小型のもので、8は細身で薄い。11は石槍。基部とみられる側の端部を欠く。やや広い剥離面も見られるが、全体的には細かい剥離による両面調整が行われている。12はつまみ付きナイフ。やや大型で扁平な剥片を素材とし、周縁に細かい調整を行っている。えぐりは不明瞭である。13~15はスクレイパー。13は転礫素材のもの。14はエンドスクレイパー。下端部に直線的な刃部が設けられ、細かい調整が行われている。15は折損した大型剥片の側縁に細かい調整が施されている。16は石のみ。緑色泥岩製で全面研磨されている。刃部はわずかに潰打している。17は石錘。平滑な安山岩の礫が用いられている。

重複・時期：H-21・28・P-53・57と重複する。H-21・28・P-57が旧く、P-53が新しい。時期は出土した遺物から判断して、縄文時代中期末~後期初頭と考えられる。（佐藤）

H-20 [図III-70・71、図版27・79]

位置：L10・11、M10・11区

平面形：隅丸方形

規模：3.64×3.18/2.99×2.55/0.58m

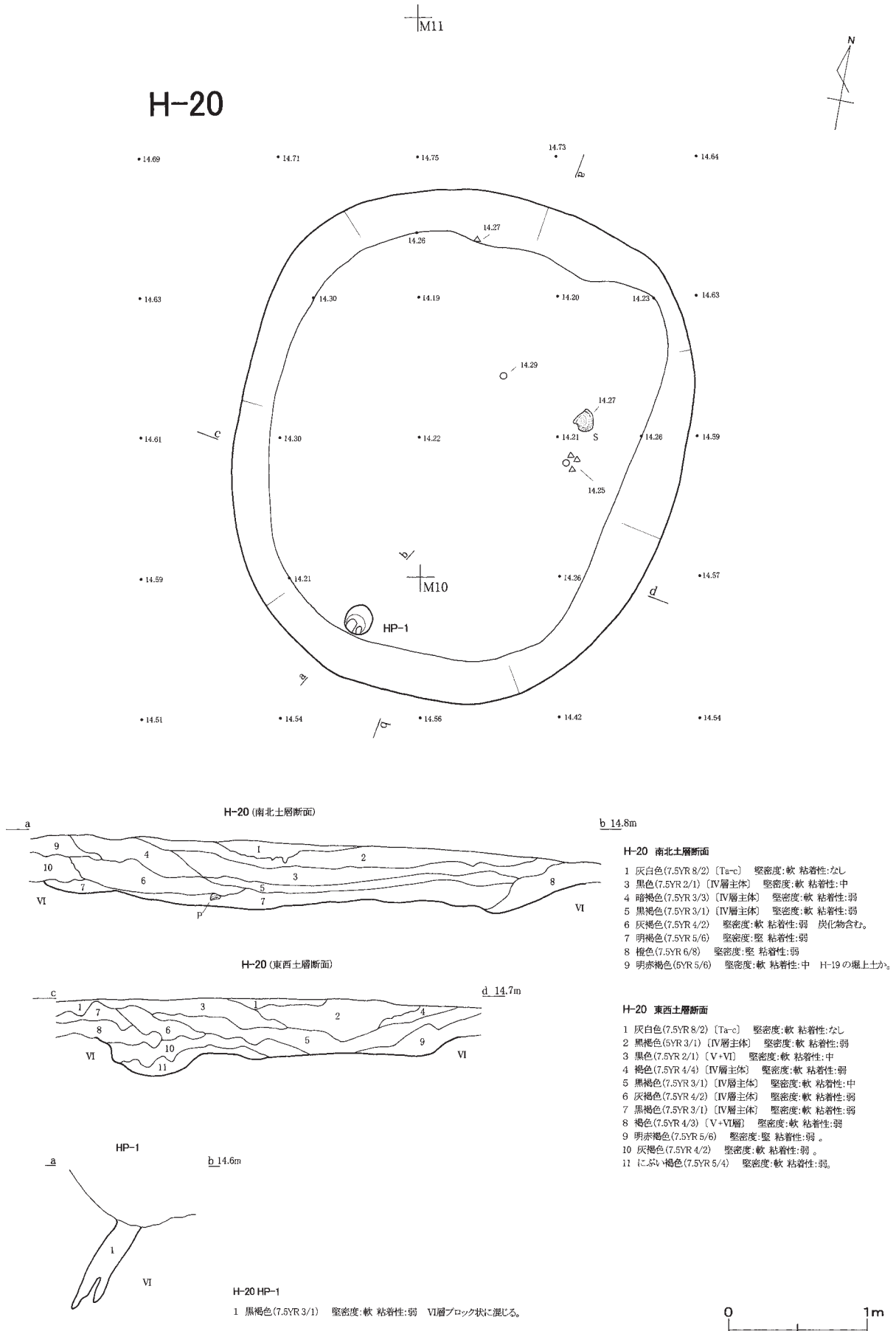
長軸方位：N-9° E

確認・調査：I層を除去した後に、IV層の上面でTa-c火山灰が堆積する落ち込みを確認した。火山灰の分布は小規模で、H-17の東側に位置する。この落ち込みの中心に直交するように土層観察用のベルトを設定してトレンチ調査を行った。その結果、約40~50cm掘り下げたところで黄褐色土の床面を確認した。

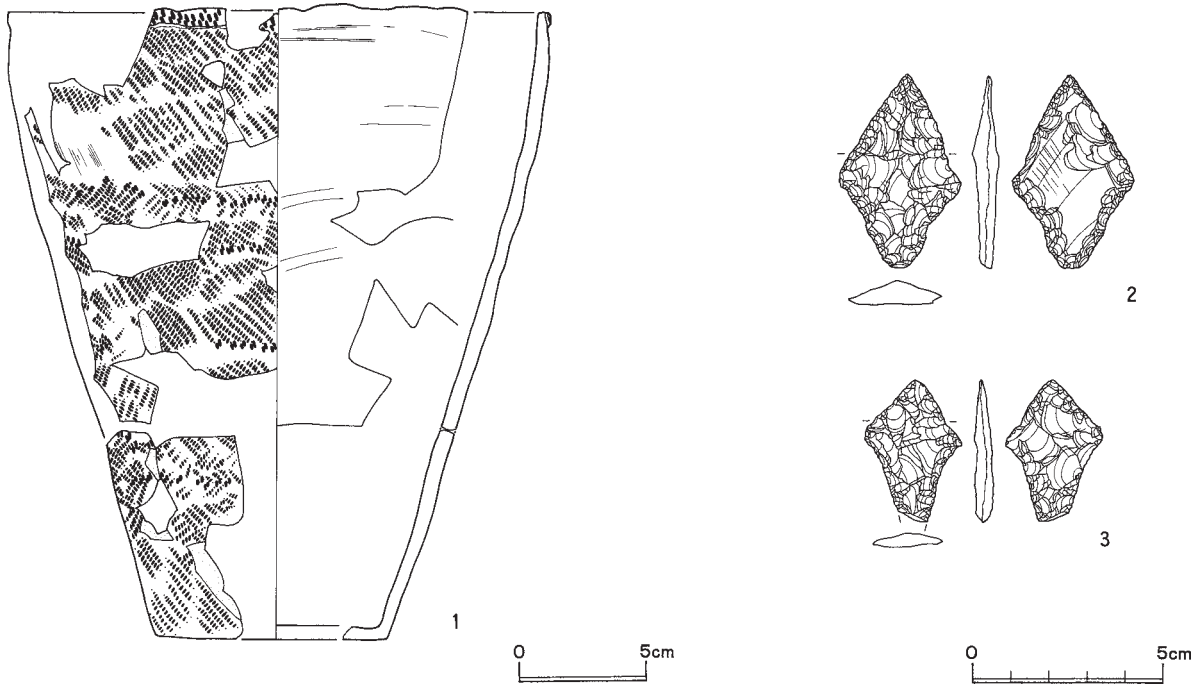
覆土・掘上土：上面はTa-c火山灰の混じる黒褐色土で覆われ、これより下位はIV層が主体の黒褐色土で構成されている。床面直上はしまりの強い明褐色土が堆積している。

床面・壁：床面はほぼ平坦であるが西隅に径約50cm、深さ約20cmの浅い落ち込みがある。壁面は北西側が明瞭ではなく、南東側で壁の立ち上がりを確認した。

付属遺構：床面南端の壁際で柱穴HP-1を検出した。柱穴は先端部が南側に向かって斜めに立てられており、深さは約70cmを測る。先端部が尖り、二つに分かれていることが観察された。このことか



図III-70 H-20



図III-71 H-20出土の遺物

ら建て直し、または再度入れなおした事が推察される。この他に柱穴等は検出していない。

遺物出土状況：出土遺物の総数は92点で、土器が63点、石器等が28点である。内訳はI群土器が61点、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器が2点出土している。床面出土のI群土器は3点で、他はすべて覆土中からの出土である。Ⅲ群b類～Ⅳ群a類土器で床面出土のものはなく、すべて覆土中から出土した。石器等では石鏃1点・石槍1点・スクレイパー3点・剥片19点などである。

掲載遺物：1は中茶路式。H-17覆土出土の土器片が多数接合している。2・3は石鏃。2は住居跡外縁のHM層から出土した。H-16に関する可能性がある。3はかえしがやや弱い。

時期：一本柱構造、出土遺物等から判断すると、縄文時代早期が考えられる。

(笠原)

H-21 [図III-72・73、図版27・79]

位置：N12・13、O12・13区

平面形：長方形

規模：7.54×(7.54)／(4.02)×(3.93)／0.42m

長軸方位：N-60° W

確認・調査：I層を除去した段階で、Ta-c火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のセクションベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：上位(1・3層)は自然堆積層で、下位(4・5・6層)は炭化物・焼土粒を含む層が堆積している。

床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。北・東側の床は崩落している。南側の壁・床の一部はH-19構築時に壊されている。

付属遺構：床面中央と東端に炉跡が検出された(HF-1・2)。HF-1は地床炉。HF-2は掘り込みをもつ。断面がフラスコ状になることからI群b類土器期の土坑を再利用したものと考えられる。

HF-2を囲むように4本の支柱穴が検出された。

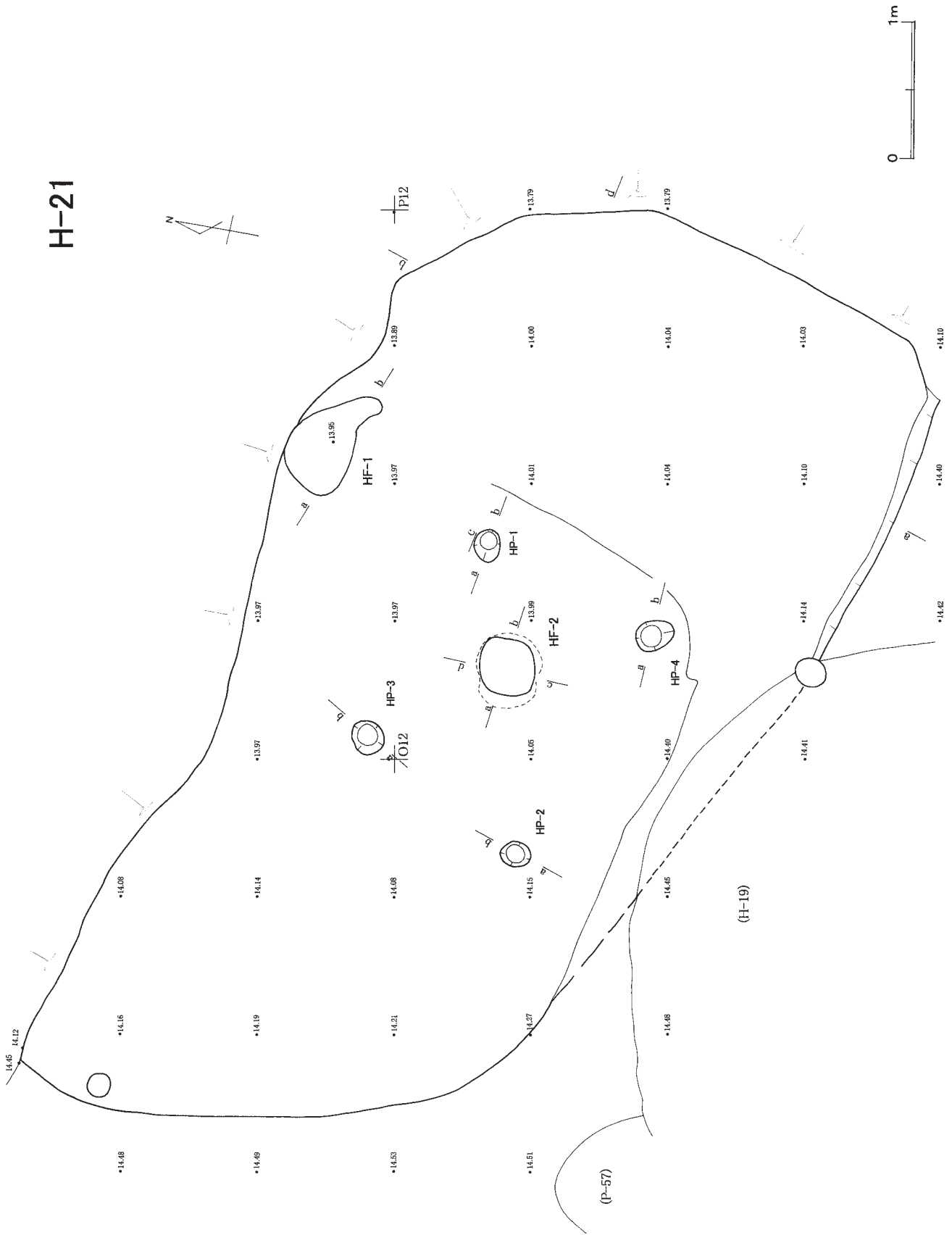
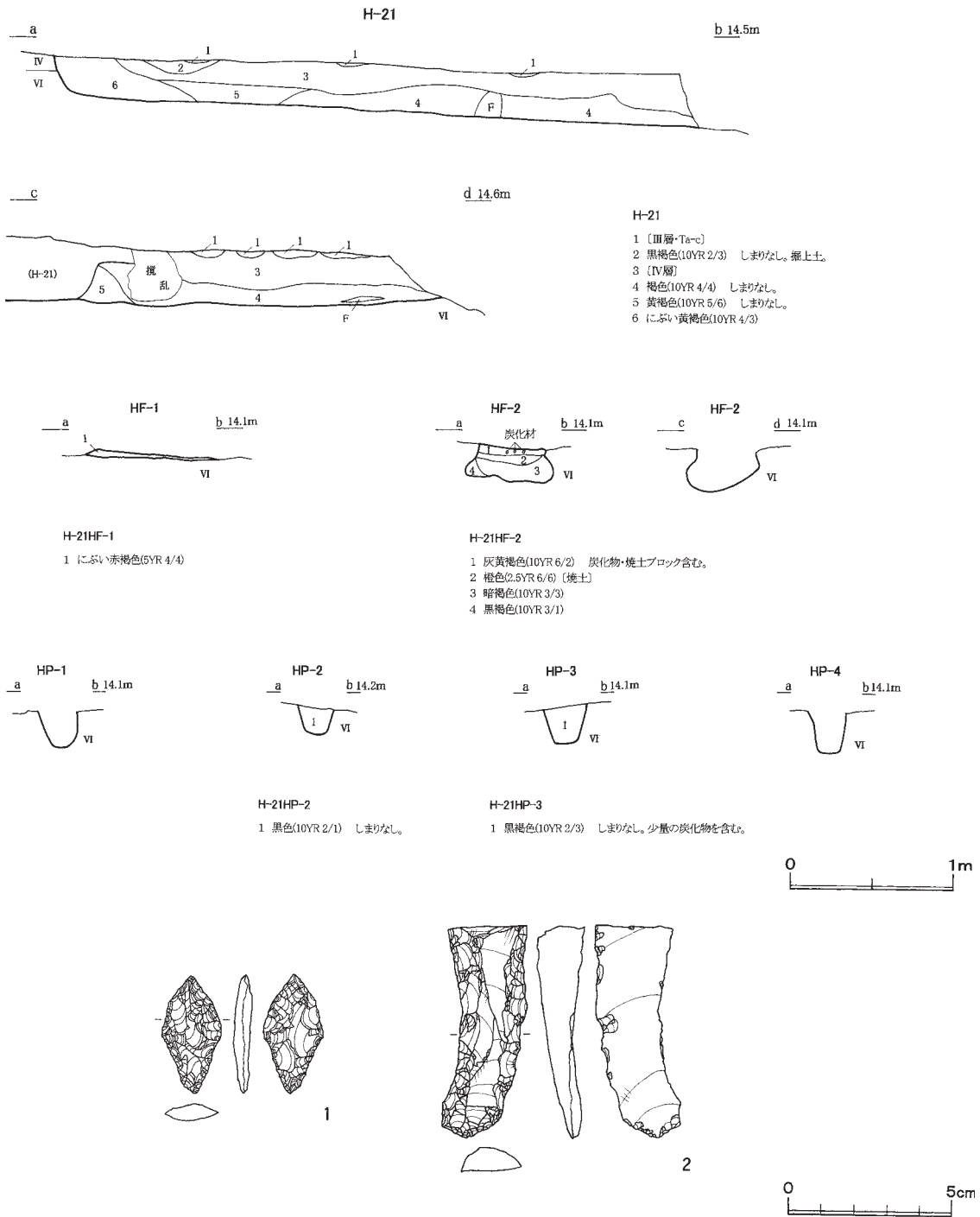


図 III-72 H-21(1)



図Ⅲ-73 H-21(2)・H-21出土の遺物

遺物出土状況：出土遺物の総数は25点で、土器が11点・石器等が13点・礫が1点である。土器はI群b-2類1点・I群b-4類3点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類3点・Ⅳ群b類2点・Ⅳ群c類1点・Ⅴ群c類1点が出土している。石器等は石鏃1点・スクレイパー5点・石斧1点・剥片6点が出土している。出土遺物：1は石鏃。小型で菱形に近い。2はスクレイパー。湾曲する縦長の剥片が素材である。重複・時期：H-18・19と重複する。H-18・19が新しい。時期は周辺の遺構・遺物から判断して、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。

(佐藤)

H-22〔図Ⅲ-74・75、図版28・79、口絵13〕

位置：N19・20区

平面形：不整楕円形

規模：4.26×3.28／3.76×2.89／0.36m

長軸方位：N-4°W

確認・調査：平成19年の25%調査の際、N20区の包含層を掘り下げ、暗褐色土の混じる土層を検出した。平成21年に周辺をVI層上面まで掘り下げ、黒色～褐色の多様な土層の範囲を検出した。褐色土や暗褐色土がドーナツ状に複数連続し、その間に黒色土は黒色土が入り込んでいる。数多くの遺構が重複しているものとみられ、それらを縦貫・横断するように土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床面とみられる平坦面や壁の立ち上がりを各所で確認したが、この時点では各遺構の範囲の確認には至らなかった。遺構の境界とみられる位置には随時トレンチを設定し、土層の堆積をもとに順次掘り下げた。床面および壁の立ち上がりをそれぞれ検出し、H-22、P-43・44・45を認定した。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。水洗選別により種子・骨片を検出した。種子の同定を委託したところ、アカネ科？という結果であった（Ⅴ章5）。骨片については、水洗選別後の簡易的な同定作業の結果、サケ科の椎骨が多数あり、歯も含まれていた（Ⅲ章8、表Ⅲ-3）。手取り回収の骨片では、シカの四肢骨片の焼骨がある。また焼土出土の炭化材片の年代測定を行った（Ⅴ章6）。

覆土：上位の1層は自然堆積層の黒色土で、中位の2層はロームを主体とする褐色～暗褐色土が厚く堆積する。下位の3層はローム混じりの黒色土、4層はしまりの弱い暗褐色土層である。

床面・壁：床は楕円形の平坦面の組み合わせで、各々段差がある。北東部の落ち込みが最も低く、続いて南側、中央東部、南西部、そしてP-45側の西部が最も高い。それぞれ別の遺構であることも考えられたが、覆土の堆積状況から同じ遺構とした。壁の立ち上がりは東部では急であるが、全体的には緩やかである。

付属遺構：焼土1か所（H-22HF-1）を検出した。

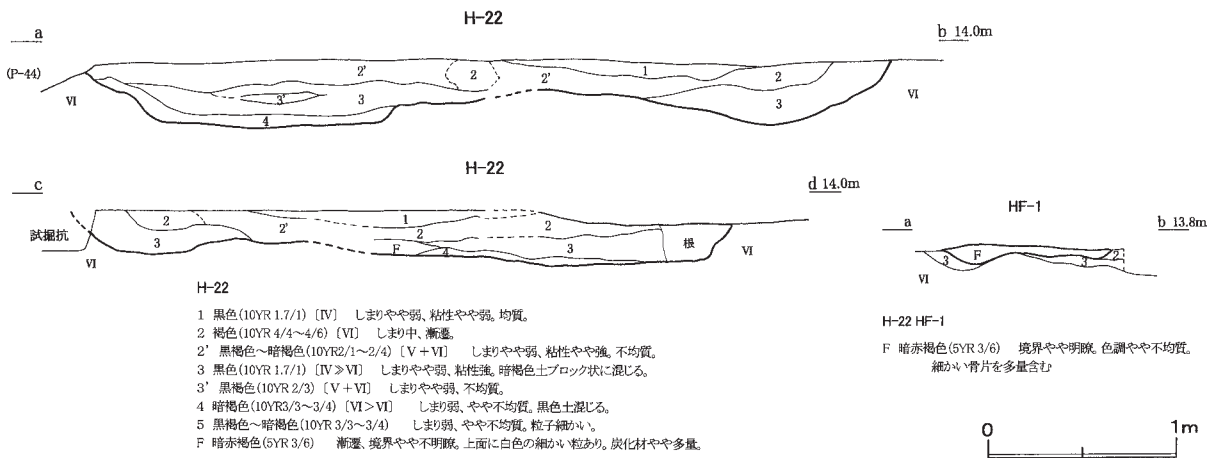
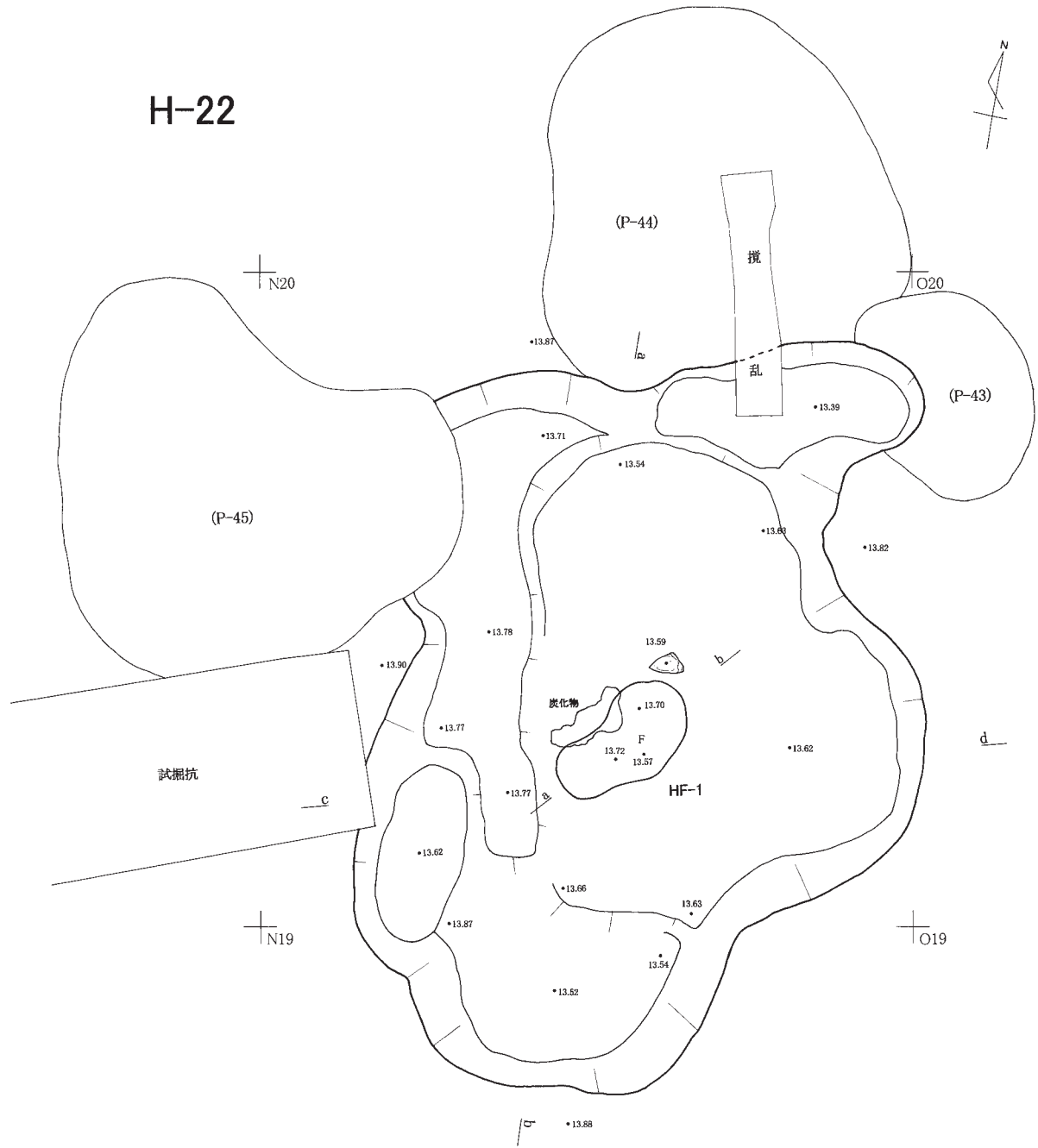
〔焼土〕H-22HF-1は、住居跡の中央付近に位置する。焼成面は大きき92×53cmの不整楕円形で、被熱層は覆土最下層の4層～VI層、層厚は最大11cmである。焼成面は暗赤褐色を呈し、炭化物や細かい骨片を多量含む。

遺物出土状況：覆土から遺物が多数出土している。特に微細な剥片が各層に多数含まれている。

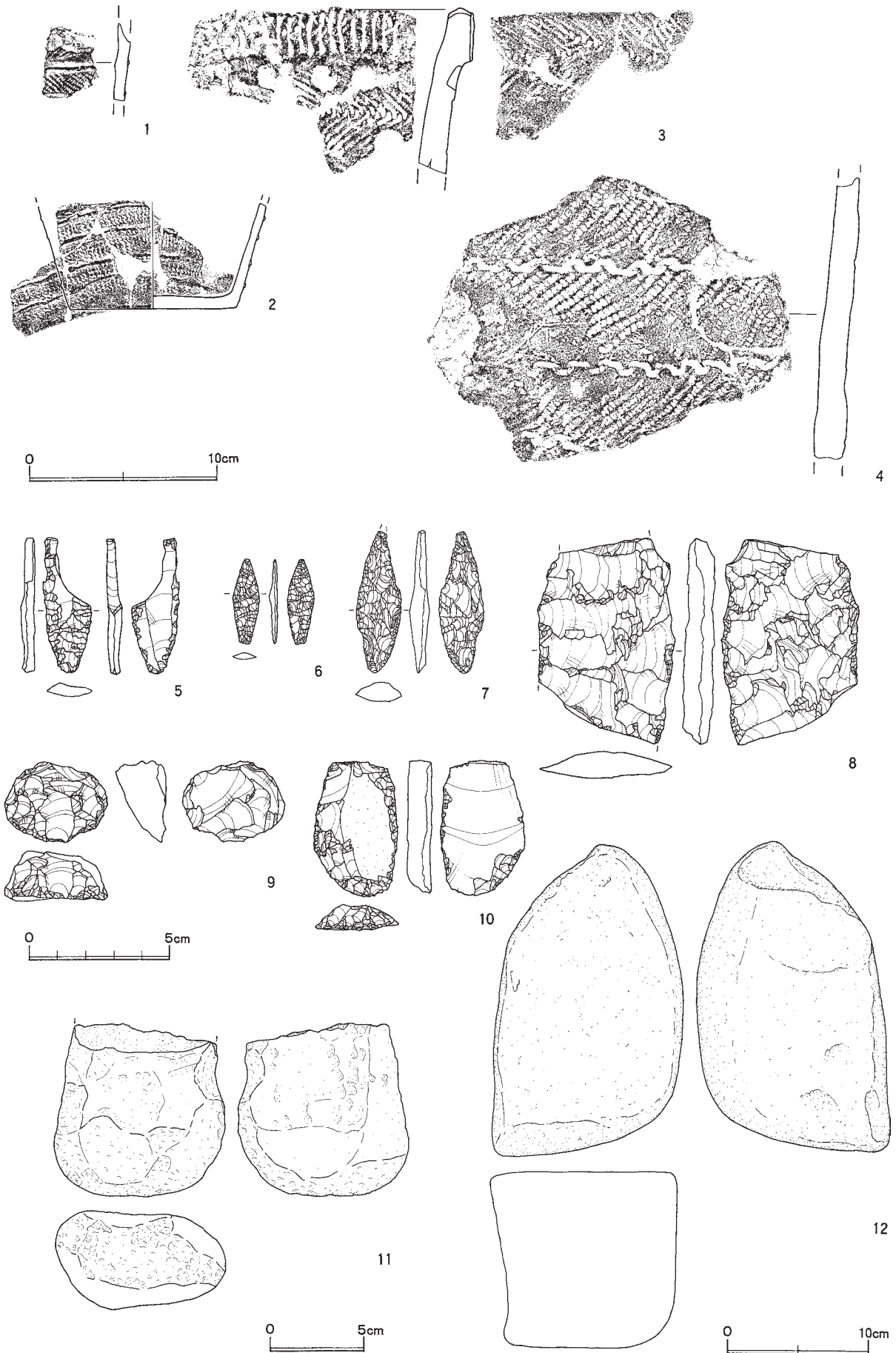
出土遺物の総数は1,020点で、土器等が219点・石器等が798点・礫が3点である。土器等はI群b-1類5点・I群b-4類101点・Ⅲ群b類～IV群a類109点（うちⅢ群b類13点・IV群a類10点）・IV群b類1点などのほか、焼成粘土塊1点が出土している。石器等は削片1点・石鏃4点・石槍2点・石錐1点・つまみ付きナイフ1点・スクレイパー12点・両面調整石器1点・砥石片9点・たたき石1点・すり石1点・台石等1点・剥片類636点が出土している。

掲載遺物：1・2は中茶路式。2は平底で立ち上がりは急である。平行する細貼付帯が底部付近まで配され、間は撚糸文が充填されている。3・4は北筒Ⅱ式。3はやや薄い肥厚帯上に縦位の沈線（刻み）が連続する。口唇下に径1.2cm程の円形刺突がめぐる。内面口唇部にも結束羽状縄文が施されている。4は綾絡文が明瞭である。土器片右側に、幅2cmほどの範囲に赤褐色部分が縦位に観察される。赤色顔料または焼土粒が付着しているものと観察される〔口絵13の5〕。

5は彫器削片。6・7は石鏃。6は小型柳葉形で薄い。7は上半右側が薄くなっており、再調整が行われた可能性がある。8は石槍。折損し、中央部のみが残存する。両面調整が行き届いている。9・10はエンドスクレイパー。9は転礫の半割礫が素材。10は背面に原石面が広く残る。11はたたき石。



図III-74 H-22



図Ⅲ-75 H-22出土の遺物

凝灰岩質で、調整と使用によるものとみられる敲打痕が多数観察される。12は床面直上から出土した台石。平坦面にわずかに敲打痕が観察される。

重複・時期：P-43・44・45と重複し、いずれも当遺構の方が古い。住居跡の形状や出土遺物から、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期と考えられる。(阿部)

H-23〔図Ⅲ-76~79、図版29・30・80、口絵6〕

位置：M6・7区

平面形：楕円形

規模：(4.24)×(3.98)／(3.80)×(3.46)／0.62m 長軸方位：N-51° E

確認・調査：I層を除去した後に、M6区の調査区境界にかかる壁面とIV層の上面でTa-c火山灰が堆積する落ち込みを確認した。火山灰除去後、直下のIV層黒色土が緩やかに窪んでいる事が確認できた。この落ち込みを中心にして東西方向に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。

覆土を約50cm掘り下げたところから、焼土と炭化材の混じる赤色土を検出した。東側は調査区境界にかかっているため、全体は不明であるが、約2m×2mの範囲で焼土、炭化材が堆積していた。

確認面から約70cm掘り下げたところで硬く締まる明褐色土の床面を確認した。壁面はそこから急角度で立ち上がっている。中央に堆積する焼土を精査したところ、炭化材が良好な状態で含まれており、火災で天頂部等が崩落した際の構造材である事が推察される。

出土した炭化材について試料を採取し、植生や材の選択を推定するための樹種同定を行った。分析の結果はV章3に掲載した。また、放射性炭素年代測定の結果についてもV章6に示した。

覆土：上面はIV層主体の黒色土で覆われる自然堆積である。中位は主にV層とVI層が混在する明褐色～橙色土で構成されている。この層は炭化材を含む焼土を覆う堆積で、土屋根あるいは住居の壁材等を覆っていた土が崩落して堆積したもの、あるいは火災直後に二次的な要因で混入したものであることが推測される。また、南北の土層断面北側の壁際には、埋没過程で構築されたと思われる土坑P-61がある。南側の壁際には褐灰色土の三角堆積も観察された。

付属遺構：焼土が2か所、柱穴様ピットが1か所、土坑が1基である。焼土は床面中央から検出した。炭化物を含む。柱穴様ピットは北側壁面の立ち上がり部分で認められた。確認面からの深さが浅く、判然としない。土坑は床面のやや北側に位置し、長径が約110cm、短径が約70cmで、深さは約16~18cmである。覆土は黒色土が主体である。

遺物出土状況：遺物は床面直上から石錐・スクレイパー等計12点出土した。他は覆土中からの出土である。

出土遺物の総数は688点で、土器が56点・石器等が628点である。内訳は、土器がⅢ群b類~Ⅳ群a類土器39点(うちⅣ群a類30点)ほか、石器等が石鎌4点・石槍1点・石錐1点・つまみ付きナイフ4点・スクレイパー12点・剥片599点などである。

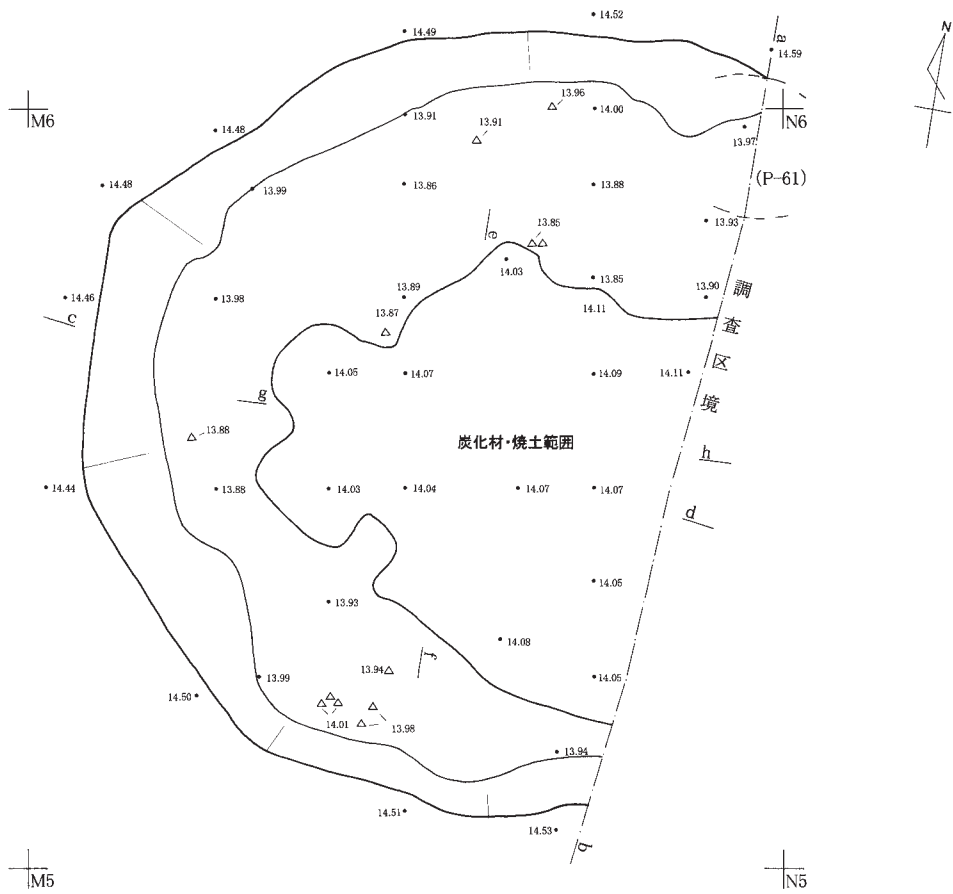
掲載遺物：1は北筒Ⅱ式。縦位の細い沈線が施されている。

2は石錐。機能部を欠く。3~5は石鎌。3は三角形、4・5は菱形に近いもの。5は腹面の主要剥離面が目立ち、基部に原石面が残る。6は大型の石槍。木葉形で両端が尖る。ていねいに両面加工を施し薄身に仕上げている。7はつまみ付きナイフ。つまみ部は幅広で、弱いえぐりが両側縁にみられる。8~10はスクレイパー。9・10は石刃素材と思われる。9は床面付近から出土した。両側縁および下端に細かい調整が連続する。

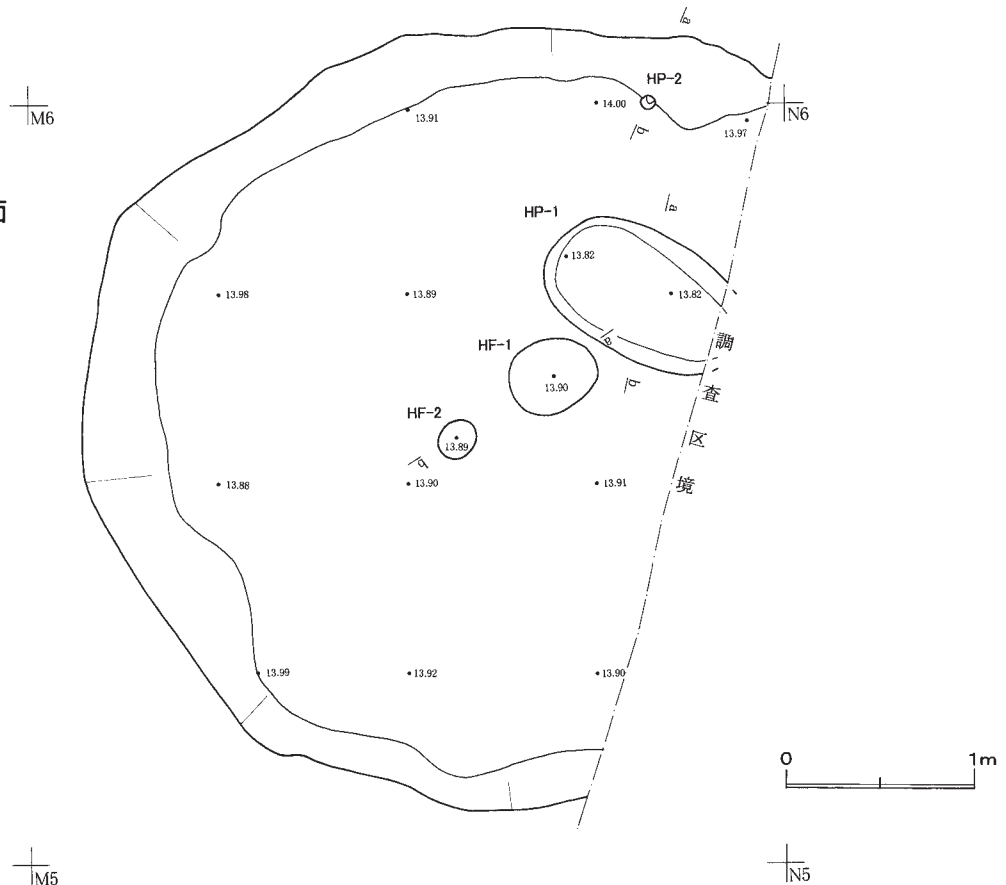
時期：出土遺物等から判断すると縄文時代中期末~後期初頭の北筒Ⅱ式期と考えられる。

(笠原)

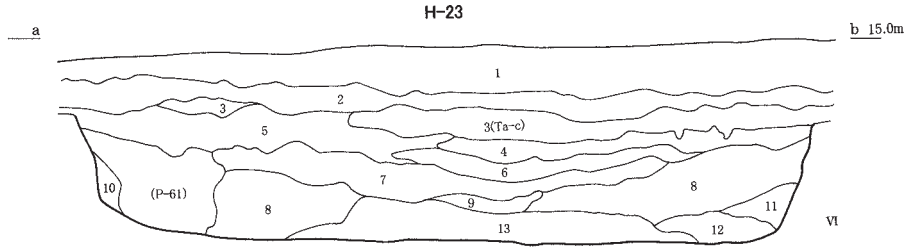
H-23



H-23 床面

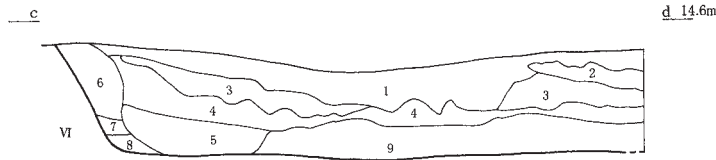


図Ⅲ-76 H-23(1)



H-23 南北土層断面

- 1 黒褐色(10YR3/1) [表土] 樹根多し。
- 2 黒色(10YR2/1) [II層] 堅密度: しよう 粘着性: 中
- 3 灰白色(7.5YR8/2) [Ta-c] 堅密度: 軟 粘着性: なし
- 4 黒色(10YR1.7/1) [IV層] 堅密度: 軟 粘着性: 中
- 5 暗褐色(7.5YR3/3) [IV > V+VI] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 6 灰褐色(7.5YR4/2) 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 7 黒色(7.5YR2/1) 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 8 橙色(7.5YR6/8) 堅密度: 堅 粘着性: 弱
- 9 褐色(7.5YR4/3) [V+VI] 堅密度: 堅 粘着性: 弱 焼土混じる。
- 10 暗褐色(10YR3/3) 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 11 褐灰色(7.5YR4/1) 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 12 褐灰色(10YR4/1) [VI > IV] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 13 赤色(10YR5/8) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 焼土、炭化材を多く含む。上屋の崩落土か。



H-23 東西土層断面

- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV層] 堅密度: 軟 粘着性: 中
- 2 灰褐色(7.5YR 4/2) 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 3 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV > V+VI] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 4 明褐色(7.5YR 5/6) 堅密度: 堅 粘着性: 弱
- 5 橙色(7.5YR 6/8) 堅密度: 堅 粘着性: 弱 炭化物、焼土混じる。
- 6 暗褐色(10YR 3/3) [IV > V+VI] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 7 褐色(7.5YR 6/8) [VI層] 堅密度: 堅 粘着性: 弱
- 8 暗褐色(10YR 3/3) [IV > V+VI] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 9 赤色(10YR 5/8) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 焼土、炭化材を多く含む。上屋の崩落土か。



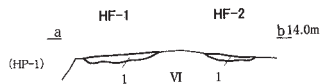
H-23 炭化材包含層東西土層断面

- 1 赤色土 10YR5/8 堅密度: 軟 粘着性: 弱 焼土、炭化材を多く含む。上屋の崩落土。
- 2 褐灰色土 5YR4/1 堅密度: 軟 粘着性: 弱 炭化材を多く含む。上屋の崩落土。
- 3 橙色土 7.5YR6/6 堅密度: 堅 粘着性: 弱 VI層。



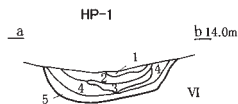
H-23 炭化材南北土層断面

- 1 赤色(10YR 5/6) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 焼土、炭化材を多く含む。上屋の崩落土か。
- 2 明褐色(7.5YR 5/6) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 焼土、炭化材を多く含む。上屋の崩落土か。
- 3 褐灰色(5YR 5/1) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 炭化材を含む。上屋の崩落土か。
- 4 橙色(7.5YR 6/6) [VI層] 堅密度: 軟 粘着性: 弱



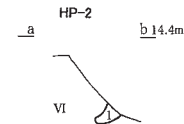
H-23 HF-1-2

- 1 赤色(10YR4/6) 堅密度: 軟 粘着性: 弱 炭化物含む。



H-23 HP-1

- 1 褐色(7.5YR 4/3) [VI > IV] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 2 黒色(10YR 2/1) 堅密度: しよう 粘着性: 中
- 3 黒色(7.5YR 1.7/1) 堅密度: しよう 粘着性: 中
- 4 黒褐色(7.5YR 3/1) [VI > IV] 堅密度: 軟 粘着性: 弱
- 5 褐色(7.5YR 6/8) [VI > IV] 堅密度: 軟 粘着性: 弱



H-23 HP-2

- 1 黒褐色(7.5YR 3/1) 堅密度: 軟 粘着性: 弱

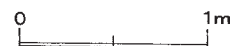
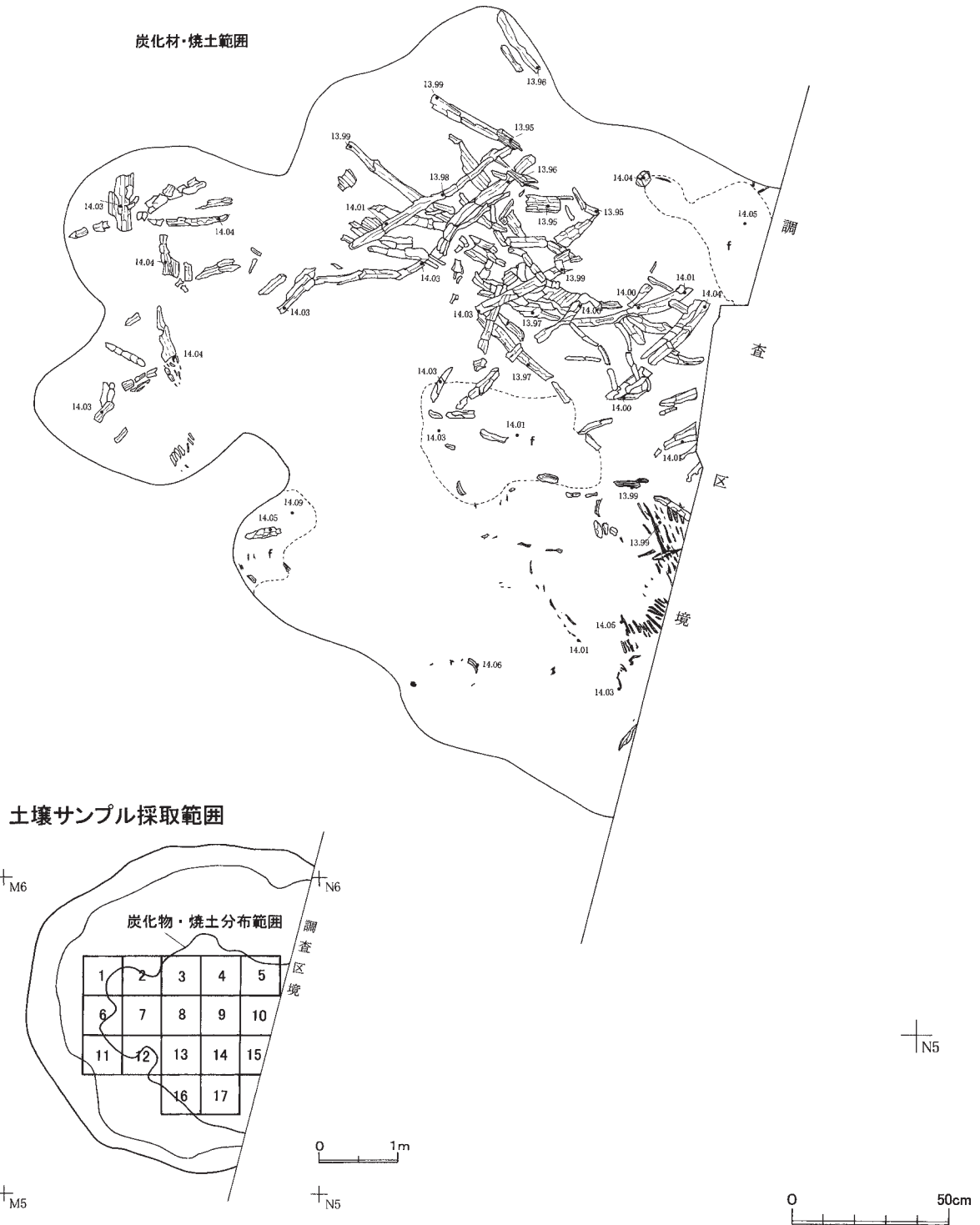
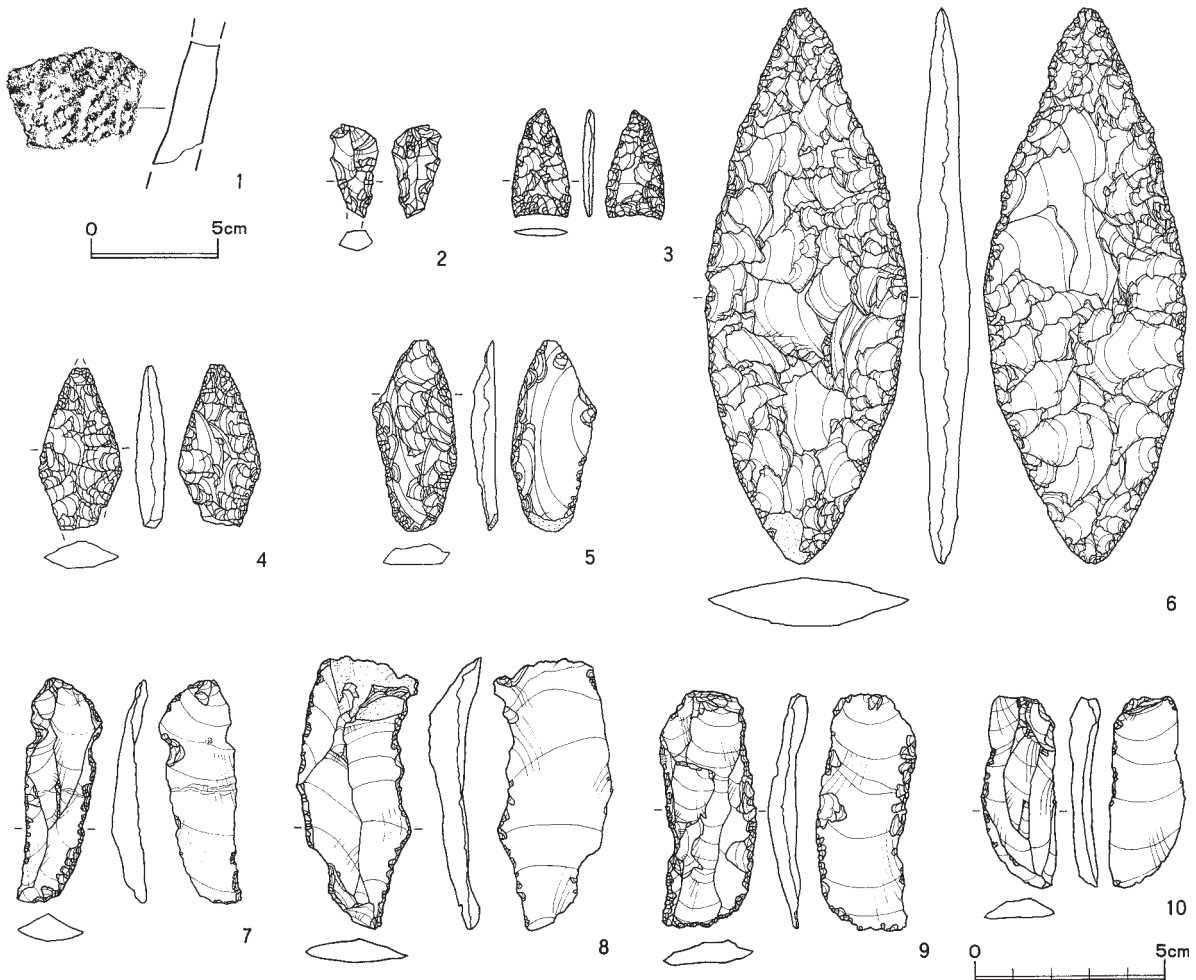


図 III-77 H-23(2)



図Ⅲ-78 H-23(3)



図Ⅲ-79 H-23出土の遺物

H-24 [図Ⅲ-80、図版31・80]

位置：P20・21区

平面形：不整な隅丸長方形

規模：(3.64) × (1.78) / (3.22) × (1.60) / 0.44m

長軸方位：N-77° W

確認・調査：VI層上面で黒色土や褐色土のまとまりを確認した。その中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。順次掘り下げ、床と壁の立ち上がりを確認した。北側は平成19年度の調査区におよび、同年度に検出された遺構と重複することが分かった。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った(Ⅲ章8)。また同焼土出土の炭化材の年代測定を行った(Ⅴ章6)。

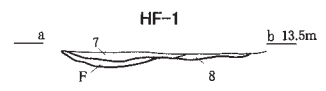
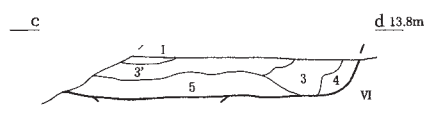
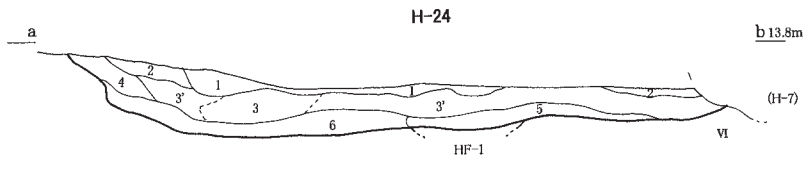
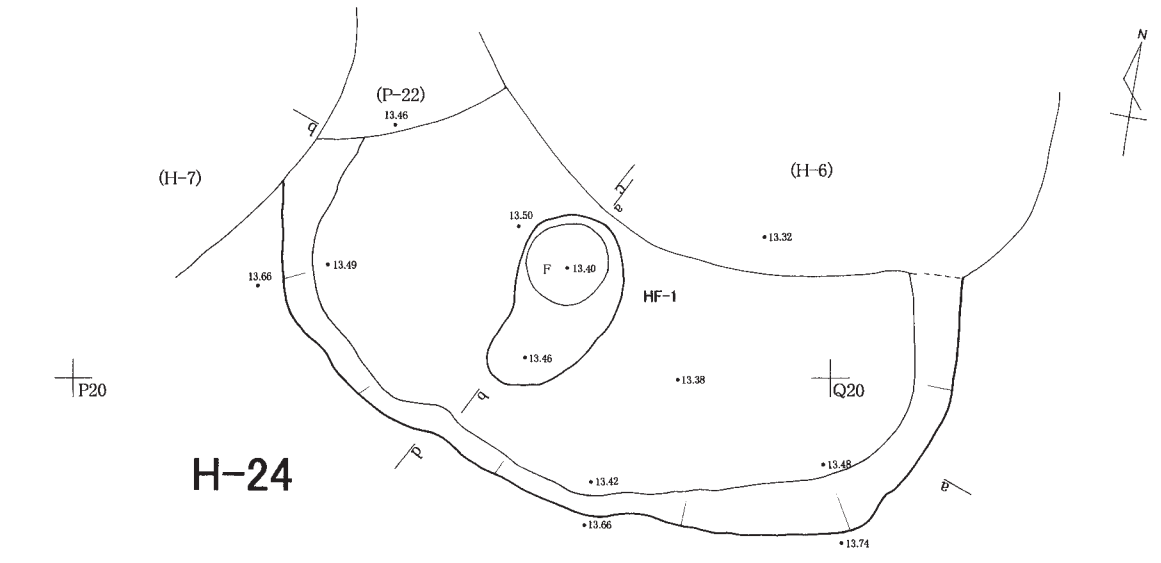
覆土：上位の1層は黒色土主体で、中位~下位の2層以下はロームに黒色土が混じる土層である。中位は黄褐色土が厚く堆積する。

床面・壁：床面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所(H-24HF-1)を検出した。

[炉] H-24HF-1は、住居跡の中央付近に位置する地床炉である。焼成面は大きさ44cm程の円形であるが、周囲に焼土粒混じりの黒褐色土が約1mの範囲に広がる。被熱層はVI層、層厚は3cmである。焼成面は床面に対しややくぼんでおり、炭化物や黒色土を含む。

遺物出土状況：覆土から遺物が散漫に出土している。いずれも小型で、小破片が多数を占める。

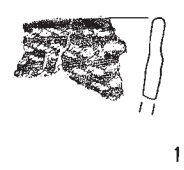
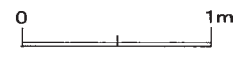


H-24

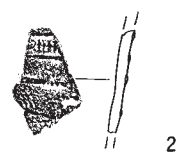
- 1 黒色(10YR 2/1) [IV>>VI] しまりやや弱、均質。
- 2 黄褐色(10YR 5/6) [VI>>VI] しまりやや弱、色調やや均質。
- 3 褐色(10YR 4/4) [VI>V] しまりやや弱、色調やや均質。
- 3' 暗褐色(10YR 3/4) [V+VI] しまり弱、色調やや不明瞭。ロームブロック、黒色土のブロックあり。
- 4 黒褐色(10YR 2/2) [IV>V] しまり弱、色調やや不均質。ロームやや含む。
- 5 褐色(10YR 4/6) [VI>V] しまり中、均質。
- 6 黒褐色～暗褐色(10YR 2/3～3/4) [VI+V+VI] しまり弱、黒色土、ロームが混じり不均質。

H-24 HF-1

- 7 褐色(10YR 4/4) [VI>V] しまり中、均質的。
- 8 黒褐色(10YR 2/3) [V+VI] しまりやや弱、黒色土混じり、やや不均質。
- F 暗赤褐色(5YR 3/6) しまり弱、境界明瞭。黒色土・炭化物混じりやや不均質。



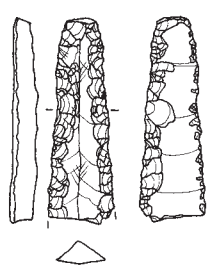
1



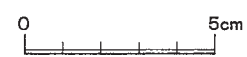
2



3



4



図Ⅲ-80 H-24

出土遺物の総数は164点で、土器が17点・石器等が147点である。土器はI群a類1点・I群b-1類1点・I群b-4類11点などで、石器等は削器1点・削片2点・石鏃1点・石斧片1点・剥片類142点が出土している。

掲載遺物：1は東釧路Ⅱ式。器壁は薄く、口唇は丸みをもつ。2は中茶路式。

3は石鏃。小型のもので、かえしは不明瞭である。4は削器。石刃素材で、背面中央に稜がある。両側縁に細かい調整が連続する。

重複・時期：H-6・7と重複し、いずれも当遺構の方が古い。P-22との重複関係は不明確である。遺構の切り合い関係や出土遺物から縄文時代早期後葉と考えられるが、中期後半～後期初頭の可能性も否定できない。

H-25〔図Ⅲ-81・82、図版31・80〕

位置：J14・15・16、K14・15・16区

平面形：楕円形（推定）

規模：(6.40)×(1.84)／(6.20)×(1.80)／0.50m

長軸方位：N-20° E

確認・調査：表土除去後Ⅳ層上面を精査したところ、調査区西側の境界付近で、半ドーナツ状の黄褐色土とその内側にTa-cのまとまりを検出した。土層観察用のベルトを調査区境の壁面およびそれに直交するラインに設定した。K15区の試掘坑を掘り上げ、トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。順次掘り下げ、床面および竪穴外に広がる褐色土を検出した。遺構全体の2／3程は調査区外にあると推測される。

覆土（・掘上土）：遺構上位の自然堆積層は、Ⅰ～Ⅳ層まで観察できる。Ⅱ～Ⅳ層は住居跡のくぼみに厚く堆積している。その厚さは、各層最大値でⅡ層が16cm、Ⅲ層が23cm、Ⅳ層が26cmに達する。Ⅱ層の上位には、Ko-c₂とみられる白色火山灰が部分的に3cm程度堆積している。

住居跡の覆土は、1層は自然堆積の黒色土（Ⅳ層）とした。中位の2・3層はロームを主体とする褐色土である。下位の4・5層は、黒色土を主体とするしまりの弱い土層である。中位の褐色土層が20～25cmと厚く堆積している。下端境界はほぼ平坦であるが、上面は波状で凹凸が目立つ。

褐色土層は竪穴外にも続いており、「HM層」とした。HM層は、竪穴内の褐色土よりは暗色で色調が不均質である。竪穴の外縁に幅80～120cm程度、厚さ最大12cmで分布する。掘上土や、住居内の黄褐色土とともに土葺き屋根の一部の土壌が想定される。

床面・壁：床は平坦である。壁との境界は明瞭で、壁は急に立ち上がる。

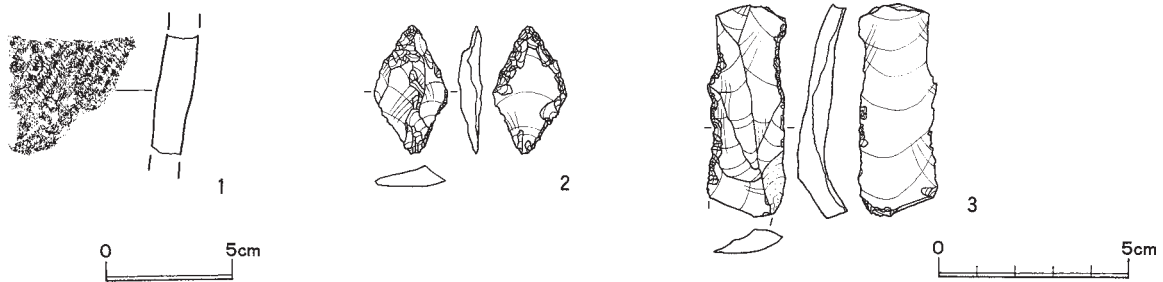
遺物出土状況：覆土中位～床面付近から遺物が散漫に出土している。

出土遺物の総数は177点で、土器が8点・石器等が166点・礫が3点である。土器はI群b-4類2点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類5点（うちⅣ群a類1点）・Ⅳ群b類1点が出土している。石器等は石鏃3点・石槍1点・つまみ付きナイフ1点・スクレイパー11点・剥片類150点が出土している。

掲載遺物：1は北筒式。結束羽状縄文が施文されている。2は石鏃。小型で菱形を呈する。3はスクレイパー。石刃素材とみられる。

時期：住居跡の構造などから、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。

（阿部）



図Ⅲ-82 H-25出土の遺物

H-26 [図Ⅲ-83~88、図版17・32・33・80・81、口絵4]

位置：L・M16区

平面形：不整形（不明）

規模：(6.64)×(6.64)／—×—／0.26m

長軸方位：N-13° E

確認・調査：表土除去後IV層上面を精査したところ、ドーナツ状の黄褐色土が2か所連続し、その内側にそれぞれ黒色土の円形のまとまりを検出した。その中央部を通るラインとそれに直交するラインで土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行ったところ、土層の落ち込みがなく、黒色土中に黄色土が堆積する土層が検出された。H-15・16の調査から、この範囲にも2軒の平地住居跡があると判断した。H-14の確認後、しばらくしてから当遺構を認定した。

IV層黒色土を掘り下げ、黄色土上面を検出した。H-14の調査後、黄色土の調査を行った。上位では、微細な剥片が多数出土し、ブロック状の焼土が各所に観察された。下位からは炭化材が多量に出土し、細かな検出作業を行った。写真撮影、実測を行い、一部サンプルを採取した後すべて取り上げた。床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

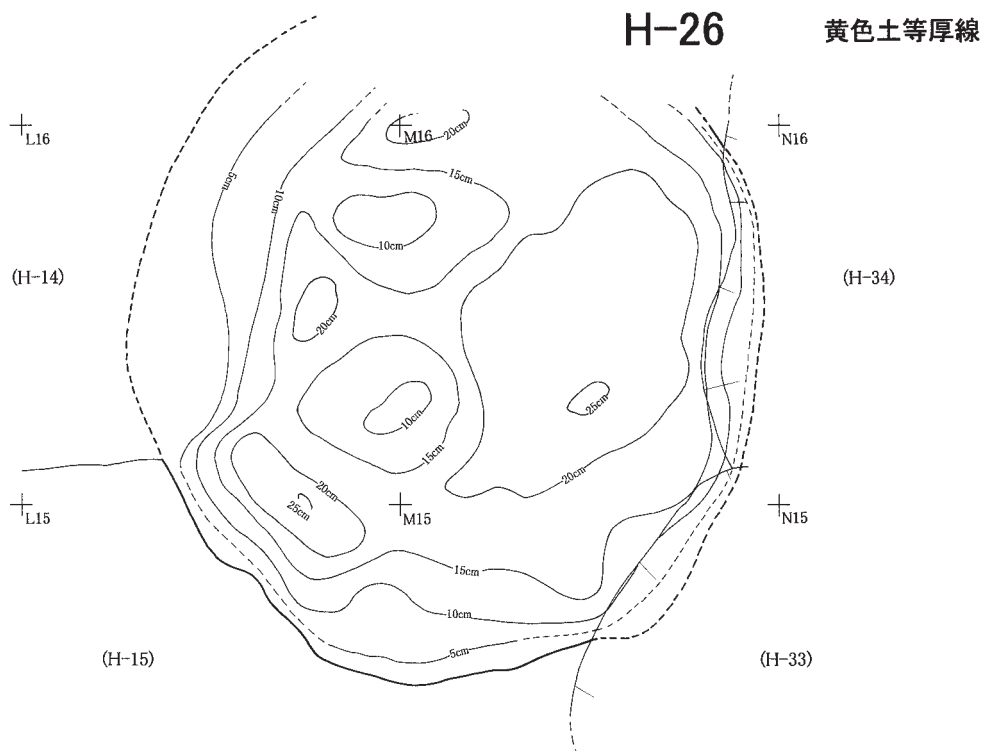
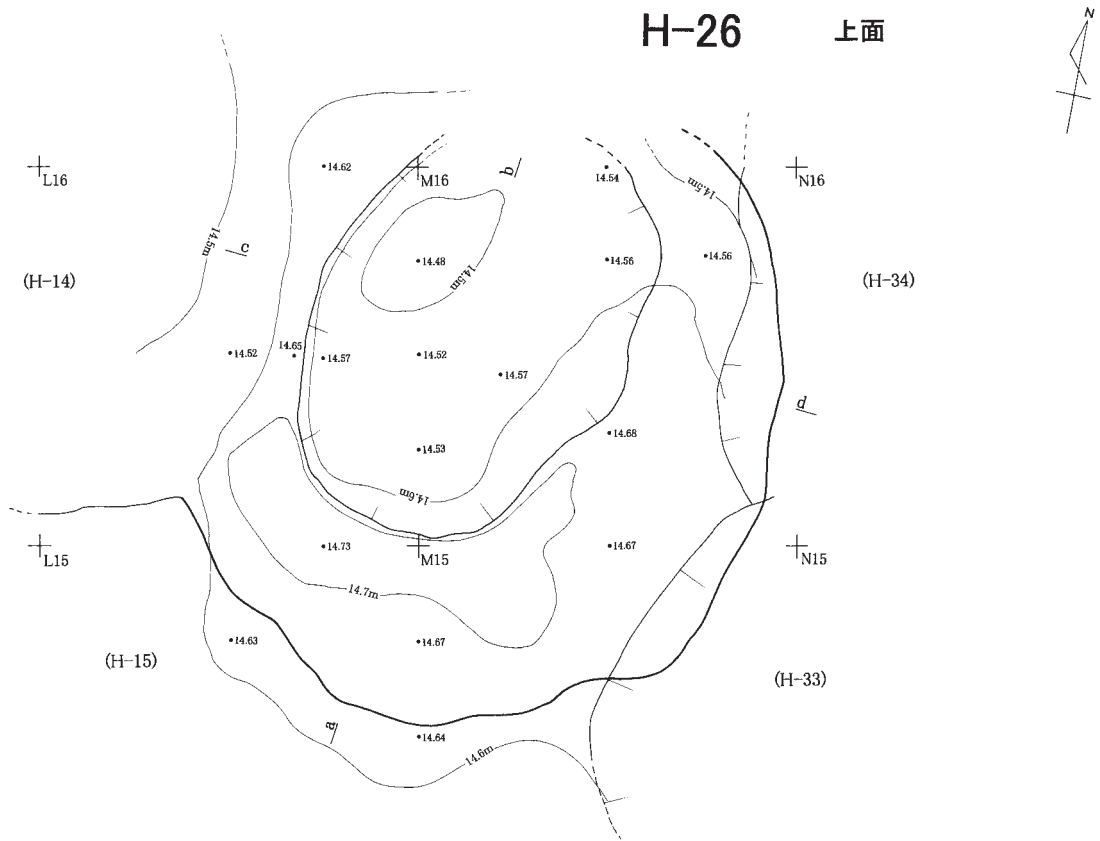
床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また同焼土出土の炭化材の年代測定を委託した（Ⅴ章6）。黄色土出土の炭化材については、8点のサンプルの樹種同定を委託した。コナラ属コナラ節がほとんどで、トネリコ属・ニレ属が1点ずつ含まれていた（Ⅴ章3）。

土層：覆土は自然堆積のIV層黒色土である。黄色土はマウンド状であり、「HM層」とした。黄色土上面の地形をみると〔図Ⅲ-83上段〕、住居跡北西部が楕円形にくぼみ、南-東側は土手状の高まりがあり南側が高い。高低差は最大25cmである。西側はH-14の黄色土が重複している。また黄色土の厚さをみると〔図Ⅲ-83下段〕、20~25cmの厚い堆積範囲が東部の大部分および南西部・北西部の一部にある。中央西部には10cm程度の薄く堆積する範囲がある。

HM層は明・暗・明の色調で3層に分けられる。HM1層は褐色~黄褐色で最も明るい色調である。ロームを主体としおおむね均質で、ややしまりがある。住居跡東部に分布し、隣接する竪穴住居跡H-33・34に流入している。HM2層は黒褐色~暗褐色で、暗色でやや不均質である。しまりはやや弱い。東部の一部を除く大部分の範囲に分布する。HM3層は暗褐色のやや不均質な土層で、H-15に近い南西部に部分的に堆積する。

床面・壁：床面は平坦であるが、周辺地形を含め全体的に南から北へ約20cm緩やかに傾斜している〔図Ⅲ-84〕。住居跡南西の境界付近でわずかにゆるやかな段がある。壁面は観察されない。東部は他の住居跡に切られ、不明である。

付属遺構：焼土1か所（H-26HF-1）、土坑1基（H-26HP-2）、柱穴状小ピット4基（H-26HP-1・3~5）を検出した。



図Ⅲ-83 H-26(1)

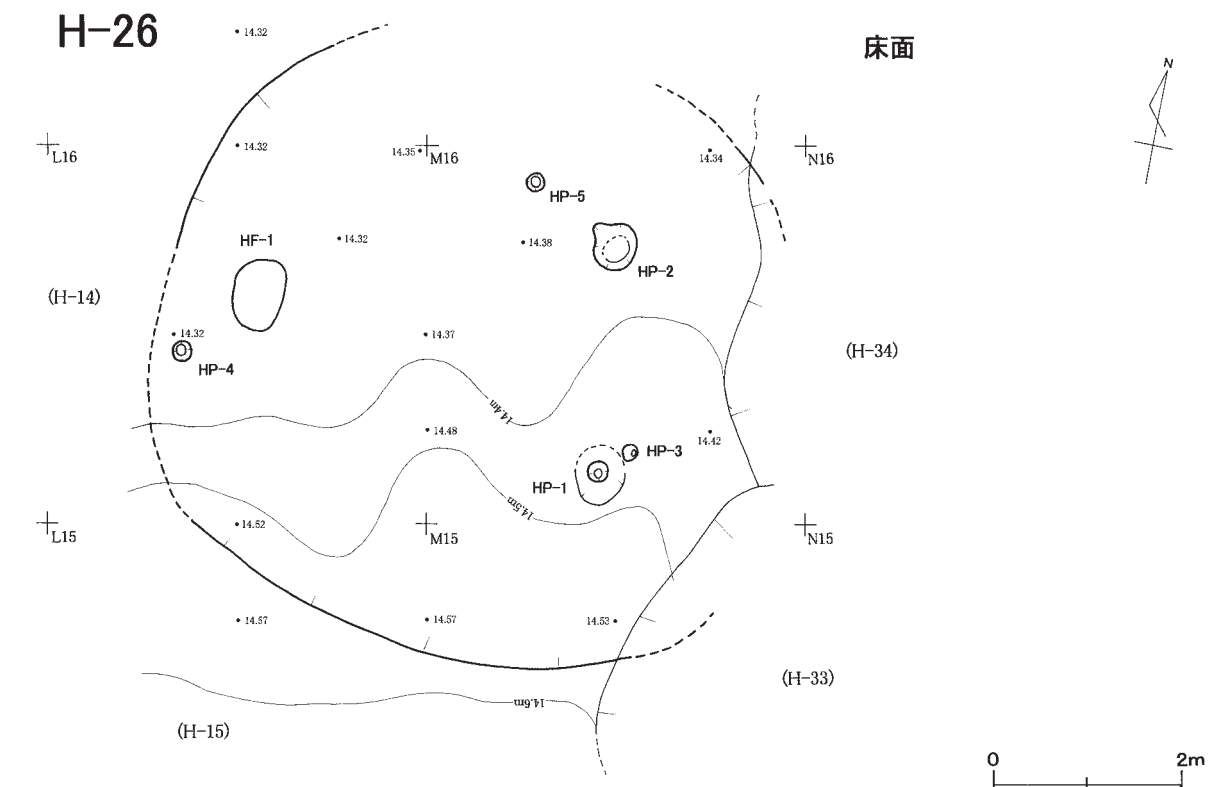
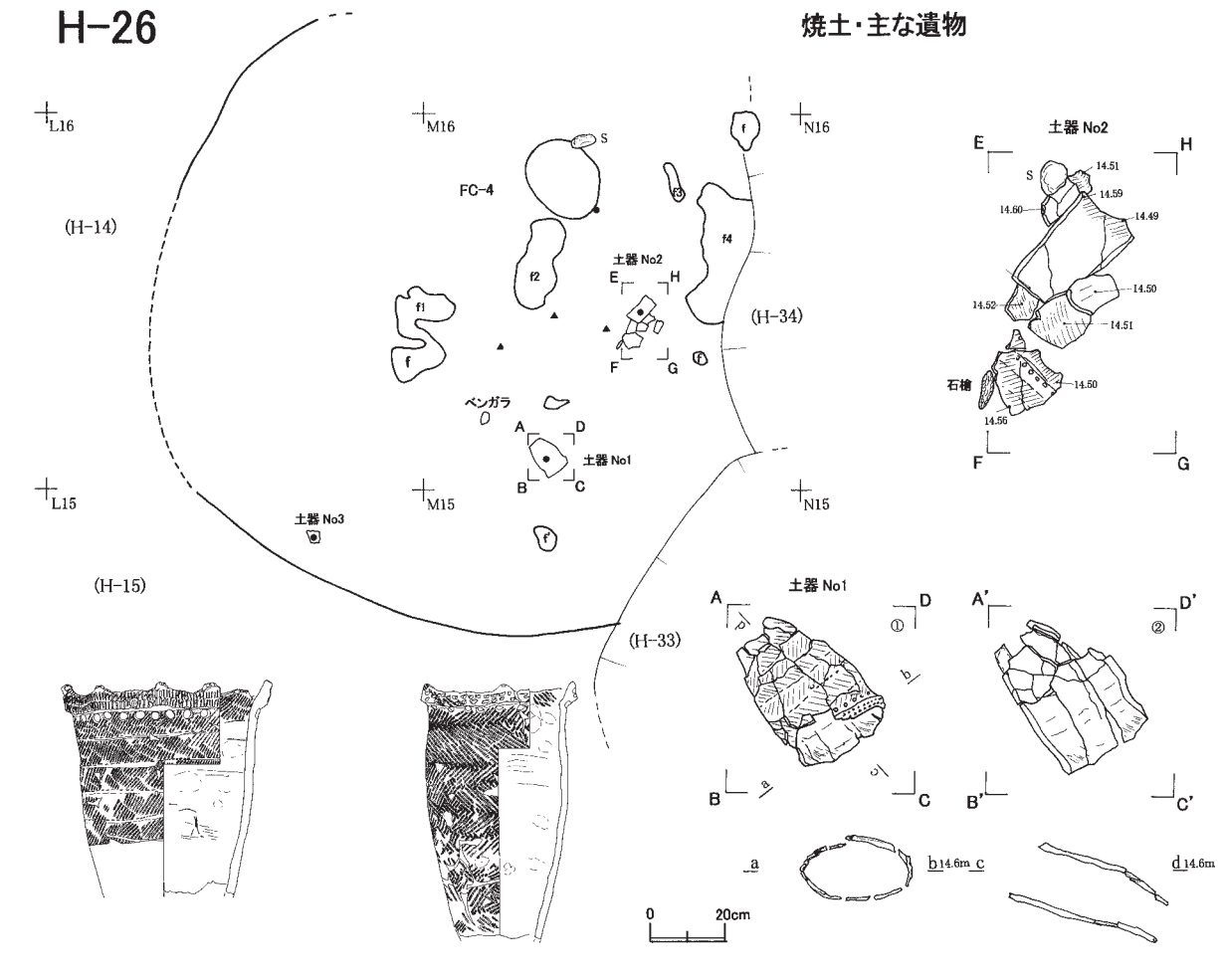


図 III-84 H-26(2)

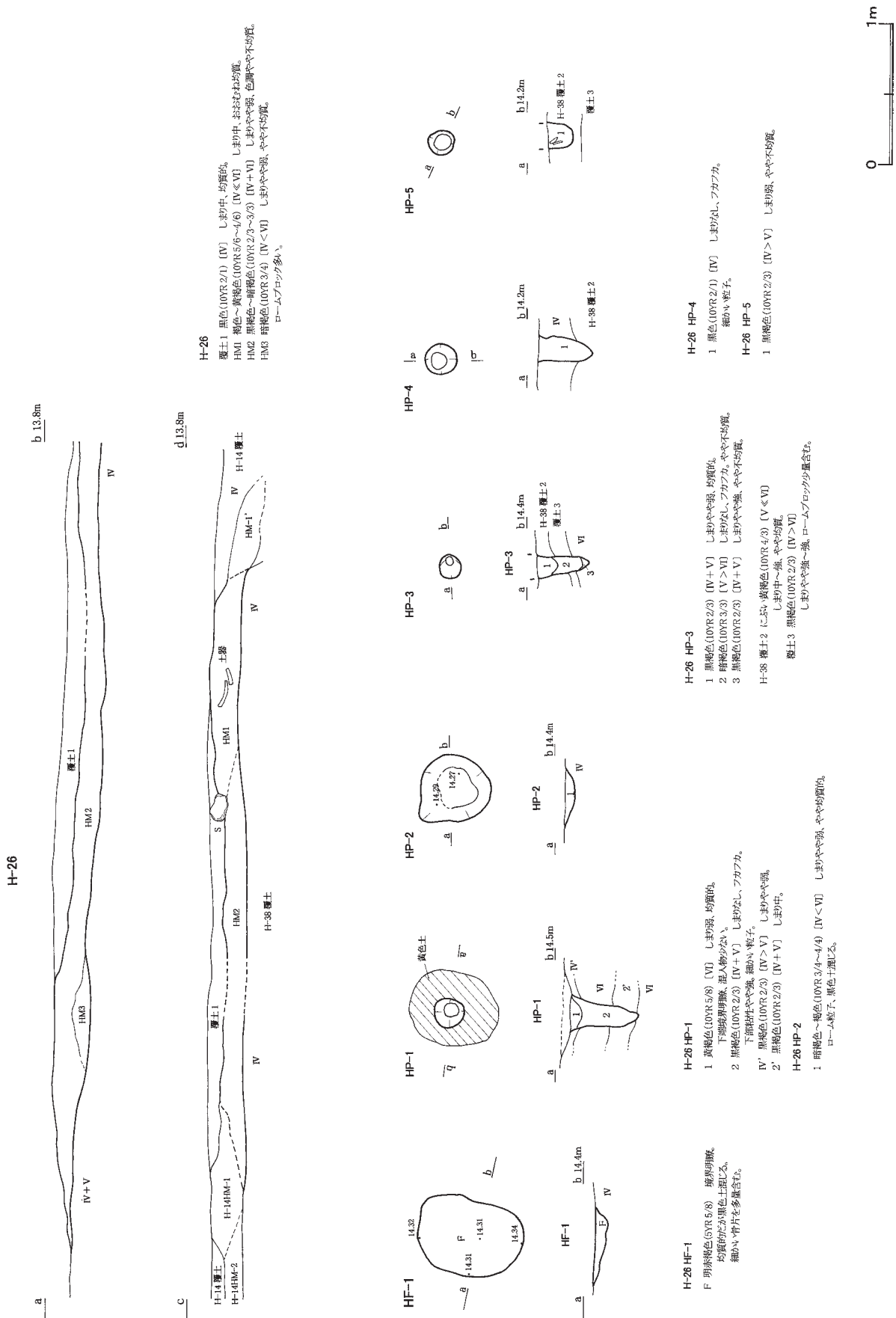
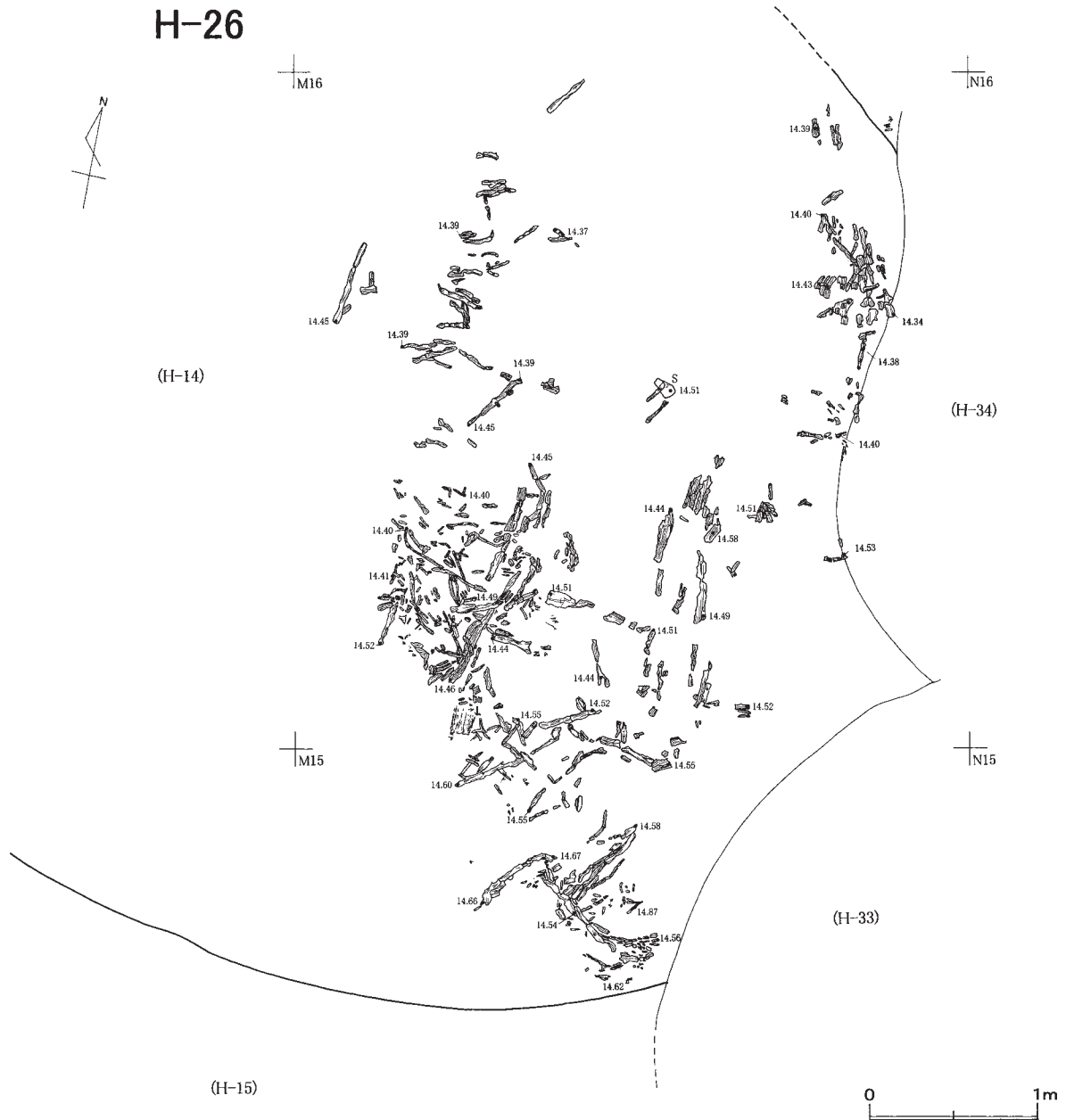


図 III - 85 H - 26(3)



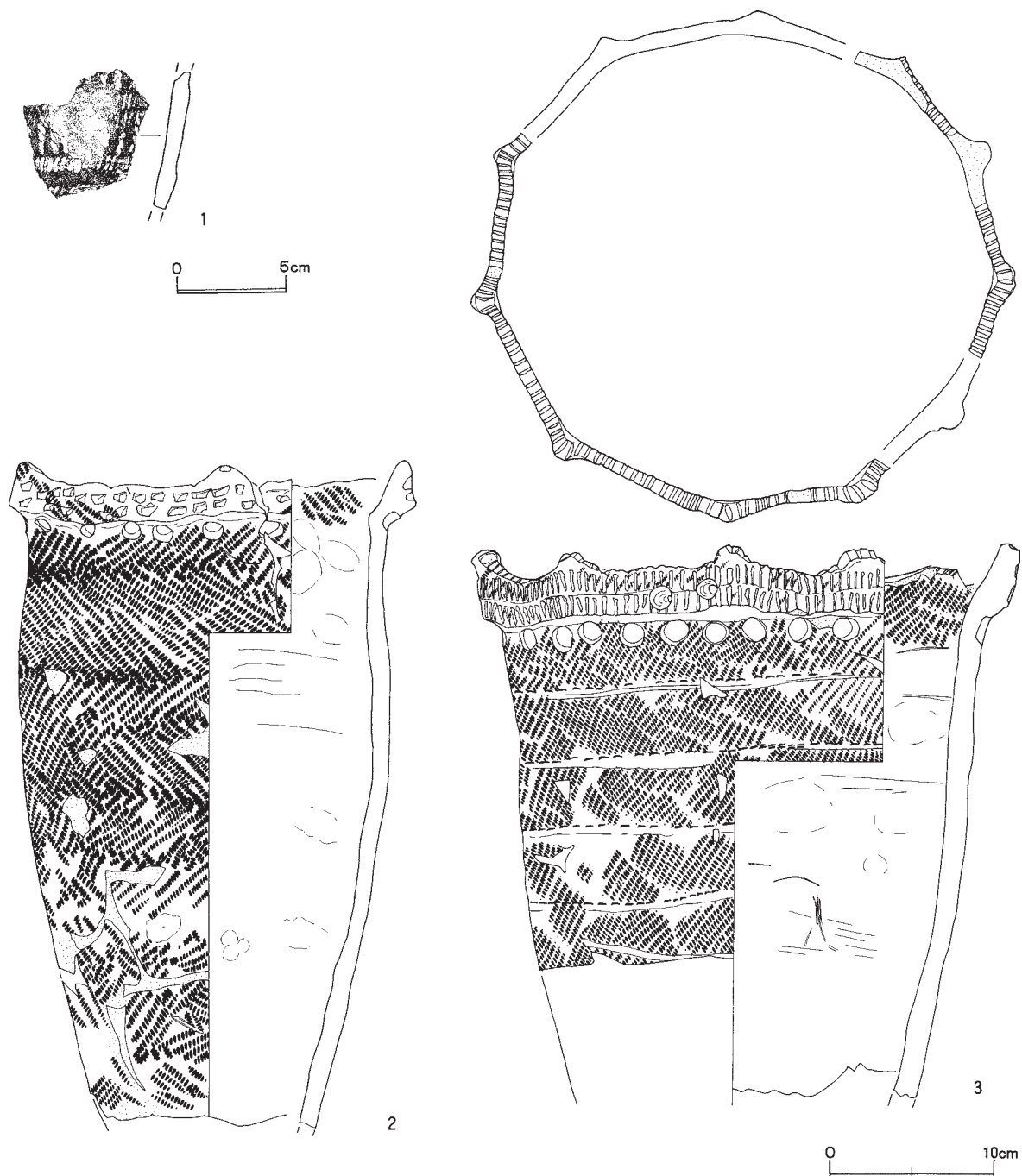
図Ⅲ-86 H-26(4)

〔焼土〕 H-26HF-1 は、住居跡の西側の H-14 に近い位置で検出した。大きさ 38×28cm の楕円形で、被熱層は IV 層、層厚は 7cm。明赤褐色の被熱層で、上面の焼成面は灰黒色土が混じり、細かい骨片が多量含まれていた。水洗選別後の簡易的な同定作業の結果、サケ科の椎骨が多数あり、歯も含まれていた（Ⅲ章 8、表Ⅲ-3）。

〔土坑〕 H-26HP-2 は、住居跡北東部にある浅い土坑。

〔柱穴〕 H-26HP-1 は径 12cm、深さは 27cm で先端が尖る。上部は HP-2 に近似する浅いくぼみに黄色土が堆積していた。住居跡南東部にある。HP-3・4 は径 8・10cm、深さ 20cm で先端が尖る。HP-5 は先端が丸みを帯びる。

遺物出土状況：住居跡の覆土や黄色土（HM 層）から出土している。微細な剥片類が最も多い。また黄色土からは、土器 1 個体〔図Ⅲ-84 土器 No. 1、図Ⅲ-87 の 2〕が形状を保ってつぶれた状態で出土



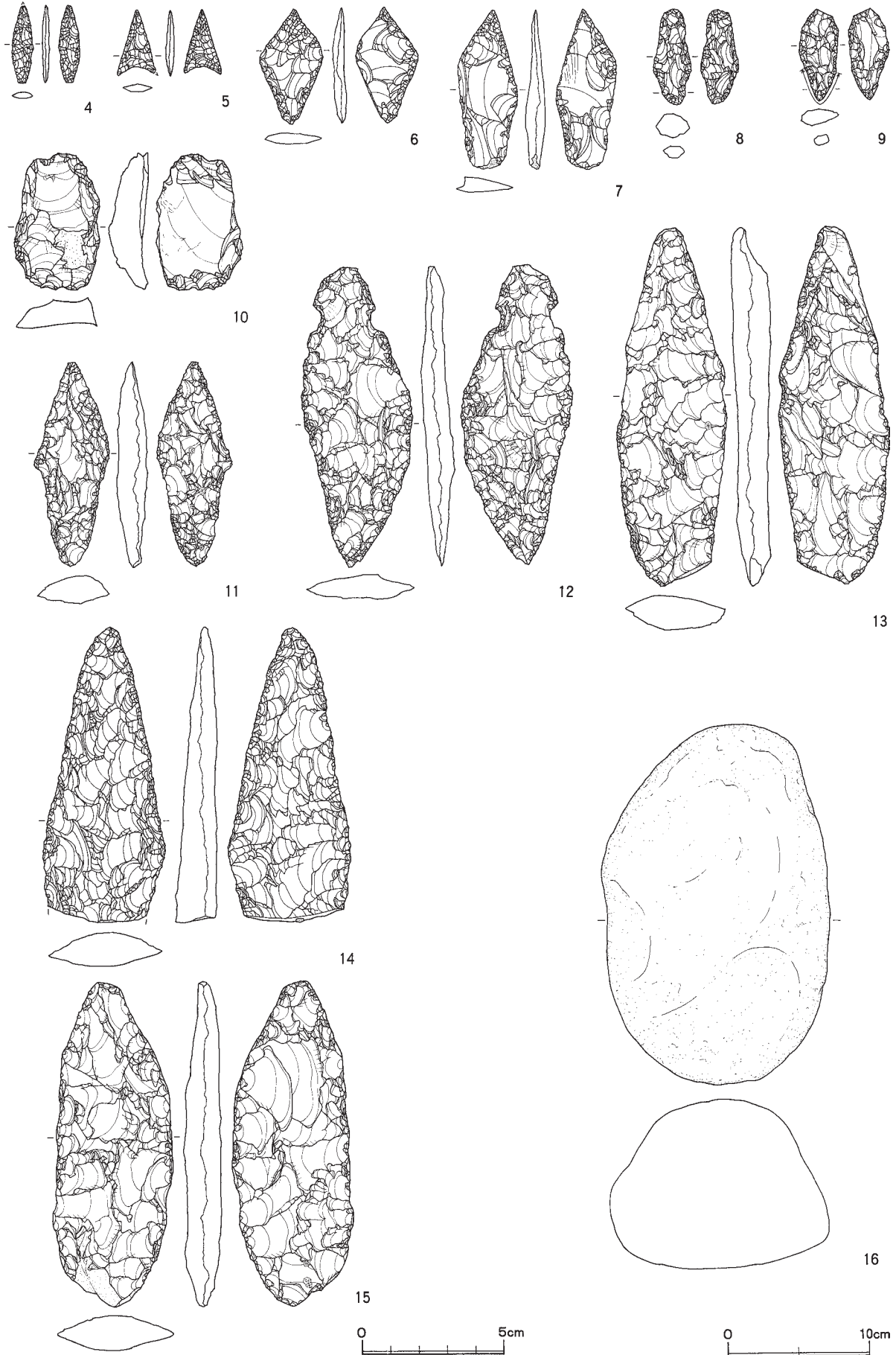
図Ⅲ-87 H-26出土の遺物(1)

した。付近から大型土器片〔図Ⅲ-84土器No.2、図Ⅲ-87の3〕や、ほぼ完形の石槍が出土した。

出土遺物の総数は2,155点で、土器が693点・石器等が1,456点・礫が6点である。土器はⅠ群b-1類39点・Ⅰ群b-2類2点・Ⅰ群b-4類63点・Ⅲ群b類~Ⅳ群a類570点（うちⅢ群b類123点）などが出土している。石器等は石刃1点・石鎌6点・石槍11点・石錐3点・つまみ付きナイフ3点・スクレイパー11点・石斧1点・砥石片10点・台石等1点、剥片類1,409点が出土している。

このほか、ベンガラ粒を少量回収した。

※炭化材 HM1・2層から多量の炭化材が出土した。住居跡とした範囲の中央~東部に弧状に分布している。住居跡本体が東部にあった可能性がある。径2~3cmの枝状の材が最も多く、幅5~10cm



図III-88 H-26出土の遺物(2)

で厚さ 1 cm 程の板状の材も多く見うけられる。またヨシ状の細かい材も少数検出されている。

掲載遺物：1 は東釧路Ⅲ式。横位の絡糸体圧痕の間に縦位の短縄文が施文されている。直下の住居跡 H-38 に関連するものとみられる。

2 は北筒Ⅱ式古段階の深鉢。残存器高は 40cm をこえる。今回調査で出土した北筒式の中で最も古いものの一つである。胴部はふくらみ、口縁部は外反する。平縁で 4 単位の山形突起を有する。断面三角形の肥厚帯上に刺突（押引）列が 2 列施されている。肥厚帯下には径 1.2cm 程の円形刺突がめぐる。胴部は結束羽状縄文が全面に施されているが、結束部の押捺がやや目立たない。内面は、口縁部付近まで縄文が施文されている。口縁部には外面からの刺突による瘤がめぐる。内面調整は比較的ていねいに行われているが、成形時の押捺痕が各所に残る。

3 は北筒Ⅱ式新段階の大型深鉢。口径約 33cm で器壁が約 1.5cm と厚い。胴部がややふくらみ、口縁部は緩やかに外反する。平縁で、10 単位前後と推定される山形突起を有する。肥厚帯上に縦位の沈線（刻み列）が 2 列、口唇上に 1 列施されている。肥厚帯下には径 1.6cm 程の浅い円形刺突がめぐる。胴部は細い無文帯を境として約 8 cm の間隔で区画帯を設け、LR 縄文を施文している。内面は、口縁部付近まで縄文が施文されている。内面調整は比較的ていねいに行われているが、成形時の押捺痕が各所に残る。胎土は砂粒が多く含まれ、ざらついている。内外面に炭化材の一部とみられる黒色物質がやや多く付着している。

4～6 は石鏃。4 は小型柳葉形。5 は三角鏃で凹基。6 は菱形を呈する。7 は石槍。かえしが左右非対称である。基部にわずかに原石面が残る。8・9 は石錐。8 は機能部の端部が欠けているものと思われる。9 は機能部に回転作業によるとみられる磨痕が観察される。10 はスクレイパー。側縁や下端部にやや粗い調整が施されている。背面の一部に原石面が残る。11・13～15 は石槍。すべてていねいに両面調整が行われている。11 は右側縁のかえしを欠く。13～15 は柳葉形または木葉形に近い。先端部は尖るが、やや丸みを帯びている。12 はつまみ付きナイフ。ていねいに両面調整が行われ、両側縁にえぐりを入れつまみ部を作り出している。石槍製作後につまみ付きナイフに転用した可能性がある。16 は被熱礫。廃屋時の焼成により被熱したことが考えられる。

重複・時期：平地住居跡 H-14・15 および竪穴住居跡 H-33・34 と重複する。いずれも当遺構の方が古い。住居跡の切り合いや出土遺物から、縄文時代中期末北筒Ⅱ式期である。

（阿部）

H-27 [図Ⅲ-89・90、図版 34・81、口絵 8]

位置：M 9・10、N 9・10 区

平面形：円形

規模：5.42×4.81/5.01×4.50/0.63m

長軸方位：N-40° E

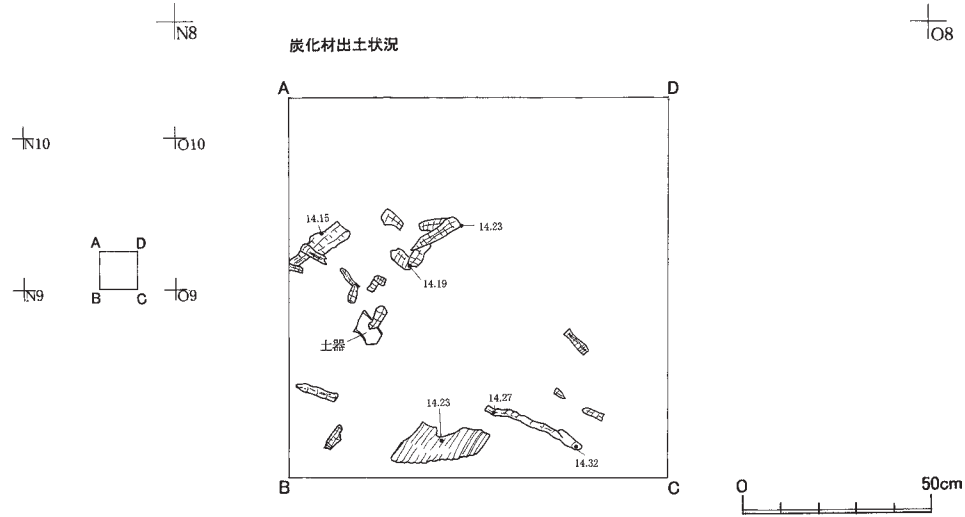
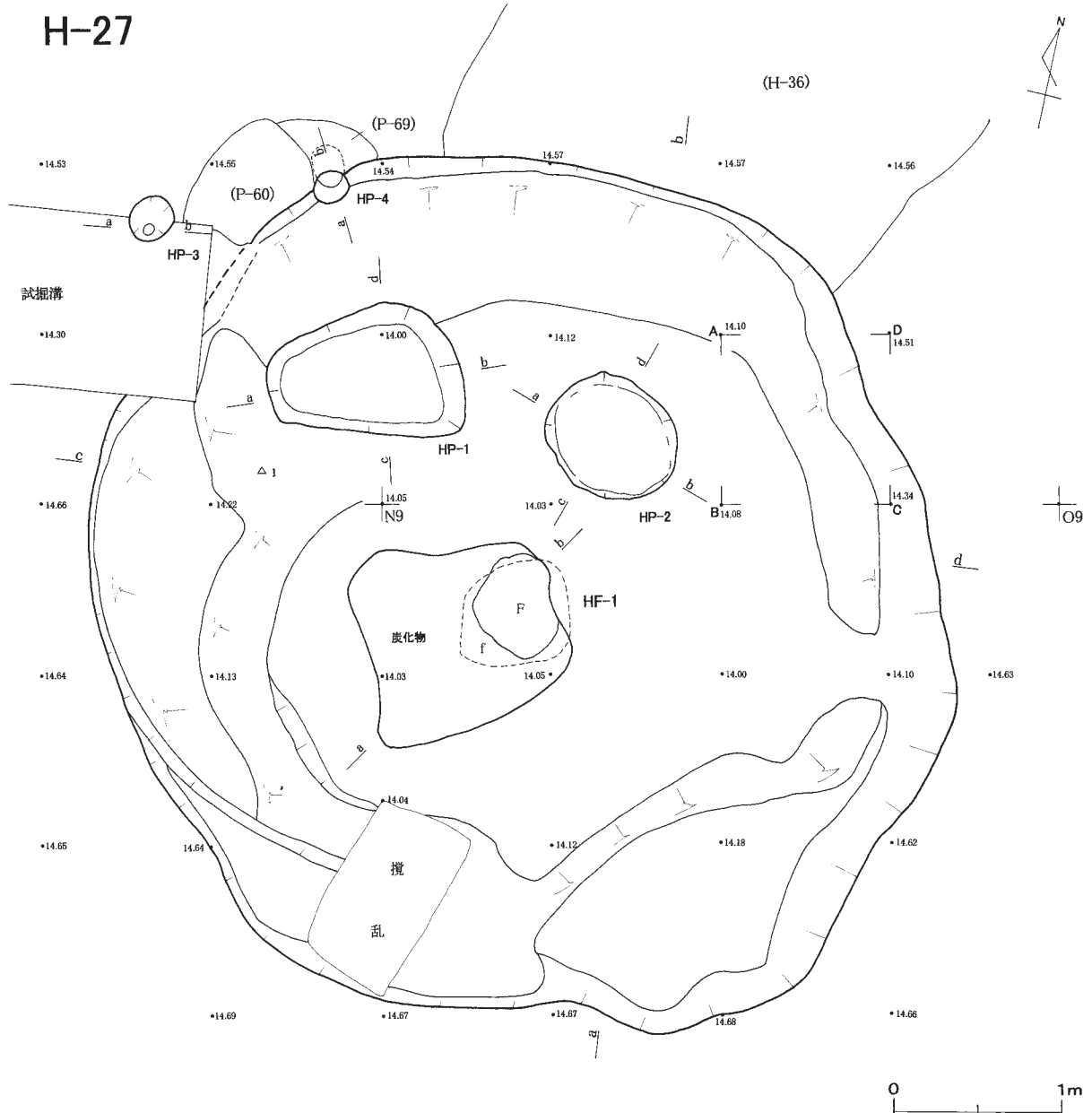
確認・調査：I 層を除去した段階で、Ta-c 火山灰の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。床面の土壌を採取してフローテーション作業を行った。床面から採取した炭化材の年代測定と炭化樹種同定を行った。

覆土：上位（1・2 層）は自然堆積層で、下位（3・4・5 層）は焼土粒を含む層が床面まで堆積している。

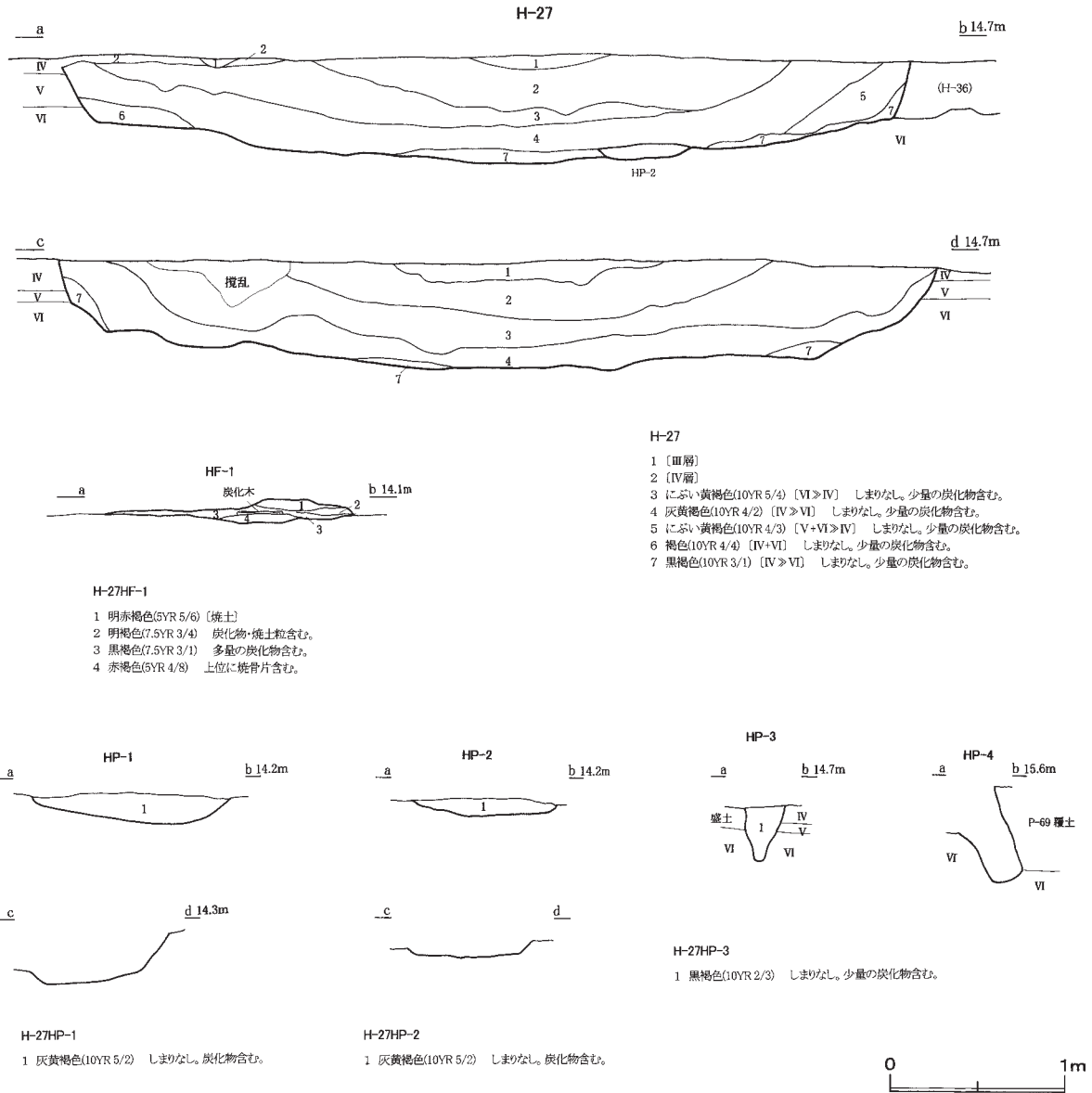
床面・壁：床はやや凹凸があり、中央部がやや低くなっている。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構：中央部で炉跡が検出された（HF-1）。浅い掘り込みをもつ。周囲に炭化物の堆積がある。

北側で土坑が 2 基検出された（HP-1・2）。いずれも掘り込みが浅い。柱穴とみられるものは北



図III-89 H-27(1)



図Ⅲ-90 H-27(2)

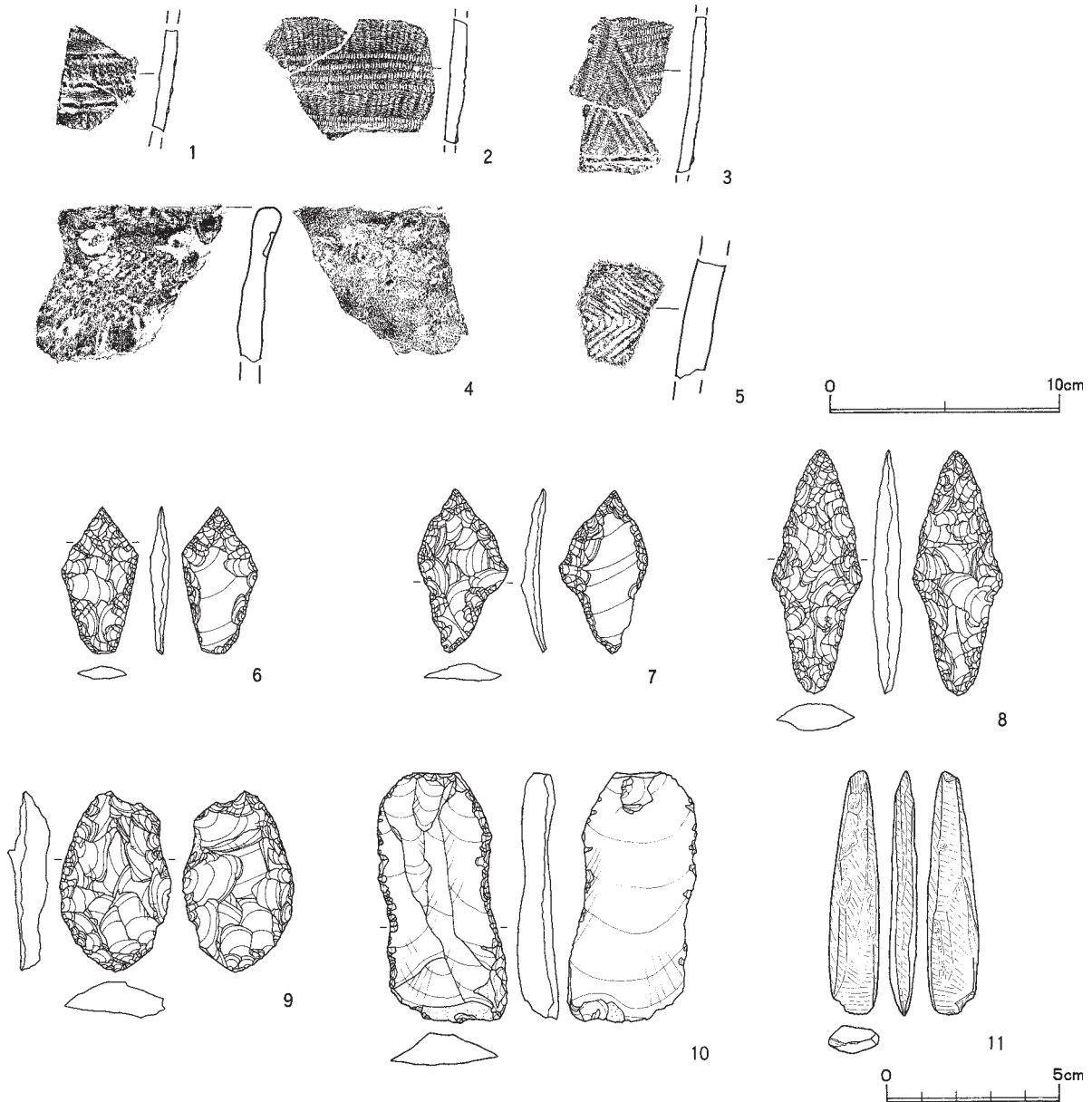
側で2基検出された (HP-3・4)。このうちHP-4は中央に向かって傾斜している。

遺物出土状況：床面からⅢ群b類～Ⅳ群a類の土器片が出土した。床面直上から石鏃が出土した。炭化材は東側にまとまってみられる。井桁状のものは、屋根材の一部と考えられる。材質は樹種同定の結果、トネリコ属・コナラ属である。

出土遺物の総数は1,207点で、土器が63点・石器等が1,132点・礫が12点である。土器はI群b-4類24点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類33点などが出土している。石器等は削器1点・削片1点・石刃1点・石鏃5点・石槍2点・石錐3点・つまみ付きナイフ5点・スクレイパー20点・両面調整石器1点・石斧等3点・たたき石2点・剥片類1,088点が出土している。

掲載遺物：1～3は中茶路式。2・3は非常に細かい撚りの絡条体圧痕が横位あるいは鋸歯状に配されている。4・5は北筒式。4の口唇は丸みをもつ。やや小型の円形刺突が施されている。5は結束羽状縄文が施文されている。

6・7は石鏃。いずれも菱形に近い。8は石槍。ていねいに両面調整されている。9・10はスクレ



図Ⅲ-91 H-27出土の遺物

イパー。10は石刃素材であろう。11は石のみ。側面に擦り切り痕が残る。

重複・時期：H-36・P-60・63・64・69と重複する。いずれも本遺構より古い。時期は出土した遺物や住居跡の形態から判断して、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。

(佐藤)

H-28 [図Ⅲ-92・93、図版35・81]

位置：N10・11、O10・11区

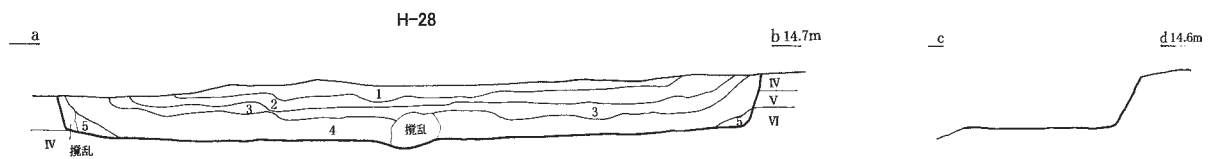
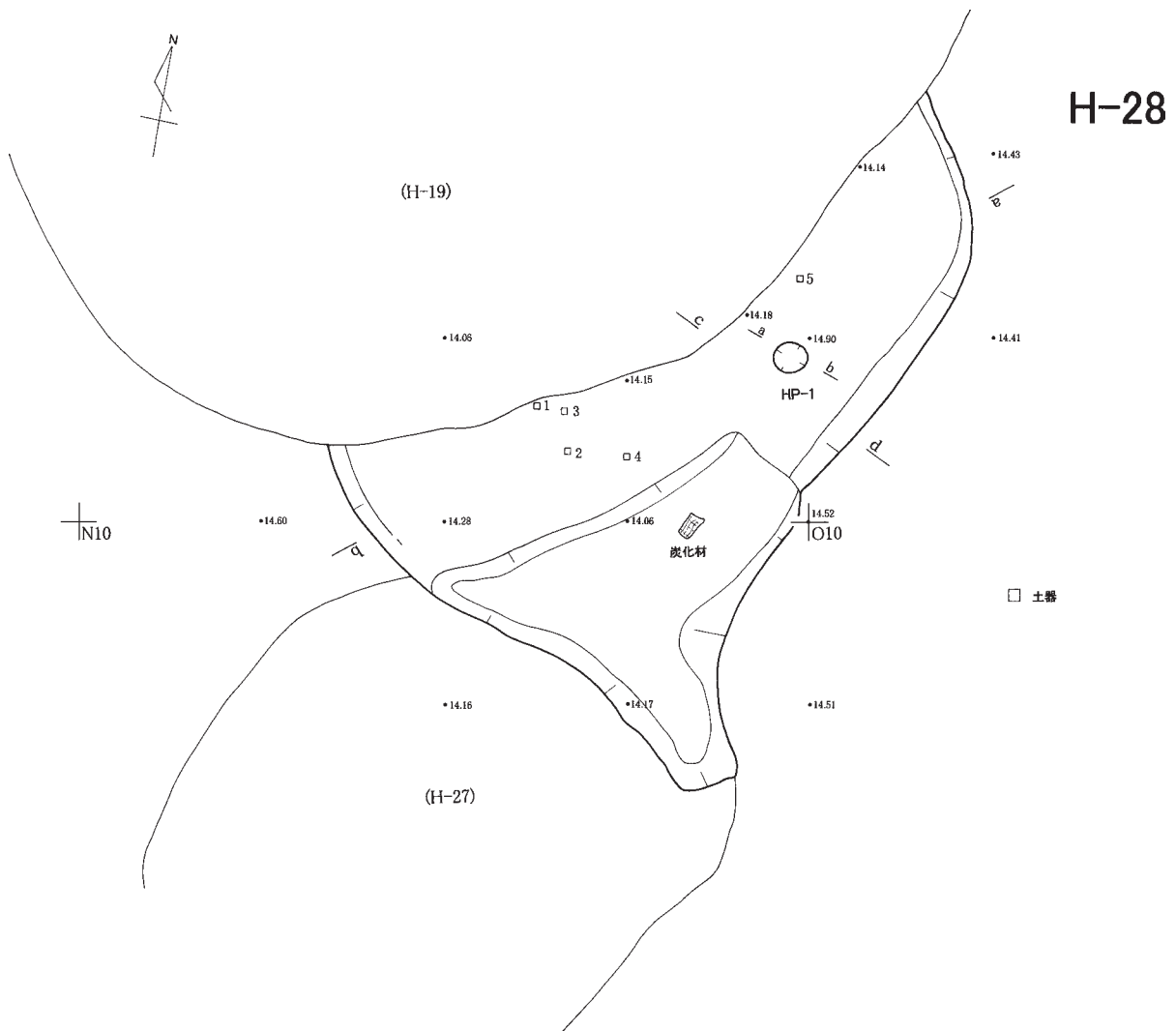
平面形：不整楕円形

規模：3.65×3.61/(1.62)×(1.53)/0.32m

長軸方位：N-44° E

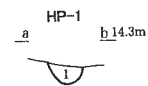
確認・調査：I層を除去した段階で、黒褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：2・4・5層は自然堆積層で、1・3層は周辺の住居跡の掘上げ土である。



H-28

- 1 黒褐色(10YR 3/2) (IV>VI) しまりなし。
- 2 黒色(10YR 2/1) しまりなし。IV層流れ込み。
- 3 黒褐色(10YR 3/1) (IV>VI) しまりなし。炭化物含む。
- 4 黒色(10YR 1.7/1) しまりなし。IV層流れ込み。
- 5 褐色(10YR 4/6) しまりなし。V層流れ込み。

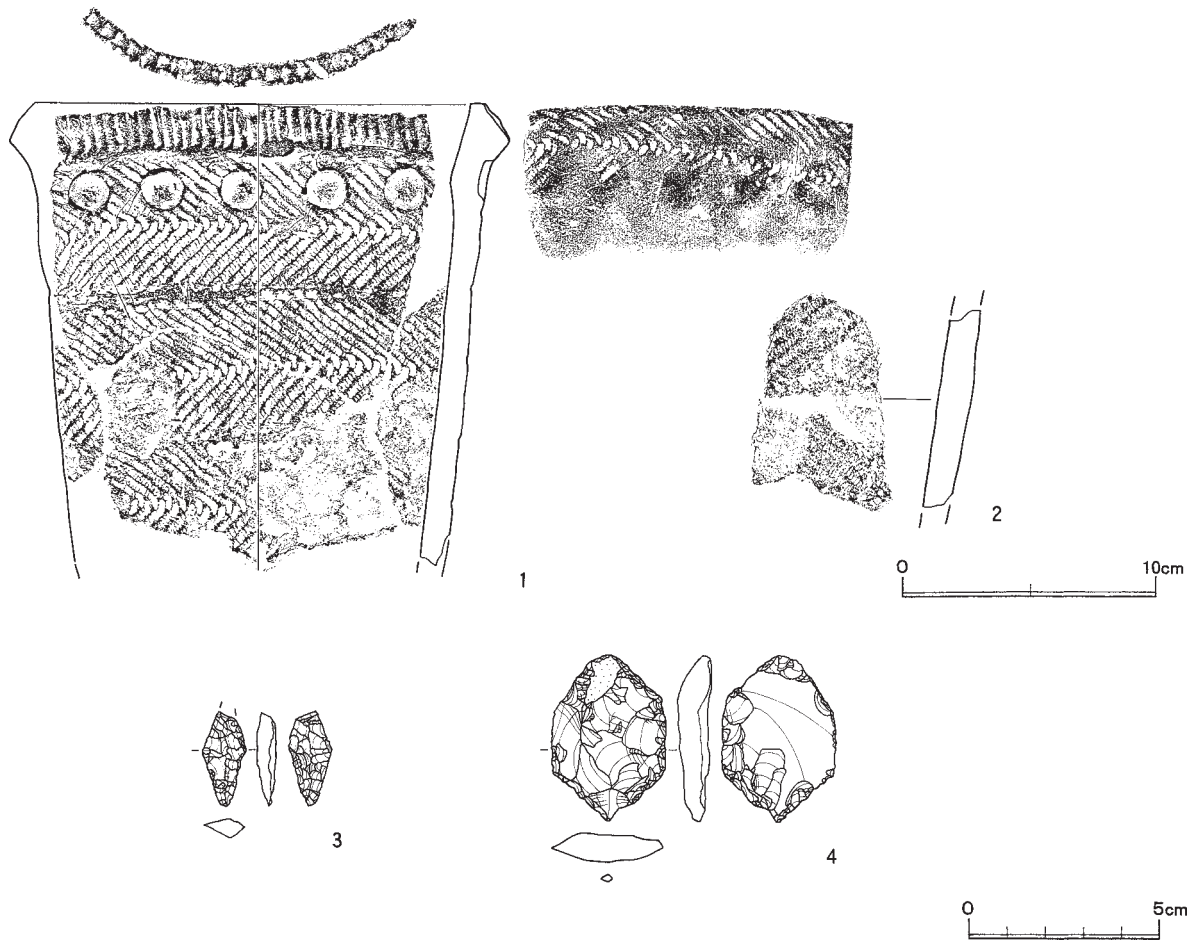


H-28 HP-1

- 1 黒褐色(10YR 3/1) (IV>VI) しまりなし。



図Ⅲ-92 H-28



図Ⅲ-93 H-28出土の遺物

床面・壁：床はやや凹凸があり、北側に向かい緩く傾斜している。壁は急角度で立ち上がる。

付属遺構：柱穴とみられる小ピットが検出された（H-28HP-1）。

遺物出土状況：床面直上から覆土下位にかけて、Ⅲ群b類～Ⅳ群a類の土器片が出土した。覆土下位からは石槍も出土している。

出土遺物の総数は88点で、土器が52点・石器等が34点・礫が2点である。土器はⅠ群b-4類10点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類42点（うちⅢ群b類10点）が出土している。石器等は石鏃2点・石槍2点・石錐1点・スクレイパー2点・両面調整石器2点・剥片類25点が出土している。

出土遺物：1・2は北筒Ⅱ式。1は円筒形の深鉢で、断面三角形の肥厚帯上に縦位の沈線（刻み）が密に施されている。結束羽状縄文の地文が横位多段に展開し、肥厚帯下に径1.5cmの浅い円形刺突がめぐる。

3は小型の石鏃。先端部を欠損する。4は石錐。やや幅広の剥片に調整を加えている。

重複・時期：H-19・36と重複する。H-19より旧く、H-36より新しい。時期は出土したⅢ群b類～Ⅳ群a類の土器から判断して、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。

（佐藤）

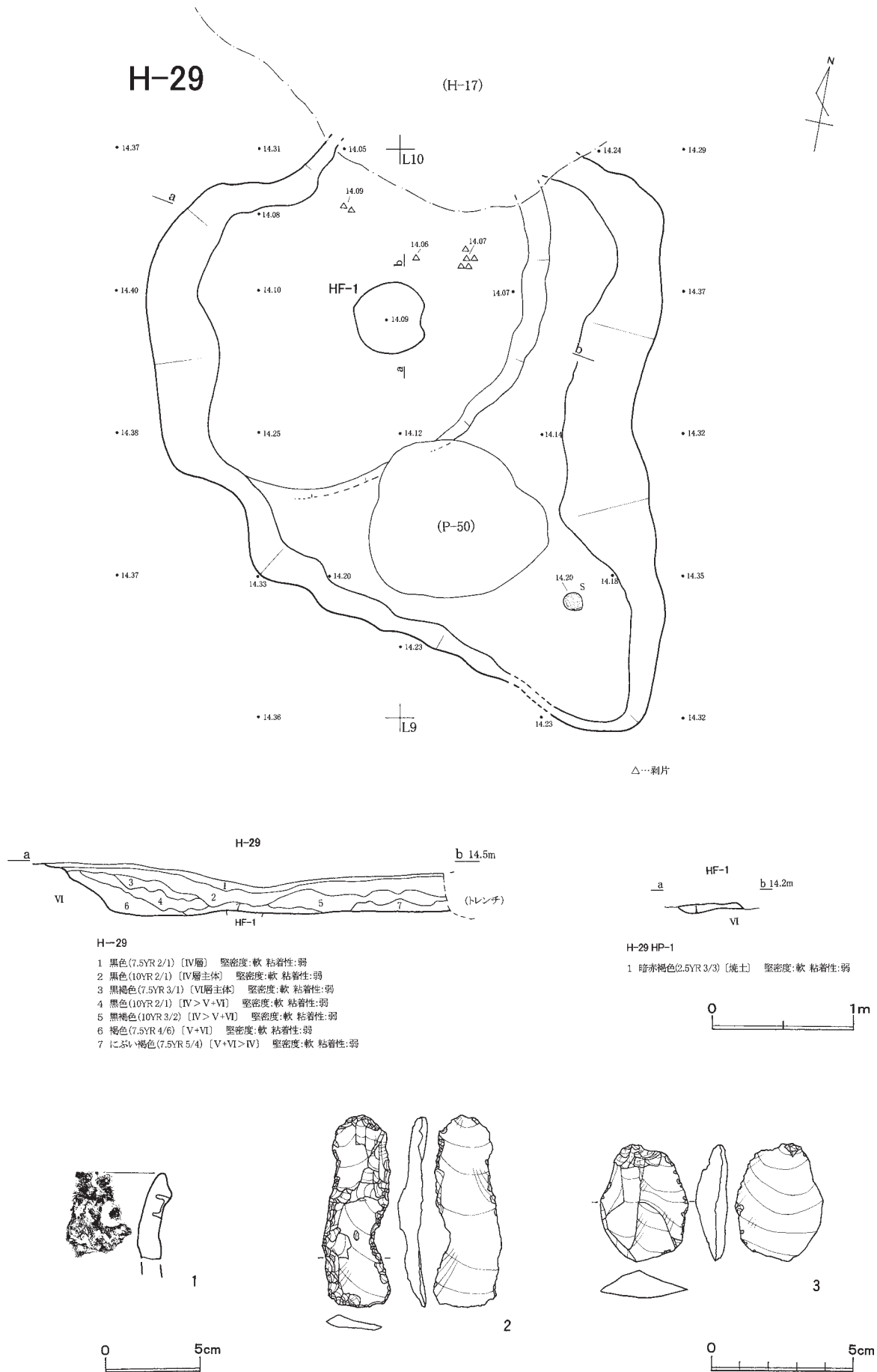


図 III - 94 H - 29

H-29 [図III-94、図版35・82]

位置：K・L10区

平面形：不整形

規模：4.56×3.63/4.26×3.15/0.38m

長軸方位：N-40° W

確認・調査：H-17南側のIV層包含層を調査したところ、V層上面で黒色土が堆積する落ち込みを確認した。東西方向に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。本遺構の東側には、H-17を調査するためのトレンチが南北方向に設定されている。覆土を約20～30cm掘り下げたところで明褐色土の底面を検出した。中央部が円形でやや低く、南側がやや高い。南側の床面からはP-50を検出した。覆土：上面はIV層主体の黒色土で覆われている。その下位はIV層にV層とVI層が混じる黒色～黒褐色土で構成されている。

付属遺構：焼土を1か所検出した（H-29HF-1）。

遺物出土状況：出土遺物の総数は190点で、土器が5点・石器等が184点・礫1点である。内訳はⅢ群b類土器が3点、スクレイパー2点・石斧1点・剥片181点などである。このうち床面出土のものはスクレイパー1点、剥片13点、礫1点である。

掲載遺物：1は北筒Ⅱ式。外反する口縁である。2・3はスクレイパー。2は石刃素材とみられ、右側縁は調整により湾曲している。

時期：出土遺物等から判断すると縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。

(笠原)

H-30 [図III-95～97、図版36・37・82]

位置：K・19・20区

平面形：おおむね楕円形

規模：4.10×3.62/(2.96)×2.85/0.47m

長軸方位：N-38° E

確認・調査：V層の上面で黒色土が堆積する落ち込みを確認した。その範囲の中央部から土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

トレンチ調査中、下位に黄色土が厚く堆積し炭化材が出土した。これまでの調査（H-23ほか）から土葺き屋根の土壌の一部と想定され、堆積状況を把握するためこの黄色土上面の検出に努めた。黄色土を掘り下げたところ、やや多量の炭化材が遺物とともに出土し図化した。その後床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また同焼土出土の炭化材の年代測定を行った（V章6）。結果は3,920±40yB.P.で、比較的古い年代値となった。

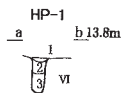
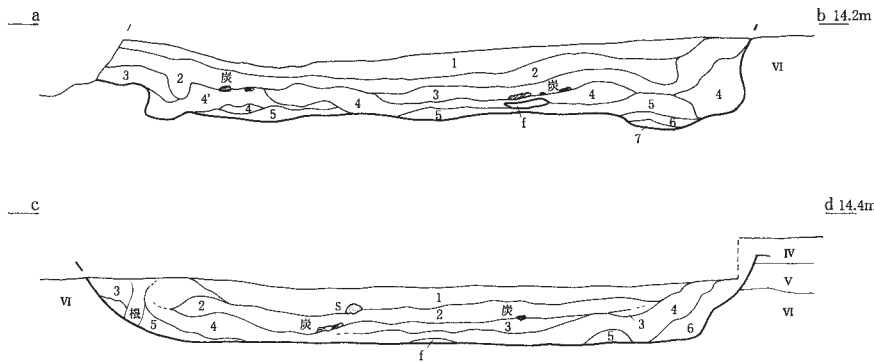
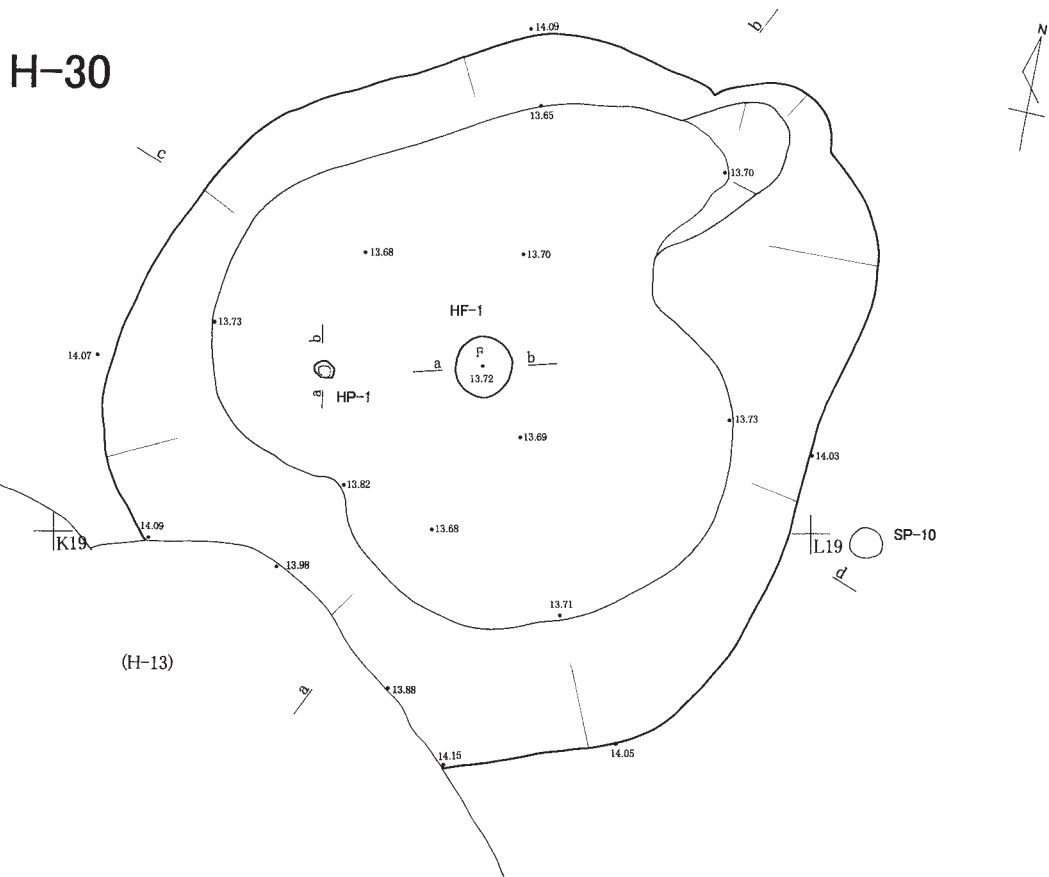
覆土（掘上土）：上位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）主体で、中位の2・3層はややロームが混じる。そして下位の4層はしまりのない黄褐色土で、炭化材を多量含んでいる。床面付近および壁面付近の5層以下は黒褐色土とロームが混じる土壌である。

床面・壁：床は不整な楕円形で、高低差が小さいが凹凸が目立つ。壁は北側～東側は急に立ち上がり、北東部の一部および南西部は緩やかである。

付属遺構：焼土1か所（H-30HF-1）、柱穴状ピット1基（H-30HP-1）を検出した。また住居跡東部外縁にあるSP-10も当遺構に何らかの関連がある可能性がある。

〔炉〕H-30HF-1は、住居跡の中央に位置する地床炉である。大きさ30cm程の円形で、被熱層はVI層、層厚は5cmである。上面は灰褐色で炭化物を含む焼成面で、下位は明度の高い赤褐色の被熱層である。

〔柱穴〕H-30HP-1は床面西部にあり、径7cm、深さ19cmで先端はやや丸みをもつ。



H-30 HF-1

f 灰褐色(7.5YR 4/2) 炭化材含む。
F に近い赤褐色(5YR 5/3) 境界やや明瞭。

H-30 HP-1

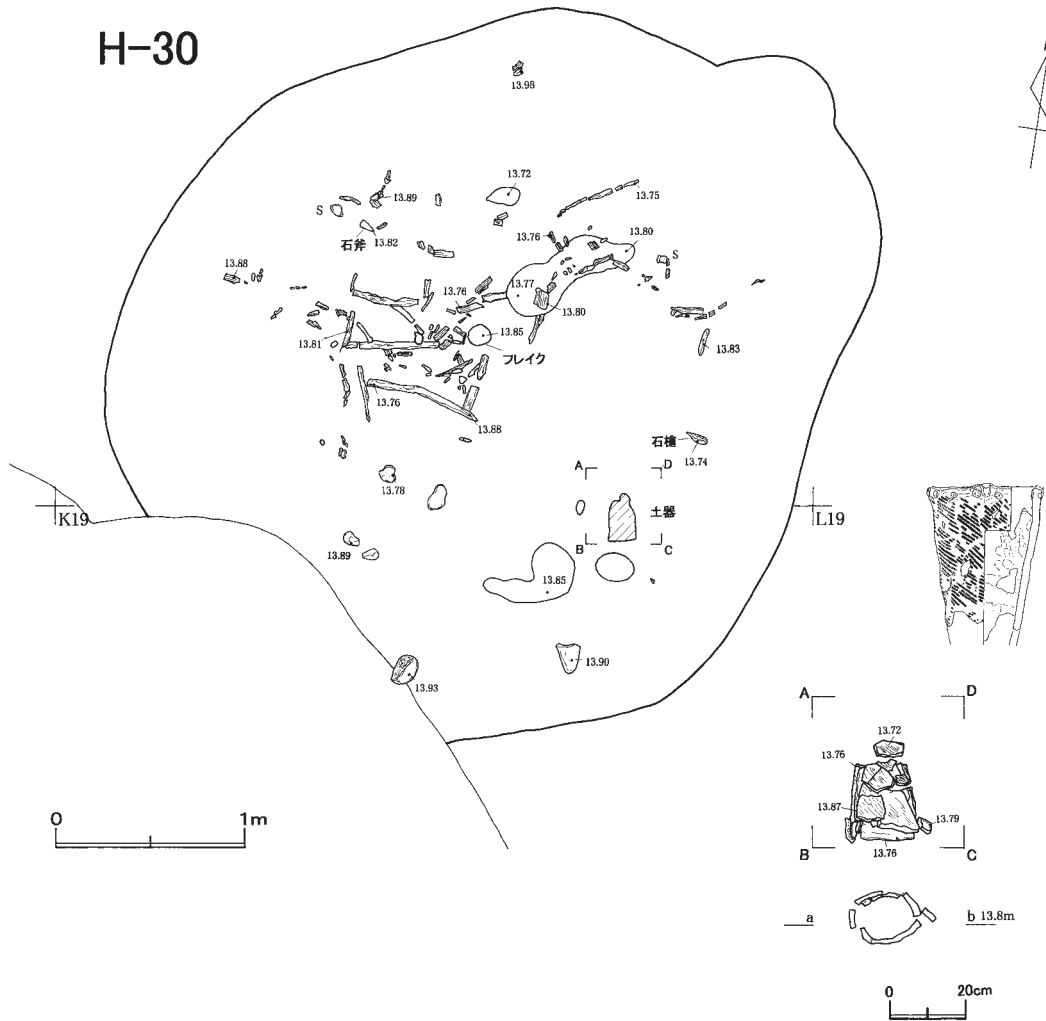
1 暗褐色(10YR 4/3) (V+VI)
2 褐色(10YR 5/3) (V<VI)
3 暗褐色(10YR 4/4) (V<VI)

H-30

- 1 黒色(10YR 1/2) (IV>VI) しまり中、均質的。ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色(10YR 3/3) (VI+VI) しまり弱、不均質。ローム多量含む。
- 3 黒褐色(10YR 2/2) (VI>VI) しまり中、均質的。炭化物多量含む。
- 4 黄褐色~褐色(10YR 5/6~4/4) (VI>VI) しまり弱、やや不均質。ブロック状のローム・炭化物少量含む。
- 4' 暗褐色(10YR 3/3) (VI>VI) しまり弱、やや均質的。細かいローム粒子含む。
- 5 黒褐色(10YR 3/2) (IV>VI) しまりやや弱。漸遷、やや不均質。炭化物やや多量含む。
- 6 黄褐色(10YR 6/8) (VI>VI) しまり中、均質的。
- 7 黒褐色(10YR 2/3) (VI>VI) しまり弱、やや不均質。



図III-95 H-30(1)



図III-96 H-30(2)

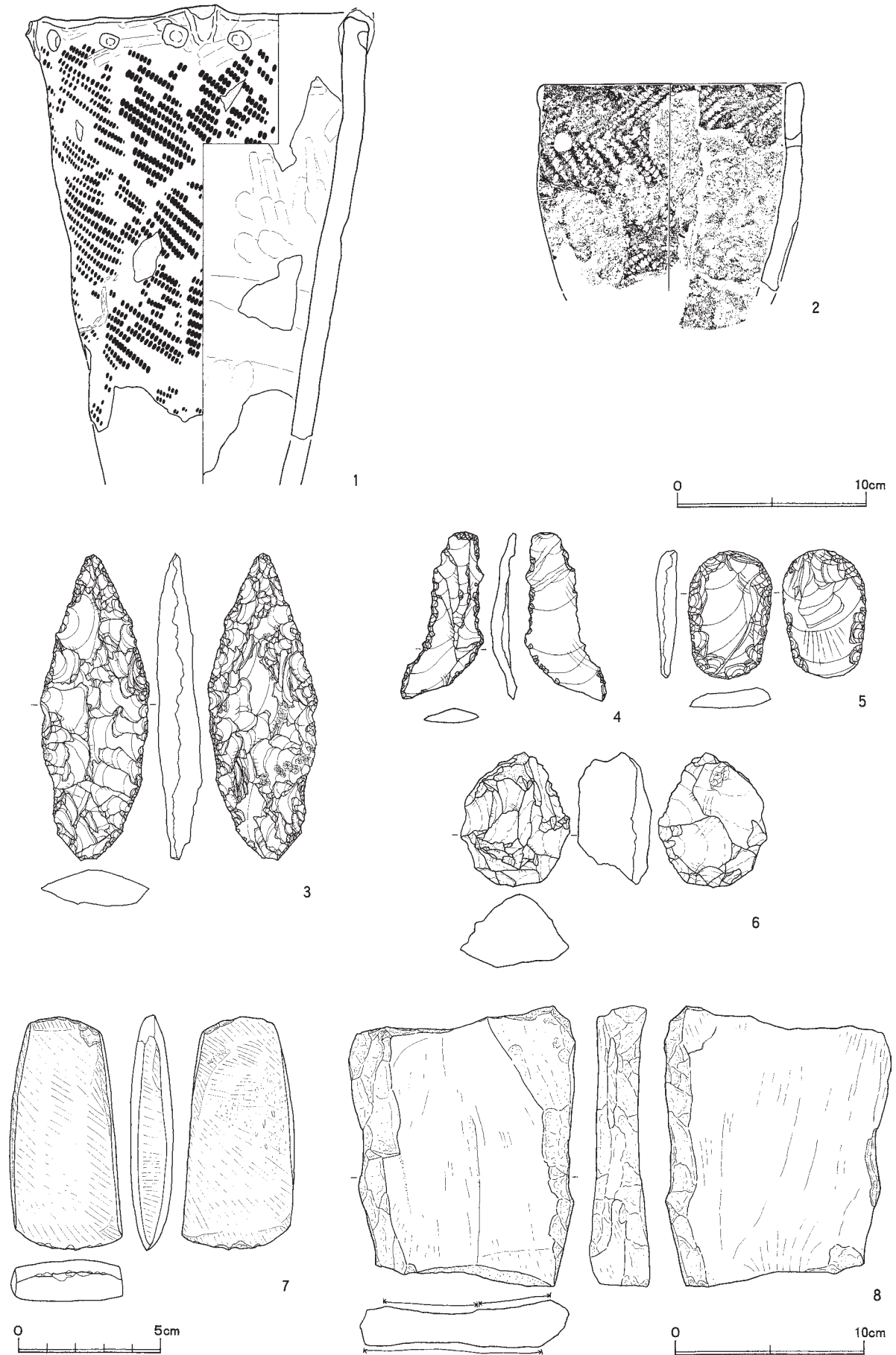
遺物出土状況：覆土下位の黄色土から土器1個体が形状を保ってつぶれた状態で出土した。また床面付近からスクレイパー・砥石が出土している。

出土遺物の総数は300点で、覆土下位の黄色土から出土したものが多く。土器が65点・石器等が230点・礫が5点である。土器はI群b-2類2点・I群b-4類7点・III群b類~IV群a類52点（うちIV群a類46点）などが出土している。石器等は石鏃3点・石槍2点・つまみ付きナイフ2点・スクレイパー6点・両面調整石器3点・石斧1点・砥石片4点・剥片類209点が出土している。

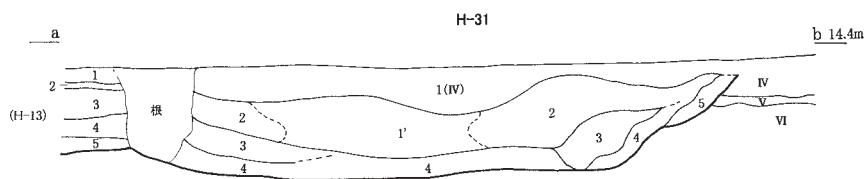
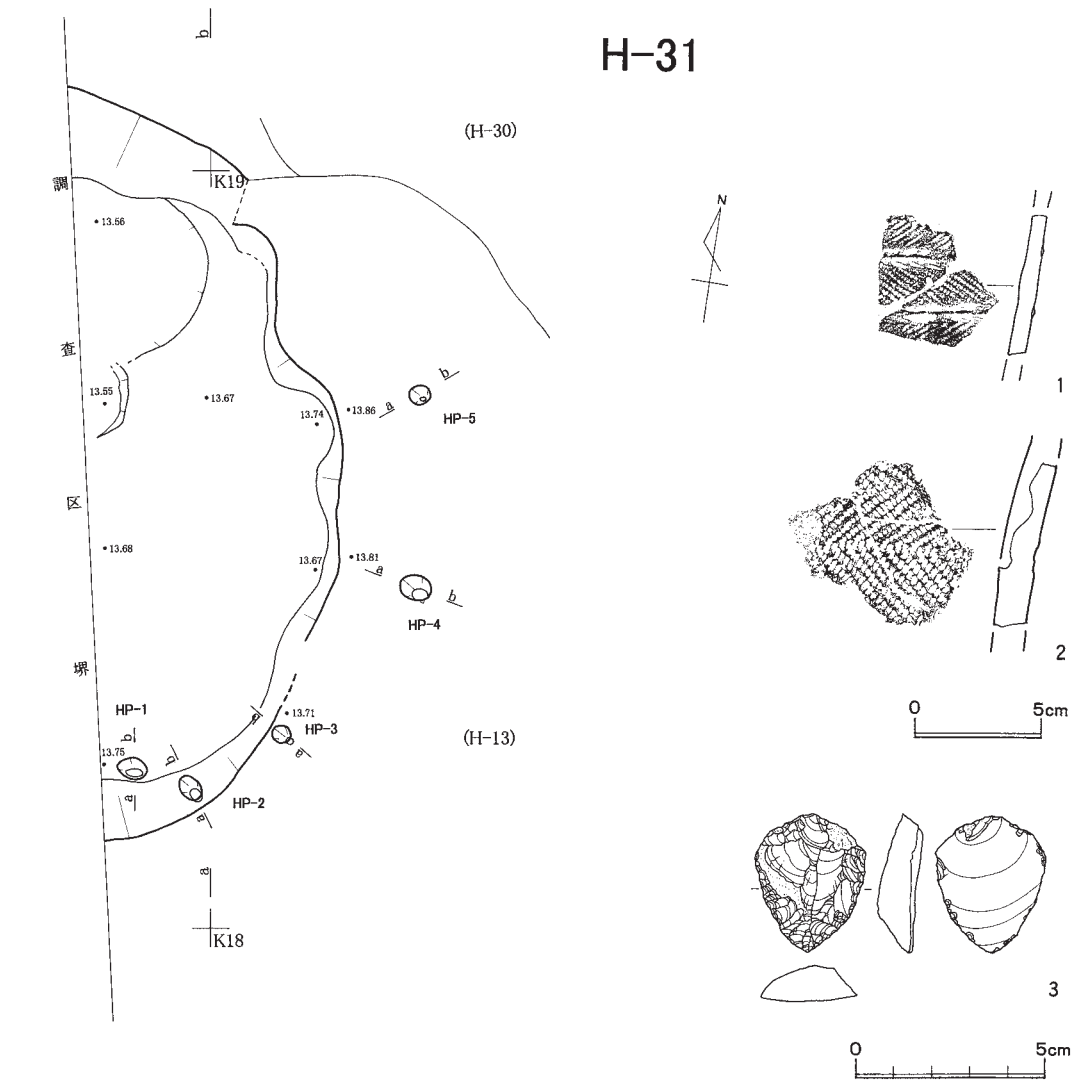
掲載遺物：1・2は北筒Ⅲ式。1は円筒形の深鉢。平縁で、縦位の突起が4単位で施されている。口唇下に小型の円形刺突がやや間隔をあけてめぐっている。口縁部の肥厚帯を欠くが、北筒Ⅲ式の古い段階のものと思われる。2は平縁で、口縁部が直立し胴部が膨らむ。

3は石槍。完形で、先端が尖る。4はつまみ付きナイフ。左刃部が湾曲している。つまみ部のえぐりは不明瞭である。5・6はスクレイパー。5はヘラ状の形態である。6は転礫素材である。7は片岩製の石斧。全面磨製で短冊形である。ほぼ完形で、刃部にわずかに潰打痕がある。8は砥石。扁平な砂岩の両面に磨痕があり、くぼんでいる。

時期：年代測定値は若干古い数値であるが、出土遺物などから、縄文時代後期初頭~前葉の北筒Ⅲ式期と考えられる。（阿部）

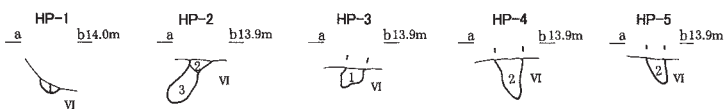


図Ⅲ-97 H-30出土の遺物



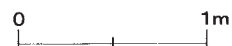
H-31

- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV] しまり中、均質的。
- 1' 黒色(10YR 2/1) [IV>VI] しまりやや弱、均質的、ローム粒子少量含む。
- 2 暗褐色(10YR 3/3) [IV+VI] しまりやや弱、均質的。
- 3 褐色(10YR 2/3) [VI] しまり弱、漸遷、中央部の明度高い。
- 4 黒褐色(10YR 2/3) [IV>VI] しまり弱、やや不均質、炭化物やや多量含む。
- 5 黒色(10YR 2/1) [IV>VI] しまりやや弱、ほぼ均質、細かいローム粒子含む。



H-31 HP-1~5

- 1 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまり弱、ローム混じり、やや不均質。
- 2 暗褐色(10YR 3/3) [V+VI] しまりやや弱、均質的。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) [V<VI] しまり弱、均質的。



図III-98 H-31

H-31 [図Ⅲ-98、図版38・82]

位置：J・K19区

平面形：楕円形（推定）

規模：(3.84)×(1.35)／(3.06)×(1.29)／0.54m 長軸方位：N-1° W

確認・調査：Kラインの土層断面で黒色土や褐色土の落ち込みを確認した。当初はH-13の一部として掘り下げたが、壁の立ち上がりを検出した。調査区境界の壁面を精査し、当遺構がH-13を切ることが確認された。床面を検出し、付属遺構を調査した。

覆土：上位の1層は自然堆積の黒色土（IV層）で、中位の2・3層は締まりの弱い暗褐色土および褐色土でロームが主体である。下層の4層は炭化物を多く含む黒褐色土である。

床面・壁：床面はほぼ平坦だが、北部が一段下がる。壁との境界は明瞭で、やや急に立ち上がる。

付属遺構：柱穴状小ピット5基（H-31HP-1～5）を検出した。

〔柱穴〕住居跡の壁際から外周、H-13の床面に位置する。いずれも径が小さく浅いが、住居跡の中央部に向かって傾いており、この住居跡に属するものとみられる。

遺物出土状況：覆土中位～下位から散漫に出土している。

出土遺物の総数は93点で、土器等が57点・石器等が29点・礫が7点である。土器等はI群b-1類2点・I群b-2類1点・I群b-4類2点・Ⅲ群b類～IV群a類28点（うちIV群a類22点）・IV群b類18点などが出土している。石器等はスクレイパー2点・剥片類27点が出土している。

掲載遺物：1は中茶路式。2は北筒式。結束羽状縄文が施文されている。3はスクレイパー。半割した転礫が素材で、背面の一部に原石面が残る。下端に近い側縁に細かい調整が行われている。

重複・時期：H-13と重複し、当遺構が新しい。時期は形状や切り合い関係、出土遺物などから、縄文時代後期初頭の北筒式期と考えられる。 (阿部)

H-32 [図Ⅲ-99・100、図版38・82]

位置：J11・12区

平面形：不整形

規模：(2.64)×(2.54)／(1.64)×(1.90)／0.56m 長軸方位：N-58° W

確認・調査：調査区境界にかかるJ11区で、Ta-c火山灰が堆積する落ち込みを確認した。火山灰除去後、この落ち込みを中心にして東西方向に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。覆土を約20～30cm掘り下げたところで底面を検出し、緩やかに立ち上がる壁面を確認した。西側は調査区境界にかかっているために、全体のプランは不明である。

覆土：上面はIV層主体の黒色土で覆われている。その下位はIV層にV層とVI層が混じる黒色～黒褐色土で構成されている。また、覆土中から炭化材が出土した。出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行った。その結果、3,980±40yrBPという測定結果を得た（V章-6）。

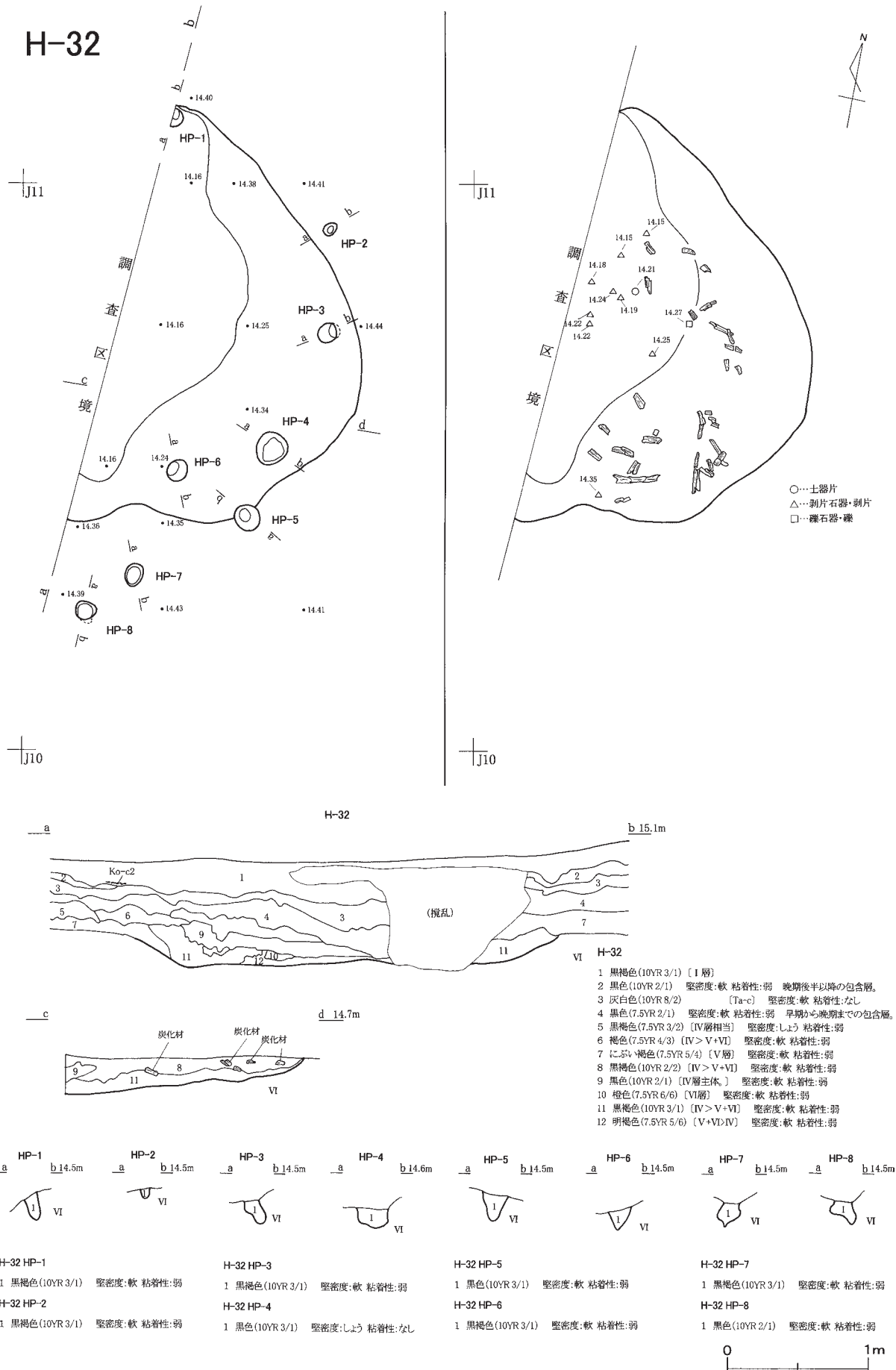
付属遺構：柱穴様ピットを8基（H-32HP-1～8）検出した。径が約10～20cmで、確認面からの深さが浅いために判然としない。

遺物出土状況：出土遺物の総数は47点で、土器が3点・石器等が44点である。内訳はⅢ群b類～IV群a類土器が3点・石鏃1点・石槍1点・スクレイパー2点・石斧1点・剥片32点などである。床面出土のものは土器が1点、石槍1点・スクレイパー1点・剥片6点、礫が1点である。

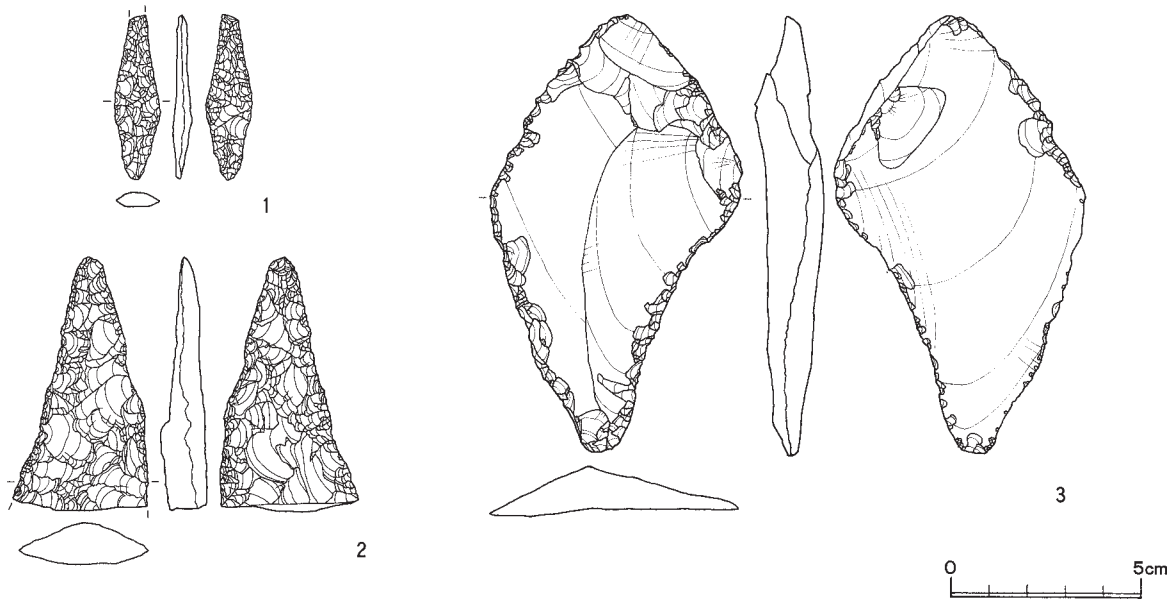
掲載遺物：1は石鏃。細身で、先端部を欠く。2は石槍の半損品。3はスクレイパー。菱形に近い大型の剥片が素材で、側縁に細かい調整が連続する。

時期：出土遺物等から判断すると、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。

(笠原)



図III-99 H-32



図Ⅲ-100 H-32出土の遺物

H-33 [図Ⅲ-101、図版39・40・83]

位置：M14・15・16、N14・15・16区

平面形：楕円形

規模：6.22×5.25／(5.28)×3.98／0.40m

長軸方位：N-75° E

確認・調査：IV層上位を精査したところ、Ta-cとみられる灰黄褐色のまとまりが検出された。竪穴住居跡のくぼみに堆積した火山灰であることを想定し、M15区の試掘坑を完掘するとともに、トレンチを十字に設定し掘り下げたところ、床面と壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡とした。平面形は、卵形に近い楕円形を呈する。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った(Ⅲ章8)。

覆土：1層Ta-c・2層黒色土は自然堆積層である。3層～6層は黒色土と黄褐色土が混じる。全体的に黒褐色土が主体であるが、4層は黄褐色土に黒色土が混じる層であり炭化材が含まれる。

床面・壁：床面はおおむね平坦であるが、一部凹凸が目立つ。東側は一段下がり、径0.8mほどの範囲に貼床とみられるやや硬質な土壌がある。壁は南側・北側ではやや急に立ち上がるが、西側は緩やかで床面との境界が不明瞭である。東側は崖により不明である。

付属遺構：焼土1か所(H-33HF-1)と柱穴状小ピット6基(H-33HP-1～6)を検出した。

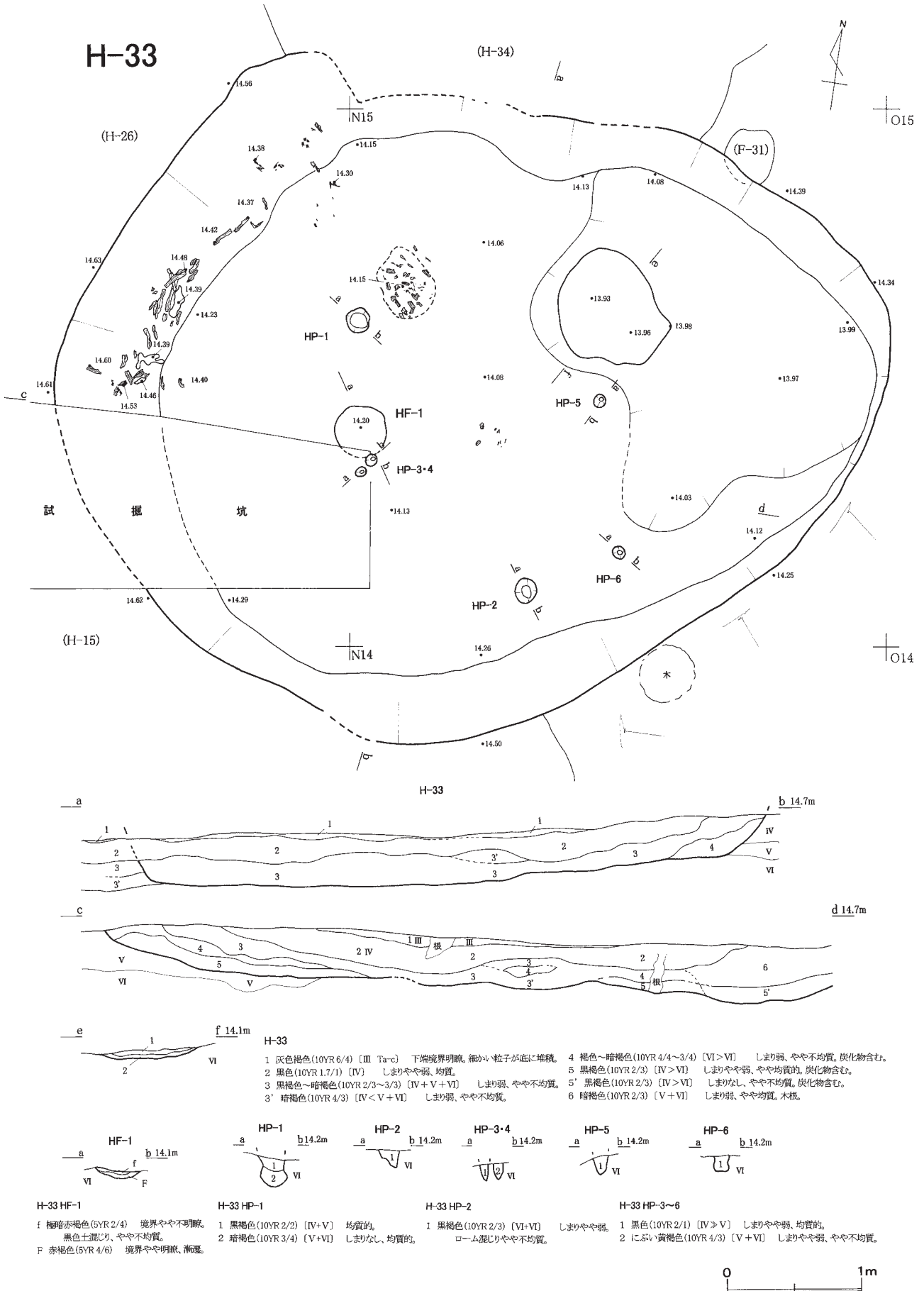
〔炉〕H-33HF-1は竪穴住居跡中央より西側に位置する。ほぼ円形で、床面から若干くぼんでおり、VI層が被熱している。

〔柱穴〕H-33HP-1はHF-1の北側に位置する。柱穴下部がやや広がる。H-33HP2～6は断面が不定形で、径が小さく浅い。根穴の可能性もある。

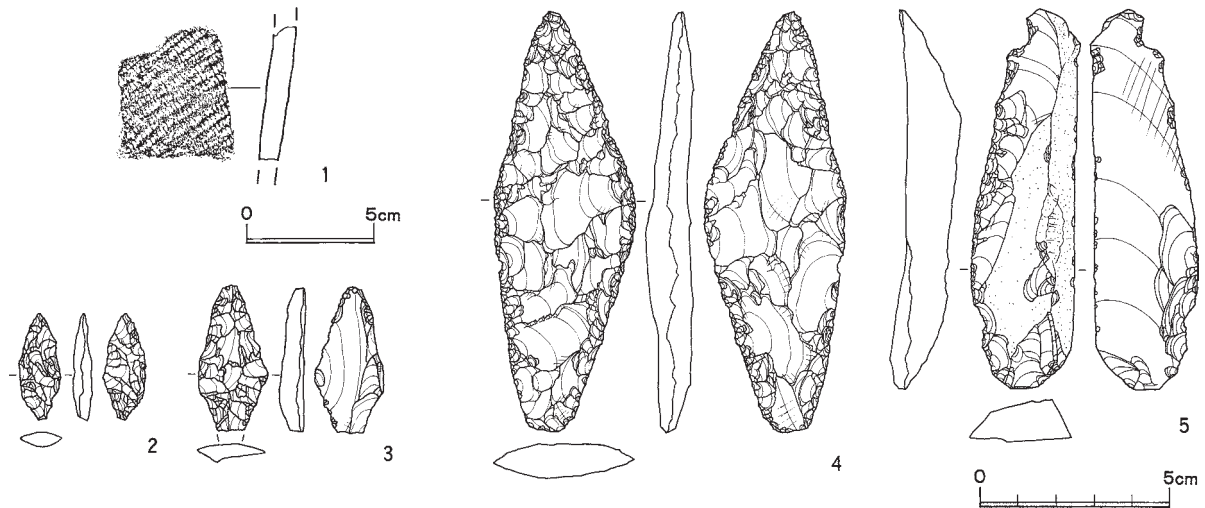
遺物出土状況：床面付近からスクレイパー1点・剥片1点が出土した。ほかは覆土出土である。

出土遺物の総数は182点で、土器が41点・石器等が139点・礫が2点である。土器はI群b-1類2点・I群b-4類32点・Ⅲ群b類～IV群a類2点・IV群b類5点が出土している。石器等は削器1点・石鎌3点・石槍3点・つまみ付きナイフ3点・スクレイパー6点・両面調整石器2点・砥石片20点・剥片類101点が出土している。

このほか、炭化材が多数出土している。西側壁際付近から出土しているが、これはもともとH-26に含まれていたものが流入した材とみられる。また竪穴中央より北側の床面付近では、径50cm前後の



図III-101 H-33



図Ⅲ-102 H-33出土の遺物

範囲から細かい材がまとまって出土した。

掲載遺物：1は北筒Ⅱ式の胴部片。LR縄文が密に施文されている。2・3は石鏃。2は両面全面に細かい調整が施されている一方、3の腹面側は端部のみに細かい調整がみられる。4は石槍。左側縁がやや直線的になっている。5はつまみ付きナイフ。背面に原石面およびその稜が残る。つまみ部のえぐりはやや不明瞭である。下端部にも調整を加え、刃部を作出している。

重複・時期：H-26・34と重複し、いずれも当遺構の方が新しい。竪穴住居跡の切り合いや出土遺物から、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。(阿部)

H-34 [図Ⅲ-103~105、図版41・83]

位置：M16・17、N16・17、O16・17区

平面形：不整楕円形

規模：(5.64)×(5.65)／(5.30)×(5.10)／0.68m

長軸方位：N-2° W

確認・調査：Ⅳ層上位を精査したところ、Ta-cとみられる灰黄褐色のまとまりが検出された。同様の範囲が南側にもあったため(H-33)、その範囲を通して中央部を通るように土層観察用のベルトとトレンチを設定した。またそれに直交するトレンチを2か所設定して掘り下げたところ、床面と壁の立ち上がりを確認し、竪穴住居跡とした。順次掘り下げ、床面を検出し、付属遺構の調査を行った。床面付近の土壌および焼土を採取してフローテーション作業を行った(Ⅲ章8)。

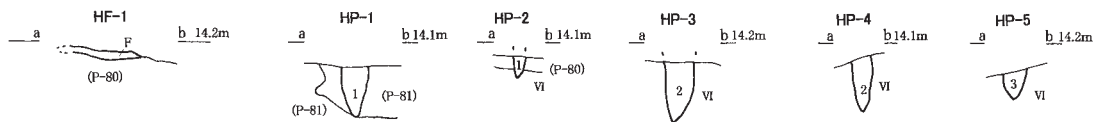
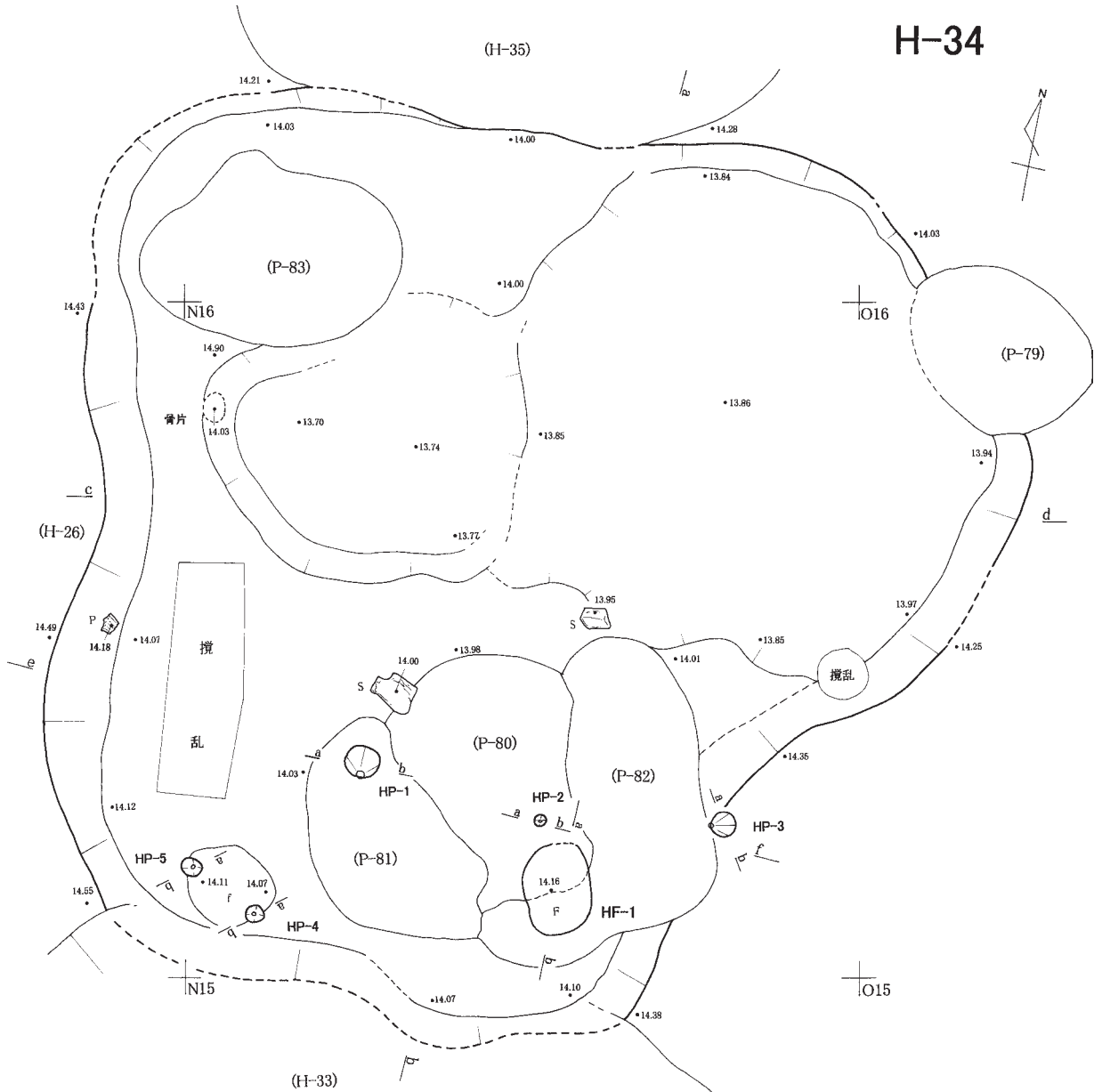
覆土：1層はTa-c、上位の2層は黒色土(Ⅳ層)で自然堆積であるが、2層中にロームが不均質に混じる流入土層が5~10cm堆積する。中位~下位の3・4層は暗褐色でロームを主体とする堆積層。しまりは弱い。壁面付近の最下層の5層は、炭化物を含む黒色土主体の土層である。

住居跡東部のH-26を切る壁際付近では、焼土粒を含む暗褐色土(3f)が堆積していた。H-26の土層を含むとみられる。

床面・壁：床面は北西部が1段下がり、中央部北側の径約1mの範囲がさらに落ち込んでいる。それぞれの面はおおむね平坦である。他の遺構の覆土が複数みられ、色調が一様でない。壁との境界部は丸みをもつが、やや急に立ち上がる。

付属遺構：焼土1か所(H-34HF-1)、柱穴状小ピット5基(H-34HP-1~5)を検出した。

〔焼土〕H-34HF-1は、住居跡の南部で検出した。大きさ53×40cmの楕円形で、被熱層は下位の遺構の覆土である。層厚は4cmと薄いが強くと被熱している。



H-34 HF-1

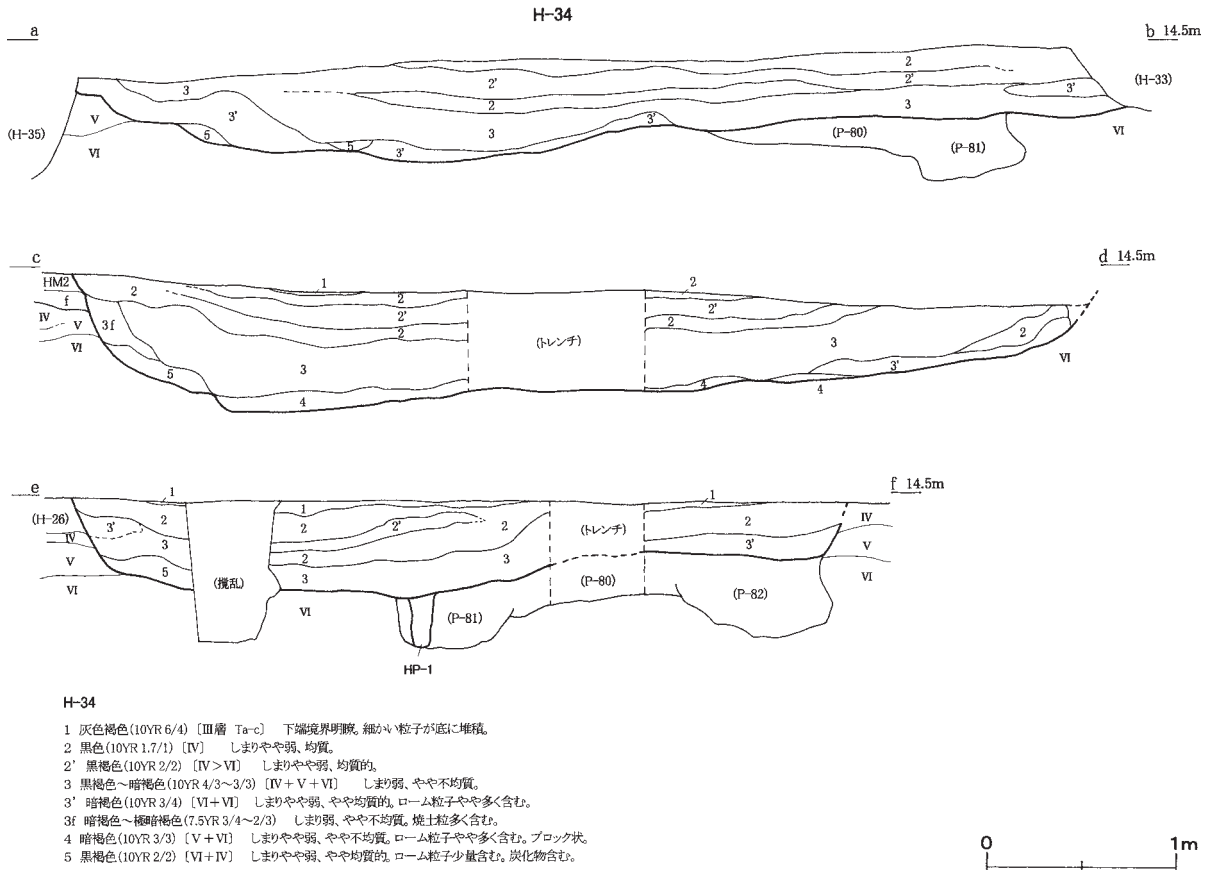
F 暗赤褐色(5YR 3/6) 境界明瞭。
しまり中、やや均質。ローム粒多く含む。

H-34 HP-1~5

- 1 黒褐色(10YR 2/2) [VI+IV] しまりやや弱、やや均質的。ローム粒子少量含む。炭化物含む。
- 2 黒褐色(10YR 3/2) [VI+IV] しまりやや弱、均質的。ローム粒子少量含む。
- 3 暗褐色(10YR 3/4) [V+VI] しまり弱、やや不均質。



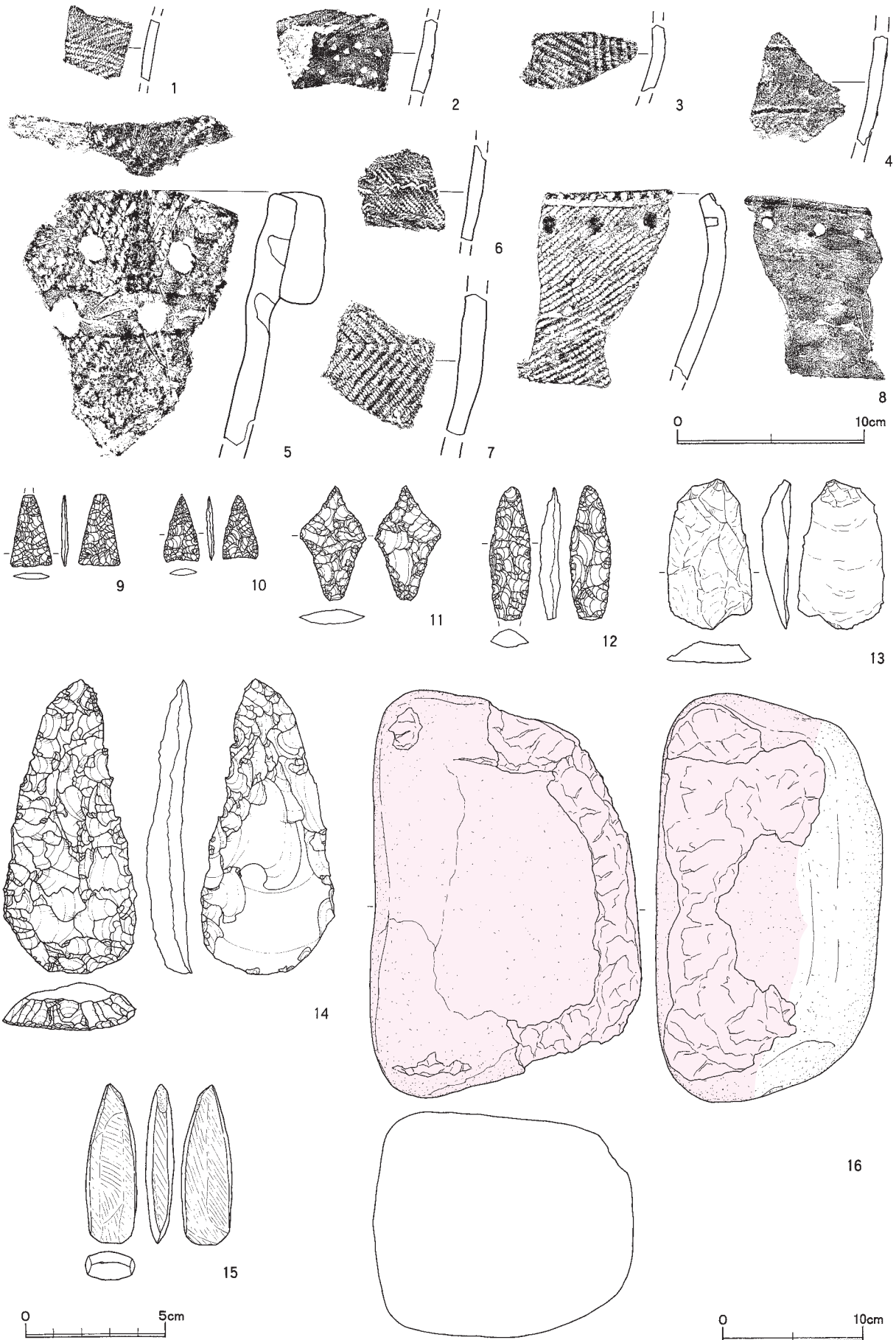
図III-103 H-34(1)



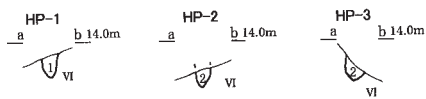
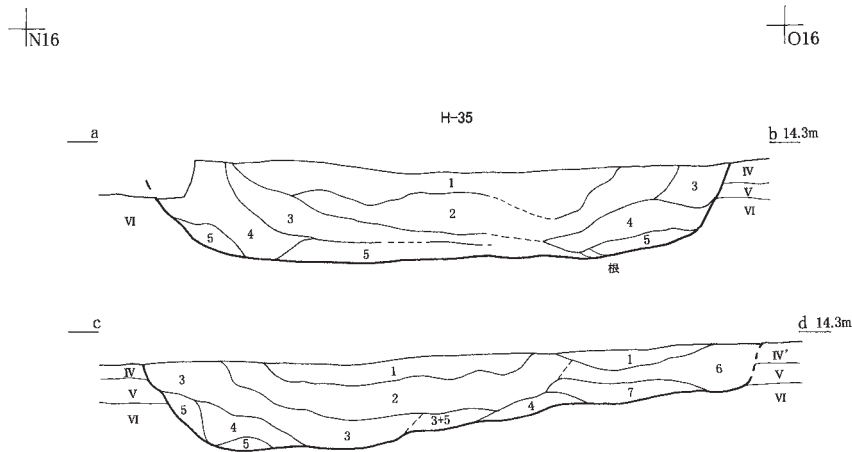
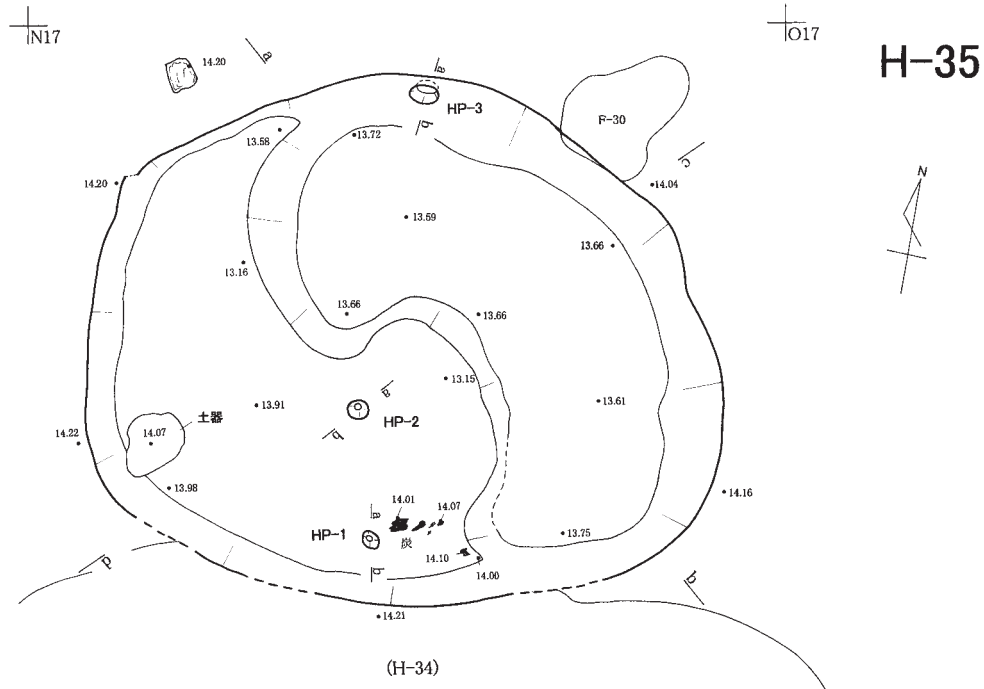
図Ⅲ-104 H-34(2)

[柱穴] H-34HP-1～5は、形状や配置に規則性がない。HP-1はP-81の土層断面で判明した。HP-2・5は浅い。HP-3は壁際にある。HP-4は径が小さいが深さは30cmほどある。
 遺物出土状況：覆土中位～下位にかけて遺物が多数出土している。まとめて出土したものはない。剥片類はH-26に近い西側で多くみられる。同様の範囲から、骨片が少量出土した。シカの四肢骨片やサケ科の椎骨片が含まれている(Ⅲ章8)。

出土遺物の総数は1,559点で、土器が908点・石器等が624点・礫が27点である。土器はI群b-1類23点・I群b-4類145点・Ⅲ群b類～IV群a類686点(うちIV群a類2点)・IV群b類18点などが出土している。石器等は彫器2点・石鎌10点・石槍5点・石錐1点・ナイフ類2点・スクレイパー6点・両面調整石器3点、石核・石のみ・砥石・台石等がそれぞれ1点、剥片類591点が出土している。
 掲載遺物：1・2は東釧路Ⅱ式。2は斜め下からの弱い刺突が多数みられる。3・4は中茶路式。3は絡条体圧痕が縦位・斜位に密に施されている。5～7は北筒Ⅲ式。5は口縁部に縦位の隆起帯があり、その左右に円形刺突が穿たれている。浅い凹帯内に円形刺突がある。8は口縁部に刻み列と突瘤がめぐり、エリモB式。やや内傾する角形口唇である。9～11は石鎌。9・10は三角鎌。11は菱形に近い。12は両面調整石器。細身でやや厚い。13は乳白色で半透明の珪岩製のスクレイパー。14はエンドスクレイパー。厚みのある撥形の素材に細かい調整が行われている。15は石のみとした。細身で小型。全面磨製である。16は床面から出土した台石。一辺に打撃による剥離痕が連続する。
 重複・時期：多くの遺構と重複している。H-26・33と重複し、当遺構の方がH-33より古くH-26より新しい。またP-79・80・81・82・83と重複し、当遺構の方が新しい。時期は竪穴住居跡の切り合いや出土遺物から、縄文時代後期初頭～前葉の北筒式期とみられる。(阿部)



図III-105 H-34出土の遺物



H-35 HP-1~3

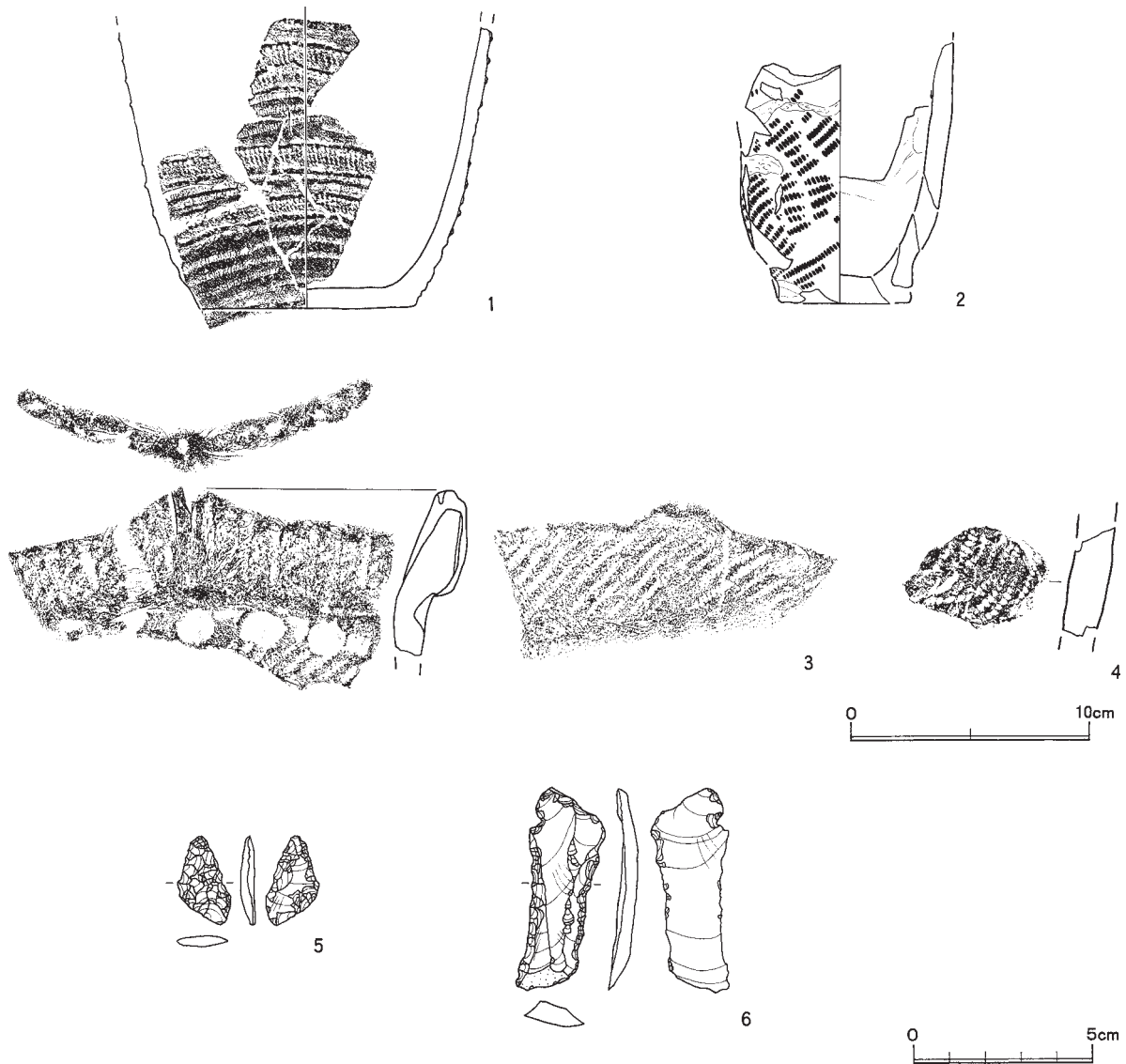
- 1 暗褐色(10YR 3/3) [V+IV] しまり弱、やや均質的。
- 2 黒褐色(10YR 2/3) [VI>IV] しまり弱、やや均質的。

H-35

- 1 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまりやや弱、やや不均質。ローム粒子少量含む。
- 2 褐色(10YR 4/4) [VI>VI] しまり弱、不均質。ロームブロック多量含む。
- 3 黒褐色(10YR 2/3) [V>VI] しまりやや弱、やや均質的。ローム粒子多量含む。
- 4 暗褐色(10YR 3/4) [VI>VI] しまり弱、不均質。ロームブロック多量。
- 5 黒色(10YR 2/1) [VI>VI] しまりやや弱、粘性あり、均質的。ローム粒子少量含む。炭化物少量含む。
- 6 暗褐色(10YR 3/4) [V] しまり弱、やや均質的。
- 7 黒褐色(10YR 2/2) [VI>V] しまりやや弱、均質的。ローム粒子少量含む。



図 III - 106 H - 35



図Ⅲ-107 H-35出土の遺物

H-35 [図Ⅲ-106・107、図版42・83]

位置：N17区

平面形：楕円形

規模：3.41×2.80/2.80×2.30/0.55m

長軸方位：N-85° E

確認・調査：H-34の南北のトレンチ調査で、北側にも遺構が存在することが分かった。周辺のIV層を数cm掘り下げたところ、ドーナツ状の暗褐色土を検出した。その中央部に直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。覆土を掘り下げ、床面を検出し、付属遺構の調査を行った。

覆土：黒色土を主体とする暗色の土層と、褐色土を主体とする明るい土層の互層となっている。床面や壁の形状に沿って皿状に堆積する土層が多い。最下層の5層は、炭化物を少量含む黒色土主体の土層である。c-dラインの断面では、北東側の土層が南西側を切るようにも観察されるが、周辺では中位の層に変化が見られず、同一の遺構とした。

床面・壁：床は南西側から北東側へ傾斜しており、中央部付近で段を有する。南東－北西方向はおおむね平坦である。壁の立ち上がりはやや急である。

付属遺構：柱穴状小ピットを4基（H-35HP-1～3）検出した。

〔柱穴〕H-35HP-1・2は床面で検出した浅い小ピットで、先端はとがる。H-35HP-3は壁面で検出した浅い小ピット。根穴を誤認した可能性も考えられる。

遺物出土状況：壁際の床面付近で、小型の深鉢片がまとまって出土した。住居跡南部の壁に近い床面から炭化材の小片が多数出土した。

出土遺物の総数は939点で、土器等が121点・石器等が817点・礫が1点である。土器等はI群b-1類19点・I群b-4類61点・III群b類～IV群a類34点（うちIV群a類14点）などのほか、焼成粘土塊3点が出土している。石器等は石鏃5点・石槍1点・つまみ付きナイフ3点・スクレイパー8点・両面調整石器2点・石核1点・石斧2点・剥片類4点が出土している。

掲載遺物：1は中茶路式。H-34および周辺包含層出土のものと接合した。平底で横位の細貼付帯間に撚糸文が密に施された区画帯と、横位の縄文押捺が施されたものがある。2～4は北筒式。2はまとまって出土した小型深鉢の胴～底部。ややすぼまる平底。にぶい黄褐色を呈する。3は肥厚帯に縦位の沈線列がある。北筒Ⅱ式の新段階に相当する。胎土に砂粒を多く含み、ザラついている。

5は小型の石鏃。右側縁が直線的になっており、再調整が行われたものと思われる。6はつまみ付きナイフ。背面下端部に原石面が残る。基部のえぐりは1か所みられる。

重複・時期：H-34と重複する。壁際付近がわずかに重なり判然としないが、当遺構が新しいとみられる。またF-30と重複し、こちらは当遺構が古い。時期は重複関係や住居の形状、出土遺物などから、縄文時代後期初頭～前葉の北筒式期と考えられる。

（阿部）

H-36〔図Ⅲ-108、図版42・83〕

位置：N10区

平面形：不整楕円形

規模：(1.24)×2.60／(1.20)×2.14／0.42m

長軸方位：N-35° E

確認・調査：I層を除去した段階で、褐色の落ち込みを確認した。落ち込みの中心から直交する土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：堆積層の大部分は盛土・掘上げ土とみられる。

床面・壁：床はやや凹凸がある。壁は急角度で立ち上がる。

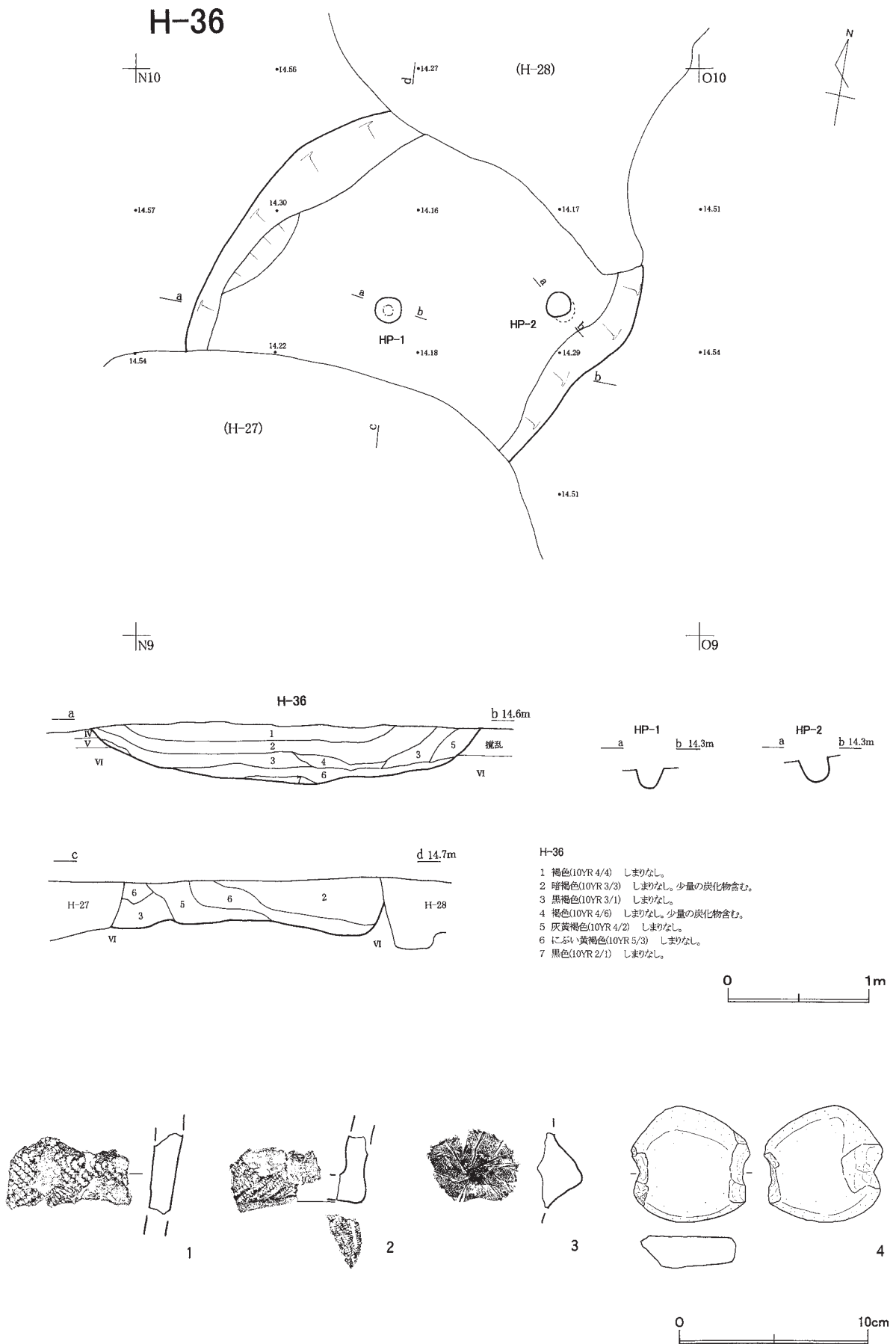
付属構築物：中央部と東側で2基の柱穴が確認された（HP-1・2）。

遺物出土状況：覆土下位からI群b-4類土器19点・III群b類～IV群a類土器66点と石斧2点・石錘1点が出土した。

掲載遺物：1～3は北筒式。2は底部の一部のみのものであるが、底面に縄文が観察される。3は突起の一部とみられる。4は石錘。

重複・時期：H-27・28と重複する。本遺構がH-27・28より古い。時期は出土した土器からみて、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

（佐藤）



図III-108 H-36

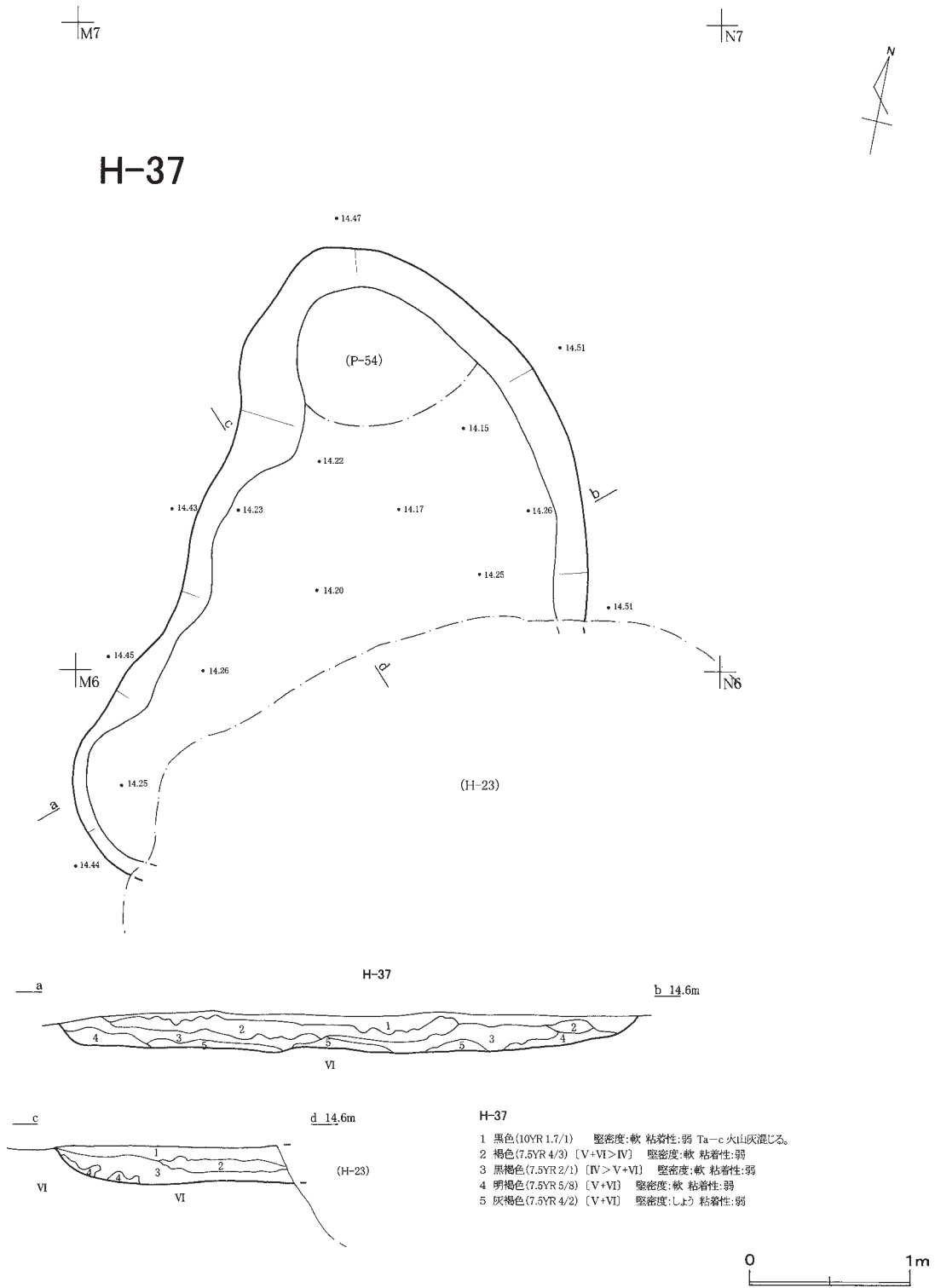


図 III-109 H-37

H-37 [図Ⅲ-109、図版42]

位置：N10区

平面形：不整形

規模：4.00×2.48／(3.60)×2.14／0.24m

長軸方位：N-16° W

確認・調査：H-23の北側を精査中にTa-c火山灰の混じる黒色土の落ち込みを確認した。この落ち込みの中心に直交するように土層観察用のベルトを設定してトレンチ調査を行った。南側はH-23に切られているために全体のプランは不明である。覆土を約20～25cm掘り下げたところで明褐色土の底面を検出し、緩やかに立ち上がる壁面も確認した。焼土や柱穴等は確認できなかった。

覆土：上面はTa-c火山灰の混じるIV層主体の黒色土で覆われている。その下位はIV層にV層とVI層が混じる黒色～黒褐色土で構成されている。

遺物出土状況：出土遺物の総数は5点で、土器が2点・石器等が3点である。内訳はⅢ群b類～Ⅳ群a類土器が2点、二次加工痕のある剥片が2点、剥片が1点である。床面出土の遺物はない。

時期：出土遺物等から判断すると、縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。

(笠原)

H-38 [図Ⅲ-110～114、図版43・44・84・85]

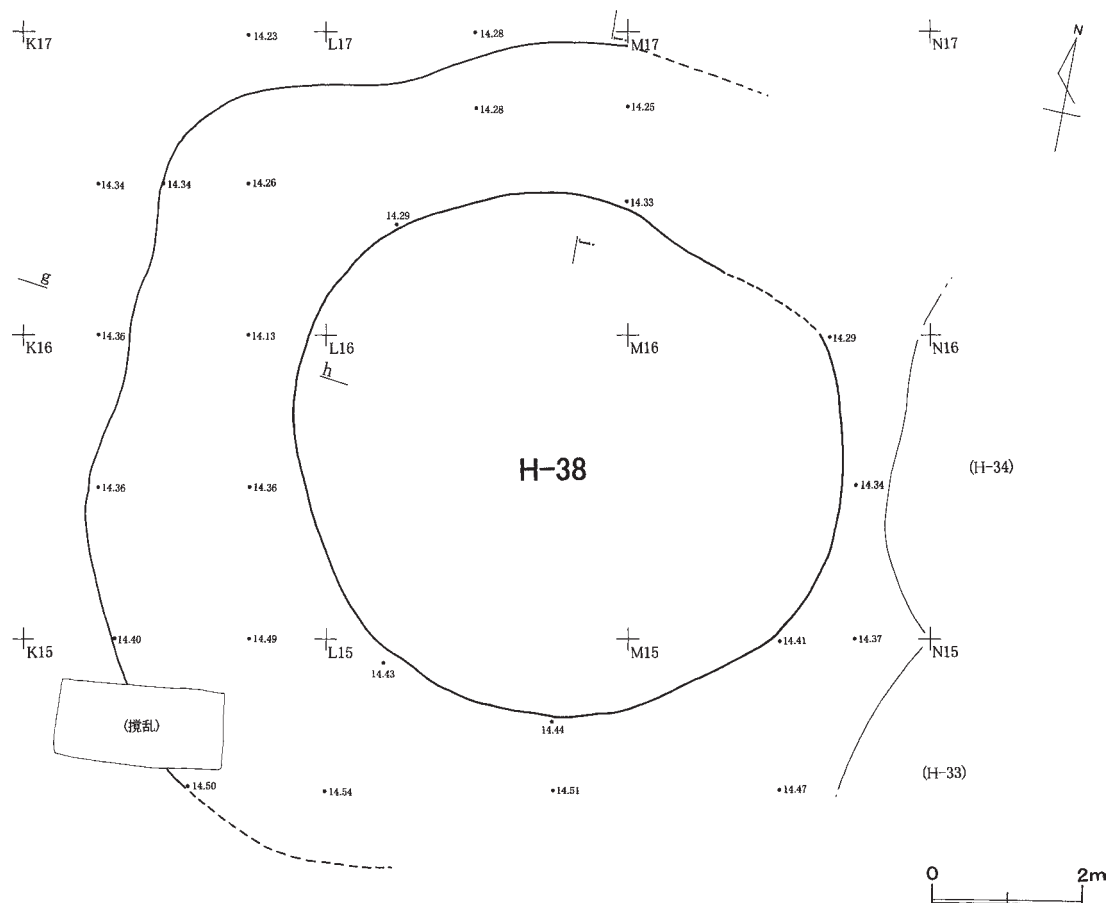
位置：L15・16、M15・16区

平面形：おおむね円形

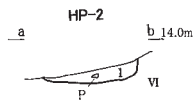
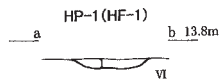
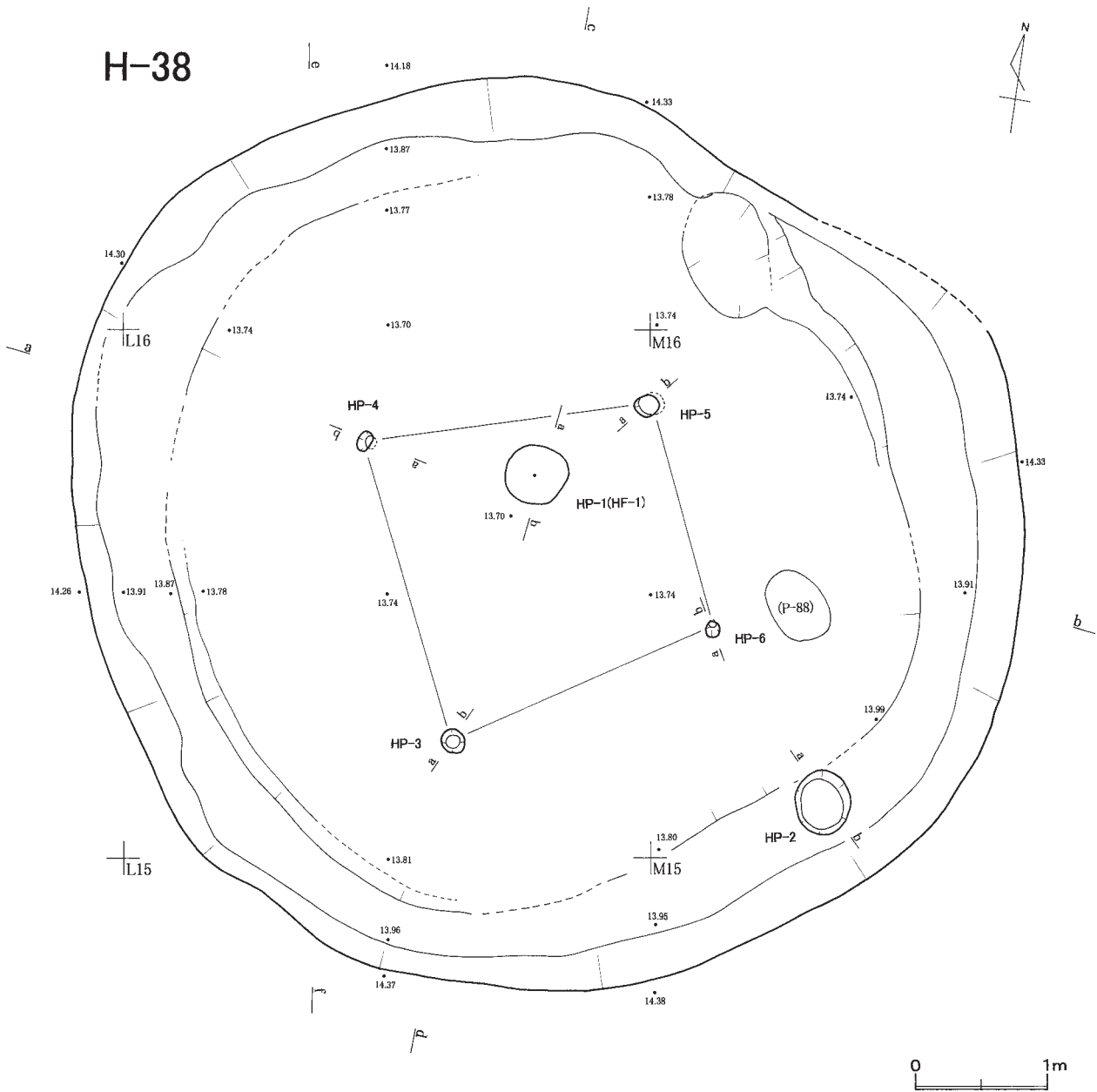
規模：7.45×6.70／6.84×6.20／0.62m

長軸方位：N-69° W

確認・調査：平地住居跡群の調査で設定したトレンチで、H-14より下位に黒色土の落ち込みを確認しており、H-14の調査後、V層付近まで掘り下げて黒色土の落ち込みの範囲を検出した。前述のト



図Ⅲ-110 H-38(1)



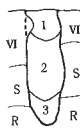
H-38 HP-1(HF-1)

1 にぶい黄褐色(10YR 4/3) [V<<VI] しまりやや強、やや均質的。炭化物少量含む。ローム粒やや多く含む。

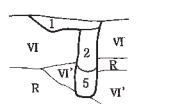
H-38 HP-2

1 黒褐色(10YR 2/2) [VI>IV] しまり中、やや不均質。ローム粒やや多く含む。

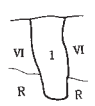
HP-3
a b 13.9m



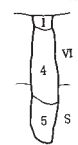
HP-4
a b 13.8m



HP-5
a b 13.8m



HP-6
a b 13.8m



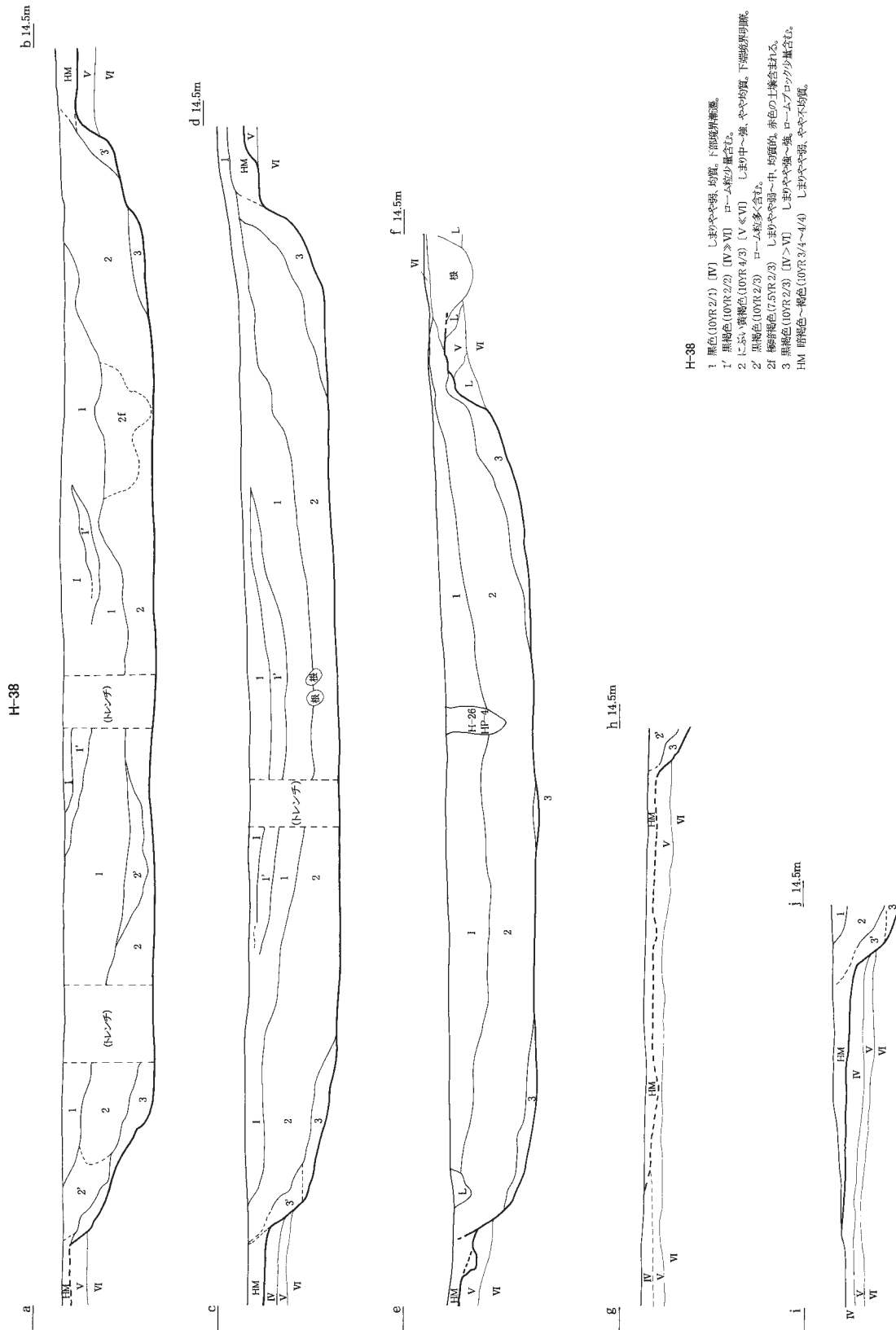
H-38 HP-3~6

1 にぶい黄褐色(10YR 4/3) [V<<VI] しまりやや強、やや不均質。
2 褐色(10YR 4/4) [V+VI] しまりやや弱、やや不均質。
3 灰黄褐色(10YR 4/2) [V<<VI] しまり弱、粘性やや強、砂混じる。
4 黄褐色(10YR 5/6) [VI] しまりなし。
5 褐色(10YR 4/4) [V+VI] しまりやや弱、砂混じり、不均質。

VI 黄褐色(10YR 5/6) しまりやや強。
VI' 黄褐色(10YR 3/6) 砂混じり。
S オリーブ褐色(2.5Y 4/6) 砂層。
R 褐色(10YR 4/4) 礫層。径1~4cmの礫。



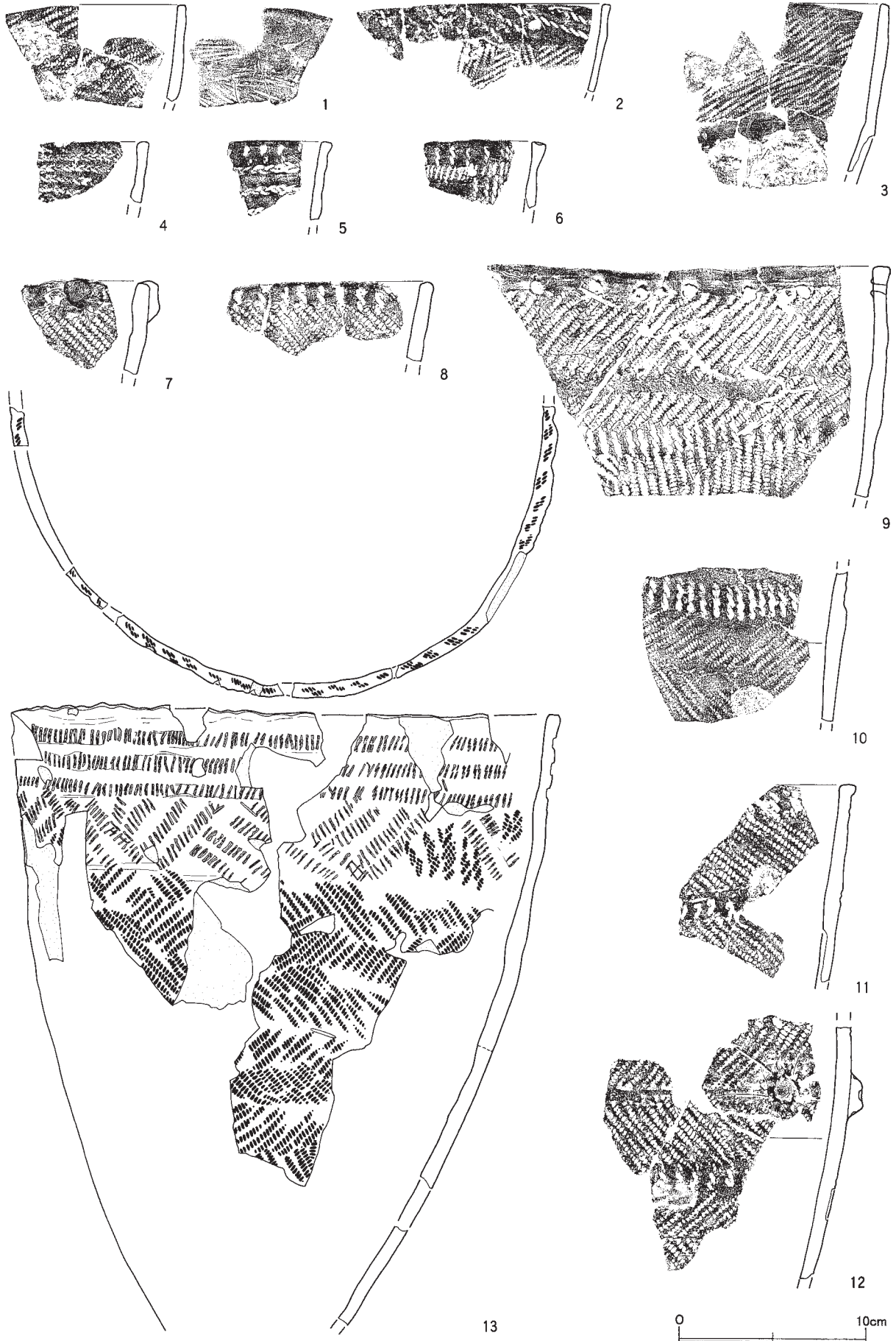
図III-111 H-38(2)



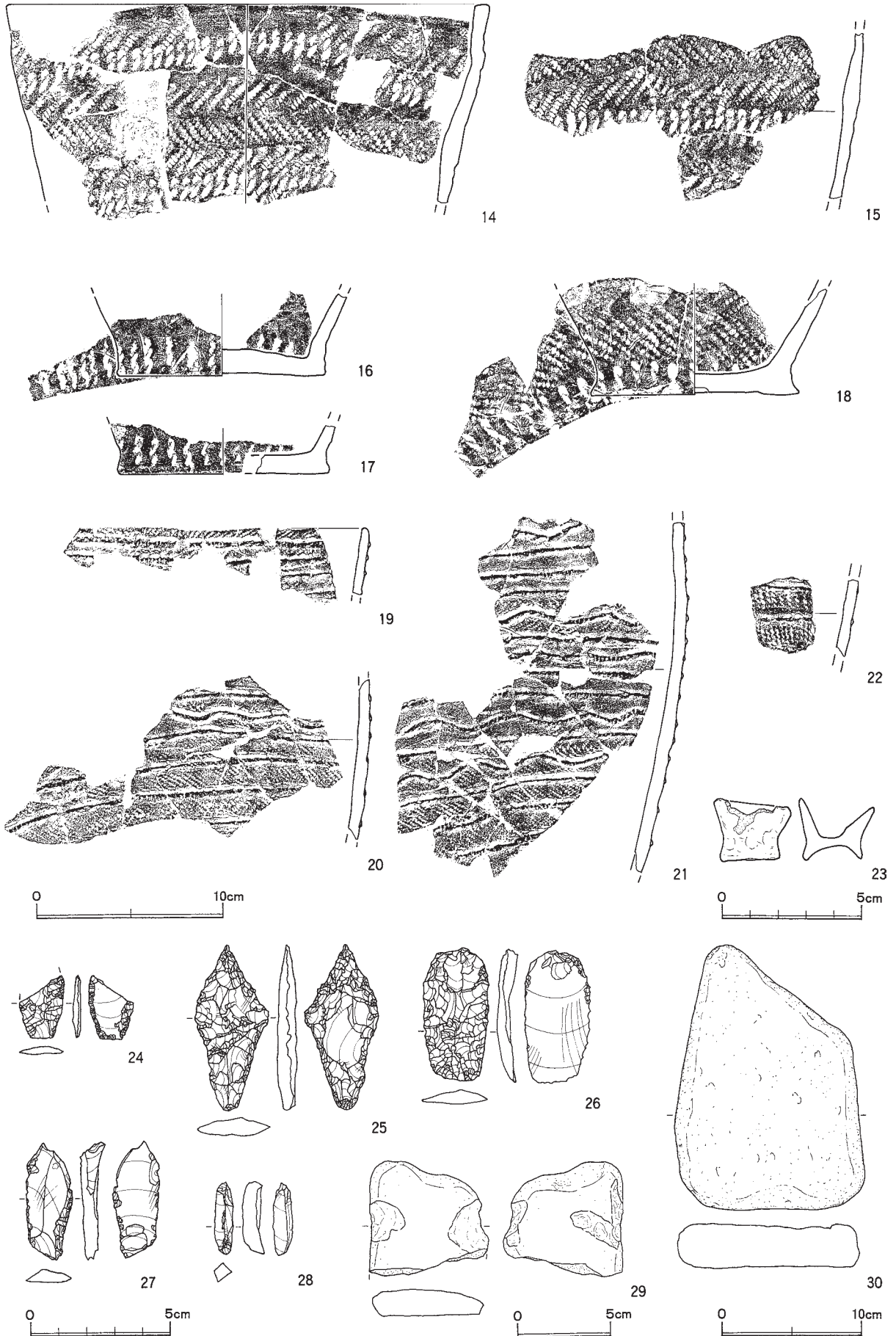
H-38
 1 黒色 (10YR 2/1) [IV] しまりやや弱、均質、下部境界明確。
 1' 黒褐色 (10YR 2/2) [IV>VI] コーム粒少量含む。
 2 にぶい、黄褐色 (10YR 4/3) [V<VI] しまり中〜強、やや均質、下部境界不明。
 2f 黒褐色 (10YR 2/3) コーム粒多く含む。
 3 黒褐色 (7.5YR 2/3) しまりや弱〜中、均質的、赤色の土層含まれる。
 HM 暗褐色 (10YR 2/3) [IV>VI] しまりやや強〜強、ロームアブロッグ少量含む。
 L 暗褐色〜褐色 (10YR 3/4~4/4) しまりやや強、やや不均質。

図III-112 H-38(3)

0 1m



図Ⅲ-113 H-38出土の遺物(1)



図III-114 H-38出土の遺物(2)

レンチを拡張し、さらに落ち込みの中心に直交するように土層観察用のベルトを設定した。トレンチ調査を行い、床と壁の立ち上がりを確認した。順次掘り下げたが、覆土の下位は非常に硬く締まっており、スコップを併用した。床面を検出し、周囲の掘上土とみられる土壌の範囲もとらえた。

床面で検出した焼土の土壌を採取してフローテーション作業を行った（Ⅲ章8）。また、同焼土出土の炭化材片の年代測定を行った。測定結果は $6,760 \pm 40$ yB.Pであった（Ⅴ章6）。

床面検出の付属遺構を調査し終えたのは、発掘調査最終日であった。

覆土（・掘上土）：上半の1層は自然堆積の黒色土（Ⅳ層）で、下半の2層はロームを主体とする、非常に締まりの強い土層である。色調はにぶい黄褐色で、比較的均質である。赤褐色の土壌を含むしまりの弱い土壌（2f）が部分的にみられ、被熱したものとみられる。壁寄りの床面付近に堆積する3層は、厚さ5～10cm程度の黒色土主体の土層である。また住居跡周辺に、掘上土とみられる暗褐色～褐色の土壌が広がっていた。幅は2～3m、厚さは5～10cm程度で締まりが弱い。〔図Ⅲ-110〕。

床面・壁：床面はほぼ平坦である。壁側に、幅50cm前後で床面との高低差5～10cmのベンチ状構造がみられるが、北部は段差が不明瞭である。壁との境は比較的明瞭である。

付属遺構：焼土1か所（H-38HF-1）、土坑2基（H-38HP-1・2）、柱穴4基（H-38HP-3～6）を検出した。

〔炉〕H-38HF-1は、住居跡のほぼ中央にある地床炉である。大きさ40×36cmの楕円形で、被熱層はⅥ層、層厚は5cm。わずかに赤みを帯びた黄褐色の被熱層で、細かい炭化物が観察された。

〔土坑〕H-38HP-1はHF-1を包含するもの。H-38HP-2は壁寄りのベンチ上で検出した浅い土坑である。

〔柱穴〕H-38HP-3～6は、支柱穴と考えられる。径は12～20cm、深さは40～65cmで、下端はⅥ層下位の砂層を抜けⅦ層に相当する礫層に達している。

遺物出土状況：覆土2層に多数の遺物が含まれていたが、まとまって出土したものは少ない。床面からは、剥片類が数点出土した。また周辺の掘上土からは、土器・石器等約360点が出土した。

出土遺物の総数は2,172点で、土器等が1,601点・石器等が562点・礫が9点である。土器等はⅠ群b-1類333点・Ⅰ群b-2類1,064点・Ⅰ群b-4類171点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類7点のほか、ミニチュア土器1点が出土している。石器等は彫器3点・削片4点・石鏃5点・石槍1点・石錐2点・スクレイパー16点・両面調整石器3点・石核1点・砥石片16点・すり石1点・台石等1点・剥片類509点が出土している。

掲載遺物：1～3は東釧路Ⅱ式。2は口唇下に、斜方向に縄線が連続する。3は掘上土から出土した。4～18は東釧路Ⅲ式。4・5には組紐圧痕、5～12・14～18には短縄文、6・13には絡条体圧痕がある。7の口縁部、12の胴部にはボタン状の貼付がある。9は口唇下に焼成前の貫通孔がめぐる、数少ないものである。13の大型深鉢は、平縁だが小刻みに波状をなす。口縁部は、絡条体圧痕が3条横走し、その下に交互に斜方向への施文を行っている。17・18の底部はやや張り出す。19～22は中茶路式。19～21は同一個体で、横位平行・波状の細貼付帯が施されている。23はミニチュア土器。「盃形」で、澤氏らの採集遺物〔図Ⅱ-5の上段8〕に類似する。

24は石鏃。25は石槍。かえしが弱い。26はスクレイパー。ヘラ状の形態である。27は彫器。斜方向に彫刀面がみられる。28は彫器削片。29は石錘。30は台石。

重複・時期：H-14・26が自然堆積層を挟んで重複する。また覆土でP-88土坑が検出されており、いずれも当遺構が古い。検出層位や出土遺物から、縄文時代早期後葉の東釧路Ⅱ～Ⅲ式期である。

（阿部）

2. 盛土遺構

M-1 [図III-115~116、図版45・85]

位置：J 21・22・23、K 21・22・23、L 22・23区 平面形：不整楕円形

規模：6.60×6.44/0.20m 長軸方位：N-80° E

確認・調査：表土～Ⅲ層除去後、黒色土中に黄褐色の土壌を検出した。Kライン・21ラインに設定した遺跡全体の土層確認用のトレンチ調査により、黒色土中に黄褐色の土層堆積を確認した。Ⅳ層を掘り下げ、黄褐色土の範囲を検出した。西側は調査区外へ続いている。22ラインにも土層確認用のベルトを残して掘り下げた。

土層：盛土層（M層）は褐色～暗褐色を呈し、Ⅵ層のロームを主体とする。色調は不均質で、しまりがなく土壌がボソボソしている。M層には、焼土や炭化材が含まれている。炭化材はまとまって出土する範囲があるが、いずれも材の形状をとどめていないものが多い。

底面：盛土遺構の基底面はⅣ層黒色土中である。ほぼ平坦であるが、中央東部がやや低く中央西部がやや高い。

付属遺構：黄褐色土壌において検出した焼土3か所（F-5・7・8）とフレイクチップ集中2か所（FC-7・8）が関連する。また盛土遺構縁辺部にある焼土F-6は土坑中にあるが、何らかの関連があると思われる。

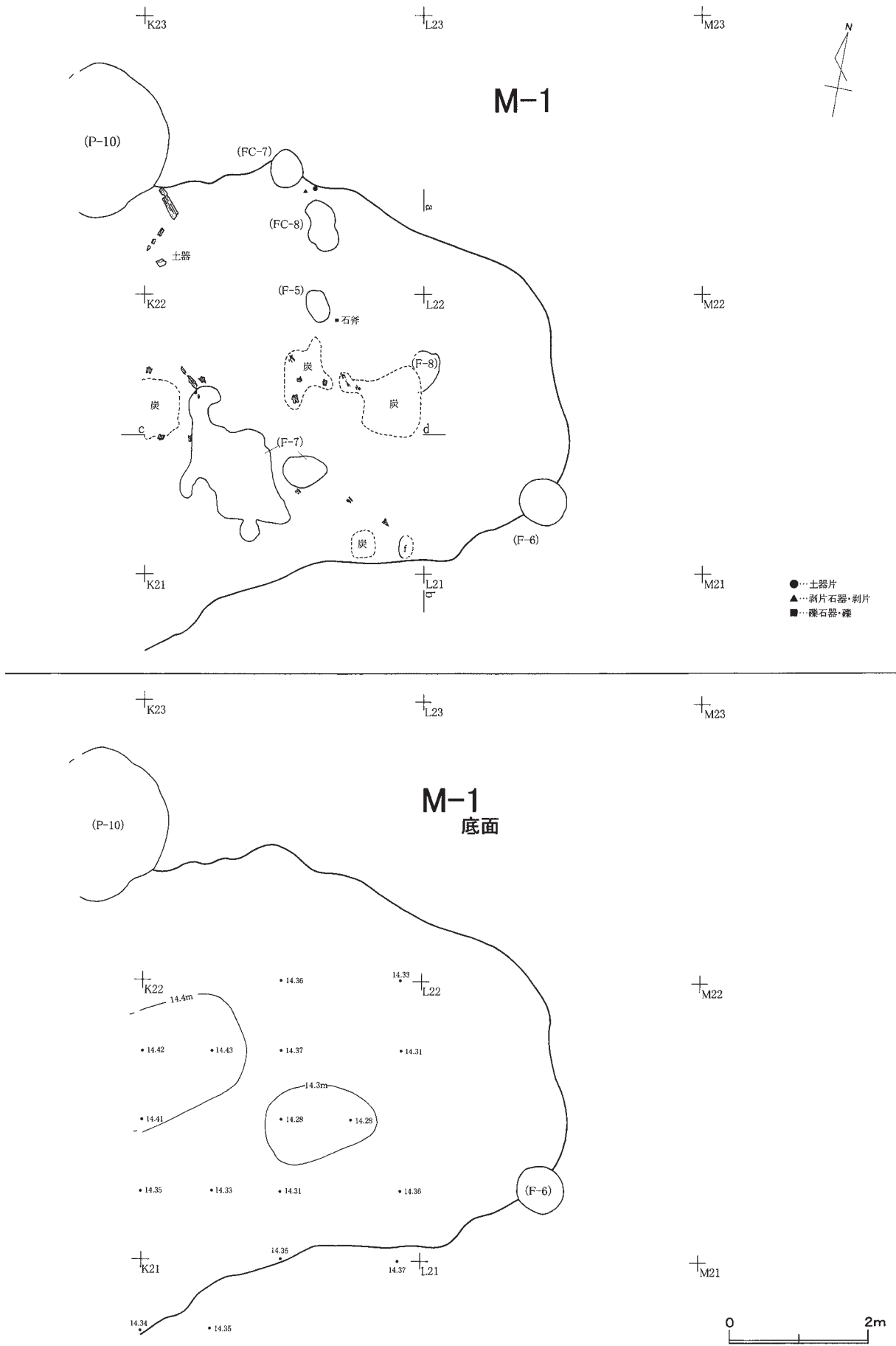
遺物出土状況：M層中から、遺物が比較的散漫に出土している。

出土遺物の総数は414点で、土器が93点・石器等が321点である。土器はⅠ群b-1類8点・Ⅰ群b-4類33点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類37点（うちⅢ群b類5点）・Ⅳ群b類1点などが出土している。石器等は二次加工ある石刃4点・石鏃3点・石槍3点・スクレイパー5点・両面調整石器6点・石斧3点・台石等4点・剥片類293点が出土している。

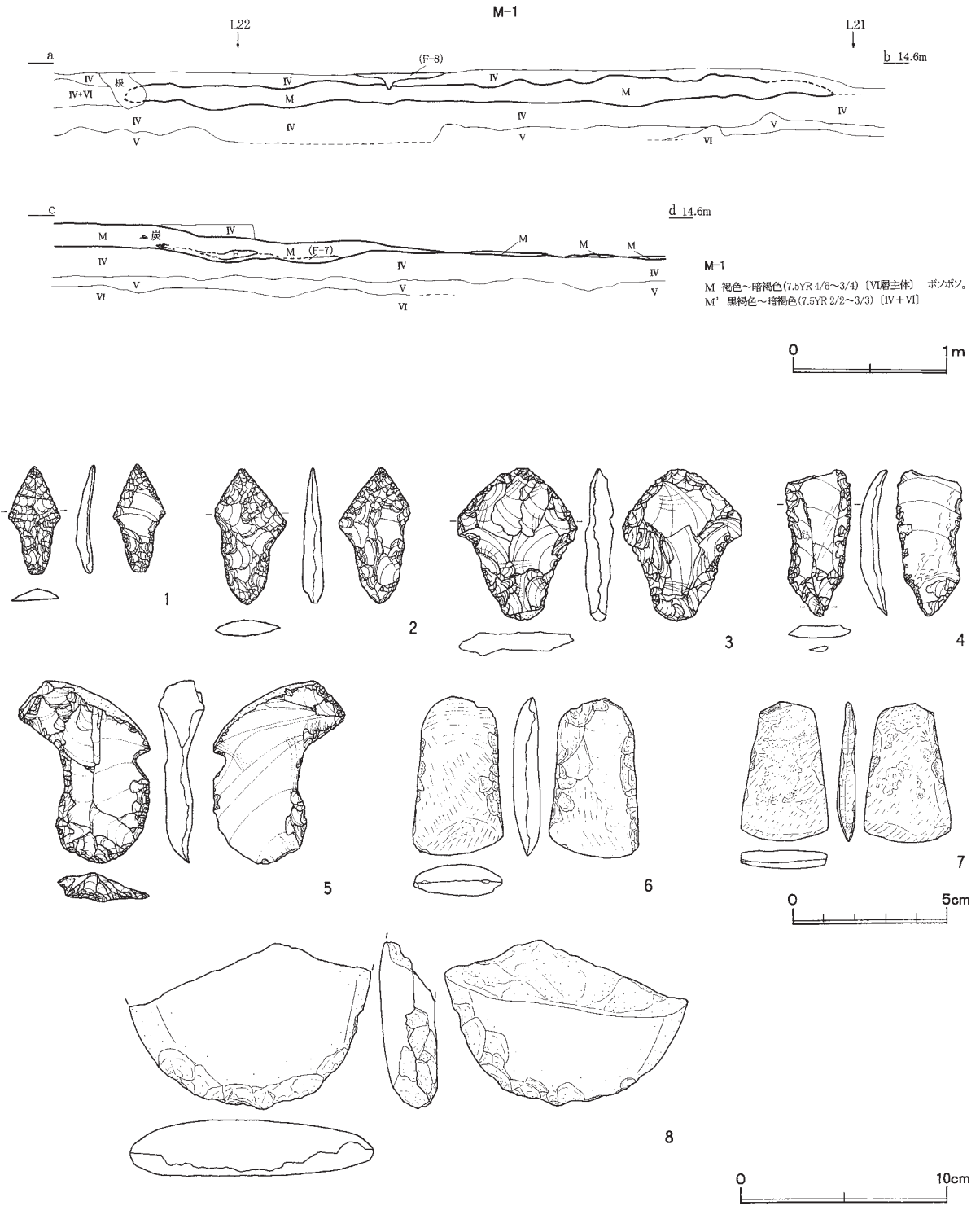
掲載遺物：1・2は石鏃。2は背面左側縁のかえしが欠損し、左右非対称である。3は石槍。かえしが弱く菱形に近い形状で、北筒式期のものとみられる。4は石錐。ナイフ類の未成品または再加工したものと考えられる。5はスクレイパー。6・7は磨製石斧。緑色泥岩製で、全面研磨されている。6は側縁に細かい敲打痕が連続する。8は打製石斧。表面が平滑な砂岩製で、下端部を敲打調整し刃部を作出している。

重複・時期：盛土遺構に伴うもの以外では、P-10が重複する。当遺構の方が新しい。時期は検出層位や類似遺構の例、出土遺物から、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期と考えられる。形状や構造から、平地住居跡の可能性もある。

（阿部）



図Ⅲ-115 M-1(1)



図III-116 M-1(2)・M-1出土の遺物

3. 土坑

P-1 [図Ⅲ-117、図版46]

位置：K27区

平面形：楕円形

規模：(0.48)×0.86／(0.30)×0.41／0.14m

調査・特徴：H-1 調査中、V層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺のIV層の流れ込みと思われる。坑底は皿状で、壁との境は不明瞭である。壁は坑底から緩やかに立ち上がる。遺物は、覆土から二次加工ある剥片が1点出土した。

重複・時期：H-1 と重複しており、当遺構が古い。検出層位や遺構の形状から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-2 [図Ⅲ-117、図版46]

位置：K27区

平面形：楕円形

規模：0.75×(0.27)／0.69×(0.21)／0.14m

調査・特徴：H-1 調査中、V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺のIV～VI層の流れ込みと思われる。坑底は平坦で、壁との境は比較的明瞭である。壁は斜めに立ち上がる。

重複・時期：H-1 と重複し、当遺構が古い。形状などから縄文時代早期後葉と考えられる。

P-3 [図Ⅲ-117、図版46]

位置：K27区

平面形：隅丸三角形

規模：0.66×0.49／0.50×0.33／0.12m

調査・特徴：H-1 調査中、V層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はIV層を主体とした周辺からの流れ込みと思われる。坑底は平坦で、壁との境は比較的明瞭である。壁は斜めに立ち上がる。

時期：形状などから、縄文時代早期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-4 [図Ⅲ-117・140、図版46・86]

位置：O21区

平面形：楕円形

規模：0.80×0.70／0.62×0.53／0.34m

調査・特徴：IV層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は上位(1層)に不均質な褐色土があり、中位～下位(2・4・5・7層)はIV～VI層の混じる流入土、壁際(3・6層)は壁面の崩落土と考えられる。坑底は丸底気味で、壁は急に立ち上がる。袋状土坑と思われる。遺物は、覆土からI群b-4類土器2点・両面調整石器1点・剥片類13点が出土した。

掲載遺物：1は石核。黒曜石の転礫に複数の剥離痕がある。

時期：形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-5 [図Ⅲ-118・140、図版46・86]

位置：L21・22区

平面形：不整楕円形

規模：1.39×0.76／0.96×0.58／0.30m

長軸方向：N-19° W

調査・特徴：土層観察用の21ライントレンチで落ち込みを確認した。周辺を掘り下げ、調査を行った。坑底はやや丸みを帯びており、壁との境はやや不明瞭である。南東側の壁は一部オーバーハングしている。また北部では、壁際に柱穴状小ピットが1基検出された。先端が尖り、覆土はローム主体のしまりの強い土壌である。

遺物は、坑底付近からI群b-4類土器34点・つまみ付きナイフ1点・剥片2点・礫4点が出土した。土器の内1点は、土坑中央南寄りの位置から出土した中茶路式の底部である。礫のうち1点は流紋岩、他は安山岩である。

掲載遺物：2・3は中茶路式。3は前述の底部。外面は極めて細い細貼付帯が横位平行・斜行・波状に設けられ、それに沿って絡条体圧痕がみられる。底面の内面側は撚糸が全面に施文され、壁の立ち上がり部に沿って連続指頭押捺が円環する。4はつまみ付きナイフ。ていねいに撥状に調整されている。腹面は、下端刃部付近からやや幅広く調整が行われている。

性格・時期：土坑の規模・形状や遺物出土状況から、土坑墓の可能性はある。時期は、出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。(阿部)

P-6 [図Ⅲ-118・140、図版46・86]

位置：P22・23区

平面形：円形

規模：0.70×0.64/0.62×0.55/0.34m

長軸方向：N-5°W

調査・特徴：V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。輪郭は不整形で、直径2mほどの広がりであったが、そのうち中央北側の黒みの強い部分を半截し、調査を行った。覆土は下部に黒褐色土が、不均質な褐色土を挟んで上部に白色岩片を多く含む黒褐色土が堆積していた。坑底はほぼ平坦で、礫と中茶路式土器が出土した。壁との境は明瞭で、壁はオーバーハングし、フラスコ状である。

遺物は、覆土から土器50点・石器等77点・礫1点が出土した。土器はI群a類4点・I群b-4類38点などのほか、土製円盤が1点である。石器等は石刃鎌1点・二次加工ある石刃2点・石鎌1点・石槍1点・スクレイパー3点・両面調整石器2点・剥片67点である。

掲載遺物：5~7は中茶路式土器。絡条体圧痕がみられる。7は細貼付帯上にも施文が及ぶ。8は土製円盤。中茶路式の土器片を加工している。9は二次加工ある石刃。縁辺が潰れている。10は石刃鎌。折れ面接合し、基部側は欠損している。11は石鎌。五角形に近い形状で、中茶路式土器に伴うと思われる。

重複・時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。(鈴木)

P-7 [図Ⅲ-118、図版46]

位置：N21・22区

平面形：円形

規模：0.87×0.84/0.52×0.48/0.40m

調査・特徴：IV層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は1層がIV層と同様の自然堆積土、2~4・7はIV~VI層が混じる流入土、5・6はロームを主体とする壁面崩落土とみられる。坑底はやや丸みをもち、壁との境は明瞭である。袋状土坑であったと考えられる。遺物は、覆土から削片1点・剥片類11点が出土した。

時期：土坑の形状から、縄文時代早期後葉と考えられる。(阿部)

P-8 [図Ⅲ-119・140、図版47・86]

位置：N・O23区

平面形：楕円形

規模：(2.20)×1.74/(1.94)×1.57/0.38m

長軸方向：N-47° E

調査・特徴：V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。長軸方向で半截し、調査を行った。覆土は白色岩片を含む黒褐色土で、IV・V層の混じったものである。坑底は平坦で、南西にやや傾斜し、南北の壁際に溝状の窪みがある。壁との境は不明瞭で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、覆土から土器11点・石器等221点が出土した。土器はすべてI群b-4類で、石器等は石刃鎌1点・彫器1点・削片1点・石刃1点・石鎌3点・スクレイパー1点・両面調整石器2点、石核1点・剥片210点である。

掲載遺物：12は東釧路Ⅲ式土器。比較的太い原体で羽状縄文を施している。13は石刃。複剥離打面と直角に近い剥離角など石刃鎌石器群の特徴を良く示している。14は彫器。折損後、正面・右側面・裏面で剥離が行われる。15は石核。裏面は横方向の剥離面があり、正面で縦長の剥片が剥離される。16・17は石鎌。17は五角形である。18はスクレイパー。右側縁に加工が見られる。

重複・時期：P-17・18と重複し、本遺構が新しい。出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。
(鈴木)

P-9 [図Ⅲ-119・141、図版46・86]

位置：M21区

平面形：楕円形

規模：0.17×0.14/0.15×0.12/0.28m

調査・特徴：V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。小型の土坑である。坑底はほぼ平坦で、壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土下位からI群b-4類土器がまとまって出土した(総数70点)。

掲載遺物：19は中茶路式の底部。平底で立ち上がりは急である。多段平行する絡条体圧痕の間に、さらに絡条体圧痕で鋸歯文が配置されている。

時期：出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-10 [図Ⅲ-119、図版47]

位置：J・K23区

平面形：おおむね楕円形

規模：2.18×(1.28)/1.26×(0.77)/0.40m

調査・特徴：調査区の壁際でIV層の落ち込みを確認した。上位の大部分に盛土遺構が広がる。覆土は自然堆積のIV層が厚く、下位は周辺土壌の流入土とみられる複数の薄層が堆積する。坑底はほぼ平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。

重複・時期：盛土遺構M-1と重複し、当遺構が古い。掘り込み面の層位・土坑の規模・形状から、盛土遺構とは大きな時期差はないと考えられ、縄文時代中期末の北筒式期と考えられる。
(阿部)

P-11 [図Ⅲ-120、図版47]

位置：O22区

平面形：楕円形

規模：0.62×0.50/0.47×0.49/0.24m

調査・特徴：V層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は白色岩片を含むIV層起源の黒色土が主体である。坑底は皿状で、壁との境は比較的明瞭である。壁は急に立ち上がり、東側を除いて若干オーバーハングしている。遺物は、覆土からI群a類土器3点・I群b-4類土器5点・つまみ付きナイフ1点・剥片11点が出土した。

時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-12 [図Ⅲ-120・141、図版47・86]

位置：N・O21区

平面形：おおむね楕円形

規模：2.60×1.69／-×-／0.14m

長軸方向：N-3°E

調査・特徴：IV層で黒色土の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを残し、トレンチを掘り下げたところ、上下2つの遺構があるものと判断した。上位の遺構を掘り下げ、壁の立ち上がりを確認した。覆土はIV層と同様で自然堆積とみられる。坑底はほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。坑底中央付近に被熱層が明瞭な焼土があり、その規模は62×54cmで厚さ10cmである。遺物は、覆土から石槍・スクレイパー・剥片がそれぞれ1点出土した。

掲載遺物：20は石槍。やや左右不均衡であり、再調整が行われた可能性がある。21はスクレイパーとしたが、幅広の基部の左右側縁に弱いえぐりがみられ、つまみ付きナイフを意図したものかもしれない。背面下部側縁に細かい調整が施されている。

重複・時期：P-13土坑と重複しており、本遺構が新しい。出土した大型剥片石器類の形状などから、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-13 [図Ⅲ-120、図版47]

位置：N・O21区

平面形：長楕円形

規模：3.45×1.95／3.20×1.29／0.27m

長軸方向：N-3°W

調査・特徴：P-12の調査後、さらに掘り下げて床面および壁の立ち上がりを確認した。覆土はロームが少量混じり流入土と考えられる。坑底は中央部がやや低いが、おおむね平坦である。壁はゆるやかに立ち上がる。

重複・時期：P-12土坑と重複しており当遺構が古い、P-12に関連があるものと思われ、北筒式期のものと考えられる。

(阿部)

P-14 [図Ⅲ-121・141、図版47・86]

位置：O23区

平面形：円形

規模：1.63×1.55／1.42×1.40／0.33m

調査・特徴：V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はIV層とVI層が混じったもので、1～3mm程度の岩片を含む。下部（覆土2・3）は不均質で、上部（覆土1）は均質である。坑底は皿状で、壁との境は明瞭である。壁は上部がくびれるフラスコ状である。遺物は、覆土から土器26点・石器等13点・礫2点が出土した。土器はすべてI群b-4類土器で、石器等は削器2点・彫器4点・二次加工ある石刃2点・剥片類5点である。礫のうち1点はメノウの原石である。

掲載遺物：22は中茶路式土器。23～25は石刃鋸石器群。23は彫器。右側縁で末端部からの削片剥離が数回行われ、左側縁にも上部折れ面からの彫刀面打撃痕が残る。24は二次加工ある石刃。3点が折れ面接合している。打面は複剥離打面で、頭部調整も見られる。25は削片(25a)と彫器(25b)が接合したもの。25aは周辺包含層から出土した。石刃末端部折損後、打面調整無しで長軸方向の削片剥離が行われる。

時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-15 [図Ⅲ-121・141、図版48・87]

位置：M22区

平面形：不整楕円形

規模：2.26×1.50/1.73×0.93/0.18m

長軸方向：N-54° W

調査・特徴：H-9の床面で検出した。覆土は黒色土を主体とし、壁際は崩落土とみられるロームが堆積する。全体的に青みがかり、脱色したような色調である。坑底はおおむね平坦であるが、小規模な凹凸がある。壁は南西側がやや急に立ち上がる。遺物は、I群b-4類土器12点・Ⅲ群b類~Ⅳ群a類5点・剥片4点・礫1点出土し、うち坑底からはI群b-4類土器2点、流紋岩の礫1点が出土している。

掲載遺物：26は中茶路式。細貼付帯頂部は、縄文施文により押しつぶされている。

重複・時期：H-9と重複し、当遺構が古い。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-16 [図Ⅲ-121・141、図版48・87、口絵9]

位置：M22区

平面形：不整楕円形

規模：0.43×0.36/0.33×0.28/0.07m

調査・特徴：V層で検出した。坑底はほぼ平坦であり、壁は東側がやや急に立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-4類土器70点・剥片類21点・礫1点が出土した。覆土下位で複数個体の中茶路式土器がまとまって出土した。

掲載遺物：27~29は中茶路式。27は平行する細貼付帯間に、斜行する細貼付帯での方形区画列が連続する。29は底部内面に凹凸が目立つ。細貼付帯の間隔が比較的大きい。

時期：出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

(阿部)

P-17 [図Ⅲ-119、図版47]

位置：N・O23区

平面形：楕円形

規模：0.77×0.58/0.72×0.44/0.46m

調査・特徴：P-8トレンチ調査中、その下位で黄褐色土の落ち込み(P-18)を確認した。P-18の覆土掘り下げの結果、その南東側に浅い落ち込みを確認し、半截し、調査を行った。覆土はⅥ層とⅣ層起源の黒色土が混じったものである。坑底はほぼ平坦で、壁はオーバーハングして立ち上がる。遺物は、覆土から二次加工ある石刃・二次加工ある剥片がそれぞれ1点出土した。

重複・時期：P-8・18と重複し、本遺構が古い。土坑の形態や出土した石器から縄文時代早期中葉~後葉と考えられる。

P-18 [図Ⅲ-119、図版47]

位置：O23区

平面形：楕円形

規模：1.10×1.04/0.67×0.62/0.34m

調査・特徴：P-8トレンチ調査中、その下位で黄褐色土の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを残し、調査を行った。覆土はⅥ層とⅣ層起源の黒色土が混じったものである。坑底は皿状で、壁との境は比較的明瞭である。壁は緩やかに立ち上がる。

重複・時期：P-8・17と重複している。本遺構はP-8より古く、P-17より新しい。これらの関係性から縄文時代早期中葉~後葉と考えられる。

(鈴木)

P-19 [図Ⅲ-123・141、図版87]

位置：K・L24区

平面形：隅丸長方形

規模：(1.10)×1.06／(1.00)×0.81／0.25m

長軸方向：N-19° W

調査・特徴：H-3 調査中、その南東側で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はIV層主体でVI層が混じる。坑底は中央がやや窪み、凹凸がある。壁との境は比較的明瞭で、壁は斜めに立ち上がる。遺物は、覆土からⅢ群b類～IV群a類土器40点（うちIV群a類5点）・剥片1点が出土した。

携帯遺物：30・31は北筒Ⅱ式。RL縄文のみがみられる。

重複・時期：H-3と重複し、本遺構が古い。出土した土器から縄文時代中期末と考えられる。

(鈴木)

P-20 [図Ⅲ-122・142、図版48・87]

位置：N・O22区

平面形：おおむね円形

規模：0.94×0.82／0.67×0.52／0.23m

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は上層が黒色土主体、下層がローム主体で、流入土および崩落土とみられる。坑底はやや丸みを帯び、北西側の壁は急に立ち上がりオーバーハングしている。袋状土坑である。遺物は、覆土からI群b-4類土器17点・石鏃1点・スクレイパー1点・剥片14点が出土した。

掲載遺物：32は中茶路式。細貼付帯が極めて細くなっている。

時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-21 [図Ⅲ-122・142、図版48・87]

位置：O22区

平面形：不整楕円形

規模：0.86×0.73／0.63×0.72／0.47m

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は段をなし北西側へ傾いている。北西側の壁は急に立ち上がり、オーバーハングしている。遺物は、覆土から土器43点・石器等15点が出土した。土器はI群a類1点・I群b-4類42点で、石器等は石鏃1点・両面調整石器2点・剥片類12点である。

掲載遺物：33・34は中茶路式。34は覆土からややまとまって出土したもの。平行する細貼付帯上を含め、撚糸文が密に施されている。

時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-22 [図Ⅲ-122、図版48]

位置：P21区

平面形：楕円形（推定）

規模：-×-／1.65×0.99／(0.10)m

調査・特徴：H-6・7の調査中、両遺構をまたぐトレンチを設定し掘り下げたところ、両遺構間で流入土とみられる土層堆積を確認した。周辺を掘り下げ、壁の立ち上がりを検出し、土坑とした。坑底はおおむね平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-4類土器46点・剥片49点が出土した。

重複・時期：H-6・7と重複しており、いずれも当遺構の方が古い。出土した土器から縄文時代早

期後葉と考えられる。

P-23〔図Ⅲ-122、図版48〕

位置：P21区

平面形：おおむね円形

規模：1.06×1.00／0.54×0.52／0.16m

調査・特徴：H-6・7の調査中、両遺構をまたぐトレンチを設定し掘り下げたところ、H-6で黒褐色の落ち込みを検出した。坑底はやや丸みをもち、壁の立ち上がりは不明瞭である。

重複・時期：H-6と重複しており、当遺構が古い。時期の特定は困難であるが、周辺の土坑の調査例から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-24〔図Ⅲ-122、図版48〕

位置：Q21区

平面形：円形（推定）

規模：(0.84)×-/-×-/-m

調査・特徴：H-6の調査中に検出した。坑底は丸みを帯びており、壁はゆるやかに立ち上がる。

重複・時期：H-6と重複しており、当遺構が古い。時期の特定は困難であるが、周辺の土坑の調査例から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-25〔図Ⅲ-122・142、図版87〕

位置：O21区

平面形：ほぼ円形

規模：0.78×0.70／0.44×0.44／0.33m

調査・特徴：H-7の調査中に検出した。坑底は丸底で、壁は急に立ち上がる。袋状土坑と思われる。遺物は、坑底からI群b類土器が1点出土した。

掲載遺物：35は中茶路式。非常に細かい撚糸文が施文されている。

重複・時期：H-7と重複しており、当遺構が古い。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。
(阿部)

P-26〔図Ⅲ-123・142、図版87〕

位置：P23区

平面形：楕円形

規模：(0.35)×0.46／(0.30)×0.35／0.37m

調査・特徴：H-8のa-bトレンチ調査中、壁に黒褐色土の落ち込みを確認した。南側はトレンチにより掘削していたため残存する北側の調査を行った。覆土はIV～VI層が混じる不均質な層である。坑底は西側に傾斜しており、壁との境は比較的明瞭である。壁は西側がオーバーハングし、東側は斜めに立ち上がる。形状は全体的に不整形である。遺物は、覆土からI群b-2類土器1点・I群b-4類土器3点・石鏃1点・両面調整石器1点・剥片90点が出土した。

掲載遺物：36は石鏃。小型の剥片素材で周縁部のみ加工が施される。

時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

(鈴木)

P-28 [図Ⅲ-123、図版49]

位置：M17区

平面形：不整形

規模：0.92×0.87／0.74×0.77／0.41m

調査・特徴：IV層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の盛土の流れ込みである。坑底は東側に傾斜しており、壁との境は明瞭である。ほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-2類土器3点・I群b-4類土器49点・剥片1点が出土した。

重複・時期：P-85土坑と重複している。本遺構が古い。出土したI群b-4類土器からみて縄文時代早期後葉と考えられる。
(佐藤)

P-29 [図Ⅲ-124、図版49]

位置：M20・21区

平面形：おおむね楕円形

規模：0.90×(0.64)／0.61×(0.46)／0.19m

調査・特徴：VI層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の流入土と考えられる。坑底はほぼ平坦であるが、若干の凹凸がある。壁は急に立ち上がり、東側はオーバーハングする。袋状土坑である。遺物は、覆土から剥片3点が出土した。

重複・時期：P-30土坑と重複している。当遺構が古いが、一連の土坑の可能性ある。土坑の形状や切り合いから、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-30 [図Ⅲ-124・142、図版49・87]

位置：M20区

平面形：楕円形

規模：(0.64)×0.63／0.62×0.51／0.24m

調査・特徴：VI層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の流入土と考えられる。坑底はやや丸底気味で、壁は急に立ち上がりオーバーハングしている。袋状土坑である。遺物は、坑底から中茶路式の小型深鉢土器がつぶれた状態で出土した。覆土からはI群b-4類土器11点・剥片2点が出土した。

掲載遺物：37は中茶路式の小型深鉢。上面観は楕円形である。平底で急に立ち上がる。横位平行の細貼付帯の間に波状の貼付帯が巡る。

重複・時期：P-29土坑と重複している。当遺構が新しいが、一連の土坑の可能性ある。出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-31 [図Ⅲ-124・142、図版49・87]

位置：M20区

平面形：おおむね円形

規模：0.75×0.81／0.73×0.64／0.34m

調査・特徴：V層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の流入土と考えられる。坑底は中央部がやや窪む。壁は急に立ち上がり、一部オーバーハングしている。袋状土坑である。遺物は、覆土からI群b-4類土器6点・石鏃6点・剥片類92点・礫2点が出土した。礫のうち1点は砂岩である。

掲載遺物：38は中茶路式。39～41は石鏃。すべて小型の柳葉形で、中茶路式土器に伴う。

時期：形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-32 [図Ⅲ-124、図版49]

位置：M19・20区

平面形：おおむね円形

規模：1.45×1.29/0.58×0.60/0.69m

調査・特徴：V層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は上位（1層）黒色が自然堆積、中位（3層）が流入土、下位（5～7層）は流入土もしくは埋め戻し土と推測され、壁際の4・6層は崩落土と考えられる。坑底はおおむね平坦で、壁との境は明瞭である。壁は急に立ち上がり、断面形はすり鉢状である。遺物は、覆土からスクレイパー1点が出土した。

時期：規模・形状から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-33 [図Ⅲ-124、図版49、口絵9]

位置：M19区

平面形：楕円形

規模：1.34×0.96/1.25×0.83/0.09m

長軸方向：N-21° E

調査・特徴：V層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は黒色土を主体とし、炭化材が多数出土した。土坑南部からは径3～5cm、長さ20～50cmの棒状・板状の材が出土した中央部～北部にかけては細かい材が多い。坑底は平坦で、壁はやや急に立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-1類土器2点・剥片2点が出土した。

時期：土坑の規模・形状や分析等から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-34 [図Ⅲ-124・142、図版49・87]

位置：M18・19区

平面形：おおむね楕円形

規模：1.81×1.11/1.64×0.93/0.23m

長軸方向：N-13° W

調査・特徴：V層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は1・2層が黒色土を主体とし、炭化材が多数出土した。径3～5cm、長さ20～30cmの棒状の材が多い。下層の3層はロームを主体とする。坑底は北側が一段低くなっている。壁はやや急に立ち上がる。

遺物は、覆土からI群b-1類土器5点、つまみ付きナイフ・スクレイパー・両面調整石器・石斧片（泥岩製）がそれぞれ1点、剥片19点が出土した。覆土から出土した炭化材の樹種同定結果は、コナラ属であった（VI章3）。

掲載遺物：42はつまみ付きナイフとした。背面に原石面が残る。つまみ部は幅広で、素材の形状をいかしている。

時期：土坑の規模・形状等から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-35 [図Ⅲ-126・142、図版50・88]

位置：L18・19、M18・19区

平面形：長楕円形

規模：(6.36)×1.50/(6.24)×1.46/0.30m

長軸方向：N-25° W

調査・特徴：M18区のV層で黒色土の落ち込みを確認した。さらに隣接する発掘区に続くようであり、まずはトレンチを設定し坑底・壁を確認した。その後範囲を広げて掘り下げた結果、細長い舌状の浅い土坑であることがわかった。覆土は上～中位が黒色土主体、下位が褐色土主体で、北西側から南東側へ傾斜して堆積している。坑底は平坦で北側から南側に傾斜しており、土坑の幅も北から南へ向かって広がる。東壁付近には、窪みが4か所検出され、壁がオーバーハングしている。一方西側は、土坑の輪郭に併行して外側に柱穴状小ピットが7基検出された（SP-3～9）。

遺物は、覆土から土器40点・石器等62点・やや大型の礫9点が出土した。土器はI群b-1類3点・I群b-2類1点・I群b-4類35点などがあり、石器等は石鏃2点・剥片類60点である。礫のうち2点は珪岩である。

掲載遺物：43は東釧路Ⅱ式。44は中茶路式。横位平行・波状の細貼付帯上にも細かい燃糸文がみられる。

重複・時期：P-36・37・85土坑と重複している。個々の遺構の新旧ではいずれも当遺構の方が古い。一連の遺構の可能性はある。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-36〔図Ⅲ-126・142、図版50・88〕

位置：M17・18区

平面形：おおむね楕円形

規模：1.85×1.04／1.55×0.75／0.72m

調査・特徴：IV層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は断面観察で5層に分けられ、黒色土と褐色土の互層になっている。特に最下層はしまりの弱い褐色土が堆積し、埋め戻し土と考えられる。坑底は南側から階段状になっており、北側は低く丸底である。北側の壁はオーバーハングしている。土坑北部の坑底付近で遺物がまとまって出土しており、内容はI群b-2類1点・I群b-4類55点、安山岩の大型礫2点である。覆土からはI群b-4類3点・剥片類4点が出土した。

掲載遺物：45は東釧路Ⅲ式。46・47は中茶路式。46は2本一組の波状の細貼付帯が横位に施されている。47は平底で急に立ち上がる。横位平行の細貼付帯頂部はつぶれている。

重複・時期：P-35・37・85土坑と重複している。個々の遺構の新旧では、当遺構の方がP-85より古くP-35・37より新しい。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-37〔図Ⅲ-126・143、図版50・88〕

位置：M17区

平面形：おおむね楕円形

規模：2.58×(1.60)／2.20×(1.34)／0.44m

調査・特徴：V層でやや広域の黒褐色土の落ち込みを確認した。土層観察用のベルトを残して掘り下げた。覆土はIV～VI層が混じる流入土とみられる土壌で、下位はロームが多く含まれる。坑底は南側が高く、北側は一段下がり、東側はさらに深くなっている。壁はやや急に立ち上がり、北東側はオーバーハング気味になっている。

遺物は、覆土の上位から底部を含む中茶路式土器片がまとまって出土した〔図Ⅲ-143の52〕。また坑底から、中茶路式の大型土器片が砂岩の礫とともに出土した〔図Ⅲ-143の51〕。遺物の総数は、土器393点・剥片9点・礫2点である。土器はI群b-2類4点・I群b-4類386点などである。

掲載遺物：48は東釧路Ⅲ式。短縄文の施文帯間に絡条体圧痕がみられる。49～52は中茶路式。49・50の細貼付帯はきわめて細い。51は坑底からまとまって出土したもの。結束羽状縄文を地文とし、横位平行の細貼付帯がやや間隔を違えて巡らせており、胴下半部にはさらに大波状の貼付帯が平行する細貼付帯をまたいでいる。52は底部付近まで細貼付帯が施されている。

重複・時期：P-35・36・85土坑と重複している。個々の遺構の新旧では、当遺構の方がP-36・85より古くP-35より新しいが、一連の遺構の可能性はある。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-38 [図Ⅲ-127、図版51]

位置：N19区

平面形：円形

規模：0.41×0.36／0.29×0.28／0.20m

調査・特徴：VI層で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。小型で浅い土坑である。坑底は平坦で、壁との境は明瞭である。小型で浅い土坑であり、縄文時代後期の竪穴住居跡H-12に関する柱穴の可能性もある。

時期：不明である。

P-39 [図Ⅲ-127・143、図版89]

位置：P19区

平面形：楕円形

規模：0.80×0.66／0.65×0.52／0.36m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は6層に分けられ、IV～VI層の土壌が混じる流入土である。壁際の4層は、オーバーハングした壁面の崩落土とみられる。坑底はやや丸底ぎみである。袋状土坑である。遺物は、覆土からI群b-4類土器2点・剥片類14点が出土した。

掲載遺物：53は中茶路式。内面にスス状の炭化物が厚く付着している。

時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-40 [図Ⅲ-127、図版51]

位置：P19・20区

平面形：おおむね楕円形

規模：(0.56)×0.63／(0.49)×0.47／0.12m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は検出面からは浅く、ほぼ平坦である。遺物は、覆土からI群b-4類土器1点・Ⅲ群b類～IV群a類土器1点・剥片2点が出土した。

時期：周辺出土遺物から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-41 [図Ⅲ-127・143、図版51・89]

位置：P20区

平面形：隅丸長方形

規模：1.14×0.80／1.12×0.82／0.42m

長軸方向：N-51° W

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は4層に分けられ、中位の2層はロームが多く含まれている。すべて流入土・自然堆積層とみられ、埋め戻した状況は確認できない。坑底は平坦で、壁は大部分がオーバーハングしている。遺物は、覆土からI群b-4類土器5点・石鏃1点・剥片類40点が出土した。

掲載遺物：54は中茶路式。横位平行・波状の細貼付帯が施されている。

時期：出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-42 [図Ⅲ-127・143、図版51・89]

位置：O20区

平面形：楕円形

規模：0.64×0.54／0.60×0.49／0.31m

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺土壌の流入

土とみられる。現生の根による攪乱部分が多い。坑底はおおむね平坦だが西側に下っている。西側の壁はオーバーハングしている。袋状土坑である。遺物は、覆土から石鏃1点・剥片1点が出土した。

掲載遺物：55は小型柳葉形の石鏃。

時期：検出層位や土坑の形状から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-43 [図Ⅲ-128・143、図版51・89]

位置：○20区

平面形：楕円形

規模：1.34×1.04/1.11×(0.73)/0.34m

調査・特徴：V層上面を精査し、H-22とともに検出した。検出面ではH-22側が褐色土、当遺構側が黒褐色土の土壌で境界が確認できた。土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げた。覆土は5層に分けられ、下位の5層はロームが流入したものと見られる。坑底は、全体的には丸底であるが、部分的に凹凸がある。壁との境は不明瞭で、壁はゆるやかに立ち上がる。西側はH-22と切り合い、当遺構の坑底面の方が高い。

遺物は、覆土からⅢ群b類～Ⅳ群a類土器4点（うちⅣ群a類2点）・スクレイパー2点・剥片4点が出土した。

掲載遺物：56はスクレイパー。上部に原石面が残る。主に背面右側縁に細かい調整が行われている。

重複・時期：H-22およびP-44と重複している。切り合いから、いずれも当遺構が新しい。出土土器から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-44 [図Ⅲ-128・143、図版51・89]

位置：N20・21区

平面形：おおむね楕円形

規模：2.42×2.28/1.50×1.62/0.42m

調査・特徴：V層上面を精査し、H-22とともに検出した。検出面ではH-22側が暗褐色土、当遺構側が黒色土の土壌で境界が確認できた。土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げた。中央部には電柱設置に関する攪乱部分があり、土層観察に若干の困難があった。覆土は5層に分けられ、下位の3層はロームが流入したものと見られる。坑底は、全体的に凹凸が目立つ。壁との境は不明瞭で、壁はゆるやかに立ち上がる。南側はH-22と切り合い、当遺構の方が浅い。南東側の坑底付近で焼土F-17を検出した。

遺物は、覆土から土器87点・石器等37点・礫60点が出土した。土器はⅠ群b-1類67点・Ⅰ群b-4類土器7点・Ⅲ群b類～Ⅳ群a類13点で、石器等は石槍1点・つまみ付きナイフ1点・両面調整石器1点・剥片等34点である。

掲載遺物：57は北筒Ⅱ式とみられる。器壁が厚い。58は大型の石槍。下半部を欠損する。両面とも調整剥離がていねいである。59はつまみ付きナイフとした。つまみ部は幅広で挟りが弱い。

重複・時期：H-22およびP-43と重複している。切り合いから、当遺構の方がP-43より古くH-22より新しい。遺構の切り合いや出土した土器から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-45 [図Ⅲ-128・144、図版51・89]

位置：M・N20区

平面形：不整楕円形

規模：2.57×2.50/2.23×2.23/0.30m

調査・特徴：V層上面を精査し、H-22とともに検出した。検出面ではH-22側が暗褐色土、当遺構側が黒色土の土壌で境界が確認できた。土層観察用のベルトを十字に残して掘り下げた。覆土は3層に分けられ、中位の2層はロームが流入したものと見られる。坑底は、全体的には平坦であるが、部分的に凹凸がある。壁との境は不明瞭で、壁はゆるやかに立ち上がる。東側はH-22と切り合うが、床面の高低差がほとんどない。

遺物は、覆土から土器73点・石器等25点・礫3点が出土した。土器はI群b類1点・I群b-4類土器8点・Ⅲ群b類～IV群a類64点（うちIV群a類16点）で、石器等は両面調整石器1点・二次加工ある剥片1点・剥片22点・たたき石1点である。

掲載遺物：60は北筒Ⅱ式の新しい段階とみられる。内面にスス状の炭化物が付着している。61はたたき石。石材は赤色のチャートで、長軸端部に敲打痕が明瞭に残る。

重複・時期：H-22と重複している。当遺構が新しい。遺構の切り合いや出土した土器から、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式期と考えられる。

P-46〔図Ⅲ-129・144、図版52・89、口絵9〕

位置：M21区

平面形：ほぼ円形

規模：0.48×0.46／0.64×0.42／0.26m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺土壌の流入土とみられる。平面形は円形であるが、坑底は楕円形でやや椀状である。壁は長軸両端がオーバーハングして立ち上がる。袋状土坑である。

遺物は、I群b-4類土器11点・つまみ付きナイフ1点・スクレイパー2点・剥片50点が出土した。そのうち坑底付近からはI群b-4類土器・剥片が1点ずつ出土したほか、ベンガラが混じる赤褐色の土壌を検出した。

掲載遺物：62は中茶路式。横位平行の細貼付帯に加え、波状やクランク状の細貼付帯が付されている。63は片岩製のつまみ付きナイフ。腹面右側からの打撃で得られた小型の剥片が素材で、背面周縁に細かい調整が施されている。つまみ部は明瞭に作出されている。

時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-47〔図Ⅲ-129・144、図版52・89〕

位置：P19区

平面形：楕円形

規模：0.69×(0.54)／0.68×(0.54)／0.36m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の盛土の流れ込みである。坑底は東側に傾斜しており、壁との境は明瞭である。ほぼ平坦である。壁はオーバーハングして立ち上がる。袋状土坑である。

遺物は、覆土からI群b-4類土器が13点、削器・石槍・つまみ付きナイフがそれぞれ1点、剥片23点・砥石片10点・礫1点が出土した。

掲載遺物：64・65は中茶路式。65は横位平行・波状および縦位の細貼付帯で構成されるが、その間は無文部が目立つ。64・65とも細貼付帯上にまで絡条体圧痕がみられる。66はつまみ付きナイフ。半截し、つまみ部が残る。

時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-48 [図III-129、図版52]

位置：P19・20区

平面形：おおむね円形

規模：0.65×0.62/0.54×0.40/0.14m

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺土壌の流入土とみられる。坑底は東側に傾斜しており、壁との境は明瞭である。ほぼ平坦である。壁は急に立ち上がる。

時期：周辺出土の土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-49 [図III-129、図版52]

位置：P20区

平面形：楕円形

規模：1.05×(0.60)/0.78×0.42/0.08m

調査・特徴：VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺土壌の流入土とみられる。坑底はほぼ平坦である。東側は凹凸が激しく、根穴と考えられる。壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-4類土器2点・石核1点・剥片17点が出土した。

時期：出土土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

(阿部)

P-50 [図III-129、図版52]

位置：K・L10区

平面形：不整楕円形

規模：1.37×0.95/1.28×0.91/0.44m

長軸方向：N-58° W

調査・特徴：H-29の底面で検出した。坑底は北側がやや浅く南側が深くなっている。遺物は坑底面から礫が2点出土した。覆土は黒色土で、坑底付近では炭化物を含んでいる。

時期：検出した状況等から判断すると縄文時代早期と考えられる。

(笠原)

P-51 [図III-130、図版52]

位置：N・O-12区

平面形：不整楕円形

規模：(1.02)×1.04/(0.94)×0.94/0.24m

調査・特徴：H-18住居跡の調査中に黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は平坦で、東側に傾斜している。壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土からⅢ群b類~Ⅳ群a類の土器片2点が出土したのみである。

重複・時期：H-18と重複している。本遺構が新しい。時期・性格は不明である。

(佐藤)

P-52 [図III-130、図版52]

位置：L5・6区

平面形：楕円形

規模：2.24×1.72/1.45×0.94/0.64m

長軸方向：N-9° E

特徴：I層を除去した後に、Ta-c火山灰の堆積を確認した。南北方向に土層観察用ベルトを設定し掘り下げを行った。坑底面はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土はIV層の黒色土が主体で、これにV層やVI層が混じる。しまりは弱く、人為的な埋め戻しと考えられる。覆土中や坑底からⅢ群b類~Ⅳ群a類土器が3点出土した。

時期：出土した遺物等から判断すると縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。

(笠原)

P-53 [図Ⅲ-130・144、図版52・89]

位置：M・N-12区

平面形：長楕円形

規模：1.49×(0.66)／0.82×(0.36)／0.83m

長軸方向：N-44° E

調査・特徴：H-19住居跡の調査中に褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底はやや凹凸がある。壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土上位から石斧と礫が並んで出土した。東側の坑底直上から頭部とみられる遺体を確認された。

掲載遺物：67は片岩製の石斧。撥状を呈しているが、基部は厚みがある。磨製石斧製作後、敲打調整を加えて再利用したものと考えられる。

性格・重複・時期：土坑墓である。H-19と重複しており、本遺構が新しい。時期は周辺の遺構・遺物から判断して、縄文時代中期末～後期初頭と考えられる。(佐藤)

P-54 [図Ⅲ-131、図版53]

位置：M7区

平面形：長楕円形

規模：1.48×1.48／1.10×1.13／0.40m

特徴：H-37の壁際に掘り込まれ構築されている。坑底はほぼ平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土はIV層の黒色土が主体でこれにV層やVI層が混じる。出土遺物の総数は10点で、土器が4点、石器等が6点である。内訳はI群b-4土器が3点、Ⅲ群b類～IV群a類土器が1点。石器は石鏃が1点、石核が1点、剥片が3点、片岩製の石斧片が1点である。

時期：検出状況等から判断すると縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。

P-55 [図Ⅲ-131、図版53]

位置：L6区

平面形：長楕円形

規模：1.26×1.04／0.95×0.80／0.52m

特徴：IV層で黒色から暗褐色を呈した円形のプランを検出した。土層観察のために南北方向で半截して掘り下げを行った。覆土はIV層主体で、これにIV層とV層が混じる人為的な埋め戻しと考えられる。坑底はほぼ平坦で壁面はやや急角度で立ち上がる。

時期：検出状況等から判断すると縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。(笠原)

P-56 [図Ⅲ-131・144、図版53・89]

位置：M11区

平面形：円形

規模：0.81×0.64／0.34×0.30／0.55m

調査・特徴：H-19住居跡の調査中に褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は平坦で、中央部が低くなる。東側の壁はH-19構築時に壊されている。遺物は、覆土からI群b-4土器が7点・石鏃1点・スクレイパー2点・二次加工ある剥片1点が出土した。

掲載遺物：68は石鏃。かえしは弱く、左側縁は不明瞭である。69はスクレイパー。大型の剥片が素材で、背面の一部に原石面が残る。周縁に細かい調整が施されている。

重複・時期：H-19と重複している。本遺構が古い。時期は規模・断面形からみて縄文時代早期後葉と考えられる。

P-57 [図Ⅲ-132・144、図版53・89]

位置：N12区

平面形：長円形

規模：(0.67)×0.91/(0.62)×0.60/0.36m

調査・特徴：H-19住居跡・P-53土坑の調査中に黒褐色の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は上位が流れ込みで、下位が埋め戻しである。坑底は凹凸がある。壁はやや緩やかに立ち上がる。H-19住居跡・P-53土坑構築時に壁・床を壊されている。遺物は、覆土からI群b-4類土器の小破片が550点出土した。胎土・色調・文様などほぼすべてが類似し、同一個体もしくはかなり類似する個体の碎片であると思われる。

掲載遺物：70・71は中茶路式。平行・波状の細貼付帯の間に短縄文が充填されている。

重複・時期：H-19住居跡・P-53土坑と重複する。本遺構はこれらの遺構より古い。時期は出土したI群b類土器からみて縄文時代早期後葉と考えられる。(佐藤)

P-58 [図Ⅲ-132、図版53、口絵9]

位置：K13区

平面形：長楕円形

規模：1.20×0.92/1.10×0.76/0.23m

長軸方向：N-22° W

調査・特徴：V層で黒色土が楕円形に堆積する落ち込みを確認した。長軸方向で半截し、約20cm掘り下げたところで底面を検出した。覆土はしまりが弱く、明赤褐色から暗赤褐色を呈している。土層の断面を記録した後、覆土の掘り下げを行っていたところ、坑底付近で黒色土に灰白色の骨片様のものが混じる層を確認した。そのため、墓坑を想定してこの部分を残しながら検出作業を行った。その結果、南側の坑底付近から頭部を検出した。

骨は非常に脆く、頭部の輪郭と上顎骨または下顎骨部分であることは確認できた。体部はわずかにその痕跡が残る程度で、大腿骨または脛骨等と考えられる部分がわずかに白色を呈していた。頭位は南東方向を示し横臥屈葬で埋葬されていたと思われる。その後、遺体層だけを残しながら周囲を精査し、副葬品の検出作業も進めたが、副葬品と思われる遺物は出土していない。

なお、覆土中から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を行った。その結果、3,970±40yrBPとの測定結果を得た(V章-6)。

性格・時期：土坑墓である。検出状況や分析結果等から判断すると、縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。(笠原)

P-59 [図Ⅲ-133・144、図版54・89]

位置：K・L12区

平面形：不整楕円形

規模：1.72×1.20/1.32×0.94/0.36m

調査・特徴：H-16・17周辺の包含層を調査中、IV層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はIV～VI層の混じる土壌である。坑底は不安定で凹凸が多い。壁面との境界がやや不明瞭である。遺物は、覆土から土器4点・石器等7点が出土した。土器はI群b-4類・Ⅲ群b類～IV群a類がそれぞれ2点で、石器等はつまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧片・砥石片がそれぞれ1点、剥片が3点である。

掲載遺物：72はスクレイパー。下端の刃部を欠損する。転礫が素材で、背面に原石面が残る。

重複・時期：H-17と重複しており、当遺構が古い。検出層位や遺構の切り合い、出土した土器から縄文時代中期後半と考えられる。

P-60 [図Ⅲ-133、図版54]

位置：M10区

平面形：不整形円形

規模：(0.70)×0.51／(0.48)×0.44／0.32m

調査・特徴：H-27住居跡の覆土を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は埋め戻しである。坑底は東側に傾斜しており、壁は緩く立ち上がる。東側壁の上部はH-27住居跡の構築時に壊されている。

重複・時期：P-69土坑・H-27住居跡と重複する。P-69土坑より新しく、H-27住居跡より古い。時期は規模・断面形からみて縄文時代早期後葉と考えられる。(佐藤)

P-61 [図Ⅲ-133]

位置：M6区

平面形：長楕円形

規模：(0.74)×－／(0.56)×－／0.53m

特徴：H-23の調査区境界に設定した南北の土層断面で確認した。調査区境界にかかるために、断面観察のみの調査である。H-23の上面を覆う黒色土の下には、橙色の覆土が堆積しており、土坑はこれを掘り込んで構築されている。しまりの弱い覆土で、IV層にV層やVI層が混在する。底面はH-23の床面に達している。

時期：検出状況等から判断すると縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期頃と考えられる。

(笠原)

P-62 [図Ⅲ-133、図版54]

位置：L20区

平面形：おおむね円形

規模：0.82×0.73／0.32×0.32／0.29m

調査・特徴：V層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は周辺の土壌の流れ込みである。坑底は凹凸があり、壁との境は不明瞭である。壁はゆるやかに立ち上がる。

時期：検出層位や周辺出土の遺物から、縄文時代早期後葉と考えられる。(阿部)

P-63 [図Ⅲ-134・144、図版54・89]

位置：N9区

平面形：不整形長円形

規模：1.04×0.78／0.92×0.64／0.52m

調査・特徴：H-27住居跡の覆土を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は埋め戻しである。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土から石鏃が1点出土したのみである。

掲載遺物：73は石鏃。小型柳葉形である。

重複・時期：P-64土坑・H-27住居跡と重複する。P-64土坑より新しく、H-27住居跡より古い。時期は規模・断面形からみて縄文時代早期後葉と考えられる。

P-64 [図Ⅲ-134、図版54]

位置：N9区

平面形：長円形

規模：(1.31)×(0.90)／0.55×0.44／0.50m

調査・特徴：H-27住居跡の覆土を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調

査を行った。覆土は埋め戻しである。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。

重複・時期：P-63土坑・H-27住居跡と重複する。P-69土坑・H-27住居跡より古い。時期は規模・断面形からみて縄文時代早期後半と考えられる。(佐藤)

P-65〔図Ⅲ-134・144、図版54・89〕

位置：L 6・7区

平面形：楕円形

規模：1.34×0.67/1.09×0.44/0.23m

長軸方向：N-11° E

調査・特徴：P-55の周囲を調査中に、灰褐色土が堆積している長楕円形の窪みを検出した。坑底はおおむね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土中からIV群a類土器が1点出土した。

掲載遺物：74は北筒Ⅲ式とみられる小片。内面が剥落している。

重複・時期：P-55を切って構築されていると思われる。検出状況等から判断すると縄文時代中期末から後期前葉の北筒式期と考えられる。(笠原)

P-66〔図Ⅲ-134、図版54、口絵9〕

位置：L・M19区

平面形：ほぼ円形

規模：0.44×0.42/0.42×0.36/0.22m

調査・特徴：包含層調査中、V層で10点ほどの礫を検出した。黒色土の落ち込みとともに、さらに礫が下位に続くことがわかった。半截し、29点の礫群(S-3)が納められた土坑であることを確認した。覆土下位は埋め戻しとみられる黄褐色土が充填されており、S-3の基盤をなしているものと思われる。坑底は椀状で、壁との境はやや不明瞭である。壁は一部オーバーハングしている。袋状土坑である。

時期：土坑の形状から、縄文時代早期後半と考えられる。

P-67〔図Ⅲ-134・145、図版54・89〕

位置：L19・20、M19・20区

平面形：ほぼ円形

規模：0.81×0.74/0.77×0.77/0.28m

調査・特徴：P-66付近のVI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は、上位は黒色土主体、下位はロームが脱色したような土壌が堆積している。坑底は椀状で中央部がくぼむ。坑底と壁の境は明瞭である。壁はオーバーハングして立ち上がる。袋状土坑である。遺物は、覆土からI群b-4類土器10点・土製円盤2点・両面調整石器1点が出土した。

掲載遺物：75・76は中茶路式。横位・縦位に平行・波状の細貼付帯がみられる。77は土製円盤。中茶路式土器片を加工している。中央の穿孔はていねいであるが、周縁加工はやや粗い。

重複・時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉とみられる。(阿部)

P-68〔図Ⅲ-135、図版55〕

位置：L・M6区

平面形：おおむね円形

規模：0.80×(0.43)/0.51×(0.24)/0.33m

調査・特徴：L6区の試掘坑を掘削したところ、東側の壁面とV層の上面で半円形の落ち込みを検出した。攪乱によって約半分が失われている。残存する坑底はやや丸みを呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。

時期：検出状況等から判断すると、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。 (笠原)

P-69 [図Ⅲ-135、図版55]

位置：M10区

平面形：長円形

規模：0.80×0.47/0.56×0.34/0.60m

調査・特徴：P-60土坑の調査中に灰黄褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は上位が流れ込みで、下位が埋め戻しである。坑底は南・西側に傾斜しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。西側壁の上部はP-60土坑の構築時に壊されている。

重複・時期：P-60土坑・H-27住居跡と重複する。本遺構がP-60土坑・H-27住居跡より古い。時期は規模・断面形からみて縄文時代早期後葉と考えられる。

P-70 [図Ⅲ-135、図版55]

位置：M・N8区

平面形：不整長円形

規模：(1.34)×0.97/(1.06)×0.70/0.30m

長軸方向：N-31° W

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は南側に傾斜しており、凹凸がある。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

時期：規模・断面形からみて縄文時代早期後葉と考えられる。

P-71 [図Ⅲ-135、図版55]

位置：N8区

平面形：楕円形

規模：0.76×0.58/0.54×0.42/0.26m

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。断面形が椀状で、坑底と壁の境が不明瞭である。

時期：周辺の遺構・遺物からみて縄文時代中期末～後期前葉と考えられる。

P-72 [図Ⅲ-135、図版55]

位置：N8区

平面形：不整楕円形

規模：(1.10)×0.69/(0.94)×0.54/0.28m

長軸方向：N-67° W

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。

時期：周辺の遺構・遺物からみて縄文時代中期末～後期前葉と考えられる。

P-73 [図Ⅲ-136、図版55]

位置：N7区

平面形：長円形

規模：(1.80)×(1.48)/(1.08)×0.64/0.58m

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。1・2層は自然堆積層で、3・4・5層は埋め戻しである。坑底はやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。

時期：周辺の遺構・遺物から判断して、縄文時代中期末～後期前葉とみられる。 (佐藤)

P-74 [図Ⅲ-136・145、図版55・90]

位置：N18区

平面形：円形

規模：1.32×1.28/1.05×1.04/0.31m

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は自然堆積である。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-1類土器が2点、スクレイパーが1点出土した。

掲載遺物：78は東釧路Ⅱ式。補修孔が穿たれている。79はスクレイパー。背面に原石面が残る。左右側縁に細かい調整が施されている。

重複・時期：P-75土坑と重複している。本遺構が新しい。時期は周辺の遺構・遺物から判断して縄文時代中期末～後期前葉と考えられる。

P-75 [図Ⅲ-136、図版55]

位置：N17区

平面形：不整長円形

規模：1.21×0.72/0.73×0.36/0.28m

調査・特徴：IV層を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は埋め戻しである。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。微細な剥片4点を水洗選別により検出した。

重複・時期：P-74土坑と重複している。本遺構が古い。時期は周辺の遺構・遺物から判断して縄文時代早期後葉の可能性はある。

P-76 [図Ⅲ-136、図版56]

位置：N18区

平面形：不整円形

規模：1.47×(0.72)/1.06×(0.54)/0.32m

調査・特徴：H-12住居跡の覆土を掘り下げている段階で褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は埋め戻しである。坑底は凹凸がある。壁は急に立ち上がる。

重複・時期：H-27住居跡と重複する。本遺構が古い。時期は周辺の遺構・遺物から判断して縄文時代中期末～後期前葉と考えられる。

P-77 [図Ⅲ-137、図版56]

位置：O19区

平面形：不整円形

規模：(0.45)×0.72/(0.34)×0.53/0.18m

調査・特徴：H-12住居跡の覆土を掘り下げている段階で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は自然堆積である。坑底は東側に傾斜しており、壁は急に立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-1類土器が7点出土した。

重複・時期：H-12住居跡と重複する。本遺構が古い。時期は出土したI群b-1類土器から判断して縄文時代早期後葉と考えられる。(佐藤)

P-78 [図Ⅲ-137・145、図版56・90、口絵8]

位置：K17・18区

平面形：おおむね楕円形

規模：2.86×1.93/2.50×1.63/0.56m

長軸方向：N-29° W

調査・特徴：H-13の調査中、壁面に黒色土の範囲を検出した。別の遺構があることを想定し、周辺を掘り下げて輪郭を確認した。土層観察用のベルトを十字に残し、調査を行った。坑底と壁を確認し、大型の土坑であることがわかった。覆土は大きく5層に分けられ、上位～中位（1～3層）は黒色土を主体とし、下位（4～5層）はVI層黄褐色土を主体とする。覆土3層中のやや南寄りの位置で、ベンガラと見られる赤褐色のまとまりを検出した。坑底は南側が一段円形に下がっており、南北それぞれおおむね平坦である。壁との境は明瞭で、南～西側は急に立ち上がる。

遺物は、覆土から土器4点・石器等67点・礫1点が出土した。土器はI群b-4類2点・IV群a類とIV群b類がそれぞれ1点で、石器等は両面調整石器2点・石斧片1点・剥片類64点である。石斧は緑色泥岩製である。

掲載遺物：80は中茶路式。横位平行・波状の細貼付帯の間に縦位の細貼付帯が連続する。81は鯨潤式またはエリモB式。口縁部は浅い沈線で区画された無文帯、胴部は格子目状の浅い沈線が施されている。

重複・時期：H-13と重複し、当遺構が新しいと思われる。土坑の掘り込み面や出土遺物から、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期と考えられる。

P-79〔図Ⅲ-138、図版56〕

位置：O16・17区

平面形：楕円形

規模：1.12×0.88／0.90×0.69／0.22m

調査・特徴：H-34の調査中、床面付近で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。坑底は椀状で中央部が窪んでいる。壁はゆるやかに立ち上がる。

重複・時期：西側の一部がH-34と重複しており、本遺構が古い。検出層位や切り合いから、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-80〔図Ⅲ-138・145、図版56・57・90、口絵9〕

位置：N16区

平面形：おおむね楕円形

規模：(1.97)×(1.10)／-×-／0.26m

長軸方向：N-23° W

調査・特徴：H-34の土層確認中、トレンチにおいて暗褐色土の落ち込みを確認した。掘り下げたところ、多数の礫がまとまって出土し、礫集中S-5とした。S-5の調査後さらに掘り下げ、坑底面を検出した。覆土はH-34の最下層と異なり黒色土を主体とする。坑底はほぼ平坦である。壁は不明瞭である。遺物は、覆土や坑底からI群b-4類土器22点・剥片1点が出土した。

掲載遺物：82・83は中茶路式。82は撚糸文、83は絡条体圧痕が充填されている

重複・時期：P-81・82土坑と重複する。単独で見ると本遺構が古いものの、一連の遺構の可能性がある。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-81〔図Ⅲ-138・145、図版56・57・90、口絵9〕

位置：N16区

平面形：不整楕円形

規模：1.45×(0.82)／1.22×(0.74)／0.34m

調査・特徴：H-34の土層確認中、トレンチにおいて暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は2層に分けられ、それぞれIV～VI層が混じり合う土壌である。坑底は複数の段になっており、南側が浅い。壁との境は明瞭である。壁はH-34の壁に近い方が急に立ち上がる。南側は

オーバーハングしている。西側はP-80の坑底に続く。遺物は、覆土や坑底からI群b-4類土器22点・剥片類16点・礫1点が出土した。

掲載遺物：84・85は中茶路式。84は細貼付帯上にまで絡条体圧痕が充填されている。85は撚りの非常に細かい絡条体圧痕が横走し、撚糸文が充填される区画と無文の区画がある。平底で、立ち上がりが急である。

重複・時期：H-34HP-1と重複している。本遺構が古い。またP-80・82土坑と重複しており、深さが近似するP-82と合わせるとU字状の土坑となる。出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-82〔図Ⅲ-138・145、図版56・57・90、口絵9〕

位置：N16区

平面形：不整形

規模：1.98×1.40/1.94×1.24/0.43m

調査・特徴：H-34の土層確認中、トレンチにおいて暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は4層に分けられ、それぞれIV～VI層が混じり合う土壌である。坑底は複数の楕円形の深い窪みがある。壁との境は明瞭である。壁はH-34の壁に近い方が急に立ち上がる。西側はP-80の坑底に続く。遺物は、覆土からI群b-4類土器10点などが出土した。

掲載遺物：86は中茶路式。横位平行・波状の細貼付帯の間に縦位の細貼付帯が連続する。

重複・時期：P-80・81土坑と重複しており、深さが近似するP-81と合わせるとU字状の土坑となる。出土した土器から縄文時代早期後葉と考えられる。

P-83〔図Ⅲ-138・145、図版90〕

位置：M16・17、N16・17区

平面形：おおむね楕円形

規模：1.56×1.13/1.37×0.94/0.19m

調査・特徴：H-34の床面で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はH-34の最下層の土壌と異なり黒褐色を呈する。坑底はほぼ平坦で、東側にやや傾斜している。壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、I群b-1類土器1点・I群b-4類土器81点・石鏃6点・両面調整石器1点・剥片類2点が出土した。うち坑底からはI群b-4類土器1点が出土している。

掲載遺物：87～89は中茶路式。87・88は細貼付帯が横位平行に等間隔で設けられている。87の口唇直下の貼付帯は比較的太い。89は先端を尖らせた貼瘤を縦列させている、数少ないものである。90は石鏃。小型柳葉形で、基部は平坦である。

重複・時期：H-34と重複し、当遺構が古い。出土土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-84〔図Ⅲ-139、図版57〕

位置：M18区

平面形：ほぼ円形

規模：0.58×0.52/0.46×0.50/0.23m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土はロームを含む周辺の土壌の流入土である。坑底はやや椀状で中央部がくぼみ、壁はオーバーハング気味に立ち上がる。袋状土坑である。遺物は、覆土からI群b-4類土器が10点、石鏃・両面調整石器がそれぞれ1点、剥片類12点が出土した。

時期：土坑の形状や出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-85 [図Ⅲ-126、図版50]

位置：M17区

平面形：不整楕円形

規模：2.00×1.01/1.62×0.54/0.46m

調査・特徴：P-37の調査において、西側がさらに落ち込むことを確認した。半截し、調査を行った。覆土は黒色土が主体である。坑底は中央部付近から南側が窪む。壁は西側が急に立ち上がり、東側はP-37の坑底に続く。遺物は、覆土からI群b-4類土器3点・スクレイパー1点・剥片6点が出土した。

重複・時期：P-36・37土坑と重複しており、深さが近似するP-37と合わせるとU字状の土坑となる。P-35を含め、一連の遺構である可能性がある。出土した土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-86 [図Ⅲ-139、図版57]

位置：O19区

平面形：楕円形

規模：0.47×0.36/0.46×0.38/0.27m

調査・特徴：H-12の壁際付近、VI層で黒褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土の下位はローム粒が流れ込んでいる。西側は根穴と見られる攪乱部分がある。坑底はおおむね平坦で、壁との境は明瞭である。壁は急に立ち上がり、一部オーバーハングする。袋状土坑である。

時期：検出層位や土坑の形状から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-87 [図Ⅲ-139、図版57]

位置：L15区

平面形：不整形

規模：1.64×0.95/1.41×0.75/0.19m

調査・特徴：VI層で暗褐色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。平面形は楕円形を重ねたような形状である。坑底は、断面図を作成した範囲では平坦であるが、全体的にはやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は、覆土からI群b-1類土器3点・I群b-4類土器1点・石錐1点・剥片類4点が出土した。

時期：検出層位や出土土器から、縄文時代早期後葉と考えられる。

P-88 [図Ⅲ-139、図版57]

位置：M16区

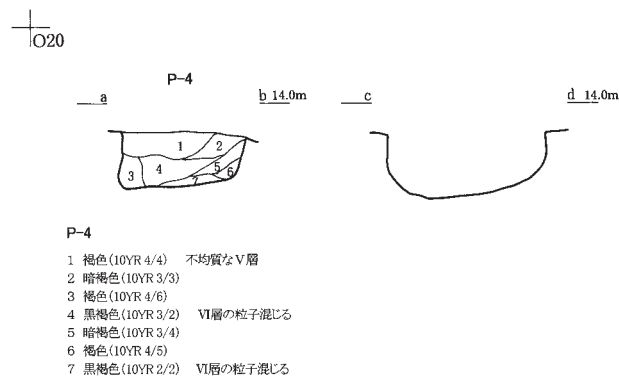
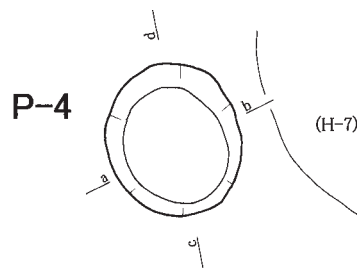
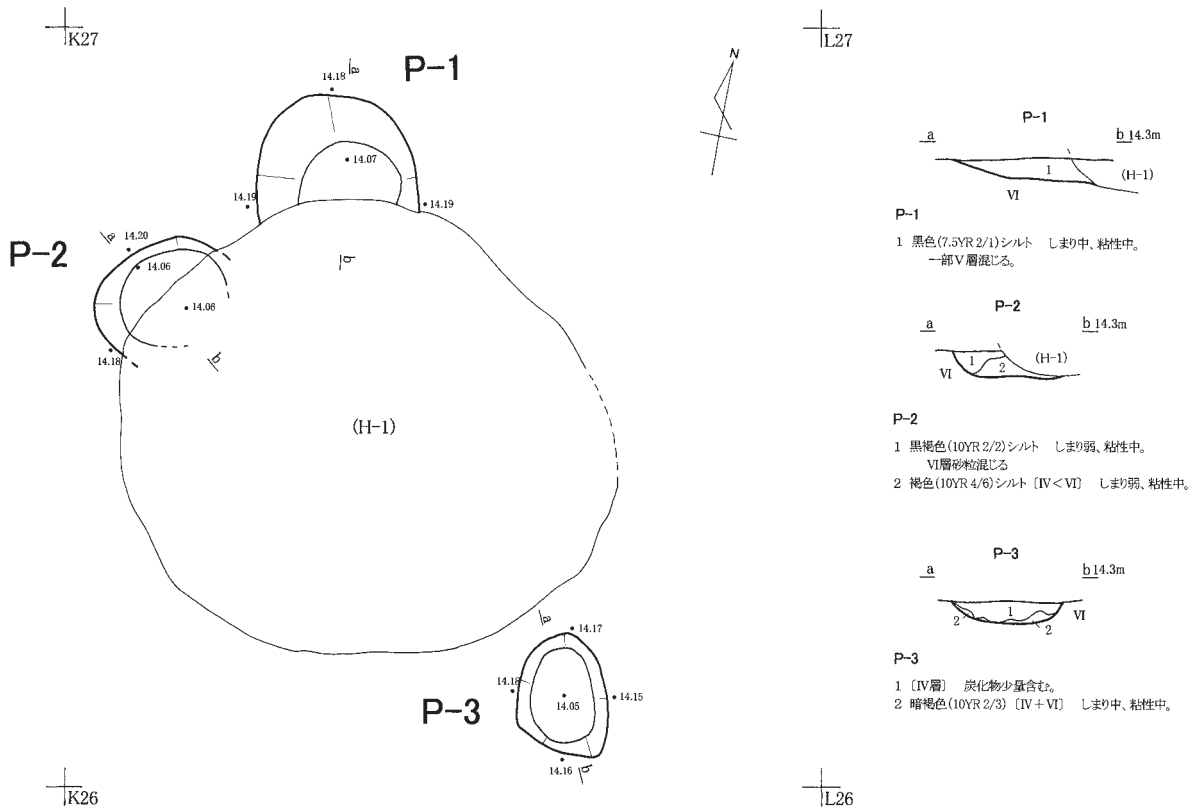
平面形：楕円形

規模：0.59×0.41/0.34×0.22/0.31m

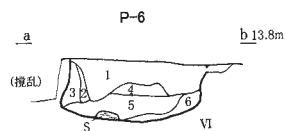
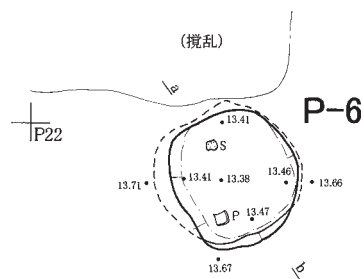
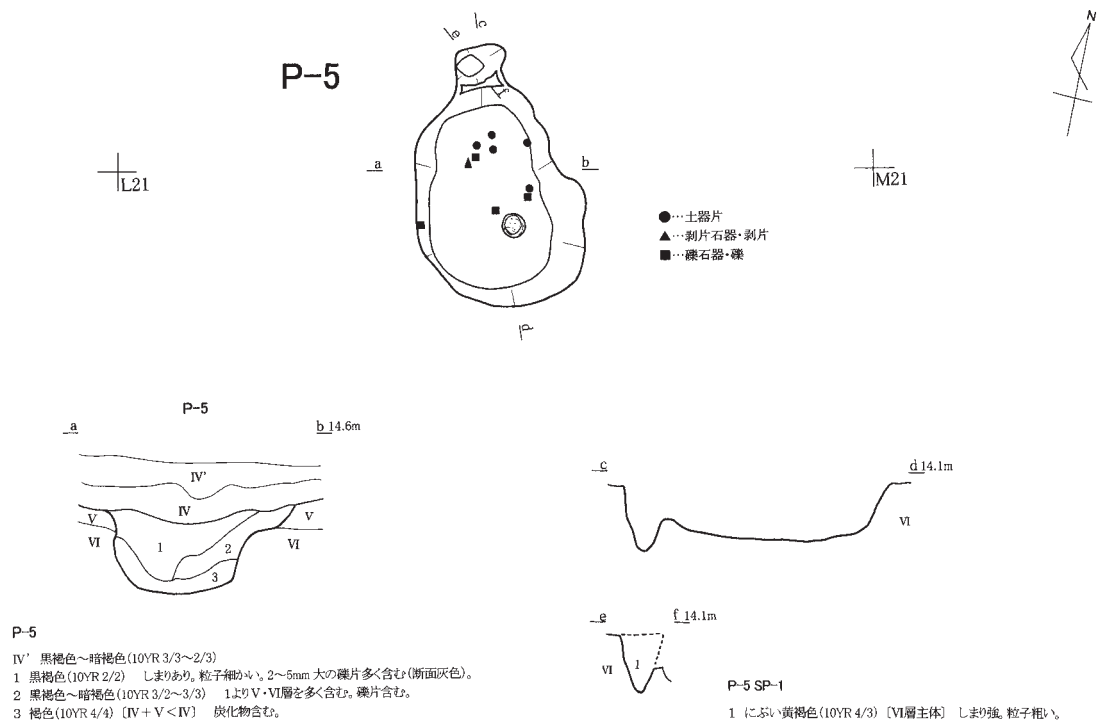
調査・特徴：H-38覆土2層の上面で黒色土の落ち込みを確認した。半截し、調査を行った。覆土は下位がやや乱れた土壌である。坑底は丸みを帯びており、竪穴住居跡の床面付近に達している。壁は、竪穴住居跡の壁面に近い方が急に立ち上がり、住居内側はゆるやかに傾斜している。遺物は、覆土からI群b類土器が1点出土した。

重複・時期：H-38と重複しており、本遺構が新しい。検出層位から、縄文時代早期後葉である。

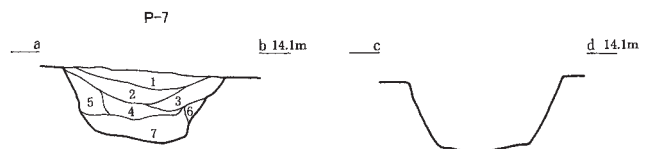
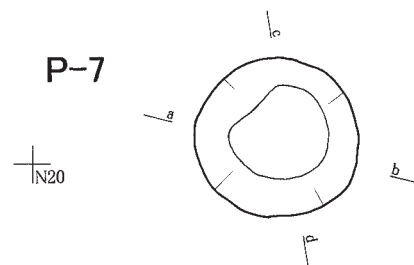
(阿部)



図III-117 土坑(1)P-1~4



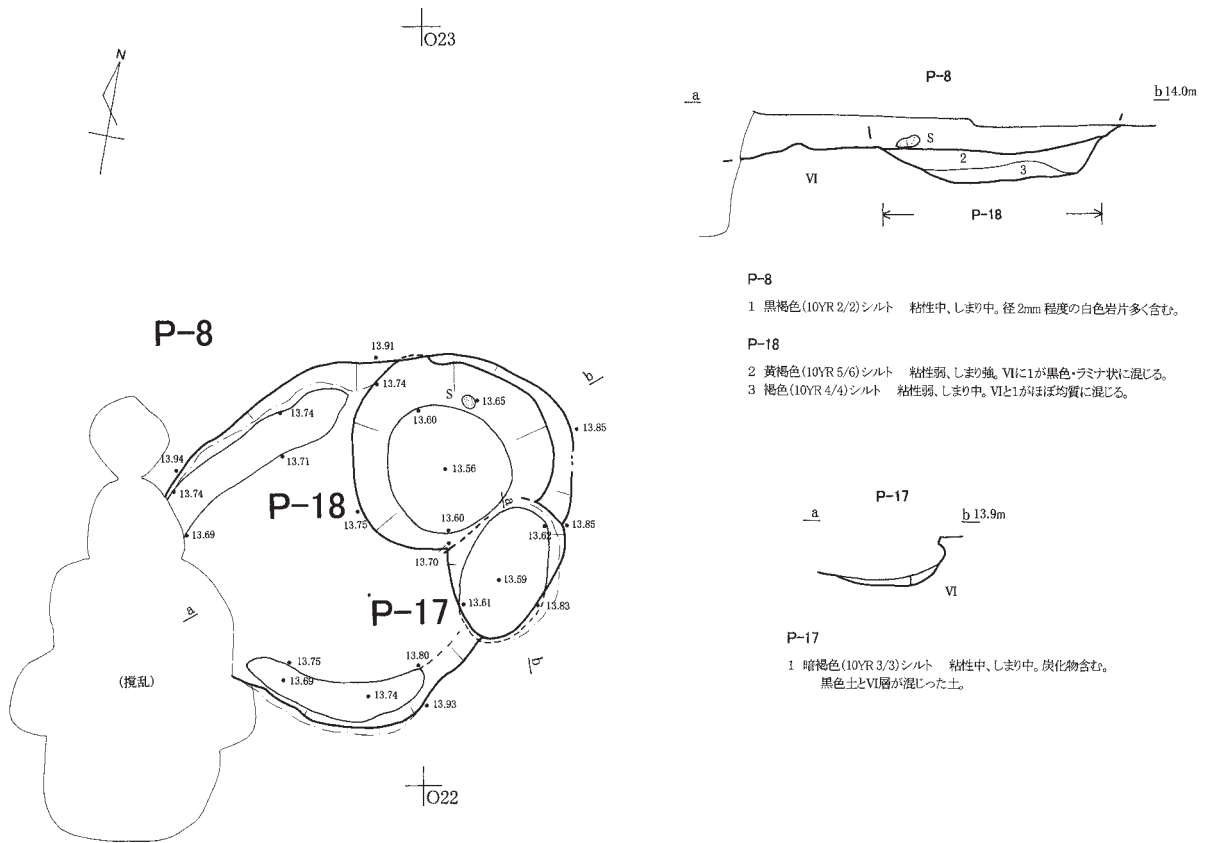
- P-6**
- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中、しまり中。径1～10mmの白色岩片多く含む。
 - 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト [V < VI] 粘性弱、しまり中。不均質。
 - 3 褐色(10YR 4/6)シルト [V < VI] 粘性弱、しまり中。
 - 4 褐色(10YR 4/4) [V + VI] 粘性弱 しまり中
 - 5 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中、しまり中。暗色のV層に類似。
 - 6 褐色(10YR 4/4)シルト 粘性中、しまり中。明るいV層に類似。



- P-7**
- 1 黒色(10YR 2/1) [IV]
 - 2 暗褐色(10YR 3/3) [IV > VI]
 - 3 暗褐色(10YR 3/4) [IV > VI]
 - 4 暗褐色(10YR 3/2) [IV > VI]
 - 5 にぶい黄褐色(10YR 5/4) (V層主体)
 - 6 にぶい黄褐色(10YR 5/4) (V層主体)
 - 7 黒褐色(10YR 2/2)

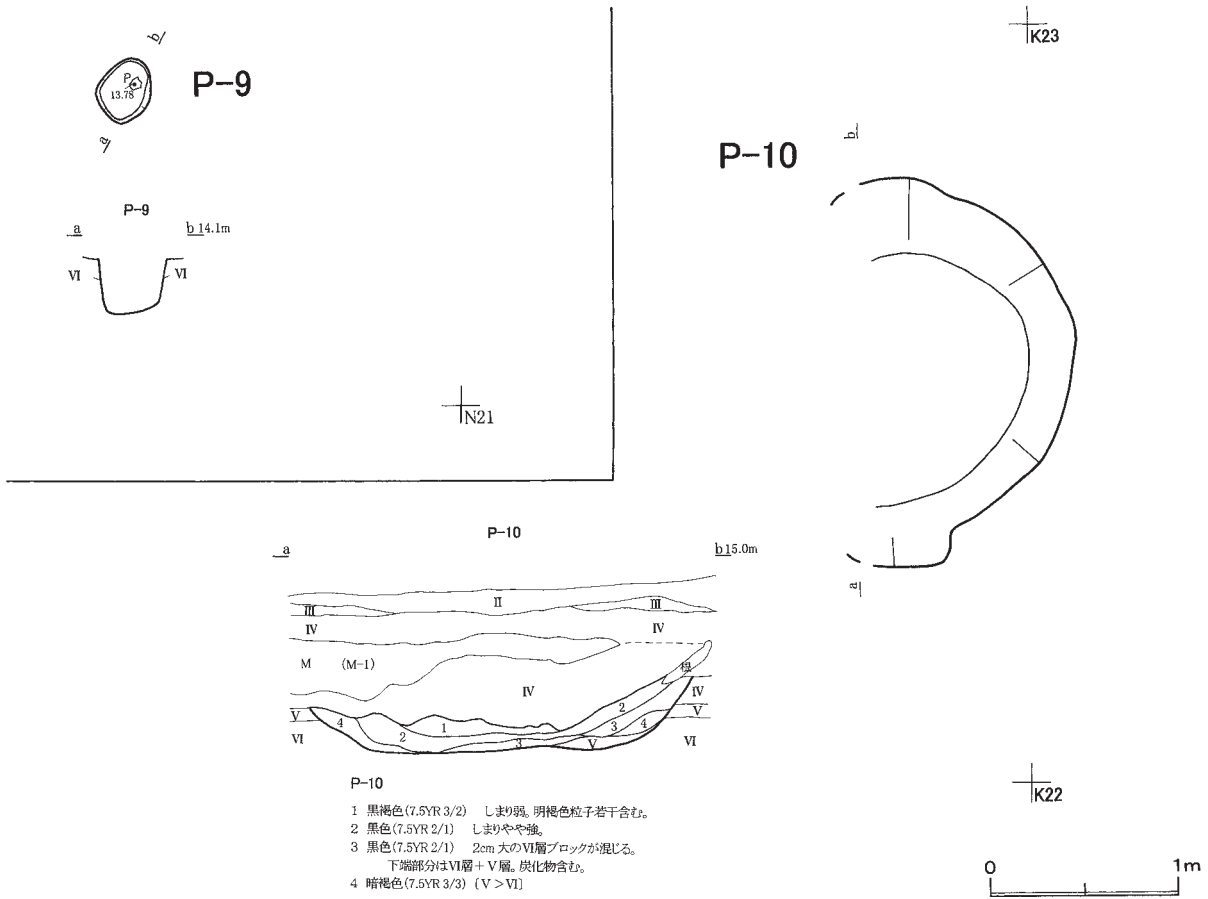


図Ⅲ-118 土坑(2) P-5～7

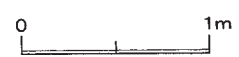


- P-8**
- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中、しまり中。径 2mm 程度の白色岩片多く含む。
- P-18**
- 2 黄褐色(10YR 5/6)シルト 粘性弱、しまり強。VIに1が黒色・ラミナ状に混じる。
 - 3 褐色(10YR 4/4)シルト 粘性弱、しまり中。VIと1がほぼ均質に混じる。

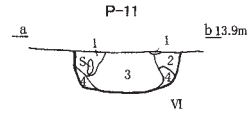
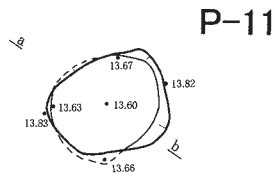
- P-17**
- 1 暗褐色(10YR 3/3)シルト 粘性中、しまり中。炭化物含む。黒色土とVI層が混じった土。



- P-10**
- 1 黒褐色(7.5YR 3/2) しまり弱。明褐色粒子若干含む。
 - 2 黒色(7.5YR 2/1) しまりやや強。
 - 3 黒色(7.5YR 2/1) 2cm 大のVI層ブロックが混じる。下端部分はVI層+V層。炭化物含む。
 - 4 暗褐色(7.5YR 3/3) (V > VI)

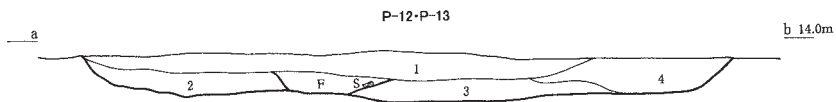
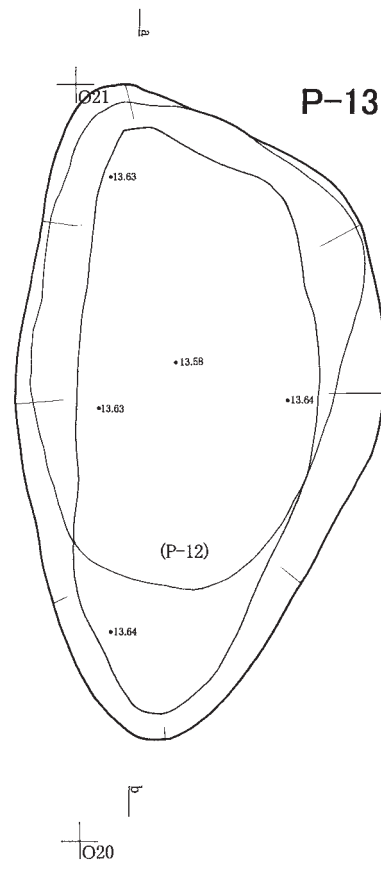
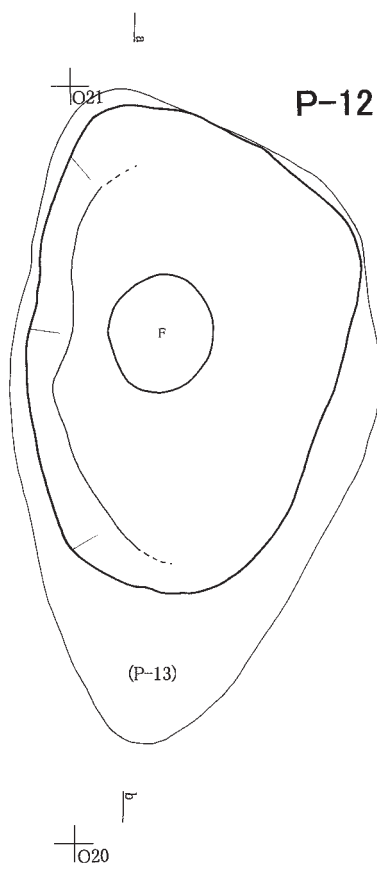


図III-119 土坑(3)P-8~10・17・18



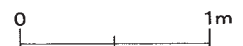
P-11

- 1 暗褐色(10YR 3/4)シルト (V+VI) 粘性中、しまり中、均質的。
- 2 褐色(10YR 4/4)シルト 粘性中、しまり中。3とVI層が比較的均質に混じる。
- 3 黒色(10YR 2/1)シルト 粘性中、しまり中。径 3mm 程度の白色岩片含む。
- 4 黒色(10YR 2/1)シルト 粘性中、しまり中。3とVIが不均質に混じる。



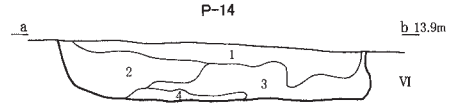
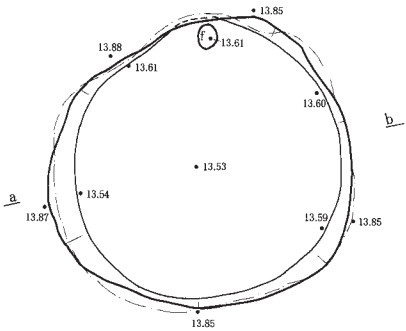
P-12・13

- 1 黒色土(10YR 2/1) [IV]
- 2 黒褐色(7.5YR 2/2)
- 3 黒褐色(7.5YR 2/2)
- 4 黒褐色(5YR 3/2)
- F 赤褐色(5YR 4/4)



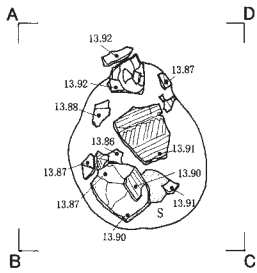
図Ⅲ-120 土坑(4) P-11~13

P-14

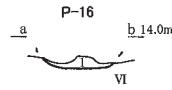
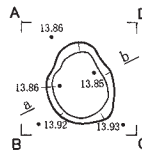


P-14

- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中、しまり中。径1mm程度の白色岩片含む。
- 2 にぶい黄褐色(10YR 4/3)シルト 粘性弱、しまり中。VIと1が混じった土。
- 3 暗褐色(10YR 3/3)シルト 粘性中、しまり中。1にVIがブロック状に混じる。
- 4 黒色(10YR 2/1)シルト 粘性中、しまり中。径1~3mm程度の白色岩片含む。

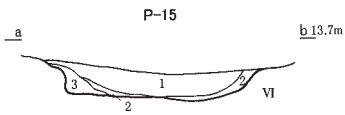


P-16



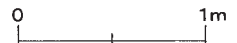
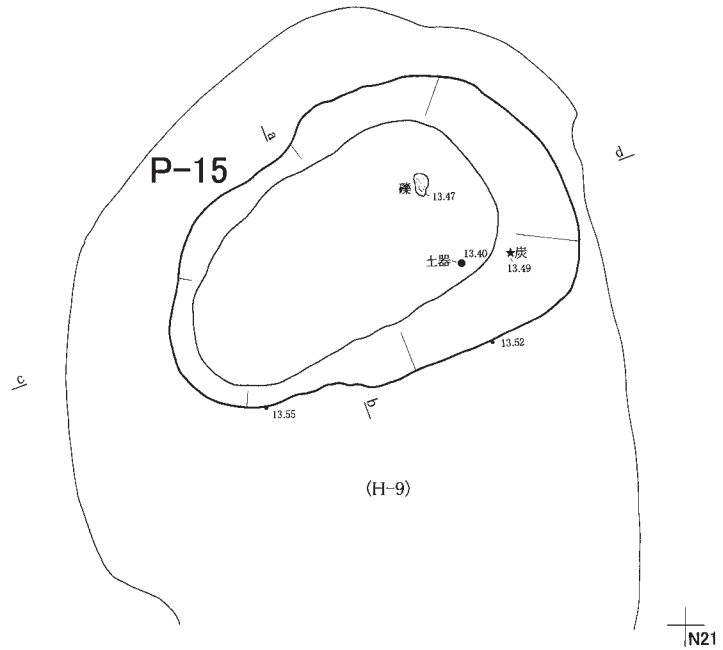
P-16

- 1 暗褐色(7.5YR 3/3) (V+VI) しまりあり。

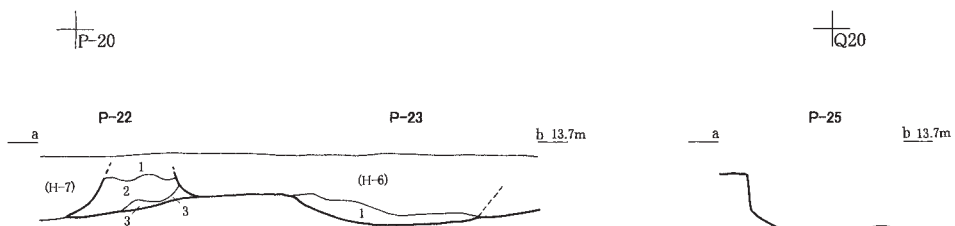
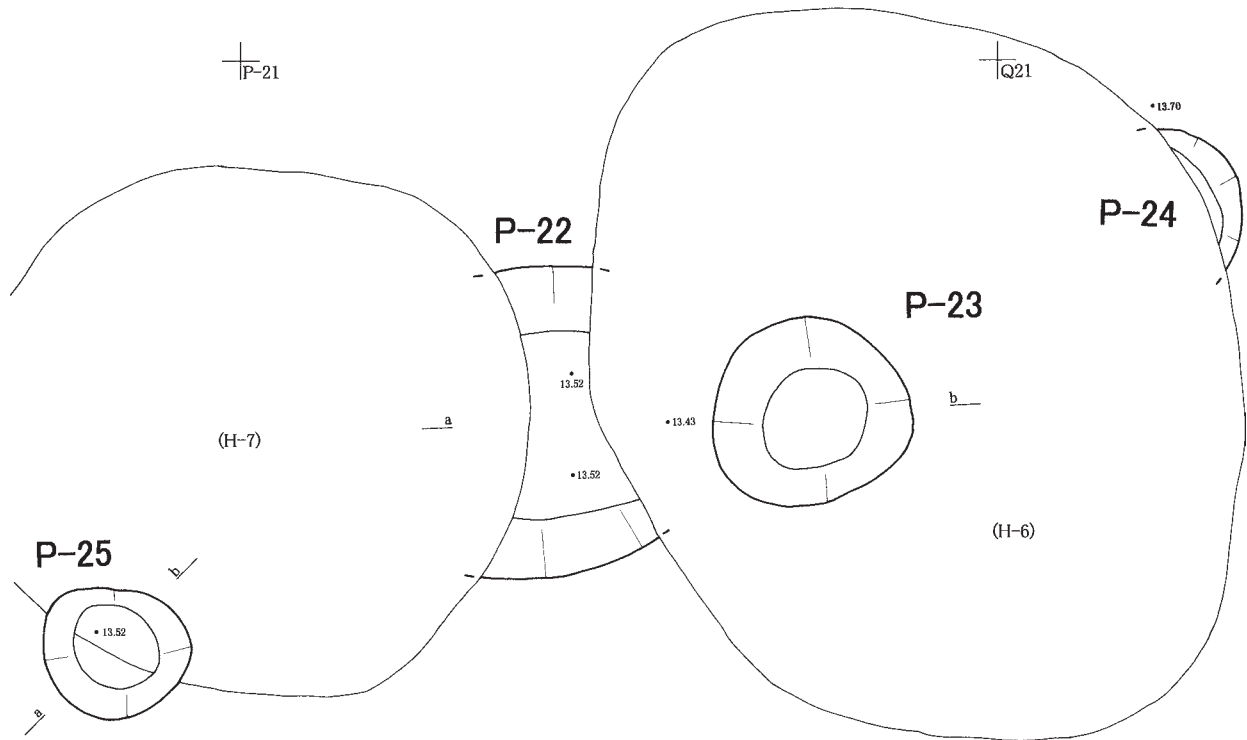
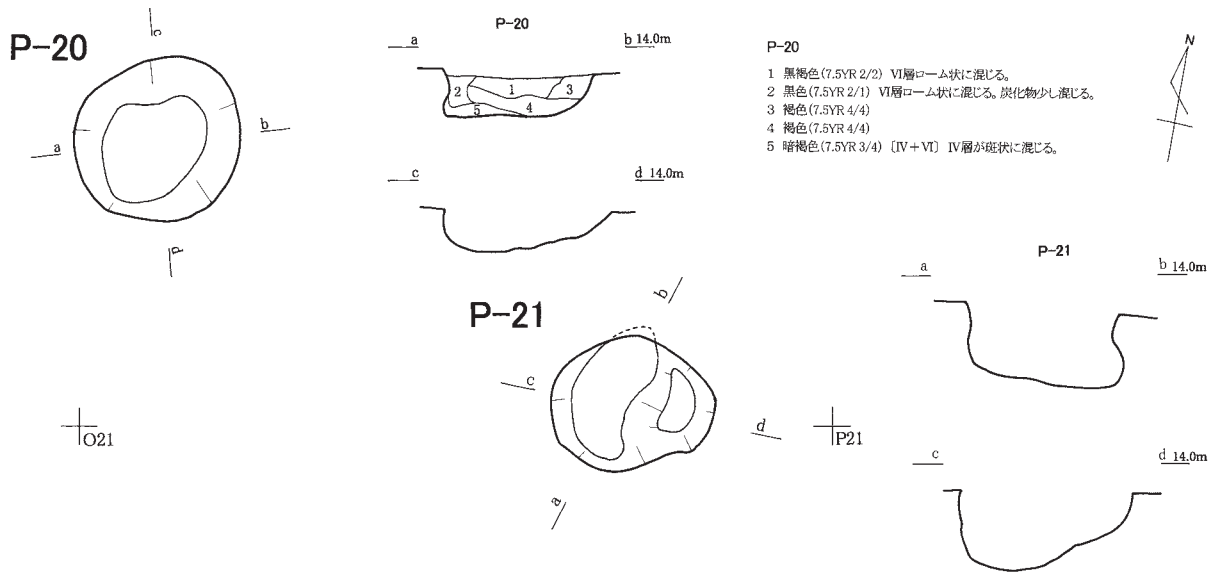


P-15

- 1 褐灰色~黒褐色(7.5YR 3/1~4/1) しまり強。2mm以下の褐色粒子多く含む。
- 2 青黒色(5BG 1.7/1) 粘性強、粒子細かい。
- 3 褐色(7.5YR 4/4) 粘性あり。VI層粒子多い。崩落土か。



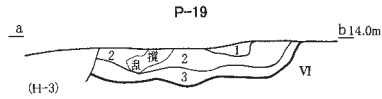
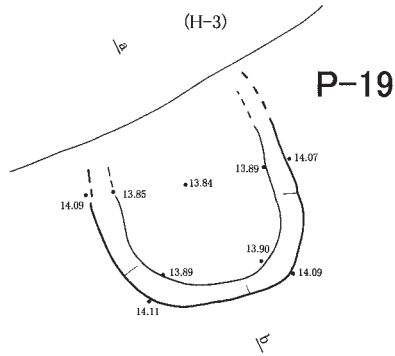
図III-121 土坑(5)P-14~16



- P-22**
- 1 暗褐色 (10YR 3/4) [IV+VI]
 - 2 黒褐色 (10YR 2/3) [IV>VI]
 - 3 褐色 (10YR 4/6) [IV>VI]
- P-23**
- 1 黒褐色 (10YR 2/2) [IV>VI]



図Ⅲ-122 土坑(6) P-20~25

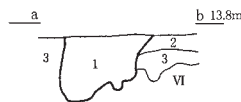
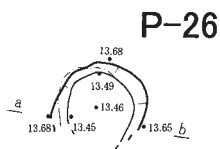


P-19

- 1 黒褐色(10YR 2/2)シルト 粘性中、しまり中。
- 2 黒褐色(10YR 3/2)シルト 粘性中、しまり弱。VI層含む。
- 3 にぶい黄褐色(10YR 4/3) 粘性中、しまり弱。1とVIがやや均質的に混じる。

┆
┆ L23

┆
┆ P23

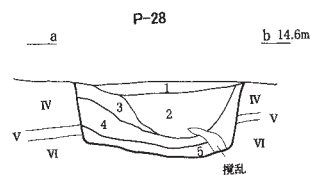
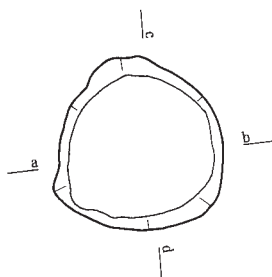


P-26

- 1 黒褐色(10YR 3/2)シルト 粘性弱、しまり中。3とVI層が不均質に混じる。径1~5mmの白色岩片混じる。
- 2 暗褐色(10YR 3/4)シルト 粘性中、しまり中。3とVI層が不均質に混じる。径1mmの岩片含む。
- 3 褐色(10YR 4/6)粘土質シルト 粘性弱、しまり中。VI層にH-8 覆土1が少量混じる。径1mmの白色岩片少量含む。

┆
┆ M17

P-28

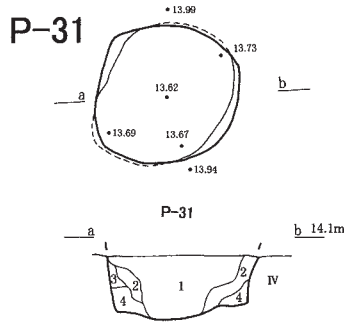
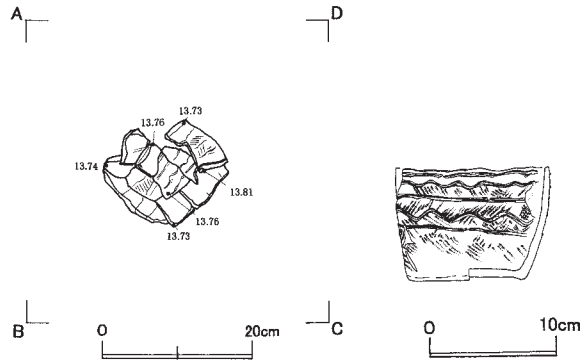
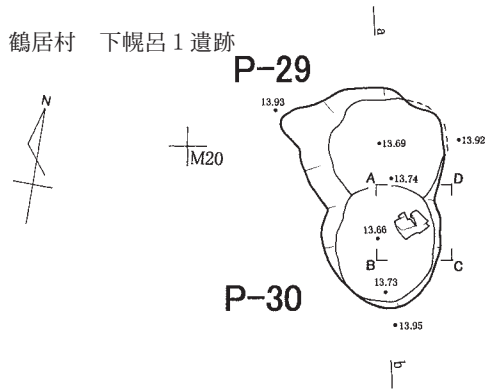


P-28

- 1 [IV層]
- 2 暗褐色(10YR 3/3) [IV>VI] 粘性なし。少量の炭化物含む。
- 3 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] 粘性なし。
- 4 にぶい黄褐色(10YR 4/3) [VI>IV] 粘性なし。少量の炭化物含む。
- 5 褐色(10YR 4/4) [VI>IV] 粘性なし。少量の炭化物含む。

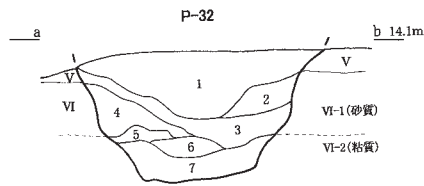


図III-123 土坑(7) P-19・26・28



P-31

- 1 黒色(10YR 2/1~2/2) [IV>VI] 粘性やや強、しまり中。下位に黄褐色土が不均質に混じる。炭化物少量含む。
- 2 暗褐色~褐色(10YR 3/4~4/4) [IV<VI] 粘性やや強、しまりやや弱。黒色土が不均質に混じる。
- 3 黄褐色(10YR 5/6) [VI] 粘性やや強、しまりやや弱、VI層とほぼ同様。
- 4 暗褐色(10YR 3/4) [IV+V+VI] 粘性やや強、しまり中。やや均質的。



P-32

- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV] しまりやや弱、均質。
- 2 褐色(10YR 4/6) [VI>V] しまり中、均質的。
- 3 黒褐色~暗褐色(10YR 2/2~2/3) [IV+V+VI] しまりやや弱、不均質。
- 4 黄褐色(10YR 5/6) [VI] しまり中、やや均質。
- 5 暗褐色(10YR 2/3) [IV+V+VI] しまりやや弱、不均質。
- 6 黄褐色(10YR 5/6) [VI] しまり中、均質。
- 7 暗褐色~褐色(10YR 3/4~4/4) [VI+V] しまりやや弱、不均質。



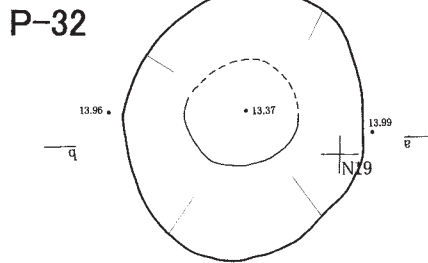
P-33

- 1 黒褐色(10YR 2/2) [IV>V] しまりやや弱、やや均質。炭化材多量含む。下位にロームやや多い。

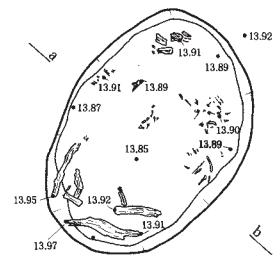


P-34

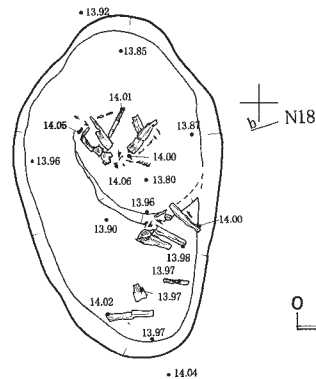
- 1 黒色(10YR 2/1) しまりやや弱。炭化材多量含む。
- 2 黒褐色(10YR 2/2) しまりやや弱。炭化材多量含む。
- 3 褐色(10YR 4/4~4/6) しまりやや弱、不均質。



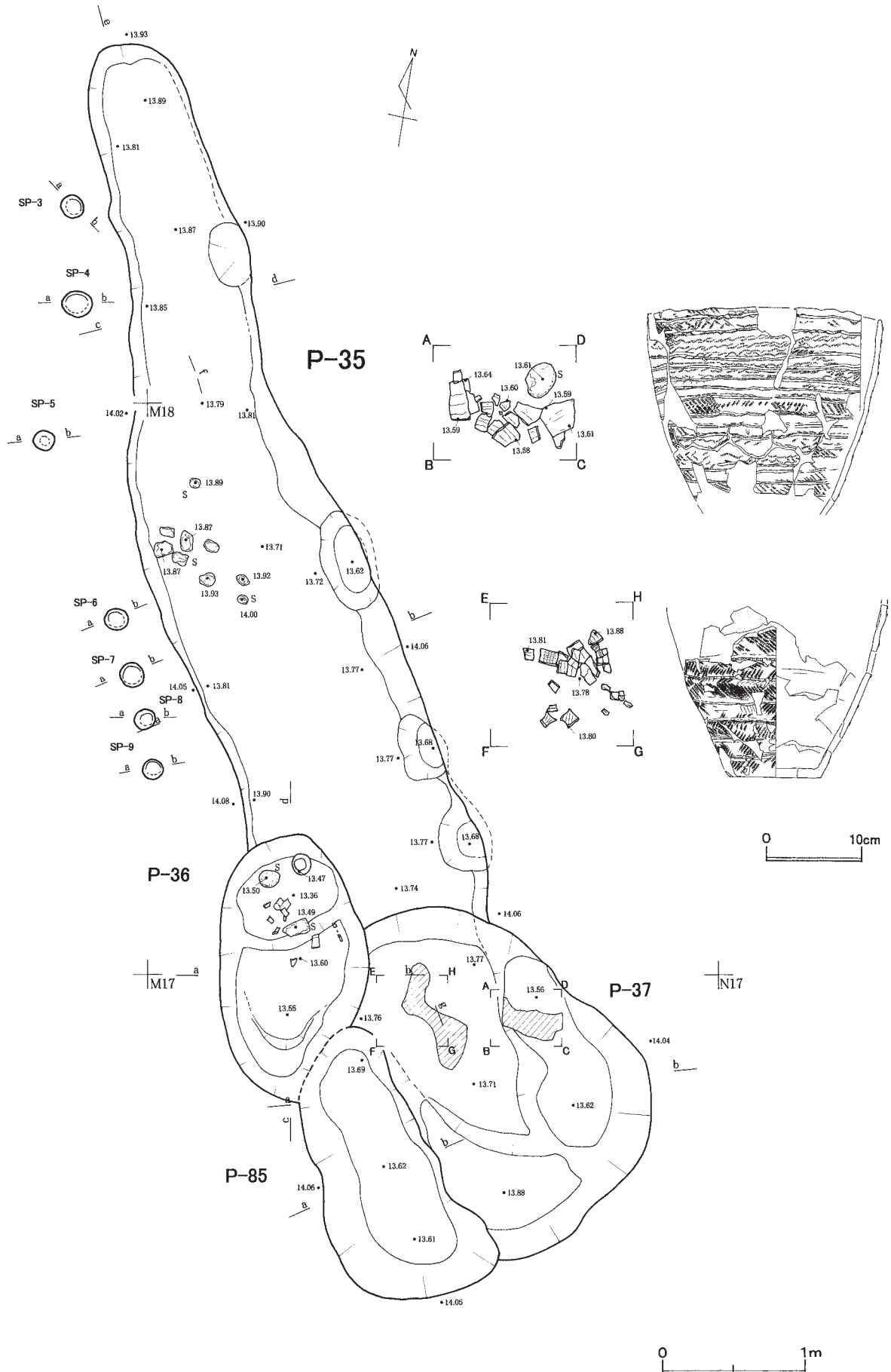
P-33



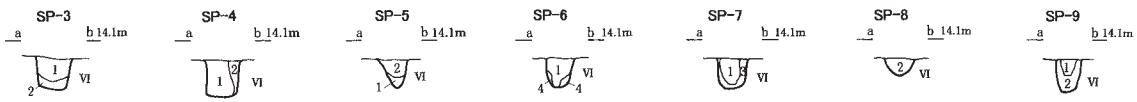
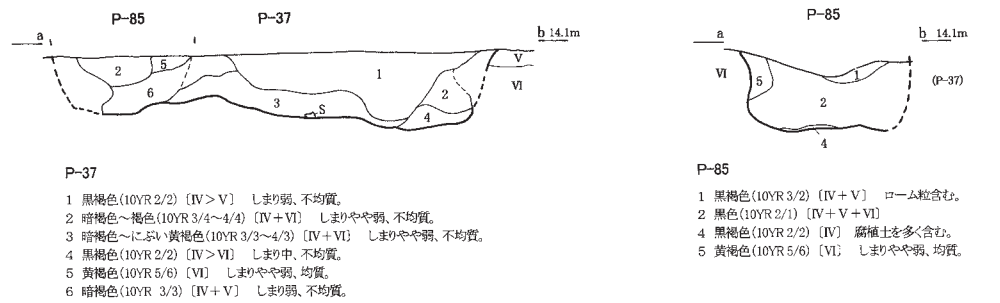
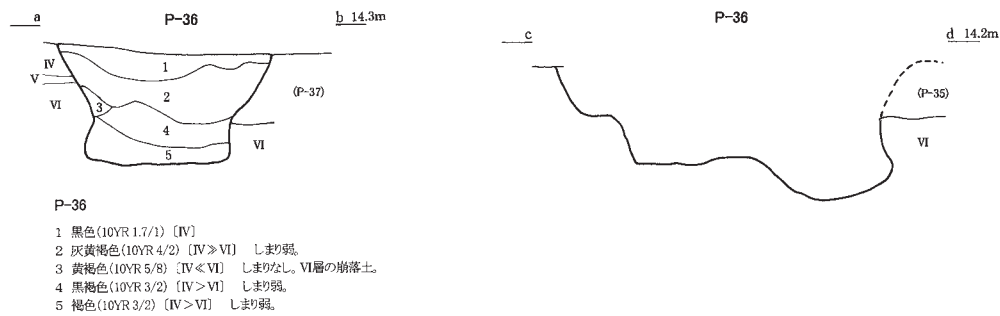
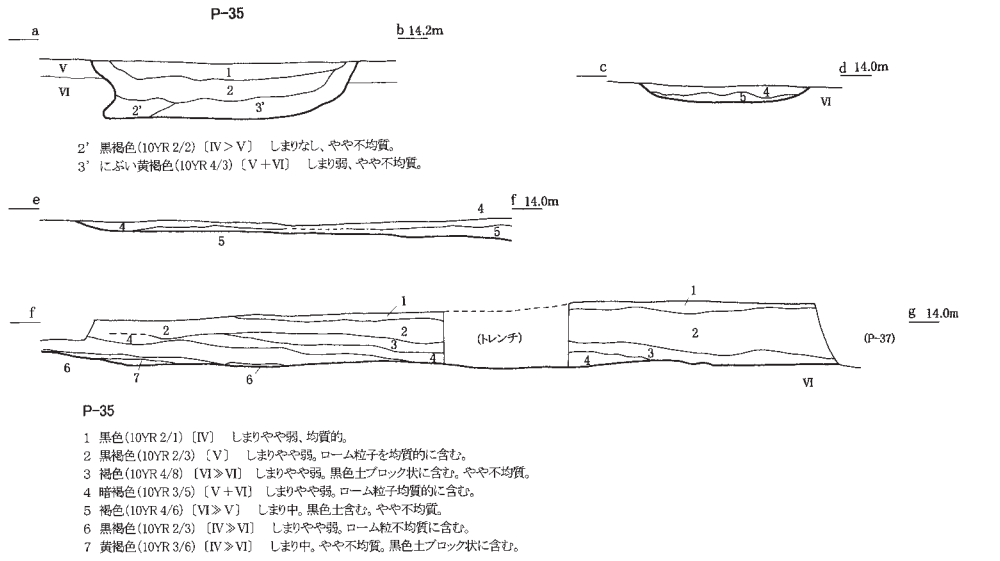
P-34



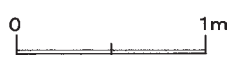
図III-124 土坑(8)P-29~34



図III-125 土坑(9) P-35~37・85・SP-3~9

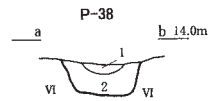


- SP-3～9**
- 1 黒褐色(10YR 3/2) [IV+VI] ローム粒含む。
 - 2 暗褐色(10YR 4/2) [IV] しまり弱。
 - 3 暗褐色(10YR 3/3) [V+VI]
 - 4 黄褐色(10YR 3/6) [VI] ロームブロック, 均質的。



図Ⅲ-126 土坑(10) P-35～37・85・SP-3～9

P-38



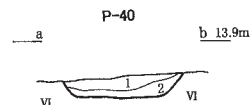
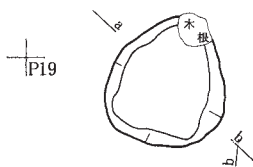
P-38

- 1 黒色(10YR 2/1) [VI>IV] しまりなし。
- 2 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] VI層ブロック状に入る。

IN18

O18

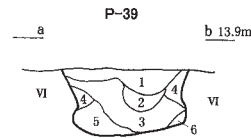
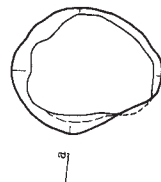
P-40



P-40

- 1 黒褐色(10YR 3/1) しまりなし。ごく少量のVI層混入。
- 2 褐色(10YR 3/3) [VI+IV] しまりなし。

P-39



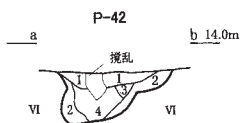
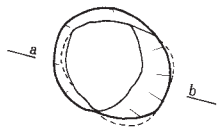
P-39

- 1 暗褐色(10YR 3/3) [IV>VI] しまりなし。
- 2 褐色(10YR 4/4) [VI>IV] しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] しまりなし。
- 4 褐色(10YR 4/3) [VI層崩落土] しまりなし。
- 5 暗褐色(10YR 3/4) [VI+IV] しまりなし。
- 6 褐色(10YR 4/3) [VI層崩落土] しまりなし。

O20

P20

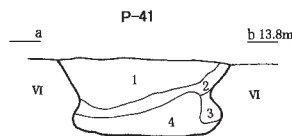
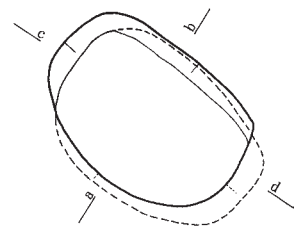
P-42



P-42

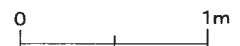
- 1 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまりなし。
- 2 褐色(10YR 4/6) [IV>VI] しまりなし。
- 3 暗褐色(10YR 3/3) [IV+VI] しまりなし。
- 4 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] しまりなし。

P-41

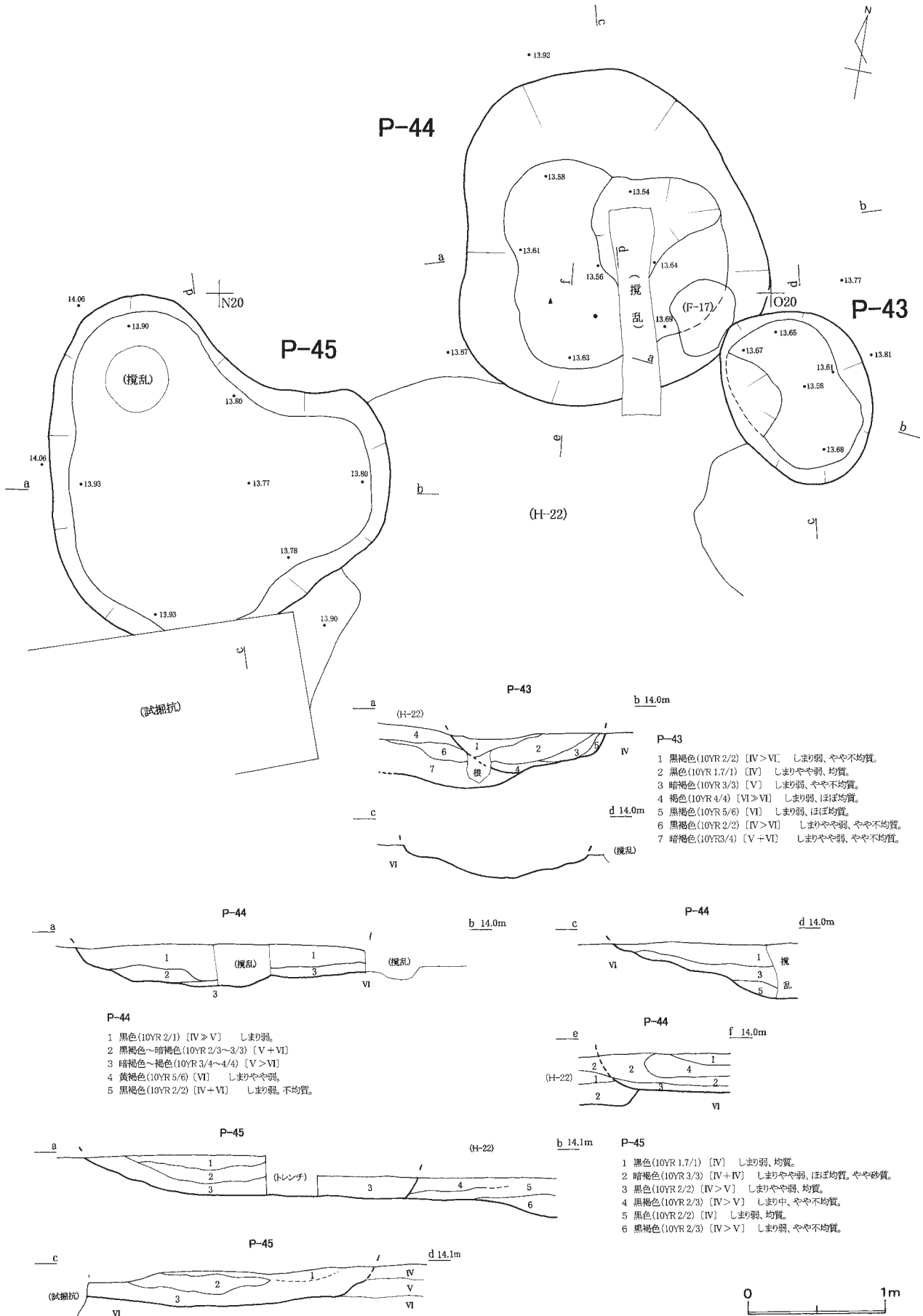


P-41

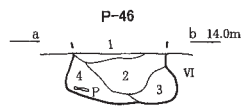
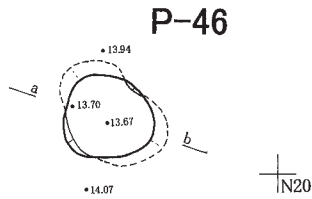
- 1 黒褐色(10YR 3/1) しまりなし。VI層がミスマ含む。
- 2 褐色(10YR 4/4) [VI>IV] しまりなし。
- 3 褐色(10YR 4/1) [IV+VI] しまりなし。
- 4 黒色(10YR 2/1) [IV>VI] しまりなし。



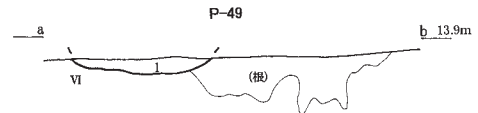
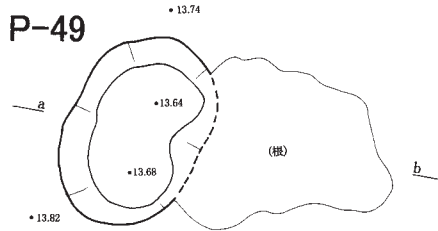
図III-127 土坑(11) P-38~42



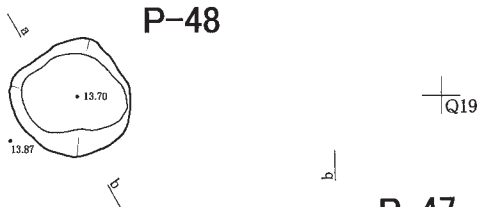
図Ⅲ-128 土坑(12) P-43~45



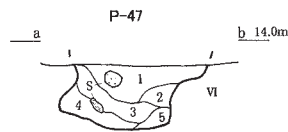
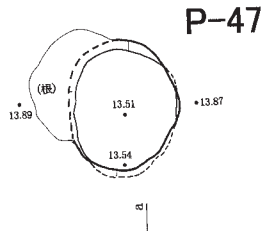
- P-46
- 1 黒褐色(10YR2/2~2/3) [IV>V] しまりやや弱、やや均質。
 - 2 暗褐色(10YR3/3) [IV+VI] しまりやや弱、やや不均質。ローム粒子多く含む。
 - 3 黒褐色(10YR2/3) [IV>VI] しまり中、やや均質。
 - 4 黒褐色(10YR2/3) [IV>VI] しまりやや強、均質。



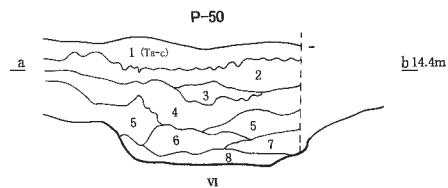
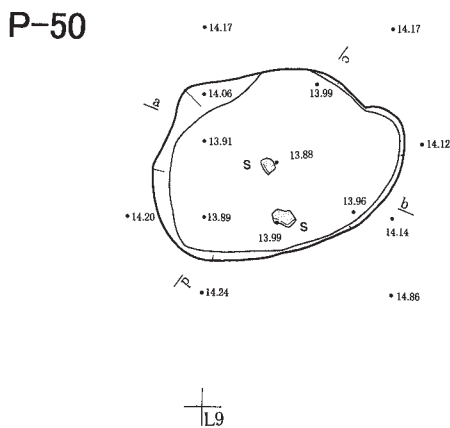
- P-49
- 1 黒褐色(10YR2/2) [IV+V] しまりやや弱、均質的。VI層の粒子やや多く含む。



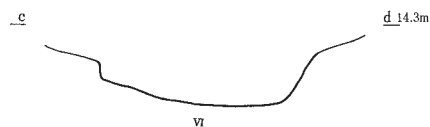
- P-48
- 1 黒褐色(10YR2/2) [IV+V] しまり弱、やや均質。粒子細かい。
 - 2 暗褐色(10YR2/3~3/4) [V+VI] しまり弱、不均質。



- P-47
- 1 黒色(10YR2/1) [IV>V] しまりやや弱、やや均質。細かい地山の粒子多い。
 - 2 暗褐色(10YR3/4) [VI>VI] しまり弱、漸遷。ローム主体。
 - 3 暗褐色(10YR3/3) [IV+VI] しまり弱、不均質に混じる。
 - 4 黒褐色(10YR2/3) [IV>V] しまりやや弱、やや均質。
 - 5 黒褐色(10YR2/3) [IV+VI] しまり中、不均質。ロームブロック含む。

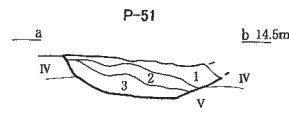
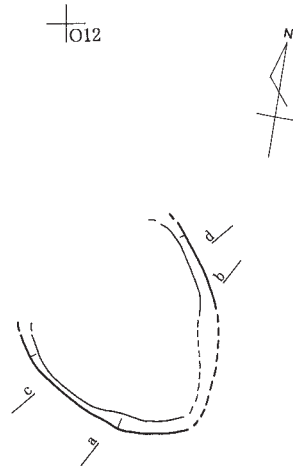


- P-50
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) [Ta-c] 堅密度:軟 粘着性:なし
 - 2 黒色土(10YR2/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
 - 3 暗褐色土(10YR3/3) 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
 - 4 黒褐色土(7.5YR2/2) 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
 - 5 黒褐色土(10YR3/1) 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
 - 6 黒色土(10YR1.7/1) 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
 - 7 褐色土(7.5YR4/3) 堅密度:軟 粘着性:中 壤土(L) 炭化物含む。
 - 8 ぶい褐色土(7.5YR5/4) 堅密度:軟 粘着性:中 壤土(L) 炭化物含む。



図III-129 土坑(13) P-46~50

P-51

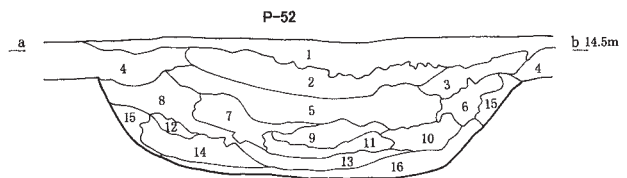
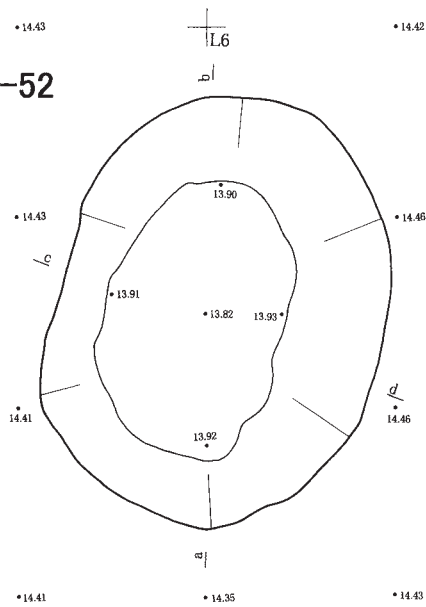


P-51

- 1 黒色(10YR 2/1) しまりなし。
- 2 黒褐色(10YR 3/2) [VI+IV] しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] しまりなし。



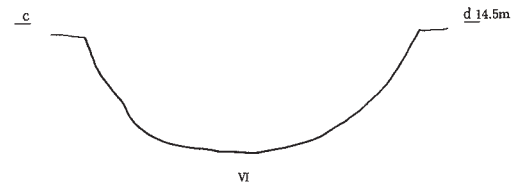
P-52



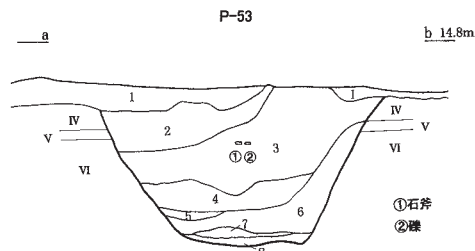
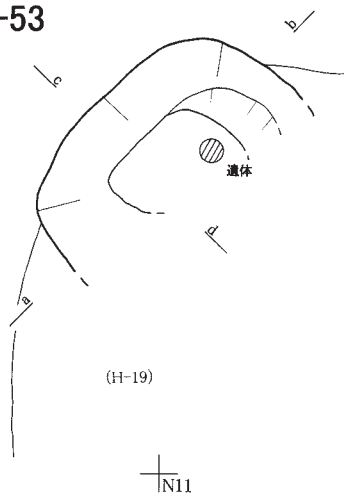
P-52

VI

- 1 灰黄褐色(10YR 5/2) [Ta-c] 堅密度:軟 粘着性:なし
- 2 黒色(10YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
- 3 黒褐色(10YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
- 4 灰黄褐色(10YR 5/2) [漸移層] 堅密度:軟 粘着性:弱 壤土(L)
- 5 黒色(7.5YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:中 壤土(L)
- 6 黒褐色(10YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:堅 粘着性:弱 壤土(L)
- 7 暗褐色(7.5YR 3/3) [V+VI>IV] 堅密度:軟 粘着性:中
- 8 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 9 黒色(7.5YR 2/1) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 10 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 11 黒褐色(5YR 2/4) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 12 暗褐色(7.5YR 3/4) [V+VI>IV] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 13 黒色(7.5YR 1.7/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:中
- 14 黒褐色(7.5YR 2/2) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:中
- 15 暗赤褐色(5YR 3/4) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 16 褐色(7.5YR 4/4) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:中

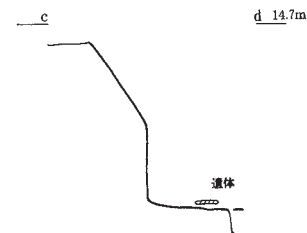


P-53



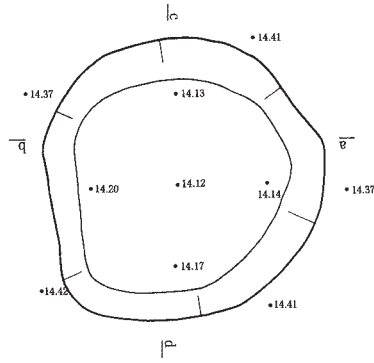
P-53

- 1 にぶい、黄褐色(10YR 5/4) 盛土の流れ込み。
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2) しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR 3/2) しまりなし。
- 4 にぶい、黄褐色(10YR 5/3) しまりなし。
- 5 黒褐色(10YR 3/1) しまりなし。
- 6 明黄褐色(10YR 6/6) しまりなし。
- 7 褐灰色(10YR 4/1) しまりなし。
- 8 灰黄褐色(10YR 5/2) しまりなし。

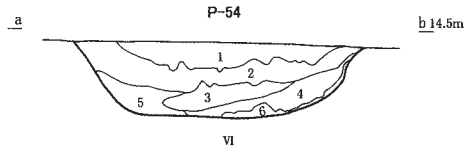


図Ⅲ-130 土坑(14) P-51~53

P-54

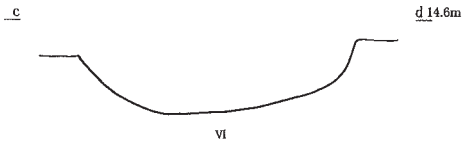


M6



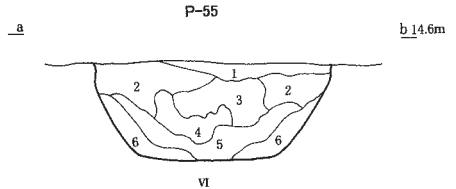
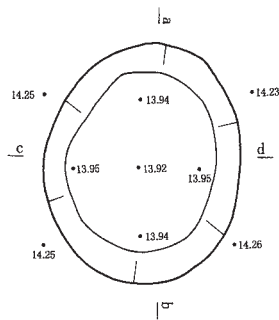
P-54

- 1 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:中
- 2 黒色(7.5YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:中 obs 剥片混じる
- 3 暗褐色(7.5YR 3/3) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱 obs 剥片混じる
- 4 黒褐色(7.5YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:中
- 5 黒褐色(10YR 3/1) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 6 暗褐色(7.5YR 5/8) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱



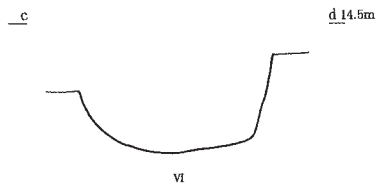
P-55

L6



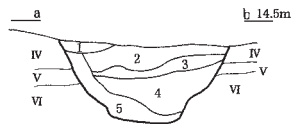
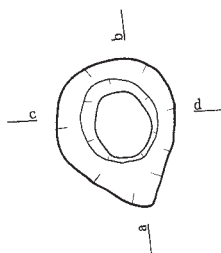
P-55

- 1 黒色(5YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 2 暗褐色(7.5YR 3/3) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
- 3 黒色(10YR 2/1) [IV層主体] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 4 黒褐色(10YR 3/1) [IV層主体] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 5 黒褐色(10YR 3/2) [V+VI>IV] 堅密度:堅 粘着性:弱
- 6 明褐色(7.5YR 5/6) [V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱



N11

P-56

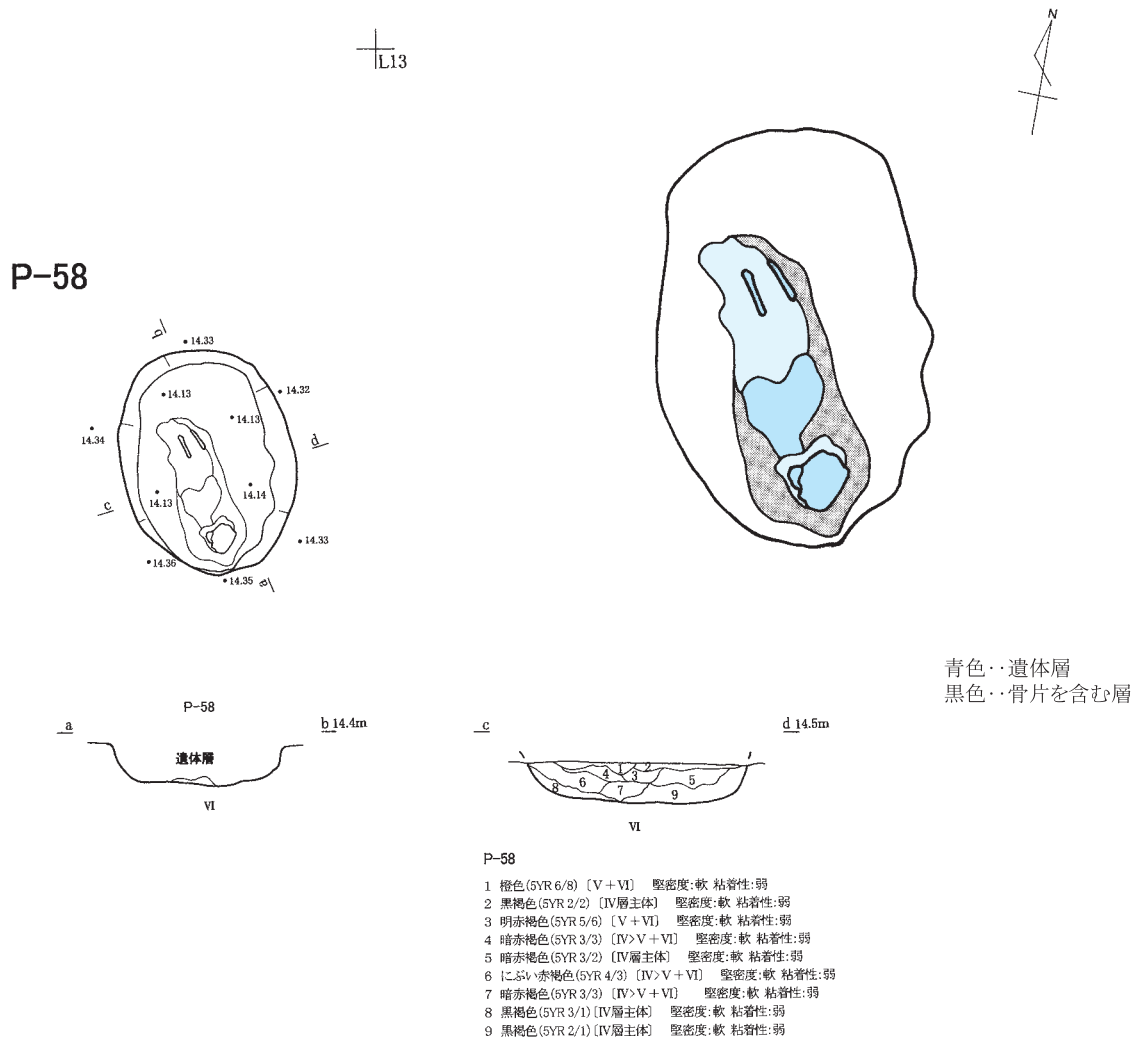
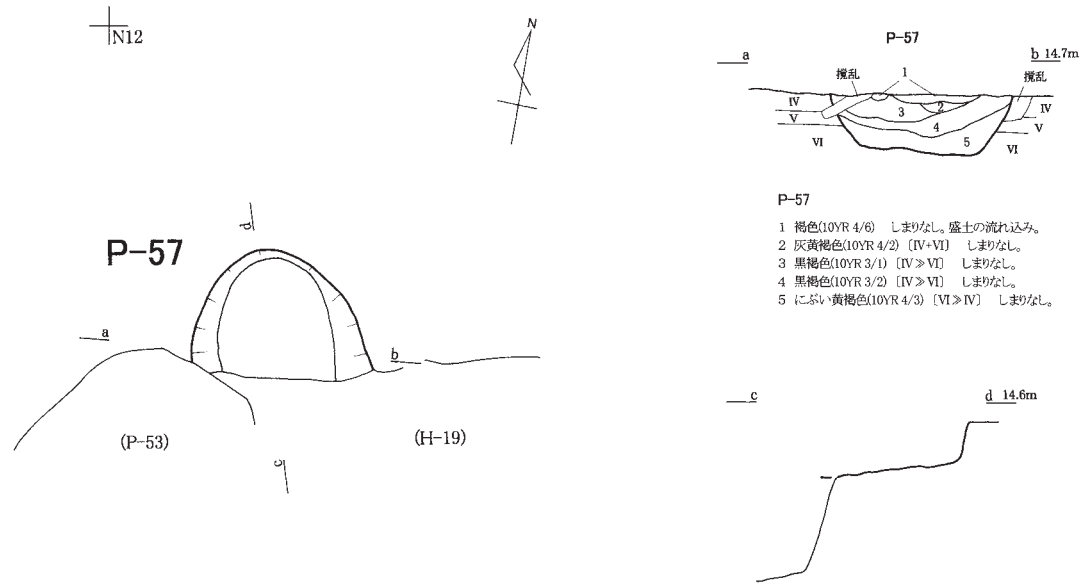


P-56

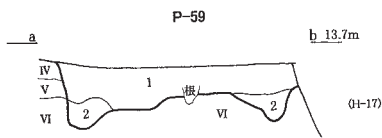
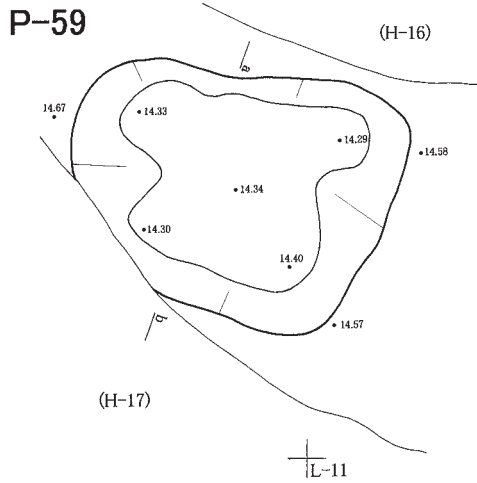
- 1 黒色(10YR 2/1) [IV層]
- 2 灰黄褐色(10YR 4/2) [VI>IV] しまりなし。
- 3 黒褐色(10YR 3/1) [IV>VI] しまりなし。炭化物含む。
- 4 褐色(10YR 4/4) [VI>IV] しまりなし。
- 5 黒褐色(10YR 2/2) しまりなし。



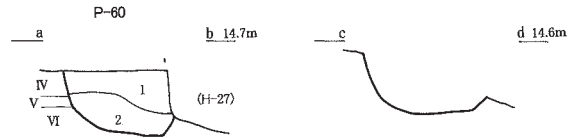
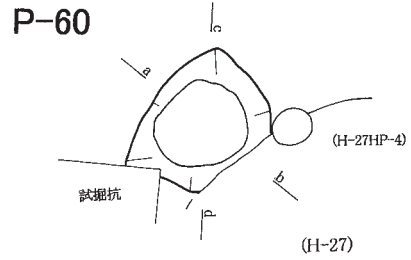
図III-131 土坑(15) P-54~56



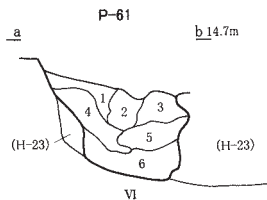
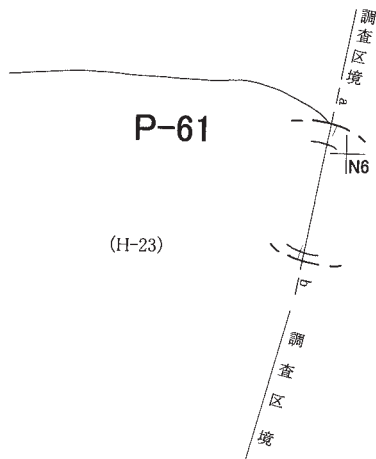
図Ⅲ-132 土坑(16) P-57・58



- P-59
- 1 黒褐色(10YR 2/3) [IV>V] しまり弱。ブロック状ローム多く含み不均質。
 - 2 暗褐色(10YR 2/3~3/4) [IV>V] しまりなし。やや均質的。土壌の粒子細かい。

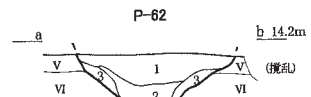
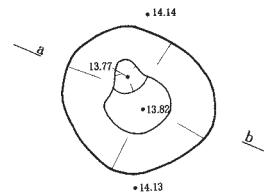


- P-60
- 1 黒色(10YR 2/1) しまりなし。VI層に極少量のVI層バミスを含む。
 - 2 灰黄褐色(10YR 4/2) [VI>IV]



- P-61
- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV層] 堅密度:軟 粘着性:弱
 - 2 明褐色(7.5YR 5/6) 堅密度:しよ 粘着性:弱
 - 3 褐色(7.5YR 4/3) 堅密度:軟 粘着性:弱
 - 4 黒褐色(7.5YR 3/2) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
 - 5 灰褐色(7.5YR 4/2) [IV>V+VI] 堅密度:軟 粘着性:弱
 - 6 黒褐色(10YR 3/1) [V+VI>IV] 堅密度:しよ 粘着性:弱

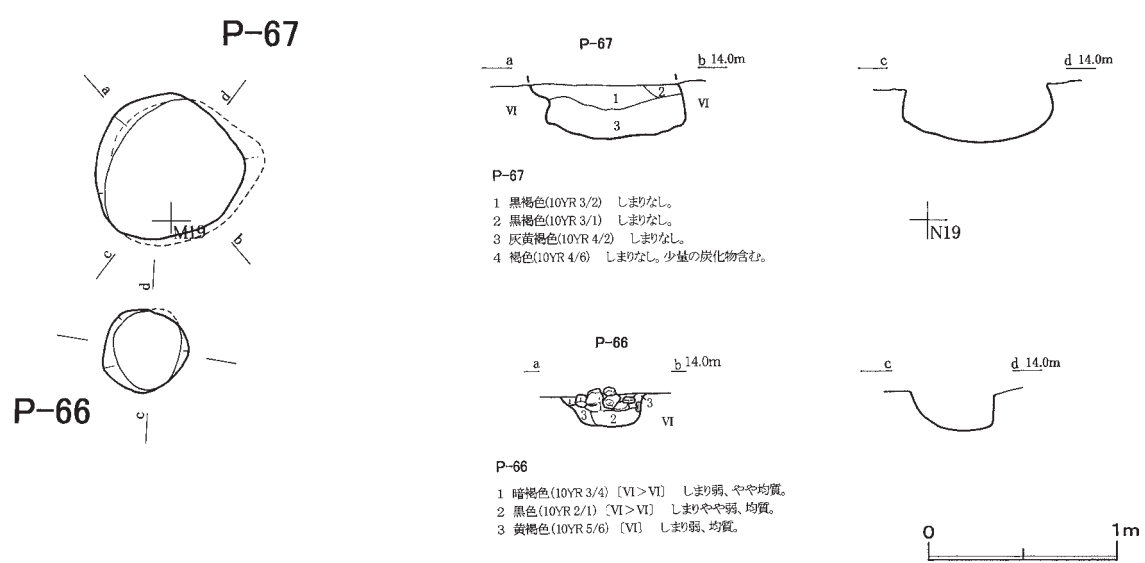
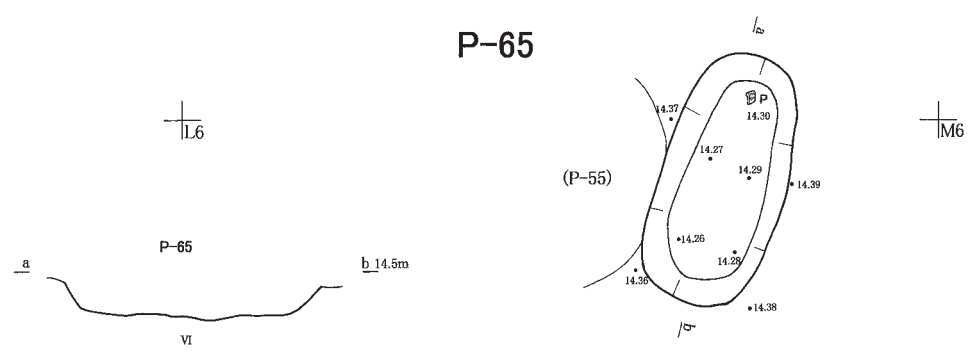
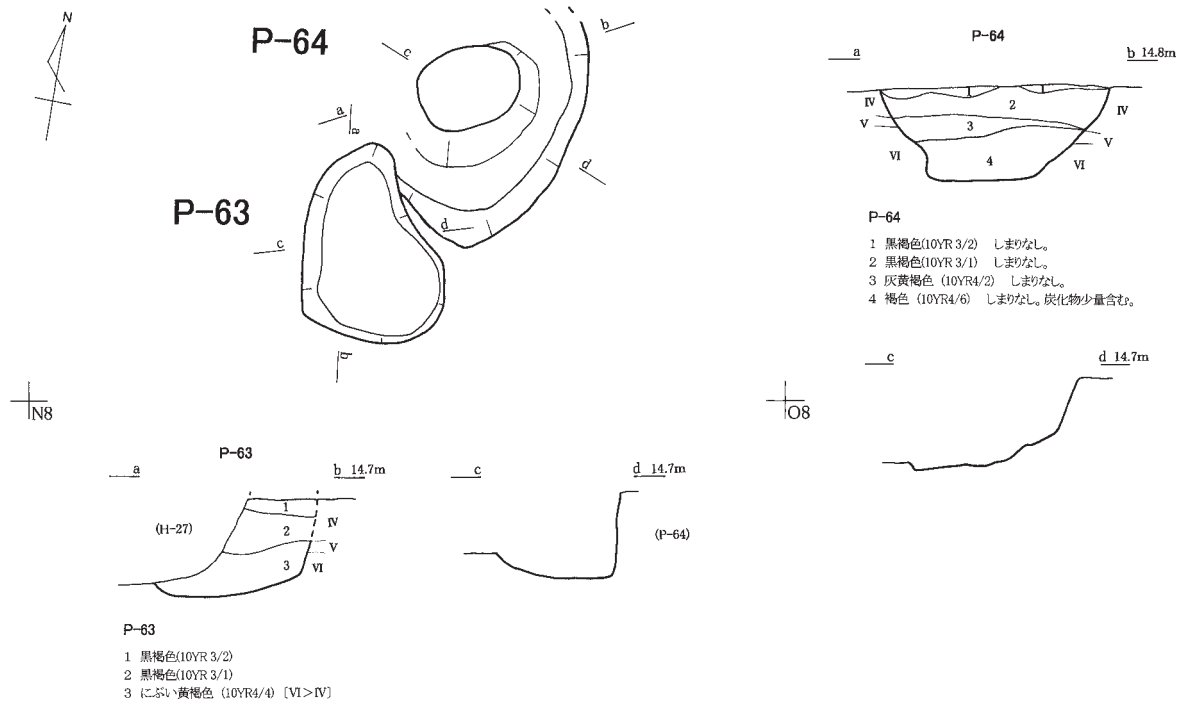
P-62



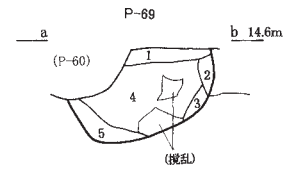
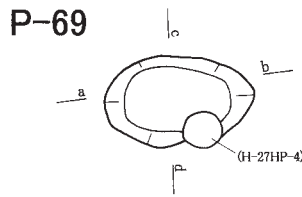
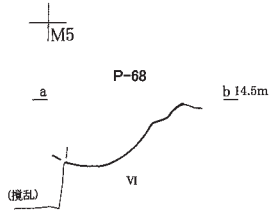
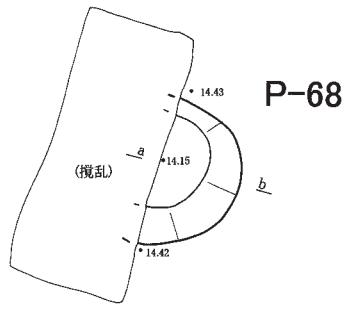
- P-62
- 1 黒色(10YR 1.7/1) [IV] しまりやや弱。均質的。
 - 2 黒褐色(10YR 2/3) [IV+VI] しまり弱。ローム粒不均質を含む。
 - 3 暗褐色(10YR 3/4) [V<VI] しまり弱。漸遷。



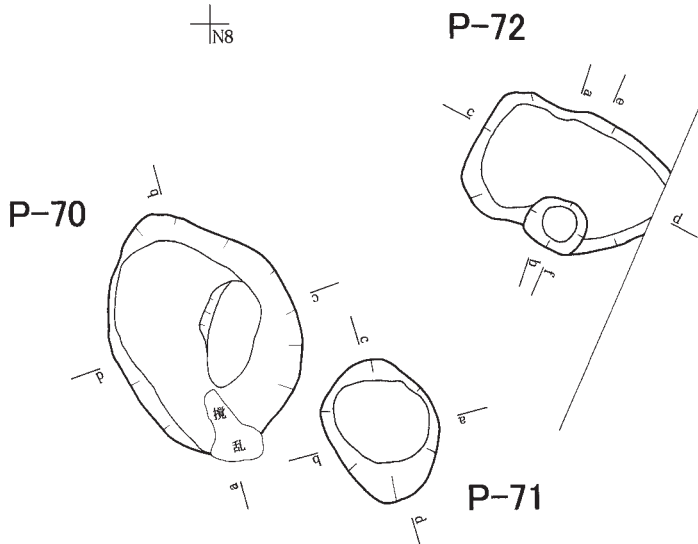
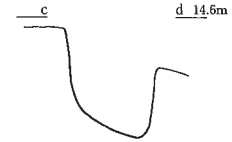
図III-133 土坑(17) P-59~62



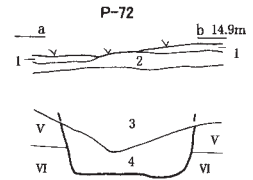
図Ⅲ-134 土坑(18) P-63~67



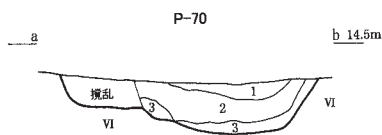
- P-69
- 1 黒色(10YR 2/1) [IV層]
 - 2 褐色(10YR 4/6)
 - 3 灰褐色(10YR 5/6)
 - 4 灰黄褐色(10YR 4/2)
 - 5 にぶい黄褐色(10YR 5/4) 炭化物含む。



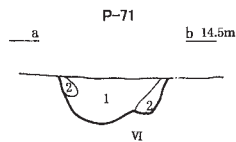
P-72



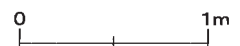
- P-72
- 1 [I層]
 - 2 [III層]
 - 3 [IV層]
 - 4 黒褐色(10YR 3/2) [IV+V+VI] 少量の炭化物含む。



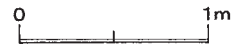
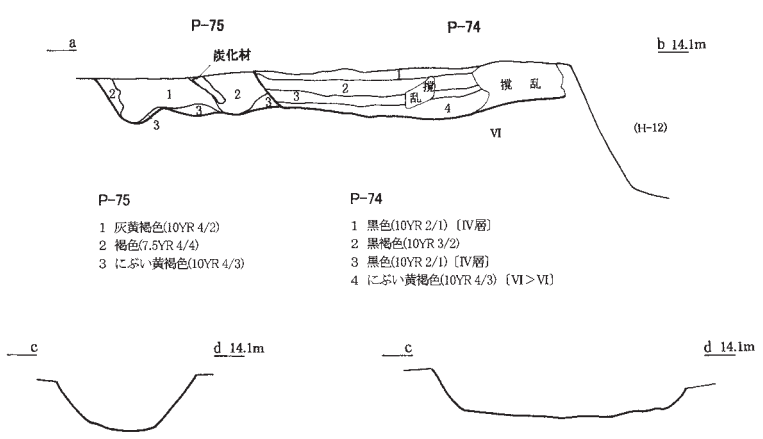
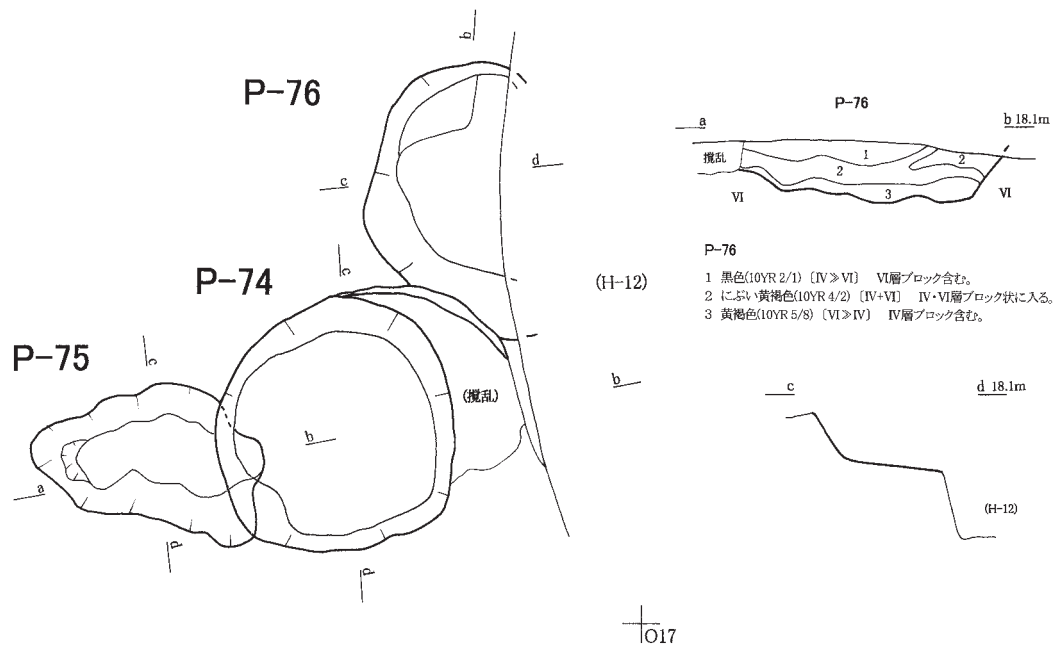
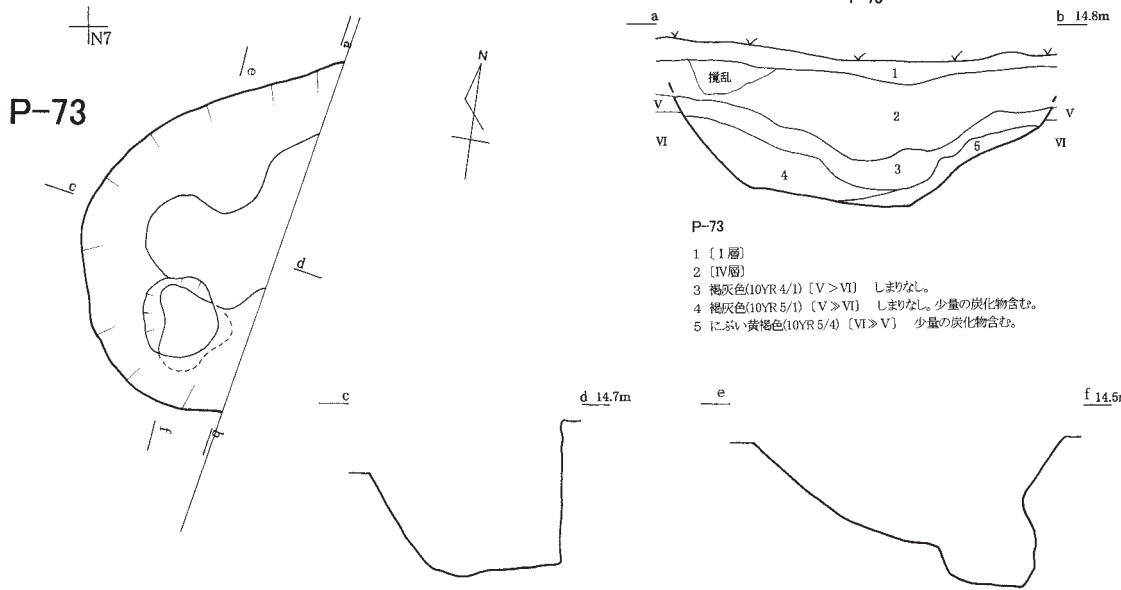
- P-70
- 1 灰黄褐色(10YR 4/2) [IV+VI]
 - 2 黒褐色(10YR 2/2) [IV+VI] VI層ブロック・炭化物含む。
 - 3 褐色(10YR 4/6) [VI>IV]



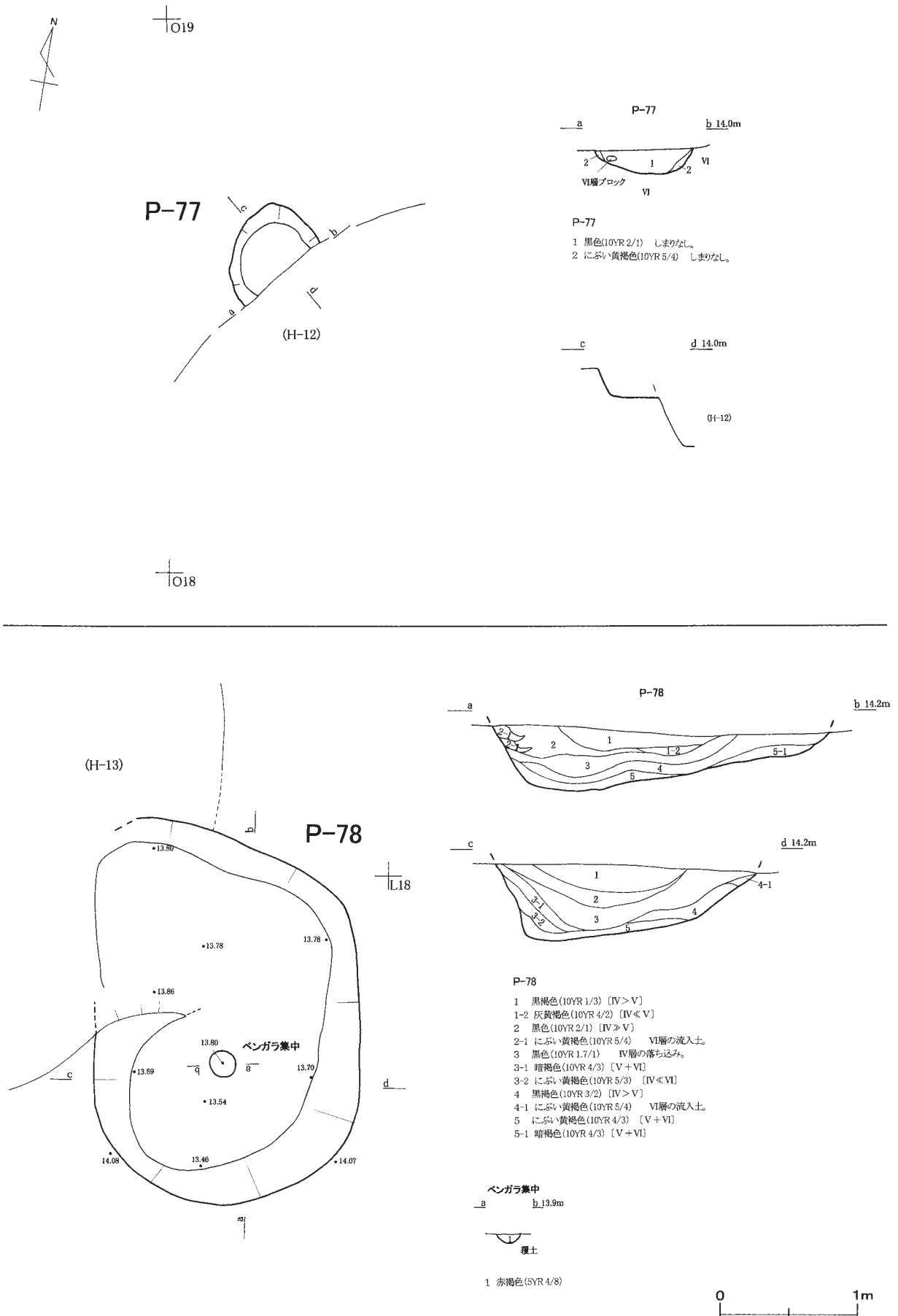
- P-71
- 1 黒褐色(10YR 3/2) [IV>VI]
 - 2 褐色(10YR 4/6) [VI>IV]



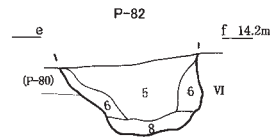
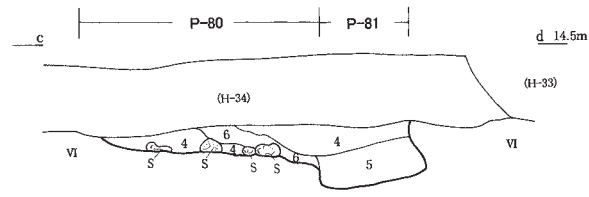
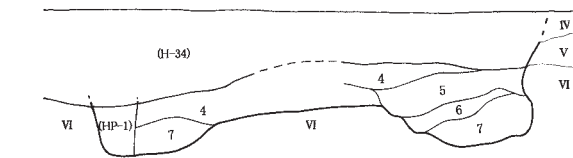
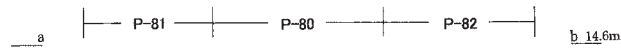
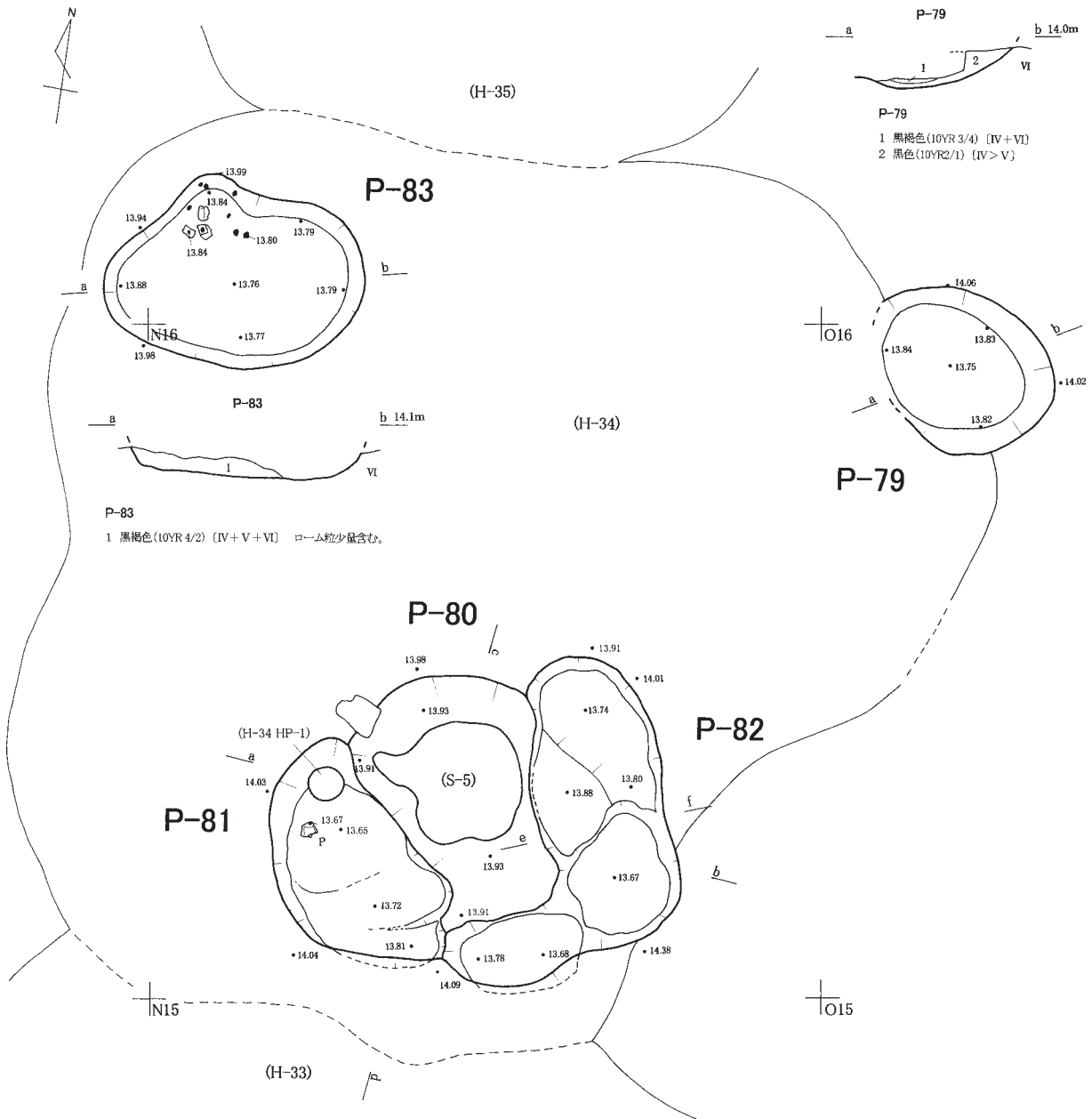
図III-135 土坑(19) P-68~72



図Ⅲ-136 土坑(20) P-73~76



図III-137 土坑(21) P-77・78

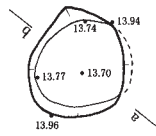


- P-80~82**
- 1~3 (H-34 覆土)
 - 4 黒色(10YR 2/1) [IV>V] しまりやや弱、やや不均質、ローム粒子多く含む。ブロック状のローム含む。
 - 5 黒褐色(10YR 2/2) [VI>VI] しまりやや弱、やや均質的、ローム粒子少量含む、炭化物少量含む。
 - 6 暗褐色~褐色(10YR 3/3~4/6) [IV+VI] しまりやや弱、ローム粒不均質に混じる。
 - 7 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまり中、ロームブロック不均質に少量含む。
 - 8 にがい黄褐色(10YR 4/3) [VI<VI] しまりやや弱、やや不均質。

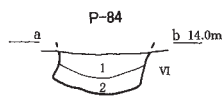


図Ⅲ-138 土坑(22) P-79~83

P-84



↑ N17

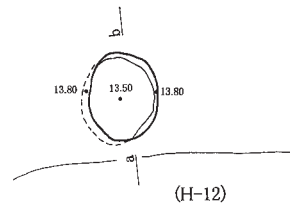


P-84

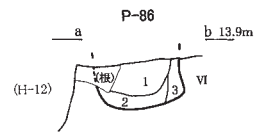
- 1 黒褐色(10YR 4/2) [IV+VI] ローム粒少量含む。
- 2 黒褐色(10YR 3/2) [IV>V+VI] ローム粒含む。

P-86

↑ P-19



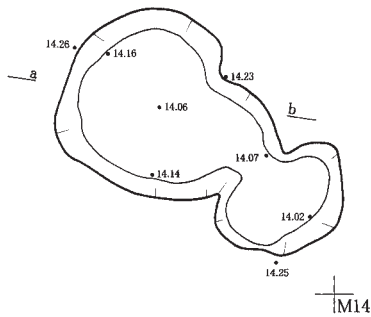
(H-12)



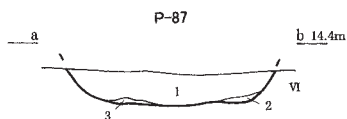
P-86

- 1 黒褐色(10YR 4/2) [IV+V] ローム粒少量含む。
- 2 黒色(10YR 3/1) [IV>V]
- 3 暗褐色(10YR 4/4) [V>VI] ローム粒含む。

P-87



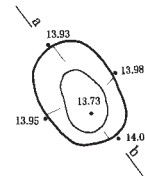
↑ M14



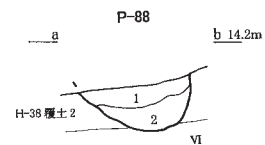
P-87

- 1 暗褐色(10YR 3/4) [V]
- 2 黒褐色(10YR 3/2) [IV+V]
- 3 褐色(10YR 4/6) [VI]

P-88



↑ M15

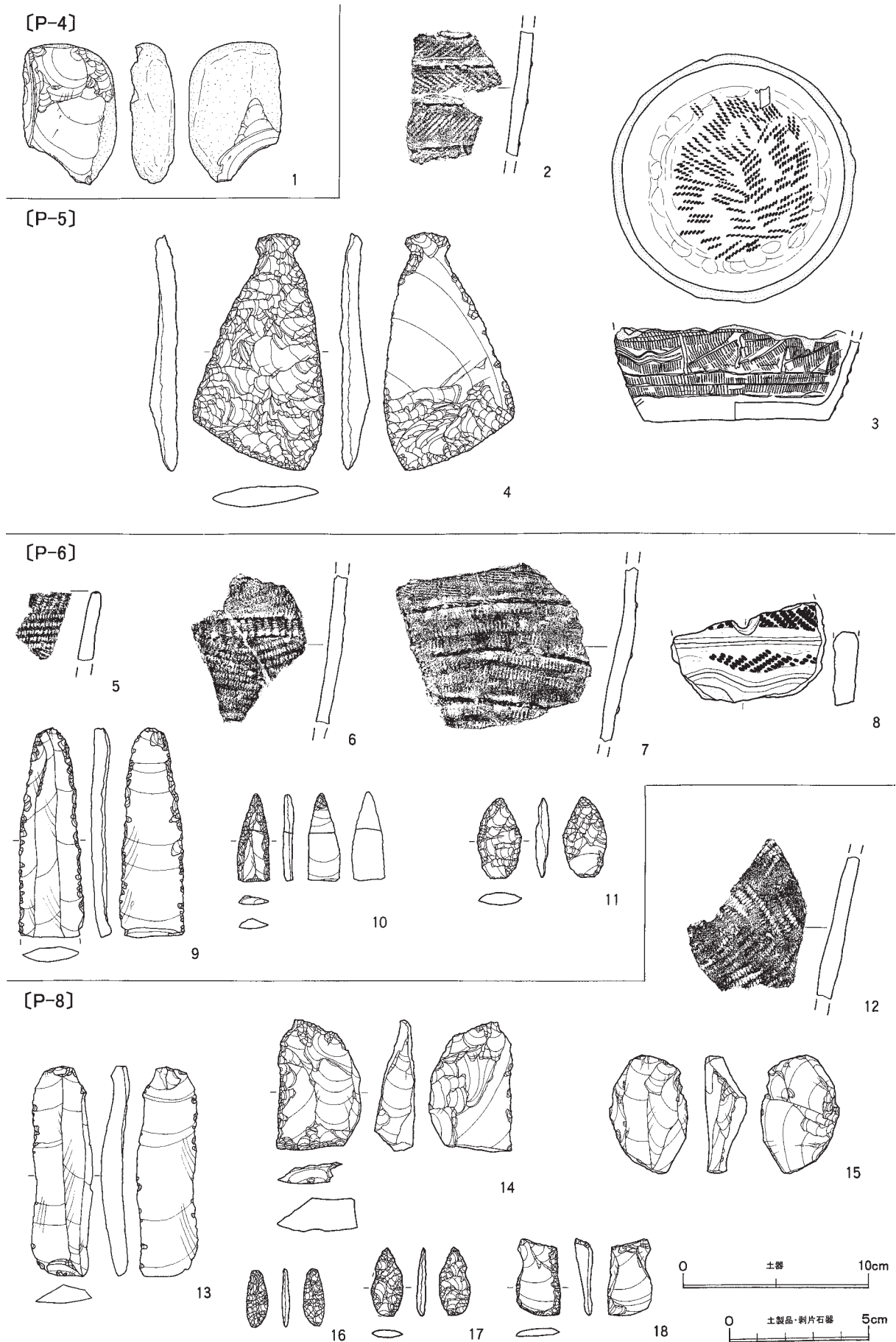


P-88

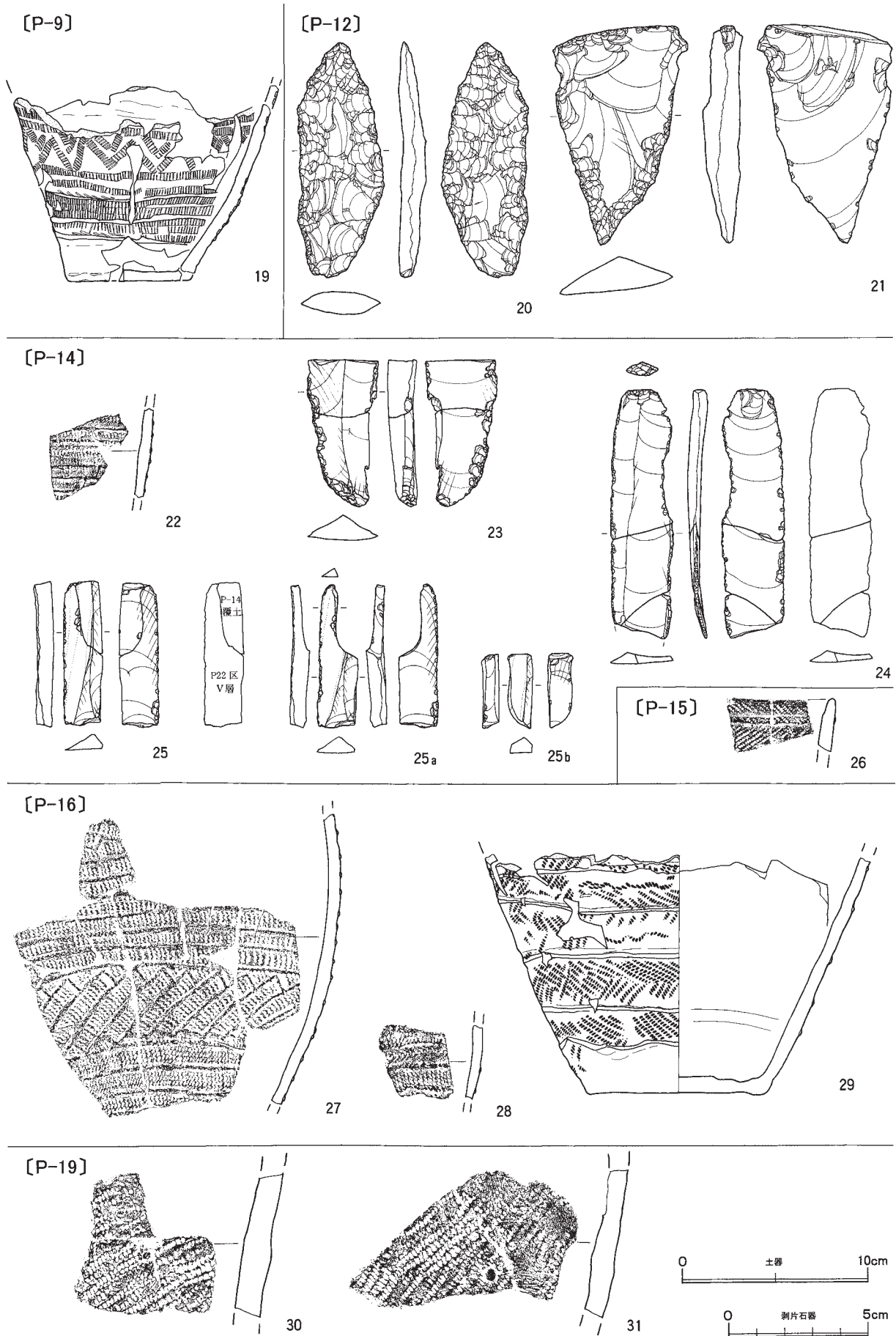
- 1 黒褐色(10YR 2/2) [IV>VI] しまり弱、やや均質、ローム粒含む。
- 2 暗褐色(10YR 3/3) [V+VI] しまりやや弱、不均質、ローム粒やや多量含む。



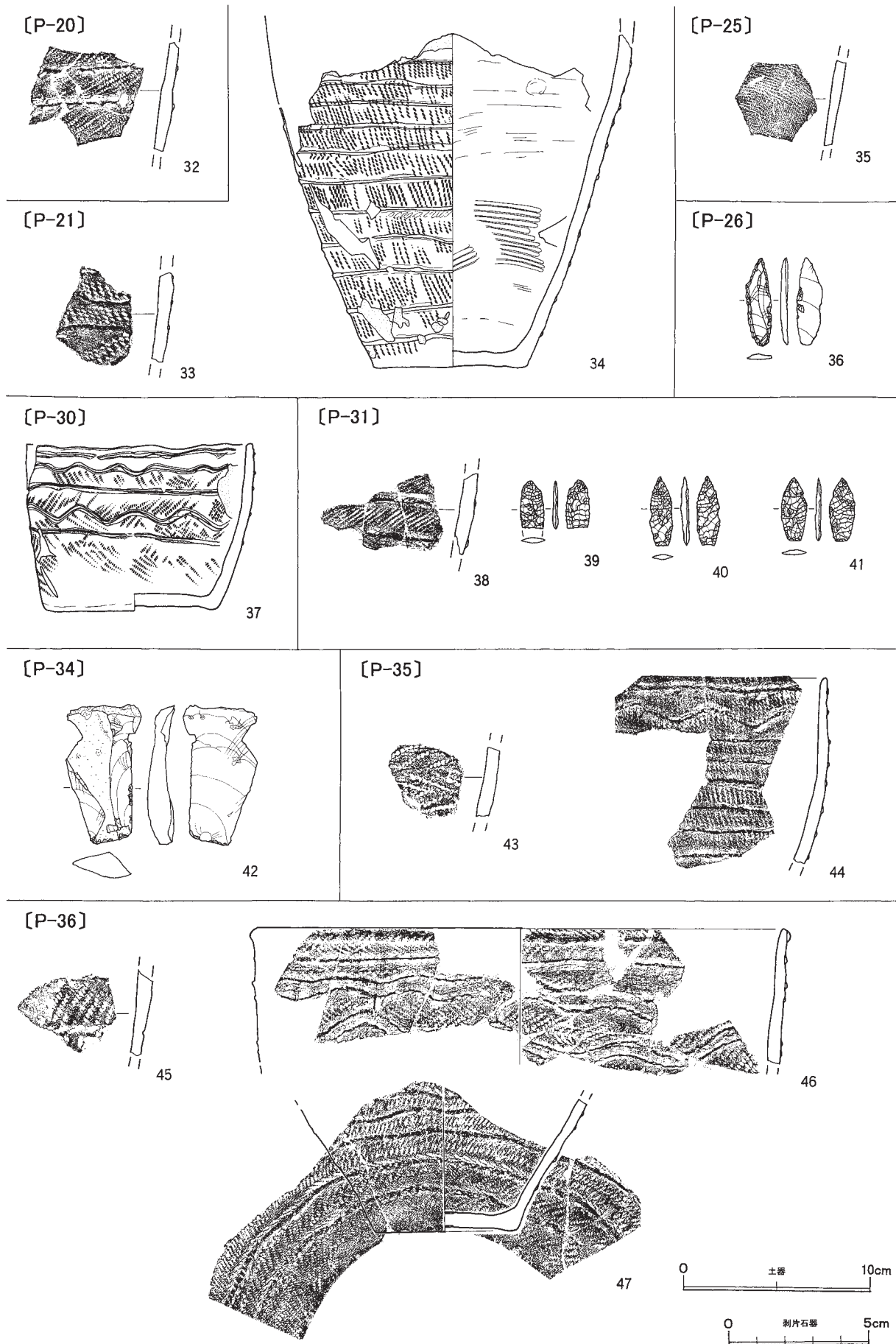
図III-139 土坑(23) P-84・86~88



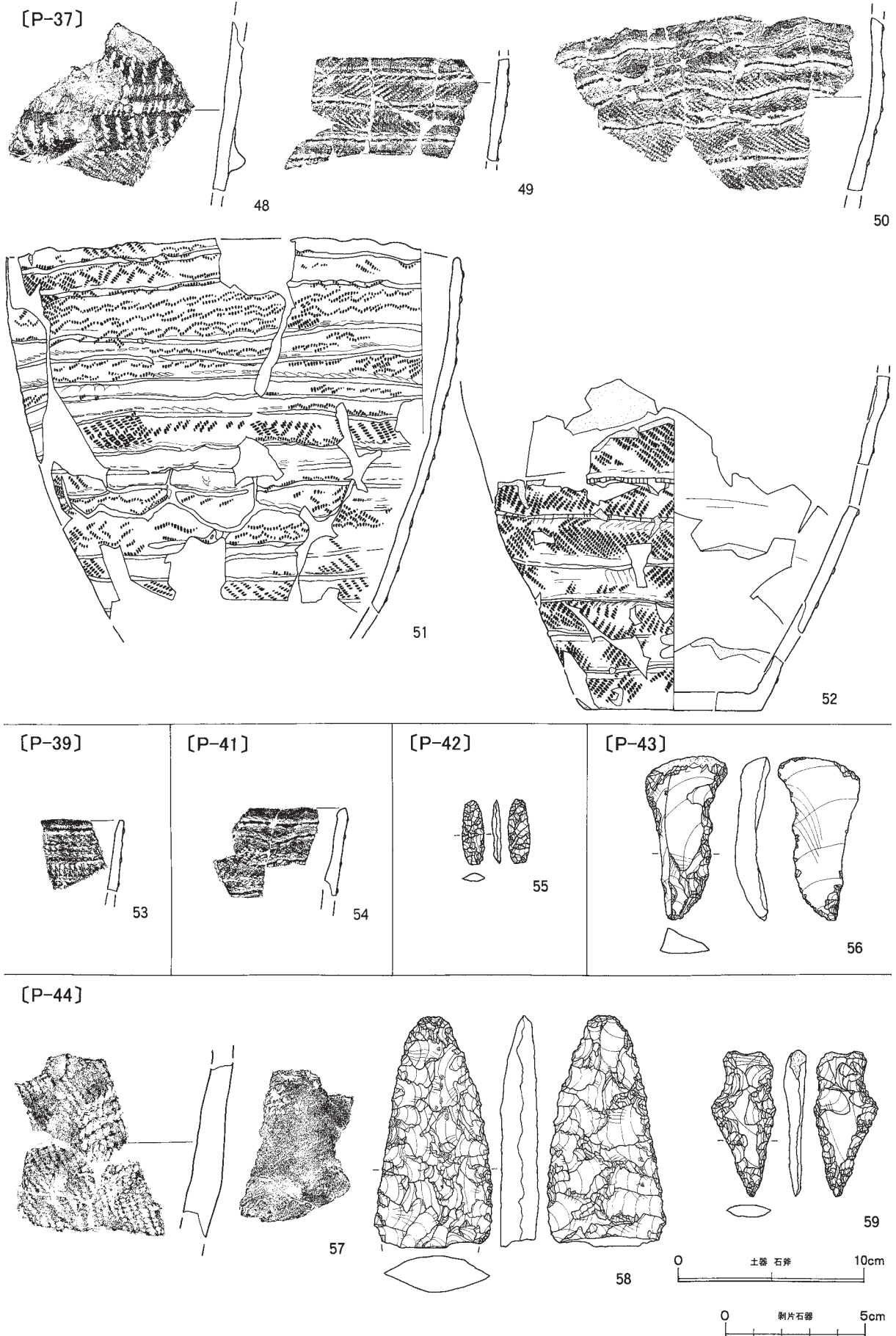
図Ⅲ-140 土坑出土の遺物(1)



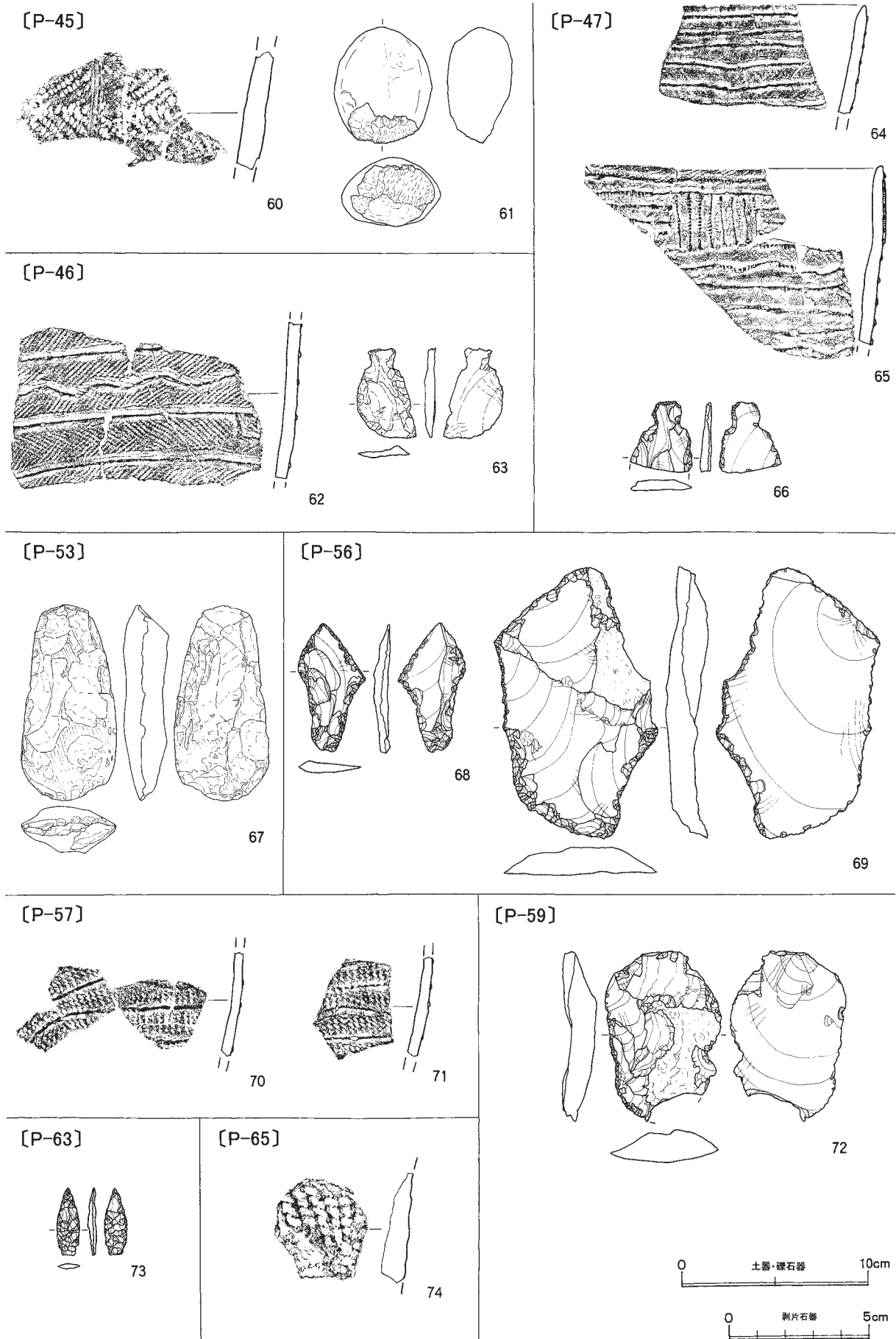
図Ⅲ-141 土坑出土の遺物(2)



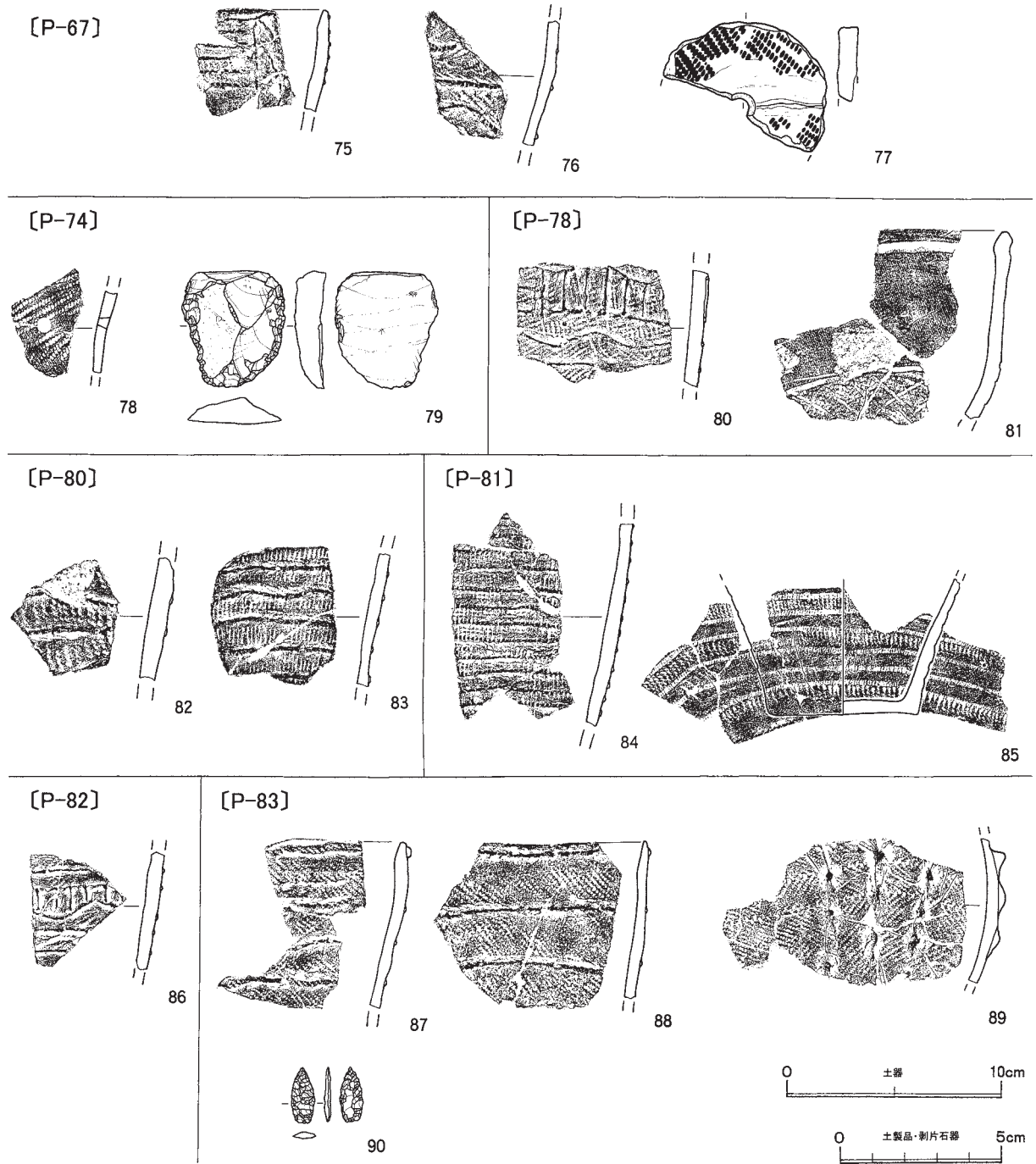
図Ⅲ-142 土坑出土の遺物(3)



図Ⅲ-143 土坑出土の遺物(4)



図Ⅲ-144 土坑出土の遺物(5)



図III-145 土坑出土の遺物(6)

4. 柱穴状小ピット

SP-1〔図Ⅲ-146、図版58〕

P-42・43付近、O20区のVI層で検出した。検出面から15cmほどの深さの小ピットであるが、覆土に黒曜石の微細な剥片が密に詰められていた。その数は3,980点にのぼる。

SP-2〔図Ⅲ-146、図版58〕

L19区の包含層調査中、VI層で単独検出した。比較的形状が整っている。

SP-3～9〔図Ⅲ-126、図版50・58〕

P-35の西側に隣接並行して検出した。径は15cm前後、検出面からの深さは10～20cm程度である。北寄りのSP-3～5は間隔がややあり、南寄りのSP-6～9は30～40cmの間隔で並ぶ。下端は、SP-3・4が平底、SP-5がやや尖り、SP-6～9が丸底である。P-35～37・85と関連があるものと思われる。

SP-10〔図Ⅲ-146、図版58〕

H-30に隣接して検出した。検出面からの深さは22cmほどあり、形状が柱穴状に整っている。H-30に関連する可能性がある。

SP-11～14〔図Ⅲ-146、図版58〕

L17杭付近のVI層で4基の小ピットを検出した。SP-11は比較的深く、覆土からI群b-1類土器が1点出土した。

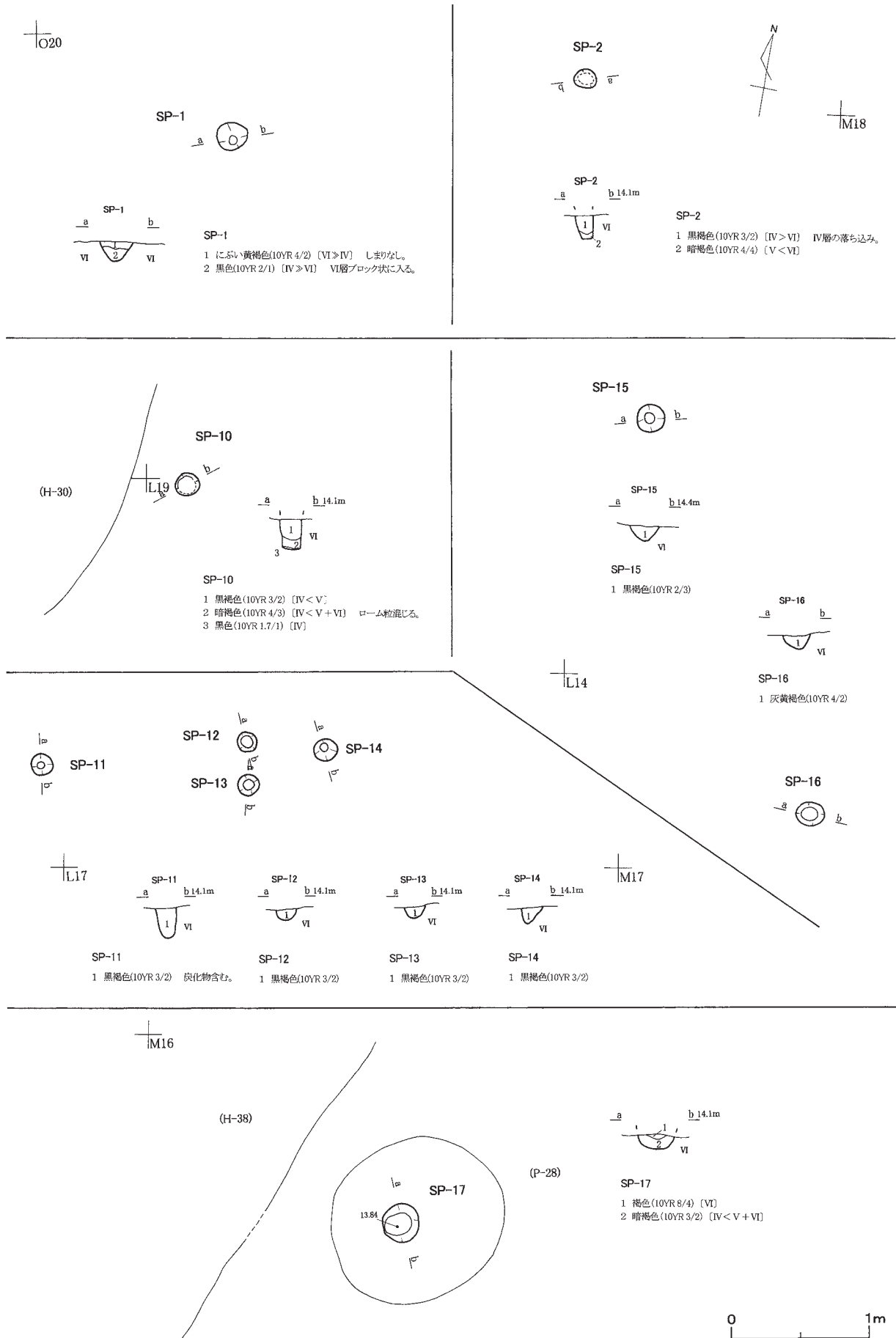
SP-15～16〔図Ⅲ-146、図版58〕

L14杭付近のVI層で2基の小ピットを検出した。下端は丸みをもつ。

SP-17〔図Ⅲ-146、図版58〕

P-28を完掘後、数cm掘り下げたところで検出した。下端は丸みをもち、覆土はやや赤みのある褐色土である。

(阿部)



図III-146 SP-1・2・10~17

5. 焼土

F-1〔図Ⅲ-147、図版59〕

位置：K21区

規模：0.73×0.56／0.13m

調査・特徴：IV層中で検出した。平面形は楕円形で、断面はやや波状である。赤褐色を呈し、周縁部は暗色に漸遷する。

遺物出土状況：被熱層から剥片11点が出土した。また水洗選別により微細剥片52点、炭化物・骨片少量などを検出した。骨片にはイトヨなどの魚骨が含まれている。

時期：検出層位から、縄文時代中期～後期と思われる。

F-2〔図Ⅲ-147、図版59〕

位置：K21区

規模：0.78×0.67／0.12m

調査・特徴：IV層中で検出した。平面形はおおむね円形で、断面はやや波状である。比較的均質に赤褐色を呈する。

遺物出土状況：被熱層からIV群b類土器小片2点・剥片類10点が出土した。また水洗選別により土器小片29点・微細剥片137点、炭化物・骨片などを検出した。骨片は魚骨が多数あり、イトヨの骨盤骨なども含まれている。

時期：検出層位から、縄文時代中期～後期と思われる。

F-3〔図Ⅲ-147〕

位置：M22区

規模：0.67×0.26／0.04m

調査・特徴：表土除去後の表面清掃時にII層中で検出した。平面形は不整楕円形で、断面は皿状である。被熱層はH-9の上位の黒色土層で、Ko-c₂?直下に近く、III層(Ta-c)上位にあたる。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片18点、炭化物・骨片を検出した。骨片にはサケ科の椎骨などが多数含まれ、鳥類や獣骨片も検出された。

時期：検出層位から、樽前c火山灰降下後、駒ヶ岳c₂火山灰降下以前の縄文時代晩期～アイヌ文化期に相当する。

F-4〔図Ⅲ-147、図版59〕

位置：O22区

規模：0.74×0.43／0.06m

調査・特徴：II層中で検出した。平面形は不整楕円形で、断面はやや波状である。褐色を呈し、微細な焼骨片が多数含まれている。

遺物出土状況：水洗選別により、微細剥片18点、炭化物・骨片などを検出した。骨片には魚骨が多数含まれ、マイマイ類や獣骨片も検出された。

時期：検出層位から、樽前c火山灰降下後、駒ヶ岳c₂火山灰降下以前の縄文時代晩期～アイヌ文化期に相当する。

(鈴木)

F-5〔図Ⅲ-147〕

位置：K22区

規模：0.46×0.33／0.04m

調査・特徴：盛土遺構の黄褐色土層で検出した。平面形は楕円形で、断面はやや椀状に落ち込んでいる。被熱層は赤褐色だが、やや黒色土が混じる。

遺物出土状況：水洗選別により土器小片3点・微細剥片13点、炭化物・魚骨片などを検出した。

時期：盛土遺構に伴うものと考えられ、縄文時代中期末ごろと思われる。

F-6 [図Ⅲ-147・152、図版59]

位置：L22区

規模：0.68×0.66/0.16m

調査・特徴：盛土遺構M-1の縁辺部で検出した。平面形は楕円形で、断面はやや波状である。検出面では、中央部が黒色土で周縁部に焼土混じり土がみられた。半截したところ、赤褐色の焼土層を含む土坑であることがわかった。被熱層は土坑の中位にあり、下位は暗褐色の土壌が混じる。

遺物出土状況：土器11点・剥片9点が出土した。土器はI群b-4類8点・Ⅲ群b類~IV群a類1点・IV群b類2点である。また水洗選別により土器小片10点・微細剥片36点、多量の炭化物などを検出した。クルミ片が含まれている。

掲載遺物：1は鯨潤式の胴部。くびれ部に刻み列がある。

時期：盛土遺構が形成された縄文時代中期末以降である。

F-7 [図Ⅲ-147・152、図版59]

位置：K22区

規模：2.26×1.64/0.26m

調査・特徴：盛土遺構の黄褐色土層で検出した大型の焼土。平面形は不整形で、被熱層はおおむね6cm前後の厚さで断面が皿状を呈するが、部分的に落ち込んでいる。明赤褐色で、強く被熱している。周縁部は暗色に漸遷する。

遺物出土状況：被熱層から土器15点・石器等14点が出土した。土器はI群b-1類12点・I群b-4類2点・IV群b類1点で、石器等は彫器1点・剥片13点である。また水洗選別により土器小片11点・微細剥片421点・礫14点、多量の炭化物を検出した。

掲載遺物：2は東釧路Ⅱ式の胴部片。細かい撚りの縄文が施されている。3は底部。底面の内側に細かい撚りの縄文が施されている。

時期：盛土遺構に伴うものと考えられ、縄文時代中期末ごろと思われる。

F-8 [図Ⅲ-147]

位置：K22区

規模：(0.27)×(0.24)/0.11m

調査・特徴：盛土遺構の調査中、断面に暗赤褐色層を検出した。被熱層はM-1の上位のIV層である。平面形はおおむね楕円形で、断面は皿状である。やや暗色周縁部に焼土混じり土がみられた。半截したところ、土坑に赤褐色の焼土層が含まれることがわかった。被熱層は土坑の中位にあり、下位は暗褐色の土壌が混じる。

時期：盛土遺構形成後、縄文時代中期末~後期初頭と思われる。

F-9 [図Ⅲ-148]

位置：L21区

規模：0.40×0.27/0.12m

調査・特徴：包含層調査中、V層上面で検出した。平面形は楕円形で、断面は椀状である。強く被熱しており、炭化物を含む。

遺物出土状況：被熱層から小礫2点が出土した。また水洗選別により土器小片4点・微細剥片29点、炭化物などを検出した。

時期：検出層位から、縄文時代早期とみられる。

F-10〔図Ⅲ-148〕

位置：K21区

規模：0.21×0.18/0.03m

調査・特徴：包含層調査中、V層上面で検出した、円形の小型焼土。炭化物を少量含む。

時期：検出層位から、縄文時代早期とみられる。

F-11〔図Ⅲ-148〕

位置：M21・22区

規模：0.61×0.41/0.06m

調査・特徴：H-9付近の包含層調査中に検出した。平面形は不整楕円形で、断面はレンズ状である。

時期：H-9に関連する可能性があり、縄文時代中期～後期と思われる。

(阿部)

F-12〔図Ⅲ-148、図版59〕

位置：M・N24区

規模：0.53×0.51/0.16m

調査・特徴：包含層調査中、VI層上面で検出した。平面形はほぼ円形で、断面は碗状である。強く被熱しており、層厚が16cmに達する。

遺物出土状況：被熱層からI群a類土器2点、削片1点が出土した。また水洗選別により、土器小片10点・微細剥片120点、炭化物・骨片などを検出した。骨片にはサケ科の椎骨などが多数観察される。

時期：検出層位から、縄文時代早期とみられる。

(鈴木)

F-13〔図Ⅲ-148〕

位置：M22区

規模：0.45×0.44/0.10m

調査・特徴：H-9の調査中に覆土上で検出した、小型で円形の焼土。強く被熱しており、層厚が10cmに達する。

遺物出土状況：被熱層からⅢ群b類～Ⅳ群a類の土器小片1点が出土した。また水洗選別により、微細剥片1点、炭化物・魚骨片などを検出した。

時期：H-9に関連し、縄文時代中期～後期と思われる。

(阿部)

F-14〔図Ⅲ-148〕

位置：J26区

規模：(0.26)×(0.20)/0.05m

調査・特徴：包含層調査中、VI層上面で検出した。西半が調査区のクリアランス部のため不明であるが、平面形はほぼ楕円形で、断面はレンズ状とみられる。

遺物出土状況：水洗選別により、土器小片4点・微細剥片9点、炭化物を検出した。

時期：検出層位から、縄文時代早期とみられる。

(鈴木)

F-15〔図Ⅲ-149、図版59〕

位置：N19区

規模：0.45×0.40/0.08m

調査・特徴：包含層調査中、VI層上面で検出した。平面形はほぼ円形で、断面は碗状に窪んでいる。検出面は中央部付近が暗色で炭化物や黒色土が混じっており、焼成面が残存しているものと思われる。被熱層は中央部が赤褐色で、周囲へ漸遷する。

遺物出土状況：水洗選別により、微細剥片12点・骨片少量を検出した。

時期：検出層位から、縄文時代早期とみられる。

(阿部)

F-16〔図Ⅲ-149、図版59〕

位置：L11区

規模：0.43×0.36/0.11m

調査・特徴：H-17のトレンチ調査中に、覆土の上面で検出した。

遺物出土状況：黒曜石の剥片1点のほか、炭化物を少量含んでいる。

時期：検出状況等から判断すると、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期かそれ以降と考えられる。

(笠原)

F-17〔図Ⅲ-149、図版61〕

位置：N20・21区

規模：0.56×0.48/0.09m

調査・特徴：P-44の調査中に検出した。平面形はおおむね楕円形で、断面はP-44の傾斜に沿っている。坑底のVI層が赤褐色に強く被熱しており、上面はやや暗色である。東側はP-43に切られている。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片4点、炭化物・骨片などを検出した。骨片にはサケ科の椎骨が20点程度含まれている。

時期：P-44に伴うものとみられ、縄文時代中期末～後期前葉と思われる。

(阿部)

F-18〔図Ⅲ-149、図版61〕

位置：M9区

規模：1.08×0.68/0.12m

調査・特徴：V層上面で検出した。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片2点・炭化物を検出した。

時期：検出状況等から判断すると、縄文時代早期と考えられる。

(笠原)

F-19〔図Ⅲ-149、図版60〕

位置：O12区

規模：2.71×1.26/0.22m

調査・特徴：H-18・21覆土上面で確認された。

遺物出土状況：上面から両面調整石器1点が出土した。また水洗選別により微細剥片4点・多量の炭化物を検出した。

時期：H-18覆土上面からV群土器が多数出土していることから、縄文時代晩期の可能性が高い。

F-20〔図Ⅲ-149、図版60〕

位置：O12・13区

規模：1.37×0.95/0.10m

調査・特徴：H-18覆土上面で確認された。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片4点・炭化物を検出した。

時期：H-18覆土上面からV群土器が多数出土していることから判断して、縄文時代晩期の可能性が高い。

(佐藤)

F-21〔図Ⅲ-150、図版60〕

位置：L12区

規模：(0.32)×0.40/0.10m

調査・特徴：F-21～25は、平地住居跡H-16の黄褐色土層の掘り下げ中に検出した。F-21は、平面形が円形で断面がレンズ状であり、被熱層はH-16のHM3層上面である。赤褐色を呈し強く被熱している。南東側は攪乱により不明である。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片31点・少量の炭化物を検出した。

時期：H-16に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

F-22〔図Ⅲ-150、図版60〕

位置：L12区

規模：0.80×0.53/0.18m

調査・特徴：平地住居跡H-16の黄褐色土層の掘り下げ中に検出した。平面形はおおむね楕円形で、断面はレンズ状である。上面はやや暗色で炭化材を含む。被熱層はH-16のHM3層から包含層のIV層に達し、赤褐色を呈し強く被熱している。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片67点・少量の炭化物を検出した。

時期：H-16に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

F-23〔図Ⅲ-150、図版60〕

位置：M12区

規模：0.53×0.26/0.09m

調査・特徴：平地住居跡H-16の黄褐色土層の掘り下げ中に検出した。平面形は不整楕円形で、H-16の外縁に向かって傾斜している。被熱層はH-16のHM3層中で、赤褐色を呈し強く被熱している。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片4点・少量の炭化物を検出した。

時期：H-16に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

F-24〔図Ⅲ-150〕

位置：M12区

規模：0.42×0.27/0.08m

調査・特徴：平地住居跡H-16の黄褐色土層の掘り下げ中に検出した。平面形は不整楕円形で、断面はレンズ状である。被熱層はH-16のHM2～3層で、明赤褐色を呈し強く被熱している。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片2点などを検出した。

時期：H-16に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

F-25〔図Ⅲ-150〕

位置：M12区

規模：0.64×0.53/0.08m

調査・特徴：平地住居跡H-16の黄褐色土層の掘り下げ中に検出した。平面形はおおむね楕円形で、断面はレンズ状である。被熱層はH-16のHM3層下位から包含層のIV層に達し、にぶい赤褐色を呈している。

遺物出土状況：水洗選別により、土器小片2点・微細剥片27点などを検出した。

時期：H-16に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

F-26〔図Ⅲ-150、図版61〕

位置：M12区

規模：0.62×0.60/0.10m

調査・特徴：H-16直下のIV層上面で検出した。平面形はほぼ円形で、断面はレンズ状である。赤褐色を呈し強く被熱している。

遺物出土状況：水洗選別により、土器小片2点・微細剥片11点などを検出した。

時期：H-16の構築以前、縄文時代中期とみられる。

F-27〔図Ⅲ-151、図版61〕

位置：N17区

規模：(0.27)×0.36/0.06m

調査・特徴：H-35の調査中に覆土上位で検出した、小型の焼土。

時期：H-35構築以降、縄文時代後期と思われる。

F-28〔図Ⅲ-151・152、図版61〕

位置：L19区

規模：1.00×0.62/0.12m

調査・特徴：包含層調査中、IV層中で検出した。北側は風倒木により一部不明である。平面形はおおむね楕円形、断面は皿状である。被熱層は12cmと厚く、ほぼ均質な赤褐色を呈し、強く被熱している。

遺物出土状況：被熱層からI群b-4類土器4点が出土した。また水洗選別により、土器小片26点・微細剥片29点・クルミ片などを検出した。

掲載遺物：4は中茶路式の胴部片。羽状縄文の地文に細貼付帯による杵文が設けられている。

時期：形状や出土遺物から、縄文時代早期後葉とみられる。

F-29〔図Ⅲ-151、図版61〕

位置：K16区

規模：0.45×0.30/0.04m

調査・特徴：H-14の縁辺部を調査中に検出した、小型の焼土。

時期：H-14に関連し、縄文時代後期初頭～前葉と思われる。

F-30〔図Ⅲ-151、図版61〕

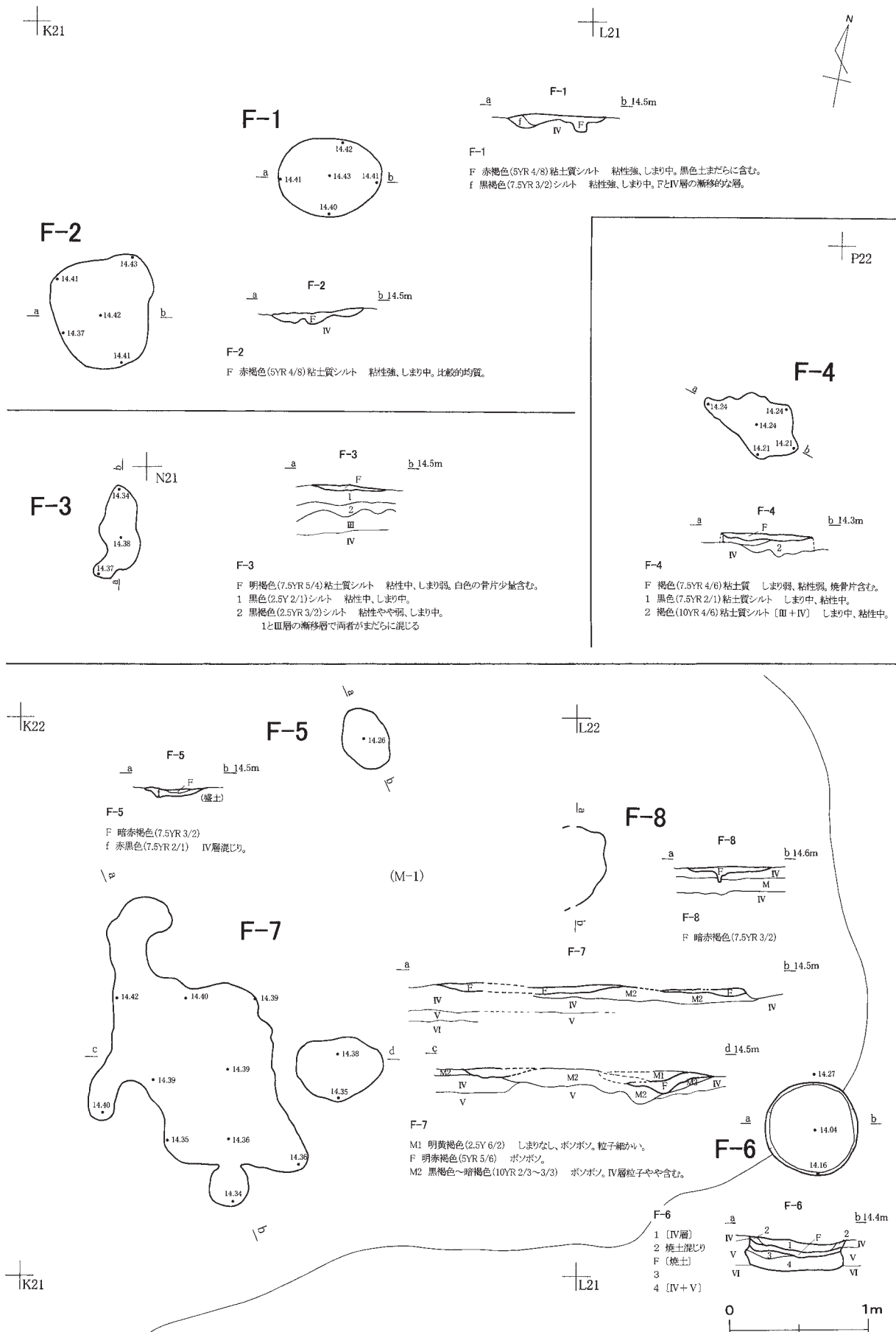
位置：N17区

規模：0.76×0.56/0.08m

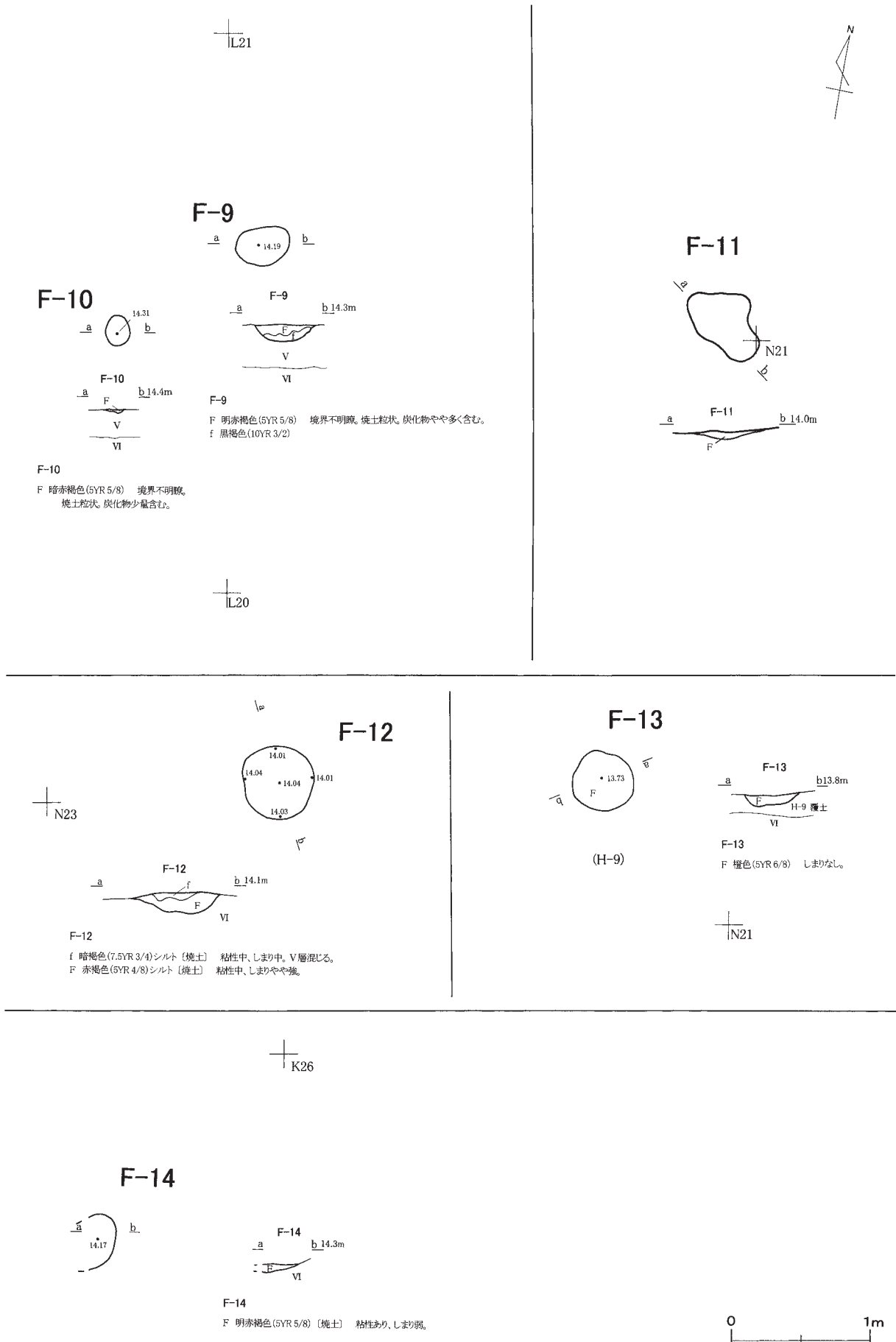
調査・特徴：H-35の調査中に検出した。H-35の覆土の一部にさしかかっている。平面形は不整楕円形、断面はやや波状を呈する。

遺物出土状況：被熱層から土器等24点・剥片4点が出土した。土器はI群a類11点・I群b-4類5点などで、ほかに焼成粘土塊1点が出土している。

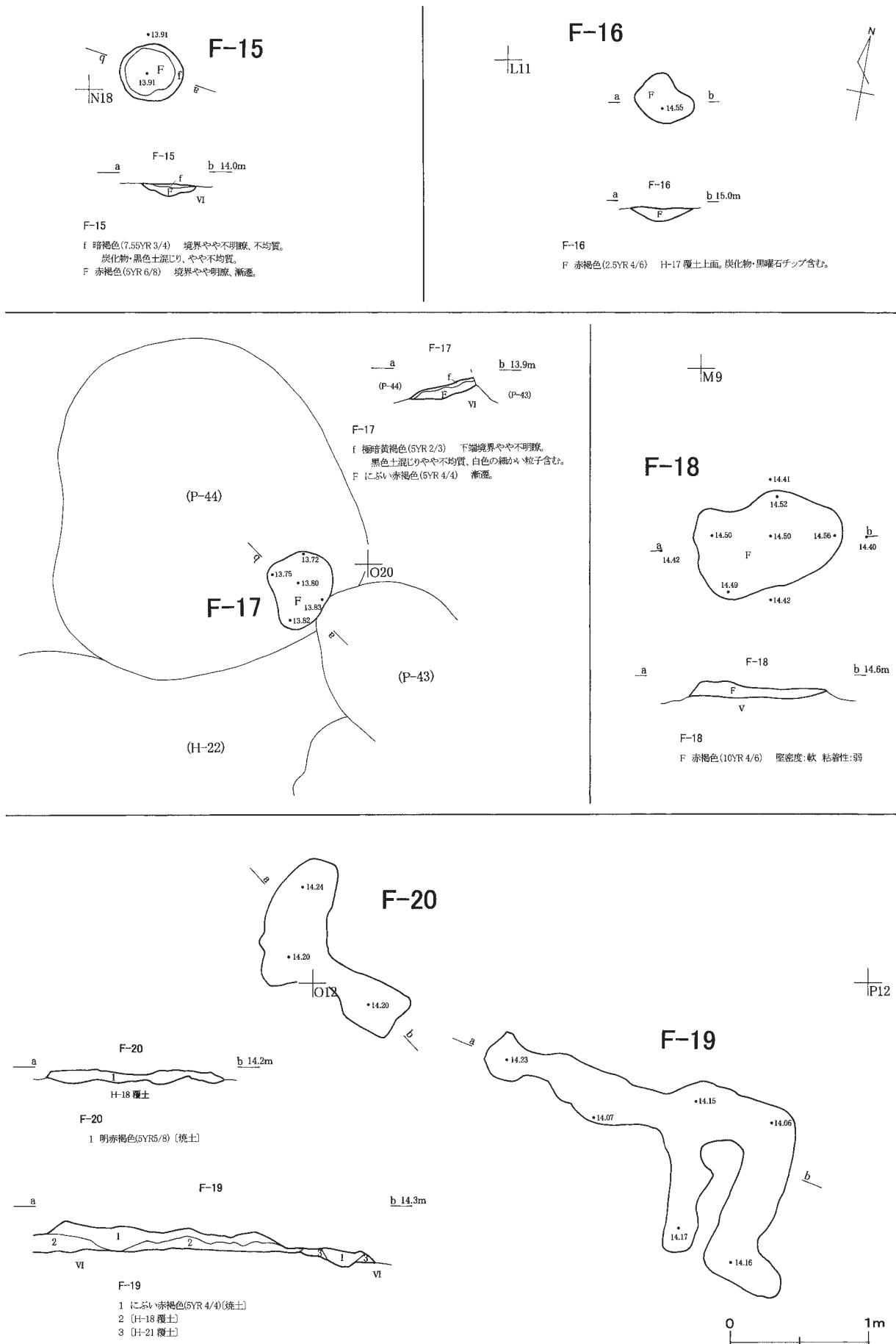
時期：H-35構築以降、縄文時代後期と思われる。



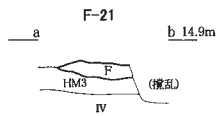
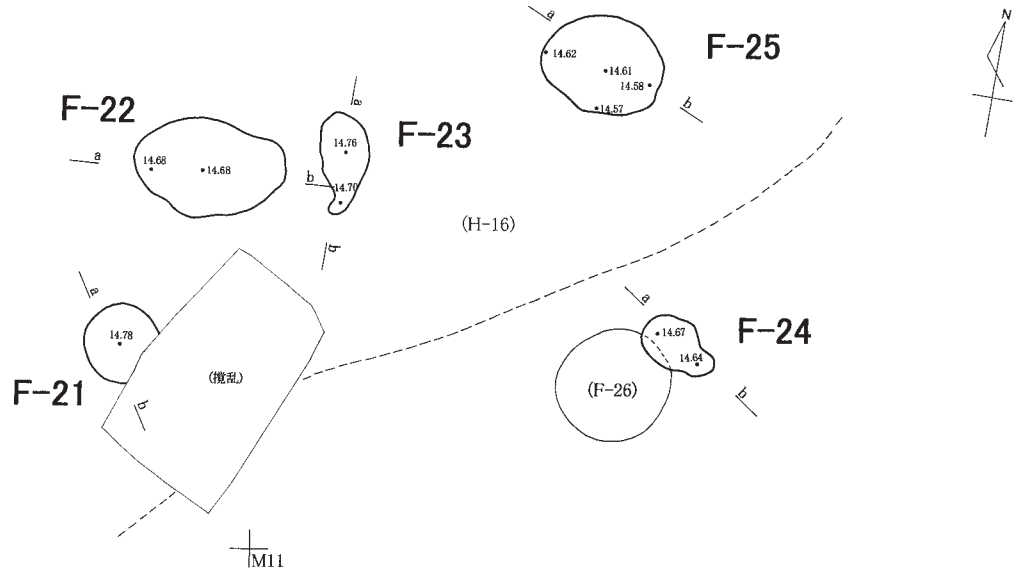
図Ⅲ-147 焼土(1) F-1~8



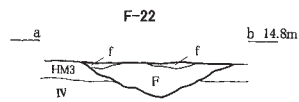
図III-148 焼土(2) F-9~14



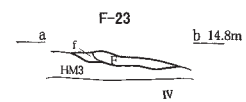
図Ⅲ-149 焼土(3) F-15~20



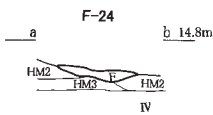
F-21
 F 赤褐色(5YR 5/8) 境界やや明瞭、漸遷。
 HM3 暗褐色(7.5YR 3/3~5/4) しまりやや弱。
 ローム・黒土混じり、やや不均質。



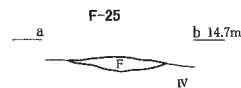
F-22
 f 暗褐色(7.5YR 3/3) やや均質的。
 炭化物少量含む。
 F 赤褐色~明赤褐色(5YR 4/8~5/8)
 境界やや明瞭、漸遷。黒色土混じりやや不均質。
 しまり中、やや硬化、サラサラ(中央部)。



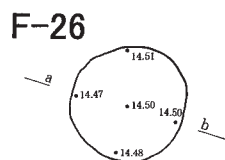
F-23
 f 暗褐色(7.5YR 3/4) やや均質的。炭化材含む。
 F 赤褐色(5YR 4/8) やや不均質。境界やや不明瞭。
 ブロック状の焼土。炭化材少量含む。



F-24
 F 明赤褐色(5YR 5/6) 境界やや不明瞭。
 黒色土混じり不均質。ブロック状の焼土。



F-25
 F に近い赤褐色(5YR 4/4) 境界やや不明瞭、やや均質的。



F-26
 F 赤褐色(5YR 4/8) 境界やや明瞭、やや均質的。
 黒色土・根混じる。

M-11

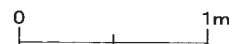
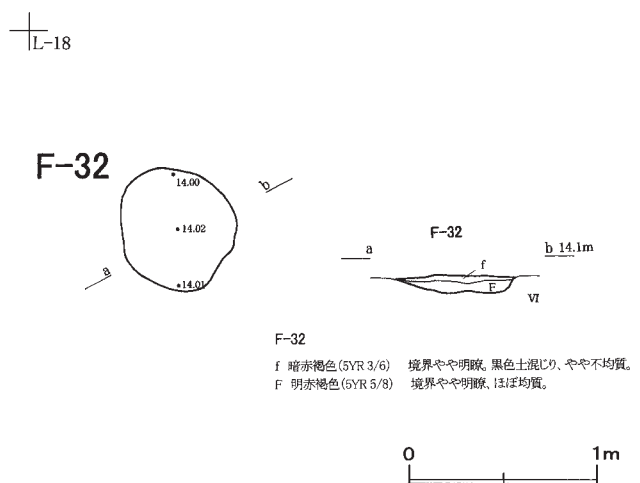
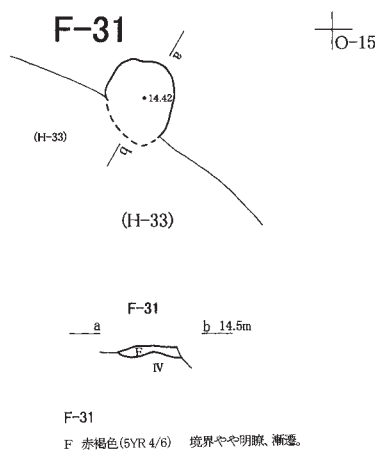
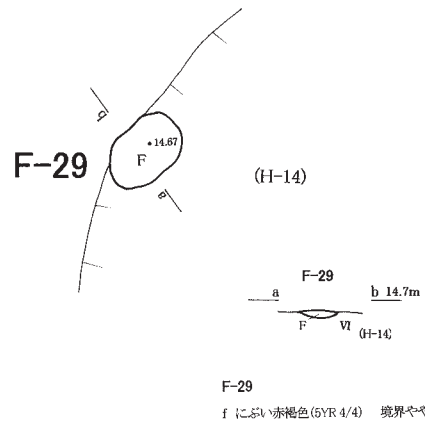
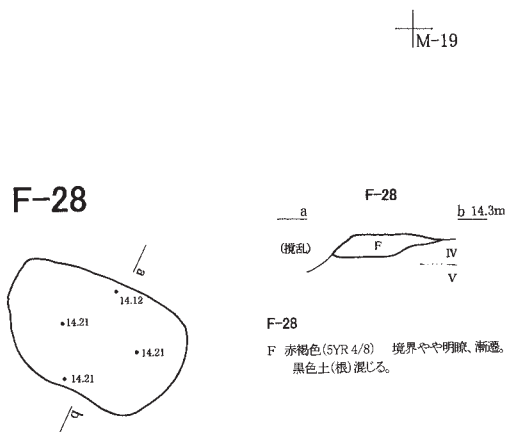
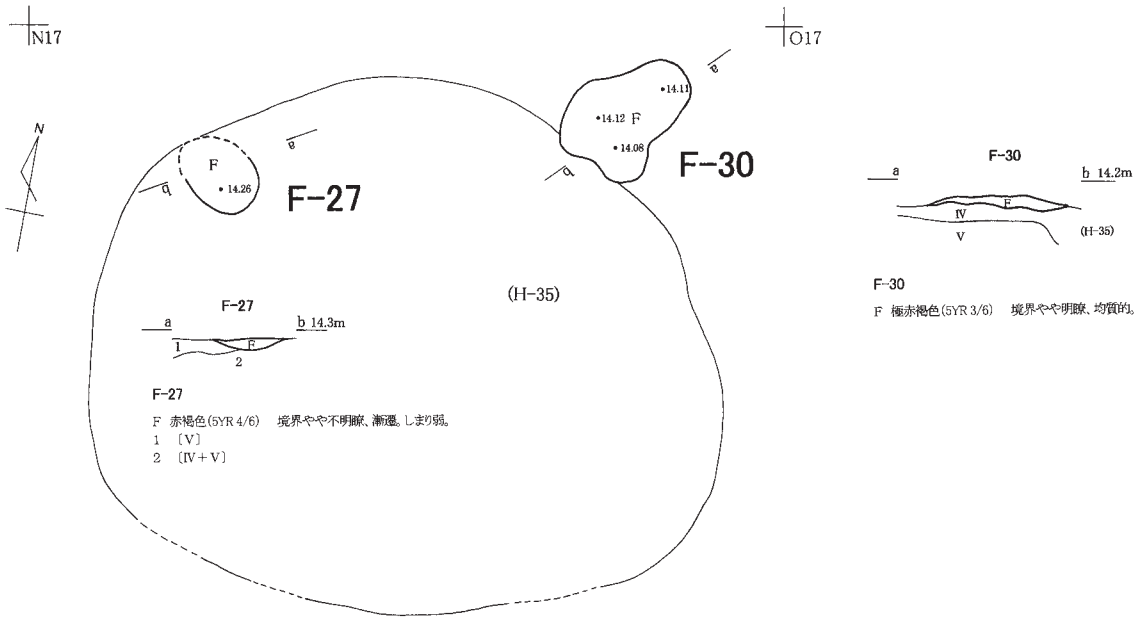
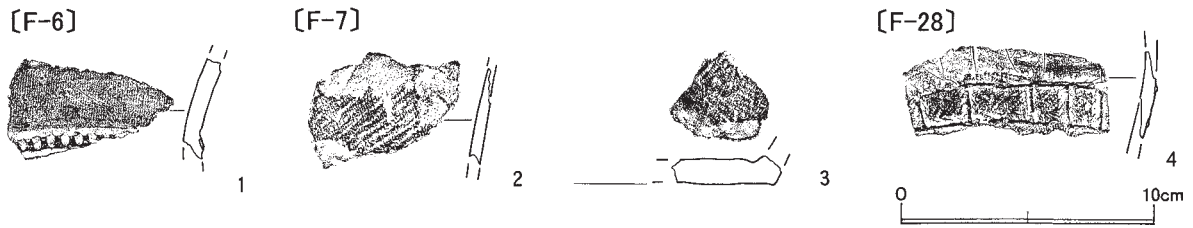


図 III - 150 焼土(4) F - 21 ~ 26



図Ⅲ-151 焼土(5) F-27~32



図Ⅲ-152 焼土出土の遺物

F-31 [図Ⅲ-151]

位置：N15区

規模：0.32×0.36/0.07m

調査・特徴：H-33の調査中に検出した、小型の焼土。H-33に切られている。

時期：H-33の構築時の縄文時代中期末～後期前葉以前である。

F-32 [図Ⅲ-151、図版61、口絵8]

位置：L18区

規模：0.68×0.62/0.09m

調査・特徴：包含層調査中、VI層上面で検出した。

遺物出土状況：水洗選別により微細剥片29点・少量の炭化物を検出した。

時期：検出層位から、縄文時代早期である。

(阿部)

6. フレイクチップ集中

FC-1〔図Ⅲ-153、図版62〕

位置：M5区

規模：1.27×0.88m

調査・特徴：IV層上面で検出した黒曜石製の剥片集中である。東側は調査区境界にかかるために全体のプランは不明である。総数は97点を数え、重量は約53gである。ツールや二次加工痕のあるものなどは見られない。

時期：検出状況等から判断すると縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期かそれ以降と考えられる。

(笠原)

FC-2〔図Ⅲ-153・154〕

位置：M16区

規模：0.90×0.74m

調査・特徴：H-26の上位で検出した。石器等2,166点が出土しており、すべて黒曜石製である。内訳は剥片2,142点のほか削器2点・石刃1点・石錐1点・つまみ付きナイフ2点・スクレイパー7点・両面調整石器1点などがある。

掲載遺物：1は小型の石錐。機能部には回転の際の擦痕が明瞭に残存する。2は両面調整石器。厚みがある。3はスクレイパー。円礫を分割した素材で原石面が残り、刃部に微細剥離がある。

時期：H-26に関連し、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期とみられる。

FC-3〔図Ⅲ-153・154〕

位置：M12区

規模：1.57×0.94m

調査・特徴：H-16完掘後、IV層を数cm掘り下げたところで検出した。比較的広範囲で、出土位置の上下差もある。石器等が5,527点出土しており、すべて黒曜石製である。内訳は剥片5,520点のほか彫器・石鏃・つまみ付きナイフ・スクレイパーがそれぞれ1点出土している。

掲載遺物：4は石鏃。小型の柳葉形で、中茶路式土器に伴う形状である。

時期：H-16の構築時の縄文時代中期末以前である。

FC-4〔図Ⅲ-153・154、図版62〕

位置：N17区

規模：0.44×0.22m

調査・特徴：包含層調査中、IV層で検出した。H-35の上位に位置するが、上下差があり直接の関連はないものと思われる。剥片383点のほか、石鏃1点、二次加工ある剥片が2点出土している。すべて黒曜石製である。

掲載遺物：5は石鏃。基部のえぐりは明瞭でない。

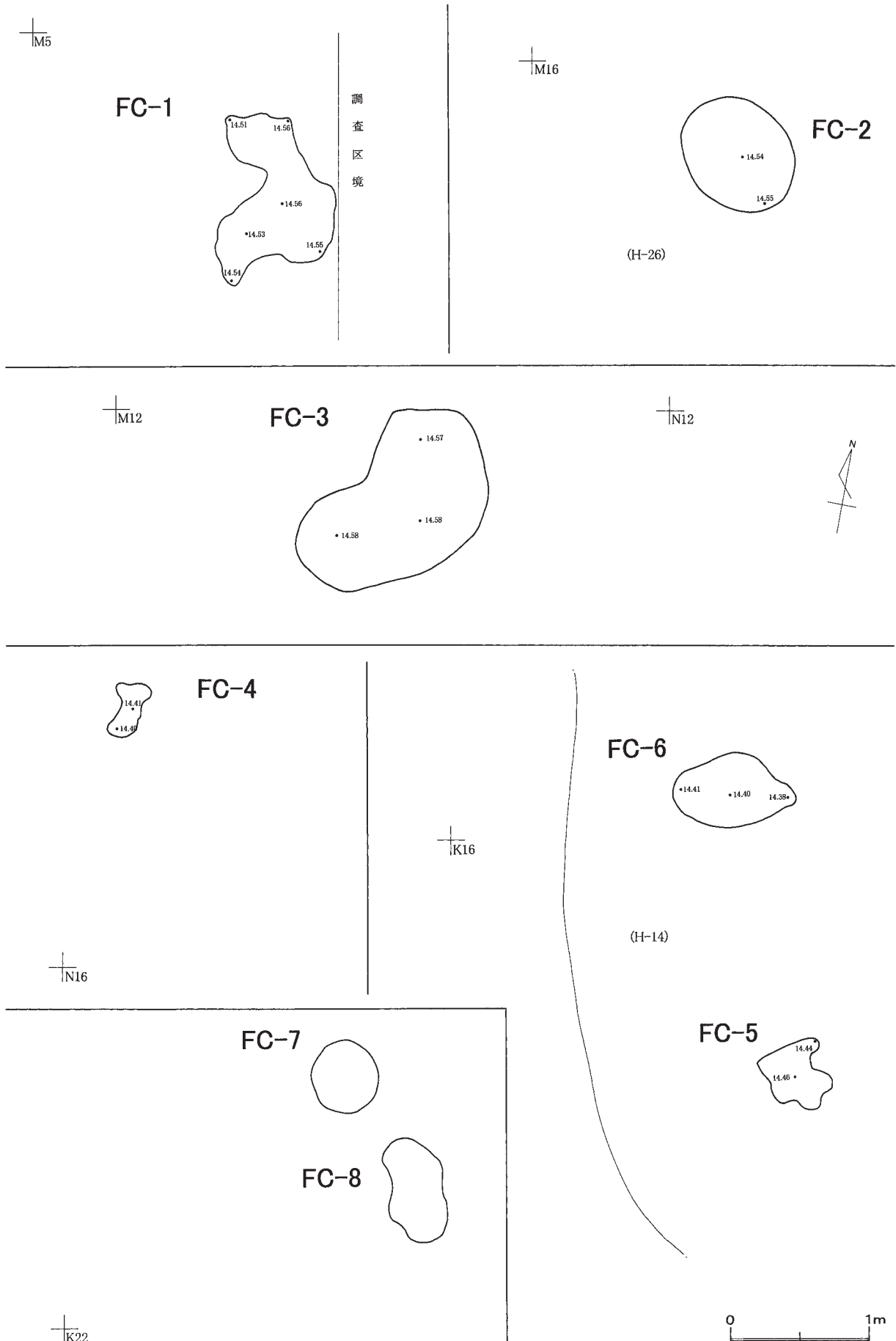
時期：縄文時代中期末以降である。

FC-5〔図Ⅲ-153・154、図版62〕

位置：K16区

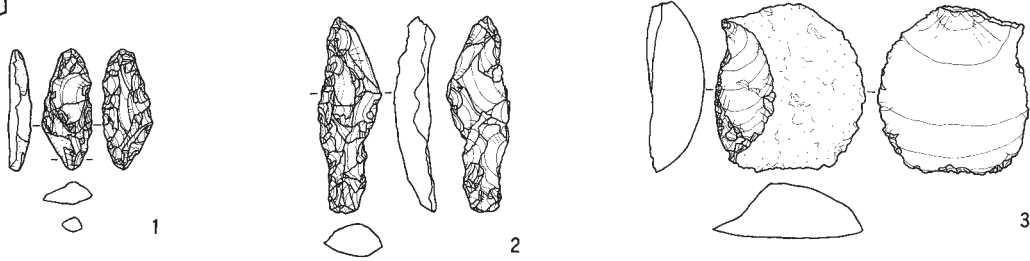
規模：0.60×0.46m

調査・特徴：H-14のHM層を調査中に検出した。集中域は比較的散漫である。石器等102点が出土しており、すべて黒曜石製である。内訳は剥片94点のほか石錐2点・スクレイパー1点・両面調整石器1点などがある。

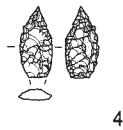


図Ⅲ-153 フレイクチップ集中FC-1～8

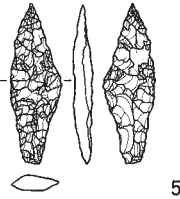
[FC-2]



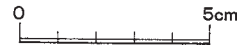
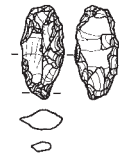
[FC-3]



[FC-4]



[FC-5]



図Ⅲ-154 フレイクチップ集中出土の遺物

掲載遺物：6は石錐。機能部はやや白く磨滅している。

時期：H-14に伴い、縄文時代後期初頭～前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式期とみられる。

FC-6〔図Ⅲ-153、図版62〕

位置：K17区

規模：0.90×0.54m

調査・特徴：H-14のHM層を調査中に検出した。集中域は比較的散漫である。剥片803点のほか、石鏃5点などがある。すべて黒曜石製である。

時期：H-14に伴い、縄文時代後期初頭～前葉の北筒Ⅱ～Ⅲ式期とみられる。

FC-7〔図Ⅲ-153〕

位置：L23区

規模：0.48×0.43m

調査・特徴：盛土遺構M-1の黄褐色土層を調査中に、M-1の周縁部で検出した。おおむね円形の範囲にまとまる。剥片1,169点が出土しており、すべて黒曜石製である。

時期：M-1に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期と思われる。

FC-8〔図Ⅲ-153〕

位置：L23区

規模：0.76×0.41m

調査・特徴：盛土遺構M-1の黄褐色土層を調査中に検出した。剥片293点が出土しており、すべて黒曜石製である。

時期：M-1に伴い、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式期と思われる。

(阿部)

7. 礫集中

S-1 [図Ⅲ-155、図版62]

位置：L5区 規模：0.76×0.50m

調査・特徴：I層を除去した後に、IV層上面で検出した。拳大の安山岩の礫が8個まとまっていた。このうち被熱しているものが5点含まれているが、周辺から焼土や炭化物は検出されていない。

時期：検出状況等から判断すると、縄文時代中期末～後期前葉の北筒式期かそれ以降と考えられる。
(笠原)

S-2 [図Ⅲ-155]

位置：K13区 規模：0.91×0.46m

調査・特徴：H-16の調査中、HM2層で検出した。安山岩の礫9点で、表面が赤褐色を呈し被熱しているものが多い。

時期：H-16に伴うことから、縄文時代中期末ころである。

S-3 [図Ⅲ-155、図版62]

位置：L19区 規模：0.38×0.33m

調査・特徴：包含層調査中、V層で検出した。10点ほどの礫を検出したところ、黒色土の落ち込みとともに、さらに礫が下位に続くことがわかった。半截し、土坑(P-66)に納められた礫群であることを確認した。安山岩の礫29点が出土した。大きさは比較的整っているが、角礫や円礫など形状はさまざまである。

時期：検出層位および土坑P-66の形状から、縄文時代早期後葉とみられる。

S-4 [図Ⅲ-155、図版62]

位置：K15区 規模：0.76×0.68m

調査・特徴：H-25の掘上土の調査後、包含層を掘り下げたところ、IV層下位で検出した。安山岩の礫16点がまとまっている。

時期：検出層位から、縄文時代中期以前である。

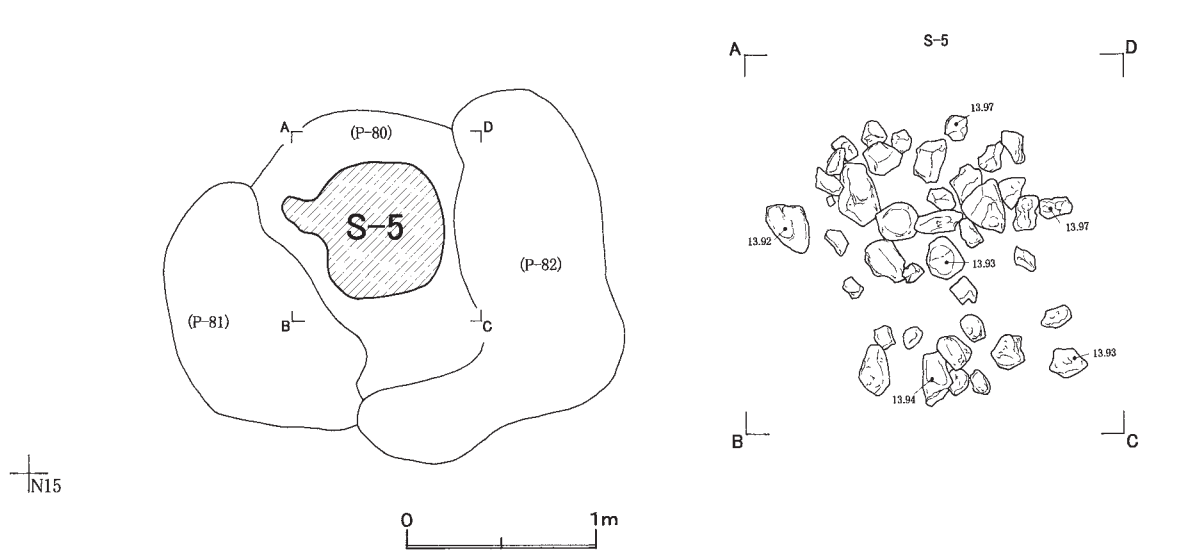
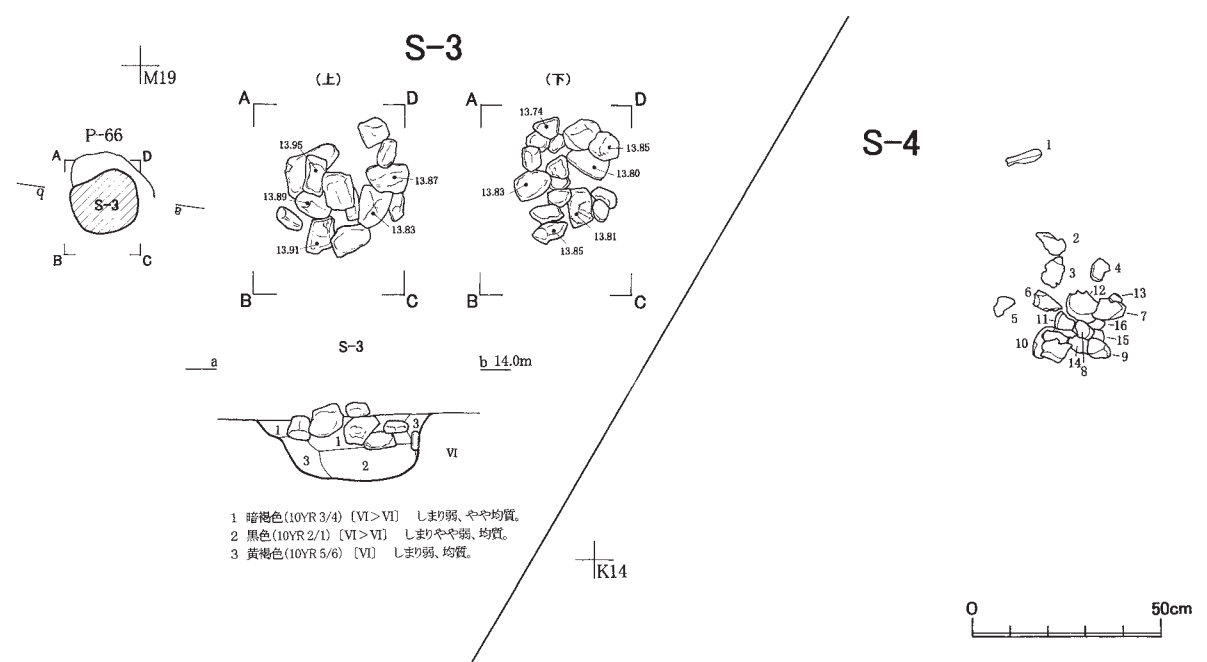
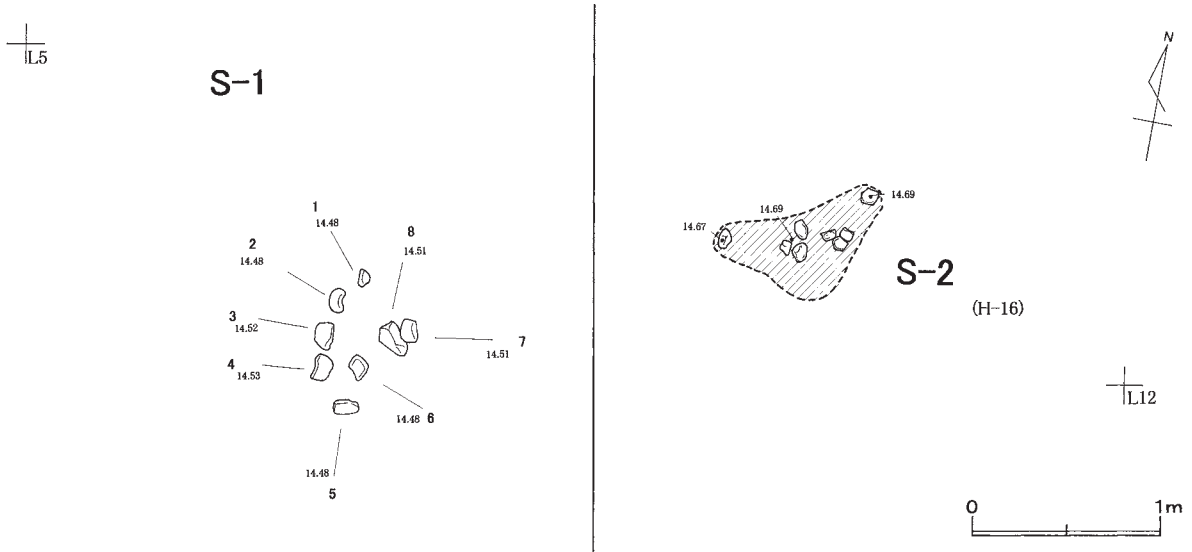
S-5 [図Ⅲ-155、図版62、口絵9]

位置：N16区 規模：0.90×0.76m

調査・特徴：H-34の床面調査において、土坑P-80を検出した。浅く掘り下げたところ、ほぼ同一面から礫がまとまって出土した。U字形を呈する土坑(P-81・82)の間に位置する。安山岩の礫が37点あり、個々の大きさに若干の差がある。

時期：土坑P-80に伴い、縄文時代早期後葉とみられる。

(阿部)



図Ⅲ-155 礫集中 S-1~5

8. フローテーション法等による微細遺物の調査 [表Ⅲ-1~3]

フローテーション作業

住居跡や土坑などでは、炭化物や骨片等が含まれているものも見受けられる。これらの微細な自然遺物の内容を把握するため、フローテーション法を用いて水洗選別した。対象とした土壌は、住居跡では炭化物やベンガラなどを含む覆土や炉、土坑では炭化物を含む覆土や坑底、その他焼土などである。170サンプルを採取し同一地点・層位の試料をまとめて119サンプルとした。対象土壌の総量は、約400kg・約587リットルである。

結果（表Ⅲ-1・2）、自然遺物では、炭化物が各資料から計約1,970g、骨片が18.9g回収され、そのほかベンガラとみられる赤色物質が少量得られた。人工遺物としては土器の破片が計266点、微細な剥片が計5,214点検出され、礫も少量ずつ含まれていた。

植物遺存体

多量の炭化材を手取りしたほか、フローテーション法により炭化物を回収した。炭化物が多量回収された遺構として、H-2・3・4・23・27、F-6・7・19があり、さらに包含層M21区出土のサンプルがある。一部を¹⁴C年代測定試料としたほか、種子の一次選別を行い同定を委託した。

炭化種実の同定結果（古環境研究所）は、V章5に掲載した。不明なものも多く含まれていたが、判別できたものでは、オニグルミの核片、タデ属の果実片、アカネ科・マメ科の種子などがある。遺跡周辺の植生の一部とみられる。

動物遺存体

手取りおよびフローテーション法により骨片を回収した。ほとんどが白色を呈する焼骨とみられるものである。同定作業は土肥研晶が、作成した現生標本や過年度の周辺遺跡での成果をもとに簡易的に行った。内容は表Ⅲ-3に掲載した。

H-2・22、F-2・3・4のサンプルで動物遺存体の検出量が多い。全体的に魚骨が多く、サケ科が最も多いとみられる。砂泥域に生息する小型魚種である「イトヨ」と同定されたものは、焼けていないものがほとんどである。獣骨では、シカの四肢骨などが同定された。そのほか鳥類の骨片も含まれている。

(阿部)

表Ⅲ-1 フローテーション結果(1)

試料番号	遺構/ 発掘区	層位	体積 (m ³)	乾燥重量 (g)	残渣 (g)	浮遊物 (g)	回収遺物(g)						遺物(点)				備考	
							土器	フリク	礫	骨片	炭化物	種子	ベンガラ	土器	フリク	礫		種子
160~162	H-1	床面直上	12,100	8,100	19.0	46.4		0.1				46.8	0.0			9	1	(覆土2層)
1・2・3	H-1 HF	焼土	9,100	6,700	22.9	5.6	0.4	0.0		0.0	0.7				11	1		
15	H-1 HF	直土炭化物	1,500	1,000	8.0	1.0		0.0	4.7		0.9				3	1		
164	H-2	覆土	5,800	4,000	38.3	31.3		1.0			58.5				5			
183・184・185	H-2	覆土(ベンガラ)	610	480	2.2	0.4	1.3	0.0			0.2		0.0		1	20		
13	H-2	21(焼土)	300	300	2.3	0.3		0.0		0.0	0.2				3			南北ベルト
14	H-2	30	1,500	800	9.2	12.6		0.0	3.8		11.7				2	1		
190~192・198	H-2	36-46	14,400	10,000	92.2	36.8	0.5	3.3	117.1	2.9	32.7	0.0	0.3	6	263	6	5	ベンガラ
202	H-2	46	1,000	700	1.5	0.8		0.7			0.8				82			
193	H-2	中位ベンガラ	300	300	0.6	0.7		0.0			0.4		0.0		8			
197・199	H-2	ベンガラ	400	400	1.2	0.3		0.1		0.0	0.4		0.3		13			
186~189	H-2	床面	2,700	2,100	7.4	2.5		2.1			3.3		0.0		295			ベンガラ
200	H-2	床上	500	600	4.1	0.2		0.0		0.0	0.1		0.0		12			ベンガラ、骨片
4	H-2 HF	焼土上位	400	400	5.4	7.8		0.0		0.0	7.6				8			
5・6・8・9・10	H-2 HF	焼土中位	11,200	8,200	105.7	17.3	2.4	0.6	56.2	9.9	6.9		0.0	15	100	3		
7	H-2 HF	焼土下位	4,500	3,200	32.6	11.0	0.2	1.5	11.4	0.2	10.0	0.0	0.1	1	147	2	6	
11・12	H-2 HF	焼土	3,800	2,400	14.1	3.2	0.8	0.6	3.5	0.0	2.7			3	19	1		
166	H-2・3	覆土	400	200	4.7	6.0		0.0			17.6				2			南北トレンチ北側
165	H-3	覆土	600	400	40.9	81.2					122.0							
16	H-3 HF	焼土	3,300	2,200	11.8	9.8		0.0			8.5				7			
17	H-3 HF1	焼土	2,000	1,100	6.3	1.2					1.0							
18・19	H-3 HF2	焼土	5,600	3,600	21.4	1.7		0.0			0.2				15			
159	H-4		400	200	3.6	72.5		0.1			58.3				7			ベルト
179	H-4	覆土	50	50	0.0	3.7					37.0							
180	H-4	焼土(炭)	40	20	0.5	1.3	0.2				1.7				1			
20・21	H-4 HF	焼土	7,900	5,200	14.0	9.9	1.6	0.2			7.2				2	25		
181	H-5	焼土(炭①)	500	400	47.8	14.1					61.5							
22・23	H-5 HF1	焼土	8,800	5,700	34.0	12.0	2.3	0.9	6.0		4.7			12	63	2		
24	H-6 HF1	焼土	4,000	2,900	165.2	1.4		0.0	41.6	0.0	0.9				3	12		
25	H-7	焼土	1,600	1,400	78.0	0.3		0.0	21.4		0.0				6	1		
26	H-8 HF1	焼土	1,000	700	39.9	0.6	0.0	0.0			0.2				1	2		
174	H-10 HF	炭	10	10	0.0	0.4					0.4							
27	H-10 HF	焼土	1,000	700	14.9	0.7		2.2			0.6					174		
201	H-11 HF1	焼土	2,000	1,400	17.4	14.2	0.1	12.2			13.8				1	1,258		
80	H-12	焼土上面	2,900	1,500	29.2	21.6	14.3				20.6	0.0		40			1	
79	H-12	焼土中	2,000	1,000	11.8	2.5		0.0			1.5				7			
84・85	H-12 HF1	焼土	2,700	2,200	17.7	7.1	0.3	0.0			19.3			3	11			
116	H-14 HF1	焼土	1,900	1,200	3.8	0.3		0.0			0.1	0.0			4		1	
115	H-14 HF2	焼土	2,500	1,600	4.1	1.3		0.0			0.9				6			
59	H-15 HF1	焼土	5,000	3,400	13.4	12.4	0.1	0.0			12.0			9	4			
95	H-16	HM2	3,200	2,100	6.9	6.5		0.0			4.9				4			
96	H-16	HM3	3,200	2,200	11.7	2.2		0.0			0.4				3			
61	H-16 HF1	焼土	5,000	3,300	7.3	4.6		0.1			3.8				14			
106・109	H-17 HF1	焼土	3,500	2,400	9.8	11.7		0.0			11.4				4			
57	H-18 HF	焼土	4,000	2,900	19.4	4.6		0.0		0.0	3.2				8			
81・83	H-19 HF1	焼土	1,200	700	15.4	7.1		0.1			7.3				13			
82・87	H-19 HF2	焼土	500	400	12.0	3.5		0.8			0.3				96			
58	H-21 HF	焼土	2,500	1,500	17.8	10.3				0.0	7.1							
56	H-22 HF1	焼土	4,500	3,000	19.8	4.8	0.3	1.1		0.9	5.8	0.0		2	129		1	
62	H-23		500	400	0.4	10.3					10.1							No.1
63	H-23		2,500	1,800	2.4	15.0		0.0			12.4				4			No.2
64	H-23		6,500	4,100	21.8	22.0		12.5			21.0				18			No.3
65	H-23		6,000	4,000	11.8	13.0		0.0			13.1	0.0			5	2		No.4
66・90	H-23		4,000	2,600	8.3	5.2		0.0			2.5				3			No.5
67	H-23		500	500	0.6	1.0					0.9							No.6
68	H-23		4,400	2,800	3.5	9.4		0.0			17.1				7			No.7
69	H-23		8,400	5,200	9.9	12.4		0.0			7.8				4			No.8
70・86	H-23		18,900	12,600	39.5	30.3		0.1			17.8				12			No.9
71	H-23		6,000	3,900	15.3	5.8		0.0			5.2	0.0			2	10		No.10
72	H-23		1,000	600	1.3	1.4		0.1			0.3				12			No.11
73	H-23		3,000	2,000	4.3	4.9		0.1			3.8				15			No.12
74	H-23		8,500	5,500	10.8	20.9		0.7			13.7				67			No.13
75・91	H-23		13,400	9,200	22.7	26.8	0.2	1.2			19.8			1	75			No.14
76	H-23		3,300	2,100	6.6	3.7		1.7			2.4	0.0			58	1		No.15

表Ⅲ-2 フローテーション結果(2)

試料番号	遺構/ 発掘区	層位	体積 (m ³)	乾燥重量 (g)	残渣 (g)	浮遊物 (g)	回収遺物(g)						遺物(点)				備考		
							土器	フリク	礫	骨片	炭化物	種子	ヘリガ	土器	フリク	礫		種子	
77	H-23		6,000	4,000	13.7	7.0		0.0				3.8					5		No.16
78	H-23		7,500	5,200	16.2	8.5	0.1	2.6				5.7				1	101		No.17
107	H-23	焼土	1,500	900	4.3	6.4	1.0	2.0				4.8				6	15		焼土②
101	H-23	焼土	3,800	2,500	10.3	3.7		0.0				3.0					3		焼土③ No.5
108	H-23	焼土	2,000	1,000	4.0	17.0		0.0				17.2					5		No.14⑤
105	H-23 HP1	覆土	15,200	9,600	19.3	10.3		0.4				5.4					47		
104	H-23 HF1	焼土	2,300	1,600	3.4	10.3	0.2	0.6				9.6				9	20		
103	H-23 HF2	焼土	400	300	0.4	0.7		0.0				0.0					1		
60	H-24 HF1	焼土	4,500	3,700	15.1	2.5		0.0		0.0		1.9					8		
120	H-26 HF1	焼土	9,250	6,300	25.3	11.6	0.1	9.7		0.3		8.3		0.0		5	44		
110	H-27 HF1	焼土	40,500	31,900	413.3	73.0	2.4	17.1	2.8	0.2		65.9				6	393	1	
97	H-29 HF1	焼土	14,000	9,400	26.3	11.2	0.0	1.2				4.0				2	113		
117	H-30 HF1	焼土	1,900	1,100	3.8	5.7		0.2				5.3					13		
111・112	H-33HF1	焼土上面	1,100	700	2.5	0.7		0.0				0.3					8		
119	H-34	床面付近	4,400	3,000	6.8	29.5		0.0				28.0					5		
118	H-34 HF1	焼土	3,600	2,400	10.7	0.7		0.2				0.4	0.0				17	1	
121	H-38 HF1	焼土	4,000	3,350	82.6	5.3	16.0	2.1				9.7				23	137		
171	P-5	覆土(炭)	10	10	0.0	1.2						0.5							
175	P-5	炭化物①	40	40	1.2	0.1	0.6	0.5				0.1				1	1		土器下
182	P-15	覆土	500	400	1.1	14.2		0.0				14.8					2		
176	P-15	坑底(炭)	10	10	0.0	0.5						0.5							
172・173	P-16	覆土(炭)	20	20	0.4	1.2						1.2							
114	P-75	覆土	3,200	2,300	8.2	0.5		0.0				0.1					4		
28・29	F-1	焼土	8,500	5,500	16.8	6.0		0.4	2.4	0.0		1.0		0.0			52	1	
30~37	F-2	焼土	42,500	29,500	84.0	25.3	4.2	5.5	9.8	0.1		5.9		0.0		29	137	2	
38~40	F-3	焼土	5,500	4,000	30.8	1.0		0.1			0.9	0.5					18		
41	F-4	焼土	5,600	4,100	38.3	1.5		0.1	4.6	2.0		0.1	0.0				5	1	1
42・167	F-5	焼土	500	300	14.5	10.0	0.8	1.3	2.5	0.0		19.4				3	13	1	
156	F-6	焼土	4,500	2,300	9.6	251.9	0.5	0.3				256.7	0.3			10	35	2	
178	F-6	覆土	1,000	700	47.8	116.7		0.0				151.8					1		
43・44・157・158	F-7	焼土	14,500	10,100	182.6	76.6	2.8	8.2	129.0			73.3				11	421	14	
155	F-8	焼土	450	250	0.1	0.5		0.0				0.0					1		
45	F-9	焼土	1,500	1,000	25.3	2.5	20.0	0.5				2.1				3	28		
168	F-9	炭化物	200	100	0.9	18.3	0.0	0.0				19.1				1	1		
46・47・163	F-12	焼土	15,500	10,900	109.5	6.1	2.4	0.7	67.2	0.4		0.7				10	120	3	
48	F-13	焼土	3,500	2,600	17.7	2.9		0.0	9.9	0.0		0.7					1	1	
49	F-14	焼土	1,200	700	2.7	0.2	0.4	0.5				0.1				4	9		
55	F-15	焼土	2,000	1,600	6.0	0.8		0.1			0.8						12		
51	F-17	焼土	4,800	3,300	16.6	2.9		0.0			0.3	1.0					4		
52	F-18	焼土	21,000	15,400	31.5	6.5		0.0				1.9					2		
53	F-19	焼土	25,700	18,000	121.4	148.7		0.1				114.4					4		
54	F-20	焼土	13,800	9,200	27.9	43.0		0.1				35.6					4		
88	F-21	焼土上面	2,000	1,000	5.3	0.6		0.4				0.3					31		
89	F-22	焼土上面	3,000	2,000	9.8	4.1		2.2				3.4					48		
98	F-22	焼土	1,700	1,200	6.6	1.6		0.3				1.4					19		
92	F-23	焼土上面	800	500	1.7	3.3		0.0				4.3					4		
93	F-24	焼土上面	900	500	1.2	0.5		0.0				0.2					2		
94・99	F-25	焼土上面	1,900	1,400	6.5	0.2	0.1	1.3				0.0				2	27		
100	F-26	焼土	1,900	1,400	5.0	0.1	0.1	0.1				0.1				2	11		
102	F-28	焼土上面	3,900	2,300	10.5	2.9	4.7	0.3				0.0	0.0			26	29		3
113	F-32	焼土上面	8,000	5,700	20.3	3.8		1.4				0.3					29		
169	L23	焼土	400	300	5.5	3.5	0.2	0.6				7.0				2	55		攪乱内
151~154	M21	活性炭化物	23,500	11,400	3.3	323.1	0.1	0.3				309.2	0.0			1	10	1	Ko-C ₂ 直下
177	N22	V(炭)	30	10	0.5	3.7		0.5				3.7					1		
170	○22	IV	200	100	66.9	0.0		0.0	66.9			0.0					1	3	
総計			587,020	399,650	2,821.9	1,981.4	81.7	106.4	560.8	18.9	1,970.8	0.3	0.7	266	5,214	56	36		

表Ⅲ-3 動物遺存体一覧

試料番号	遺構	層位	動物遺存体			備考
			種など	部位	点数	
3	H-1HF-1		骨片		1	
13	H-2	21層(焼土)	魚骨片		2	非焼骨 1
190・191	H-2	36-46層	サケ科	椎骨片他	多数	
				歯		
			獣骨片		多数	
199	H-2	ベンガラ層	魚骨片		4	
200	H-2	床上	サケ科	椎骨片他	2	
4	H-2HF-1	焼土上位	イトヨ		1	非焼骨
5・6・8・9・10	H-2HF-1	焼土中位	魚骨片		30前後	
			サケ科	椎骨片・歯他	多数	
				角骨R	1	
			イトヨ	鱗板	1	非焼骨
			獣骨片			
11	H-2HF-1	焼土	魚骨片		2	非焼骨 1
24	H-6HF-1	焼土	魚骨片		5	
58	H-2HF-1	焼土	サケ科	椎骨片他	10程度	
手取り	H-22	覆土 2	シカ	四肢骨片		
手取り	H-22HF-1	焼土	シカ	四肢骨片		
				第5指中節骨	1	
56	H-22HF-1	焼土	サケ科	椎骨片・歯他	多数	
			シカ	第2・5指末節骨	1	
60	H-24HF-1	焼土	イトヨ	鱗板	1	非焼骨
120	H-26HF-1	焼土	サケ科	椎骨片他	10程度	
				歯		
110	H-27HF-1	焼土	獣骨片		20程度	
手取り	H-34	覆土 2	シカ	四肢骨片・椎骨片		
手取り	H-34	覆土 3	サケ科	椎骨片他	2	
			獣骨片			
29	F-1	焼土	魚骨片			
			イトヨ		2	非焼骨
					多数	非焼骨 8
30・33・34・35・36	F-2	焼土	魚骨片			
			魚骨片	腹鰭条		非焼骨
			イトヨ	腹鰭棘L	2	非焼骨 1
				骨盤骨R	1	非焼骨
38・39・40	F-3	焼土	マイマイ類		1	
			魚骨片		13	
			サケ科	椎骨片	多数	非焼骨 2
			イトヨ	鱗板	2	非焼骨
			鳥類骨片		1	
			シカ	椎骨片他		
41	F-4	焼土	マイマイ類		2	
			魚骨片		多数	非焼骨 2
			シカ	四肢骨片		
			骨針片		1	
42	F-5	焼土	魚骨片		多数	非焼骨 7
46・47	F-12	焼土	魚骨片			
			サケ科	椎骨片		
			獣骨片		1	
48	F-13	焼土	魚骨片	腹鰭条	1	非焼骨
51	F-17	焼土	サケ科	椎骨片	20程度	

※備考に「非焼骨」と記載されているもの以外はすべて焼骨である。

表Ⅲ-4 遺構一覧(1)

遺構名	位置(発掘区)	検出層位	平面形	検出面(m)		底面(m)		高さ(m)	長軸方向	時期(土器型式)	備考
				長軸	短軸	長軸	短軸				
H-1	K27	IV	円形	2.68	2.40	2.28	2.06	0.25	N-69°W	鯰淵	
H-2	K・L・M24・25・26	V	不整楕円形	10.41	4.98	9.98	4.78	0.85	N-39°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-3			隅丸方形								
H-4	N24・25	V	円形	3.95	3.66	3.66	3.48	0.68	N-16°W	鯰淵～堂林	
H-5	P・Q23・24	IV	円形	(3.80)	(4.12)	(3.49)	(3.54)	0.36	N-9°E	鯰淵	H-11と重複・小型注口
H-6	P・Q21	IV	楕円形	4.30	3.41	3.92	3.00	0.38	N-46°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-7	O・P21	IV	概ね円形	2.94	2.85	2.28	2.07	0.74	N-72°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-8	P22・23	V	不整長方形	4.14	(2.82)	3.86	(2.30)	0.38	N-6°E	浦幌～中茶路	
H-9	M21・22	VI	概ね楕円形	4.24	2.98	3.58	2.50	0.55	N-19°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-10	L22・23・24・M23	VI	楕円形	5.27	4.66	4.64	4.30	0.52	N-66°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-11	P・Q23・24	H-5床面	円形	(3.04)	3.90	(2.84)	3.60	0.20	N-15°E	鯰淵	H-5と重複
H-12	N・O・P17・18・19	IV	楕円形	8.86	7.60	8.25	7.16	0.95	N-7°E	鯰淵～堂林	四脚土器・漆櫛
H-13	J・K17・18	IV	楕円形	5.58	(3.48)	5.03	(3.26)	0.58	N-35°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-14	K・L16・17	IV	楕円形	8.84	6.36			0.23	N-1°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	「平地住居」
H-15	K・L・M14・15	IV	不整楕円形	9.92	8.36			0.22	N-62°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	「平地住居」
H-16	K・L・M12・13	IV	概ね楕円形	11.84	9.72			0.29	N-72°E	北筒Ⅱ	「平地住居」
H-17	K・L10・11・12	IV	隅丸方形	7.61	4.36	6.54	3.40	0.66	N-50°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-18	N・O12・13	IV	不整形	5.30	(3.14)	5.16	(3.00)	0.54	N-59°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-19	M・N・O11・12	IV	隅丸方形	6.20	5.95	6.12	5.52	0.96	N-22°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-20	L・M10・11	IV	隅丸方形	3.64	3.18	2.99	2.55	0.58	N-9°E	中茶路?	
H-21	O12	IV	長方形	7.54	(4.02)	(7.54)	(3.93)	0.42	N-60°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-22	N19・20	VI	不整楕円形	4.26	3.28	3.76	2.89	0.36	N-4°E	北筒Ⅱ	
H-23	M6・7	IV	楕円形	(4.24)	(3.98)	(3.80)	(3.46)	0.62	N-51°E	北筒Ⅱ	
H-24	P20・21	VI	隅丸長方形	(3.64)	(1.78)	(3.22)	(1.60)	0.44	N-77°W	中茶路?	
H-25	J・K14・15・16	IV	楕円形	(6.40)	(1.84)	(6.20)	(1.80)	0.50	N-20°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-26	L・M16	IV	不整形	(6.64)	(6.64)			0.26	N-13°E	北筒Ⅱ	「平地住居」
H-27	M・N9・10	IV	円形	5.42	4.81	5.01	4.50	0.63	N-40°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-28	N10・11	IV	不整楕円形	3.65	(1.62)	3.61	(1.53)	0.32	N-44°E	北筒Ⅱ	
H-29	K・L10	V	不整形	4.56	3.63	4.26	3.15	0.38	N-40°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-30	K19・20	V	概ね楕円形	4.10	3.62	(2.96)	2.85	0.47	N-38°E	北筒Ⅲ	
H-31	J・K19	IV	楕円形	(3.84)	(1.35)	(3.06)	(1.29)	0.54	N-1°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	H-13より新
H-32	J11・12	IV	不整形	(2.64)	(25.40)	(1.64)	(1.90)	0.56	N-58°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-33	M・N14・15・16	IV	楕円形	6.22	5.25	5.28	3.98	0.40	N-75°E	北筒Ⅱ	
H-34	M・N・O16・17	IV	不整楕円形	(5.64)	(5.65)	(5.30)	(5.10)	0.68	N-2°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-35	N17	IV	楕円形	3.41	2.80	2.80	2.30	0.55	N-85°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-36	N10	IV	不整楕円形	(1.24)	2.60	(1.20)	2.14	0.42	N-35°E	北筒Ⅱ	
H-37	M6・7	IV	不整形	(4.00)	2.48	(3.60)	2.14	0.24	N-16°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
H-38	L・M15・16	V	概ね円形	7.45	6.70	6.84	6.20	0.62	N-69°W	東鉤路Ⅱ～Ⅲ	
M-1	J・K・L21・22・23	V	不整楕円形	6.60	6.44			0.20	N-80°E	北筒Ⅱ	
P-1	K27	V	楕円形	(0.48)	0.86	(0.30)	0.41	0.14		中茶路	
P-2	K27	V	楕円形	0.75	(0.27)	0.69	(0.21)	0.14		中茶路	
P-3	K27	V	隅丸三角形	0.66	0.49	0.50	0.33	0.12		中茶路	
P-4	O21	IV	楕円形	0.80	0.70	0.62	0.53	0.34		中茶路	
P-5	L21・22	IV	不整楕円形	1.39	0.76	0.96	0.58	0.30	N-19°W	中茶路	
P-6	P22・23	V	円形	0.70	0.64	0.62	0.55	0.34	N-5°W	中茶路	
P-7	N21・22	IV	円形	0.87	0.84	0.52	0.48	0.40		中茶路	
P-8	N・O23	V	楕円形	(2.20)	1.74	(1.94)	1.57	0.38	N-47°E	中茶路	
P-9	M21	V	楕円形	0.17	0.14	0.15	0.12	0.28		中茶路	
P-10	J・K23	IV	概ね楕円形	2.18	(1.28)	1.26	(0.77)	0.40		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-11	O22	V	楕円形	0.62	0.50	0.47	0.49	0.24		中茶路	
P-12	N・O21	IV	概ね楕円形	2.46	1.69			0.14	N-25°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	P-13内
P-13	N・O21	P-12坑底	長楕円形	3.32	1.95	3.00	1.29	0.27		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-14	O23	V	円形	1.63	1.55	1.42	1.40	0.33		中茶路	
P-15	M22	H-9床面	不整楕円形	2.26	1.50	1.73	0.93	0.18	N-54°E	中茶路	H-9内
P-16	M22	V	不整楕円形	0.43	0.36	0.33	0.28	0.07		中茶路	
P-17	N・O23	P-8坑底	楕円形	0.77	0.58	0.72	0.44	0.46		浦幌～中茶路	P-8内
P-18	O23	P-8坑底	楕円形	1.80	1.04	0.67	0.62	0.34		浦幌～中茶路	P-8内
P-19	K・L24	IV	楕円形	(1.10)	1.06	(1.00)	0.81	0.25	N-19°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-20	N・O22	VI	概ね円形	0.94	0.82	0.67	0.52	0.23		中茶路	
P-21	O22	VI	不整楕円形	0.86	0.73	0.63	0.72	0.47		中茶路	
P-22	P21	VI	楕円形			1.65	0.99	(0.10)		中茶路	
P-23	P21	H-6床面	概ね円形	1.06	1.00	0.54	0.52	0.16		中茶路	H-6内
P-24	Q21	VI	円形	(0.84)						中茶路	
P-25	O21	VI	ほぼ円形	0.78	0.70	0.44	0.44	0.33		中茶路	

表Ⅲ-5 遺構一覧(2)

遺構名	位置(発掘区)	検出層位	平面形	検出面(m)		底面(m)		深さ(m)	長軸方向	時期(土器型式)	備考
				長軸	短軸	長軸	短軸				
P-26	P23	V	楕円形	(0.35)	(0.46)	(0.30)	(0.35)	0.37		中茶路	
P-28	M17	IV	不整円形	0.92	0.87	0.74	0.77	0.41		中茶路	P-85より古
P-29	M20・21	VI	概ね楕円形	0.90	(0.64)	0.61	(0.46)	0.19		中茶路	P-30より古
P-30	M20	VI	楕円形	(0.64)	0.63	0.62	0.51	0.24		中茶路	P-29より新・小型土器
P-31	M20	V	概ね円形	0.75	0.81	0.73	0.64	0.34		中茶路	
P-32	M19・20	V	概ね円形	1.45	1.29	0.58	0.60	0.69		中茶路	
P-33	M19	VI	楕円形	1.34	0.96	1.25	0.83	0.09	N-21°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	炭化材
P-34	M18・19	V	概ね楕円形	1.81	1.11	1.64	0.93	0.23	N-13°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	炭化材
P-35	L・M18・19	IV	長楕円形	(6.36)	1.50	(6.24)	1.46	0.30	N-25°W	中茶路	SP-3～9検出・長狭
P-36	M17・18	IV	概ね楕円形	1.85	1.04	1.55	0.75	0.72		中茶路	土坑墓?
P-37	M17	V	概ね楕円形	2.58	(1.60)	2.20	(1.34)	0.44		中茶路	P-35より新
P-38	N19	VI	円形	0.41	0.36	0.29	0.28	0.20		不明	H-12柱穴?
P-39	P19	VI	楕円形	0.80	0.66	0.65	0.52	0.36		中茶路	
P-40	P19・20	VI	概ね楕円形	(0.56)	0.63	(0.49)	0.47	0.12		中茶路	
P-41	P20	VI	隅丸長方形	1.41	0.80	1.12	0.82	0.42	N-51°W	中茶路	
P-42	O20	VI	楕円形	0.64	0.54	0.60	0.49	0.31		中茶路	
P-43	O20	VI	楕円形	1.34	1.04	1.11	(0.73)	0.34		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-22・P-44より新
P-44	N20・21	VI	概ね楕円形	2.42	2.28	1.50	1.62	0.42		北筒Ⅱ～Ⅲ	P-43より古い
P-45	M・N20	V	不整楕円形	2.57	2.50	2.23	2.23	0.30		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-22より新
P-46	M21	VI	ほぼ円形	0.48	0.46	0.64	0.42	0.26		中茶路	
P-47	P19	VI	楕円形	0.69	(0.54)	0.68	(0.54)	0.36		中茶路	
P-48	P19・20	VI	概ね円形	0.65	0.62	0.54	0.40	0.14		中茶路	
P-49	P20	VI	楕円形	1.05	(0.60)	0.78	0.42	0.08		中茶路	
P-50	K・L10	IV	不整楕円形	1.37	0.95	1.28	0.91	0.44	N-58°E	中茶路	
P-51	O12	H-18床面	不整楕円形	(1.02)	1.04	(0.94)	0.94	0.24		不明	H-18内
P-52	L6	IV	楕円形	2.24	1.72	1.45	0.94	0.64	N-9°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-53	M・N12	IV	長楕円形	1.49	(0.66)	0.82	(0.36)	0.83	N-44°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	土坑墓、人骨有り
P-54	M7	IV	長楕円形	1.48	1.48	1.10	1.13	0.40		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-37に含まれる?
P-55	L6	IV	長楕円形	1.26	1.04	0.95	0.80	0.52		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-56	M11	VI	円形	0.81	0.64	0.34	0.30	0.55		中茶路	H-19内
P-57	N12	VI	長円形	(0.67)	0.91	(0.62)	0.60	0.36		中茶路	土器多量
P-58	K13	V	長楕円形	1.20	0.92	1.10	0.76	0.23	N-22°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	土坑墓、人骨有り
P-59	K・L12	V	不整楕円形	1.72	1.20	1.32	0.94	0.36		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-17より古
P-60	M10	IV	長楕円形	(0.70)	0.51	(0.48)	0.44	0.32		中茶路	P-69・H23と重複
P-61	M6	覆土	長楕円形	(0.74)		(0.56)		0.53		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-23より新
P-62	L20	V	概ね円形	0.82	0.73	0.32	0.32	0.29		中茶路	
P-63	N9	IV	不整長円形	1.04	0.78	0.92	0.64	0.52		中茶路	P-64・H-27と重複
P-64	N9	IV	長円形	(1.31)	(0.90)	0.55	0.44	0.50		中茶路	H-27内
P-65	L6・7	VI	楕円形	1.34	0.67	1.09	0.44	0.23	N-11°E	北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-66	L・M19	V	ほぼ円形	0.44	0.42	0.42	0.36	0.22		中茶路	S-3含む
P-67	L・M19・20	VI	ほぼ円形	0.77	0.77	0.81	0.74	0.28		中茶路	
P-68	L・M6	V	概ね円形	0.80	(0.43)	0.51	(0.24)	0.33		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-69	M10	VI	長円形	0.80	0.47	0.56	0.34	0.60		中茶路	P-60・H-27と重複
P-70	M・N8	VI	不整長円形	(1.34)	0.97	(1.06)	0.70	0.30	N-31°W	中茶路	
P-71	N8	VI	楕円形	0.76	0.58	0.54	0.42	0.26		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-72	N8	V	長楕円形	(1.10)	0.69	(0.94)	0.54	0.28	N-67°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-73	N7	IV	長円形	(1.80)	(1.48)	(1.08)	0.64	0.58		北筒Ⅱ～Ⅲ	
P-74	N18	VI	円形	1.32	1.28	1.05	1.04	0.31		北筒Ⅱ～Ⅲ	P-75より新
P-75	N18	VI	不整長円形	1.21	0.72	0.73	0.36	0.28		中茶路	P-74と重複
P-76	N18	VI	不整円形	1.47	(0.72)	1.06	(0.54)	0.32		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-12内・H-27と重複
P-77	O19	VI	不整円形	(0.45)	0.72	(0.34)	0.53	0.18		中茶路	H-12内
P-78	K17・18	IV	概ね楕円形	2.86	1.93	2.50	1.63	0.56	N-29°W	北筒Ⅱ～Ⅲ	ベンガラあり
P-79	O16・17	VI	楕円形	1.12	0.88	0.90	0.69	0.22		中茶路	H-34内
P-80	N16	VI	概ね楕円形	1.50	(1.02)			0.26	N-23°W	中茶路	H-34内、S-5含む
P-81	N16	VI	不整楕円形	1.45	(0.82)	1.22	(0.74)	0.34		中茶路	H-34内、小型土器
P-82	N16	VI	不整形	1.98	1.40	1.94	1.24	0.43		中茶路	H-34内
P-83	M・N16・17	VI	概ね楕円形	1.56	1.13	1.37	0.94	0.19		中茶路	H-34内
P-84	M18	VI	ほぼ円形	0.58	0.52	0.46	0.50	0.23		中茶路	
P-85	M17	VI	不整楕円形	2.00	1.01	1.62	0.54	0.46		中茶路	P-36・37と重複
P-86	O19	VI	楕円形	0.47	0.36	0.46	0.38	0.27		中茶路	
P-87	L15	VI	不整形	1.64	0.95	1.41	0.75	0.19		中茶路?	
P-88	M16	覆土	楕円形	0.59	0.41	0.34	0.22	0.31		東鉤路Ⅲ～中茶路	H-38内
SP-1	O20	IV	円形	0.23	0.20			0.15		不明	フレイクチップ多量
SP-2	L19	VI	円形	0.12	0.14	0.10	0.08	0.17		不明	

表Ⅲ-6 遺構一覧(3)

遺構名	位置(発掘区)	検出層位	平面形	検出面(m)		底面(m)		高さ(m)	長軸方向	時期(土器型式)	備考
				長軸	短軸	長軸	短軸				
SP-3	L19	VI	円形	0.16	0.15	0.11	0.09	0.19		中茶路	P-35付属か
SP-4	L19	VI	円形	0.21	0.18	0.16	0.13	0.21		中茶路	P-35付属か
SP-5	L18	VI	円形	0.14	0.14			0.16		中茶路	P-35付属か
SP-6	L18	VI	円形	0.17	0.15			0.15		中茶路	P-35付属か
SP-7	M18	VI	円形	0.16	0.15			0.16		中茶路	P-35付属か
SP-8	M18	VI	円形	0.14	0.15			0.10		中茶路	P-35付属か
SP-9	M18	VI	円形	0.14	0.14			0.18		中茶路	P-35付属か
SP-10	L19	VI	円形	0.17	0.17	0.12	0.12	0.22		北筒Ⅱ～Ⅲ?	P-30付属か
SP-11	K18	VI	円形	0.16	0.16			0.22		不明	
SP-12	L18	VI	円形	0.15	0.14			0.08		不明	
SP-13	L18	VI	円形	0.16	0.15			0.11		不明	
SP-14	L18	VI	円形	0.16	0.08			0.13		不明	
SP-15	L15	VI	円形	0.11	0.20			0.10		不明	
SP-16	L14	VI	円形	0.20	0.19			0.12		不明	
SP-17	M17	V	円形	0.27	0.27			0.11		早期?	P-28に関連か
F-1	K21	IV	楕円形	0.73	0.56			0.13		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-2	K21	IV	概ね円形	0.78	0.67			0.12		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-3	M22	II	不整楕円形	0.67	0.26			0.04		晩期～アイヌ期	
F-4	O22	II	不整楕円形	0.74	0.43			0.06		晩期～アイヌ期	
F-5	K22	M	楕円形	0.46	0.33			0.04		北筒Ⅱ～Ⅲ	M-1
F-6	L22	M	楕円形	0.68	0.66			0.16		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-7	K22	M	不整形	2.26	1.64			0.26		北筒Ⅱ～Ⅲ	M-1
F-8	K22	IV	概ね楕円形	(0.27)	(0.24)			0.11		北筒Ⅱ～Ⅲ	M-1
F-9	L21	V	楕円形	0.40	0.27			0.12		浦幌～中茶路	
F-10	K21	V	円形	0.21	0.18			0.03		浦幌～中茶路	
F-11	M21・22	IV	不整楕円形	0.61	0.41			0.06		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-12	M・N24	VI	ほぼ円形	0.53	0.51			0.16		浦幌～中茶路	
F-13	M22	H-9覆土	円形	0.44	0.45			0.10		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-14	J26	VI	ほぼ楕円形	(0.26)	(0.20)			0.05		浦幌～中茶路	
F-15	N19	VI	ほぼ円形	0.45	0.40			0.08		早期	
F-16	L11	H-17覆土	不整楕円形	0.43	0.36			0.11		北筒Ⅱ～Ⅲ	H-17
F-17	N20・21	P-44覆土	概ね楕円形	0.56	0.48			0.09		北筒Ⅱ～Ⅲ	P-43
F-18	M9	V	不整楕円形	1.08	0.68			0.12		中茶路?	
F-19	O12	H-21覆土	不整形	2.71	1.26			0.22		緑ヶ岡	H-21
F-20	O12	H-18覆土	不整形	1.37	0.95			0.10		緑ヶ岡	H-18
F-21	L12	H-16HM	円形	(0.32)	0.40			0.10		北筒Ⅱ	H-16
F-22	L12	H-16HM	概ね楕円形	0.80	0.53			0.18		北筒Ⅱ	H-16
F-23	M12	H-16HM	不整楕円形	0.53	0.26			0.09		北筒Ⅱ	H-16
F-24	M12	H-16HM	不整楕円形	0.42	0.27			0.08		北筒Ⅱ	H-16
F-25	M12	H-16HM	概ね楕円形	0.64	0.53			0.08		北筒Ⅱ	
F-26	M12	IV	ほぼ円形	0.62	0.60			0.10		北筒Ⅱ	
F-27	N17	H-35覆土	楕円形	(0.27)	0.36			0.06		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-28	L19	IV	概ね楕円形	1.00	0.62			0.12		中茶路	
F-29	K16	IV	ほぼ楕円形	0.45	0.30			0.04		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-30	N17	V	不整楕円形	0.76	0.56			0.08		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-31	N15	IV	概ね楕円形	0.32	0.36			0.07		北筒Ⅱ～Ⅲ	
F-32	L18	VI	概ね円形	0.68	0.62			0.09		浦幌～中茶路	
FC-1	M5	IV		1.27	0.88					北筒Ⅱ～Ⅲ	
FC-2	M16	H-16覆土		0.90	0.74					北筒Ⅱ	H-26
FC-3	M12	IV		1.57	0.94					北筒Ⅱ～	
FC-4	N17	IV		0.44	0.22					北筒Ⅱ～Ⅲ	H-35
FC-5	K16	H-14HM		0.60	0.46					北筒Ⅱ～Ⅲ	H-14
FC-6	K17	H-14HM		0.90	0.54					北筒Ⅱ～Ⅲ	H-14
FC-7	K23	M		0.48	0.43					北筒Ⅱ	
FC-8	K23	M		0.76	0.41					北筒Ⅱ	
S-1	L5	IV		0.76	0.50					北筒Ⅱ～Ⅲ	礫8個
S-2	K13	H-16HM		0.91	0.46					北筒Ⅱ	H-16
S-3	L19	P-66覆土		0.38	0.33					中茶路	P-66、礫29個
S-4	K15	IV		0.76	0.68					中期以前	
S-5	N16	P-80覆土		0.90	0.76					中茶路	P-80、礫40個

表Ⅲ-7 遺構出土遺物集計(1)

種別	分類	H-1	H-2	H-2-3	H-3	H-4	H-5	H-6	H-7	H-8	H-9	H-10	H-11	H-12	H-13	H-14	H-15	H-16	H-17	H-18	
土器	I a		17	16	7	83				4	49	3	2								
	I b				1	1						1	1	2	20	36			3	2	
	I b-1		4	11	5	13	2					6	1	66	25		53	6		5	
	I b-2						1							2		7				10	
	I b-3																4				
	I b-4	2	19	7	10	40	34		2	651	22	17	64	428	32	40	221	118	81	8	
	Ⅲ b		1		2															2	1
	Ⅲ b~Ⅳ a	1	90	117	126	22	1	1			24	86		29	693	254	63	115	24	6	
	Ⅳ a		31	11	6						3	76		15	28	32	13	24	2	2	
	Ⅳ b	173	70	101	121	1079	65				9	96	5	61	61	6	17				
	Ⅳ c					12									122						
	V c	60				6									225				80	36	
	不明	11	85	88	13	13	13			1	30		1	57	1	29	19			1	
土製品	焼成粘土塊														1	1	2	2	2	1	
	土製円盤																	1			
	スタンプ形土製品				2																
	ミニチュア土器									1											
	土製品																		1		
土器等合計		247	317	351	293	1269	116	1	2	657	137	285	74	1007	861	405	393	350	123	60	
石器	石刃鎌															1					
	錐形石器		1							2											
	削器		1								1			3	2	1		4			
	搔器										2										
	彫器		2		2	2		1		3	3	1				1		1			
	削片		2			1		1		2	3		1	2	1	2	3				
	二次加工ある石刃		1		1	4				8	1	1									
	石刃				1	1		2			1			2		1					
	石刃核																				
	石鎌		6		5	4	2			2	2	3		8	8	21	13	22	4	2	
	石槍(またはナイフ)		4	2	5	3	1	1			2		2	2	1	15	1	13		1	
	石錐						1							2	1	4		4	1	3	
	つまみ付きナイフ		3	2		1	2			3					3	5	7	6	17	1	
	ナイフ																	1			
	スクレイパー		6	1	2	4	6	1		2	4	1	4	12	9	41	8	49	14	1	
	両面調整石器		1	2		3	2			1	1	2		22	2	28	3	4	9		
	くさび形石器																				
	石核		1		1		9				1			2		2	1	7	1		
	二次加工ある剥片	1	16	6	1	5	6			2	3	4	3	9	7	17	12	51	10	2	
	微細剥離痕ある剥片													6	5		6	25	10	1	
	剥片	13	1538	205	337	149	637	39	11	69	371	229	1271	500	343	1264	525	1113	310	24	
	石斧			1	1				1		3		1	2	1	6	1	2	1	1	
	石のみ																		1		
	擦切残片																				
	矢柄研磨器等																				
	砥石		1								43			1	4	24	15	5			
	たたき石					1									3			1	1		
	すり石					2							1				1				
	石錘	13				1										1	2				
	台石・石皿		4		2	39	310				1		17		1	20	1	2	1		
	加工痕ある礫					1															
石器合計		27	1587	219	358	221	976	46	11	94	442	241	1300	579	390	1456	599	1321	363	35	
礫	原石					1	1		1		1							1			
	礫	1	39	1	5	2	2	12	1		6			23	1654	148	11	23	76	2	
遺物合計		275	1943	571	656	1493	1095	59	15	751	586	526	1374	1609	2905	2009	1003	1695	562	97	

表Ⅲ-8 遺構出土遺物集計表(2)

分類	H-19	H-20	H-21	H-22	H-23	H-24	H-25	H-26	H-27	H-28	H-29	H-30	H-31	H-32	H-33	H-34	H-35	H-36	H-37	H-38	H 計
I a						1															182
I b						4												1			72
I b-1		1		5		1		39					2		2	23	19			333	622
I b-2	1		1					2				2	1							1064	1091
I b-3																					4
I b-4	54	60	3	101		11	2	63	24	10		7	2		32	145	61	19		171	2561
Ⅲ b			1	13				123		10	1										155
Ⅲ b~Ⅳ a	14	2	2	86	9		4	423	33	24		6	6	3	2	684	20	66	2	4	3042
Ⅳ a	2			10	30		1	24		8	2	46	22			2	14			3	407
Ⅳ b	2		2	1			1						18		5	18					1911
Ⅳ c			1																		135
V c			1																		408
不明				2	17			19	6		2	4	6			36	4			23	481
焼成粘土塊	1			1													3				14
土製円盤																					1
スタンプ形																					2
ミニチュア																				3	4
土製品																					1
土器等合計	74	63	11	219	56	17	8	693	63	52	5	65	57	3	41	908	121	86	2	1601	11093
石刃鏃																					1
錐形石器																					3
削器						1			1						1						15
搔器																					2
彫器																2				3	21
削片				1		2			1											4	26
二次加工ある石刃																					16
石刃								1	1												10
石刃核																					
石鏃	7	1	1	4	4	1	3	6	5	2		3		1	3	10	5			5	163
石槍(ナイフ)	3	1		2	1		1	11	2	2		2		1	3	5	1			1	89
石錐				1	1			3	3	1						1		1		2	29
つまみ付きナイフ	5			1	4		1	3	5			2			3	1	3				78
ナイフ																	1				2
スクレイパー	20	3	5	10	12		11	11	20	2	2	6	2	2	6	6	8			16	307
両面調整石器	9			1	1				1	2		3			2	3	2			3	107
くさび形石器																					
石核				1												1	1			1	29
二次加工ある剥片	9	1		5	2		2	8	7				1	1	3	9	6		2	14	225
微細剥離ある剥片	4	2		1	4	2	1	16	18	3		6	3	5	8	6	10	1		17	160
剥片	474	19	6	759	599	140	147	1385	1063	22	181	203	15	32	90	576	779	3	1	478	15920
石斧	1	1	1			1		1	2		1	1		1			1	2			34
石のみ	1								1							1					4
擦切残片																					
矢柄研磨器等																					
砥石	1			9				10				4			20	1	1			16	155
たたき石				1					2												9
すり石				1																1	6
石錘																					17
台石・石皿				1				1								1				1	402
加工痕ある礫																					1
石器合計	534	28	13	798	628	147	166	1456	1132	34	184	230	21	43	139	624	817	7	3	562	17831
原石	1															2					8
礫	8	1	1	3	4		3	6	12	2	1	5	7	1	2	25	1	2		9	2099
遺物合計	617	92	25	1020	688	164	177	2155	1207	88	190	300	85	47	182	1559	939	95	5	2172	31031

表Ⅲ－9 遺構出土遺物集計表(3)

分類	M-1	P-1	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-11	P-12	P-14	P-15	P-16	P-17	P-19	P-20	P-21	P-22	P-25	P-26	P-28	P-29	P-30	P-31	P-32
I a					4				3								1								
I b																			1						
I b-1	8																								
I b-2																				1	3				
I b-3																									
I b-4	33		2	33	38		11	70	5		26	12	70			17	42	46		3	49		36	6	
Ⅲ b	5																								
Ⅲ b～Ⅳ a	28											5													
Ⅳ a	4																								
Ⅳ b	1																								
Ⅳ c																									
V c																									
不明	14			1	7																				
焼成粘土塊																									
土製円盤					1																				
スタンプ形																									
ミニチュア																									
土製品																									
土器等合計	93		2	34	50		11	70	8		26	17	70		40	17	43	46	1	4	52		36	6	
石刃鏃					1		1																		
錐形石器																									
削器											2														
搔器																									
彫器							1			4															
削片						1	1																		
二次加工ある石刃	4				2					2				1											
石刃							1																		
石刃核																									
石鏃	3				1		3								1	1				1					6
石槍(ナイフ)	3				1					1															
石錐	1																								
つまみ付きナイフ				1					1																
ナイフ																									
スクレイパー	4				3		1			1						1									1
両面調整石器	6		1		2		2										2			1					
くさび形石器																									
石核							1																		
二次加工ある剥片	6	1	1			1				1		1	1				2								2
微細剥離痕ある剥片																									
剥片	287		12	2	67	10	210		11	1	4	4	20		1	14	10	49		90	1	3	2	90	
石斧	3																								
石のみ																									
擦切残片																									
矢柄研磨器等																									
砥石																									
たたき石																									
すり石																									
石錘																									
台石・石皿	4																								
加工痕ある礫																									
石器合計	321	1	14	3	77	12	221		12	3	13	4	21	2	1	16	15	49		92	1	3	2	98	1
原石											1														
礫				4	1						1	1	1								2				2
遺物合計	414	1	16	41	128	12	232	70	20	3	41	22	92	2	41	33	58	95	1	96	55	3	38	106	1

表Ⅲ-10 遺構出土遺物集計表(4)

分類	P-33	P-34	P-35	P-36	P-37	P-39	P-40	P-41	P-42	P-43	P-44	P-45	P-46	P-47	P-49	P-50	P-51	P-52	P-53	P-54	P-56	P-57	P-58	P-59	P-63		
I a																											
I b			1		3							1															
I b-1	2	5	3								67																
I b-2			1	1	4																						
I b-3																											
I b-4			35	58	386	2	1	5			7	8	11	13	2					3	7	550		2			
Ⅲ b																											
Ⅲ b~Ⅳ a							1			2	12	48					2	3		1					2		
Ⅳ a										2	1	16															
Ⅳ b																											
Ⅳ c																											
V c																											
不明																											
焼成粘土塊																											
土製円盤																											
スタンプ形																											
ミニチュア																											
土製品																											
土器等合計	2	5	40	59	393	2	2	5		4	87	73	11	13	2		2	3		4	7	550		4			
石刃鏃																											
錐形石器																											
削器															1												
搔器																											
彫器																											
削片																											
二次加工ある石刃																											
石刃																											
石刃核																											
石鏃			2					1	1											1	1					1	
石槍(ナイフ)											1				1												
石錐																											
つまみ付きナイフ		1									1		1	1												1	
ナイフ																											
スクレイパー		1								2			2									2				1	
両面調整石器		1									1	1															
くさび形石器																											
石核																1					1						
二次加工ある剥片			1	1	4	1		2			1	1										1		1			
微細剥離痕ある剥片			1	1																							
剥片	2	19	58	2	5	13	2	38	1	4	33	22	50	23	17					3				1	3		
石斧		1																		1	1					1	
石のみ																											
擦切残片																											
矢柄研磨器等																											
砥石															10											1	
たたき石												1															
すり石																											
石錘																											
台石・石皿																											
加工痕ある礫																											
石器合計	2	23	62	4	9	14	2	41	2	6	37	25	53	36	18				1	6	4		2	7	1		
原石																											
礫			4	2	2						60	3		1		2											
遺物合計	4	28	106	65	404	16	4	46	2	10	184	101	64	50	20	2	2	3	1	10	11	550	2	11	1		

表Ⅲ-11 遺構出土遺物集計(5)

分類	P-65	P-67	P-74	P-75	P-77	P-78	P-80	P-81	P-82	P-83	P-84	P-85	P-87	P-88	P	計	F-1	F-2	F-3	F-4	F-5	F-6	F-7	F-8	F-9	F-12
I a																8										2
I b									1					1		8										
I b-1			2							1			3			83							12			
I b-2																10										
I b-3																										
I b-4		10			7	2	22	22	10	81	10	3	1			1724						8	2			
Ⅲ b																35						1				
Ⅲ b~Ⅳ a																76										
Ⅳ a	1					1										26										
Ⅳ b						1										1		2				2	1			
Ⅳ c																										
V C																										
不明																8		29			3	10	11		4	10
焼成粘土塊																										
土製円盤		2														3										
スタンプ形																										
ミニチュア																										
土製品																										
土器等合計	1	12	2		7	4	22	22	11	82	10	3	4	1		1982		31			3	21	26		4	12
石刃鎌																2										
錐形石器																										
削器																3										
搔器																										
彫器																5							1			
削片																2										1
二次加工ある石刃																5										
石刃																1										
石刃核																										
石鎌										6	1					27										
石槍(ナイフ)																4										
石錐													1			1										
つまみ付きナイフ																7										
ナイフ																										
スクレイパー			1									1				17										
両面調整石器		1				2				1	1					16										
くさび形石器																										
石核																3										
二次加工ある剥片										2						25		1								
微細剥離痕ある剥片			1	4		2		2			1		1			13										
剥片			3		1	62	1	14			11	6	3			998	63	146	18	5	13	45	434	1	29	120
石斧						1										5										
石のみ																										
擦切残片																										
矢柄研磨器等																										
砥石																11										
たたき石																1										
すり石																										
石錘																										
台石・石皿																										
加工痕ある礫																										
石器合計		1	5	4	1	67	1	16		9	14	7	5			1146	63	147	18	5	13	45	435	1	29	121
原石																1										
礫		1				1		1								89	1	2		1	1		14			
遺物合計	1	14	7	4	8	72	23	39	11	91	24	10	9	1		3218	64	180	18	6	17	66	475	1	33	133

表Ⅲ-12 遺構出土遺物集計(6)

分類	F-13	F-14	F-15	F-16	F-17	F-18	F-19	F-20	F-21	F-22	F-23	F-24	F-25	F-26	F-28	F-30	F-32	F	計	SP-1	SP-II	SP計	FC-1	FC-2
I a																11			13					
I b																								
I b-1																			12		1	1		
I b-2																								
I b-3																								
I b-4															4	5			19					
Ⅲ b																			1					
Ⅲ b~Ⅳ a	1	4																	5					
Ⅳ a																			5					
Ⅳ b																								
Ⅳ c																								
Ⅴ C																								
不明													2	2	26	7			104					
焼成粘土塊																			1					
土製円盤																								
スタンプ形																								
ミニチュア																								
土製品																								
土器等合計	1	4											2	2	30	24			160		1	1		
石刃鎌																								
錐形石器																								
削器																								2
搔器																								
彫器																			1					
削片																			1					
二次加工ある石刃																								
石刃																								1
石刃核																								
石鎌																								
石槍(ナイフ)																								
石錐																								1
つまみ付きナイフ																								2
ナイフ																								
スクレイパー																								7
両面調整石器							1												1					1
くさび形石器																								
石核																								
二次加工ある剥片																			1					5
微細剥離痕ある剥片																								5
剥片	1	9	12	1	4	2	4	4	31	67	4	2	27	11	29	4	29	1115	3980			3980	97	2142
石斧																								
石のみ																								
擦切残片																								
矢柄研磨器等																								
砥石																								
たたき石																								
すり石																								
石錘																								
台石・石皿																								
加工痕ある礫																								
石器合計	1	9	12	1	4	2	5	4	31	67	4	2	27	11	29	4	29	1119	3980			3980	97	2166
原石																								
礫																			19					
遺物合計	2	13	12	1	4	2	5	4	31	67	4	2	29	13	59	28	29	1298	3980	1		3981	97	2166

表Ⅲ-13 遺構出土遺物集計(7)

分類	FC-3	FC-4	FC-5	FC-6	FC-7	FC-8	FC計	S-1	S-2	S-3	S-4	S-5	S	計	遺構合計
I a															203
I b															80
I b-1															726
I b-2															1101
I b-3															4
I b-4															4337
Ⅲ b															196
Ⅲ b~Ⅳ a															3130
Ⅳ a															437
Ⅳ b															1918
Ⅳ c															135
V C															408
不明															607
焼成粘土塊															15
土製円盤															4
スタンプ形															2
ミニチュア															4
土製品															1
土器等合計															13329
石刃鎌															3
錐形石器															3
削器							2								20
搔器															2
彫器	1						1								28
削片															29
二次加工ある石刃															25
石刃							1								12
石刃核															0
石鎌	1	1		5			7								200
石槍(ナイフ)															96
石錐			2				3								34
つまみ付きナイフ	1						3								88
ナイフ															2
スクレイパー	1		1				9								337
両面調整石器			1				2								132
くさび形石器															0
石核															32
二次加工ある剥片	1	2	1	1			10								267
微細剥離痕ある剥片	2		3				10								183
剥片	5520	383	94	803	1169	293	10501								32801
石斧															42
石のみ															4
擦切残片															0
矢柄研磨器等															0
砥石															166
たたき石															10
すり石															6
石錘															17
台石・石皿															406
加工痕ある礫															1
石器合計	5527	386	102	809	1169	293	10549								34946
原石															9
礫								8	9	29	16	37	99		2306
遺物合計	5527	386	102	809	1169	293	10549	8	9	29	16	37	99		50590

表III-14 遺構出土掲載土器一覧(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図III-1	1	図版65	H-1	覆土	20	2	IV b	深鉢	口縁	刻み列、羽状縄文	164①
図III-1	2	図版65	H-1	覆土	20	1	IV b	深鉢	胴部	羽状縄文	164②
図III-1	3	図版65	H-1	覆土	18	1	V c	深鉢	口縁	縄線、RL縄文、口唇上縄文	439
図III-1	4	図版65	H-1	覆土	18	14	V c	深鉢	口～胴	縄線、RL縄文、口唇上縄文	114
			K27	IV	15	1					
図III-9	1	図版65	H-2・3	覆土	64	1	I b-1	深鉢	胴部	貼付带上刻み、LR縄文	212
図III-9	2	図版65	H-2・3	覆土	32	1	I b-1	深鉢	底部	連続刺突	209
			K24	IV	30	1				／平底	
図III-9	3	図版65	H-2	覆土	91	1	III b	深鉢	口縁	刻み、円形刺突、RL縄文	329
図III-9	4	図版65	H-2・3	覆土	72	3	IV a	深鉢	口～胴	肥厚带上沈線、円形刺突、羽状縄文	172
			L24	IV	33・35	2				／波状口縁	
図III-9	5	図版65	H-2	覆土	82	1	IV a	深鉢	口～胴	LR縄文、円形刺突	181
			H-2・3	覆土	72	3				口唇上縄文	
			J26	IV	24	2				／平縁、口径18.4cm	
			K26	IV	16・23	2					
図III-9	6	図版65	H-2	覆土	106	1	IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	334
図III-9	7	図版65	H-2・3	覆土	72	1	IV a	深鉢	胴部	LR縄文	332
			H-31	覆土1	16	1					
図III-9	8	図版65	H-2・3	覆土	62	1	III b～IV a	深鉢	底部	RL縄文	330
図III-9	9	図版65	H-3	覆土	76	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、突瘤、内面沈線	407
図III-9	10	図版65	H-3	覆土	76	1	IV b	深鉢	胴部	羽状縄文	408
図III-9	11	図版65	H-3	覆土	45	1	IV b	鉢	口～底	刻み列、羽状縄文	105
			H-3	覆土	76	2				／平縁、平底	
			排土		42	1				口径18.4cm器高9.8cm	
図III-9	12	図版65	H-3	覆土	56・71	2	スタンプ形土製品	全	全	菱文、円文、刺突 版面3.3×2.4高さ3.8cm、 16.0g	51
図III-14	1	図版66	H-4	覆土	100	3	I a	深鉢	口縁	条痕文	201
			O22	V	64	1					
図III-14	2	図版66	H-4	覆土	80	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	255
図III-14	3	図版67	H-4	床面	12	48	IV b	注口	胴～底	带状文(弧線・平行) 胴最大径18.8cm	5
図III-14	4	図版66	H-4	覆土	107	2	IV b	壺	胴部	带状文(曲線・平行)	109
			L23	IV	47・53	2					
図III-14	5	図版66	H-4	床面	2	13	IV b	壺	胴～底	带状文(入組文・平行) 胴最大径11.4cm	3
図III-14	6	図版66	H-4	覆土	78	1	IV c	深鉢	口縁	突瘤、RL縄文	112
			H-4	床面直上	9・11	7				／平縁、角形口唇	
			排土		9	1				口径24.2cm	
図III-14	7	図版67	H-4	覆土	78・89・106・ 108	112	IV b	深鉢	口～胴	刻み列、LR縄文、無文帯 ／波状口縁、口径40.4cm	6
図III-14	8	図版66	H-4	覆土	107	3	IV b	深鉢	口縁	刻み列、木葉文	107
			H-31	覆土	14	1				内面沈線	
			L21	IV	60	1					
図III-14	9	図版67	H-4	床面	13	17	IV b	深鉢	胴～底	刻み列、木葉文、LR縄文 ／凸面体、平底	4
図III-18	1	図版68	H-5	床面直上	17	1	IV b	小型注口	全	刻み列・木葉文／側面 口頸・注口、長さ9.6cm、 底径2.1cm、器高5.1cm	1
図III-18	2	図版68	H-5	床面	16	1	ミニチュア土器	底	底	底径2.0cm、7.7g	57
図III-18	3	図版68	H-5	覆土	19・20・21・ 52	29	IV b	大型浅鉢	口～底	刻み列、RL縄文 ／平縁、平底	7
			Q23	IV	14・15	2				口径24.7cm、器高9.7cm	
図III-18	4	図版68	H-5	床	15	1	IV b	注口	胴	RL縄文	166
			H-5	床下	62	1					
			H-11	覆土	20	1					
図III-18	5	図版68	H-5	覆土	52・58	2	IV b	大型浅鉢	口～胴	刻み列、入組带状文 ／平縁、口径28.5cm	101
			H-5	床面直上	2・3・4	13					
図III-18	6	図版68	H-5	床	11	5	IV b	深鉢	胴部	羽状縄文	410

表Ⅲ-15 遺構出土掲載土器一覽(2)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-18	7	図版68	H-5 HF-1	焼土	59	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	256
図Ⅲ-23	1	図版69	H-5	床上	61	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、LR縄文	157
			H-8	覆土	50・55	6					
図Ⅲ-23	2	図版69	H-8	覆土	44	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、絡条体圧痕	258
図Ⅲ-23	3	図版69	H-8	覆土	50・55	7	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	162
			P23	V	40・42	2					
図Ⅲ-23	4	図版69	H-8	覆土	50	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、RL縄文、絡条体圧痕	260
			P23	V	42	1					
図Ⅲ-23	5	図版69	H-8	覆土	44	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	259
図Ⅲ-23	6	図版69	H-8	覆土	42・43・44・ 46・47・49・ 50・51・52・ 53・54・55	213	I b-4	深鉢	口～底	細貼付帯(横位・縦位)、絡条体圧痕 ／波状口縁、平底、 口径26.5cm、器高29.4cm	34
			P23	V	42	10					
図Ⅲ-23	7	図版69	H-8	覆土	49・51	37	I b-4	深鉢	口～胴	細貼付帯(平行・波状)、絡条体圧痕、補修孔 波状口縁、口径18.2cm	23
図Ⅲ-23	8	図版69	H-8	覆土	57	1	ミニチュア土器	小型深鉢	口～底	器高2.4cm、4.7g	56
図Ⅲ-25	1	図版70	H-9	覆土	44・61	2	IV b	小型深鉢	口～胴	刻み列、LR縄文 ／平縁	110
			L23	IV	53	1					
			L24	攪乱	42	1					
図Ⅲ-28	1	図版71	H-3	覆土	75	1	III b	深鉢	口～胴	口唇上刻み、円形刺突、 結束縄文 補修孔 ／平縁、5単位山形突起	28
			H-10	覆土	28	15					
			L22	IV	46	1					
			L22	攪乱	48	1					
			L23	IV下	40	31					
			L23	IV	27・30・32・ 33・36・38・ 42・44・53	13					
			L23	V	46	3					
			L23	攪乱	45	4					
			M21	IV	53	1					
			M22	V	45・52・56	3					
図Ⅲ-28	2	図版71	H-10	床	36	48	IV a	深鉢	口～底	縦位の肥厚帯、円形刺突、 浅い凹帯、LRL縄文	29
			K22	IV	68	1					
			L23	IV	41	1					
			M23	IV	93・117	53					
図Ⅲ-29	3	図版70	H-10	覆土	37	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	262
図Ⅲ-29	4	図版70	H-10	覆土	27	4	IV b	深鉢	胴部	刻み列、平行沈線、S字状 沈線、羽状縄文	106
			M23	IV	112	1					
図Ⅲ-29	5	図版71	H-10	覆土	27	1	IV b	深鉢	胴～底	刻み列、LR縄文 ／平底、底径10.5cm	12
			M22	V	51	1					
			M23	IV	97・102	12					
			M23	攪乱	101	3					
			M24	IV	32・46・67・ 77	19					
図Ⅲ-29	6	図版70	H-10	覆土	35	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、羽状縄文、 内面沈線 ／波状口縁	104
			L23	V	47	1					
			M22	V	49	1					
			表採		6	1					
図Ⅲ-29	7	図版70	H-10	覆土	29	5	IV b	深鉢	胴部	刻み列、沈線、羽状縄文	409
図Ⅲ-29	8	図版71	H-10	覆土	1・2・27・29・ 35	13	IV b	深鉢	口～底	RL縄文 ／平縁、平底、角形口唇 口径31.4cm、底径8.0cm、 器高25.6cm	11
			L23	IV	53・58	62					
			L23	V	47	1					
			M22	V	49・51	5					
			M24	IV	46	1					
			排土		9	1					
図Ⅲ-31	1	図版72	H-11	覆土	18	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、RL縄文	263
図Ⅲ-31	2	図版72	H-11	床上	24	8	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	148

表Ⅲ-16 遺構出土掲載土器一覧(3)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-37	1	図版72	H-12	覆土5	1	1	IV b	四脚付浅鉢	全	刻み列、羽状縄文 ／平縁、平底、口縁窪み、棒状四脚	2
図Ⅲ-37	2	図版73	H-12(O18)	覆土4	42	1	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文	210
図Ⅲ-37	3	図版73	H-12(P18)	覆土5	213	1	I b-2	深鉢	口縁	縄端圧痕、羽状縄文	237
図Ⅲ-37	4	図版72	H-12(O17)	覆土5	127	1	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯、羽状縄文	139
			H-12(P18)	覆土5	107	1					
			H-12	覆土5	201	3					
図Ⅲ-37	5	図版73	H-12(N18)	覆土5	116	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文 ／平縁	144①
			H-12(O18)	覆土5	107	1					
			N18	IV	32	2					
図Ⅲ-37	6	図版73	H-12(O18)	覆土4	43	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状、縦位) 結束羽状縄文	144③
			H-12(O17)	覆土5	127	1					
			H-12(O18)	覆土5	164・256	2					
			H-12(P18)	覆土5	187	1					
図Ⅲ-37	7	図版73	H-12(O17)	覆土5	255	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状、縦位) 結束羽状縄文	144④
			H-12(O18)	覆土5	107	1					
			H-12(P17)	覆土5	185	1					
			H-12(P18)	覆土5	170・179・187	3					
図Ⅲ-38	8	図版73	H-12(O18)	覆土4	100	2	IV a	深鉢	口縁	LR縄文 縦位の貼付帯、円形刺突	184
			P19	IV	14	1					
図Ⅲ-38	9	図版73	H-12(O17)	覆土5	126	1	IV a	深鉢	口縁	RL縄文、円形刺突	335
図Ⅲ-38	10	図版72	H-12(O18)	覆土2	272	1	IV b	単孔壺	口～底	带状文(対向弧線・平行) 胴下部穿孔 ／平縁、平丸底 口径7.8cm、底径4.9cm、器高11.9cm	8
			H-12(N19)	覆土4	210	3					
			H-12(O19)	覆土4	46	3					
			H-12(N18)	覆土5	157・271	21					
			N18	IV	65	1					
図Ⅲ-38	11	図版73	H-12(P18)	覆土5	215	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列	412
図Ⅲ-38	12	図版73	H-12(P19)	覆土4	49	2	IV b	注口	口頸部	刻み列	111
			H-12(P19)	覆土5	137	1					
図Ⅲ-38	13	図版73	H-12(P18)	覆土5	200	1	IV b	注口	胴部	带状文(木葉文)	413
図Ⅲ-38	14	図版73	H-12(O18)	覆土5	166	1	IV b	注口	胴部	曲線带状文	415
図Ⅲ-38	15	図版73	H-12(P17)	覆土5	3	1	IV b	深鉢	底部	LR縄文	417
図Ⅲ-38	16	図版73	H-12(O19)	覆土5	132	2	IV c	深鉢	口縁	突瘤、LR縄文	416
			H-12(O19)	覆土5	166	1					
図Ⅲ-38	17	図版72	H-12(P19)	床面直上	2・289	70	IV c	深鉢	口～底	突瘤、羽状縄文／平縁、平底、口径29.8cm、底径12.5cm、器高27.0cm	10
図Ⅲ-38	18	図版72	H-12(N18)	覆土2	16・253・286	21	V c	深鉢	口～底	結節縄文、口唇上縄文、 内面沈線 ／平縁、平底 復元口径32.0cm、復元器高42.2cm	37
			H-12(O18)	覆土2	12・20・257・274	11					
			H-12(O19)	覆土2	30	8					
			H-12(N18)	覆土3	65	1					
			H-12(O18)	覆土3	28	4					
			H-12(N18)	覆土4	33	6					
			H-12(N19)	覆土4	35・211	12					
			H-12(O18)	覆土4	39・212	2					
			H-12(N18)	覆土5	117・158	2					
			N18	IV	58	1					
N19	IV	31・36・37	65								
O19	IV	8	4								
図Ⅲ-41	1	図版74	H-13(K19)	覆土1	72	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	265
図Ⅲ-41	2	図版74	H-13(K19)	覆土1	20	1	IV a	深鉢	胴部	LRL縄文	336
図Ⅲ-41	3	図版74	H-13(K18)	覆土3	49	1	Ⅲ b～IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	337
図Ⅲ-41	4	図版74	H-13(K18)	覆土1	46	1	IV b	深鉢	口縁	RL縄文 ／平縁	418
			L19	IV	20	1					
図Ⅲ-41	5	図版74	H-13	覆土1	110	1	IV b	深鉢	胴部	刻み列、突瘤、LR・RL縄文 ／平縁、角形口唇	103
			H-13	覆土2	129	2					

表Ⅲ-17 遺構出土掲載土器一覽(4)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
(前頁)			L18	IV	37	2				(前頁)	
			M23	IV	88	1					
			M24	IV	46	2					
図Ⅲ-41	6	図版74	H-13(J18)	覆土1	110	4	IV b	深鉢	口~胴	羽状縄文	167
			H-13(K18)	覆土1	69	5					
			K18	IV	6・8	4					
図Ⅲ-46	1	図版74	H-14(K17)	HM-2	283	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、撚糸文	266
図Ⅲ-46	2	図版74	H-14(K17)	覆土	17	1	IV a	深鉢	口~胴	肥厚帯上縦位の沈線、 口唇上刻み、円形刺突、 羽状縄文	173
			H-14(L16)	覆土	11・20	4					
			H-15(L15)	HM-2	63	2					
			H-26	HM-2	4	2					
図Ⅲ-46	3	図版74	K15	IV	2	1	IV a	深鉢	底部	底面内外面縄文	180
			H-14(L16)	HM-1	113	2					
図Ⅲ-52	1	図版75	H-14	HM-2	8	3	I b-2	深鉢	胴部	縦位貼付帯、RL縄文	238
図Ⅲ-52	2	図版75	H-15	覆土2	29	1					
図Ⅲ-52	2	図版75	H-15(K14)	HM-3	84	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	267
			H-15(K15)	HM-2	89	2					
図Ⅲ-52	3	図版75	H-15(M14)	HM-2	100	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、撚糸文	268
図Ⅲ-52	4	図版75	H-15(L14)	HM-4	92	1	I b-4	深鉢	胴部	LR縄文	211
図Ⅲ-52	5	図版75	H-15(L14)	HM-2	93	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	341
図Ⅲ-52	6	図版75	H-15	覆土1	11	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	円形刺突、内外面LR縄文	340
図Ⅲ-52	7	図版75	H-15(K15)	HM-2	86	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	RL縄文	342
図Ⅲ-52	8	図版75	H-15(L14)	覆土1	12	1	IV a	深鉢	胴部	羽状縄文	191
			H-15(K15)	HM-2	87	3					
図Ⅲ-58	1	図版76	H-16(M11)	覆土3	239	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	269
図Ⅲ-58	2	図版76	H-16(M11)	覆土3	241	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	270
図Ⅲ-58	3	図版76	H-16(K12)	HM-3	161	4	IV a	深鉢	口~胴	口唇上刻み、円形刺突、 LR縄文	189①
			H-16(L12)	HM-3	167	2					
			H-17(K12)	床上	31	2					
図Ⅲ-58	4	図版76	H-16(K12)	覆土3	123	2	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	円形刺突、LR縄文	189②
			K14	IV	8・10	4					
図Ⅲ-58	5	図版76	H-16(M11)	HM-3	240	1	IV a	深鉢	底部	底面内外面縄文	343
図Ⅲ-58	6	図版76	H-16	覆土	40	2	IV a	深鉢	胴~底	複節羽状縄文 /平底	38
			H-16	HM-3	1	11					
図Ⅲ-58	7	図版76	H-16	覆土	37	1	V c ?	深鉢	胴~底	LR縄文 /平底(くぼみ底) 底径9.0cm	13
			H-16	覆土1	71	28					
			H-16	覆土2	69	3					
			H-16(K13)	HM-2	90	1					
図Ⅲ-58	8	図版76	H-16	覆土	37	22	V c ?	鉢	口~底	無文 /口径13.1cm、底径6.2cm、 器高7.6cm	14
			H-16	覆土1	71	4					
			H-16	覆土2	39	2					
			H-16	HM-1	12	2					
図Ⅲ-58	9	図版76	H-16(L-12)	HM-3	168	1	土製円盤		羽状縄文、7.3g	61	
図Ⅲ-63	1	図版77	H-17(K12)	覆土2	76	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	271
図Ⅲ-63	2	図版77	H-17(L11)	覆土2	77	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	272
図Ⅲ-63	3	図版77	H-17	床上	3	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	肥厚帯上押引文、円形刺突	345
図Ⅲ-63	4	図版77	H-17(K11)	覆土1	117	1	Ⅲ b	深鉢	胴部	刺突列(押引)	346
図Ⅲ-63	5	図版77	H-17	床上	2	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文、RL縄文	347
図Ⅲ-63	6	図版77	H-17(L11)	覆土2	99	1	IV a	深鉢	底部	結束羽状縄文	348
図Ⅲ-66	1	図版78	H-18	覆土4	24	1	IV a	深鉢	口縁	円形刺突、LR縄文	350
			H-18	覆土3	28	1					
図Ⅲ-66	2	図版78	H-18	覆土3	22	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	円形刺突	349
図Ⅲ-66	3	図版78	H-18(O12)	覆土	12	3	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	(剥落)	351
図Ⅲ-66	4	図版78	H-18(O12)	覆土	13	4	V c	深鉢	口縁	結節縄文、口唇上縄文、	113①
図Ⅲ-66	5	図版78	H-18(O12)	覆土	13	5	V c	深鉢	胴部	結節縄文、補修孔	113④
図Ⅲ-66	6	図版78	H-18(O-12)	覆土	13	6	V c	深鉢	底部	結節縄文、 底面渦文、刺突	113⑤
			O11	IV	2	1					
図Ⅲ-69	1	図版78	H-19	覆土4	127	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	273
図Ⅲ-69	2	図版78	H-19	覆土4	126	1	IV a	深鉢	口縁	肥厚帯上沈線、円形刺突、	353
図Ⅲ-69	3	図版78	H-19	覆土3	78	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	354

表Ⅲ-18 遺構出土掲載土器一覽(5)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-69	4	図版78	H-19(N11)	覆土	45	1	IV a	深鉢	胴部	羽状縄文	352
図Ⅲ-69	5	図版78	H-19(N11)	覆土	32	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	355
図Ⅲ-69	6	図版78	H-19	覆土3	67	2	IV b	深鉢	口縁	刻み列、突瘤、羽状縄文	420
図Ⅲ-71	1	図版79	H-15(L14)	HM-2	94	1	I b-4	深鉢	口~底	貼付帯上刻み、縄文押捺 結束羽状縄文 /平縁、平底 口径21.5cm、底径9.2cm、 器高24.8cm	35
			H-16(L12)	覆土	15	4					
			H-17(L11)	覆土	114	22					
			H-20(L11)	覆土2	30・31・33	33					
			P-59	覆土	12	2					
			L11	IV	1・8	12					
図Ⅲ-75	1	図版79	H-22	覆土2	60	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	274
図Ⅲ-75	2	図版79	H-10	覆土	25	2	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯、捺糸文 /平底	143
			H-22	覆土3	48・68	4					
			M-1	盛土	51	1					
			K22	IV	64	2					
			L22		54	2					
図Ⅲ-75	3	図版79	H-22	覆土2	16	1	IV a	深鉢	口縁	肥厚帯上沈線、円形刺突、 結束羽状縄文	175
			H-22	覆土3	75	1					
図Ⅲ-75	4	図版79	H-22	覆土3	11	4	IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文、赤色顔料付着	187
図Ⅲ-79	1	図版80	H-23(M6)	覆土2	27	1	IV a	深鉢	胴部	LR縄文、沈線	357
図Ⅲ-80	1	図版80	H-24	覆土	11	1	I b-2	深鉢	口縁	縄線、赤色顔料付着	234
			Q21	IV	13	1					
図Ⅲ-80	2	図版80	H-24	覆土	13	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	275
			H-25	HM	37	1					
図Ⅲ-87	1	図版81	H-26 HP-5	覆土	11	2	I b-2	深鉢	胴部	短縄文、絡条体圧痕	235
図Ⅲ-87	2	図版80	H-26	HM-3	1	54	Ⅲ b	深鉢	口~胴	肥厚帯上押引、円形刺突、 結束羽状縄文/平縁、6 単位突起、口径24cm、残 存高40.2cm	27
			H-26(M16)	HM-3	109	2					
図Ⅲ-87	3	図版80	H-26	覆土	35	1	IV a	深鉢	口~胴	肥厚帯・口唇上刻み列、 円形刺突、LR縄文 /平縁、10単位?突起 口径33.3cm、 残存高33.6cm 炭化物、焼土粒多量付着	26
			H-26	HM-2	2・3	19					
			H-26(M16)	HM-2	45	1					
			H-14(K16)	覆土	15	3					
			H-14(L16)	覆土	69	8					
			K16	IV	10	1					
P20	IV	14	1								
図Ⅲ-91	1	図版81	H-27(N9)	覆土4	107	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文、絡条体	276
図Ⅲ-91	2	図版81	H-15(K14)	HM-2	84	1	I b-4	深鉢	胴部	絡条体圧痕	160①
			H-27(N9)	覆土4	52	1					
図Ⅲ-91	3	図版81	K14	IV	11	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	160②
			M14	IV	20	1					
図Ⅲ-91	4	図版81	H-27	床面	5	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	口縁	円形刺突	360
図Ⅲ-91	5	図版81	H-27(M10)	覆土	34	1	IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	359
図Ⅲ-93	1	図版81	H-28	覆土	1・2・3・5	7	IV a	深鉢	口~胴	肥厚帯・口唇上刻み列、 円形刺突、結束羽状縄文 /平縁	174
			H-29	覆土1	16	1					
			H-29	覆土2	17	1					
図Ⅲ-93	2	図版81	H-28	覆土1	13	1	IV a	深鉢	胴部	LR縄文	361
			H-28	覆土2	38	1					
図Ⅲ-94	1	図版82	H-29	覆土1	16	1	Ⅲ b	深鉢	口縁	円形刺突	362
図Ⅲ-97	1	図版82	H-30	覆土2	1・21	32	IV a	深鉢	口~胴	4単位耳状突起、円形刺突 RL縄文 /平縁、口径18.2cm	30
			H-30	覆土3	37	3					
			H-30	床上	6	1					
図Ⅲ-97	2	図版82	H-30	覆土1	45	4	IV a	深鉢	口~胴	結束羽状縄文、補修孔	178
			K19	IV	22	1					
図Ⅲ-98	1	図版82	H-31	覆土2	22	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	277
			H-31	覆土3	32	1					
図Ⅲ-98	2	図版82	H-31	覆土1	16	3	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	364
図Ⅲ-102	1	図版83	H-33	覆土	72	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	365
図Ⅲ-105	1	図版83	H-34(N16)	覆土3	55	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	213
図Ⅲ-105	2	図版83	H-34	覆土2	44	1	I b-2	深鉢	胴部	LR縄文、刺突	239

表Ⅲ-19 遺構出土掲載土器一覽(6)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-105	3	図版83	H-34(N16)	覆土4	112	2	I b-4	深鉢	胴部	絡条体圧痕	278
図Ⅲ-105	4	図版83	H-34(N17)	覆土3	115	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	279
図Ⅲ-105	5	図版83	H-34(N16)	覆土2	70	1	IV a	深鉢	口縁	縦位の隆起帯、円形刺突、 浅い凹帯、LR縄文	366
図Ⅲ-105	6	図版83	H-34(N16)	攪乱	92	1	IV a	深鉢	胴部	結節縄文	368
図Ⅲ-105	7	図版83	H-34(N16)	覆土3	57	1	IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	367
図Ⅲ-105	8	図版83	H-34	覆土2	30	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、突瘤、LR縄文	421
			P21	IV	39	1				／平縁、角形口唇	
図Ⅲ-107	1	図版83	H-34(N16)	覆土2	44	2	I b-4	深鉢	胴～底	細貼付帯、捺糸文、 絡条体圧痕	142
			H-34(N16)	覆土3	56	4				／平底	
			H-34(N17)	覆土2	60	1					
			H-35(N17)	覆土1	70	1					
			M15	IV	5	2					
			N15	IV	7	1					
図Ⅲ-107	2	図版83	H-35	覆土1	34	1	Ⅲ b	深鉢	胴～底	LR縄文	39
			H-35	床上	74	12				／平底	
図Ⅲ-107	3	図版83	N18	IV	66	2	IV a	深鉢	口縁	肥厚帯上沈線、円形刺突	183
図Ⅲ-107	4	図版83	H-35	覆土1	34	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	369
図Ⅲ-108	1	図版83	H-36(N10)	覆土4	20	1	Ⅲ b~IV a	深鉢	胴部	RL縄文	370
図Ⅲ-108	2	図版83	H-36(N10)	覆土4	16	2	Ⅲ b~IV a	深鉢	底部	LR縄文	371
図Ⅲ-108	3	図版83	H-36	覆土4	12	1	Ⅲ b~IV a	不明	不明		372
図Ⅲ-113	1	図版84	H-38(L16)	覆土1	187	3	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、内面条痕	128
			H-38(M16)	覆土1	188	1					
図Ⅲ-113	2	図版84	H-38	HM	113	5	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、縄文押捺	127
			H-38(M16)	覆土3	192	1					
図Ⅲ-113	3	図版84	H-38	HM	113	6	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文	126
図Ⅲ-113	4	図版84	H-38(M16)	覆土1	137	1	I b-2	深鉢	口縁	組紐圧痕	244
図Ⅲ-113	5	図版84	H-38(L16)	覆土3	29	1	I b-2	深鉢	口縁	組紐圧痕、短縄文	242
図Ⅲ-113	6	図版84	H-38(M16)	覆土2	39	1	I b-2	深鉢	口縁	絡条体圧痕、短縄文	243
図Ⅲ-113	7	図版84	H-38(L16)	覆土2	27	1	I b-2	深鉢	口縁	RL縄文、円形貼瘤	240
図Ⅲ-113	8	図版84	H-38(M16)	覆土1	38	1	I b-2	深鉢	口縁	RL縄文、短縄文	241
			H-38(M16)	覆土2	40	1					
			H-38(M17)	覆土2	44	1					
図Ⅲ-113	9	図版84	H-38	覆土2	2	9	I b-2	深鉢	口縁	LR縄文、短縄文、円孔	136①
図Ⅲ-113	10	図版84	H-38(M16)	覆土1	37	1	I b-2	深鉢	胴部	羽状縄文、短縄文	136②
			H-38(L16)	覆土2	27	1					
図Ⅲ-113	11	図版84	H-38	覆土1	11	1	I b-2	深鉢	口縁	RL縄文、縄端圧痕	131①
			H-38	覆土2	18	1					
図Ⅲ-113	12	図版84	H-38(M16)	覆土2	40	2	I b-2	深鉢	胴部	羽状縄文、短縄文、貼瘤	131②
図Ⅲ-113	13	図版85	H-12(O18)	覆土5	130	1	I b-2	深鉢	口～胴	絡条体圧痕(平行、 鋸歯状)、羽状縄文 口唇上縄文 ／平縁、口径29.4cm	17
			H-14(L17)	HM-1	115	5					
			H-38	覆土1	11	4					
			H-38(L17)	覆土1	33	24					
			H-38	覆土2	1・18	13					
			H-38(L16)	覆土2	25・27・130・ 131	8					
			H-38(L17)	覆土2	34	4					
			H-38(M16)	覆土2	40・41・139	14					
			H-38(M17)	覆土2	44	1					
			H-38(L16)	覆土3	28	2					
			H-38(M16)	覆土3	43	2					
図Ⅲ-114	14	図版84	H-38	覆土1	11	1	I b-2	深鉢	口～胴	短縄文、羽状縄文 ／平縁	135①
			H-38(L16)	覆土1	27	1					
			H-38(M16)	覆土1	38・137	6					
			H-38(L16)	HM-2	101	1					
			L16	IV	21	1					
			M16	IV	23	4					
図Ⅲ-114	15	図版84	H-38(L17)	覆土2	34	1	I b-2	深鉢	胴部	短縄文、羽状縄文	135③
			H-38(M17)	覆土2	44	1					
			J11	IV	4	1					

表Ⅲ-20 遺構出土掲載土器一覽(7)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-114	16	図版85	H-38(L17)	覆土1	30・33	5	I b-2	深鉢	底部	短縄文 ／平底、底径11.4cm	133
			H-38(L17)	覆土2	34	1					
図Ⅲ-114	17	図版84	H-38(M16)	覆土2	40・41	3	I b-2	深鉢	底部	短縄文／平底	132①
図Ⅲ-114	18	図版85	H-38	覆土2	3	10	I b-2	深鉢	底部	短縄文、羽状縄文 ／平底、底径11.4cm	134
			H-38(L16)	覆土2	27	4					
			H-38(M16)	覆土2	41	1					
図Ⅲ-114	19	図版84	H-38(L17)	覆土2	32	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、LR縄文	155①
			H-38(M16)	覆土2	42	4					
			H-38	覆土2	45	2					
			P-28	覆土	12	3					
図Ⅲ-114	20	図版84	H-38(M17)	覆土2	45	9	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状) 結束羽状縄文	155②
			M17	V	78	5					
図Ⅲ-114	21	図版84	M17	V	78	29	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状)	155③
図Ⅲ-114	22	図版84	H-38(K15)	HM	117	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	280
図Ⅲ-114	23	図版85	H-38 HP-2	覆土	13	2	ミニチュア土器		口～底	「盃形」、無文／4.7g	54
図Ⅲ-140	2	図版86	P-5	覆土	4	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	282
			P-5	覆土	16	1					
図Ⅲ-140	3	図版86	P-5	覆土	1	6	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯、絡条体圧痕、 底部内面縄文、指頭押 捺／平底、底径9.9cm	19
図Ⅲ-140	5	図版86	P-6	覆土	22	1	I b-4	深鉢	胴部	絡条体圧痕	284
図Ⅲ-140	6	図版86	P-6	覆土	25	1	I b-4	深鉢	胴部	絡条体圧痕	285
			P-11	覆土	5	1					
図Ⅲ-140	7	図版86	P-6	底	2	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	283
図Ⅲ-140	8	図版86	P-6	覆土	27	1	土製円盤			細貼付帯、羽状縄文/ 15.9g	62
図Ⅲ-140	12	図版86	P-8	覆土	22	1	I b-2	深鉢	胴部	羽状縄文	236
図Ⅲ-141	19	図版86	P-9	覆土	1	39	I b-4	深鉢	胴～底	絡条体圧痕	21
図Ⅲ-141	22	図版86	P-14	覆土	17	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	281
図Ⅲ-141	26	図版87	P-15	覆土	4	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、羽状縄文	286
図Ⅲ-141	27	図版87	P-16	覆土	3	8	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、斜行) 捺糸文	153
			L23	IV	51	2					
			O23	IV	83	1					
図Ⅲ-141	28	図版87	P-16	覆土	1	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文、羽状	287
図Ⅲ-141	29	図版87	P-16	覆土	1・4・5・6	39	I b-4	深鉢	胴～底	細貼付帯、結束羽状縄文	22
図Ⅲ-141	30	図版87	P-19	覆土	2	3	Ⅲb～Ⅳa	深鉢	胴部	LR縄文	374
図Ⅲ-141	31	図版87	P-19	覆土	2	2	Ⅲb～Ⅳa	深鉢	胴部	LR縄文	375
図Ⅲ-142	32	図版87	P-20	覆土	4	5	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	288
図Ⅲ-142	33	図版87	P-21	覆土	7	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	289
図Ⅲ-142	34	図版87	P-21	覆土	7	24	I b-4	深鉢	胴～底	細貼付帯、捺糸文 ／平底、底径8.2cm	20
			M19	IV	19・23	2					
			K18	IV	24	1					
図Ⅲ-142	35	図版87	P-25	底面	1	1	I b	深鉢	胴部	捺糸文	229
図Ⅲ-142	37	図版87	P-30	坑底直上	1	24	I b-4	小型深鉢	口～底	細貼付帯(平行、波状)、 結束羽状縄文／平縁、平 底、口径12.0cm、底径 9.2cm、器高8.8cm	18
図Ⅲ-142	38	図版87	P-31	覆土	17	3	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	290
図Ⅲ-142	43	図版88	P-35	覆土	13	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	216
図Ⅲ-142	44	図版88	P-35	覆土	18・29	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯(平行・波状)、 捺糸文	158
			M14		14	1					
図Ⅲ-142	45	図版88	P-36	坑底付近	11	1	I b-2	深鉢	胴部	縄文押捺、LR縄文	249
図Ⅲ-142	46	図版88	P-36	坑底付近	2・3・4	14	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯(平行・波状)、 結束羽状縄文	151
図Ⅲ-142	47	図版88	P-36	覆土	12	1	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯(平行・波状)、 結束羽状縄文、捺糸文 ／平底	137
			P-36	坑底付近	1	4					
			P-37	覆土	1・24	3					
			N17	IV	36	1					
図Ⅲ-143	48	図版88	P-37	覆土	12・18	2	I b-2	深鉢	胴部	絡条体圧痕、短縄文、RL	250
図Ⅲ-143	49	図版88	O19	IV	9・11・12	10	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	146②

図Ⅲ-21 遺構出土掲載土器一覽(8)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図Ⅲ-143	50	図版88	P-37	覆土	1	7	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	146③
図Ⅲ-143	51	図版88	P-37	覆土	13・16・21・24	20	I b-4	深鉢	口~胴	細貼付帯(平行、波状)、 結節縄文 /平縁、口径24.5cm	25
			P-37	底上	2・3	64					
			P-85	覆土下	11	1					
図Ⅲ-143	52	図版88	P-37	覆土	1・16・19・21・23・24	75	I b-4	深鉢	胴~底	細貼付帯、羽状縄文 /平底、底径9.5cm	33
図Ⅲ-143	53	図版89	P-39	覆土	11	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、捺糸文	291
図Ⅲ-143	54	図版89	P-41	覆土	13	3	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、羽状縄文	292
図Ⅲ-143	57	図版89	P-44	覆土2	2	5	Ⅲ b~Ⅳ a	深鉢	胴部	LR縄文、RL縄文	376
図Ⅲ-144	60	図版89	P-45	覆土2	14	3	Ⅲ b~Ⅳ a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	377
図Ⅲ-144	62	図版89	P-46	覆土	18	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状、縦位)、羽状縄文	163
			P-46	底上	16	2					
図Ⅲ-144	64	図版89	P-47	覆土	14	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯	293
図Ⅲ-144	65	図版89	P-47	覆土	14	6	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯(平行、波状、縦位)、絡条体圧痕、LR縄文	147
図Ⅲ-144	70	図版89	P-57	覆土	13	4	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	294
			P-57	覆土	14	1					
図Ⅲ-144	71	図版89	P-57	覆土	13	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	295
			P-57	覆土	14	1					
図Ⅲ-144	74	図版89	P-65	抗底	11	1	Ⅳ a	深鉢	胴部	LRL縄文	378
図Ⅲ-145	75	図版89	P-67	覆土	11	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯(平行、縦位)	296
			P-67	覆土	12	4					
図Ⅲ-145	76	図版89	P-67	覆土	12	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、羽状縄文	297
図Ⅲ-145	77	図版89	P-67	覆土	15	2	土製円盤			細貼付帯、羽状縄文/10.6g	63
図Ⅲ-145	78	図版90	P-74	覆土	11	2	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	222
図Ⅲ-145	80	図版90	P-78	覆土2	23	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状、縦位)、羽状縄文	152
			M17	Ⅳ	57・60	2					
図Ⅲ-145	81	図版90	P-78	覆土	12	1	Ⅳ b	深鉢	口~胴	沈線(平行、格子目状)、LR縄文	169
			J18	Ⅳ	2	1					
			K18	Ⅳ	6	1					
図Ⅲ-145	82	図版90	P-80	覆土	11	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	298
図Ⅲ-145	83	図版90	P-80	覆土	11	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	300
図Ⅲ-145	84	図版90	P-81	覆土	11	6	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	299
図Ⅲ-145	85	図版90	P-81	抗底直上	1	9	I b-4	深鉢	底部	絡条体圧痕、捺糸文	138
図Ⅲ-145	86	図版90	P-82	覆土	12	4	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行、波状、縦位)	301
図Ⅲ-145	87	図版90	P-83	覆土	12	5	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、RL縄文	302
図Ⅲ-145	88	図版90	P-83	底上	1	3	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、RL縄文	159
図Ⅲ-145	89	図版90	P-83	底上	1	8	I b-4	深鉢	胴部	縦位の細貼付帯、突起、結束羽状縄文	161
			P-83	覆土	19	1					
図Ⅲ-152	1	図版90	F-6	焼土	4	1	Ⅳ b	深鉢	胴部	刻み列	422
図Ⅲ-152	2	図版90	F-7	焼土	4	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	217
図Ⅲ-152	3	図版90	F-7	焼土	6	1	I b-4	深鉢	底部	LR縄文	304
図Ⅲ-152	4	図版90	F-28	焼土	11	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(梯子状)、LR縄文	305
			L22	Ⅳ	68	1					

表III-22 遺構出土掲載石器一覧(1)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図III-1	5	図版65	H-1	覆土	11	石錘	安山岩	9.9	5.7	2.1	192.8	石錘集中	207
図III-1	6	図版65	H-1	覆土	3	石錘	安山岩	8.4	6.3	1.7	102.8		205
図III-1	7	図版65	H-1	覆土	7	石錘	安山岩	7.7	5.8	1.4	89.5	石錘集中	206
図III-10	13	図版66	H-2	覆土	1	石鏃	黒曜石	3.3	1.1	0.3	0.7	SMH1-X11	1
図III-10	14	図版66	H-2	覆土	4	石鏃	黒曜石	2.4	1.1	0.2	0.5		4
図III-10	15	図版66	H-2	覆土	2	石鏃	黒曜石	(2.9)	1.3	0.3	0.9		2
図III-10	16	図版66	H-3	覆土	5	石鏃	黒曜石	3.5	1.4	0.5	2.2		212
図III-10	17	図版66	H-2・3	覆土	1	石鏃	黒曜石	3.7	1.4	0.5	2.8		210
図III-10	18	図版66	H-3	覆土	6	石鏃	黒曜石	(3.8)	1.5	0.7	3.2		12
図III-10	19	図版66	H-2	覆土	5	石鏃	黒曜石	4.0	1.6	0.7	3.4		5
図III-10	20	図版66	H-3	覆土	4	石鏃	黒曜石	4.4	1.7	0.5	3.4		11
図III-10	21	図版66	H-3	覆土	7	石鏃	黒曜石	4.2	2.2	0.6	3.5		13
図III-10	22	図版66	H-2	覆土	3	石鏃	黒曜石	(4.2)	2.2	0.6	3.8	SMH1-X13	3
図III-10	23	図版66	H-2	覆土	35	石錐	黒曜石	3.2	1.0	0.5	2.0		208
図III-10	24	図版66	H-3	覆土	33	石槍	黒曜石	5.7	2.2	0.9	8.2		213
図III-10	25	図版66	H-2	覆土	37	搔器	黒曜石	(3.1)	2.4	0.7	4.7		9
図III-10	26	図版66	H-2・3	覆土	26	つまみ付きナイフ	黒曜石	4.6	2.2	0.7	5.1		211
図III-10	27	図版66	H-2	覆土	12	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.3	2.4	0.6	9.6	SMH1-X16	7
図III-10	28	図版66	H-2	覆土	7	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.2	1.6	0.6	3.9		6
図III-10	29	図版66	H-2	覆土	13	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.3	2.3	0.6	6.7		8
図III-10	30	図版66	H-2	覆土	39	削器	黒曜石	9.3	2.3	0.4	9.8		476
図III-10	31	図版66	H-2	覆土	54	スクレイパー	黒曜石	3.7	3.9	0.9	9.4		209
図III-10	32	図版66	H-2	覆土	40	石核	黒曜石	3.3	3.4	1.6	14.7	SMH1-X15	10
図III-10	33	図版66	H-3	覆土	10	石核	黒曜石	3.1	5.3	2.2	28.2		14
図III-10	34	図版66	H-2	覆土	62	砥石	砂岩	50.0	13.2	13.0	11800		501
図III-15	10a	図版67	○24	IV	17	彫器削片	黒曜石	5.0	1.1	0.5	8.8		469①
図III-15	10b	図版67	H-4	覆土	25	彫器	黒曜石	5.3	2.2	0.8	2.3		469②
図III-15	11	図版67	H-4	覆土	30	削器	黒曜石	7.7	2.5	1.1	14.1		459
図III-15			H-8	覆土	14	石刃							
図III-15	12	図版67	H-4	覆土	72	石鏃	黒曜石	(3.0)	1.3	0.5	1.8		214
図III-15	13	図版67	H-4	覆土	26	石鏃	黒曜石	4.5	2.0	0.5	3.4		17
図III-15	14	図版67	H-4	覆土	32	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.0	2.4	0.8	9.3		18
図III-15	15	図版67	H-4	覆土	23	石槍	黒曜石	7.2	2.7	0.8	13.1		16
図III-15	16	図版67	H-4	覆土	33	石槍	黒曜石	5.9	2.9	1.0	13.5		19
図III-15	17	図版67	H-4	覆土	20	エンドスクレイパー	黒曜石	5.9	4.1	1.6	33.7		215
図III-15	18	図版67	H-4	床面	3	スクレイパー	黒曜石	6.7	4.7	1.0	28.0		15
図III-15	19	図版67	H-4	覆土	43	加工痕ある礫	泥岩	5.6	4.0	1.3	41.7	石製品?	218
図III-15	20	図版67	H-4	覆土	66	石錘	安山岩	4.4	6.4	1.3	50.1		216
図III-15	21	図版67	H-4	覆土	67	たたき石	砂岩	9.0	5.6	2.8	231		217
図III-15	22		H-4	覆土	117	台石	安山岩	(19.4)	13.4	8.8	3500		505
図III-19	8	図版68	H-5	床面	18	石鏃	黒曜石	4.2	1.7	0.4	2.7		24
図III-19	9	図版68	H-5	覆土	33	石鏃	黒曜石	3.5	1.0	0.6	1.7		165
図III-19	10	図版68	H-5	床面	10	石錐	黒曜石	8.2	1.9	0.8	12.4	SMH1-X20	22
図III-19	11	図版68	H-5	覆土	22	つまみ付きナイフ	黒曜石	(7.9)	4.0	1.1	21.1		169
図III-19	12	図版68	H-5	覆土	32	スクレイパー	黒曜石	7.2	5.1	0.6	20.2		219
図III-19	13	図版68	H-5	床面	5	スクレイパー	黒曜石	6.6	4.1	0.7	16.6		20
図III-19	14	図版68	H-5	床面	6	石核	黒曜石	5.9	5.1	3.3	95.1	SMH1-X22	21
図III-19	15	図版69	H-5	床面	18	石核	黒曜石	5.4	4.9	2.7	74.9	SMH1-X21	23
図III-19	16		H-5	床面直上	1	礫	安山岩	24.8	18.8	10.0	5000	被熱	506
図III-20	1	図版68	H-6	覆土	3	石斧	緑色泥岩	5.3	2.4	0.7	16.1		220
図III-23	9	図版69	H-8	覆土	28	スクレイパー	黒曜石	(1.9)	(2.5)	(0.8)	3.4		223
図III-23	10	図版69	H-8	覆土	6	石錐	黒曜石	3.9	1.3	0.4	2.5		221
図III-23	11	図版69	H-8	覆土	29	石錐	黒曜石	3.2	1.0	0.4	1.9		222
図III-23	12	図版69	H-8	覆土	2	つまみ付きナイフ	頁岩	5.8	2.2	0.7	8.5		166
図III-23	13	図版69	H-8	覆土	8	二次加工ある石刃	黒曜石	5.5	2.0	0.6	8.0		480
図III-23	14	図版69	H-8	覆土	3	二次加工ある石刃	黒曜石	9.8	2.5	0.7	17.9	SMH1-X41	118
図III-23	15	図版69	H-8	覆土	5	二次加工ある石刃	黒曜石	13.8	3.2	0.9	36.1		224
図III-25	2a	図版70	H-9	覆土	14	彫器	黒曜石	4.6	2.0	1.0	7.0		471

表Ⅲ-23 遺構出土掲載石器一覧(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-25	2 b	図版70	H-9	覆土	13	彫器	黒曜石	5.2	2.3	0.7	8.8		28
図Ⅲ-25	3	図版70	H-9	覆土	19	彫器	黒曜石	(4.2)	2.4	1.1	10.0		31
図Ⅲ-25	4	図版70	H-9	覆土	7	搔器	黒曜石	7.9	3.3	1.8	24.5		226
図Ⅲ-25	5	図版70	H-9	覆土	6	削器	黒曜石	8.2	3.1	0.7	16.8		225
図Ⅲ-25	6	図版70	H-9	覆土	17	石鏃	黒曜石	4.6	1.6	0.7	3.8		29
図Ⅲ-25	7	図版70	H-9	覆土	3	石鏃	黒曜石	(4.3)	(2.3)	0.7	5.4		26
図Ⅲ-25	8	図版70	H-9	覆土	2	両面調整石器	黒曜石	5.3	2.5	1.0	13.2		25
図Ⅲ-25	9	図版70	H-9	覆土	5	スクレイパー	黒曜石	(5.9)	3.6	0.5	12.9		27
図Ⅲ-25	10	図版70	H-9/M21	覆土	12	スクレイパー	黒曜石	6.0	6.3	0.6	32.2		173
図Ⅲ-25	11	図版70	H-9	覆土	18	石核	黒曜石	3.9	3.8	1.9	27.4		30
図Ⅲ-25	12	図版70	H-9	覆土	24	石斧	緑色泥岩	(12.0)	7.2	3.5	382.6		227
図Ⅲ-26	13	図版70	H-9	覆土	36	砥石	砂岩	42.0	8.6	4.0	1334		503
図Ⅲ-26	14		H-9	覆土	63	台石	安山岩	(21.5)	(15.3)	(11.1)	5100		507
図Ⅲ-29	9	図版71	H-10	覆土	8	彫器	黒曜石	3.3	2.7	1.1	9.3		36
図Ⅲ-29	10	図版71	H-10	覆土	5	石鏃	黒曜石	3.0	0.9	0.2	0.5		34
図Ⅲ-29	11	図版71	H-10	覆土	3	石鏃	黒曜石	3.4	2.2	0.5	2.8		32
図Ⅲ-29	12	図版71	H-10	覆土	4	石鏃	黒曜石	4.7	2.6	0.5	4.8	SMH1-X14	33
図Ⅲ-29	13	図版71	H-10	覆土	6	両面調整石器	黒曜石	5.4	2.9	1.1	13.9		35
図Ⅲ-29	14	図版71	H-10	覆土	7	スクレイパー	黒曜石	4.8	3.1	1.1	14.1		228
図Ⅲ-31	3	図版72	H-11	覆土	3	スクレイパー	黒曜石	3.6	3.3	0.4	5.7		37
図Ⅲ-31	4	図版72	H-11	覆土	12	石斧	泥岩	7.2	2.8	1.2	37.7		190
図Ⅲ-31	5	図版72	H-11HP-2	覆土	14	すり石	安山岩	9.0	11.3	3.7	690		229
図Ⅲ-39	19	図版73	H-12	覆土2	26	石鏃	黒曜石	4.4	1.1	0.3	1.1		230
図Ⅲ-39	20	図版73	H-12	覆土4	219	石鏃	黒曜石	2.5	1.0	0.2	0.6		231
図Ⅲ-39	21	図版73	H-12	覆土5	101	石鏃	黒曜石	(2.6)	1.5	0.4	1.0	SMH1-X37	137
図Ⅲ-39	22	図版73	H-12	覆土6	260	石鏃	黒曜石	2.9	1.7	0.2	0.9		232
図Ⅲ-39	23	図版73	H-12/P19	覆土5	152	両面調整石器	黒曜石	2.4	1.7	0.7	2.6		179
図Ⅲ-39	24	図版73	H-12	覆土5	6	石槍	黒曜石	(6.5)	3.7	0.9	26.1		233
図Ⅲ-39	25	図版73	H-12	覆土5	171	石錐	黒曜石	3.0	1.9	1.1	4.4		234
図Ⅲ-39	26	図版73	H-12	覆土5	102	石錐	黒曜石	7.2	4.2	1.2	34.7	SMH1-X38	138
図Ⅲ-39	27	図版73	H-12	覆土5	144	スクレイパー	黒曜石	4.9	3.2	0.6	11.6	SMH1-X39	139
図Ⅲ-39	28	図版73	H-12	床面直上	181	スクレイパー	黒曜石	7.3	4.2	1.0	27.7		236
図Ⅲ-39	29	図版73	H-12	覆土4	94	スクレイパー	黒曜石	3.6	3.4	1.3	13.1		235
図Ⅲ-39	30	図版73	H-12	床面	5	スクレイパー	黒曜石	8.2	5.1	0.8	32.8	SMH1-X40	140
図Ⅲ-39	31	図版73	H-12	覆土5	193	たたき石	安山岩	(8.2)	7.3	5.2	435.0		237
図Ⅲ-41	7	図版74	H-13/K19	覆土3	104	石鏃	黒曜石	3.3	2.1	0.6	3.4		239
図Ⅲ-41	8	図版74	H-13	覆土3	2	石鏃	黒曜石	5.3	3.3	0.5	7.0		238
図Ⅲ-41	9	図版74	H-13/J19	覆土1	122	つまみ付きナイフ	黒曜石	4.7	2.0	0.8	4.3		167
図Ⅲ-41	10	図版74	H-13/K19	覆土2	61	スクレイパー	黒曜石	3.2	2.5	0.7	4.5		240
図Ⅲ-41	11	図版74	H-13	覆土3	1	石斧	不明	9.7	4.5	2.2	147.3		241
図Ⅲ-41	12		H-13	覆土2	11	台石	安山岩	19.3	11.9	9.0	3530		508
図Ⅲ-47	4	図版75	H-14/K17	覆土	1	石刃鏃	黒曜石	3.8	1.6	0.5	2.6		452
図Ⅲ-47	5	図版75	H-14	HM2	240	石鏃	黒曜石	2.7	2.0	0.5	1.7		244
図Ⅲ-47	6	図版75	H-14	HM1	143	石鏃	黒曜石	3.5	1.8	0.5	2.6		243
図Ⅲ-47	7	図版75	H-14	HM1	120	石鏃	黒曜石	5.2	1.8	0.4	3.3		242
図Ⅲ-47	8	図版75	H-14	HM2	224	石槍	黒曜石	5.1	2.9	0.8	9.7		247
図Ⅲ-47	9	図版75	H-14	HM2	5	石槍	黒曜石	(12.6)	4.2	1.2	63.0	10点接合	245
図Ⅲ-47	10	図版75	H-14	HM2	217	石槍	黒曜石	5.6	4.0	0.6	8.1		246
図Ⅲ-47	11	図版75	H-14	HM2	220	石錐	黒曜石	1.9	1.1	1.0	1.7		248
図Ⅲ-47	12	図版75	H-14	HM2	192	つまみ付きナイフ	黒曜石	7.3	3.5	1.1	27.0		249
図Ⅲ-47	13	図版75	H-14	HM2	268	スクレイパー	黒曜石	6.3	3.5	1.3	27.3		250
図Ⅲ-47	14	図版75	H-14	HM2	285	スクレイパー	黒曜石	5.2	3.7	1.2	22.5		301
図Ⅲ-47	15	図版75	H-14	HM2	7	石斧	片岩	6.0	2.9	0.9	22.7		251
図Ⅲ-47	16	図版75	H-14	HM2	191	石斧	片岩	(4.3)	2.6	0.6	10.7		253
図Ⅲ-47	17	図版75	H-14	HM2	190	石斧	泥岩	8.1	3.2	1.5	57.4		252
図Ⅲ-47	18	図版75	H-14	覆土	79	砥石	砂岩	7.0	4.3	0.5	23.7	石製品?	254
図Ⅲ-47	19	図版75	H-14	HM2	4	砥石	砂岩	12.7	6.6	5.2	585		255
図Ⅲ-52	9	図版75	H-15	HM1	79	石鏃	黒曜石	2.2	0.8	0.2	0.4		302

表Ⅲ-24 遺構出土掲載石器一覧(3)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-52	10	図版75	H-15	覆土2	34	石鏃	黒曜石	2.5	0.9	0.2	0.4		142
図Ⅲ-52	11	図版75	H-15	覆土1	13	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.2	0.9		145
図Ⅲ-52	12	図版75	H-15	HM2	126	石鏃	黒曜石	2.8	1.5	0.3	1.4		304
図Ⅲ-52	13	図版75	H-15	HM2	125	石鏃	黒曜石	3.6	1.6	0.4	2.0		303
図Ⅲ-52	14	図版75	H-15	覆土2	24	石鏃	黒曜石	3.7	1.7	0.7	2.8	SMH1-X29	129
図Ⅲ-52	15	図版75	H-15	HM2	127	石鏃	黒曜石	5.3	2.4	0.7	6.4		305
図Ⅲ-52	16	図版75	H-15	HM2	120	ナイフ	黒曜石	6.4	2.4	0.8	10.0		257
図Ⅲ-52	17	図版75	H-15	HM2	128	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.7	3.0	0.7	12.1		256
図Ⅲ-52	18	図版75	H-15	HM2	25	エンドスクレイパー	黒曜石	5.3	3.3	0.7	25	SMH1-X35	135
図Ⅲ-52	19	図版75	H-15	HM2	135	エンドスクレイパー	黒曜石	4.1	3.7	1.6	19.1		175
図Ⅲ-52	20	図版75	H-15	覆土	23	石錘	安山岩	7.2	5.2	1.5	78.3		258
図Ⅲ-52	21		H-15	床面直上	82	台石	安山岩	21.1	17.9	11.6	5980		509
図Ⅲ-58	10	図版77	H-16/K13	HM2	95	石鏃	黒曜石	(4.3)	1.0	0.3	1.2		143
図Ⅲ-58	11	図版77	H-16	HM2	107	石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.2	0.4		307
図Ⅲ-58	12	図版77	H-16	HM3	190	石鏃	黒曜石	3.4	1.5	0.2	1.1		309
図Ⅲ-58	13	図版77	H-16	HM1	108	石鏃	黒曜石	3.1	1.7	0.3	1.3		308
図Ⅲ-58	14	図版77	H-16	覆土2	47	石錘	黒曜石	2.5	0.8	0.3	1.6		313
図Ⅲ-58	15	図版77	H-16	HM2	94	石槍	黒曜石	4.8	2.5	0.7	6.1		306
図Ⅲ-58	16	図版77	H-16	HM2	216	石槍	黒曜石	(4.6)	3.3	0.8	9.4		149
図Ⅲ-58	17	図版77	H-16	HM2	175	石槍	黒曜石	6.9	4.5	1.1	19.4		311
図Ⅲ-59	18	図版77	H-16	HM3	189	石槍	黒曜石	11.3	3.8	1.1	41.4		312
図Ⅲ-59	19	図版77	H-16	HM3	2	石槍	黒曜石	(11.7)	4.6	1.2	66.9		310
図Ⅲ-59	20	図版77	H-16	HM2	219	スクレイパー	黒曜石	7.0	2.6	0.8	14.1		315
図Ⅲ-59	21	図版77	H-16	HM2	183	スクレイパー	黒曜石	5.1	2.9	1.2	13.1		314
図Ⅲ-59	22	図版77	H-16	HM2	185	石核	黒曜石	4.7	3.7	3.1	55.6	SMH1-X36	136
図Ⅲ-59	23	図版77	H-16/M12	HM3	141	石斧	片岩	7.1	3.7	0.7	38.1		185
図Ⅲ-59	24	図版77	H-16	覆土2	33	石のみ	片岩	4.6	2.4	0.7	12.9		181
図Ⅲ-59	25	図版77	H-16	覆土2	34	砥石	砂岩	9.8	6.3	4.6	368.3		193
図Ⅲ-59	26	図版77	H-16	HM2	97	砥石	砂岩	(7.5)	(6.1)	(4.8)	325.2		259
図Ⅲ-59	27	図版77	H-16/K13	HM2	98	たたき石	石英片岩?	9.5	7.7	5.9	625		198
図Ⅲ-63	7	図版77	H-17	覆土2	91	石鏃	黒曜石	2.7	1.5	0.2	0.9		317
図Ⅲ-63	8	図版77	H-17	覆土3	52	石鏃	黒曜石	(4.1)	1.9	0.4	2.4		316
図Ⅲ-63	9	図版77	H-17	覆土2	123	つまみ付きナイフ	黒曜石	7.2	2.3	0.7	12.8		318
図Ⅲ-63	10	図版77	H-17	覆土2	47	スクレイパー	黒曜石	4.9	3.5	1.0	12.8		260
図Ⅲ-63	11	図版77	H-17	覆土2	40	エンドスクレイパー	黒曜石	5.5	3.3	0.3	6.2		319
図Ⅲ-63	12	図版77	H-17/K11	覆土1	124	エンドスクレイパー	黒曜石	5.0	3.0	0.9	8.4		177
図Ⅲ-63	13		H-17	床面直上	24	台石	安山岩	19.7	15.2	8.4	3310		510
図Ⅲ-66	7	図版78	H-18	覆土	14	石鏃	黒曜石	3.4	1.2	0.5	1.4		320
図Ⅲ-66	8	図版78	H-18	覆土	32	石鏃	黒曜石	4.6	1.4	0.6	3.7		321
図Ⅲ-66	9	図版78	H-18	床面	1	石槍	黒曜石	14.0	4.6	1.5	80.1	SMH1-X33	133
図Ⅲ-66	10	図版78	H-18	床面直上	2	石斧	緑色泥岩	5.4	3.5	1.1	35.1		184
図Ⅲ-69	7	図版78	H-19	覆土5	28	石鏃	黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.7	SMH1-X30	130
図Ⅲ-69	8	図版78	H-19	覆土4	117	石鏃	黒曜石	2.7	0.9	0.3	0.5		324
図Ⅲ-69	9	図版78	H-19	覆土4	97	石鏃	黒曜石	2.8	1.3	0.3	0.6		323
図Ⅲ-69	10	図版78	H-19	覆土4	47	石鏃	黒曜石	4.5	2.7	0.7	6.4		322
図Ⅲ-69	11	図版78	H-19	覆土3	68	石槍	黒曜石	(9.7)	3.5	1.1	32.7	SMH1-X32	132
図Ⅲ-69	12	図版78	H-19	覆土3	63	つまみ付きナイフ	黒曜石	8.0	5.0	0.7	23.5		171
図Ⅲ-69	13	図版78	H-19	覆土4	34	スクレイパー	黒曜石	3.9	3.1	0.5	8.5		325
図Ⅲ-69	14	図版78	H-19	覆土3	83	スクレイパー	黒曜石	5.5	5.9	0.8	34.7		172
図Ⅲ-69	15	図版78	H-19	覆土4	118	スクレイパー	黒曜石	6.1	6.7	1.0	44.5		261
図Ⅲ-69	16	図版78	H-19	覆土4	29	石のみ	緑色泥岩	3.6	1.4	0.7	5.6		180
図Ⅲ-69	17	図版78	H-19	覆土3	21	石錘	安山岩	6.5	6.6	1.6	117.7		262
図Ⅲ-71	2	図版79	H-20	HM	7	石槍	黒曜石	5.1	3.2	0.6	7.1		327
図Ⅲ-71	3	図版79	H-20	床面	13	石鏃	黒曜石	(3.7)	2.6	0.4	3.5		326
図Ⅲ-73	1	図版79	H-21	覆土4	21	石鏃	黒曜石	3.6	1.8	0.5	2.7		328
図Ⅲ-73	2	図版79	H-21	覆土4	28	スクレイパー	黒曜石	6.4	2.6	0.7	15.2		263
図Ⅲ-75	5	図版79	H-22	覆土3	13	彫器削片	黒曜石	4.8	1.7	0.5	2.7		267
図Ⅲ-75	6	図版79	H-22	覆土3	52	石鏃	黒曜石	3.0	0.9	0.2	0.5		330

表Ⅲ-25 遺構出土掲載石器一覧(4)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-75	7	図版79	H-22	覆土3	51	石鏃	黒曜石	(5.0)	1.6	0.6	4.0		329
図Ⅲ-75	8	図版79	H-22	覆土3	50	石槍	黒曜石	(7.3)	4.9	0.9	40.4		264
図Ⅲ-75	9	図版79	H-22	覆土2	14	エンドスクレイパー	黒曜石	2.9	3.6	1.8	15.7		265
図Ⅲ-75	10	図版79	H-22	覆土2	22	エンドスクレイパー	黒曜石	4.8	3.0	0.9	14.2		266
図Ⅲ-75	11	図版79	H-22	覆土2	12	たたき石	凝灰岩	(9.1)	9.1	5.2	470		268
図Ⅲ-75	12		H-22	床面直上	74	台石	安山岩	22.2	13.7	12.5	6590		511
図Ⅲ-79	2	図版80	H-23	床面	7	石錐	黒曜石	(2.5)	1.3	0.5	1.7		269
図Ⅲ-79	3	図版80	H-23	覆土1	19	石鏃	黒曜石	2.8	1.5	0.2	1.0	SMH1-X31	131
図Ⅲ-79	4	図版80	H-23	覆土2	38	石鏃	黒曜石	(4.3)	2.2	0.8	6.2		331
図Ⅲ-79	5	図版80	H-23	覆土1	15	石鏃	黒曜石	5.0	2.2	0.6	6.0		332
図Ⅲ-79	6	図版80	H-23	覆土2	11	石槍	黒曜石	14.6	5.3	1.3	80.3		152
図Ⅲ-79	7	図版80	H-23	覆土2	12	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.8	1.9	0.7	5.7	SMH1-X34	134
図Ⅲ-79	8	図版80	H-23	覆土2	30	スクレイパー	黒曜石	7.1	3.2	0.6	13.5		270
図Ⅲ-79	9	図版80	H-23	床面	2	スクレイパー	黒曜石	6.2	2.6	0.7	9.8		271
図Ⅲ-79	10	図版80	H-23	覆土1	16	スクレイパー	黒曜石	5.0	2.0	0.5	6.0		272
図Ⅲ-80	3	図版80	H-24	覆土	15	石鏃	黒曜石	2.6	1.1	0.2	0.7		273
図Ⅲ-80	4	図版80	H-24	覆土	16	削器	黒曜石	(5.4)	(1.7)	(0.7)	5.8		274
図Ⅲ-82	2	図版80	H-25	覆土3	22	石鏃	黒曜石	3.3	1.9	0.5	2.4		275
図Ⅲ-82	3	図版80	H-25	覆土3	25	スクレイパー	黒曜石	(5.5)	2.1	0.6	7.9		276
図Ⅲ-88	4	図版81	H-26	HM3	95	石鏃	黒曜石	(2.7)	0.7	0.2	0.5		335
図Ⅲ-88	5	図版81	H-26	HM2	50	石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.6		334
図Ⅲ-88	6	図版81	H-26	HM2	49	石鏃	黒曜石	4.0	2.3	0.4	3.0		333
図Ⅲ-88	7	図版81	H-26	HM3	8	石槍	黒曜石	5.6	2.2	0.7	6.6		337
図Ⅲ-88	8	図版81	H-26	HM3	139	石錐	黒曜石	3.3	1.3	0.8	3.3		338
図Ⅲ-88	9	図版81	H-26/M16	HM2	52	石錐	黒曜石	3.2	1.4	0.5	2.1		163
図Ⅲ-88	10	図版81	H-26	HM3	117	スクレイパー	黒曜石	4.8	3.0	1.1	17.3		277
図Ⅲ-88	11	図版81	H-26	覆土	19	石槍	黒曜石	7.2	2.6	1.1	15.0		151
図Ⅲ-88	12	図版81	H-26	覆土	22	つまみ付きナイフ	黒曜石	10.6	3.9	0.8	31.0		170
図Ⅲ-88	13	図版81	H-26	HM3	6	石槍	黒曜石	12.6	3.9	1.4	57.7		154
図Ⅲ-88	14	図版81	H-26	HM2	5	石槍	黒曜石	(10.4)	4.3	1.4	56.1		336
図Ⅲ-88	15	図版81	H-26	HM3	7	石槍	黒曜石	11.5	4.3	1.3	62.0		155
図Ⅲ-88	16		H-26	HM2	9	台石	安山岩	25.5	16.2	12.0	5290		512
図Ⅲ-91	6	図版81	H-27	覆土4	54	石鏃	黒曜石	4.3	2.2	0.5	3.9		339
図Ⅲ-91	7	図版81	H-27	床面直上	6	石鏃	黒曜石	4.8	2.6	0.5	5.2		340
図Ⅲ-91	8	図版81	H-27	覆土4	85	石槍	黒曜石	7.1	2.6	0.8	12.1		341
図Ⅲ-91	9	図版81	H-27	覆土	29	スクレイパー	黒曜石	5.2	3.2	1.1	14.2		342
図Ⅲ-91	10	図版81	H-27	覆土4	58	スクレイパー	黒曜石	7.2	3.7	0.9	27.7		278
図Ⅲ-91	11	図版81	H-27/N9	覆土4	78	石のみ	片岩	7.1	1.5	0.8	11.9		183
図Ⅲ-93	3	図版81	H-28	覆土1	14	石鏃	黒曜石	2.5	1.1	0.5	1.0		279
図Ⅲ-93	4	図版81	H-28	覆土1	16	石錐	黒曜石	4.4	3.0	0.8	9.4		280
図Ⅲ-94	2	図版82	H-29	床面	1	スクレイパー	黒曜石	6.7	2.4	0.5	8.5		281
図Ⅲ-94	3	図版82	H-29	覆土1	13	スクレイパー	黒曜石	4.1	3.1	1.0	10.4		282
図Ⅲ-97	3	図版82	H-30	覆土3	3	石槍	黒曜石	10.8	3.8	1.5	49.5		157
図Ⅲ-97	4	図版82	H-30	覆土2	38	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.9	2.9	0.5	5.4		283
図Ⅲ-97	5	図版82	H-30	覆土3	14	スクレイパー	黒曜石	4.5	3.0	0.7	11.4		343
図Ⅲ-97	6	図版82	H-30	床面直上	7	スクレイパー	黒曜石	4.7	3.8	2.6	37.6		284
図Ⅲ-97	7	図版82	H-30	覆土2	2	石斧	片岩	8.3	4.0	1.5	86.5		186
図Ⅲ-97	8	図版82	H-30	床面直上	5	砥石	砂岩	14.8	12.0	2.5	595		194
図Ⅲ-98	3	図版82	H-31	覆土2	24	スクレイパー	黒曜石	3.6	2.9	1.0	10.3		344
図Ⅲ-100	1	図版82	H-32	覆土2	22	石鏃	黒曜石	(4.4)	1.2	0.5	2.0		345
図Ⅲ-100	2	図版82	H-32	床面直上	7	石槍	黒曜石	(6.7)	(3.6)	(1.2)	20.3		346
図Ⅲ-100	3	図版82	H-32	床面直上	6	スクレイパー	黒曜石	11.4	6.6	1.3	65.2		285
図Ⅲ-102	2	図版83	H-33	覆土2	25	石鏃	黒曜石	2.8	1.1	0.4	1.2		286
図Ⅲ-102	3	図版83	H-33	覆土3	31	石鏃	黒曜石	(3.8)	1.8	0.5	2.8		287
図Ⅲ-102	4	図版83	H-33	床面付近	69	石槍	黒曜石	10.0	2.7	1.4	37.3		158
図Ⅲ-102	5	図版83	H-33/M15	覆土3	51	つまみ付きナイフ	黒曜石	11.0	3.7	1.3	37.8		347
図Ⅲ-105	9	図版83	H-34	覆土1	62	石鏃	黒曜石	(2.6)	1.5	0.2	0.7		348
図Ⅲ-105	10	図版83	H-34	覆土2	77	石鏃	黒曜石	2.3	1.2	0.2	0.6		349

表Ⅲ-26 遺構出土掲載石器一覧(5)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-105	11	図版83	H-34	覆土2	36	石鏃	黒曜石	4.0	2.3	0.5	3.3		147
図Ⅲ-105	12	図版83	H-34	覆土	133	両面調整石器	黒曜石	(4.7)	1.5	0.7	4.9		350
図Ⅲ-105	13	図版83	H-34/N17	覆土2	79	スクレイパー	めのう	5.3	3.1	0.7	14.7		178
図Ⅲ-105	14	図版83	H-34	覆土2	97	エンドスクレイパー	黒曜石	10.5	4.8	1.7	62.9		174
図Ⅲ-105	15	図版83	H-34/N16	覆土2	28	石のみ	片岩	5.7	1.8	1.0	15.2		182
図Ⅲ-105	16		H-34	床面直上	2	台石	安山岩	29.2	19.4	16.0	14350		513
図Ⅲ-107	5	図版83	H-35	覆土3	22	石鏃	黒曜石	2.5	1.5	0.3	1.1		289
図Ⅲ-107	6	図版83	H-35	覆土3	23	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.7	2.3	0.6	5.7		290
図Ⅲ-108	4	図版83	H-36	覆土4	23	石錘	安山岩	6.1	6.3	1.7	95.7		291
図Ⅲ-114	24	図版85	H-38	覆土2	51	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.6	0.3	0.7	SMH1-X23	123
図Ⅲ-114	25	図版85	H-38	覆土1	47	石槍	黒曜石	5.9	2.6	0.6	7.6	SMH1-X24	124
図Ⅲ-114	26	図版85	H-38	覆土2	162	スクレイパー	黒曜石	4.8	2.4	0.5	6.7		176
図Ⅲ-114	27	図版85	H-38	HM	170	彫器	黒曜石	4.2	1.6	0.5	3.5		293
図Ⅲ-114	28	図版85	H-38	覆土2	65	彫器削片	黒曜石	2.6	0.7	0.7	1.2		292
図Ⅲ-114	29	図版85	H-38	覆土2	72	石錘	安山岩	(6.1)	6.4	1.4	80.7		294
図Ⅲ-114	30		H-38	覆土2	5	台石	安山岩	19.0	13.7	3.2	1415		514
図Ⅲ-116	1	図版85	M-1/L22	盛土	1	石鏃	黒曜石	3.4	1.7	0.3	1.6		50
図Ⅲ-116	2	図版85	M-1/L22	盛土	2	石鏃	黒曜石	4.3	2.3	0.5	4.4		51
図Ⅲ-116	3	図版85	M-1/K23	盛土	4	石槍	黒曜石	4.9	3.8	0.8	12.8		201
図Ⅲ-116	4	図版85	M-1/K23	盛土	6	石錘	黒曜石	4.7	2.1	0.4	5.4		202
図Ⅲ-116	5	図版85	M-1/L22	盛土	9	スクレイパー	黒曜石	5.9	4.2	0.9	18.2		203
図Ⅲ-116	6	図版85	M-1/L22	盛土	42	石斧	泥岩	5.1	2.9	1.0	17.9		204
図Ⅲ-116	7	図版85	M-1/K22	盛土	16	石斧	泥岩	4.5	2.8	0.6	11.9		189
図Ⅲ-116	8	図版85	M-1/L22	盛土	17	石斧	砂岩	(5.4)	(7.9)	(1.6)	75.1		430
図Ⅲ-140	1	図版86	P-4	覆土	2	石核	黒曜石	5.0	3.4	1.6	32.8	P-4No.5と接合	38
図Ⅲ-140	4	図版86	P-5	覆土	2	つまみ付きナイフ	黒曜石	8.5	4.7	0.7	28.8	SMH1-12	39
図Ⅲ-140	9	図版86	P-6	覆土	4	二次加工ある石刃	黒曜石	(7.5)	2.3	0.5	9.8		295
図Ⅲ-140	10	図版86	P-6	覆土	5	石刃鏃	黒曜石	3.1	1.17	0.3	1.2		41
図Ⅲ-140	11	図版86	P-6	覆土	1	石鏃	黒曜石	2.8	1.6	0.4	2.0		40
図Ⅲ-140	13	図版86	P-8	覆土	7	石刃	黒曜石	7.5	2.2	0.7	10.4		296
図Ⅲ-140	14	図版86	P-8	覆土	6	彫器	黒曜石	4.7	3.0	1.2	17.2		45
図Ⅲ-140	15	図版86	P-8	覆土	8	石核	黒曜石	4.2	2.8	1.5	14.6		46
図Ⅲ-140	16	図版86	P-8	覆土	1	石鏃	黒曜石	2.0	0.7	0.3	0.3		42
図Ⅲ-140	17	図版86	P-8	覆土	2	石鏃	黒曜石	2.4	1.1	0.3	0.8		43
図Ⅲ-140	18	図版86	P-8	覆土	4	スクレイパー	黒曜石	2.8	1.6	0.3	1.9		44
図Ⅲ-141	20	図版86	P-12	覆土	1	石槍	黒曜石	8.4	3.0	0.8	20.6		47
図Ⅲ-141	21	図版86	P-12	覆土	2	スクレイパー	黒曜石	7.8	4.8	1.3	31.3		48
図Ⅲ-141	23	図版86	P-14	覆土	11	彫器	黒曜石	5.2	2.6	1.0	13.7		460
			N22	V	25	彫器							
図Ⅲ-141	24	図版86	P-14	覆土	2	二次加工ある石刃	黒曜石	(8.9)	2.2	0.4	8.9		49
図Ⅲ-141	25 a	図版86	P22	V	82	削片	黒曜石	5.1	1.5	0.8	3.5		466②
図Ⅲ-141	25 b	図版86	P-14	覆土	1	彫器	黒曜石	2.7	0.9	0.7	1.7		466①
図Ⅲ-142	36	図版87	P-26	覆土	4	石鏃	黒曜石	3.1	0.9	0.2	0.7		297
図Ⅲ-142	39	図版87	P-31	覆土	13	石鏃	黒曜石	(1.7)	0.8	0.2	0.2	SMH1-X26	126
図Ⅲ-142	40	図版87	P-31	覆土	18	石鏃	黒曜石	2.4	0.8	0.2	0.3		298
図Ⅲ-142	41	図版87	P-31	覆土	14	石鏃	黒曜石	2.2	0.9	0.2	0.3	SMH1-X27	127
図Ⅲ-142	42	図版87	P-34	覆土	12	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.0	2.7	0.9	7.9		299
図Ⅲ-143	55	図版89	P-42	覆土	11	石鏃	黒曜石	2.3	0.8	0.3	0.5		300
図Ⅲ-143	56	図版89	P-43	覆土	12	スクレイパー	黒曜石	5.8	2.9	0.9	12.8		351
図Ⅲ-143	58	図版89	P-44	覆土2	1	石槍	黒曜石	(8.3)	4.2	1.3	45.2		352
図Ⅲ-143	59	図版89	P-44	覆土	19	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.2	2.3	0.4	7.1		353
図Ⅲ-144	61	図版89	P-45	覆土3	17	たたき石	チャート	6.2	5.3	3.7	148.5		197
図Ⅲ-144	63	図版89	P-46	覆土	20	つまみ付きナイフ	片岩	3.2	2.1	0.4	2.2		354
図Ⅲ-144	66	図版89	P-47	覆土	15	つまみ付きナイフ	黒曜石	(2.5)	(2.2)	(0.4)	1.7	SMH1-X28	128
図Ⅲ-144	67	図版89	P-53	覆土3	1	石斧	片岩	10.4	5.1	2.5	157.6		187
図Ⅲ-144	68	図版89	P-56	覆土	12	石鏃	黒曜石	4.6	2.4	0.4	3.6		355
図Ⅲ-144	69	図版89	P-56	覆土	1	スクレイパー	黒曜石	9.7	5.9	1.0	51.5		356
図Ⅲ-144	72	図版89	P-59	覆土	15	スクレイパー	黒曜石	(6.1)	4.2	1.2	28.6		357

表Ⅲ-27 遺構出土掲載石器一覧(6)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図Ⅲ-144	73	図版89	P-63	覆土	11	石鏃	黒曜石	2.4	0.8	0.2	0.4		359
図Ⅲ-145	79	図版90	P-74	覆土	12	スクレイパー	黒曜石	3.6	3.2	0.8	9.8		360
図Ⅲ-145	90	図版90	P-83	覆土	22	石鏃	黒曜石	1.7	0.7	0.2	0.1		361
図Ⅲ-154	1	図版90	FC-2		40	石錐	黒曜石	3.2	1.3	0.6	3.3		362
図Ⅲ-154	2	図版90	FC-2		23	両面調整石器	黒曜石	5.1	1.7	0.8	7.2		363
図Ⅲ-154	3	図版90	FC-2		13	スクレイパー	黒曜石	4.4	4.0	1.4	25.9		364
図Ⅲ-154	4	図版90	FC-3		11	石鏃	黒曜石	(1.8)	0.8	0.3	1.1		141
図Ⅲ-154	5	図版90	FC-4		11	石鏃	黒曜石	4.2	1.3	0.4	2.9		365
図Ⅲ-154	6	図版90	FC-5		11	石錐	黒曜石	2.4	1.1	0.5	2.4		366

IV 包含層の調査と出土遺物

1. 包含層の調査と遺物出土状況 [図IV-1～5、表IV-1、図版63]

全体の土層堆積状況と遺構・遺物の出土の濃淡を早期に把握するため、南北（Lライン）・東西（ライン）にベルトを設定しトレンチ調査および25%調査を行った。検出された遺構は随時調査し、以下包含層をVI層上面付近まで掘り下げた。調査区中央部の、黄色土やTa-cをまとめて検出した範囲は、トレンチ調査および遺構調査を行った後、順次掘り下げた。出土した遺物は発掘区別・層位別に取り上げた。

包含層の出土遺物総点数は40,102点で、土器等が14,034点、石器等が25,690点、礫が378点である。ほかに陶磁器、骨片など現代遺物が少数出土している。

発掘区別の出土点数分布図を作成した〔図IV-1～5〕。ただし遺構分は含まれず、包含層のみの出土数である点に注意が必要である。全体的に調査区北部が濃密で、中央部の一部も点数が多いが、南部は疎である。

土器等

層位別出土点数は、II層が26点、IV層が12,197点、V層が1,552点、VI層（上面付近）が48点で、大部分がIV層黒色土から出土している。分類別では、I群a類1,494点、I群b類452点、I群b-2類51点、I群b-4類4,252点、III群b類～IV群a類3,201点（うちIII群b類87点、IV群a類438点）、IV群b類976点、IV群c類52点、V群c類877点ほかである。多い順では、I群b-4類（土器等の30.3%）、III群b類～IV群a類（22.8%）、I群a類（10.6%）、IV群b類（7.0%）となっている。IV層中では各分類の土器がある。V層では縄文時代早期のI群a類・b類が主体であるが、IV群b類なども含まれている。

土製品は、焼成粘土塊6点、土製円盤7点、スタンプ形土製品2点、ミニチュア土器6点がほとんどIV層から出土している。

分類別に発掘区別の出土点数分布図をみる。

I群a類：調査区北東部のM～Q21～24に集中しており、後述する石刃鎌石器群の分布の中心とほぼ重なっている。また調査区中央部のM14区に独立した集中箇所がある。

I群b-1類：調査区北部～中央部の西寄りの範囲が濃密である。

I群b-2類：遺構ではH-38に集中するが、包含層では散漫である。

I群b-4類：調査区南端部を除くほぼ全域に分布する。1区あたり数十点前後の発掘区が多く、極端な濃淡の差をもたない。

III群b類～IV群a類：調査区のほぼ全域に分布する。北西部～中央西部に1区あたり100点をこえる濃密な発掘区が目立つ。なおIII群b類・IV群a類は明確に分類できないものが多く含まれているため、まとめて図示した。

IV群b類：調査区北半の16ライン以北が大部分を占める。L23区が最も多く、284点が出土した。

V群c類：きわめて部分的に集中域をもつ。北西端部のJ26区が247点、中央北部のN19区が370などとなっている。

包含層においてまとまった状態で出土したものには、N23区V層で浦幌式〔図IV-6の1〕、N24区V層で浦幌式〔図IV-6の2・3、図版63〕、J・K13区IV層で中茶路式〔図IV-9の66〕などが

ある。

石器等

層位別出土点数は、Ⅱ層が17点、Ⅳ層が24,717点、Ⅴ層が621点、Ⅵ層（上面付近）が9点で、大部分がⅣ層黒色土から出土している。分類別では、明瞭に石刃鎌石器群と判断されるものが少なくとも392点、それ以外の定形的な剥片石器が685点、定形的な礫石器が232点、二次加工のある剥片などが324点あり、剥片が24,057点（石器全体の93.6%）と大部分を占めている。

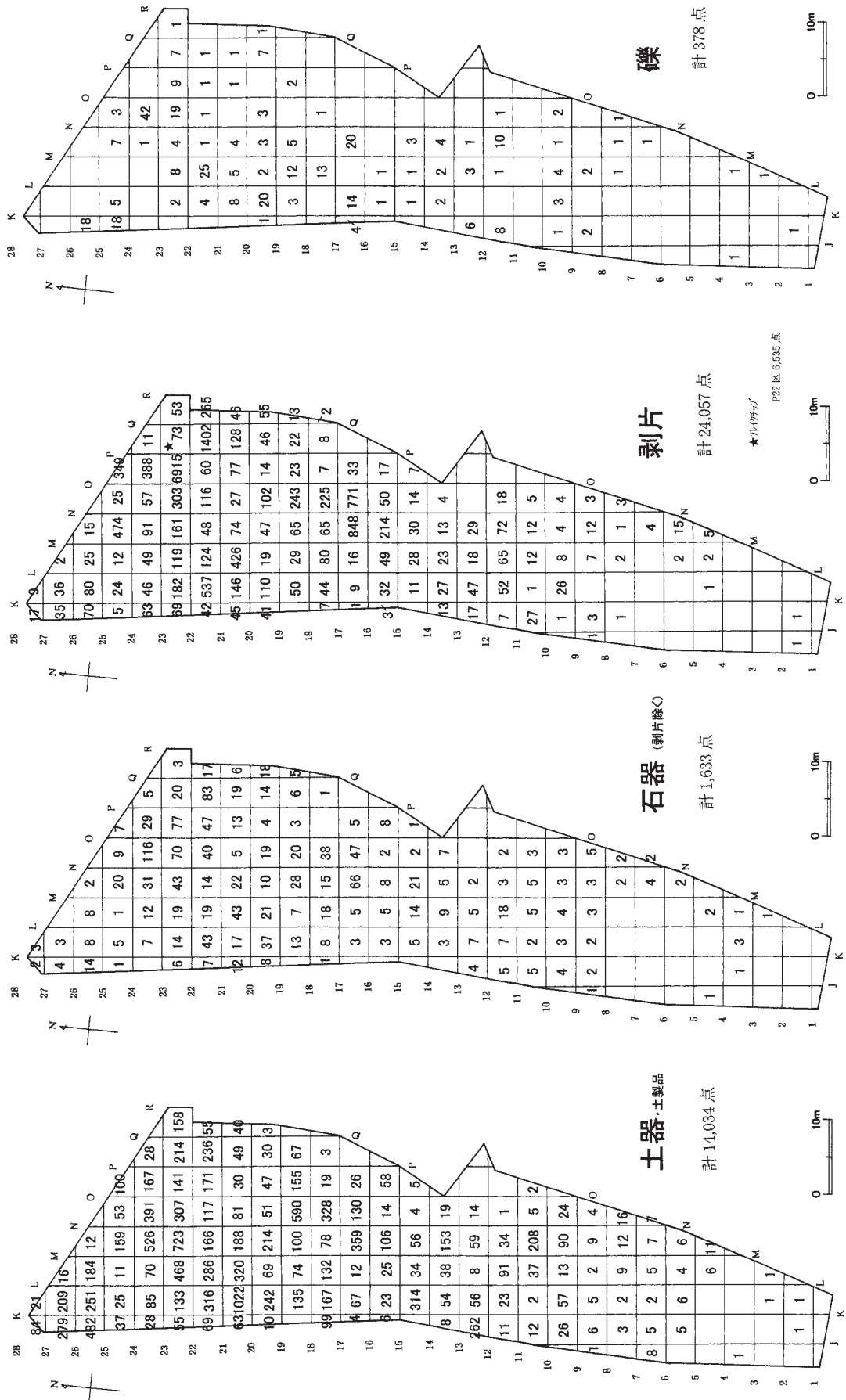
石刃鎌石器群では、石刃鎌27点、錐形石器6点、削器23点、搔器10点、彫器127点、削片83点、二次加工のある石刃63点、石刃59点、石刃核1点があるが、これ以外の石器の中にも石刃素材とみられるものが含まれているようである。定形的な剥片石器には、石鎌137点、石槍（またはナイフ）147点、石錐（錐形石器）27点、つまみ付きナイフ46点、ナイフ2点、スクレイパー類219点、両面調整石器99点などがある。定形的な礫石器には、石斧27点、石のみ2点、矢柄研磨器2点、砥石片103点、たたき石5点、すり石11点、石錘10点、台石・石皿71点がある。

石材は、黒曜石、頁岩、片岩、緑色泥岩、泥岩、砂岩、凝灰岩、軽石、安山岩などが用いられている。剥片石器は圧倒的に黒曜石が主体で、18,838点で99.7%以上を占める。礫石器は砂岩177点、安山岩が42点である。

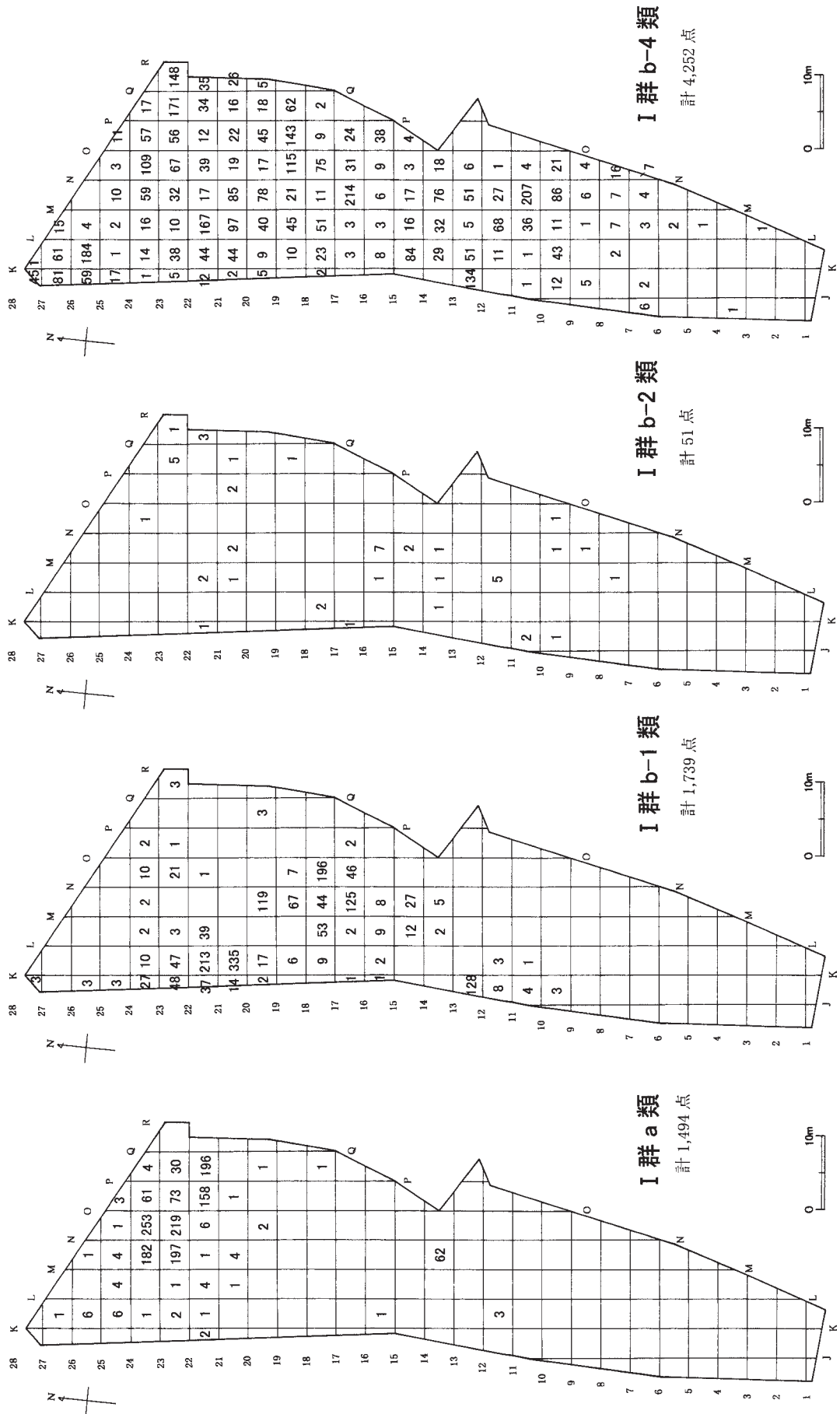
発掘区別の出土点数分布を図示した〔図Ⅳ-4・5〕。

石刃鎌石器群：石刃・石刃鎌・彫器・削片の分布を図示した〔図Ⅳ-4〕。いずれも調査区北東部に集中しており、前述の浦幌式土器の分布の中心域と重なっている。特に石刃鎌はM25区～Q21にかけての北西-南東方向の帯状のせまい範囲から出土している。石刃・彫器・削片は調査区中央部にも広がるが、個々の発掘区の点数は少ない。

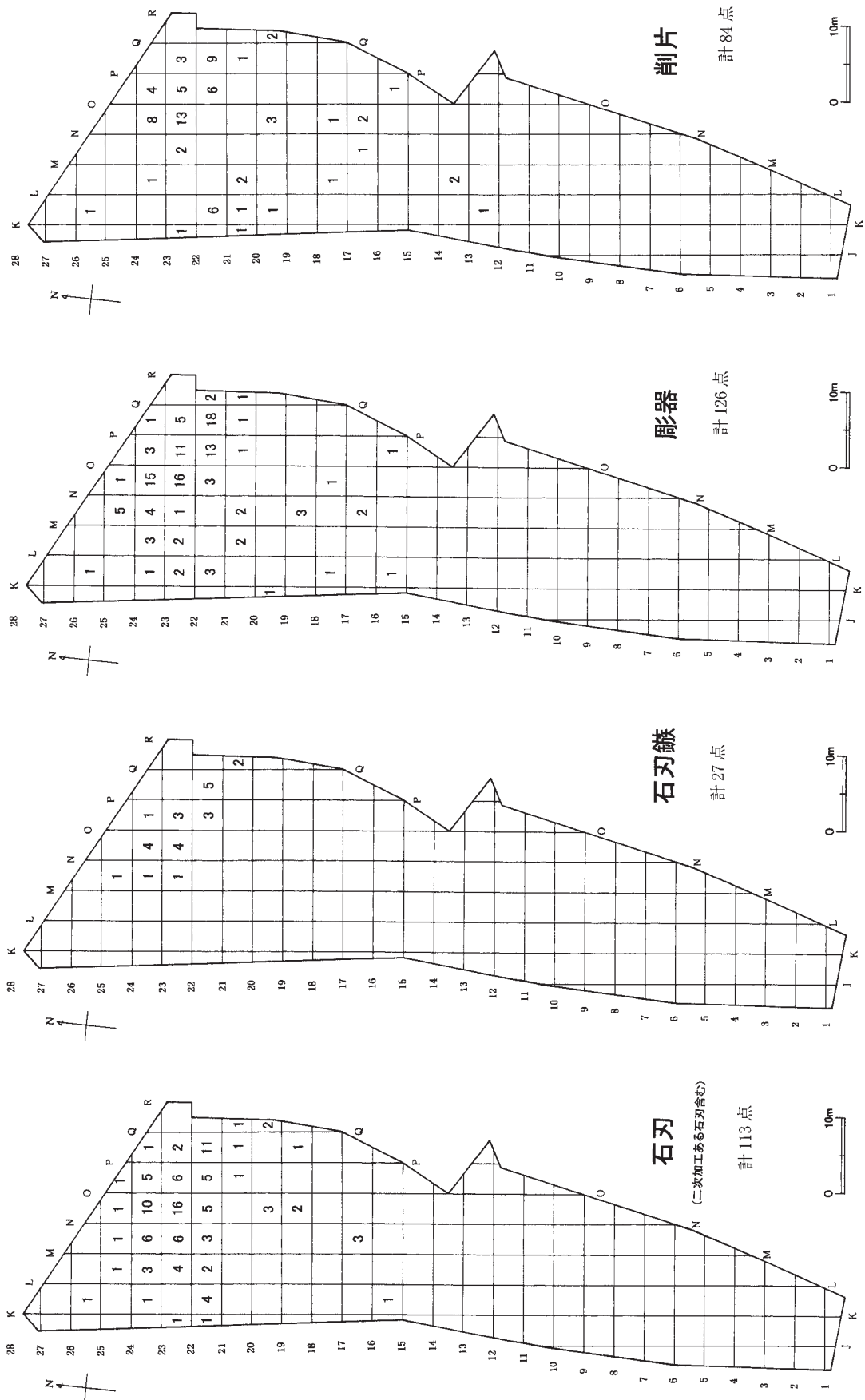
その他の主な石器：石鎌・石槍・スクレイパー・石斧の分布を図示した〔図Ⅳ-5〕。石鎌は調査区全域から散漫に出土している。石槍・スクレイパーの分布は、調査区北部～中央部に散漫であるが、中央部の一部にやや多い発掘区がある。石斧は調査区北半から1区につき1～3点ずつ出土している。



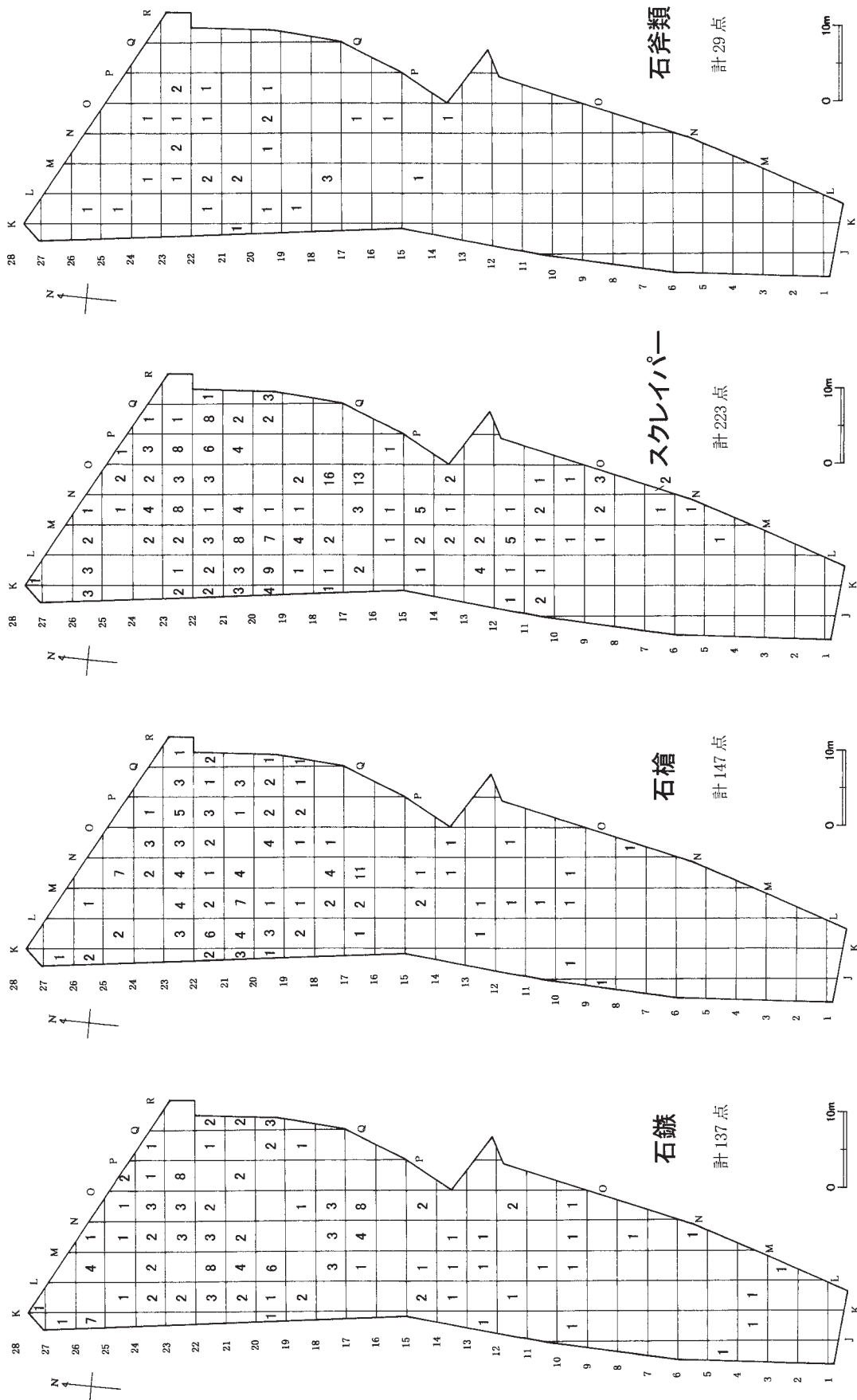
図IV-1 発掘区別遺物出土分布図(1)



図IV-2 発掘区別遺物出土分布図(2)



図IV-4 発掘区別遺物出土分布図(4)



図IV-5 発掘区別遺物出土分布図(5)

2. 土器・土製品 [図IV-6~13 表IV-2~5 図版91~97]

縄文時代早期中葉の土器〔I群a類〕〔図IV-6~8の1~18、図版91・92〕

1~17は平底の条痕文土器で、浦幌式に相当する。いずれも繊維の混入がほとんど見られない。

1~3は口縁~胴部の復元個体。いずれも上面観が隅丸方形である。大きさ・形状が類似しており、口径は約20cm、器高は推定25cm程度と思われる。1はN23区を主体としK18区~O24区まで広域に出土した破片が接合している。口縁部がやや開く。外面は縦位の条痕が目立ち、内面は上半が横位、下半が縦横に条痕文が強く押捺されている。2は内外面とも条痕文が強く押捺されている。口縁~胴部にスス状の黒色物質が付着している。3はH-4・9出土の破片とも接合している。外面はやや浅い条痕文が縦横に施文されている。内面は剥落している範囲も多いが、全体的に条痕が目立たない。1~3とも、補修孔が穿たれている。

4は平底でわずかに張り出す。胴部は直線的に立ち上がる。底面の大部分が剥落しているが、残存部にやや乱れた葉脈圧痕が観察される。5は胴部が膨らむ。4・5とも、胴上位に絡条体圧痕が横位に多段配される。細かく浅い条痕が内外面全面に観察される。

6は平縁で丸みをもつ口唇上に縄文が施文されている。口縁部に5列の絡条体圧痕が施文され、口唇下の狭い範囲にも絡条体圧痕が斜位に施文されている。胴部は浅い擦痕がわずかに観察される。内面は調整されているが、成形時の押捺が残る部分がある。7・18も6と同様の絡条体圧痕により文様が構成されている。7は内面口縁部に横位の条痕がある。18は外面に縦位の条痕文が密に施文されている。いずれも口縁部の湾曲から、上面観が隅丸方形と推測される。

9~13は口唇部が丸みをもつ。9~11は条痕文が内外面とも全面的に強く押捺されている。12は条痕がやや浅い。14は小型の深鉢。16は底部付近。ともに内面の条痕が明瞭である。13・15・17の外面には、擦痕というべき細かく浅い条痕が施されている。17は平底でわずかに丸みがある。底面に葉脈圧痕が鮮明に観察される。

縄文時代早期後葉の土器〔I群b類〕〔図IV-8・9の19~67、図版92~94〕

19~30はI群b-1類東釧路Ⅱ式。同式は内面に条痕があることが特徴の一つであるが、図示したものでは19のみに施文されている。また文様は多様であるが、原体は1つで施文されているものがほとんどである。器壁は薄く、内面には成形時の押捺による弱いくぼみが残るものがある。

20・23はやや丸みを帯びる口唇上に原体押捺、22は口唇上に縄文が回転施文されている。21・27は右下がりの施文が、撚りが崩れた原体で行われている。24・25は横位に貼付帯があり、24はその裾に刻み、25は貼付帯上に押捺が連続する。26は三角形の刺突列が斜位に施文されている。28は下部に絡条体圧痕が多段施文されている。

31~34は東釧路Ⅲ式。31は口唇が丸みをもつ。口唇上とその下に単縄文が間隔をあけて施文されている。補修孔が穿たれている。33・34は短い原体で羽状縄文が施文されており、33の押捺が弱い。35は平底で外に張り出し、刺突（刻み）が連続する。

36~67は中茶路式。全体的に薄手で、橙色を呈するものがほとんどである。横位平行の細貼付帯をおおむね等間隔で多段設けることを基本としている。地文や充填文様は結束羽状縄文・撚糸文・絡条体圧痕などである。

36・37は細貼付帯上にも縄文が施文され、貼付帯上面がつぶれている。40~42・45・46・53・56の細貼付帯上は絡条体圧痕により押さえられている。41は口縁部が緩やかに立ち上がり、口唇は丸みを

帯びる。平行する細貼付帯間に縦位の細貼付帯がはしご状に組み合わせられている部分がある。内面上部にスス状の黒色物質が付着している。42・44～47・49・52・55は、平行する細貼付帯の間に波状の細貼付帯が施されている。45・48～51は細かい撚りの絡条体による施文が充填されている。54は撚糸と斜行縄文が交互に充填されている。57～59は自縄自巻とみられる細かい撚りの絡条体による押捺痕が多段施されている。60～62は地文のみのもの。60は結束羽状縄文、61は絡条体圧痕、62は撚糸文で、いずれも撚りが細かい。63は底部付近に綾絡文が施文されている。底部の角はやや丸みをもつ。64は底部の角が鋭い。

65は平底から胴部が直立気味に立ち上がる。絡条体圧痕が横位に多段施文されている。底面内側にも絡条体圧痕がみられる。66は大型の深鉢。平底で急に立ち上がり、胴部が膨らむ。基本の文様は、横位の細貼付帯がほぼ等間隔で平行し短縄文で充填するもの。胴上部には絡条体圧痕が鋸歯状に密に施されている施文帯がある。胴下部には自縄自巻の波状の絡条体圧痕が多段施文されている。補修孔が穿たれている。67は平底の底部がわずかに張り出す。細貼付帯沿いは刻みにより粘土を定着させている。

縄文時代中期後半～後期前葉の土器〔Ⅲ群b類～Ⅳ群a類〕〔図IV-10・11の68～97、図版94・95〕

68～77は北筒Ⅱ式。68～74・76は古段階（Ⅲ群b類）で、75・77は新段階（Ⅳ群a類）に属するものと思われる。

68は推定口径27.5cm、残存高約28cmを測る深鉢。器壁が1.6cmと厚い。胴部はふくらみ、口縁部はやや強く外反する。平縁で小型の山形突起があり、突起上に径の小さな刺突が施されている。口縁部肥厚帯上に縦位の沈線（刻み）が密に施されている。肥厚帯下に円形刺突がめぐり、内面が突瘤となっている。地文は綾絡文が明瞭である。口縁部にはスス状の黒色物質が多量付着しており、大型破片の右断面部には、二次焼成とみられる黒色部分が観察される。外面口縁部付近に焼土またはベンガラとみられる赤色物質が付着する部分がある。69は断面三角形の肥厚帯上に押引による刻みが連続する。70～73は断面三角形の肥厚帯上に押引文が連続する。70は口縁が強く外反し、口唇が尖る。押引文は細い施文具で2列施されている。71は幅広の施文具での押引である。72は細い工具での押引文が口唇直下と口唇上に施文されている。73は押引文が肥厚帯上および口唇上のほか、口縁部に斜位に1列施されている。74・76は肥厚帯がやや不明瞭である。74は円形刺突の径が小さく、76は比較的大きい。76は胴部が膨らみ口縁部は急に外反する。器壁が1.5cmある。

75は肥厚帯が剥落しているが、縦位の沈線があるものと思われる。77は口唇上および肥厚帯上に縦位の細い沈線（刻み）が密に施される。突起の間隔が狭い。

78～86は北筒Ⅲ式。78は複節縄文が施文された肥厚帯に縦位の貼付帯があり、縄文が押捺されている。肥厚帯下は幅広の無文部に環状の刺突列が間隔をあけて配されている。79・80も複節縄文が施されている。82～86は直立気味の口縁部で、82・83・85の口唇上には連続刺突がある。口縁部の円形刺突はやや小型である。

87～89は北筒Ⅲ式の新しい段階または北筒Ⅳ式と思われる。内面口縁部および外面に単節の縄文が施文されている。88・89には小型の円形刺突がやや間隔をあけて施文されている。

90～97は北筒式の胴部・底部片を一括した。91・93は結束羽状縄文が整然とし、北筒Ⅱ式新段階のものともみられる。96は小型の底部。97は平底の底面の一部に縄文が施文されている。内面は成形時の指頭押捺痕が明瞭である。

縄文時代後期中葉～後葉の土器〔IV群b類・c類〕〔図IV-12の98～119、図版96・97〕

98～116は鯨潤式の新しい段階のもので、エリモB式に相当するものが数多く含まれていると思われる。刻み列は1列が多く(100・101・103・105・107～109)、2列(99・104)や3列(98)が少数含まれる。

98は口縁部に3列刻みと無文帯が設けられている。鋭い切出形口唇である。99は角形口唇である。100・101は内面口唇下に沈線が横走り、弱い波頂部に縦位の沈線を施している。102は丸みをもつ底部。底面中央に親指大のくぼみを設けている。103はエリモB式。緩やかな波状口縁で、波頂部は尖る。胴部はふくらみ、強くくびれる。口縁部は刻み列で区画された無文帯で、突瘤がめぐる。胴部は横位の帯状文とクランク状の帯状文が施文されている。104は胴部くびれ付近の破片。胴部は曲線的な帯状文の一部が見られる。105から107は口縁部に無文帯が設けられている。いずれもやや弱い切出形口唇である。105は内面口縁下に浅い沈線が横走る。108・109はエリモB式。108は刻み列と突瘤が施され、内面口縁部に沈線がある。109は口縁下の刻みが斜行し沈線上に突瘤が施されており、該期の最末期の様相である。

110～116は注口土器または壺。110は注口部。無文でよく研磨されている。胴部との接合部下端に瘤がある。111～113・115・116は胴部上半の破片。内面は凹凸があるものが多い。111～113・116は木葉文など曲線の帯状文、115は直線的な帯状文がえがかれている。114は小型の壺。胴中央部の貼瘤を中心に木葉文が四方に展開している。口唇部はやや丸みをもつ。

117～119は堂林式。117は口径16.9cm、器高13.0cmの鉢形土器。平底・平縁で、弱い切出形口唇である。胴部中央に幅広の無文帯があり、その上下に沈線をめぐらせ細かい区画体を設けている。口縁部にも沈線が1条めぐる。いずれも前型式の刻み列の名残と考えられる。内面調整はていねいである。118は切出形口唇。羽状縄文が施文されている。119は大型深鉢の底部。平行沈線が横位・縦位に施されている。

縄文時代晩期後葉の土器〔V群c類〕〔図IV-13の120～124、図版97〕

120～124はV群c類に属するものと思われる。器壁が薄い。120は無文の口縁部で、口唇上に刻みが連続する。121・122・124は複数の原体で多方向に縄文が施文されている。内面調整がややていねいである。

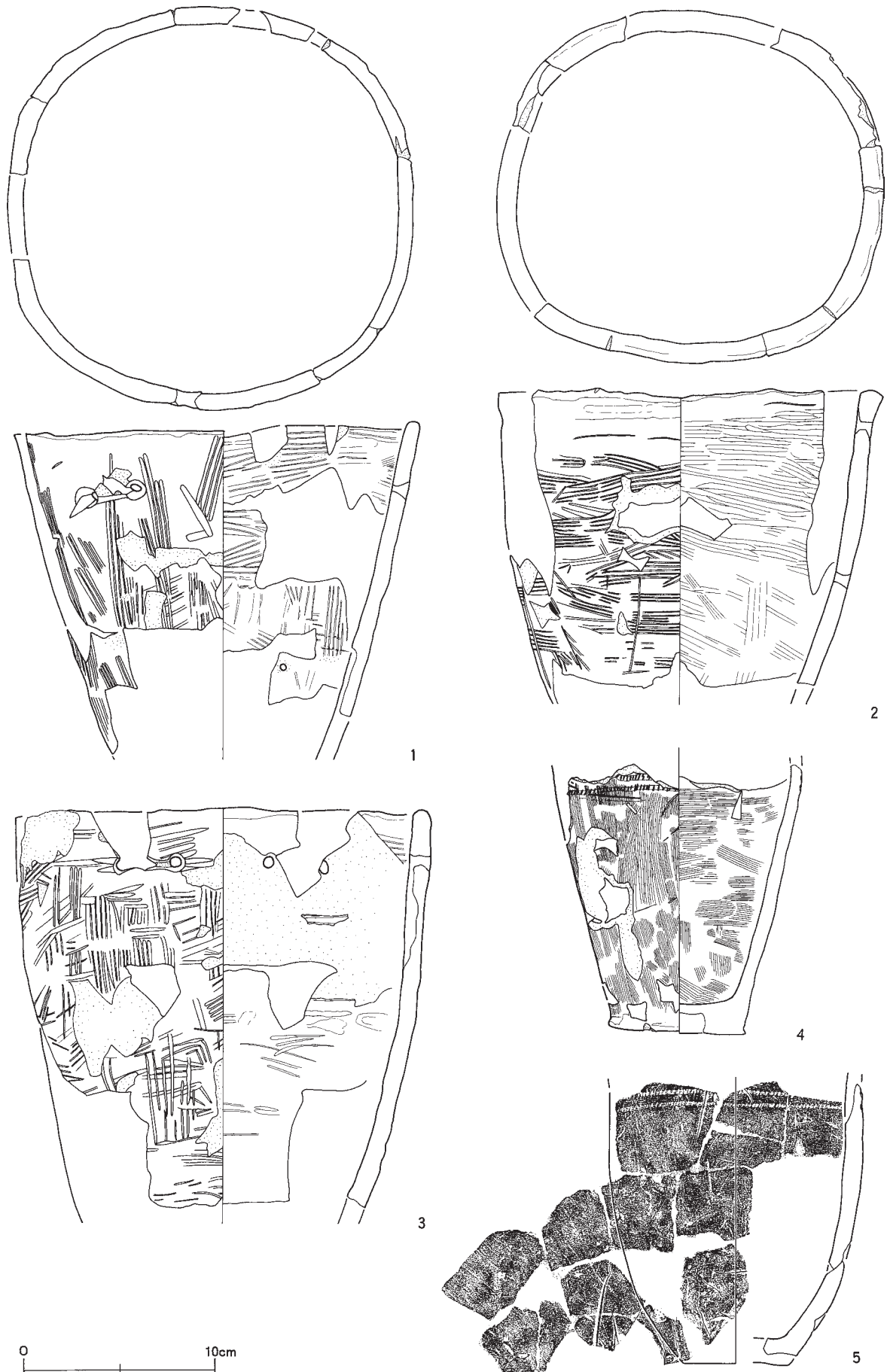
土製品〔図IV-13の128～131、図版97〕

125・126はスタンプ形土製品。125は版面が小型のもの。菱形でやや外反する。菱文の中央部に刺突が施されている。つまみ部の中央部に貫通孔がある。126は版面が厚く、外反する。菱文の中央部に刺突が深く施されている。

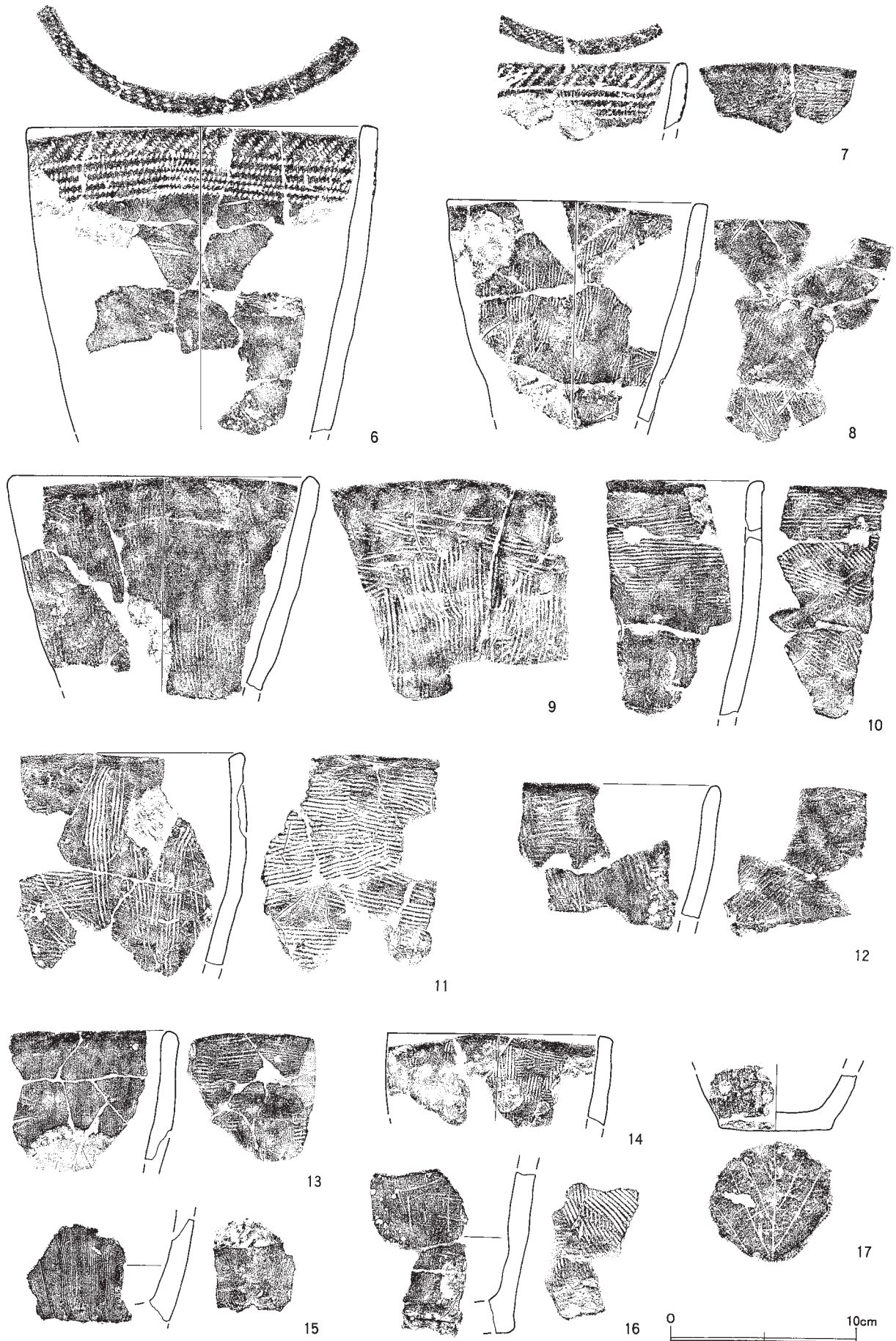
127はミニチュア土器。底面が丸みをもつ鉢。わずかに細かい撚りの絡条体圧痕が観察される。

128～131は土製円盤。いずれもI群b類の土器片を加工している。128は半損品。細かい周縁加工でほぼ円形に仕上げたものと思われる。中央に径の小さな穿孔がある。裏面(内面)はほとんど剥落している。129は中茶路式の土器片を加工している。半損品。周縁加工はややていねいである。中央の穿孔は表裏から穿たれている。130は短縄文が並ぶ。東釧路Ⅲ式の土器片が利用されている。やや不整な円形である。131もやや不整形で、小型である。

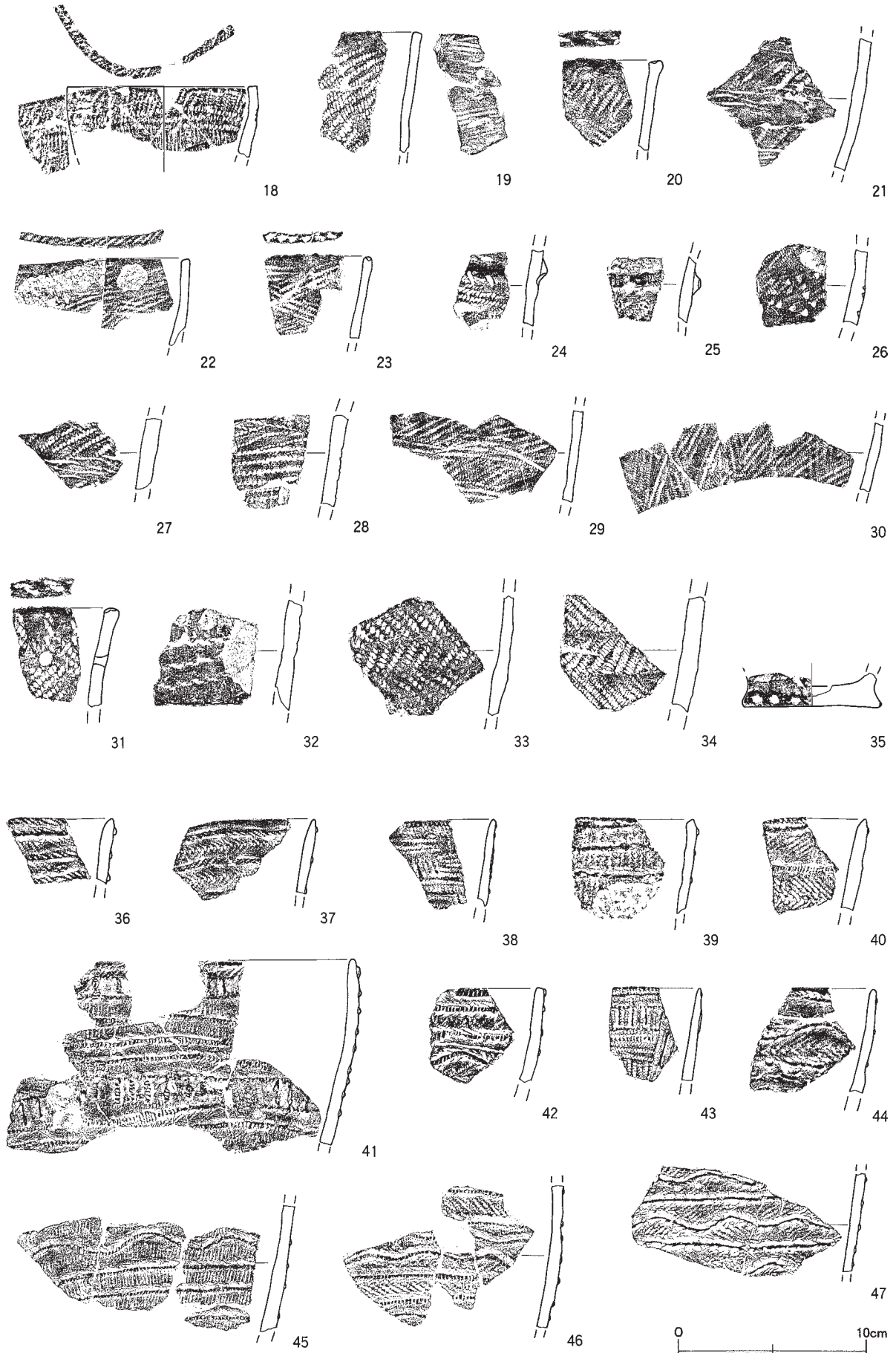
(阿部)



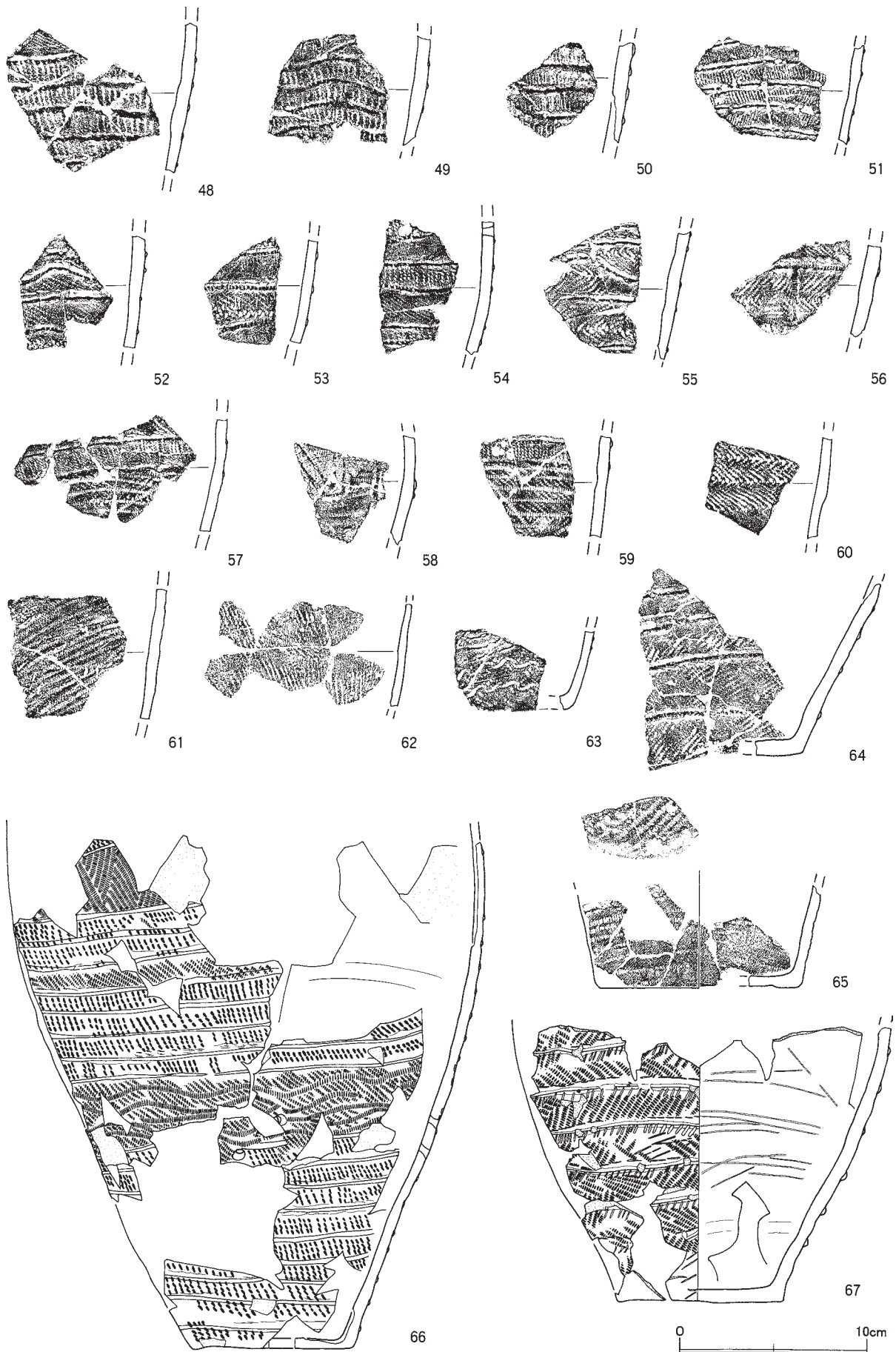
図IV-6 包含層出土の土器(1)



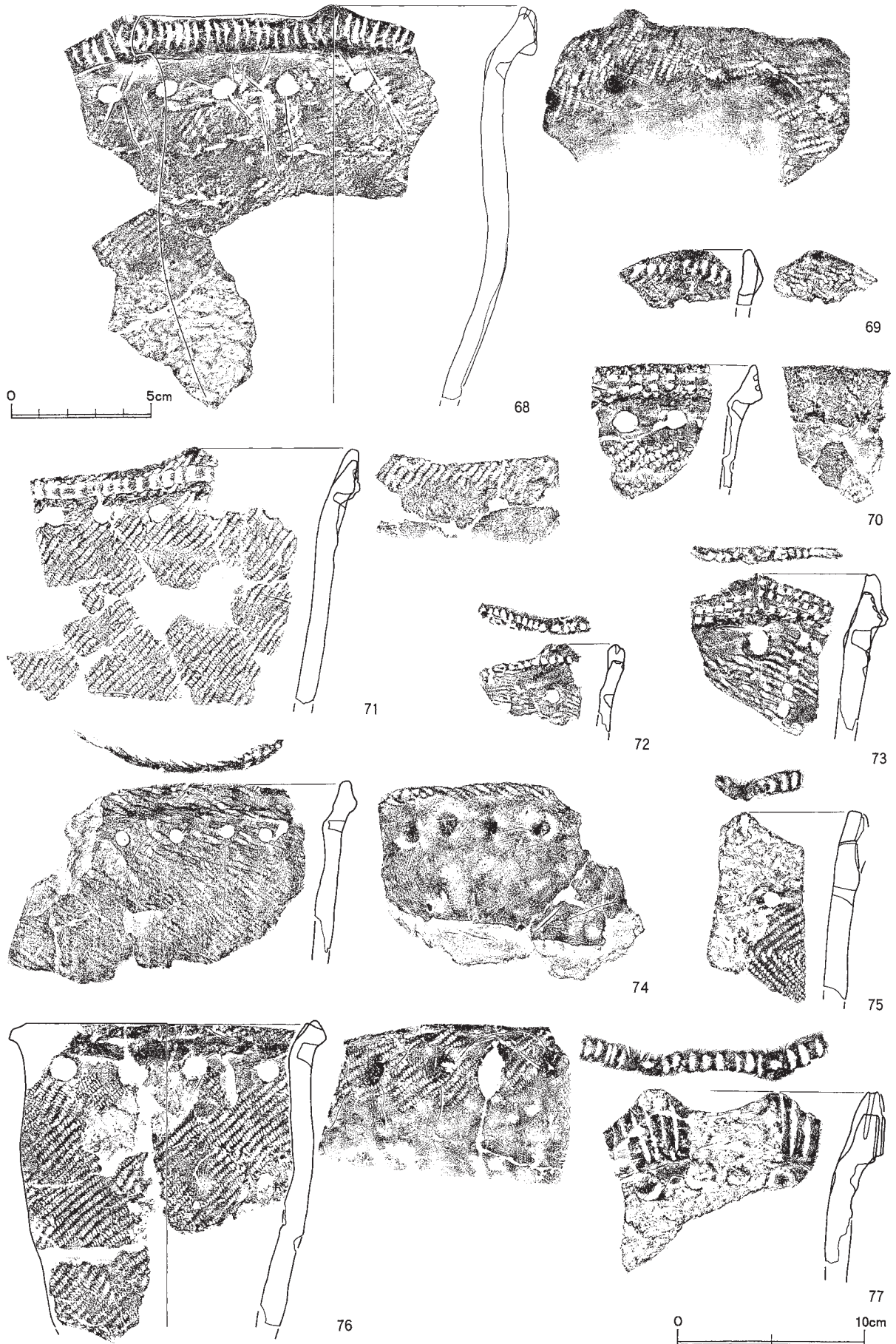
図IV-7 包含層出土の土器(2)



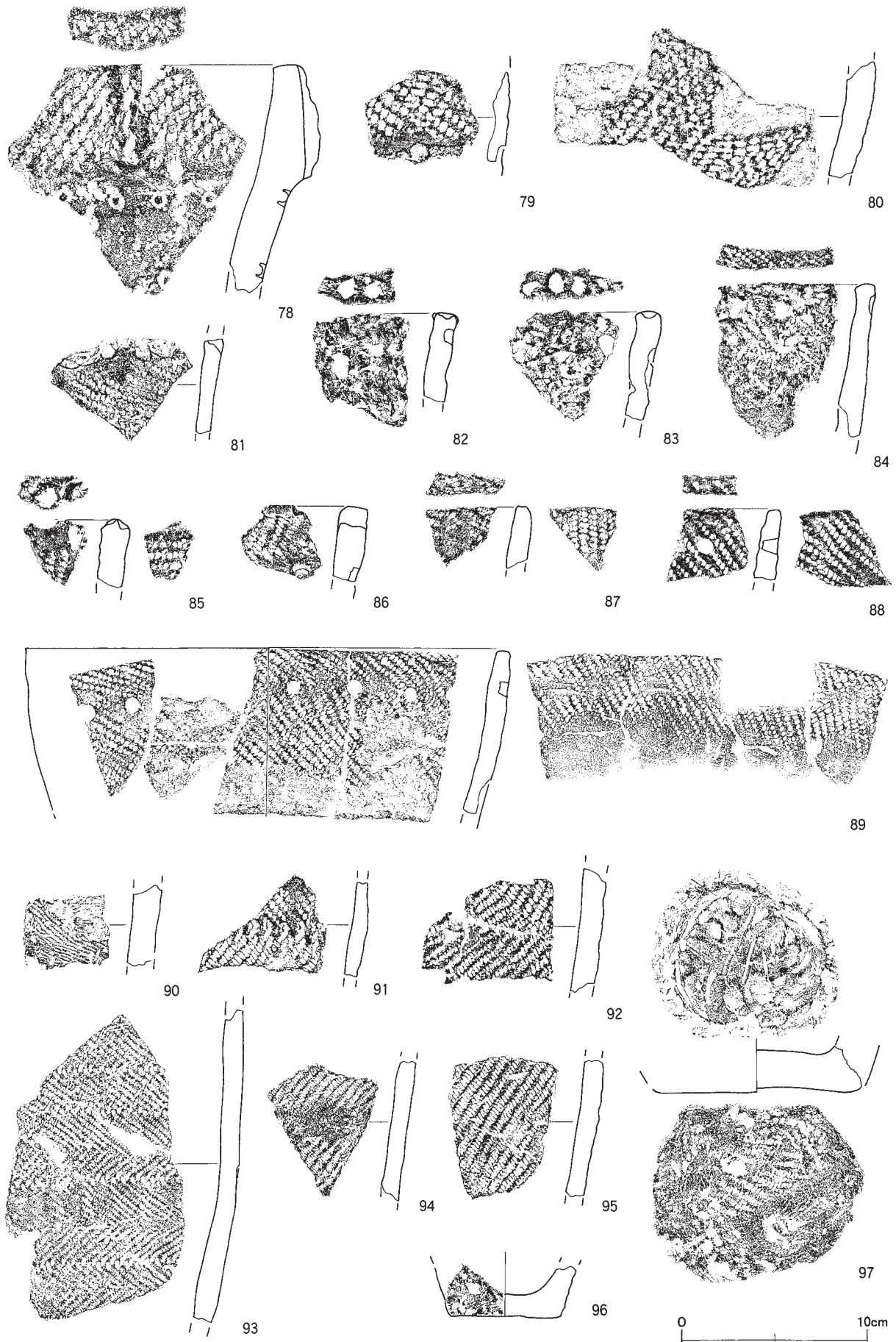
図IV-8 包含層出土の土器(3)



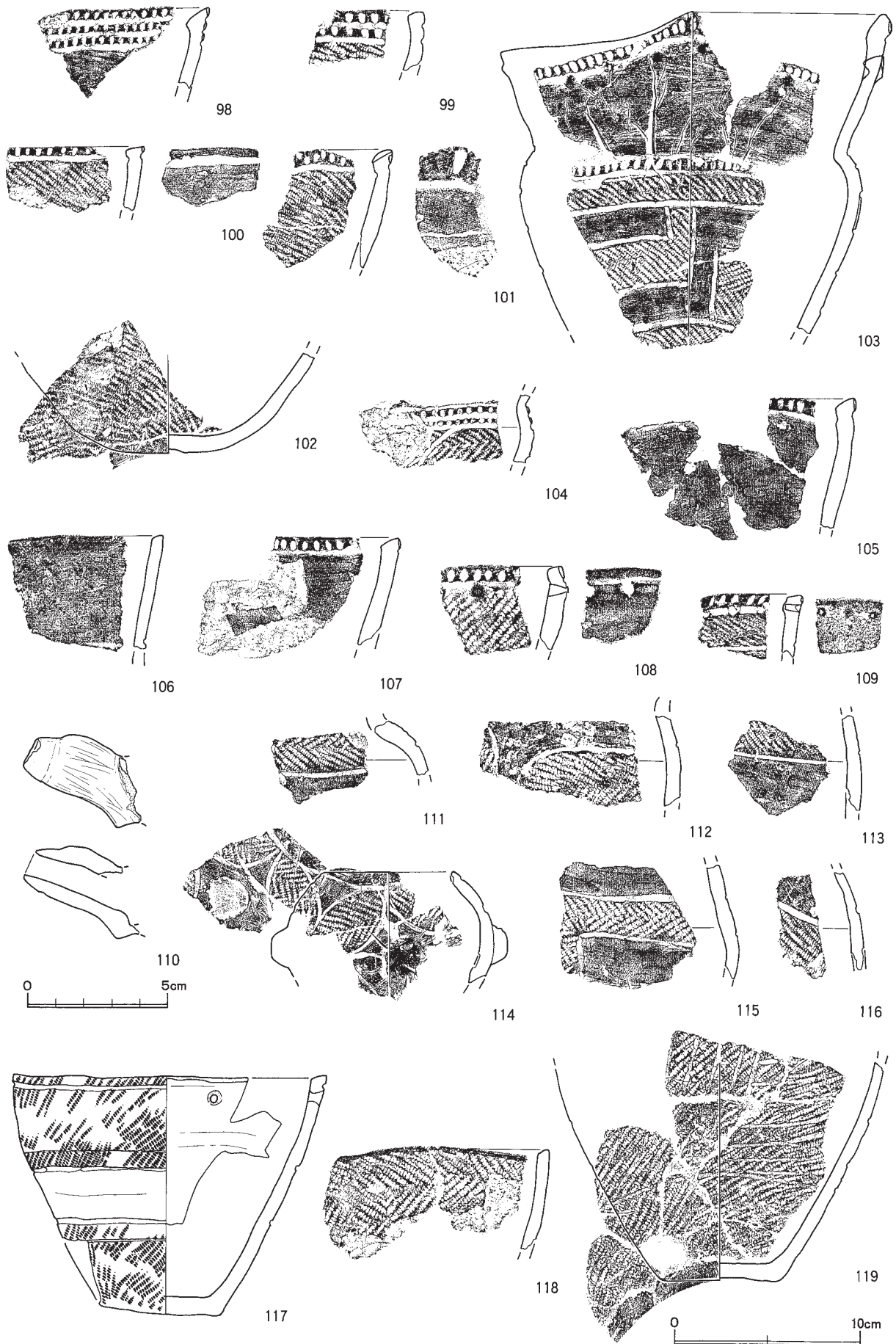
図IV-9 包含層出土の土器(4)



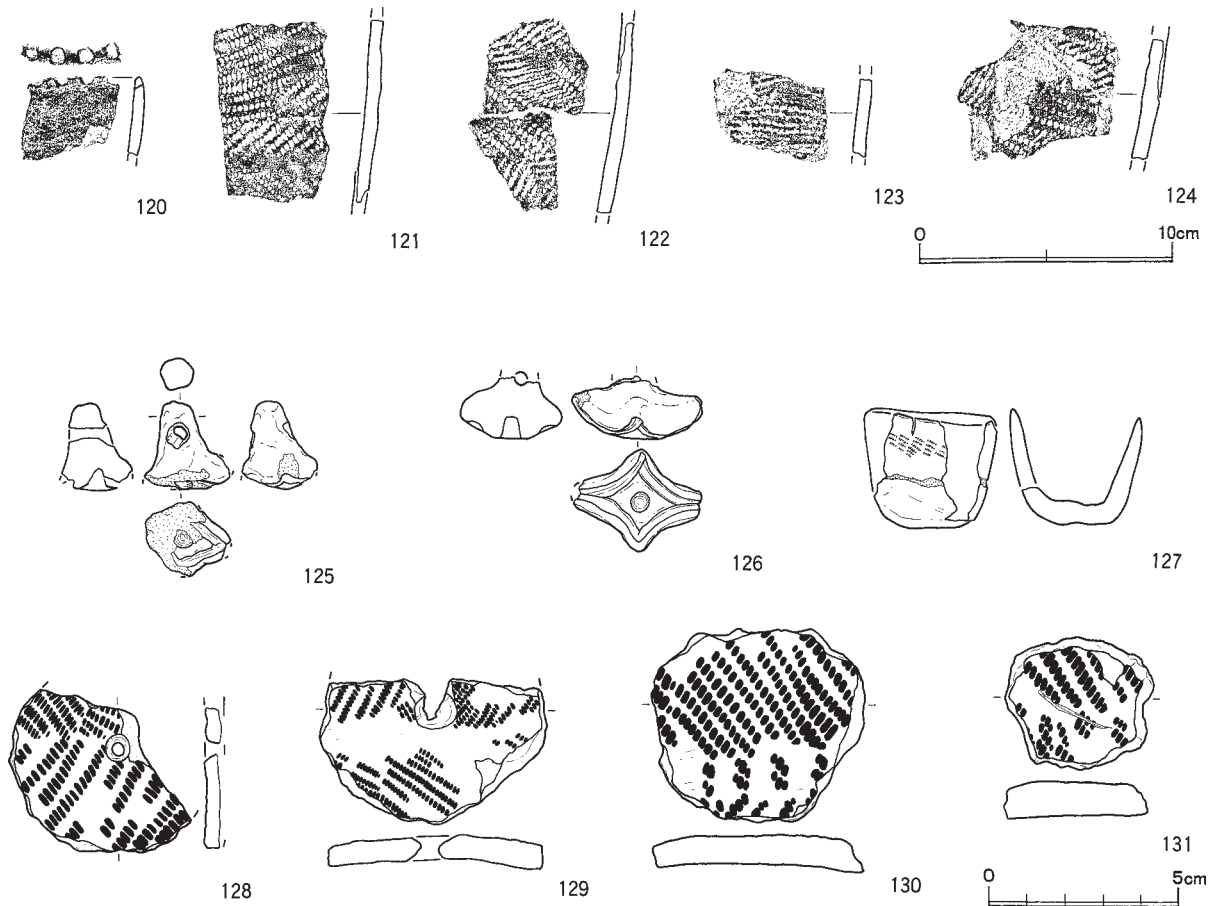
図IV-10 包含層出土の土器(5)



図IV-11 包含層出土の土器(6)



図IV-12 包含層出土の土器(7)



図IV-13 包含層出土の土器(8)・土製品

3. 石器 [図IV-14~26 表IV-6~9 図版98~103]

a) 石刃鋸石器群

本石器群は石刃鋸を指標とする石器群である。本遺跡では縄文時代早期中葉浦幌式土器に伴って石刃鋸石器群が出土しているが、そのほかに縄文時代早期後葉、中期末～後期前葉、後期中葉～後葉の土器・石器が出土している。中期後半～後期初頭の石器群にも石刃石器群があるため、ここでは浦幌式土器と石刃鋸石器群がまとまって出土したM～P20～23グリッドの石刃関連資料を中心に本石器群に関連すると思われる資料の記述を行う。なお、線状痕については10倍のルーペで観察を行った。

石刃鋸 [図IV-14の1～20、図版98]

20点図示した。すべて黒曜石製。素材は1～4・6～20が石刃で、5は3cm程度の小型の剥片素材。5は五角形の形状と素材から早期後葉の石鋸の可能性はある。素材石刃は、背面が一稜のものが多く、側面形は非常に直線的である。幅は13mm前後、厚さは2～4mmが主体で、加工による変形の度合いが少ないことから幅の狭い薄手の石刃が選択されている。また、石刃核の側面や礫面の残存するものが他の器種に比べて少なく、素材選択性の強さが認められる。

尖頭部は素材石刃の打面側（1・2・6・9～12・14・16・18～20）、先端部側（3・4・7・8・13・15・17）に作出され、打面側がやや多い。打面側に作出されるものはバルブの膨らみを除去するように加工される。基部は欠損しているものが多いが、残存しているものは主に腹面側への急角度の加工によりやや内湾するように整形される。基部加工が急角度であることから加工前は折れ面であったことが推測され、素材を折り取ることによって石刃鏃の素材を得ていたことが推定される。

加工は腹面側が主体で、両側縁ほぼ全体に施され、腹面のみのも（1・2・3・7・11・12・15）が半数程度あり、背面にあるものは軽微なもので、先端部に限定される。主に背面加工によって整形される13・19はやや厚手で、尖頭部の稜に潰れが見られるため、錐形石器の可能性もある。側縁は鋸歯状で、先端の尖った工具で押圧剥離によって加工されたものと考えられる。腹面側の加工は、判断不能なもの（3～5・8・13）を除くと、右側縁は基部から尖頭部に、左側縁は尖頭部から基部に向かって行われるもの（1・2・6・7・9・12・14・18・20）が多く、左手で石器を保持した場合、素材背面を上保持した状態で腹面の右側縁は基部側から先端側（右から左）へ、左側縁は先端側から基部側（右から左）へ打点をずらしながら加工を行ったと考えられる。10・15は逆方向に加工が進行することから利き手の癖などが考えられる。他の器種と異なり、線状痕の残るものはほとんどなく、器種の変換は認められない。20には腹面左側縁に右上がり斜位に線状痕が見られ、加工が切っていることから石刃として利用された後に石刃鏃に加工された可能性がある。

錐形石器〔図IV-14の21～23、図版98〕

3点図示した。すべて黒曜石製。21は素材先端側、22・23は素材打面側に尖頭部が作出される。加工は刃部にほぼ限られ、刃部と反対側には折れ面があり、22・23の折れ面には打点が認められ、素材段階で意図的に切断されている。22の腹面左側縁基部側には側縁と平行方向の線状痕が残る。

つまみ付きナイフ〔図IV-14の24～26、図版98〕

3点図示した。すべて黒曜石製。24は小型幅広の石刃素材、25・26はやや大型の石刃素材。24は打面部の平面形が弧状で、石刃も短いことから中期末～後期前葉の可能性もある。25・26は両端が折れ面で、端部近くの両側縁にノッチ状のつまみ部が作出される。25の背面には加工が施され、背面の主要な稜、腹面の末端部の稜に潰れが見られる。26の両側縁には両面に不規則な微細剥離が残り、縁辺には線状痕が認められる。

搔器〔図IV-14の28・29、図版98〕

2点図示した。すべて黒曜石製。28はやや幅広で短い石刃素材であり、中期末～後期前葉の可能性もある。29は右側縁に微細剥離痕があり、左側縁には石核調整による剥離痕が残る。28・29とも刃部平面形は右斜位に傾き、28は直線的で、29は丸い。

彫器・彫器削片〔図IV-15・16の30～55、図版98・99〕

接合資料6点、彫器11点、彫器削片9点を図示した。すべて黒曜石製。30～32・34・35は彫器と彫器削片の接合資料、33は彫器同士の接合資料である。全て石刃素材で、接合資料の上下両端が折れ面で、打点のあるもの（30上部折れ面）があることから意図的に折り取られたものとみられる。

30は両側縁に微細剥離痕があり、右側縁両面に縁辺に平行する線状痕がある。左側縁には上部折れ面に先行する彫刀面があり、①上部折損前の左側縁での上からの削片剥離、②左側縁での下からの削片剥離、③上部折損後の右側縁での削片（30a）剥離が行われる。30aは打点が石刃のほぼ中央の腹面側にある。

31は背面が角礫面と石核調整とみられる横方向の剥離面で構成される石刃素材で、両側縁に微細剥離痕があり、裏面右側縁には側縁に直交する線状痕がある。下部にはそれらを切る彫刀面が左右側縁

にあり、さらに、上部左側縁では正面側への加撃によって削片(31a)が剥離される。

32は角礫面と石刃核の石核調整が背面左側に残るやや大型の石刃素材で、正面中央の稜に線状痕、右側縁に微細剥離と線状痕が残る。上下両端の折り取り後、左側縁で上下からの彫刀面打撃が行われ、正面中央の稜付近の加撃により削片(32a)が剥離される。30～32は縁辺から5mm程度内側に打点があり、削片末端部はウートゥルパッセにより下端を取り込んでいる。

33は左右側縁両面の加工後、接合資料上下の折り取りが行われ、上部左側縁、下部右側縁で削片剥離、さらに、33ab折損後に両者とも左側縁で削片が剥離される。両面の広い範囲には側縁に平行する線状痕が、裏面左側縁には側縁に直交する線状痕が残り、それらは二次加工の内部にも広がることから二次加工後に形成されたものと思われる。

34は背面左側縁に加工が施される。上下の折り取り後、下部右側縁で削片剥離が行われた際に34abが分割され、その後、上部破片の左側縁で削片34aが剥離される。腹面左側縁には縁辺に平行する線状痕が残る。

35は両側縁に微細剥離痕と線状痕が残る。上下の折り取り後、上部の裏面側への加撃によって削片(35b)が剥離される。

36～45・52は彫器で、36～41・52は削片剥離の末端がウートゥルパッセにより素材末端を取り込んで彫器が三角形ないしはそれに近い形状をなすもの、42～45は削片剥離の末端がヒンジになるものである。全て折れ面が彫刀面打面である。36には石刃核の石核調整が左側縁に残る。二次加工は37の腹面右側縁、39の背面左側縁、52の背面左側縁に、微細剥離痕は42・43に残る。線状痕は37の背面左側縁・38の左側縁両面に側縁と平行方向、39の腹面に平行・直交方向、40の背面稜・腹面に平行方向、43の両側縁に平行方向、左側縁の両面に直交方向、45の腹面に平行方向、52の腹面に平行方向のものが残る。37～39は上部右側縁で、40は上部右側縁で3回削片剥離が、それらの剥離に前後して下部左側縁で削片剥離が行われる。44・45は45が上、44が下として折れ面で接合し、厚手の石刃素材である。両者とも上下から削片が剥離される。

46～51・53～55は彫器削片で、46～50はウートゥルパッセにより彫器末端を取り込んだもの、51・53～55は末端部がヒンジのもの。46は左側縁両面に、48は腹面左側縁に、49は両側縁両面に、50は背面両側縁に、51・53～55の背面に加工が施され、その他の側縁にも微細剥離が残る。46の左側縁両面、47の両面、48の右側縁両面、49の右側縁両面には側縁と平行方向の、50の腹面には平行方向と左側縁に直交方向の線状痕が残る。打面は46～50・53は折れ面で、51・54は山形、55は不明である。51・54は別の石器群の可能性があり、打点は46～50・53は側縁から5mm以上内側で、正面か裏面側に偏る。

以上の観察結果から彫器の製作工程を次の4段階に復元できる。①素材石刃の側縁を加工が行われる(行われない場合がある)。②側縁に平行(直交する場合もある)する線状痕や微細剥離の残る作業が行われる。③長さ5cm程度の短冊状に折り取りにより分割される。④左右側縁で背面ないし腹面の縁辺から5mm程度内側を加撃して彫刀面が作出される。

削器・二次加工ある石刃・石刃〔図IV-14の27、17・18の56～80、図版99・100〕

接合資料1点、削器1点、二次加工ある石刃8点、石刃16点を図示した。すべて黒曜石製。削器は側縁に連続した加工の施されるもの、二次加工ある石刃は側縁に不連続な加工や微細な剥離痕が残るものとしたが、両者は連続したものである。また、これらは石刃の特徴を良く残していることから、ここでは石刃と合わせて記述する。

56は削器同士の接合資料である。56は長さ15cmで剥離時の石刃核の長さをほぼ反映している。末端部には角礫面と石核調整が残る石刃核下端部を取り込み、側面形は直線的である。右側面には裏面か

らの横方向の石核調整がある。56 a の加工は腹面の打面側を覆うように左右側縁から行われる。上半分の左側縁両面に側縁に平行する線状痕が残り、下半分には加工・線状痕ともに認められない。56 b は石刃核の下端部を取り込まずに先端部まで直線的で、背面左側縁に加工が施される。左側縁の両面には側縁に平行する線状痕が残る。

57～61・63はほぼ完形である。打面は調整打面で、頭部調整はほとんど行われぬ。打点は石刃核作業面の稜の頂部が多く、打面形状は三角形ないし菱形のものが多い。長さは10cm前後、幅は2～2.5cm、厚さは0.6～0.8cmである。57・61は二次加工が施されるが、その他は微細な剥離が多い。また、縁辺に平行する線状痕が微細剥離と同様な部分に観察されるものが多い(57～60)。60・63の腹面左側縁ほぼ中央には側縁と直交方向の線状痕が残る。61は56a同様、加工のある打面側には線状痕があり、加工の無い先端側には線状痕が確認できない。64は単剥離打面で、小型幅広であることから中期末～後期前葉の可能性がある。

65～73は石刃の打面側。65・67～69・71・72は背面が二稜のもの。打面形は肩が張り、四角のものも多く、先行剥離角・剥離角とも90度に近く、打面部のバルブの凹凸を除き、側面形態が直線的である。このような特徴は円錐形ないしそれに準じる形状の石刃核から剥離される石刃によく見られるものである。71・72には石刃核の正面・裏面からの石核調整痕が残る。完形の資料同様、微細剥離痕と側縁に平行方向の線状痕が共に確認されるものが多い(65・66・69～73)。また、直交方向の線状痕は68・70・71の腹面右側縁下部、72の腹面左側縁中央部に残る。

75・76は稜付き石刃で、石刃剥離の初期段階で石刃核に稜が形成されたことを示している。76には角礫面が残る。75・76の両側縁両面に線状痕が確認できることから側縁が使用された可能性が高い。石刃の接合作業では接合したものが非常に少ないことも勘案すると、稜付き石刃が本遺跡に搬入された可能性もある。

77は中間部、62・78～80は末端部である。62・77の両側縁両面には線状痕と微細剥離痕が残り、77は上下とも折損している。78は角礫面が残り、下部には横方向の石核調整痕がある。その側面形は直線的で、末端部のみ反りが認められる。79・80は石刃核の下端部が残存する。79は角礫面が残り、80は下端裏面が石核調整により稜状に整形され、石刃核の正面作業面形状がV字状であったと推定される。

打面調整剥片〔図IV-18の81、図版100〕

1点図示した。黒曜石製である。81は背面が多方向の剥離面で構成される剥片で、打面調整剥片と考えられる。非常に少なかったが遺跡内で石刃剥離が行われた可能性を示すものである。

石刃核〔図IV-18の82、図版100〕

1点図示した。黒曜石製である。82は石刃核の下端部である。上部は欠損している。正面にはウールパッセの剥離面が残り、裏面でも石刃剥離が行われ、右側面では横方向の石核調整が行われている。正面では幅2cmを超えるものが裏面では2cm弱の石刃が剥離されている。

産地推定結果

石刃鏃9点、彫器1点、削器1点、石刃核1点の黒曜石産地分析を行った結果(早期後葉の可能性のある5(X5)、中期末～後期前葉の可能性のある64(X42)を除く)、1(X9)、2(X8)、3(X7)、4(X2)、6(X4)、7(X6)、11(X10)、14(X1)、15(X3)、44(X44)、56b(X43)、82(X45)の全てが「所山」と判定された。本石器群には原礫面の残るものが比較的多く、全て角礫であることから置戸町所山周辺で採集された角礫が利用されている。

(鈴木)

b) そのほかの石器群

石鏃〔図IV-19の83~109、図版100〕

27点図示した。すべて黒曜石製である。83~86は薄身で小型の柳葉形、87はやや長身の柳葉形。84の腹面の主剥離面が目立つ以外は、細かい両面調整が行き届いている。基部は平坦である。

88~97は三角形または二等辺三角形を呈する。88・90・95は体部がわずかに膨らむ。88・92~97は基部が弱く内湾し、89~91は平坦である。88・90・94の腹面には素材の剥離面が残されている。93は体部中央に厚みがある。93・97は先端部をわずかに欠く。

98~100は有茎で、かえし（以下「カエシ」と表記）が明瞭なもの。体部は三角形を呈する。98はカエシが鈍角で、99は鋭い。

101~108は有茎で、カエシが不明瞭なもの。菱形に近い形状が多いが、左右非対称である。101~104は比較的薄く、細身のもの。105~108は菱形に近い形状のもの。カエシの位置が器体中央から上位のものと同位のものがある。尖頭部を再加工したものもあると考えられる。

109は有茎でカエシが明瞭である。体部は膨らみのある三角形を呈する。内面に素材の剥離面を大きく残している。

石槍またはナイフ〔図IV-19~21の110~135、図版100・101〕

26点図示した。すべて黒曜石製である。

110は、茎がやや太い。基部は丸みをもたせた調整が行われ、先端はわずかに欠損する。

111~116は石鏃との区分境界とした長さ5cm程度のものである。111~114はカエシがやや不明瞭で、菱形に近い形状である。112は基部に丸みをもたせた調整が行われている。113は腹面下半に素材の剥離面が残っている。114は両端が尖る。115・116は木葉形または柳葉形に近い形状のもの。115は両端部が尖る。側縁は細かな調整が行き届いている。116はやや厚みがあり、側縁調整がやや粗く鋸歯状である。

117~128は長さ10cm前後のもの。117・119・122・126・128は木葉形または柳葉形に近い形状のもの。118・121・123・125~127は菱形に近い形状のもの。120は不定形である。

117は柳葉形に近い形状で、厚みがやや不均質である。119は基部の一部を欠き、尖頭部がやや細くなっている。120は五角形に近い形状を呈する。厚身の素材で、基部は細かい調整が行われず、打痕を含め素材の剥離痕が広く残る。尖頭部左側縁がやや湾入している。122は右側縁が直線的で、半月形にも近い。腹面は個々の剥離面がやや大きい。121・124は基部下端にわずかに平坦部を作り出している。123・125は両端が尖る。いずれも上半の側縁が直線的で、下半が湾入する。下半とした方が再加工を施した尖頭部である可能性も考えられる。126は基部が丸みを持ち、腹面側がやや内湾している。127は幅広の素材で、個々の剥離面がやや大きい。128は側縁調整がやや粗く、鋸歯状となっている。

129~135は長さ10cmをこえる大型のもの。129は残した原石面を基部としている。尖頭部~中央部に両面調整がていねいに行われており、左右非対象である。130・131は厚身で、尖頭部は尖り、基部は比較的幅広で丸みをもつ。132は4点が接合した。木葉形で両端が尖る。左右対称の整った形状である。133は基部が丸みをもつ。尖頭部は細長く、再調整が行われた可能性がある。134は幅広の基部。135は長身のもの。尖端部は再調整が行われ三角形になっている。中央部のカエシがみられる。基部は幅広で、下端は134と同様に平行の剥離が行われている。

つまみ付きナイフ〔図IV-22の136~146、図版102〕

11点図示した。142・143は頁岩製で、それ以外はすべて黒曜石製である。

136～138は両面調整のもの。136はえぐりが不明瞭である。端部は丸みをもつ。137は体部が木葉形で、小型のつまみ部を作り出している。138はつまみ部が幅広である。

139～146は基本的に片面調整のもの。139は湾曲する剥片に、幅広で縦長のつまみ部を作り出している。140は縦長で細身の剥片を素材とする。つまみ部のえぐりが弱い。141は幅広の縦長剥片を素材としている。下部を折損している。つまみ部の調整はていねいに行われている。142は灰黄褐色を呈する頁岩製。小型で薄身である。表面全面、特に両側縁および下端部が細かく調整されている。つまみ部は小型である。143は暗褐色を呈する。表面に摩擦によるとみられる光沢がある。背面左は緩やか、右は急な角度で調整が行われ、上端部にやや小型のつまみ部を設けている。定形的である。一方、144～146はやや不定形な剥片を素材としている。144は刃部が鋸歯状になっている。145・146は下端が平坦に作り出されている。146のつまみ部は偏っている。

石錐 [図IV-22の147～155、図版102]

9点図示した。石材は152が片岩、155が頁岩で、それ以外はすべて黒曜石製である。

147～149は3 cm以下の小型のもの。147は細かい調整により棒状に整えられている。148・149は体部がふくらみ、機能部は尖る。

150～152は長さ約5 cmのもの。150は体部が膨らむ棒状で、小さな機能部を設けている。151は機能部に磨痕がある。石鏃の再利用と考えられる。152は薄い緑色を呈し、表裏に素材面がみられる。表面左側縁上部は折損している。機能部に細かい剥離調整が行われ、尖っている。

153～155はやや大型のもの。153は背面周縁部および腹面機能部に細かい調整が行われている。石槍やナイフ類の未成品を転用した可能性がある。155はオリーブ色を呈する頁岩製である。体部は厚みがあり、基部は丸みをもつよう調整されている。機能部は表裏面ともていねいに細かい調整が行われている。

両面調整石器 [図IV-23の156～158、図版102]

3点図示した。すべて黒曜石製である。156は木葉形を呈し、両面調整が行われている。背面に凹凸がある。157は楕円形に近い形状で、裏面は素材の剥離面が広く残る。158は厚身で、菱形に近いが丸みを帯び、端部が尖る。

スクレイパー [図IV-23・24の159～174、図版102・103]

16点図示した。すべて黒曜石製である。縦長の剥片や不定形剥片などが素材である。

159は厚みがあり断面三角形を呈する。原石面が残る剥片が素材で、両側縁に細かい調整が行われている。

160は短冊形もしくはへら状を呈する。背面が膨らむ。背面には全面に、腹面には側縁及び下端部に細かい調整が行われている。161・162は特殊な形状である。161はL字状に屈曲する剥片を素材とし、背面全体に細かい調整を行っている。腹面はやや内湾する。162は縦長の不定形な剥片が素材とみられ、表面右側縁が大きく湾入し、中央部が細くなっている。湾入部に細かい調整が行われている。

163～165は縦長の剥片を素材とする。163は背面に平坦な原石面が広く残り、右側縁に細かい調整が行われている。164は腹面がやや内湾する。表面左側縁が湾入し細かい調整がみられる。165は表面右側縁の刃部に微細な剥離痕が目立つ。

166～171は大型の剥片を素材とし、側縁など一部に細かい調整を施したものである。166は主に表面左側縁に細かい剥離調整が見られる。167は転礫が用いられ、背面に原石面が残る。168は下端部を欠損する。表面左側縁が湾曲し、細かい調整が行われている。169は表面右側縁に突出部がある。171は刃部が下端として図示した。

172～174はエンドスクレイパー。いずれも転礫が素材である。172は腹面周縁部にも剥離が及んでいる。174は表面右側縁上部が湾入している。

石核〔図IV-24の175～177、図版103〕

3点図示した。すべて黒曜石である。175・176は小型の転礫から剥片が剥離されている。177はV層から単独で出土した。幅14cmをこえ、重量は580gを測る。原石面が一部に残る。多方向から剥離が行われ、幅9cmの大型剥片が剥離されている面がある。

石斧類〔図IV-25の178～186、図版103〕

9点図示した。石材は178・182が安山岩、179・183が片岩、180・184・186が緑色泥岩、185が泥岩、そして181は蛇紋岩に類する「ロジン岩」とみられるものである。石材の種類が多く、色調も多様である。

178は基部が三角形に作出され、先端が尖る。結果的に撥形に近い形状となっている。表面は剥落した部分が斑状にみられるが、全面研磨が行われていたと思われる。刃部の一部が欠けている。

179～184は短冊形の磨製石斧。全面研磨されている。179～181は半損品で基部を欠く。179は裏面の中央付近に研磨が及ばない範囲がある。180はきわめて整った形状である。181はV層から単独で出土した。表面が赤紫色の独特の色調をもつ石材で、光沢がありヌメリ感がある。刃部は表面左から右へ傾いている。出土層位や他遺跡の出土例をあわせて考慮すると、平底条痕土器や石刃鏃に伴うものと考えられる。182は完形品。基部は平坦で整った形状である。183は両面とも中央付近に研磨が及ばない範囲がある。基部は敲打調整痕が顕著である。表面右側縁の刃部付近を欠く。184は表面右側縁に敲打調整が連続する。刃部がややつぶれている。

185は撥形と推測される石斧の刃部。表面は左右側縁に、裏面は刃部も含め剥離調整が行われている。186は表裏とも中央部に原石面が広く残る。表面基部側の右側縁も原石面がみられる。ほぼ全周に剥離調整が及んでいる。表面刃部付近の一部が研磨されている。

石錘〔図IV-26の187～190、図版103〕

4点掲載した。すべて安山岩製である。長さ5～6cm、幅7～8cm、重さは100～130gの範囲でおおむねそろっている。表面が平滑な扁平楕円体の礫の側面を打ち欠いている。187・189・190は長軸端部、188は長軸に加え短軸側縁にも打ち欠きが行われている。

矢柄研磨器〔図IV-26の191、図版103〕

1点掲載した。軽石製である。素材を半円柱状に研磨加工し、平坦面の長軸中央に直線の溝が作り出されている。端部を欠損する。

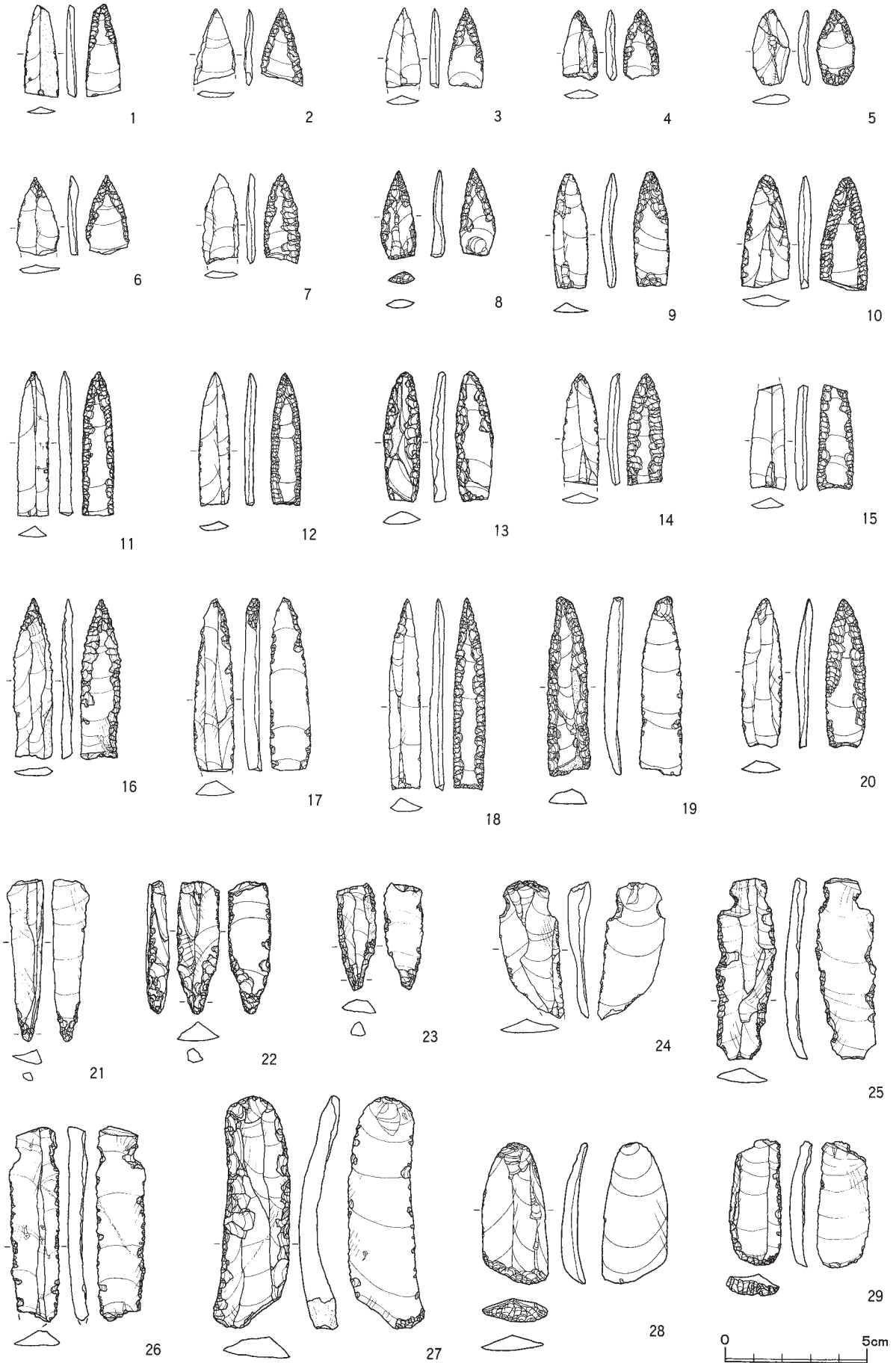
砥石〔図IV-26の192、図版103〕

1点図示した。砂岩製でもろい。平板上の素材の周囲を敲打調整した痕跡があり、平滑な研磨面およびU字状にくぼむ研磨面を複数有している。研磨面にも敲打痕が一部観察される。長さ26cm、重さは2120gである。

石皿・台石〔図IV-26の193〕

1点図示した。安山岩製である。V層から出土した。長さは30cm近く、重さ9.2kgを測る。側面に敲打成形痕、平坦面に磨痕がわずかに観察される。

(阿部)



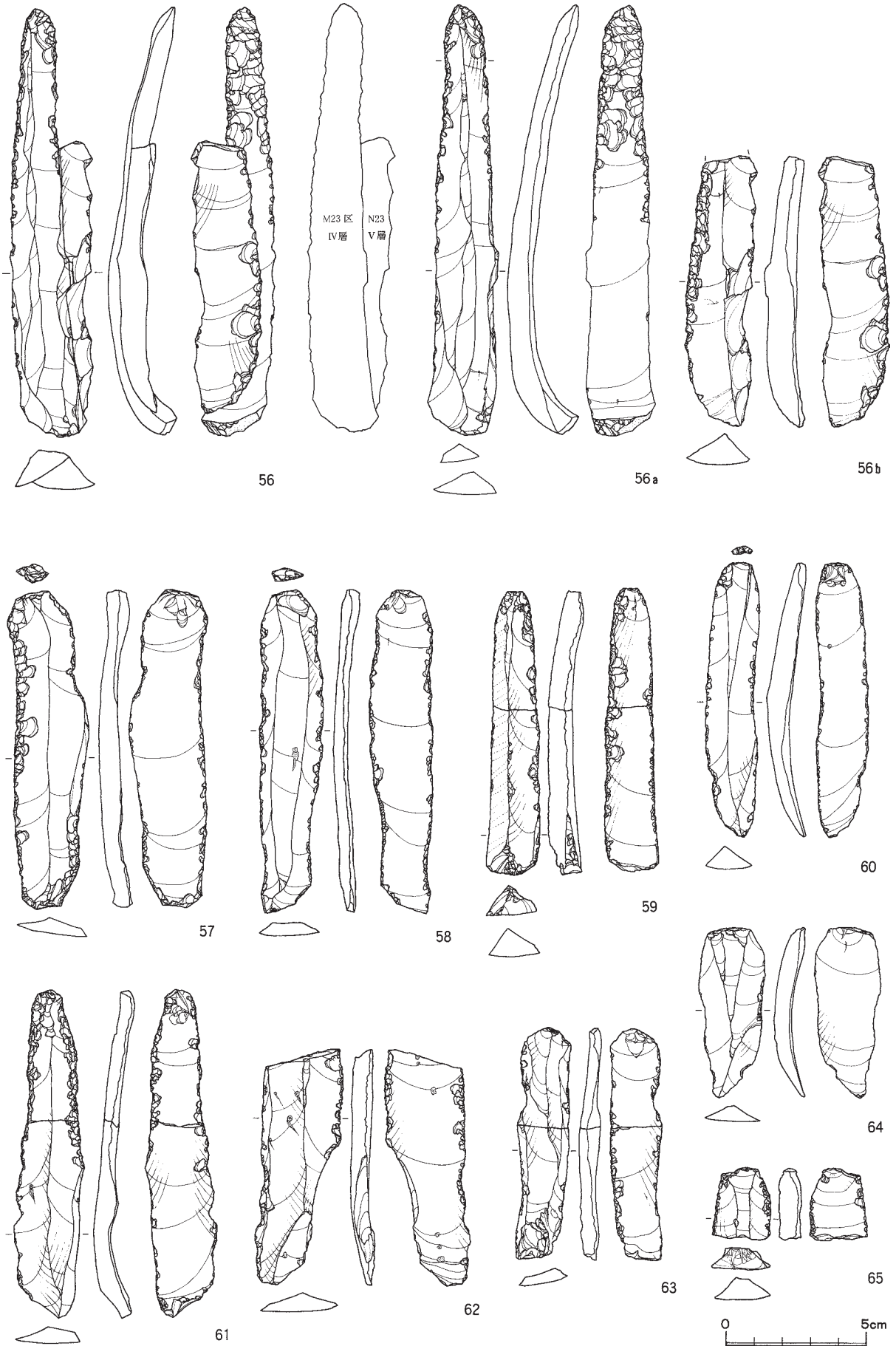
図IV-14 包含層出土の石器(1)



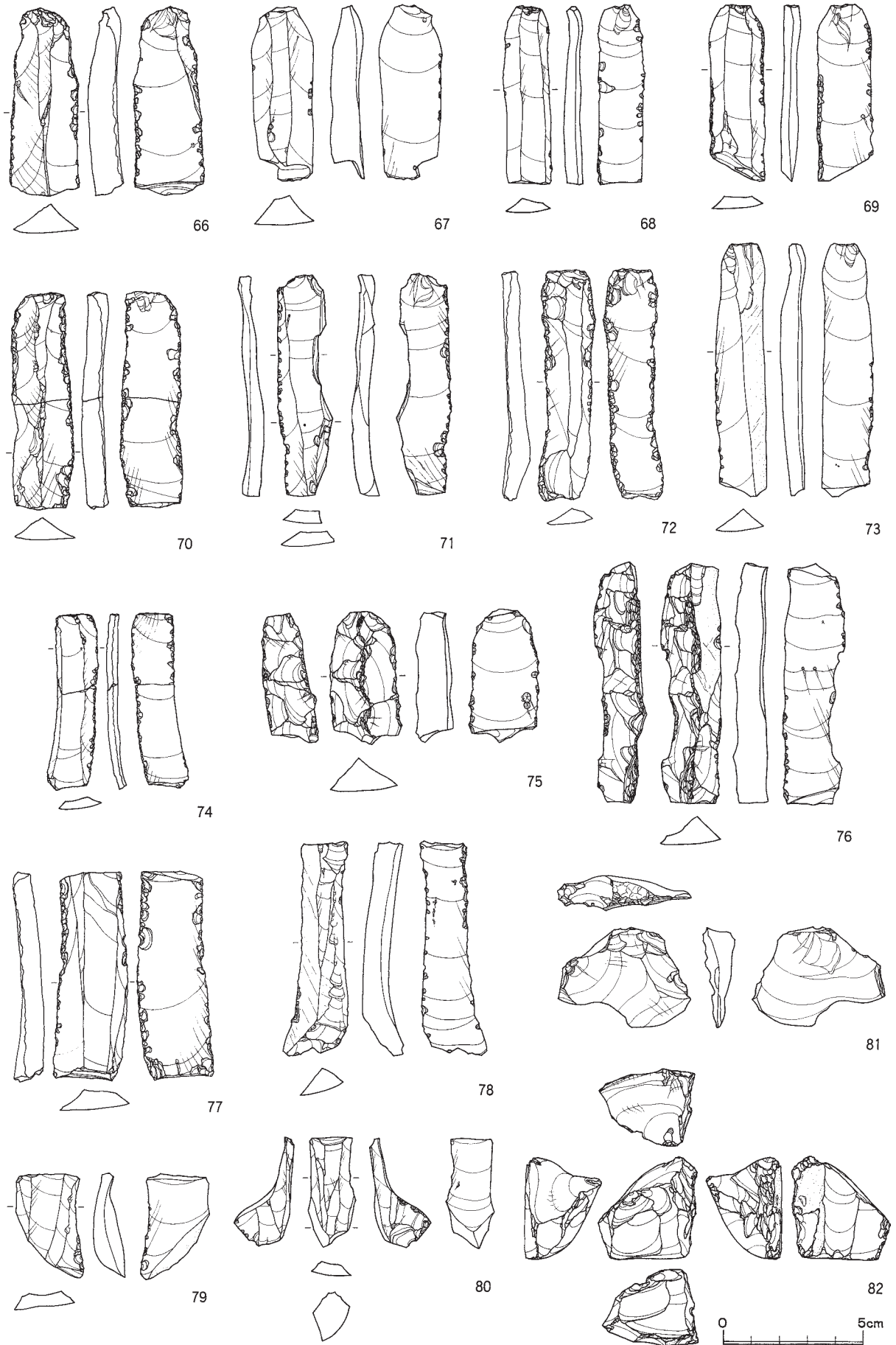
図IV-15 包含層出土の石器(2)



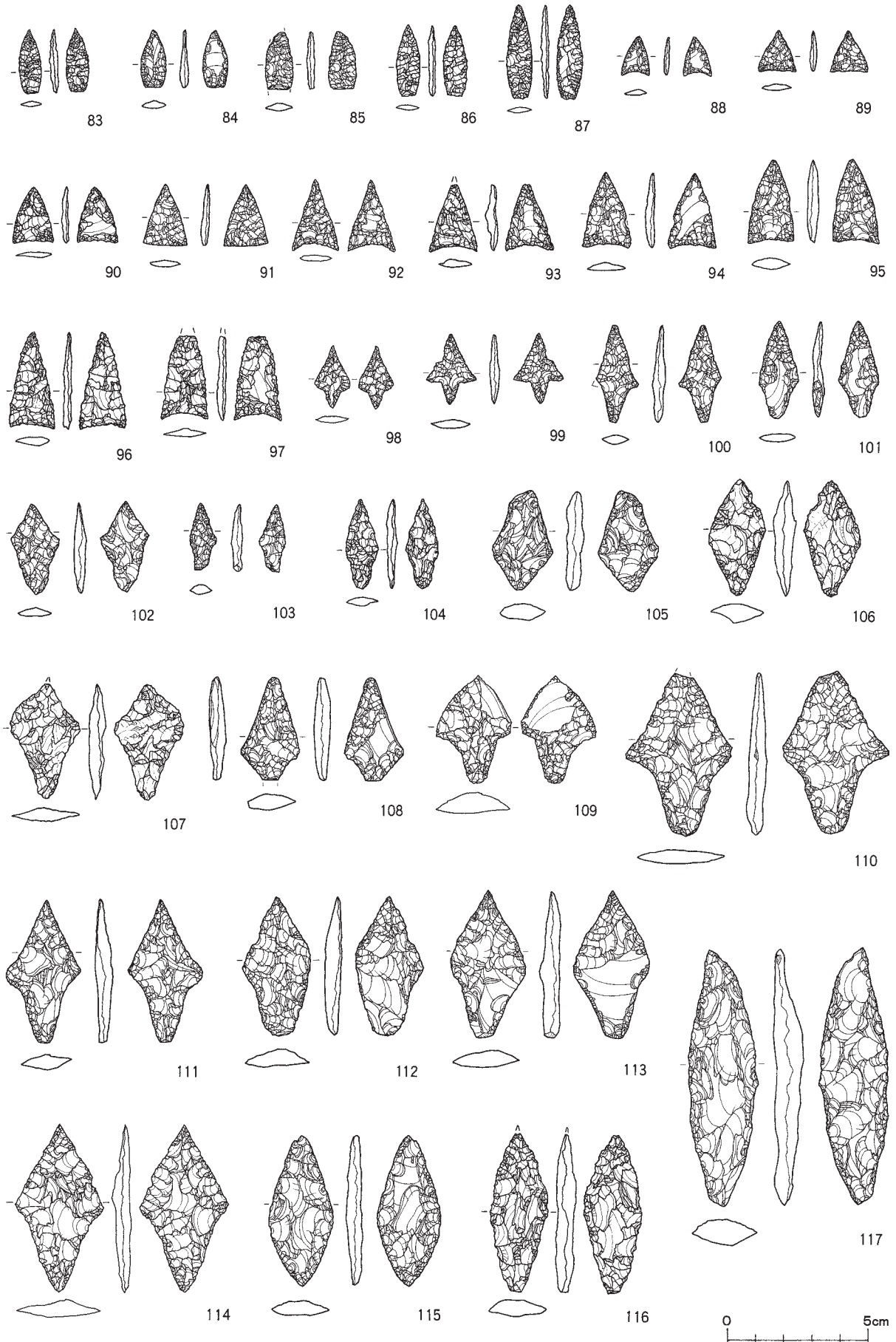
図IV-16 包含層出土の石器(3)



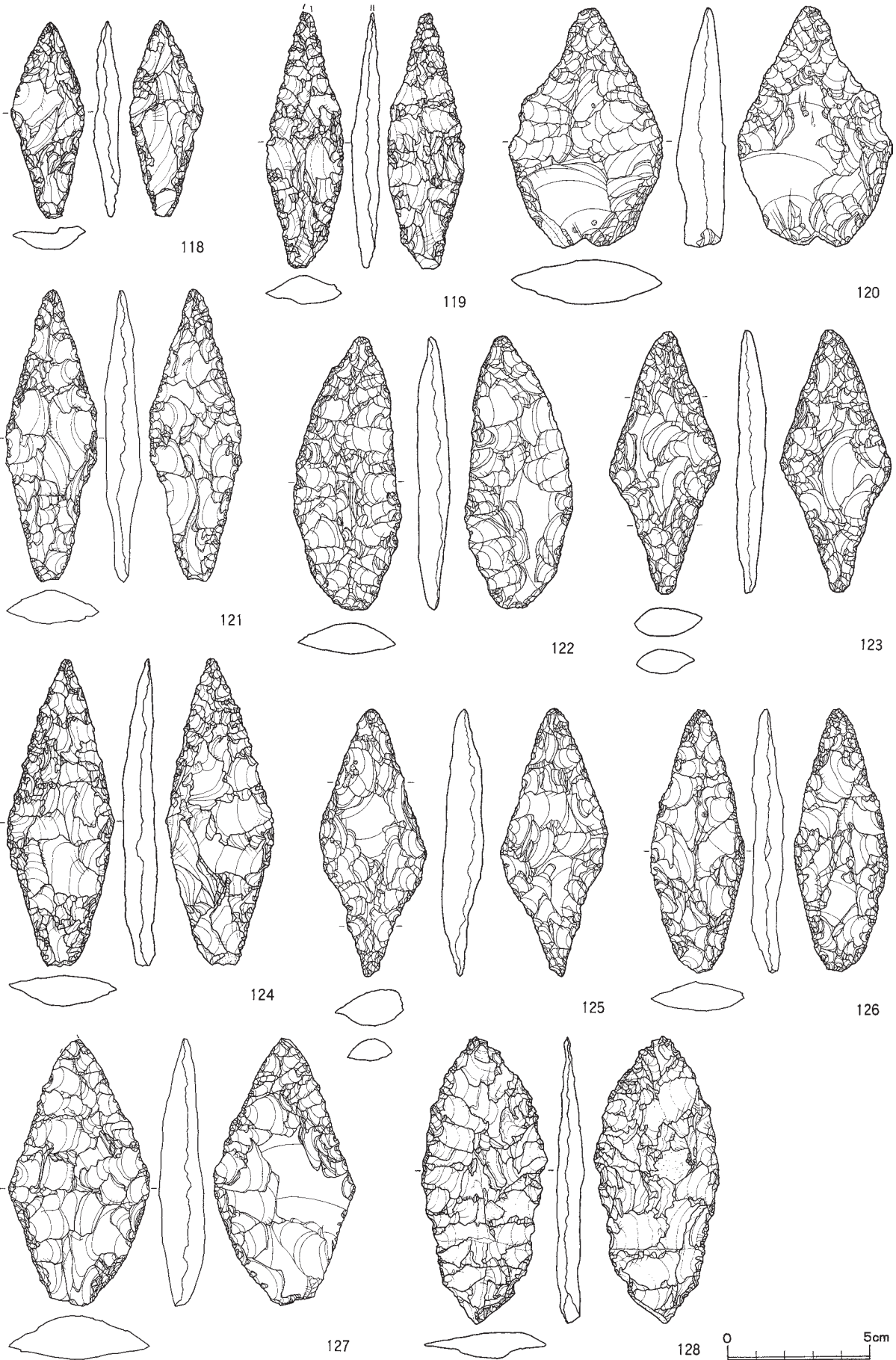
図IV-17 包含層出土の石器(4)



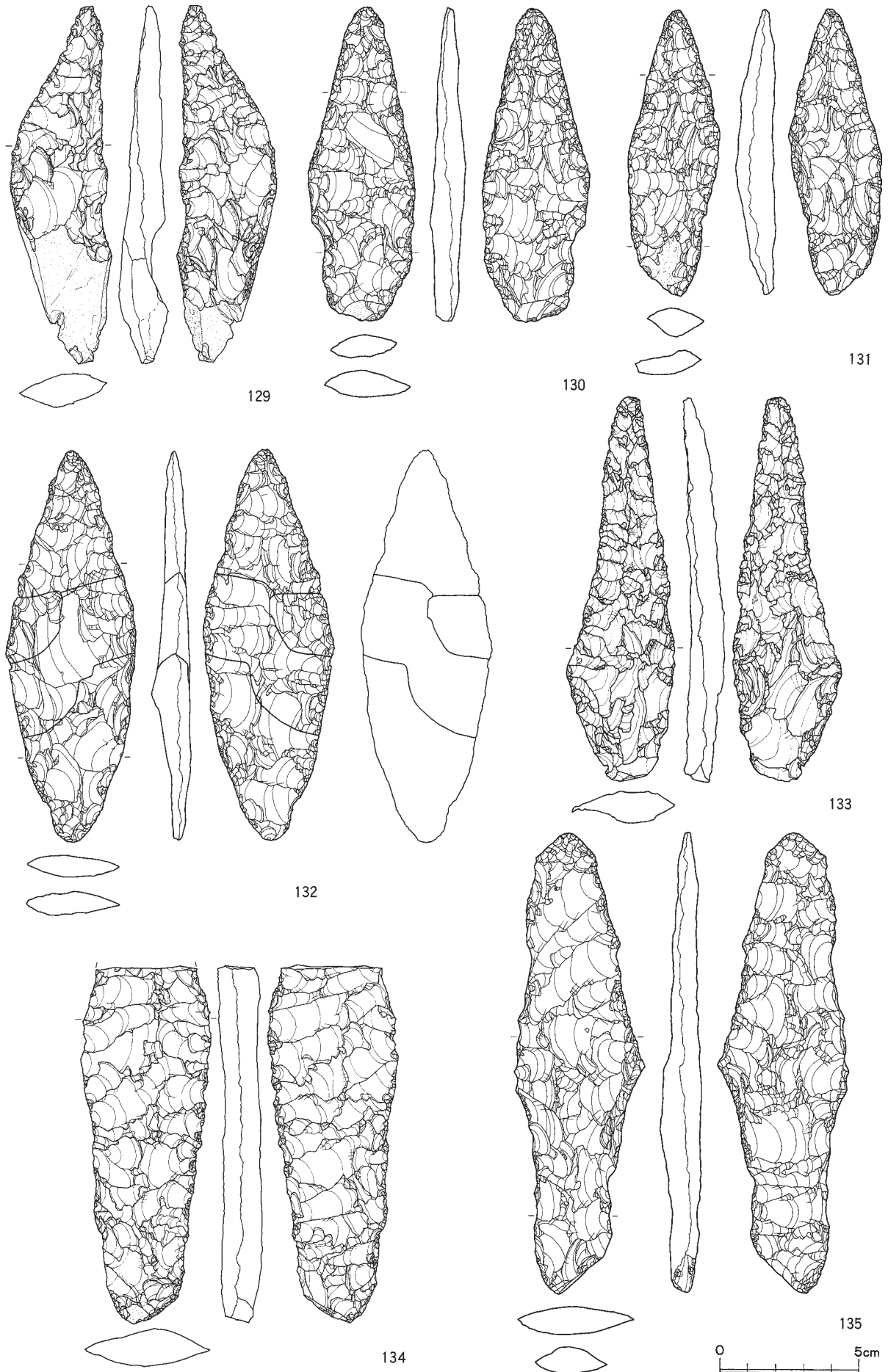
図IV-18 包含層出土の石器(5)



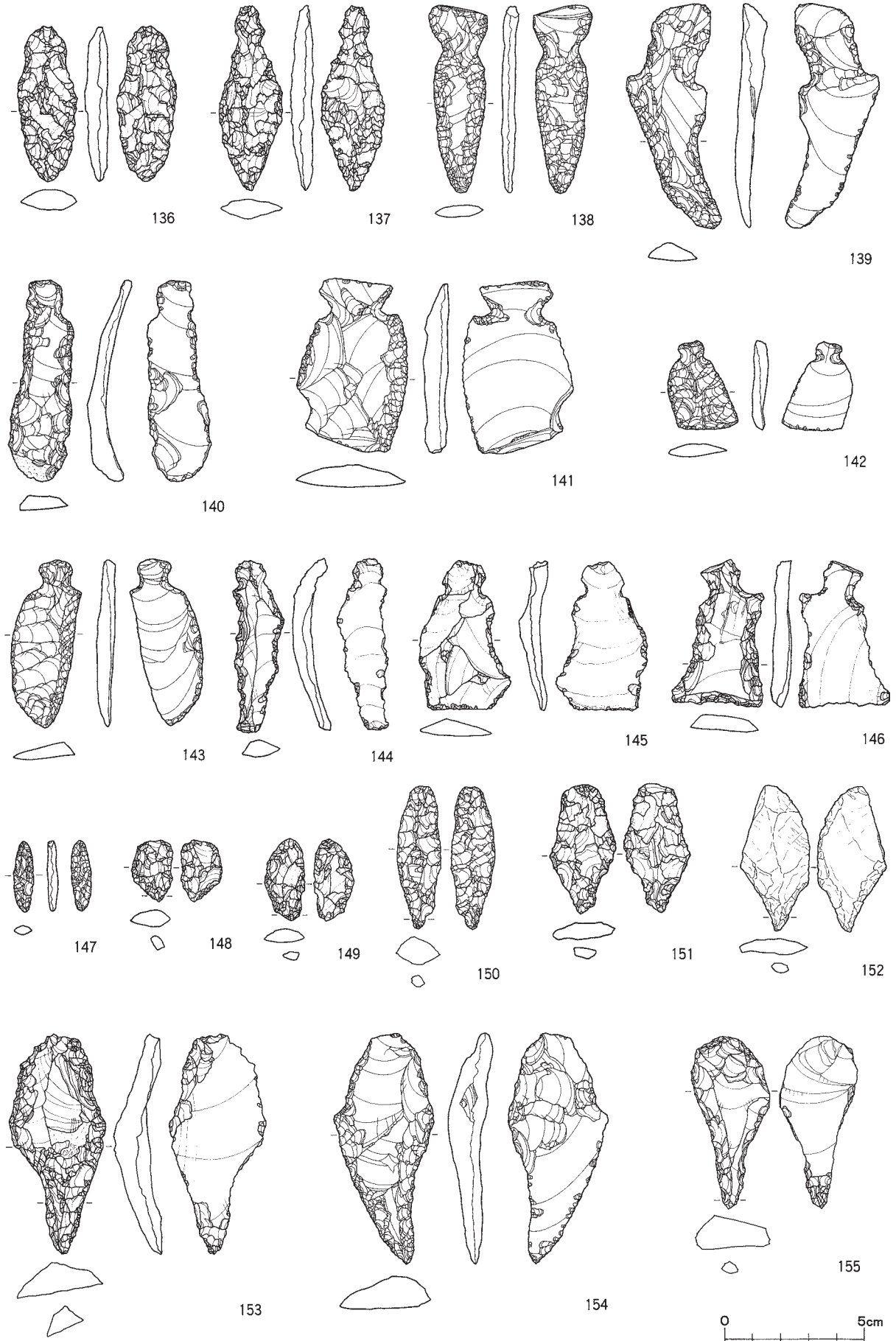
図IV-19 包含層出土の石器(6)



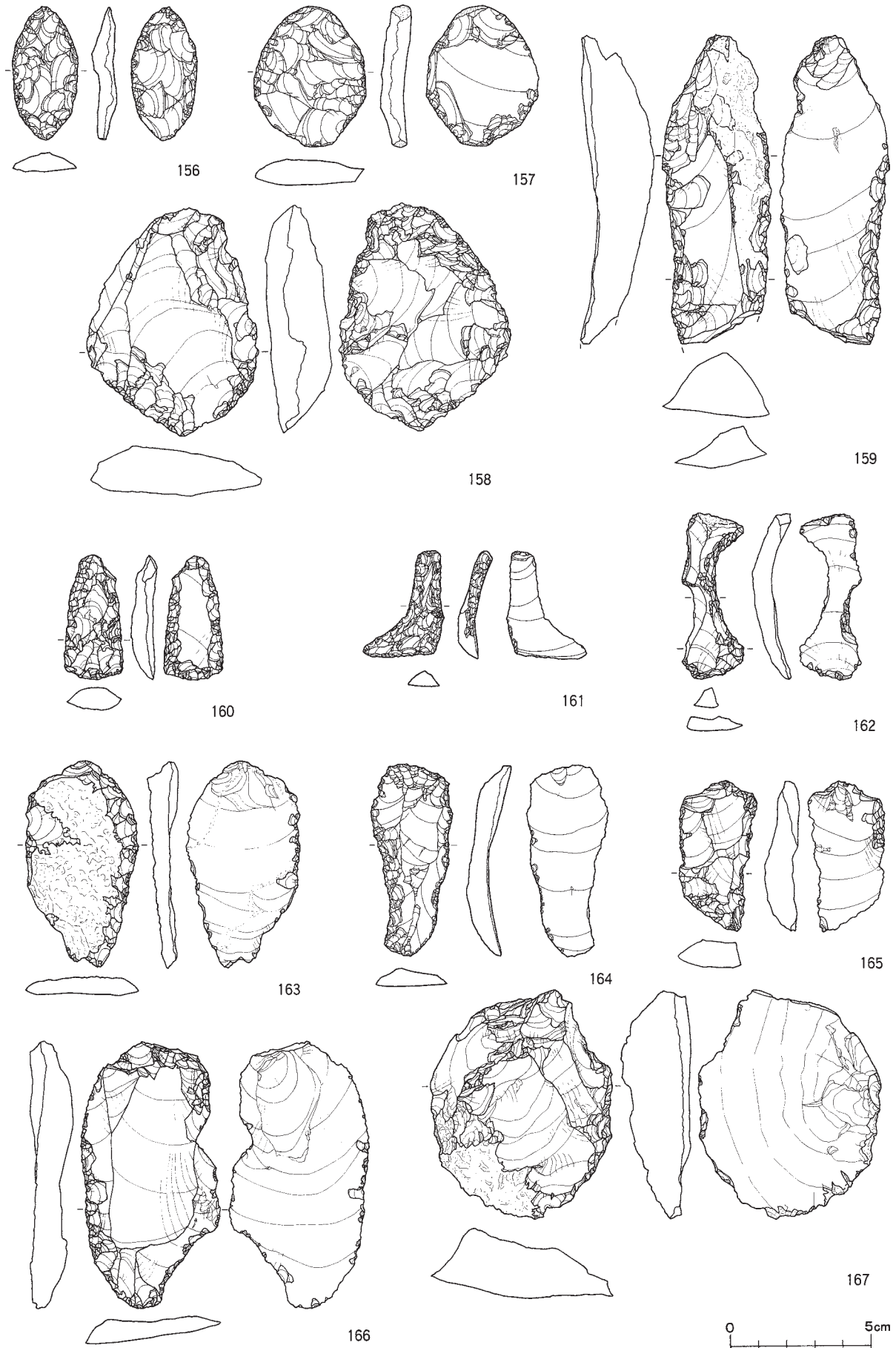
図IV-20 包含層出土の石器(7)



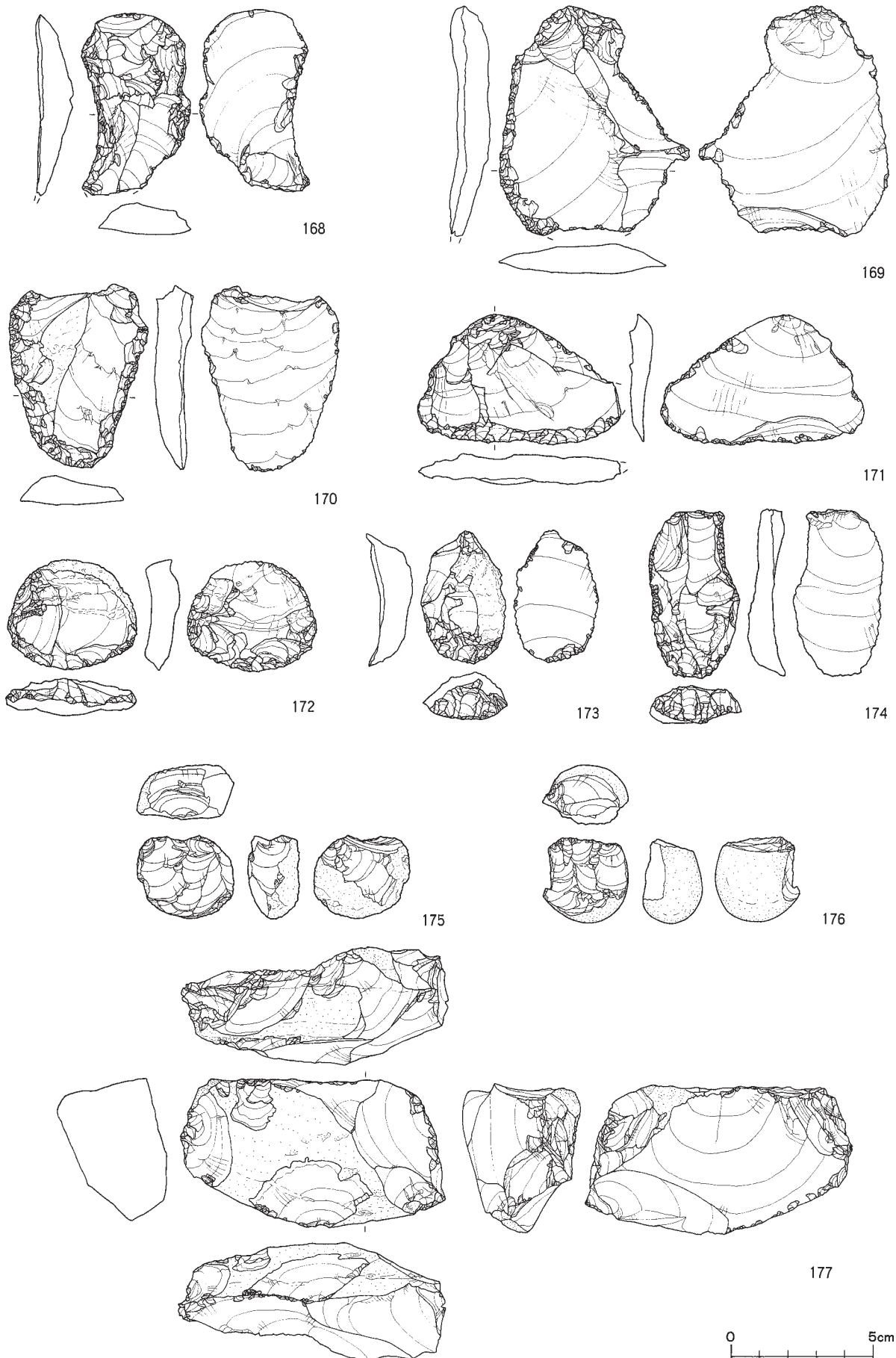
図IV-21 包含層出土の石器(8)



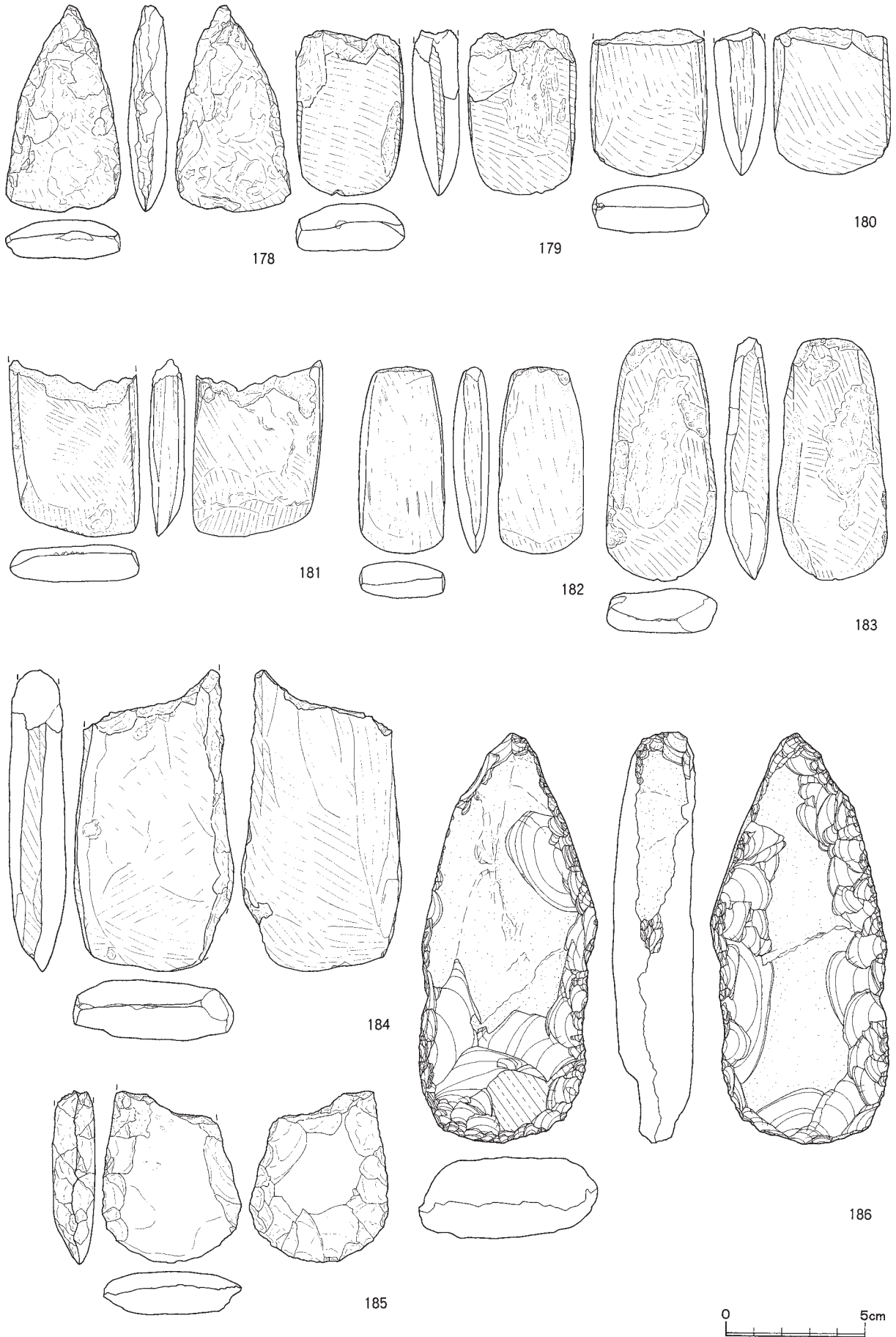
図IV-22 包含層出土の石器(9)



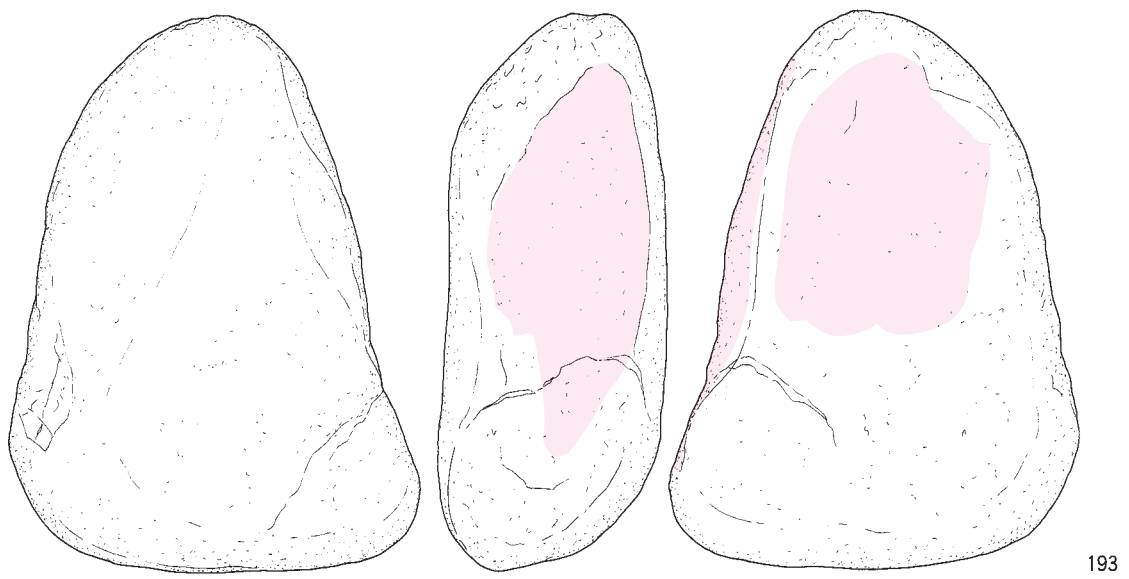
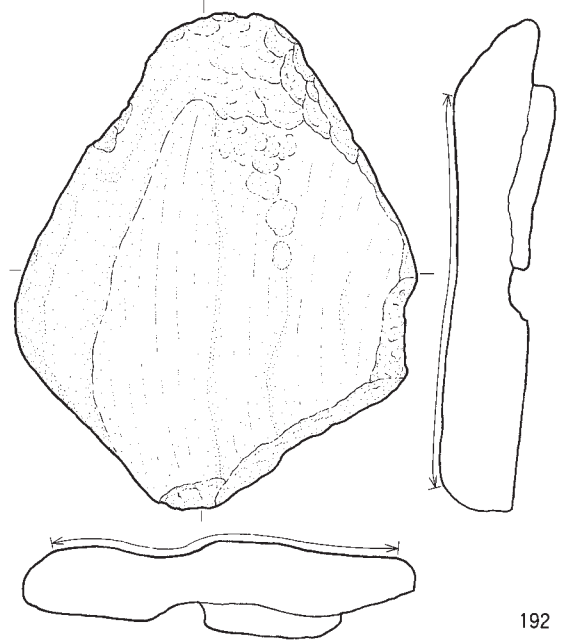
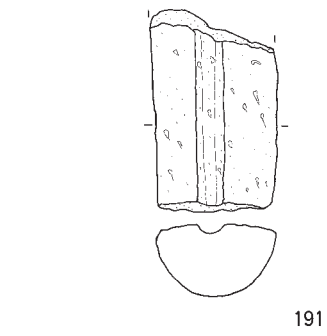
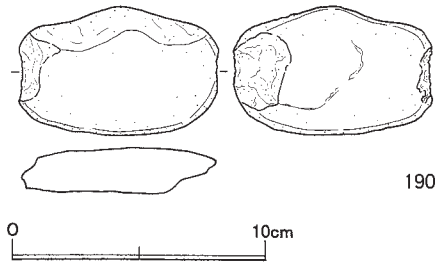
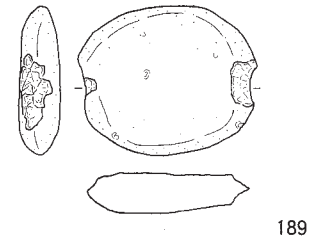
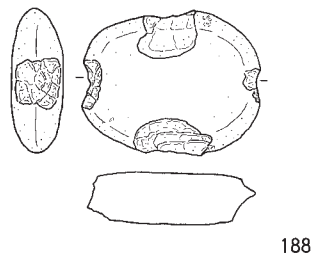
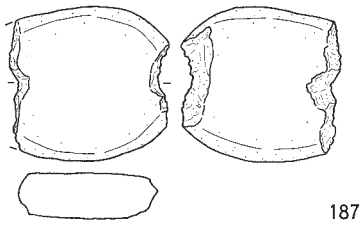
図IV-23 包含層出土の石器(10)



図IV-24 包含層出土の石器(11)



図IV-25 包含層出土の石器(12)



図IV-26 包含層出土の石器(13)

表Ⅳ-1 包含層出土遺物集計

種別	分類	I層	II層	IV層	V層	VI層	攪乱・ 表採等	包含層 合計
土器	I a			801	691		2	1494
	I b	1		380	71			452
	I b-1		3	1641	89		6	1739
	I b-2			43	6		2	51
	I b-3							
	I b-4	19	8	3633	489	41	62	4252
	III b			80			7	87
	III b~IV a	7	14	2568	34		49	2672
	IV a			427	10		1	438
	IV b			830	111	7	28	976
	IV c	1		46	3		2	52
	V c			873	1		3	877
	不明	3	1	865	45		9	923
土製品	焼成粘土塊			4	2			6
	土製円盤			7				7
	スタンプ形土製品			2				2
	ミニチュア土器						6	6
	土製品							
	土器等合計	31	26	12196	1552	48	181	14034
石器	石刃鏃			15	12			27
	錐形石器			4	2			6
	削器			18	1		4	23
	搔器			10				10
	彫器			91	35		1	127
	削片			54	28		1	83
	二次加工ある石刃			44	19			63
	石刃			44	14		1	59
	石刃核			1				1
	石鏃			128	5		4	137
	石槍(またはナイフ)			139	3		5	147
	石錐			22			5	27
	つまみ付きナイフ			39	3		4	46
	ナイフ				1		1	2
	スクレイパー	4	1	200	5		9	219
	両面調整石器			92	5		2	99
	くさび形石器			1				1
	石核			14	1			15
	二次加工ある剥片	2	1	213	13		11	240
	微細剥離痕ある剥片	1		56	3		7	67
	剥片	82	15	23343	427	9	181	24057
	石斧			25	2			27
	石のみ			2				2
	擦り切り残片			1				1
	矢柄研磨器			1	1			2
	砥石			69	34			103
	たたき石			5				5
	すり石			8	3			11
	石錘			8	2			10
	台石・石皿			68	2		1	71
	加工痕ある礫			2				2
	石器合計	89	17	24717	621	9	237	25690
礫	原石			3				3
	礫			333	41		1	375
	遺物合計	120	43	37249	2214	57	419	40102

表IV-2 包含層出土掲載土器一覧(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図IV-6	1	図版91	N23	V	93・99・	52	I a	深鉢	口～胴	条痕文、 補修孔	16
					101・102・						
					103・104・						
					105・106・						
					113						
O23	IV	71	1								
			O24	IV	47	1			／平縁、角丸形口唇		
			M19	IV	19・23	2			口径21.3cm、		
			K18	IV	24	1			残存高17.7cm		
図IV-6	2	図版91	H-2・3	覆土	38	1	I a	深鉢	口～胴	条痕文、 補修孔	31
			M24	IV	47・49・ 58・64・66	32					
			N24	IV	107・109・ 113	4					
			N24	V	77・82・ 86・103	16					
図IV-6	3	図版91	H-4	覆土	86・90・100	9	I a	深鉢	口～胴	条痕文、 補修孔	32
			H-9	覆土	52	1					
			N24	V	85・91・92・ 93・95・96・ 97・99	22					
			O23	IV	85・92・ 93・94	13					
			O24	IV	41・47・56	10					
			表採			6					
図IV-6	4	図版91	P22	V	103	5	I a	深鉢	胴～底	条痕文、絡条体圧痕 ／平底、底径7.2cm	15
図IV-6	5	図版91	P-21	覆土	8	1	I a	深鉢	胴～底	条痕文、絡条体圧痕 ／平底	117
			O22	IV	56・59・60	14					
図IV-7	6	図版91	M24	IV	64	6	I a	深鉢	口～胴	絡条体圧痕、条痕文 ／平縁	120
			M24	V	68	1					
			N24	V	80・88	6					
図IV-7	7	図版92	P22	V	101・103	2	I a	深鉢	口縁	絡条体圧痕、条痕文	125
図IV-7	8	図版92	H-4	覆土	119	2	I a	深鉢	口～胴	条痕文 ／平縁	119
			P22	IV	95	3					
			P22	V	101・103	7					
図IV-7	9	図版92	N23	V	93・102・ 111・113	4	I a	深鉢	口～胴	条痕文／平縁	122
図IV-7	10	図版92	M23	IV	96	3	I a	深鉢	口～胴	条痕文、補修孔	124
図IV-7	11	図版92	N24	IV	113	1	I a	深鉢	口～胴	条痕文	116
			N24	V	77・78・87	5					
図IV-7	12	図版92	O24	IV	47	2	I a	深鉢	口縁	条痕文	203
図IV-7	13	図版92	M23	IV	96	5	I a	深鉢	口縁	条痕文	202
			M23	V	86	1					
図IV-7	14	図版92	O24	IV	56	2	I a	深鉢	口縁	条痕文 ／平縁	118
			P23	V	41	1					
図IV-7	15	図版92	M14	V	27	1	I a	深鉢	胴部	条痕文	204
図IV-7	16	図版92	M23	IV	99	2	I a	深鉢	底部	条痕文	205
			M23	V	83	1					
図IV-7	17	図版92	O22	IV	59・61	2	I a	深鉢	底部	条痕文、葉脈圧痕	206
図IV-8	18	図版92	N-24	IV	47	2	I a	深鉢	口縁	絡条体圧痕、条痕文 ／平縁	123
			N-24	V	97	3					
			N-24	V	102	2					
図IV-8	19	図版92	M20	IV	5	3	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、内面条痕	225
図IV-8	20	図版92	J22	IV	14	1	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、口唇上縄文	251
図IV-8	21	図版92	K22	IV	74	2	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	221

表IV-3 包含層出土掲載土器一覽(2)

挿図番号	掲載番号	写真図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体No.
図IV-8	22	図版92	M24	IV	48・51	2	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、口唇上縄文	130①
			N24	V	126	2					
図IV-8	23	図版92	M20	IV	6・28	3	I b-1	深鉢	口縁	LR縄文、口唇上縄文	228
図IV-8	24	図版92	M24	V	74	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文、貼付帯、刻み	226
図IV-8	25	図版92	J 25	IV	9	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文、貼付帯	227
図IV-8	26	図版92	K22	IV	70	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文、刺突	218
図IV-8	27	図版92	M17	IV	61	1	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	223
図IV-8	28	図版92	N22	V	57	2	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文、絡条体圧痕	207
図IV-8	29	図版92	N18	IV	34・58	3	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	224
図IV-8	30	図版92	N24	IV	48	5	I b-1	深鉢	胴部	LR縄文	130②
図IV-8	31	図版92	L 18	IV	19	1	I b	深鉢	口縁	LR縄文、短縄文	230
図IV-8	32	図版92	L 22	IV	76	1	I b-2	深鉢	胴部	縄線	252
図IV-8	33	図版92	K14	IV	9	1	I b-2	深鉢	胴部	羽状縄文	253
図IV-8	34	図版92	P 19	IV	10	1	I b-2	深鉢	胴部	羽状縄文	254
			J 21	IV	13	1					
図IV-8	35	図版92	K21	IV	49	1	I b	深鉢	底部	LR縄文、指頭押捺 ／平底	129
			N18	IV	32	1					
図IV-8	36	図版93	N18	IV	32	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、RL縄文	321
図IV-8	37	図版93	O24	IV	52	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	325
図IV-8	38	図版93	P 23	IV	33	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、絡条体圧痕	322
図IV-8	39	図版93	M14	IV	9	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、捺糸文	317
図IV-8	40	図版93	K22	IV	72	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	311
図IV-8	41	図版93	L 18	IV	22・27	7	I b-4	深鉢	口～胴	細貼付帯、絡条体圧痕	156
図IV-8	42	図版93	L 13	IV	9	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	312
図IV-8	43	図版93	M18	IV	16	1	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、絡条体圧痕	318
図IV-8	44	図版93	L 20	IV	12	2	I b-4	深鉢	口縁	細貼付帯、結束羽状縄文	314
図IV-8	45	図版93	L 20	攪乱	11	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行・波状)、 絡条体圧痕(捺糸文)	149
			L 20	IV	12	1					
			L 22	IV	67	2					
図IV-8	46	図版93	P 19	IV	9	5	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、LR縄文	141
図IV-8	47	図版93	L 22	IV	62	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯(平行・波状)、 RL縄文	145
			M22	IV	36	1					
図IV-9	48	図版93	M11	IV	11	6	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文、LR	319
図IV-9	49	図版93	Q 23	IV	12	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	327
図IV-9	50	図版93	L 19	IV	27	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	313
図IV-9	51	図版93	J 13	IV	4	4	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文	306
図IV-9	52	図版93	L 21	IV	77・80	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	315
			L 22	IV	51	1					
図IV-9	53	図版93	P 20	IV	7	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	326
図IV-9	54	図版93	N19	IV	32	2	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文、LR	328
図IV-9	55	図版93	K20	IV	41	5	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	308
図IV-9	56	図版93	M21	IV	41	1	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、結束羽状縄文	320
図IV-9	57	図版93	O 19	IV	6・11・12	7	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、捺糸文、絡条体	323
図IV-9	58	図版93	J 26	IV	30	3	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕	307
図IV-9	59	図版93	O 19	IV	6・12	5	I b-4	深鉢	胴部	細貼付帯、絡条体圧痕、LR	324
図IV-9	60	図版93	L 22	IV	74	1	I b-4	深鉢	胴部	結束羽状縄文	316
図IV-9	61	図版93	K21	IV	46	2	I b-4	深鉢	胴部	絡条体圧痕	309
図IV-9	62	図版93	Q 23	IV	19・20	7	I b-4	深鉢	胴部	捺糸文	154
図IV-9	63	図版93	K22	IV	82	2	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯、結節縄文	310
図IV-9	64	図版93	J 27	IV	12・13	10	I b-4	深鉢	底部	細貼付帯、LR縄文	150
			J 28	IV	8	1					
図IV-9	65	図版94	M10	IV	8	7	I b-4	深鉢	底部	絡条体圧痕	140
図IV-9	66	図版94	H-16(K13)	HM-2	80・88	3	I b-4	深鉢	胴～底	細貼付帯、絡条体圧痕、 捺糸文、RL縄文 ／平底、底径8.6cm	24
			H-16(K13)	HM-2	88	2					
			H-33(N15)	覆土3	39	6					
			J 13	IV	4・12	44					
			K13	IV	12・13	37					

表IV-4 包含層出土掲載土器一覧(3)

挿図番号	掲載 番号	写真 図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体 No.
(前頁)			M10	IV	8	1				(前頁)	
図IV-9	67	図版94	M10	IV	8	32	I b-4	深鉢	胴~底	細貼付帯、羽状縄文、 刻み /平底、底径8.8cm	36
			M11	IV	9・11	36					
			N10	IV	4	5					
			L21	IV	74	1					
図IV-10	68	図版94	L21	IV	72・75	3	III b	深鉢	口~胴	結節縄文、肥厚帯上沈線 円形刺突列	186
図IV-10	69	図版94	M20	IV	9	1	III b	深鉢	口縁	肥厚帯上刻み、円形刺突	397
図IV-10	70	図版94	N17	IV	47	3	III b	深鉢	口縁	肥厚帯上押引、円形刺突、LR	400
図IV-10	71	図版94	L21	IV	75	12	III b	深鉢	口~胴	肥厚帯上押引、円形刺 突列、LR縄文	182
図IV-10	72	図版94	O18	I	3	1	III b	深鉢	口縁	肥厚帯上押引、円形刺突列	402
図IV-10	73	図版94	M7	IV	8	2	III b	深鉢	口縁	押引、円形刺突列、RL縄文	395
図IV-10	74	図版95	J21	IV	12	1	III b	深鉢	口縁	円形刺突列、RL縄文	379
			K20	IV	27	3					
図IV-10	75	図版95	M24	IV	43	1	III b	深鉢	口縁	口唇上刻み、円形刺突列、 結束羽状縄文	399
			M25	IV	34	1					
図IV-10	76	図版95	J11	攪乱	13	4	III b	深鉢	口~胴	円形刺突列、RL縄文 /平縁	176
			排土		2	1					
図IV-10	77	図版95	K25	IV	15	2	III b	深鉢	口縁	肥厚帯上沈線、円形刺突列 口唇波頂部上刺突	385
			K26	IV	21	1					
図IV-11	78	図版95	L6	IV	1	1	IV a	深鉢	口縁	縦位の肥厚帯上縄文、 円形刺突、LRL縄文	185
図IV-11	79	図版95	K22	IV	65	1	IV a	深鉢	胴部	RLR縄文、円形刺突	387
図IV-11	80	図版95	K21	IV	43	3	IV a	深鉢	胴部	RLR縄文	386
図IV-11	81	図版95	P20	IV	8	1	IV a	深鉢	胴部	円形刺突列、RL縄文	401
図IV-11	82	図版95	Q22	IV	26	1	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、口唇上刺突	406
図IV-11	83	図版95	Q22	IV	26	2	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、口唇上刺突	405
図IV-11	84	図版95	O24	IV	38	1	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、口唇上縄文	404
図IV-11	85	図版95	M22	IV	35	1	IV a	深鉢	口縁	LR縄文、口唇上刺突	396
図IV-11	86	図版95	M20	IV	9	1	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、LR縄文	398
図IV-11	87	図版95	L25	IV	8	1	IV a	深鉢	口縁	LR縄文	390
図IV-11	88	図版95	O21	IV	23	1	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、RL縄文	403
図IV-11	89	図版95	M25	IV	31	2	IV a	深鉢	口縁	円形刺突列、RL縄文 /平縁、角形口唇	177
			M25	IV・V	48	4					
図IV-11	90	図版95	J2	IV	1	1	III b~IV a	深鉢	胴部	RL縄文	381
図IV-11	91	図版95	J22	IV	12	1	III b~IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	380
図IV-11	92	図版95	L24	IV	37	3	III b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	393
図IV-11	93	図版95	L21	IV	87	2	III b~IV a	深鉢	胴部	結束羽状縄文	188
図IV-11	94	図版95	M12	IV	6	1	III b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	394
図IV-11	95	図版95	L7	IV	1	1	III b~IV a	深鉢	胴部	LR縄文	388
			L8	IV	1	1					
図IV-11	96	図版95	K19	IV	22	1	III b~IV a	深鉢	底部	LR縄文/平底	384
図IV-11	97	図版95	L22	IV	55	1	III b~IV a	深鉢	底部	LR縄文/平底	392
図IV-12	98	図版96	M23	V	71	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列/切出形口唇	427
図IV-12	99	図版96	K27	IV	22	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、RL縄文	425
図IV-12	100	図版96	M22	V	51	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、RL縄文、 内面沈線	170①
			M24	IV	67	1					
図IV-12	101	図版96	M23	攪乱	101	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、RL縄文、 内面沈線	170②
			M24	IV	67	1					
図IV-12	102	図版96	H-2	覆土	72	1	IV b	深鉢	底部	RL縄文/平丸底	170③
図IV-12	103	図版96	M22	IV	54	5	IV b	深鉢	口~胴	刻み列、帯状文(平行、 クランク状)	102
			M22	V	49	1					
図IV-12	104	図版96	J21	IV	9	1	IV b	深鉢	胴部	刻み列、帯状文(木葉文)	423
			K21	IV	31	1					
図IV-12	105	図版96	M23	攪乱	101	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、帯状文	168

表IV-5 包含層出土掲載土器一覧(4)

挿図番号	掲載 番号	写真 図版	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数	分類	器種	部位	文様ほか	個体 No.
(前頁)			M23	IV	102・112・ 116	3				内面沈線	
図IV-12	106	図版96	O25	IV	11	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列	434
図IV-12	107	図版96	M13	IV	8	2	IV b	深鉢	口縁	刻み列	428
図IV-12	108	図版96	M23	IV	112	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、突瘤、LR縄文	429
図IV-12	109	図版96	N22	V	47	1	IV b	深鉢	口縁	刻み列、突瘤、RL縄文	435
図IV-12	110	図版96	M22	IV	32	1	IV b	注口	注口部	15.8g	58
図IV-12	111	図版96	N13	IV	2	1	IV b	注口	胴部	帯状文(木葉文)	431
図IV-12	112	図版96	P20	IV	31	1	IV b	注口	胴部	帯状文(木葉文)	437
図IV-12	113	図版96	N21	IV	16	1	IV b	注口	胴部	帯状文(木葉文)	433
図IV-12	114	図版96	K21	IV	34・44・45	8	IV b	注口	口～胴	帯状文(木葉文)	108
図IV-12	115	図版96	N13	IV	2	1	IV b	注口	胴部	帯状文(クラック状)	432
図IV-12	116	図版96	H-34(N16)	覆土1	11	1	IV b	注口	胴部	帯状文(木葉文)	424
図IV-12	117	図版97	L23	IV	43・58	2	IV c	深鉢	口～底	平行沈線、LR縄文 ／平縁、平底 口径16.9cm、底径6.5cm、 器高13.0cm	9
			M23	IV	91・112	6					
			M23	V	75	1					
図IV-12	118	図版96	L23	IV	53	1	IV c	深鉢	口縁	羽状縄文 ／平縁、切出形口唇	430
			表採		6	1					
図IV-12	119	図版97	O25	IV	11・12	14	IV c	深鉢	胴～底	集合沈線、LR縄文	171
図IV-13	120	図版97	M22	IV	38	1	V c	深鉢	口縁	口唇上刺突	441
図IV-13	121	図版97	M22	V	47	1	V c	深鉢	胴部	LR縄文	442
図IV-13	122	図版97	J26	IV	34	2	V c	深鉢	胴部	LR・RL縄文	443
図IV-13	123	図版97	O17	IV	10	1	V c	深鉢	胴部	LR縄文	445
図IV-13	124	図版97	J26	IV	34	2	V c	深鉢	胴部	LR・RL縄文	446
図IV-13	125	図版97	M23	IV	105	1	スタンプ形土製品	つまみ部		菱文・刺突／4.1g	52
図IV-13	126	図版97	M23	IV	105	1	スタンプ形土製品	体部		菱文・刺突／6.5g	53
図IV-13	127	図版97	排土		51	6	ミニチュア土器	口～底		絡条体圧痕／5.8g	55
図IV-13	128	図版97	L18	V	25	1	土製円盤			羽状縄文／7.3g	65
図IV-13	129	図版97	M24	IV	84	3	土製円盤			羽状縄文／14.4g	66
図IV-13	130	図版97	K21	IV	48	1	土製円盤			LR・RL縄文／28.1g	64
図IV-13	131	図版97	N22	V	62	1	土製円盤			RL縄文／11.7g	67

表IV-6 包含層出土掲載石器一覧(1)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図IV-14	1	図版98	P22	IV	2	石刃鏃	黒曜石	3.2	1.1	0.3	1.0	SMH1-X9	109
図IV-14	2	図版98	P22	IV	1	石刃鏃	黒曜石	(2.7)	(1.5)	0.3	0.7	SMH1-X8	108
図IV-14	3	図版98	O23	IV	31	石刃鏃	黒曜石	(2.8)	1.2	0.3	0.8	SMH1-X7	107
図IV-14	4	図版98	N23	V	24	石刃鏃	黒曜石	2.5	1.3	0.4	1.0	SMH1-X2	102
図IV-14	5	図版98	O23	V	3	石刃鏃	黒曜石	2.7	1.3	0.4	1.1	SMH1-X5	105
図IV-14	6	図版98	O22	V	42	石刃鏃	黒曜石	(2.8)	1.5	0.4	1.0	SMH1-X4	104
図IV-14	7	図版98	O23	IV	9	石刃鏃	黒曜石	(3.2)	1.3	0.3	1.0	SMH1-X6	106
図IV-14	8	図版98	O24	IV	1	石刃鏃	黒曜石	3.1	1.2	0.4	1.3		91
図IV-14	9	図版98	N24	V	24	石刃鏃	黒曜石	4.0	1.2	0.3	1.8		84
図IV-14	10	図版98	O22	IV	2	石刃鏃	黒曜石	4.0	1.6	0.4	2.5		451
図IV-14	11	図版98	P22	V	80	石刃鏃	黒曜石	5.1	1.1	0.4	2.2	SMH1-X10	110
図IV-14	12	図版98	N23	V	26	石刃鏃	黒曜石	4.7	1.0	0.3	1.8		82
図IV-14	13	図版98	M23	V	48	石刃鏃	黒曜石	4.6	1.3	0.4	3.1		113
図IV-14	14	図版98	M25	V	9	石刃鏃	黒曜石	(3.9)	1.3	0.4	1.6	SMH1-X1	101
図IV-14	15	図版98	N23	V	61	石刃鏃	黒曜石	(3.7)	1.3	0.5	1.6	SMH1-X3	103
図IV-14	16	図版98	Q20	IV	2	石刃鏃	黒曜石	5.6	1.4	0.3	2.8		367
図IV-14	17	図版98	N24	V	34	石刃鏃	黒曜石	(6.1)	1.4	0.6	4.5		112
図IV-14	18	図版98	Q20	IV	1	石刃鏃	黒曜石	6.7	1.1	0.5	3.1		111
図IV-14	19	図版98	P22	IV	4	石刃鏃	黒曜石	6.3	1.5	0.5	5.1		96
図IV-14	20	図版98	N23	IV	1	石刃鏃	黒曜石	5.2	1.4	0.4	2.9		81
図IV-14	21	図版98	N24	V	47	石錐	黒曜石	5.7	1.3	0.5	3.1		384
図IV-14	22	図版98	O24	IV	5	石錐	黒曜石	4.7	1.5	0.8	4.9		453
図IV-14	23	図版98	M21	IV	12	石錐	黒曜石	3.8	1.3	0.4	3.0		383
図IV-14	24	図版98	M11	IV	8	つまみ付きナイフ	黒曜石	4.8	2.3	0.8	4.7		168
図IV-14	25	図版98	O24	IV	8	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.4	2.1	0.5	6.9		380
図IV-14	26	図版98	N24	V	37	つまみ付きナイフ	黒曜石	(6.8)	1.8	0.5	7.5		377
図IV-14	27	図版98	N10	IV	9	削器	黒曜石	8.2	2.7	0.7	18.2		426
図IV-14	28	図版98	N19	IV	5	搔器	黒曜石	5.0	2.3	0.8	5.7		80
図IV-14	29	図版98	P22	IV	8	搔器	黒曜石	4.4	1.8	0.4	4.5		399
図IV-15	30a	図版98	L23	IV	14	削片	黒曜石	4.7	2.0	0.7	2.7		462②
図IV-15	30b	図版98	H-8	覆土	4	彫器	黒曜石	3.3	1.6	0.7	4.3		462①
図IV-15	31a	図版98	P22	V	78	削片	黒曜石	3.6	1.5	0.8	3.0		464②
図IV-15	31b	図版98	P22	V	17	彫器	黒曜石	2.0	1.1	0.7	1.6		464①
図IV-15	32a	図版98	O22	V	50	削片	黒曜石	5.5	2.5	0.7	7.8		465②
図IV-15	32b	図版98	O23	IV	51	彫器	黒曜石	3.2	1.9	0.8	3.0		465①
図IV-15	33a	図版98	K23	IV	8	彫器	黒曜石	4.5	2.1	0.7	6.2		470①
図IV-15	33b	図版98	P23	IV	2	彫器	黒曜石	1.7	2.2	0.5	1.8		470②
図IV-15	34a	図版98	N24	IV	9	削片	黒曜石	4.3	2.7	0.7	3.4		467②
図IV-15	34b	図版98	N23	V	37	彫器	黒曜石	2.9	2.6	0.6	6.8		467①
図IV-15	35a	図版98	P22	V	70	削片	黒曜石	2.8	2.1	0.8	1.5		468①
図IV-15	35b	図版98	P22	IV	42	彫器	黒曜石	2.9	1.2	0.5	3.7		468②
図IV-16	36	図版99	Q22	IV	5	彫器	黒曜石	3.4	1.7	0.6	5.2		390
図IV-16	37	図版99	N24	V	38	彫器	黒曜石	3.9	1.8	0.7	4.8		477
図IV-16	38	図版99	O23	IV	42	彫器	黒曜石	3.8	1.9	0.4	3.0		474
図IV-16	39	図版99	N23	V	34	彫器	黒曜石	2.8	1.2	0.6	2.5		481
図IV-16	40	図版99	O23	IV	30	彫器	黒曜石	4.1	2.1	1.0	10.0		388
図IV-16	41	図版99	N23	V	38	彫器	黒曜石	3.3	2.0	0.6	4.7		387
図IV-16	42	図版99	M23	V	54	彫器	黒曜石	5.4	2.2	0.5	6.3		385
図IV-16	43	図版99	Q20	IV	1	彫器	黒曜石	2.8	2.1	0.8	4.5		432
図IV-16	44	図版99	O23	IV	32	彫器	黒曜石	(4.5)	1.0	1.4	11.1	SMH1-X44	121
図IV-16	45	図版99	P22	IV	48	彫器	黒曜石	4.3	2.2	1.8	16.9		389
図IV-16	46	図版99	P23	IV	3	削片	黒曜石	5.0	2.9	0.7	10.3		482
図IV-16	47	図版99	N23	IV	33	削片	黒曜石	4.9	2.1	0.8	5.4		475
図IV-16	48	図版99	K20	IV	50	削片	黒曜石	5.9	2.1	0.8	7.0		479
図IV-16	49	図版99	L21	IV	8	削片	黒曜石	5.7	1.9	0.7	6.5		391
図IV-16	50	図版99	N23	IV	6	削片	黒曜石	6.1	2.6	0.6	8.2		386
図IV-16	51	図版99	N20	IV	8	削片	黒曜石	4.9	1.0	0.7	3.6		392
図IV-16	52	図版99	L14	IV	14	彫器	黒曜石	3.2	1.3	0.7	1.9		483
図IV-16	53	図版99	N23	IV	15	削片	黒曜石	3.1	0.7	0.7	1.3		485
図IV-16	54	図版99	N24	IV	50	削片	黒曜石	3.5	0.6	0.5	0.7		486

表IV-7 包含層出土掲載石器一覧(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図IV-16	55	図版99	L18	IV	43	削片	黒曜石	3.7	0.9	0.7	1.1		484
図IV-17	56 a	図版99	M23	IV	5	削器	黒曜石	15.3	2.3	1.1	31.7		117
図IV-17	56 b	図版99	N23	V	30	削器	黒曜石	(9.6)	2.6	1.6	19.9	SMH1-X43	120
図IV-17	57	図版99	O22	IV	11	二次加工ある石刃	黒曜石	11.3	2.6	0.8	20.9		115
図IV-17	58	図版99	P22	V	83	二次加工ある石刃	黒曜石	11.5	2.2	1.6	16.8		116
図IV-17	59	図版99	O23	IV	44	二次加工ある石刃	黒曜石	10.1	1.9	1.1	16.9		454
			Q20	IV	19								
図IV-17	60	図版99	M23	V	50	二次加工ある石刃	黒曜石	9.8	1.8	0.8	12.6		114
図IV-17	61	図版99	O24	IV	7	二次加工ある石刃	黒曜石	11.67	2.5	1.5	16.9		455
			O24	IV	19								
図IV-17	62	図版99	M24	IV	17	二次加工ある石刃	黒曜石	8.3	3.1	0.9	15.5		463
図IV-17	63	図版99	O22	IV	25	二次加工ある石刃	黒曜石	8.2	1.9	0.8	8.8		456
			O22	IV	28								
図IV-17	64	図版99	N19	IV	14	二次加工ある石刃	黒曜石	6.1	2.4	1.1	7.8	SMH1-X42	119
図IV-17	65	図版99	O23	IV	24	石刃	黒曜石	2.5	2.1	0.8	4.7		431
図IV-18	66	図版100	P22	IV	57	石刃	黒曜石	6.7	2.5	1.3	17.2		461
図IV-18	67	図版100	L24	IV	8	石刃	黒曜石	6.2	2.2	1.1	15.2		492
図IV-18	68	図版100	N23	V	64	石刃	黒曜石	6.4	1.6	0.5	7.2		489
図IV-18	69	図版100	P22	IV	5	石刃	黒曜石	6.3	2.0	0.6	9.1		491
図IV-18	70	図版100	N23	V	31	石刃	黒曜石	7.7	2.2	1.0	13.8		458
			P22	IV	55								
図IV-18	71	図版100	O24	IV	18	石刃	黒曜石	8.0	2.0	0.6	10.1		493
図IV-18	72	図版100	K24	IV	5	石刃	黒曜石	8.3	2.1	1.0	11.2		473
図IV-18	73	図版100	L22	IV	15	石刃	黒曜石	9.1	1.7	0.8	11.9		494
図IV-18	74	図版100	L21	IV	55	石刃	黒曜石	6.2	2.0	0.6	5.0		457
			N23	V	67								
図IV-18	75	図版100	N20	IV	11	石刃	黒曜石	4.7	2.5	1.2	14.5		487
図IV-18	76	図版100	P23	IV	13	石刃	黒曜石	8.6	2.1	1.1	21.0		488
図IV-18	77	図版100	K26	IV	5	石刃	黒曜石	7.5	2.7	1.1	19.9		472
図IV-18	78	図版100	P22	V	85	石刃	黒曜石	7.7	2.4	1.1	14.2		495
図IV-18	79	図版100	O24	IV	22	石刃	黒曜石	3.7	2.2	1.0	6.9		496
図IV-18	80	図版100	L22	IV	17	石刃	黒曜石	4.0	1.8	2.0	6.9		497
図IV-18	81	図版100	N23	I	83	剥片	黒曜石	3.6	4.8	1.3	12.5	打面調整剥片	498
図IV-18	82	図版100	K24	IV	7	石刃核	黒曜石	3.7	3.6	2.7	28.7	SMH1-X45	122
図IV-19	83	図版100	J13	IV	5	石鏃	黒曜石	2.2	0.8	0.2	0.4		409
図IV-19	84	図版100	J26	IV	3	石鏃	黒曜石	2.0	0.9	0.3	0.4		54
図IV-19	85	図版100	L24	IV	1	石鏃	黒曜石	(2.0)	0.9	0.3	0.4		72
図IV-19	86	図版100	N18	IV	59	石鏃	黒曜石	2.5	0.8	0.2	0.5		414
図IV-19	87	図版100	L11	IV	5	石鏃	黒曜石	3.3	0.9	0.2	0.6		411
図IV-19	88	図版100	M10	IV	1	石鏃	黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.1		73
図IV-19	89	図版100	K24	IV	1	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.3		63
図IV-19	90	図版100	L15	IV	15	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.2	0.6		412
図IV-19	91	図版100	M26	IV	1	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.2	0.5		79
図IV-19	92	図版100	M18	IV	9	石鏃	黒曜石	2.5	1.6	0.2	0.5		144
図IV-19	93	図版100	L22	IV	10	石鏃	黒曜石	(2.3)	1.7	0.3	0.8		368
図IV-19	94	図版100	K28	IV	1	石鏃	黒曜石	2.7	1.7	0.3	0.9		66
図IV-19	95	図版100	L22	IV	9	石鏃	黒曜石	2.9	1.6	0.4	1.5		70
図IV-19	96	図版100	N10	IV	14	石鏃	黒曜石	3.4	1.6	0.3	1.5		413
図IV-19	97	図版100	K14	IV	2	石鏃	黒曜石	(3.0)	1.7	0.3	1.2		410
図IV-19	98	図版100	K20	IV	14	石鏃	黒曜石	2.2	1.2	0.3	0.3		146
図IV-19	99	図版100	K21	IV	2	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.3	0.6	SMH1-X19	58
図IV-19	100	図版100	M22	IV	2	石鏃	黒曜石	3.4	(1.5)	0.3	1.2		75
図IV-19	101	図版100	P19	IV	1	石鏃	黒曜石	3.5	1.4	0.3	1.2		93
図IV-19	102	図版100	Q21	IV	1	石鏃	黒曜石	3.2	1.7	0.3	1.3		98
図IV-19	103	図版100	K25	IV	1	石鏃	黒曜石	2.4	0.9	0.4	0.6		64
図IV-19	104	図版100	Q22	IV	1	石鏃	黒曜石	3.2	1.1	0.3	1.1		371
図IV-19	105	図版100	O23	IV	8	石鏃	黒曜石	3.5	2.1	0.6	3.3		89
図IV-19	106	図版100	L24	IV	2	石鏃	黒曜石	4.1	2.0	0.7	3.7		369
図IV-19	107	図版100	M23	IV	1	石鏃	黒曜石	(4.1)	2.5	0.5	3.6		370
図IV-19	108	図版100	O21	IV	2	石鏃	黒曜石	(3.6)	2.1	0.5	3.1		86

表IV-8 包含層出土掲載石器一覧(3)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図IV-19	109	図版100	M24	IV	2	石鏃	黒曜石	3.7	2.6	0.7	4.6		148
図IV-19	110	図版100	J 21	IV	2	石槍	黒曜石	(5.8)	3.8	0.5	8.5		52
図IV-19	111	図版100	L 12	不明	3	石槍	黒曜石	5.1	2.7	0.6	4.3		67
図IV-19	112	図版100	K23	IV	2	石槍	黒曜石	5.0	2.4	0.6	5.4		62
図IV-19	113	図版100	P 21	IV	1	石槍	黒曜石	5.3	2.7	0.6	6.4		95
図IV-19	114	図版100	Q22	IV	36	石槍	黒曜石	5.9	3.1	0.6	6.0		150
図IV-19	115	図版101	N24	IV	1	石槍	黒曜石	5.4	2.3	0.5	5.4		83
図IV-19	116	図版101	N17	IV	10	石槍	黒曜石	(5.6)	2.0	0.6	6.3		415
図IV-19	117	図版101	M17	IV	2	石槍	黒曜石	9.2	2.5	0.9	18.9		74
図IV-20	118	図版101	J 21	IV	2	石槍	黒曜石	6.9	2.6	0.7	11.4		416
図IV-20	119	図版101	P 20	IV	26	石槍	黒曜石	(9.0)	2.7	1.0	17.9		418
図IV-20	120	図版101	O21	IV	3	石槍	黒曜石	8.4	5.4	1.6	57.5		87
図IV-20	121	図版101	N18	V	74	石槍	黒曜石	10.2	3.2	1.2	26.8		159
図IV-20	122	図版101	N24	V	33	石槍	黒曜石	9.6	3.8	1.1	35.1		85
図IV-20	123	図版101	O23	IV	15	石槍	黒曜石	9.2	3.9	1.0	27.0		90
図IV-20	124	図版101	M15	攪乱	16	石槍	黒曜石	10.8	3.8	1.1	37.8		417
図IV-20	125	図版101	L 17	IV	1	石槍	黒曜石	9.4	3.8	1.2	35.7		68
図IV-20	126	図版101	K20	IV	28	石槍ナイフ	黒曜石	9.3	3.4	1.1	25.2		160
図IV-20	127	図版101	K19	IV	23	石槍	黒曜石	(9.4)	5.0	1.6	56.9		161
図IV-20	128	図版101	M21	IV	1・2	石槍	黒曜石	10.1	4.4	0.9	24.4	2点接合	374
図IV-21	129	図版101	M19	V	27	ナイフ	黒曜石	12.8	3.6	1.8	47.3		153
図IV-21	130	図版101	M22	IV	3	石槍	黒曜石	11.2	3.8	1.1	42.8		76
図IV-21	131	図版101	M25	IV	2	石槍	黒曜石	10.3	3.3	1.3	36.3		77
図IV-21	132	図版101	K22	IV	5	石槍	黒曜石	14.0	4.6	1.4	57.2	SMH1-X17	59
図IV-21	133	図版101	J 10	IV	8	石槍	黒曜石	13.8	3.9	1.2	49.4	試掘調査出土	372
図IV-21	134	図版101	N11	IV	4	石槍	黒曜石	(12.9)	4.7	1.5	84.2		156
図IV-21	135	図版101	K13	IV	1	石槍	黒曜石	16.5	4.7	1.4	74.3	SMH1-X18	57
図IV-22	136	図版102	O23	IV	7	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.5	2.1	0.7	9.2		378
図IV-22	137	図版102	O23	IV	11	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.6	2.2	0.7	8.8		379
図IV-22	138	図版102	J 27	IV	4	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.7	2.1	0.4	6.7		56
図IV-22	139	図版102	K22	IV	12	つまみ付きナイフ	黒曜石	8.0	3.1	0.8	13.8		61
図IV-22	140	図版102	M25	IV	11	つまみ付きナイフ	黒曜石	7.2	2.3	0.6	11.8		78
図IV-22	141	図版102	J 23	IV	2	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.2	3.9	0.8	20.0		53
図IV-22	142	図版102	Q21	IV	3	つまみ付きナイフ	頁岩	3.1	2.5	0.5	2.0		99
図IV-22	143	図版102	P 23	IV	6	つまみ付きナイフ	頁岩	6.0	2.4	0.6	7.5		97
図IV-22	144	図版102	K25	IV	4	つまみ付きナイフ	黒曜石	6.1	1.8	0.6	5.8		375
図IV-22	145	図版102	M24	IV	7	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.3	3.3	0.6	8.7		376
図IV-22	146	図版102	N17	IV	29	つまみ付きナイフ	黒曜石	5.2	3.2	0.5	9.4		420
図IV-22	147	図版102	J 26	IV	4	石錐	黒曜石	2.5	0.7	0.3	0.6		55
図IV-22	148	図版102	K21	IV	5	石錐	黒曜石	2.2	1.5	0.6	2.1		381
図IV-22	149	図版102	L21	IV	6	石錐	黒曜石	2.9	1.4	0.5	2.2		382
図IV-22	150	図版102	L 15	IV	26	石錐	黒曜石	5.0	1.6	1.0	7.0		164
図IV-22	151	図版102	J 21	IV	1	石錐	黒曜石	4.6	2.3	0.6	6.2		373
図IV-22	152	図版102	M18	IV	12	石錐	片岩	5.1	2.5	0.5	7.7		419
図IV-22	153	図版102	L 26	IV	5	石錐	黒曜石	7.8	3.5	1.2	22.9		395
図IV-22	154	図版102	K22	IV	6	石錐	黒曜石	8.2	3.6	1.1	23.6		60
図IV-22	155	図版102	L 13	IV	11	石錐	頁岩	6.1	2.8	1.3	16.0		162
図IV-23	156	図版102	O23	IV	5	両面調整石器	黒曜石	4.7	2.3	0.7	7.1		88
図IV-23	157	図版102	L 22	IV	14	両面調整石器	黒曜石	5.0	4.0	0.9	18.6		71
図IV-23	158	図版102	N19	IV	2	両面調整石器	黒曜石	6.4	7.2	2.0	94.8		400
図IV-23	159	図版102	N18	IV	60	スクレイパー	黒曜石	(11.0)	3.9	2.2	76.0		429
図IV-23	160	図版102	N7	IV	1	スクレイパー	黒曜石	4.4	2.1	0.8	7.2		425
図IV-23	161	図版102	O25	IV	4	スクレイパー	黒曜石	3.8	2.8	0.5	4.0		92
図IV-23	162	図版102	M23	IV	4	スクレイパー	黒曜石	5.9	2.2	0.7	7.5		397
図IV-23	163	図版102	L 14	IV	13	スクレイパー	黒曜石	7.3	4.0	0.6	24.4		423
図IV-23	164	図版102	L 21	IV	12	スクレイパー	黒曜石	6.8	2.9	0.6	15.7		69
図IV-23	165	図版102	M21	IV	6	スクレイパー	黒曜石	5.3	2.7	0.9	14.0		396
図IV-23	166	図版102	N18	IV	28	スクレイパー	黒曜石	9.5	5.0	0.8	50.7		428
図IV-23	167	図版102	K13	IV	14	スクレイパー	黒曜石	8.1	6.5	2.1	107.0		422
図IV-24	168	図版103	N14	IV	1	スクレイパー	黒曜石	(6.2)	4.5	1.1	26.3		427

表IV-9 包含層出土掲載石器一覧(4)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版	遺構	層位	遺物 番号	遺物名	石材	大きさ(cm)			重量 (g)	備考	実測 No.
								長さ	幅	厚さ			
図IV-24	169	図版103	K26	IV	3	スクレイパー	黒曜石	(8.1)	6.7	0.9	53.9		394
図IV-24	170	図版103	J21	IV	3	スクレイパー	黒曜石	6.5	4.9	1.0	32.7		393
図IV-24	171	図版103	L20	攪乱	28	スクレイパー	黒曜石	4.6	(7.2)	0.8	22.0		424
図IV-24	172	図版103	P21	IV	12	エンドスクレイパー	黒曜石	3.9	4.6	1.0	19.0		401
図IV-24	173	図版103	N19	IV	3	エンドスクレイパー	黒曜石	4.6	3.0	1.3	15.9		398
図IV-24	174	図版103	K12	IV	16	エンドスクレイパー	黒曜石	5.9	3.2	0.9	17.5		421
図IV-24	175	図版103	Q21	IV	6	石核	黒曜石	2.9	3.4	1.8	19.6		100
図IV-24	176	図版103	P19	IV	6	石核	黒曜石	3.0	3.0	2.1	19.3		94
図IV-24	177	図版103	M17	V	77	石核	黒曜石	7.8	14.1	6.2	580		200
図IV-25	178	図版103	N20	IV	18	石斧	安山岩	(7.4)	4.1	1.4	51.8		404
図IV-25	179	図版103	L24	IV	11	石斧	片岩	(5.9)	3.9	1.6	62.9		402
図IV-25	180	図版103	M23	IV	33	石斧	緑色泥岩	(5.3)	4.2	1.7	64.7		403
図IV-25	181	図版103	L18	V	33	石斧	ロジン岩?	(6.3)	4.7	1.3	64.3		188
図IV-25	182	図版103	K22	IV	41	石斧	安山岩	6.7	3.1	1.3	45.8		191
図IV-25	183	図版103	K25	IV	5	石斧	片岩	8.7	4.0	1.6	92.0		192
図IV-25	184	図版103	O23	IV	55	石斧	緑色泥岩	(10.8)	5.7	2.1	215.5		405
図IV-25	185	図版103	N14	IV	6	石斧	泥岩	(6.2)	5.0	1.5	61.6		408
図IV-25	186	図版103	K26	IV	8	石斧	緑色泥岩	14.8	6.3	2.9	338.8		65
図IV-26	187	図版103	P22	V	87	石錘	安山岩	6.1	(6.3)	1.8	114.5		407
図IV-26	188	図版103	L4	IV	1	石錘	安山岩	5.7	7.0	2.0	128.9		195
図IV-26	189	図版103	L18	IV	42	石錘	安山岩	5.9	7.0	1.6	103.1		196
図IV-26	190	図版103	N23	V	86	石錘	安山岩	5.0	7.9	1.8	102.6		406
図IV-26	191	図版103	P22	V	88	矢柄研磨器	軽石	(5.3)	3.4	2.0	21.7		199
図IV-26	192	図版103	M23	IV	63	砥石	砂岩	26.3	16.3	5.5	2120		504
図IV-26	193		N24	V	69	台石	安山岩	29.5	21.7	12.2	9200		515

V 自然科学的分析・鑑定

1. 漆塗櫛の構造調査と製作技法について

1 はじめに

北海道の縄文時代後期出土の結歯式漆塗櫛は、縄文時代の漆文化を象徴する資料のひとつであり、道東では斜里町や根室市から赤色結歯式漆塗櫛が発見されている。道央の日本海側では、低湿地遺跡である小樽市忍路土場遺跡や余市町安芸遺跡から櫛歯が残された黒色系結歯式漆塗櫛の良好な資料が出土している。道東域における黒色系漆塗櫛は下幌呂1遺跡が初出となるため、製作技法、漆塗膜の構造について概略を記載する。

2 観察と分析方法

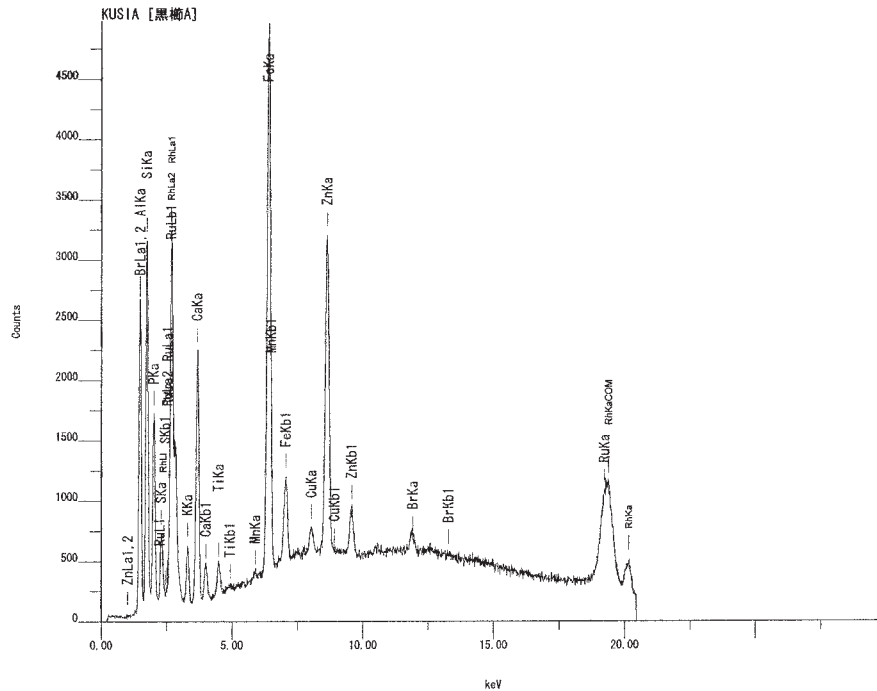
試料は住居跡（H-12）床面から出土した透かし彫りのない黒色系結歯式漆塗櫛1点である。櫛歯の木質・糸は腐食により残存しておらず、外形は漆塗膜のみの中空状態で残されている。

外観的特徴の観察には、デジタルHDマイクロスコープ（KEYENCE VHX-1000）、実体顕微鏡（Nikon SMZ-10）を使用し、構造はX線透過撮影装置にて観察した。漆樹液などの有機質は、フーリエ変換赤外分光分析装置を用いて行った。破壊分析には、櫛から剥落していた微小破片を使用した。分析試料は、エタノールに浸漬し、超音波洗浄を行い、十分に乾燥させた。試料包埋には透明エポキシ樹脂（アラルダイトAER2400、同 HY837）を使用した。硬化後は、実体顕微鏡、光学顕微鏡（Nikon ECLIPSE80i）で適宜確認しながら耐水研磨紙、ラッピングフィルム、アルミナ粉末WA#3000で研磨し、プレパラートとした。試料はデジタルHDマイクロスコープと光学顕微鏡で観察し、走査電子顕微鏡（JSM-5600LV）、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（EDS JED-2200、XRF JSX3220）を使用して、漆塗膜面と赤色付着物の元素分析を行った。

3 観察結果〔図V-1、図版1、口絵16〕

本体の形態は、忍路土場遺跡や安芸遺跡同様に台形状で、上部両端部の三角突起を欠損したものである。櫛歯は11本あり、断面は円形である。両端の櫛歯は、他の櫛歯φ4.5mm前後よりもやや太く、φ6.0mm前後ある。上端部には櫛歯固定の横架材があり、φ300μm～400μm前後の極細のS撚り糸により斜めに巻き留めている。全体には、同様のS撚りの横糸が巾1.1～2.3mm程の間隔で13条見られる。下部側に向かって、糸の間隔が狭まる傾向がある。横糸による櫛歯固定・補強は、規則的な凹凸となり、装飾的な効果をもつ。塑形材には植物質を混和した木屎漆様のものが使用されるが、櫛歯間は空隙や窪みとなっている。櫛歯と横糸の間は漆液の溜まりとなり、発泡・収縮による縮み皺が連続して見られる。明瞭な櫛歯が確認された忍路土場遺跡の例から、櫛歯を含む全長は12cm程であったと推定される。漆塗膜の断面構造では、主に精製されたアメ色の漆樹液を1～3回程度塗り重ねて成形している。櫛は黒色漆とされていたが、墨粉や鈹物粒は見られず、湿潤状態では黒色に近く、乾燥状態では黒褐色から褐色である。表面を実体顕微鏡やデジタルHDマイクロスコープで再精査したところ、φ300μm～500μmの数箇所に赤色顔料痕を確認できた。蛍光X線分析では、Fe・Hgが極少量確認されたが、明瞭な層構造はない。赤色顔料が意識的に塗布されたかどうかは判然としない。忍路土場遺跡の櫛のように下地に黒色系漆表面に赤色顔料を塗り分けて文様としていた可能も考えられる。なお、櫛表面からP・Caが多く検出されたことは、廃屋墓等との関連で、注意を要する。

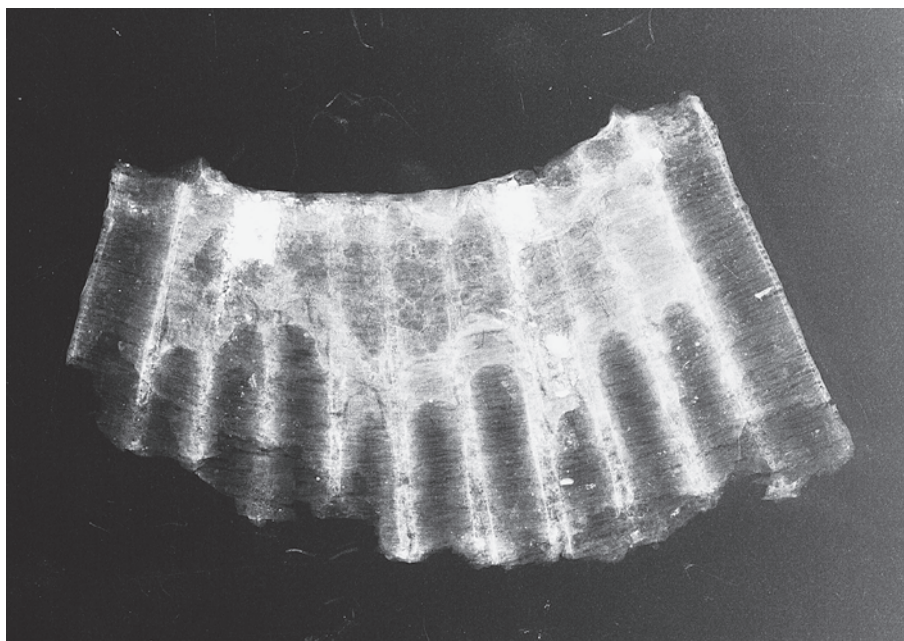
（田口 尚）



ファイル名 : C:\JVSX3200\DATA\下幌呂~1\KUSIA.SPC 測定日時 : 2011年12月28日15時41分49秒
 試料名 : 黒櫛A
 メモ : 下幌呂
 測定条件 : 電圧: 30.0kV 電流: 0.204mA ライフタイム: 240.00sec パス: Vac
 定量条件
 定量法 : 標準
 分析元素 : Al, Si, P, S, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Cu, Zn, Br, Ru, Rh

Num	元素 / 化学式	wt (%)	at/mole (%)	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	13 Al	25.9903	32.7776	0.0153048	25347	0.4375
2	14 Si	23.6149	28.6112	0.0179939	35497	0.0615
3	15 P	10.3139	11.3309	0.0196911	20691	0.0519
4	16 S	1.6523	1.7535	0.0010409	5184	0.0338
5	19 K	3.1743	2.7624	0.0032351	5878	0.0573
6	20 Ca	11.6898	9.9247	0.0118842	30826	0.0447
7	22 Ti	1.1173	0.7937	0.0008818	4022	0.0360
8	25 Mn	0.1722	0.1067	0.0001787	1077	0.0239
9	26 Fe	11.6637	7.1068	0.0125527	81215	0.0221
10	29 Cu	0.4763	0.2551	0.0005528	3885	0.0224
11	30 Zn	6.1414	3.1969	0.0077892	54063	0.0218
12	35 Br	0.4026	0.1714	0.0006958	4028	0.0260
13	44 Ru	3.5910	1.2090	0.0134542	4416	0.2499

図 V - 1 蛍光 X 線分析チャート (XRF)



図版 1 漆塗櫛の X 線透視画像 (XCR)

撮影 : 奈良文化財研究所

2. 下幌呂 1 遺跡出土の黒曜石製石器の原材産地分析

有限会社 遺物材料研究所

はじめに

石器石材の産地を自然科学的な手法を用いて、客観的かつ定量的に推定し、古代の交流・交易および文化圏・交易圏を探るという目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石製遺物の石材産地推定を行っている^{1)・2)・3)}。最近の黒曜石の伝播距離に関する研究では、伝播距離が数千キロメートルに及ぶことは一般的で、6 kmを推測する学者もでてきている。このような研究結果が出てきている現在、正確に産地を判定するという事は、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則とは、同じ元素組成の黒曜石が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千kmの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。ノーベル賞を受賞された益川敏英博士の言を借りれば、科学とは、仮説をたて正しいか否かあらゆる可能性を否定することにある。即ち十分条件の証明が非常に重要であると言い換えられると思われる。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されているとはじめて言い切れる。また十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』

産地分析の方法

まず原石採取であるが、本来、先史・古代人が各産地の何処の地点で原石を採取したか不明であるために、一か所の産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが、現実的には不可能である。そこで産地から抽出した数十個の原石でも、その産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測でき理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT²乗検定がある。ホテリングのT²乗検定法の同定とクラスター判定法（同定ではなく分類）、元素散布図法（散布図範囲に入るか否かで判定）の各々の方法を比較すると以下の通りとなる。

クラスター判定法はクラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動してしまう。例えばA原石製の遺物とA・B・C産地の原石でクラスターを作ったとき、遺物はA原石とクラスターを作るが、A原石を抜いてD・E産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスターを作ってしまう。もしA産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。またA原石製遺物と分かっていたら、E原石とクラスターを作らないようにすることもできる。クラスター分析を正確に行うには、遺物の原石産地を予め推測しクラスターを組み立てる必要があるため、正しい結果を得るのは大変に困難なものとなる。

元素散布図法は、肉眼で原石群元素散布の中に分析した遺物の結果が入るか否かを図示した方法で、原石の含有元素の絶対定量値を求めてその違いを地球科学的に議論するには地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみるとクラスター法よりさらに後退した方法である。何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、例えば分析する原石数の少ないときにはA産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすとA産地・B産地の区別ができなくなる可能性があり（クラスター法でも同じ危険性がある）判定結果に疑問が残る。以上のことから産地分析の方法とし

て理想的なものは、地質学の常識的な知識さえあればよく、火山学・堆積学など専門知識は必要ないものが良い。また実際の分析においては、非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかが重要である。このように、クラスター法・元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングのT²乗検定法である。

仮に現在調査した318個の原石・遺物群について散布図を書くと、各群40個の原石の元素分析結果を元素散布図にプロットすると318群×約40個=12,720点の元素散布図になり、これが8元素比を組み合わせて散布図を作ると28個の2次元図となり、この図の中に遺物の分析点をプロットして産地を推測することは、想像できても実用的でない。もし散布図で判定するなら、あらかじめ遺物の原石産地を決めて予想した産地のみで散布図を書き産地を決定する。これでは一致する産地のみを探すのみで、科学的分析のあらゆる可能性を否定することが科学分析であると言うことに反し、科学的産地分析と言えない。産地分析を正確に行うには、ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し必要条件と十分条件を満たす必要がある。考古学では、人工品の様式が一致するという結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態・文様、見えない様式として土器・青銅器・ガラスなどの人手が加わった調査素材がある。それらが一致するという事は、古代人が意識して一致させた可能性があり、一致するという事は古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する上で重要な意味をもつ結果である。しかし石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にすると、産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の元素組成が一致し必要条件を満たしたとき、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなるが、偶然（産地分析法が不完全なために）に一致した可能性も大きく、もし他のB・C・D…の産地の原石と比較していない場合、それらの産地でないと証拠がないためにA産地だと言い切れない。ここで十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地（A・B・C・D…）の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは、観察する人たち個々の主観が入り分類基準がまちまちとなるため混乱し不可能であると思われる。また自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によってそれぞれ異なるため、実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は、何か所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより大きく左右され、比較した産地が少なれば信頼性の低い結果と言える。黒曜石・安山岩などの主成分組成は原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には違いがあると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値・分散などと遺物の分析値を対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。また古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点と異なる地点の可能性が十分に考えられる。したがって、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT²乗検定を行う。この検定を分析した全ての産地について行い、ある遺物原材と同じ元素組成の原石が、A産地では10個中に1個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産

地では…一個と各産地ごとに求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。すなわち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は北海道鶴居村下幌呂1遺跡から出土した黒曜石製石器45個（第1回は10個—分析番号99737～99746、第2回は30個—105900～105929、第3回は5個—111029～111033）で、産地分析結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAl・Si・K・Ca・Ti・Mn・Fe・Rb・Sr・Y・Zr・Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K・Ti/K・Mn/Zr・Fe/Zr・Rb/Zr・Sr/Zr・Y/Zr・Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標としてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は、北海道・東北・北陸・東関東・中信高原・伊豆箱根・伊豆七島の神津島・山陰・九州の各地に分布している。調査を終えた原産地を図V-2に示す。元素組成によってこれら原石を分類し、表V-1に示す。この原石群に原石産地が不明の遺物で作った遺物群を加えると、318個の原石群・遺物群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は北海道紋別郡遠軽町白滝に位置し、鹿砦北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿砦東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は、色に関係無く赤石山群（旧白滝第1群）にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい滝原石を分類し、あじさい滝群（旧白滝第2群）とあじさい滝第2群を作った。また八号沢の黒曜石原石と白土沢、十勝石川沢の転礫は梨肌の黒曜石で、元素組成はあじさい滝群に似るが石肌で区別できる。幌加沢（左の沢）からの転礫の中で70%は幌加沢群になり、あじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸地域産原石は北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取された原石であり、その元素組成は置戸・所山群にまとまり、また同町の秋田林道で採取される原石は置戸山群にまとまる。また同町中里地区の露頭の小原石（最大約3cm）は置戸山群・常呂川の転礫で作った常呂川第5群に一致し、同町安住地区の小原石の中には常呂川第3群に一致する原石がみられた。北見市留辺蘂のケショマップ川一帯で採取される原石は、ケショマップ第1・第2およびチマキナウシ林道から採取される黒曜石原石から新たにケショマップ第0群（旧ケショマップ第3群に似る）に分類される。また白滝地域、ケショマップ・置戸地域産原石は、湧別川および常呂川に通じる流域にあり、両河川の流域で黒曜石の円礫が採取され、湧別川下流域から採取した黒曜石円礫247個の元素組成分類結果を表V-2に示した。また中ノ島～北見大橋間の常呂川から採取した661個の円礫の中には、独特の元素組成の原石も見られ、新しい原石群を追加し分類結果を表V-1と表V-3に示した。また、湧別川の上流地域の遠軽町社名沢地域のサナブチ川流域からも独特の元素組成の原石が見られ、表V-1と表V-4に示した。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股露頭があり、また露頭前の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十勝三股を起点に周辺の河川から転礫として採取され、十三ノ沢・タウシュベツ川・音更川・芽登川・美里別川・サンケオルベ川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の元素組成は十勝三股産の原石の元素組成と相互に近似している。これら元素組成の近似した原石の原産地

は相互に区別できず、もし遺物石材の産地分析でこの遺物の原石産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股を起点にした周辺の河川の複数の採取地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。釧路・上阿寒地域の礫層から最大3.5cmの大きさの円礫状黒曜石原石が産出し、成分組成は十勝三股産と一致した。また、清水町・新得町・鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2つの美蔓原石群が作られた。この原石は、産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域・智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを元素組成で分類すると、88%は名寄第1群に、また12%は名寄第2群にそれぞれ分かれる。旭川市の近文台・台場・嵐山遺跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第1群、69%が近文台第2群、11%が近文台第3群にそれぞれ分類され、それから台場の砂礫採取場からは近文台諸群に一致するもの以外に、黒・灰色系円礫も見られ、台場第1・第2群を作った。また滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、元素組成で分類すると約79%が滝川群にまとめられ、21%が近文台第2・第3群に元素組成が一致する。滝川群に一致する元素組成の原石は、北竜町恵徳別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫の状態は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第1群は滝川第1群に元素組成が一致し、第2群も滝川第2群に一致し、さらに近文台第2群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここから採取される原石の中で、少球果の列が何層にも重なり石器の原材として良質とはいえないもので赤井川第1群を作り、また球果の非常に少ない握り拳半分大の良質なもので赤井川第2群を作った。これら第1・第2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、元素組成によって豊泉第1・第2群の両群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。また、青森県教育庁の斉藤岳氏提供の奥尻島幌内川産黒曜石の原石群が確立されている。北見市教育委員会太田敏量氏による最近の原石産地調査で、上足寄地域から上足寄群、津別町相生から相生群、釧路市釧路空港・上阿寒地域からピッチストーン様の黒曜石が釧路市埋蔵文化財センターの石川朗氏により調査され、相互に似た組成を示し、それぞれ相生群・釧路空港群を作った。また雄武地域の音稲府川から名寄第2群に組成の似た音稲府群、鶴居村久著呂川から久著呂川群を作り原石群に新たに登録した。出来島群は青森県つがる市木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た元素組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱒ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また青森市の鶴ヶ坂およびつがる市森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸と同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群を作り、また八森山産出の原石で八森山群を作った。これら深浦町の両群と相互に似た群は、青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第2群である。戸門第1群・成田群・青森市浪岡の県民の森地区より産出の大釈迦群（旧浪岡群）は、赤井川産原石の第1・第2群と弁別は可能であるが、原石の元素組成は比較的似ている。戸門・大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさのものがみられるが、鷹森山群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石で中には5cm大のものもみられる。また考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。産地分析は、日本・近隣国を含めた産地の合計318個の原石群・遺物群と比較し、必要条件と十分条件を求めて遺物の原石産地を同定する。

結果と考察

遺跡から出土した黒曜石製石器・石片は、風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗いするだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。縄文時代の黒曜石製遺物は、表面から約3ミクロン程度の厚さで風化層ができています。分析はこの風化層を通して遺物の内部の新鮮面をいかに多く測定するかが重要である。蛍光X線分析法の中の電子線励起方式のEPMA分析は表面の分析面積が1～数百ミクロン分析されているが、深さ約1ミクロンの風化層しか分析を行っていないために、得られた結果は原石で求めた新鮮面のマトリックスと全く異なった可能性の風化層のみの分析結果になるために、黒曜石遺物は破壊して新鮮面を出して分析する必要があります。したがって、非破壊分析された黒曜石製遺物のEPMA測定された産地分析結果は全く信用できない。X線励起(50KeV)のときマトリックスをシリカとしてモデル計算を行うと、表面からカリウム元素など軽元素で数ミクロンから10ミクロン、鉄元素で約300ミクロン、ジルコニウムで約800ミクロンの深さまで分析され、鉄元素より重い元素では風化層の影響は相当無視できると思われる。風化層以外に表面に固着した汚染物が超音波洗浄でも除去できないときはその影響を受ける。また被熱黒曜石の風化層は厚く、表面ひび割れ層に汚染物が入り込んでいるときも分析値に大きく影響する。風化層が厚い場合、軽い元素の分析ほど表面分析になるため、水和層の影響を受けやすいと考えられ、Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行う。軽元素比を除いた場合、また除かずに産地分析を行った場合、いずれの場合にも同定される産地は同じである。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。一方安山岩製石器・石片は、黒曜石製遺物に比べて風化の進行が早く、非破壊で原石産地が特定される確率は黒曜石製遺物に比べて相当低くなる。サヌカイト製は風化の進行が早く、完全非破壊分析での産地分析ができる確率は黒曜石に比べて相当低くなる。サヌカイト製遺物の表面が白っぽく変色した部分は、新鮮な部分と異なった元素組成になっていると考えられる。このため、遺物の測定面の風化した部分に圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行っている。分析した黒曜石製遺物は、セイコーインスツルメンツ社のSEA2110Lシリーズ卓上型蛍光X線分析計で行った。

分析した下幌呂1遺跡出土の黒曜石製遺物の各元素比の値を表V-6に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには、数理統計の手法を用いて各原石群・遺物群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考える。表V-6の試料番号111031番の遺物ではRb/Zrの値は0.821であり、表V-1の所山の[平均値]±[標準偏差値]は 0.824 ± 0.034 である。遺物と原石群の差を置戸山の標準偏差値(σ)を基準にして考えると、遺物は原石群の平均値から 0.088σ 離れている。ところで所山群原産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.088\sigma$ のずれより大きいものが92個ある。すなわち、この遺物が所山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.088σ 以上離れる確率は92%であると言える。だから、所山群の平均値から 0.088σ しか離れていないときには、この遺物が所山群の原石から作られたものではないとは到底言い切れない。次にこの遺物を赤石山群と比較すると、赤石山群の[平均値]±[標準偏差値]は 1.340 ± 0.059 であるので、上記と同様に赤石山群の標準偏差値(σ)を基準にして考えると、この遺物の赤石山群の平均値からの隔たりは 8σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 8σ 以上離れている確率は三十兆分の一以下であると言える。このように、三十兆以上の個数に一個しかないような原石をたまたま採取してこの遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、

「この遺物は所山群に92%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから所山群原石が使用されていると同定され、さらに赤石山群に三千億分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから赤石山群の原石でないと同定される」。遺物が一か所の産地（所山群産地）と一致したからといって、たとえ所山群と赤石山群の原石は成分が異なっても分析している試料は原石でなく遺物であり、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（所山群産地）に一致し必要条件を満足したといっても、一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表V-1の318個すべての原石群について行い十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて所山群産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一の変量だけでなく、前述した8つの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えば、A原産地のA群でCa元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したときCa量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが、相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT₂乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4・5}。産地の同定結果は、1個の遺物に対して黒曜石製のものについては318個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については、低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち所山産原石と判定された遺物に対して、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考慮する必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を表V-7に記入した。

原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料の分析には大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に信頼限界以下の低い確率を記した。この遺物については、記入された確率の値が原石群の中で最も大きな確率で、この確率が高い程遺物の元素組成はその原石群の元素組成と似ていると言えるため、推定確率は低いがその原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。

風化の程度の差はあるものの風化していない遺物はなく、遺物を分析して原石産地が同定されない場合は、1：風化の影響で分析値が変動し、新鮮面と分析値が大きく異なったとき。2：遺物の厚さが薄く、厚さの影響が分析値に現れたとき（細石刃、薄い剥片など）。3：未発見の原石産地、消滅した原産地の原石が使用されているときなど。風化の影響を受けている遺物は、黒曜石は光沢なく表面が曇っていて、分析するとカリウムの分析値が大きく分析される。風化の影響が少ないときは軽元素比を抜くことにより同定が行える。ここで表V-5・6のWT/%の規格化したデータの場合、風化とか誤差などでK元素が大きく分析されると、他の元素の含有量はK元素が大きくなった変動分は他の元素に比例配分され小さく表示されるために、風化の影響が全ての元素におよび、判定のために軽元素を抜いても風化の影響を除くことはできない。しかし表V-6の分析した各元素を規格化せずに、遺物の形違いによる分析値への影響を除く元素比を用いることにより、風化の影響を受けたK元

素比を除くことで、他の元素比を用いて完全に風化の影響を除いて判定ができる。考古学者の中で軽元素を抜いても完全に風化の影響が除けないと異議を示す人がいるが、100%規格化しデータを使用したときで、規格化しない元素比により判定を行っているために、理論的には完全に風化の影響を除いて判定できる。熱を受けた異常風化や、風化が激しく軽元素以外の他の元素まで風化の影響がおよぶと遺物の産地は同定できなくなり、判定は不明とする。原石群を作った原石試料は直径3 cm以上で5 mm以上の厚さであるが、細石刃などの小さな遺物試料の分析では、遺物の厚さが1.5mm以下の薄い部分を含んで分析すると、厚さの影響を受けて重い元素は小さく測定され分析値には大きな誤差範囲が含まれるために、分析値に実験で求めた厚さ補正値を乗じて同定を行わなければならない。分析平均厚さが0.3mm以下になると補正が困難になり同定できない。細石刃は厚さが薄く、縄文時代の遺物より風化の進んだ遺物もあり、厚さ補正と軽元素を抜いて同定を行っている。

蛍光X線分析では、分析試料の風化による化学的変化（カリウムが大きく観測される）、表面が削られる物理的変化、不定形の試料では薄い部分を完全に避けて分析できないとき、分析面が遺物の極端な曲面しか分析できない場合など分析値に影響が残り、また装置による分析誤差も加わり、分析値は変動し判定結果は一定しない。特に元素比組成の似た原産地同士では区別が困難で、遺物の原石産地が原石・遺物群の複数の原石産地に同定される時、および信頼限界の0.1%の判定境界に位置する場合は、分析場所を変えて3～12回分析し最も多くの回数同定された産地を判定の欄に記している。風化・厚さ・不定形など、比較原石群分析とは異なる誤差が遺物の分析値に含まれるために、産地分析では一致する産地（必要条件）の結果だけでは信頼性が小さく、他の産地には一致しない（十分条件）ことを満足しなければならない。また判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するとき低確率（1%以下）の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。

ホテリングのT2乗検定の定量的な同定結果と石材の成分組成以外の各産地特有の原石の特徴を考慮して遺物の原石産地を判定する。白滝地域産黒曜石の中で、赤石山産原石の割れ面はガラス光沢を持っているが、元素組成が相互に似たあじさい滝・八号沢・白土沢・幌加沢・十勝石川沢などの群の原石は、あじさい滝・幌加沢産はガラス光沢で梨肌でなく、八号沢・白土沢・十勝石川産は梨肌を示すため、原石産地の判定に梨肌か梨肌でないかを指標に加えた。また赤井川および十勝産・上阿寒礫層産原石を使用した遺物の判定は複雑である。これは青森市戸門・鷹森山地区、浪岡地区大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第1・鷹森山・大釈迦の各群の元素組成が赤井川第1・2群、十勝三股群・上阿寒礫層群に比較的似ているために、遺物独特の風化の影響や不定形による影響を受けた分析値は、影響の受け方の程度により戸門原産地と赤井川または十勝・上阿寒礫層産地、これら複数の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。十勝三股群・上阿寒礫層群・赤井川諸群・大釈迦群・戸門第1群・鷹森山群に同定された遺物を定量的に弁別する目的で、元素比の組み合わせを探し、新たにK/Si・Fe/Zr・Sr/Zr・Y/Zr・Sr/Rb・Y/Rb・Ti/Fe・Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行う。また従来の元素比の組み合わせで同定されなかった原石・遺物群は十分条件となる。したがって、判定の必要条件と十分条件は新元素比と従来元素比の両ホテリングのT2乗検定結果の組み合わせで判定する。また戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群（50%）と第2群（50%）の産出頻度と比較し、戸門産地の原石である可能性を推定する。（第3回目に分析した遺物の例では、）全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないことから、（第3回目の試料では）戸門産地からの原石は使用されなかったと推定できる。また青森市浪岡の大釈迦産原石は非常に小さ

い原石が多く使用された可能性は低いと思われる。新たな元素比の組み合わせでも、十勝三股群と上阿寒礫層群は区別ができず、上阿寒礫層群の原石は最大3.5cm以下の河川のローリング痕のない小円礫で、遺物にローリング痕(河川礫)をもつとき、また大きさが3.5cm以上の場合十勝産と特定できる。また石器作成にロスする原石長さを考えると、かなり小さな石器・剥片でも上阿寒礫層群の原石は使用できない可能性がある。

ホテリングのT2乗検定結果で、所山群・常呂川第4群・KS1遺物群など同時に信頼限界の0.1%で分けると複数に同定される場合がみられるが、分析値にわずかな水和層(風化)の影響(K元素値が少し大きくなる傾向)を受けた黒曜石製遺物では、複数の産地に同時に信頼限界の0.1%を越えて同定される。このとき確率が高く同定された群の原石と判定するが、確率が低い群と原石群と遺物群が同時に同定されている場合は、原石群の確率が低い場合でも、風化の影響で遺物群の方に確率が高く同定されたとして原石群の産地の原石と判定する。また遺物群のみに同定され、原石群に信頼限界の0.1%に同定されなかった遺物については、風化の影響で元の原石群に同定できなかったとして、例えばFR1~4遺物群のFR諸群に同定された場合、ケショマップの第0群~第2群の何れか不明のためケショマップと判定、KS1遺物群のみに同定されたとき所山と判定する。HS1遺物群のみでは生田原、HS2遺物群は置戸山と判定する。また所山流紋岩中に高確率で同定された遺物は、所山産が風化の影響で所山流紋岩中の原石群に同定される傾向があり、所山産と判定する(所山流紋岩中の原石は1cm以下の大きさである)。遺物の原石が露頭で採取されたか河川で採取されたかの判定は、遺物に原石の自然面が残る場合は、円礫は河川採取で、角礫は露頭採取と判断する。円礫の自然面をもつ遺物には河川・常呂川第4群、河川・所山と、また角礫は、露頭・所山、露頭・常呂川第4群と露頭、河川を付けてそれぞれ判定の欄に記した。河川礫は河岸段丘のような陸化した場所からも採取される。

赤石山、八号沢・白土沢、あじさい滝、幌加沢群、ケショマップ第2群に一致する元素組成の原石は白滝地域、ケショマップ産地以外に湧別川下流域でも円礫状で原石が採取される(表V-2)。また北見地域産地では、所山群・置戸山群・ケショマップ第1群・ケショマップ第2群・ケショマップ第3群・常呂川第2群・常呂川第3群・常呂川第4群・常呂川第5群・常呂川第6群・十勝群・台場第2群、割れ面が梨肌の親指大の八号沢群に一致する元素組成の円礫状の原石が北見・常呂川流域で採取される(表V-3)。サナブチ川からは社名淵群、赤石山群、八号沢・白土沢群に一致する原石が採取される(表V-4)。分析した遺物が、白滝地域、置戸地域、留辺蘂・ケショマップ地域の露頭産か、また湧別川下流域、常呂川流域、サナブチ川産の何れかの産地から伝播したかを推測するには、多数の遺物を分析して各産地群に同定される頻度を求め、湧別川・常呂川採取黒曜石原石の頻度分布と比較して決定される。

【第1回】

今回(第1回)分析した試料の中で、分析番号99741番の遺物は、十勝三股群以外に青森市産の鷹森山・大釈迦・戸門第1群に信頼限界としている0.1%を越えて同じに複数の産地に同定され、区別が困難である。これら十勝三股群と、鷹森山群・大釈迦群・戸門第1群の原石群が新鮮面を分析する原石で弁別できても、遺物で弁別できない場合があり、原因としては、遺物は大きさ・形態・風化の状態など様々で、分析値に影響していると可能性が考えられる。十勝三股群・青森市産の大釈迦群・鷹森山群・戸門第1群・西田沢群などに同定された遺物を弁別する目的で、元素比の組み合わせを探し、新たにK/Si・Fe/Zr・Sr/Zr・Y/Zr・Sr/Rb・Y/Rb・Ti/Fe・Si/Feの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行ったところ、十勝三股群にのみ同定され、結果を表V-6の新元素比による原

石群比較ホテリングT2乗検定結果の欄に記した。また分析番号99746番の遺物は、北見市内常呂川流域の同地点で採取される所山群・常呂川第4群・キウスKS1遺物群以外に、地域の異なる十勝地域の美蔓第1群に信頼限界の0.1%をわずかに越えた0.2%で同定された。分析番号99746番の遺物を、所山群と美蔓第1群・美蔓第2群を明確に区別できる元素比の組み合わせを探し、新たにCa/K・Fe/Zr・Rb/Zr・Ti/Ca・Sr/Zr・Y/Zr・Sr/Rb・Y/Rbの組み合わせによるホテリングのT2乗検定を行い、結果を表V-7の新元素比による原石群比較ホテリングT2乗検定結果の欄に記した。新元素比による原石群比較ホテリングT2乗検定をした遺物は、美蔓第1群が信頼限界の0.1%以下になり、所山群のみとなった。今回(第1回)分析した下幌呂1遺跡出土の黒曜石製石器の10個の中で所山産が90%(9個)、十勝三股産が10%(1個)である。所山産と同定された遺物の結果を表V-3と比較すると分析番号99745番の石刃鎌は角礫状の自然面をもっていることから、所山産地の露頭周辺から採取された原石が使用されていると推測した。また分析番号99737~99740番・99742~99744番および99746番は自然面がなく、ローリングを受けているか不明であるが、表V-3の出現頻度と比較すると分析した遺物の中に置戸山・ケショマップ産と同定された遺物がみられないことから、常呂川から採取された原石は使用されていないと推測した。また十勝三股群と同定された分析番号99741番の石刃鎌の原石は、常呂川からは0.2%の確率で採取されるが、分析した遺物(第1回)の中では十勝三股産の使用頻度は10%の確率でみられることから、常呂川から採取された十勝三股産黒曜石で石刃鎌が作られていないと推測した。下幌呂1遺跡では、十勝産地・所山産地などの地域との生活・文化情報の交換があったと推測しても、産地分析の結果と矛盾しない。

〔第2回〕

今回(第2回)分析した鶴居村下幌呂1遺跡から出土した黒曜石製石器30個について、産地分析結果を表V-7の判定の欄に記した。また塊状不定形で求めた化合物組成は、試料を粉末成形した厳密な定量結果ではないが、定性的な岩石考察に利用できる結果を表V-5、マハラノビスの距離を求め行うホテリングのT2乗検定のために元素比(任意単位)を表V-6に示した。

下幌呂1遺跡出土黒曜石製遺物の産地別使用頻度は所山産が36.7%(11個)、十勝産が23.8%(5個)、十勝・上阿寒礫層群が13.3%(4個)、置戸山産が10%(3個)、美蔓産が6.7%(2個)、赤石山、十勝石沢川・白土沢・八号沢、赤井川産が各3.3%(1個)それぞれ使用されている。下幌呂1遺跡出土黒曜石製遺物の産地別使用頻度で所山産と置戸山産をみると、常呂川から採取される頻度に近く、常呂川から採取された可能性も推測される。また角礫状の痕跡を残す遺物が所山・置戸山産に同定されていることから、露頭に近い地点から採取された可能性も推測された。今回分析した結果の中で使用頻度の高い産地と交流が活発であったとすると、下幌呂1遺跡では、所山産地・置戸山産地・十勝地域の十勝産地・美蔓産地との交流が活発で、白滝地域との交流も見られ、遠距離伝搬してきた赤井川産原石が見られることから赤井川産地地域の情報も入手していたと推測された。これら地域との生活、文化情報の交換があったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。

〔第3回〕

今回分析した下幌呂1遺跡出土黒曜石製遺物には、所山産原石以外の使用は確認できなかった。また、分析番号111033番(SMH1-X45)の遺物の一部分に角礫状の痕跡が残っていることから露頭採取の可能性を表V-7に記した。交流の活発な原石産地の原石が多量に遺跡に伝播すると考えると、所山産地地域との交流が推測され、この地域との生活、文化情報の交換があったと推測しても産地分

析の結果と矛盾しない。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信 (1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅱ)。考古学と自然科学, 8 : 61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定 (Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11 : 53-81 : 33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信 (1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16 : 59-89
- 4) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9 : 77-90
- 5) 東村武信 (1990), 考古学と物理化学。学生社

編者註：

下幌呂 1 遺跡出土の黒曜石製遺物の原材産地分析については、平成19年度・平成21年度・平成22年度の3回にわたり委託しており、結果および報告は最新の第3回を基軸として統合して掲載したものである。

表V-1-2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

Table with columns for origin (原産地), analysis count (分析個数), and various element ratios (Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zr, Nb/Zr, Al/K, Si/K). The table lists 45 different origin groups with their respective average values and standard deviations.

表V-1-3 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

Table with columns for regional group names (e.g., 北海道, 青森県), analysis counts, element ratios (Ca/K, Ti/K, Mn/Zr, Fe/Zr, Rb/Zr, Sr/Zr, Y/Zr, Nb/Zr, Al/K, Si/K), and numerical values with standard deviations.

表V-1-4 黒曜石製遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

各地遺物群名	分析	元素比										
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
アラスカ	GUL09遺物群	40	0.167±0.017	0.074±0.003	0.035±0.002	1.498±0.030	0.975±0.037	0.215±0.023	0.220±0.018	0.139±0.038	0.023±0.001	0.327±0.005
	GUL09遺物群	40	0.167±0.017	0.074±0.003	0.035±0.002	1.498±0.030	0.975±0.037	0.215±0.023	0.220±0.018	0.139±0.038	0.023±0.001	0.327±0.005
	XMK02遺物群	40	2.897±0.065	1.695±0.046	0.078±0.001	4.555±0.074	0.100±0.007	0.831±0.018	0.103±0.006	0.043±0.018	0.047±0.001	0.508±0.014
	YUK01遺物群	40	0.155±0.005	0.041±0.002	0.026±0.002	1.530±0.035	1.022±0.027	0.007±0.010	0.253±0.017	0.146±0.043	0.022±0.001	0.331±0.010
	YUK16遺物群	40	0.154±0.007	0.066±0.004	0.037±0.002	1.496±0.039	1.046±0.032	0.178±0.017	0.232±0.014	0.146±0.036	0.023±0.001	0.327±0.007
	YUK34遺物群	40	0.172±0.003	0.085±0.003	0.032±0.002	1.495±0.041	0.830±0.028	0.312±0.022	0.177±0.017	0.098±0.043	0.022±0.001	0.327±0.004
	UNL01遺物群	40	0.427±0.005	0.170±0.002	0.024±0.001	1.162±0.009	0.128±0.005	0.136±0.005	0.129±0.004	0.037±0.010	0.025±0.001	0.361±0.004
	UNL07遺物群	40	0.428±0.027	0.249±0.017	0.020±0.001	1.215±0.032	0.202±0.007	0.208±0.009	0.087±0.006	0.011±0.010	0.025±0.001	0.334±0.004
	CHK02遺物群	40	0.606±0.008	0.269±0.029	0.043±0.001	1.774±0.045	0.106±0.007	0.246±0.007	0.106±0.007	0.041±0.015	0.034±0.001	0.459±0.016
	CRG01遺物群	40	0.089±0.003	0.153±0.003	0.005±0.000	0.411±0.004	0.074±0.002	0.000±0.001	0.064±0.002	0.219±0.004	0.021±0.001	0.313±0.002
	MMK03遺物群	41	0.438±0.007	0.165±0.005	0.027±0.001	1.409±0.029	0.245±0.010	0.560±0.016	0.068±0.010	0.020±0.017	0.029±0.001	0.371±0.007
	MMK12遺物群	41	0.126±0.004	0.085±0.003	0.066±0.003	1.091±0.031	0.830±0.030	0.046±0.016	0.211±0.015	0.318±0.037	0.023±0.001	0.335±0.006
	HEA10遺物群	41	0.222±0.007	0.130±0.004	0.021±0.001	1.338±0.135	0.454±0.026	0.412±0.018	0.134±0.014	0.052±0.022	0.020±0.001	0.279±0.003
	HEA26遺物群	41	0.235±0.005	0.082±0.003	0.028±0.002	1.843±0.089	1.066±0.035	0.207±0.028	0.351±0.021	0.057±0.048	0.026±0.001	0.363±0.005
	XBD61遺物群	41	0.073±0.004	0.214±0.004	0.008±0.000	0.721±0.004	0.063±0.002	0.001±0.001	0.067±0.002	0.179±0.004	0.019±0.001	0.322±0.003
	XBD124遺物群	41	0.274±0.006	0.170±0.003	0.031±0.001	1.293±0.020	0.409±0.010	0.412±0.017	0.090±0.015	0.103±0.025	0.026±0.001	0.359±0.003
	XBD131遺物群	41	0.156±0.004	0.048±0.003	0.131±0.006	1.244±0.041	2.125±0.091	0.031±0.023	0.430±0.024	0.790±0.062	0.024±0.001	0.342±0.002
	NOA02遺物群	41	0.149±0.003	0.134±0.004	0.043±0.002	1.075±0.043	0.654±0.032	0.285±0.018	0.142±0.012	0.183±0.035	0.023±0.001	0.323±0.004
	NOA07遺物群	41	0.210±0.005	0.176±0.011	0.017±0.001	0.871±0.016	0.221±0.007	0.068±0.006	0.097±0.006	0.065±0.014	0.024±0.001	0.301±0.005
	SFT-1遺物群	40	0.078±0.010	0.121±0.020	0.006±0.000	0.454±0.005	0.097±0.002	0.001±0.001	0.073±0.002	0.224±0.005	0.022±0.001	0.338±0.009
SFT-2遺物群	40	0.098±0.003	0.152±0.003	0.005±0.000	0.449±0.004	0.075±0.002	0.000±0.000	0.063±0.002	0.200±0.004	0.022±0.001	0.316±0.003	
エクスアドル	BAEZA遺物群	45	0.543±0.006	0.289±0.005	0.038±0.001	1.396±0.017	0.464±0.011	1.595±0.024	0.073±0.006	0.095±0.028	0.031±0.001	0.549±0.009
標準試料	JG-1*	127	0.753±0.010	0.202±0.005	0.076±0.011	3.759±0.111	0.993±0.036	1.331±0.046	0.251±0.027	0.105±0.017	0.028±0.002	0.342±0.004

M群=桑ノ木津留第1群、F群=UT遺物群、HS2群=置戸・置戸山群、FR2群=ケシヨマップ第一群にそれぞれ一致 平均値±標準偏差値、*：ガラス質安山岩、NK遺物群：中ッ原遺跡、HY遺物群：日和山遺跡、SN遺物群：三内丸山遺跡出土、KN遺物群：此掛遺跡、HS遺物群：北進遺跡、KI遺物群：桐木遺跡、UT遺物群：内屋敷遺跡、AI遺物群：相ノ沢遺跡、FS遺物群：房ノ沢遺跡、SD遺物群：下館跡遺跡、FR遺物群：東麓第1、2遺跡、FH遺物群：東9線8遺跡、KT遺物群：北区1遺跡、KS遺物群：キウス4遺跡A-R地区、SG遺物群：志風頭遺跡、OK遺物群：奥名野遺跡、OK遺物群：奥名野遺跡、TB遺物群：戸平川遺跡、NM遺物群：長柄遺跡、MK遺物群：南方遺跡、YM遺物群：南方、藤尾、岩上遺跡、AC1、2、3遺物群：アチャ平遺跡、IN1、2遺物群：岩野原遺跡、K19遺物群：K39遺跡、kk1、2遺物群：計志加里遺跡、HB1、2（フリント様）：八久保第2遺跡、HR遺物群：堀量遺跡、HM遺物群：春ノ山遺跡、KU4（硬質頁岩様）：久木野遺跡、ON1、2：大原野遺跡、NI29：能香遺跡、UH63・UH66：上ノ原遺跡、UN51遺物群：雲南遺跡など出土遺物の産地不明の原石群、ウラジオストック付近：イリスタヤ遺跡、南カムチャッカ：パルトウナカ、ナチキ、アパチャ遺跡、中部カムチャッカ：Ushiki I、II、V遺跡、コムソモリスクーナーアムール：フーミ遺物群、MTR21遺物群：耳取遺跡、FUTI3遺物群：八千代村対地遺跡、NTO-6遺物群：仁田尾遺跡、SW4遺物群：沢ノ黒遺跡、原田30遺物群：原田遺跡、NTRSI、2、32遺物群：西多羅追遺跡、矢野54風化群：矢野遺跡、a)：Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 grandiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8, 173-192.

表V-2 湧別川河口域の河床から採取した247個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
赤石山群	90個	36%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	120個	49%	割れ面が梨肌の黒曜石
あじさい滝群、幌加沢	31個	13%	割れ面が梨肌でないもの
ケシヨマップ第2群	5個	2%	
KS3遺物群	1個	0.04%	

注：8号沢、白土沢、あじさい滝、幌加沢の一部は組成が酷似し、分類は割れ面の梨肌か否かで区別した。

表V-3 常呂川（中ノ島～北見大橋）から採取した661個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
所山群	321個	49%	常呂川第4群に似る
置戸山群	75個	11%	常呂川第2群、常呂川第5群、HS2遺物群に似る
ケシヨマップ第1群	65個	10%	FR1、FR2遺物群に似る
ケシヨマップ第2群	96個	14%	希に同時にケシヨマップ第0群に0.5～0.001%で同定、FR1、FR2遺物群に似る
八号沢群	1個	0.2%	割れ面梨肌
常呂川第2群	14個	2%	置戸山群、高原山群、HS2遺物群に似る
常呂川第3群	3個	0.5%	
常呂川第4群	70個	11%	KS1遺物群、所山群に似る
常呂川第5群	10個	2%	置戸山群、HS2遺物群に似る
常呂川第6群	1個	0.2%	FH1遺物群に似る
常呂川第7群	2個	0.3%	FR2遺物群に似る
常呂川第8群	1個	0.2%	名寄第2群に似る
十勝	1個	0.2%	戸門第1群、鷹森山群、大釈迦群に似る
台場第2群	1個	0.2%	美蔓第1群に似る

注：常呂川第2群は分析場所を変えて複数回測定して作る。

表V-4 サナブチ川から採取した44個の黒曜石円礫の分類結果

原石群名	個数	百分率	備考
社名湖群	42個	95%	
赤石山群	1個	2%	白滝産地赤石山群に一致
八号沢・白土沢群	1個	2%	割れ面が梨肌の黒曜石

注：8号沢、白土沢、あじさい滝、幌加沢の一部は組成が酷似し、分類は割れ面の梨肌か否かで区別した。

表 V-5 下幌呂 1 遺跡出土黒曜石製遺物の非破壊不定形塊状分析による化学組成結果

遺物番号	分析番号	化合物組成 (Wt%)												
		Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Rb	Sr	Y	Zr	Nb	Ba
SMH1-X11	105900	13.1855	80.7267	4.1676	0.7402	0.1141	0.0369	0.9310	0.0119	0.0050	0.0019	0.0137	0.0000	0.0655
SMH1-X12	105901	13.7695	80.7893	3.4918	0.7648	0.0880	0.0348	0.9168	0.0122	0.0057	0.0023	0.0141	0.0000	0.1106
SMH1-X13	105902	13.3707	80.9949	3.5801	0.7958	0.0943	0.0370	0.9772	0.0127	0.0058	0.0023	0.0146	0.0001	0.1147
SMH1-X14	105903	13.6902	80.8530	3.7819	0.5907	0.0301	0.0396	0.8877	0.0136	0.0042	0.0035	0.0105	0.0000	0.0950
SMH1-X15	105904	13.6484	81.0625	3.5669	0.6230	0.0307	0.0387	0.8995	0.0126	0.0041	0.0028	0.0111	0.0000	0.0996
SMH1-X16	105905	13.6834	80.8444	3.0739	0.9214	0.1032	0.0421	1.2191	0.0093	0.0067	0.0021	0.0202	0.0001	0.0742
SMH1-X17	105906	13.7228	81.0898	2.8827	0.8971	0.0845	0.0396	1.1683	0.0089	0.0067	0.0021	0.0194	0.0000	0.0782
SMH1-X18	105907	13.5767	80.9146	3.5483	0.7668	0.0816	0.0342	0.9334	0.0124	0.0056	0.0020	0.0143	0.0004	0.1097
SMH1-X19	105908	13.2141	81.2619	3.7458	0.6527	0.0421	0.0410	0.9389	0.0127	0.0042	0.0029	0.0111	0.0000	0.0728
SMH1-X20	105909	13.0608	81.3785	3.5386	0.7851	0.0880	0.0362	0.9648	0.0127	0.0058	0.0024	0.0145	0.0003	0.1121
SMH1-X21	105910	13.3813	81.0713	3.0887	1.0538	0.0812	0.0353	1.1743	0.0110	0.0076	0.0021	0.0123	0.0000	0.0811
SMH1-X22	105911	13.5574	80.9837	3.6916	0.6201	0.0354	0.0417	0.9441	0.0131	0.0046	0.0031	0.0115	0.0001	0.0936
SMH1-X23	105912	13.4999	80.7570	4.0340	0.5161	0.0409	0.0446	1.0079	0.0146	0.0027	0.0027	0.0106	0.0003	0.0685
SMH1-X24	105913	13.6755	80.9778	3.5951	0.6296	0.0349	0.0398	0.9250	0.0125	0.0045	0.0031	0.0113	0.0000	0.0911
SMH1-X25	105914	13.4798	80.9231	4.1278	0.4164	0.0155	0.0503	0.9559	0.0161	0.0007	0.0032	0.0086	0.0002	0.0023
SMH1-X26	105915	14.1213	80.3144	3.7343	0.6498	0.0567	0.0442	0.9968	0.0131	0.0040	0.0027	0.0110	0.0000	0.0519
SMH1-X27	105916	13.0184	81.4534	3.5737	0.7660	0.1171	0.0360	0.9520	0.0118	0.0055	0.0021	0.0133	0.0002	0.0504
SMH1-X28	105917	13.1557	81.3272	3.5394	0.7733	0.1007	0.0344	0.9448	0.0120	0.0054	0.0022	0.0140	0.0000	0.0908
SMH1-X29	105918	13.5456	80.9698	3.7639	0.6075	0.0270	0.0399	0.9106	0.0134	0.0040	0.0036	0.0111	0.0000	0.1037
SMH1-X30	105919	13.4540	81.0371	3.7168	0.6518	0.0366	0.0399	0.9463	0.0128	0.0043	0.0030	0.0118	0.0000	0.0856
SMH1-X31	105920	13.3285	81.2345	3.6775	0.6549	0.0399	0.0401	0.9239	0.0126	0.0043	0.0030	0.0113	0.0000	0.0696
SMH1-X32	105921	13.4768	80.5754	3.2225	1.1376	0.0894	0.0377	1.3444	0.0115	0.0084	0.0024	0.0144	0.0000	0.0795
SMH1-X33	105922	13.3028	81.3559	3.4176	0.7602	0.0867	0.0352	0.9015	0.0116	0.0052	0.0020	0.0137	0.0000	0.1076
SMH1-X34	105923	13.1285	81.3825	3.5077	0.7676	0.0929	0.0349	0.9540	0.0121	0.0055	0.0023	0.0146	0.0000	0.0974
SMH1-X35	105924	13.2565	81.1587	3.6049	0.7816	0.0854	0.0350	0.9348	0.0125	0.0055	0.0018	0.0138	0.0000	0.1094
SMH1-X36	105925	13.5481	80.8018	3.8690	0.6149	0.0280	0.0400	0.9524	0.0136	0.0044	0.0031	0.0116	0.0009	0.1123
SMH1-X37	105926	13.3877	81.2085	3.6638	0.6280	0.0461	0.0405	0.9284	0.0129	0.0042	0.0028	0.0112	0.0000	0.0660
SMH1-X38	105927	13.5847	81.1557	2.9412	0.8940	0.0828	0.0422	1.1819	0.0089	0.0065	0.0019	0.0192	0.0003	0.0808
SMH1-X39	105928	12.9640	81.3155	3.9159	0.7070	0.0377	0.0486	0.8954	0.0118	0.0042	0.0022	0.0111	0.0000	0.0865
SMH1-X40	105929	13.2938	80.9768	3.6638	0.7999	0.0812	0.0370	0.9768	0.0126	0.0057	0.0022	0.0148	0.0000	0.1354

表 V-6-1 下幌呂 1 遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
第 1 回										
99737	0.322	0.131	0.050	1.834	0.823	0.453	0.183	0.050	0.028	0.385
99738	0.330	0.135	0.046	1.836	0.817	0.459	0.184	0.098	0.030	0.405
99739	0.325	0.128	0.049	1.798	0.831	0.438	0.175	0.060	0.029	0.401
99740	0.328	0.131	0.048	1.952	0.849	0.451	0.178	0.045	0.030	0.416
99741	0.255	0.077	0.066	2.280	1.117	0.454	0.343	0.054	0.029	0.392
99742	0.327	0.123	0.047	1.902	0.854	0.452	0.185	0.048	0.029	0.408
99743	0.329	0.133	0.047	1.915	0.816	0.450	0.178	0.038	0.029	0.405
99744	0.326	0.131	0.047	1.767	0.809	0.445	0.183	0.015	0.029	0.397
99745	0.325	0.130	0.050	1.858	0.814	0.440	0.183	0.065	0.029	0.403
99746	0.327	0.127	0.047	1.868	0.829	0.466	0.173	0.067	0.030	0.410
標準試料										
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1 : 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol. 8 175-192 (1974)

表V-6-2 下幌呂1遺跡出土黒曜石製石器の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
第2回										
105900	0.282	0.120	0.054	1.933	0.852	0.445	0.175	0.025	0.030	0.398
105901	0.329	0.129	0.046	1.792	0.817	0.461	0.186	0.004	0.031	0.406
105902	0.332	0.133	0.048	1.883	0.822	0.453	0.183	0.066	0.030	0.401
105903	0.243	0.070	0.072	2.342	1.249	0.452	0.405	0.083	0.028	0.380
105904	0.260	0.077	0.067	2.263	1.102	0.427	0.331	0.068	0.030	0.402
105905	0.457	0.145	0.038	1.699	0.437	0.378	0.127	0.026	0.030	0.426
105906	0.474	0.136	0.037	1.664	0.430	0.392	0.129	0.017	0.032	0.452
105907	0.327	0.121	0.045	1.840	0.826	0.451	0.172	0.073	0.031	0.403
105908	0.259	0.074	0.071	2.361	1.103	0.432	0.334	0.068	0.028	0.384
105909	0.328	0.128	0.047	1.872	0.830	0.459	0.189	0.079	0.030	0.403
105910	0.485	0.122	0.054	2.590	0.821	0.697	0.196	0.033	0.034	0.451
105911	0.253	0.076	0.070	2.311	1.102	0.457	0.338	0.075	0.029	0.391
105912	0.179	0.065	0.082	2.748	1.332	0.281	0.334	0.085	0.028	0.367
105913	0.261	0.077	0.067	2.272	1.061	0.449	0.336	0.070	0.030	0.399
105914	0.136	0.018	0.113	3.276	1.860	0.097	0.477	0.070	0.027	0.359
105915	0.260	0.081	0.079	2.590	1.159	0.417	0.334	0.070	0.030	0.381
105916	0.323	0.132	0.051	2.008	0.843	0.471	0.185	0.069	0.029	0.405
105917	0.328	0.132	0.046	1.872	0.813	0.439	0.184	0.030	0.030	0.406
105918	0.248	0.070	0.071	2.339	1.182	0.412	0.390	0.089	0.028	0.387
105919	0.262	0.074	0.065	2.252	1.055	0.420	0.325	0.033	0.028	0.388
105920	0.265	0.072	0.068	2.274	1.075	0.431	0.333	0.050	0.028	0.394
105921	0.499	0.125	0.050	2.583	0.741	0.668	0.188	0.034	0.032	0.428
105922	0.329	0.127	0.044	1.811	0.797	0.423	0.178	0.072	0.031	0.416
105923	0.328	0.129	0.045	1.825	0.790	0.429	0.182	0.027	0.030	0.409
105924	0.327	0.122	0.047	1.873	0.854	0.451	0.173	0.046	0.029	0.398
105925	0.246	0.072	0.067	2.320	1.132	0.432	0.343	0.111	0.028	0.377
105926	0.258	0.077	0.070	2.318	1.116	0.430	0.330	0.053	0.029	0.396
105927	0.463	0.132	0.040	1.728	0.441	0.383	0.123	0.029	0.032	0.449
105928	0.256	0.066	0.086	2.228	1.004	0.422	0.250	0.047	0.026	0.364
105929	0.329	0.125	0.047	1.834	0.803	0.440	0.179	0.045	0.029	0.393

表V-6-3 下幌呂1遺跡黒曜石製石器の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
第3回										
111029	0.323	0.126	0.047	1.846	0.817	0.458	0.181	0.049	0.030	0.402
111030	0.326	0.126	0.046	1.848	0.840	0.451	0.176	0.055	0.030	0.407
111031	0.318	0.128	0.047	1.861	0.821	0.447	0.178	0.050	0.029	0.398
111032	0.330	0.128	0.045	1.837	0.800	0.423	0.153	0.067	0.030	0.403
111033	0.330	0.126	0.044	1.795	0.793	0.453	0.187	0.001	0.031	0.417
JG-1	0.780	0.208	0.072	4.113	0.969	1.260	0.310	0.047	0.031	0.317

JG-1 : 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8 175-192 (1974)

表 V-7-1 鶴居村下幌呂 1 遺跡出土黒曜石製石器・剥片の原産地分析結果

第 1 回									
分析番号	試料番号	遺構／発掘区	層位	遺物番号	遺物名	表V-1 原石群比較ホテリングT2 乗検定結果	新元素比によるホテリングT2 乗検定結果	判定	備考
99737	SMH1-X1	M25	IV	9	石刃鎌	所山 (74%)、キウスKSI遺物群 (12%)、常呂川第4群 (2%)	所山 (97%)	所山	
99738	SMH1-X2	N23	IV	24	石刃鎌	所山 (71%)、常呂川第4群 (2%)、キウスKSI遺物群 (2%)	所山 (77%)	所山	
99739	SMH1-X3	N23	IV	61	石刃鎌	所山 (80%)、キウスKSI遺物群 (11%)、常呂川第4群 (0.8%)	所山 (68%)	所山	
99740	SMH1-X4	O22	IV	42	石刃鎌	所山 (71%)、常呂川第4群 (0.1%)	所山 (80%)	所山	
99741	SMH1-X5	O23	IV	3	石刃鎌	十勝三股 (99%)、戸門第1群 (16%)、鷹森山 (7%)、大釈迦 (2%)	十勝三股 (76%)	十勝	
99742	SMH1-X6	O23	IV	9	石刃鎌	所山 (79%)、常呂川第4群 (2%)	所山 (24%)	所山	
99743	SMH1-X7	O23	IV	31	石刃鎌	所山 (69%)、常呂川第4群 (1%)	所山 (27%)	所山	
99744	SMH1-X8	P22	IV	1	石刃鎌	所山 (89%)、キウスKSI遺物群 (27%)、常呂川第4群 (7%)	所山 (43%)	所山	
99745	SMH1-X9	P22	IV	2	石刃鎌	所山 (58%)、キウスKSI遺物群 (5%)、常呂川第4群 (2%)	所山 (86%)	所山	角礫
99746	SMH1-X10	P22	IV	80	石刃鎌	所山 (97%)、常呂川第4群 (15%)、キウスKSI遺物群 (2%)、美蔓第1群 (0.2%)	所山 (76%)	所山	

十勝産原石と青森市産原石との区別：K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの新元素比による十勝三股、折腰内、鷹森山、大釈迦、戸門第1群のみでホテリングのT2乗検定を行う。この検定で分析でされた遺物は、青森市産の折腰内、鷹森山、大釈迦、戸門第1群、西田沢群で無いことは明確になった。また、所山産原石と美蔓産原石の新元素比、Ca/K、Fe/Zr、Rb/Zr、Ti/Ca、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/RbによるホテリングT2乗検定による弁別で、美蔓産の可能性は否定された。この検定で十勝三股群、所山群のみに一致したことは必要条件として、折腰内、鷹森山、大釈迦、戸門第1群、西田沢、美蔓第1群で無いとの十分条件はともに重要な証拠で、また表1原石群比較ホテリングT2乗検定と組み合わせ判定し、信頼限界の0.1%以上を必要条件を満たした産地として判定欄に記入し、また信頼限界0.1%未満の原石産地を確率結果は299、297群は紙面の都合で省略した。

表 V-7-2 鶴居村下幌呂 1 遺跡出土黒曜石遺物産地分析結果

第 2 回									
分析番号	試料番号	遺構／発掘区	層位	遺物番号	器種	ホテリングのT2 検定結果 (%)	表面特徴・最大長さ	新元素比によるホテリングのT2 検定結果 (%)	判定
105900	SMH1-X11	H-2	覆土	1	石鎌	【所山 (13%)、所山流紋岩中 (5%)、古里第3群 (1%)】			所山
105901	SMH1-X12	P-5	覆土	2	つまみ付きナイフ	所山 (94%)、常呂川第4群 (20%)、KSI遺物群 (16%)			所山
105902	SMH1-X13	H-2	覆土	3	石鎌	所山 (72%)、常呂川第4群 (3%)、KSI遺物群 (0.9%)			所山
105903	SMH1-X14	H-10	覆土	4	石鎌	十勝三股 (33%)、上阿寒礫層 (6%)	47mm		十勝
105904	SMH1-X15	H-2	覆土	40	石核	十勝三股 (99.8%)、上阿寒礫層 (99%)、戸門第1群 (7%)、大釈迦 (0.9%)、鷹森山 (2%)	ローリング面33mm	上阿寒礫層 (83%)、十勝三股 (43%)、鷹森山 (0.6%)	十勝
105905	SMH1-X16	H-2	覆土	12	つまみ付きナイフ	置戸山 (94%)、常呂川第2群 (0.1%)			置戸山
105906	SMH1-X17	K22	IV	5	石槍	置戸山 (96%)、常呂川第2群 (0.3%)			置戸山
105907	SMH1-X18	K13	IV	1	石槍	所山 (82%)、常呂川第4群 (36%)、KSI遺物群 (0.8%)、美蔓第1群 (0.2%)			所山
105908	SMH1-X19	K21	IV	2	石鎌	十勝三股 (99.5%)、上阿寒礫層 (99.3%)、戸門第1群 (10%)、大釈迦 (3%)、鷹森山 (5%)	25mm	上阿寒礫層 (84%)、十勝三股 (20%)	十勝・上阿寒礫層
105909	SMH1-X20	H-5	床面	10	石槍	所山 (88%)、常呂川第4群 (5%)、KSI遺物群 (0.7%)			所山
105910	SMH1-X21	H-5	床面	18	石核	美蔓第1群 (97%)、美蔓第2群 (66%)、台場第2群 (1%)	円礫		美蔓
105911	SMH1-X22	H-5	床面	6	石核	十勝三股 (98%)、上阿寒礫層 (84%)、戸門第1群 (21%)、鷹森山 (16%)、大釈迦 (4%)、西田沢 (0.5%)	ローリング面60mm	上阿寒礫層 (8%)、十勝三股 (5%)	十勝
105912	SMH1-X23	H-38	覆土2	51	石鎌	赤石山 (99%)			赤石山
105913	SMH1-X24	H-38	覆土1	47	石槍	十勝三股 (99.8%)、上阿寒礫層 (99%)、鷹森山 (12%)、戸門第1群 (8%)、大釈迦 (2%)、西田沢 (0.2%)	59mm	上阿寒礫層 (29%)、十勝三股 (19%)	十勝
105914	SMH1-X25	H-38	覆土2	102	剥片	十勝石沢川 (54%)、あじさい滝 (55%)、幌加沢 (45%)、白土沢 (53%)、八号沢 (41%)	梨肌		十勝石沢川・白土沢・八号沢
105915	SMH1-X26	P-31	覆土	13	石鎌	十勝三股 (7%)、上阿寒礫層 (1%)	17mm		十勝
105916	SMH1-X27	P-31	覆土	14	石鎌	所山 (8%)			所山
105917	SMH1-X28	P-47	覆土	15	つまみ付きナイフ	所山 (89%)、常呂川第4群 (5%)、KSI遺物群 (1%)			所山
105918	SMH1-X29	H-15	覆土2	24	石鎌	十勝三股 (45%)、上阿寒礫層 (30%)	37mm		十勝
105919	SMH1-X30	H-19	覆土5	28	石鎌	十勝三股 (99%)、上阿寒礫層 (72%)、鷹森山 (8%)、戸門第1群 (5%)、大釈迦 (1%) (0.2%)	22mm	上阿寒礫層 (43%)、十勝三股 (7%)	十勝・上阿寒礫層

表V-7-2 鶴居村下幌呂1遺跡出土黒曜石遺物産地分析結果

分析番号	試料番号	遺構／発掘区	層位	遺物番号	器種	ホテリングのT2検定結果 (%)	表面特徴・最大長さ	新元素比によるホテリングのT2検定結果 (%)	判定
105920	SMH1-X31	H-23	覆土1	19	石鏃	十勝三股 (93%)、上阿寒礫層 (89%)、戸門第1群 (4%)、鷹森山 (2%)、大釈迦 (0.7%)	28mm	上阿寒礫層 (92%)、十勝三股 (28%)	十勝・上阿寒礫層
105921	SMH1-X32	H-19	覆土3	68	石槍	美蔓第1群 (98%)、美蔓第2群 (88%)、台場第2群 (0.1%)			美蔓
105922	SMH1-X33	H-18	床面	1	石槍	所山 (77%)、常呂川第4群 (25%)、KSI遺物群 (1%)			所山
105923	SMH1-X34	H-23	覆土2	12	つまみ付きナイフ	所山 (87%)、常呂川第4群 (36%)、KSI遺物群 (4%)			所山
105924	SMH1-X35	H-15	HM2	25	スクレイパー	所山 (86%)、常呂川第4群 (6%)、KSI遺物群 (0.8%)、美蔓第1群 (0.1%)			所山
105925	SMH1-X36	H-16	HM2	185	石核	十勝三股 (90%)、上阿寒礫層 (86%)、戸門第1群 (12%)、鷹森山 (7%)、大釈迦 (2%)	ローリング面48mm	上阿寒礫層 (50%)、十勝三股 (5%)	十勝
105926	SMH1-X37	H-12	覆土5	101	石鏃	十勝三股 (99%)、上阿寒礫層 (89%)、戸門第1群 (11%)、大釈迦 (2%)、鷹森山 (2%)	26mm	上阿寒礫層 (99.9%)、十勝三股 (28%)	十勝・上阿寒礫層
105927	SMH1-X38	H-12	覆土5	102	石錐	置戸山 (94%)	角礫		置戸山
105928	SMH1-X39	H-12	覆土5	144	スクレイパー	赤井川第1群 (86%)、赤井川第2群 (73%)	角礫		赤井川
105929	SMH1-X40	H-12	床面	5	スクレイパー	所山 (83%)、常呂川第4群 (48%)、KSI遺物群 (4%)	角礫		所山

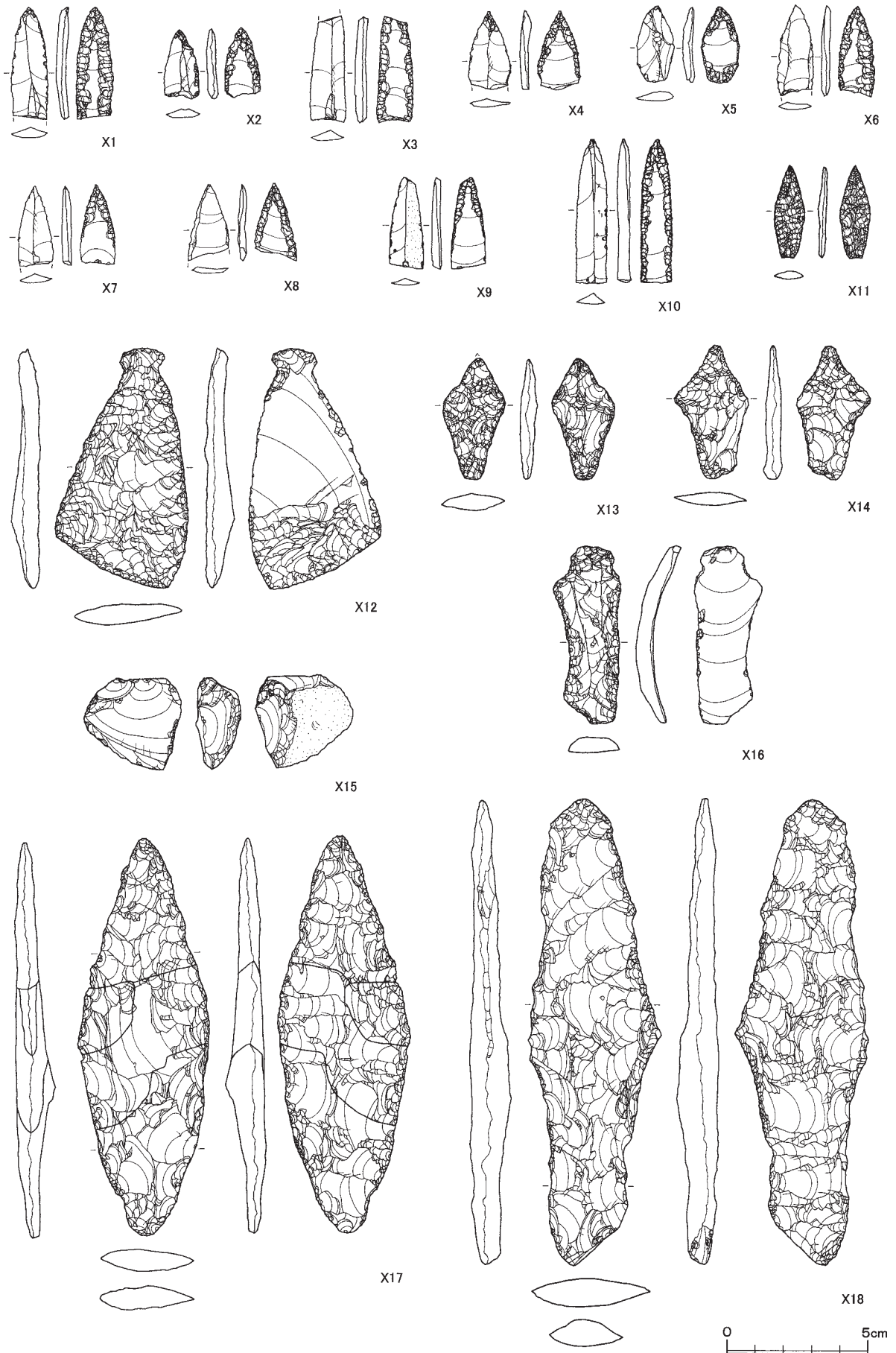
十勝三股・上阿寒礫層産原石と青森県産原石との区別:K/Si、Fe/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Sr/Rb、Y/Rb、Ti/Fe、Si/Feの新元素比による十勝三股、上阿寒礫層、鷹森山、大釈迦、戸門第1群のみでホテリングのT2乗検定を行う。この検定で分析でされた遺物は十勝産原石と上阿寒礫層産原石に一致し必要条件を満たし、十分条件として青森県産原石で無いことを証明した。表1に掲載している青森県産原石群を除く他の原石群に一致しないという十分条件は従来元素比によるホテリングのT2乗検定で証明されているため、新元素比と組み合わせて総合的に判断し十勝産または上阿寒礫層産原石が使用されていると判定した。上阿寒礫層産は円礫で最大約3.5cmである。遺物が3.5cm以上であれば十勝産と言える。

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

表V-7-3 鶴居村下幌呂1遺跡出土黒曜石遺物産地分析結果

第3回								
分析番号	番号	遺構／発掘区	層位	遺物番号	器種	ホテリングのT2検定結果 (%)	判定	備考
111029	SMH1-X41	H-8	覆土	3	二次加工ある石刃	所山 (98%)、常呂川第4群 (38%)、KSI遺物群 (8%)	所山	
111030	SMH1-X42	N19	IV	14	二次加工ある石刃	所山 (99.7%)、常呂川第4群 (12%)、KSI遺物群 (2%)、美蔓第1群 (0.1%)	所山	
111031	SMH1-X43	N23	V	30	スクレイパー	所山 (84%)、常呂川第4群 (16%)、KSI遺物群 (5%)	所山	
111032	SMH1-X44	O23	IV	32	彫器	所山 (40%)、常呂川第4群 (8%)、KSI遺物群 (1%)	所山	
111033	SMH1-X45	K24	IV	7	石刃核	所山 (73%)、常呂川第4群 (53%)、KSI遺物群 (8%)	露頭・所山	角礫

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。



図V-3 黒曜石製遺物産地分析試料(1)

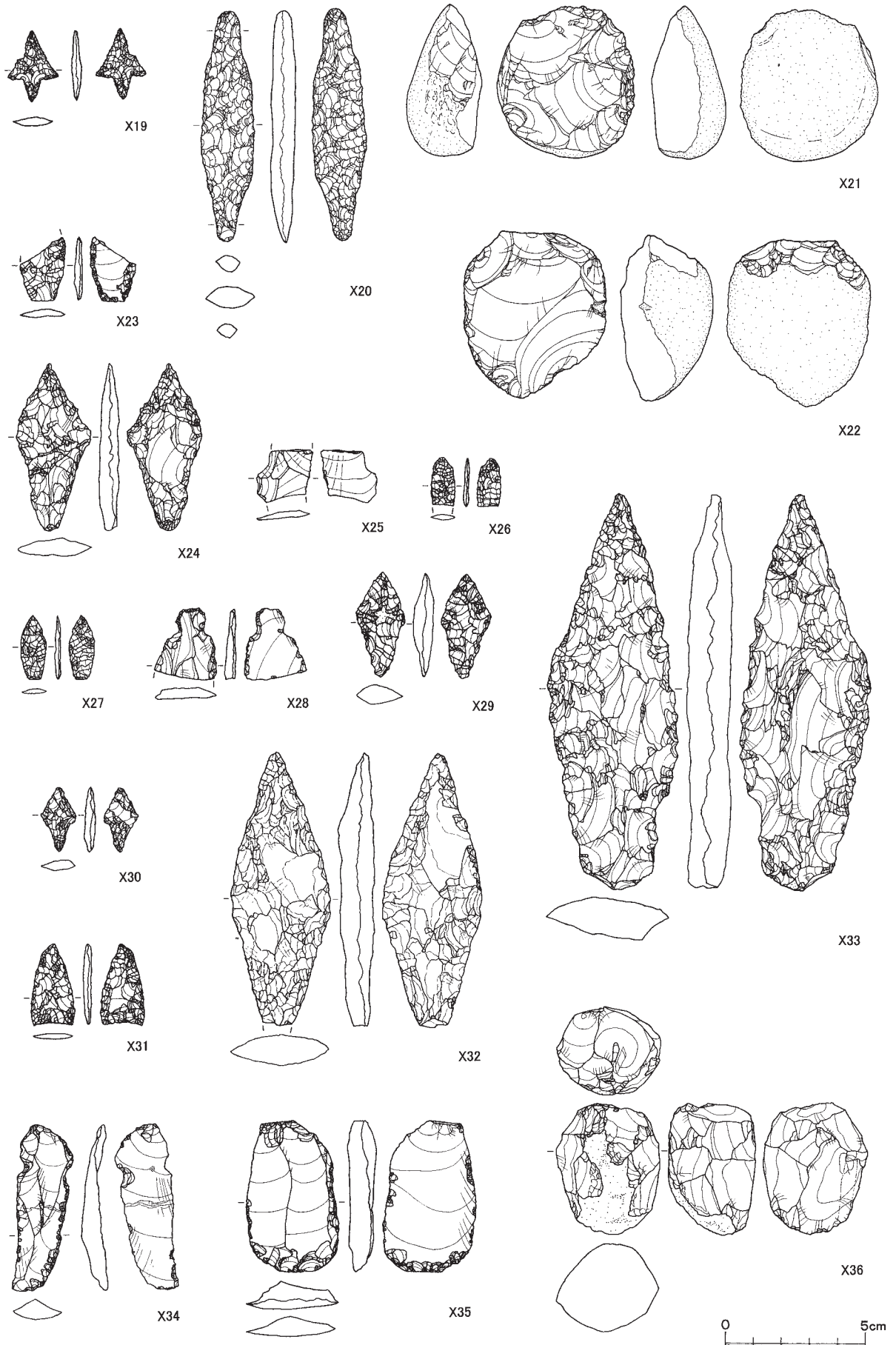


图 V - 4 黑曜石製遺物產地分析試料(2)

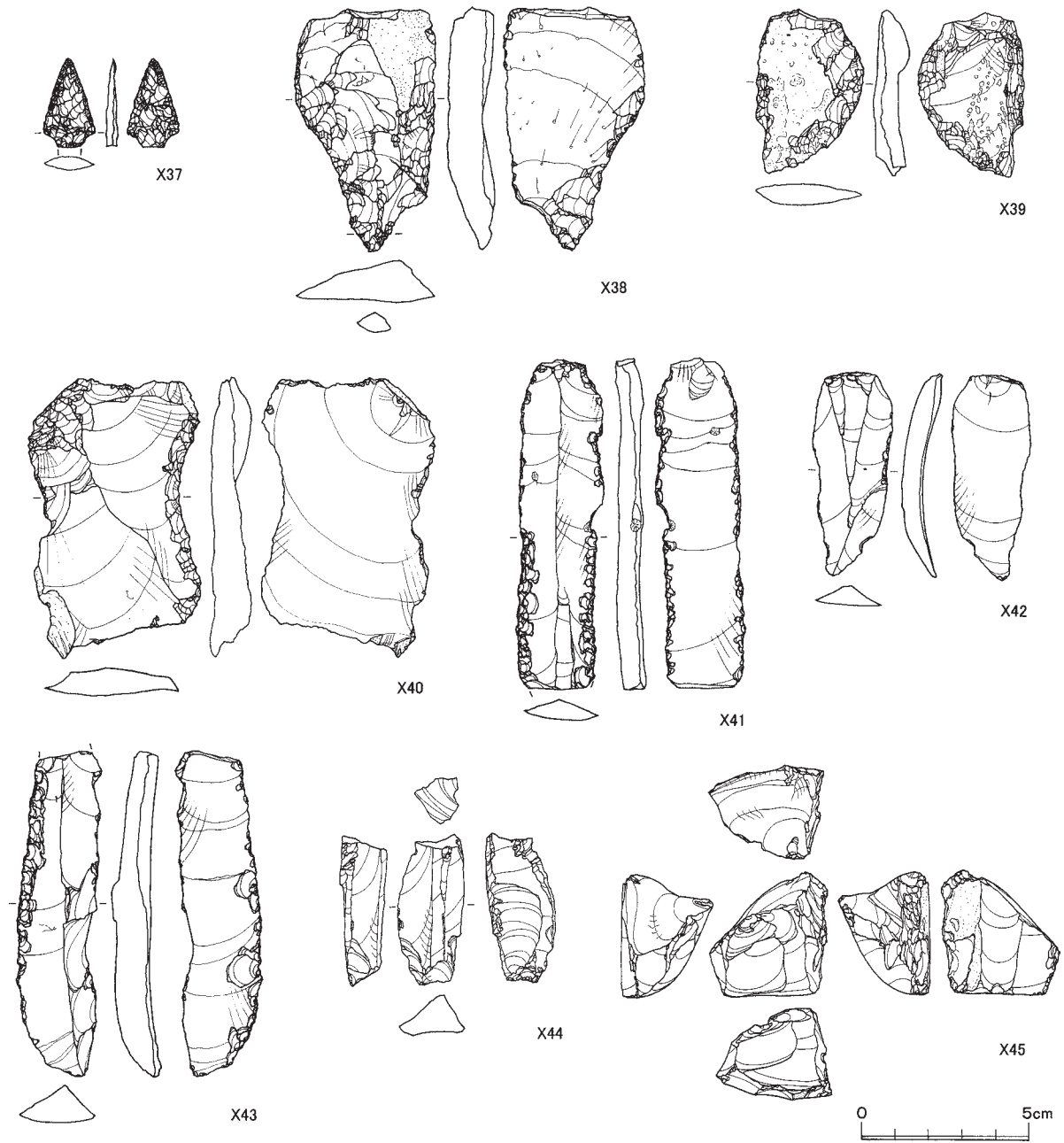


図 V - 5 黒曜石製遺物産地分析試料(3)

3. 鶴居村下幌呂 1 遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、鶴居村下幌呂 1 遺跡より出土した炭化材90点である。

3. 方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柎目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

表V-8・9に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ハンノキ属ハンノキ節 *Alnus sect. Gymnothyrsus* カバノキ科 写真1

横断面：小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハンノキ属ハンノキ節に同定される。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

クマシデ属 *Carpinus* カバノキ科 写真2

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向の帯状に配列する放射孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本ぐらいまでで、1本1本の間隔が広い。放射組織はほとんど同性であるが、上下の縁辺部のみ、ときおり方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は、ほぼ同性で1～2細胞幅である。

以上の形質よりクマシデ属に同定される。クマシデ属には、クマシデ、サワシバなどがあり落葉の高木または大型の低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真3・4・5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

ニレ属 *Ulmus* ニレ科 写真6

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外的小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の形質よりニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

ナシ亜科 *Subfam. Maloideae* バラ科 写真7

横断面：小型の道管が、単独あるいは数個不規則に複合して、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で、1～3細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりナシ亜科に同定される。ナシ亜科には、サンザシ属、ザイフリボク属、ナナカマド属、ビワ属、カナメモチ属などがある。

ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. ユキノシタ科8

横断面：小型でやや角張った道管が、単独あるいは2個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く40本を超えるものが見られる。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型であり、2細胞幅で6細胞高ぐらいまでの多列部と、多列部ほどの高さを持つ数個の直立細胞からなる。

以上の形質よりノリウツギに同定される。ノリウツギは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木または低木で、高さ5m、径15cmに達する。材は堅く、杖、楊子、木釘などに用いられる。

トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 写真9

横断面：年輪のはじめに、大型の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまると厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモ、シマトネリコなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

環孔材 ring-porous wood

横断面：部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。なお本試料は非常に小片で、広範囲の観察が困難であったことから、環孔材の同定にとどめる。

広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管が存在する。

接線断面：放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。なお本試料は保存状態が悪く、変形が著しいため広範囲ないし微細な観察が困難であったことから、広葉樹の同定にとどめる。

5. 所見

同定の結果、鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材は、コナラ属コナラ節69点、トネリコ属8点、ハンノキ属ハンノキ節4点、ノリウツギ2点、クマシデ属1点、ニレ属1点、ナシ亜科1点、環孔材3点、広葉樹1点であった。

最も多かったコナラ属コナラ節は、温帯を中心に広く分布する落葉高木で、日当たりの良い山野に生育する。ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素やカシワ、二次林要素でもあるコナラなどが含まれる。木材は強靱で弾力に富む。トネリコ属、ハンノキ属ハンノキ節、ノリウツギ、クマシデ属、ニレ属、ナシ亜科も温帯を中心に広く分布する広葉樹であり、トネリコ属は沢治いなどの湿原や水湿のある低地に生育し、ときには湿地林を形成する。落葉高木で、木材は概して強靱で堅硬な材である。ハンノキ属ハンノキ節は落葉の低木から高木であり、沢治いなどの湿原や水湿のある低地に生育し、ときには湿地林を形成する。強さ中庸の材である。ノリウツギは山地や平原に生育する落葉の小高木または低木であり、堅い材である。クマシデ属は山地、谷沿いなどに生育する落葉の高木または大型の低木であり、強さ中庸の材である。ニレ属は落葉高木であり、そのうちハルニレとオヒョウは山地に、アキニレは水辺等に生育する。木材はハルニレが重硬で、オヒョウは強さ中庸で、アキニレはあまり強い材とは言えない。ナシ亜科にはアズキナシ、ナナカマドなどの落葉高木が含まれ、山地等に生育する。木材は概してやや重硬な材である。

以上、鶴居村下幌呂 1 遺跡の炭化材は、コナラ属コナラ節が極めて多い特徴を有する。いずれの樹種も温帯に広く分布する樹種であり、当時遺跡周辺に生育していたか近隣地域よりからもたらされたと推定される。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p. 20-48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞. 木材の構造、文永堂出版、p. 49-100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p. 296
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第 1 号、植生史研究会、p. 242

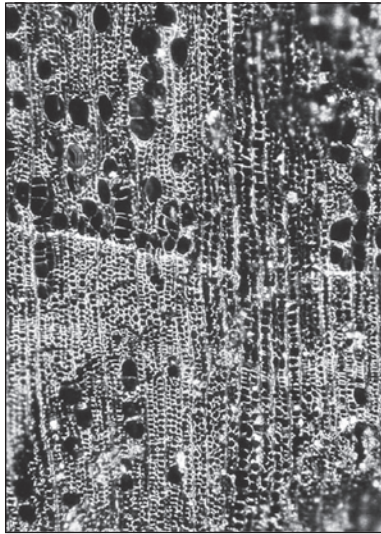
表 V-8 鶴居村下幌呂 1 遺跡における樹種同定結果(1)

番号	種別	遺構	層位	遺物 番号	結果 (学名/和名)
C 001	炭化材	H-12	覆土 5	炭 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 002	炭化材	H-12	覆土 5	炭 3	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C 003	炭化材	H-12	覆土 5	炭 4	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C 004	炭化材	H-12	覆土 5	炭 5	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 005	炭化材	H-12	覆土 5	炭 7	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C 006	炭化材	H-12	覆土 5	炭 8	<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb. et Zucc. ノリウツギ
C 007	炭化材	H-14	HM 2	炭 4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 008	炭化材	H-14	HM 2	炭 5	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 009	炭化材	H-14	HM 2	炭 7	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 010	炭化材	H-14	HM 2	炭 8	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 011	炭化材	H-14	HM 2	炭10	ring-popous wood 環孔材
C 012	炭化材	H-14	HM 2	炭13	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 013	炭化材	H-14	HM 2	炭14	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 014	炭化材	H-14	HM 2	炭15	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 015	炭化材	H-14	HM 2	炭18	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 016	炭化材	H-14	HM 2	炭19	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i> ハンノキ属ハンノキ節
C 017	炭化材	H-14	HM 2	炭20	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C 018	炭化材	H-14	HM 2	炭21	broad-leaved tree 広葉樹
C 019	炭化材	H-14	HM 2	炭22	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 020	炭化材	H-14	HM 2	炭23	ring-popous wood 環孔材
C 021	炭化材	H-14	HM 2	炭26	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C 022	炭化材	H-14	HM 2	炭27	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i> ハンノキ属ハンノキ節
C 023	炭化材	H-14	HM 2	炭29	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 024	炭化材	H-14	HM 2	炭30	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 025	炭化材	H-14	HM 2	炭32	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 026	炭化材	H-14	HM 2	炭33	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 027	炭化材	H-14	HM 2	炭34	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 028	炭化材	H-14	HM 2	炭36	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 029	炭化材	H-14	HM 2	炭37	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 030	炭化材	H-14	HM 2	炭38	<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb. et Zucc. ノリウツギ
C 031	炭化材	H-14	HM 2	炭42	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 032	炭化材	H-14	HM 2	炭44	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 033	炭化材	H-14	HM 2	炭45	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 034	炭化材	H-14	HM 2	炭46	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 035	炭化材	H-14	HM 2	炭49	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 036	炭化材	H-14	HM 2	炭50	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 037	炭化材	H-14	HM 2	炭52	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 038	炭化材	H-14	HM 2	炭53	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 039	炭化材	H-14	HM 2	炭56	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 040	炭化材	H-14	HM 2	炭57	ring-popous wood 環孔材
C 041	炭化材	H-14	HM 2	炭63	<i>Carpinus</i> クマシデ属
C 042	炭化材	H-14	HM 2	炭65	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 043	炭化材	H-14	HM 2	炭67	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 044	炭化材	H-14	HM 2	炭70	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 045	炭化材	H-14	HM 2	炭72	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C 046	炭化材	H-14	HM 2	炭73	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節

表 V-9 鶴居村下幌呂 1 遺跡における樹種同定結果(2)

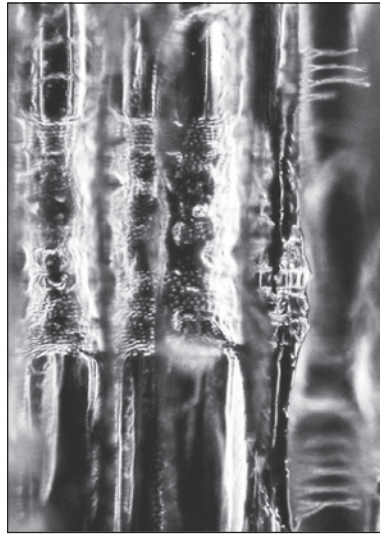
番号	種別	遺構	層位	遺物 番号	結果 (学名/和名)
C047	炭化材	H-14	HM 2	炭74	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C048	炭化材	H-14	HM 2	炭77	Subfam. <i>Maloideae</i> ナシ亜科
C049	炭化材	H-14	HM 2	炭83	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C050	炭化材	H-14	HM 2	炭84	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i> ハンノキ属ハンノキ節
C051	炭化材	H-14	HM 2	炭87	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C052	炭化材	H-14	HM 2	炭88	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C053	炭化材	H-14	HM 2	炭92	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C054	炭化材	H-14	HM 2	炭96	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C055	炭化材	H-14	HM 2	炭99	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C056	炭化材	H-14	HM 2	炭100	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C057	炭化材	H-15	床面直上	炭 4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C058	炭化材	H-15	床面直上	炭 6	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C059	炭化材	H-15	HM 2	炭10	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C060	炭化材	H-15	HM 2	炭13	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C061	炭化材	H-15	HM 2	炭14	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C062	炭化材	H-15	HM 2	炭15	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C063	炭化材	H-15	HM 2	炭17	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C064	炭化材	H-15	HM 2	炭19	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C065	炭化材	H-16	HM 2	炭 2	<i>Alnus</i> sect. <i>Gymnothyrsus</i> ハンノキ属ハンノキ節
C066	炭化材	H-16	HM 3	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C067	炭化材	H-18	床面直上	炭 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C068	炭化材	H-18	床面直上	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C069	炭化材	H-23	覆土	炭 2	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C070	炭化材	H-23	覆土	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C071	炭化材	H-23	覆土	炭 4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C072	炭化材	H-23	覆土	炭 5	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C073	炭化材	H-23	覆土	炭10	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C074	炭化材	H-23	覆土	炭13	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C075	炭化材	H-23	覆土	炭17	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C076	炭化材	H-26	HM	炭 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C077	炭化材	H-26	HM	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C078	炭化材	H-26	HM	炭 9	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C079	炭化材	H-26	HM	炭10	<i>Ulmus</i> ニレ属
C080	炭化材	H-26	HM	炭11	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C081	炭化材	H-26	HM	炭12	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C082	炭化材	H-26	HM	炭13	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C083	炭化材	H-26	HM	炭14	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C084	炭化材	H-27	床面直上	炭 2	<i>Fraxinus</i> トネリコ属
C085	炭化材	H-27	床面直上	炭 4	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C086	炭化材	H-30	覆土	炭 1	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C087	炭化材	H-30	覆土	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C088	炭化材	H-30	覆土	炭 6	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C089	炭化材	P-34	覆土	炭 3	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節
C090	炭化材	P-34	覆土	炭 5	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> コナラ属コナラ節

図版 1. 鶴居村下幌呂 1 遺跡の炭化材 I



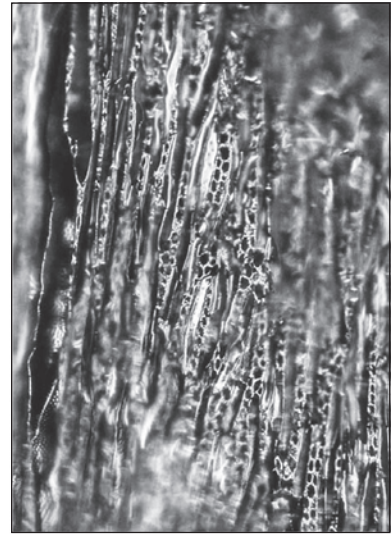
横断面 ————— : 0.4mm

1. C016 炭化材 H-14 HM 2

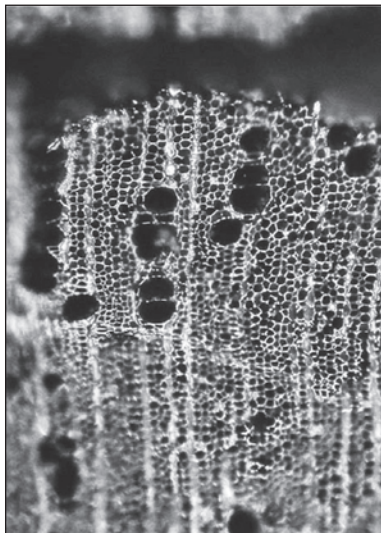


放射断面 ————— : 0.1mm

炭19 ハンノキ属ハンノキ節

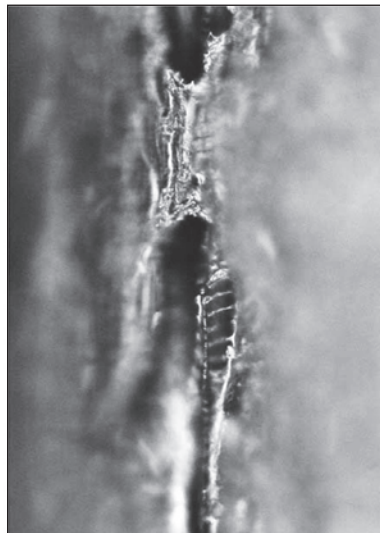


接線断面 ————— : 0.2mm



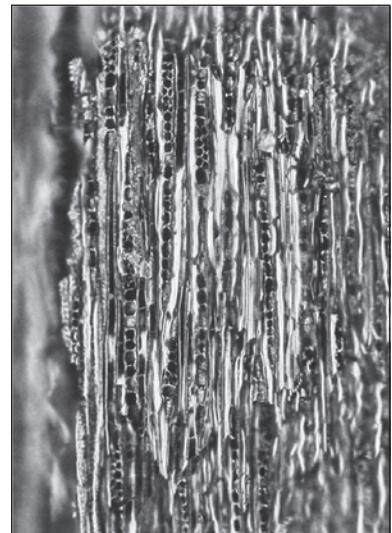
横断面 ————— : 0.2mm

2. C041 炭化材 H-14 HM 2

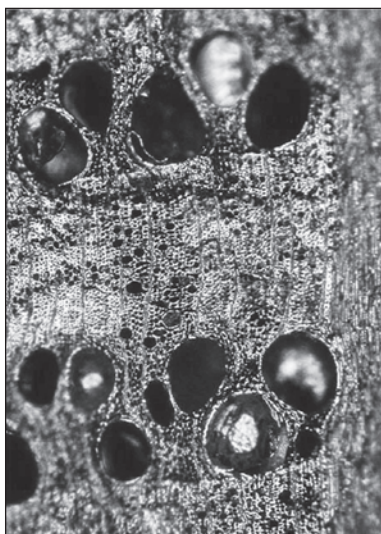


放射断面 ————— : 0.1mm

炭63 クマシデ属

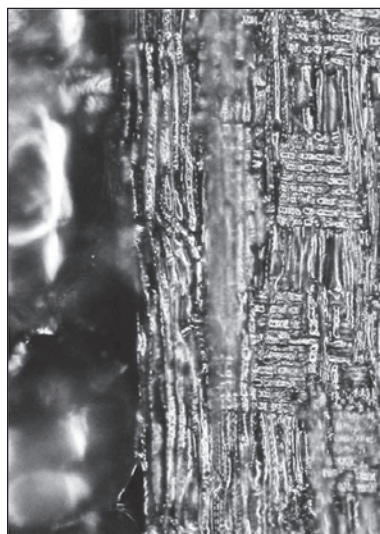


接線断面 ————— : 0.2mm



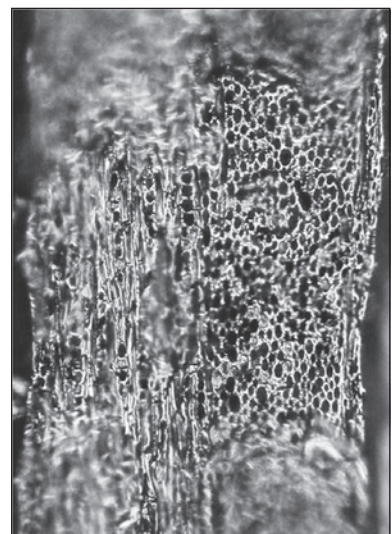
横断面 ————— : 0.4mm

3. C015 炭化材 H-14 HM 2



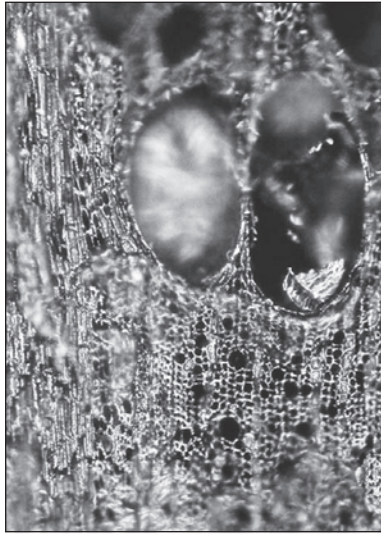
放射断面 ————— : 0.2mm

炭18 コナラ属コナラ節



接線断面 ————— : 0.2mm

図版2. 鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材 II



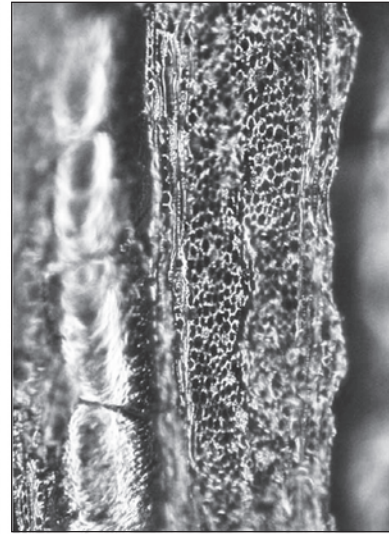
横断面 ————— : 0.2mm

4. C042 炭化材 H-14 HM 2

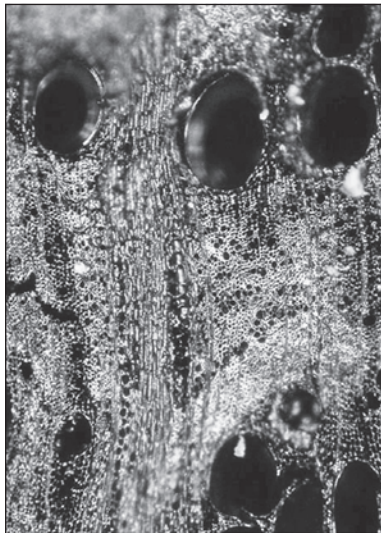


放射断面 ————— : 0.2mm

炭65 コナラ属コナラ節



接線断面 ————— : 0.2mm

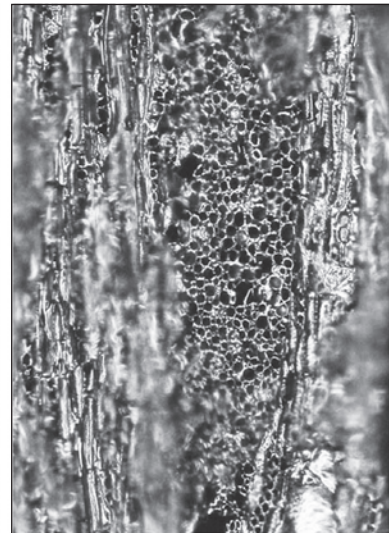


横断面 ————— : 0.4mm

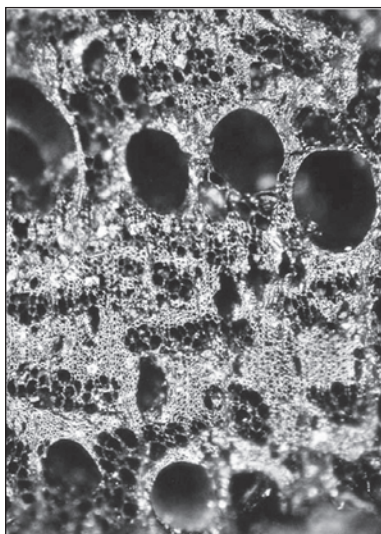
5. C067 炭化材 H-18 床面直上 炭1 コナラ属コナラ節



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

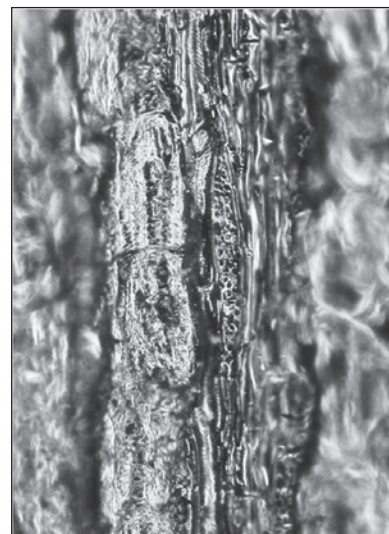


横断面 ————— : 0.4mm

6. C079 炭化材 H-26 HM 炭10 ニレ属

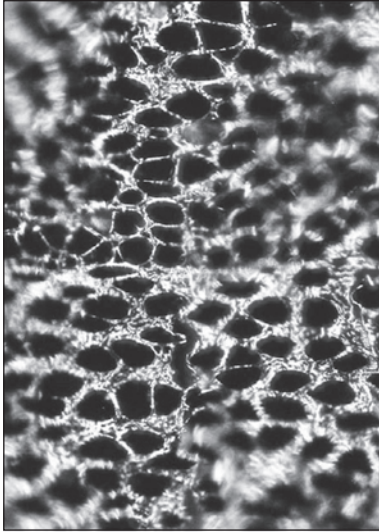


放射断面 ————— : 0.2mm



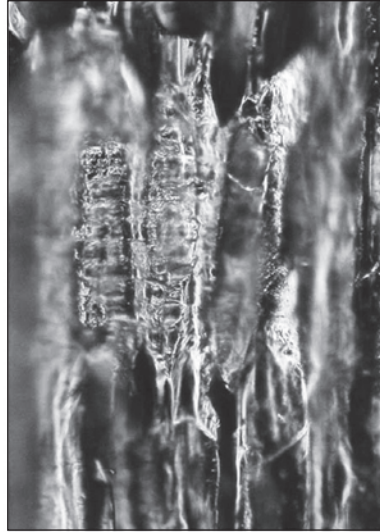
接線断面 ————— : 0.2mm

図版3. 鶴居村下幌呂1遺跡の炭化材 Ⅲ



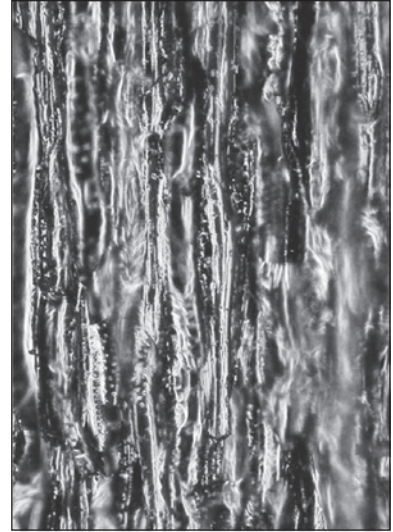
横断面 ————— : 0.2mm

7. C048 炭化材 H-14 HM2

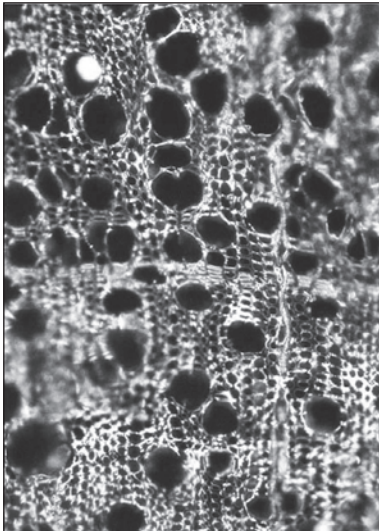


放射断面 ————— : 0.1mm

炭77 ナシ亜科



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm

8. C006 炭化材 H-12 覆土5

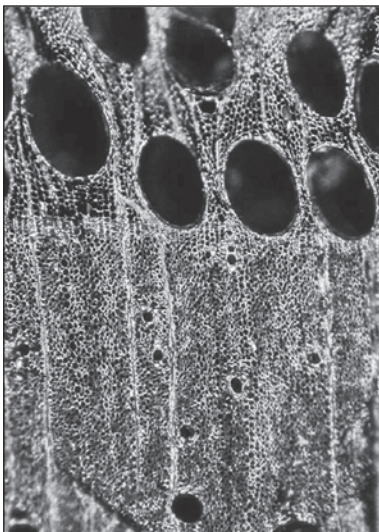


放射断面 ————— : 0.1mm

炭8 ノリウツギ

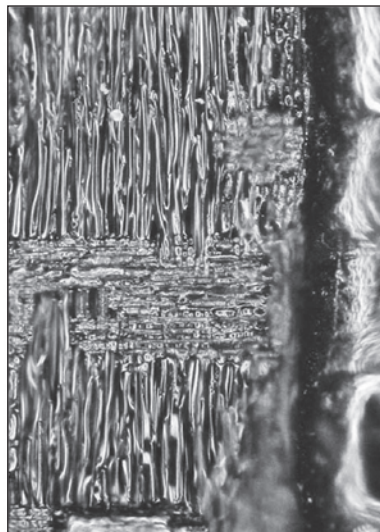


接線断面 ————— : 0.2mm



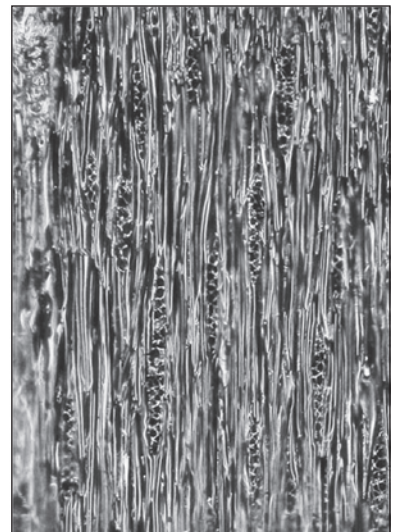
横断面 ————— : 0.4mm

9. C002 炭化材 H-12 覆土5

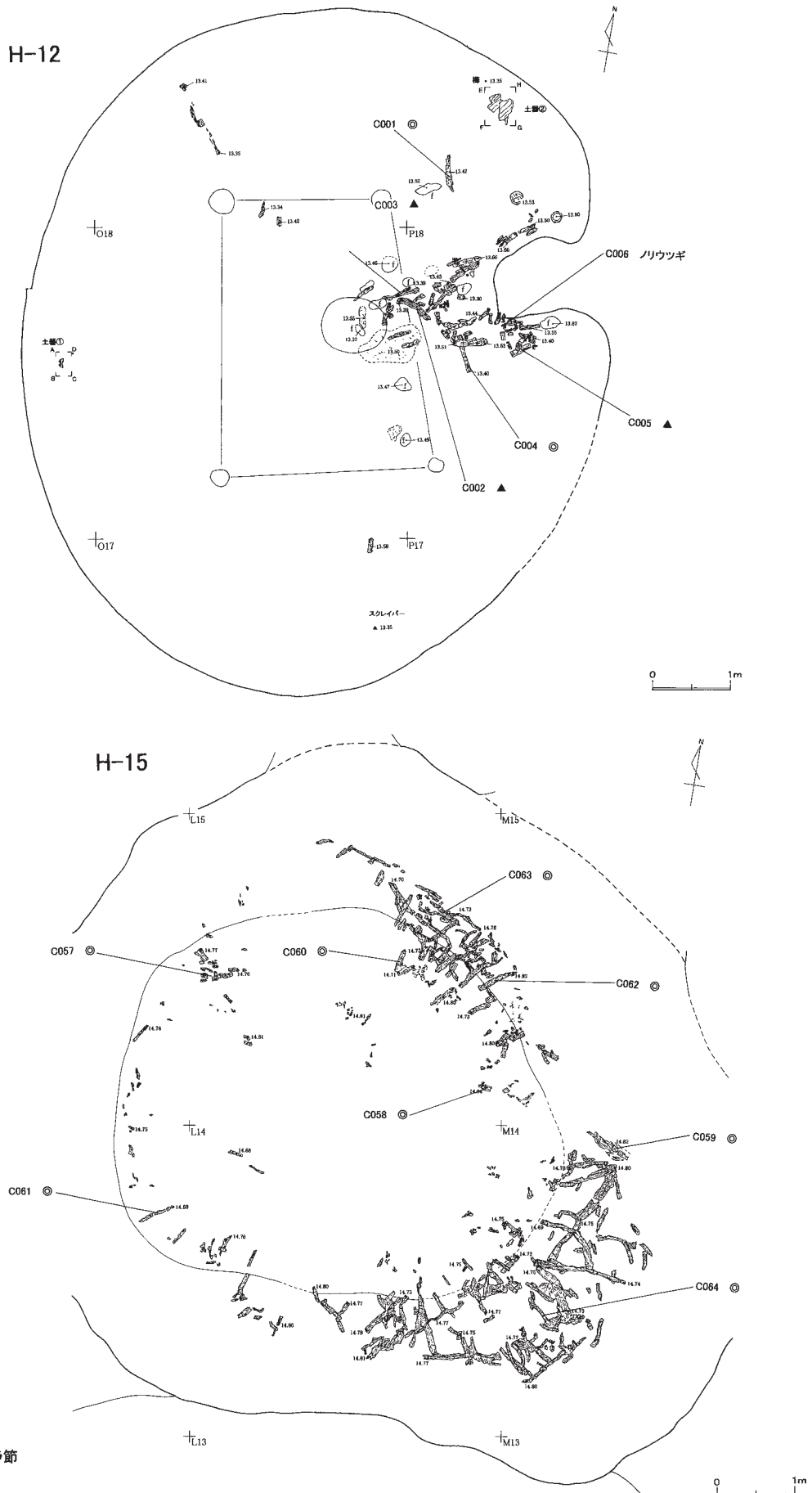


放射断面 ————— : 0.2mm

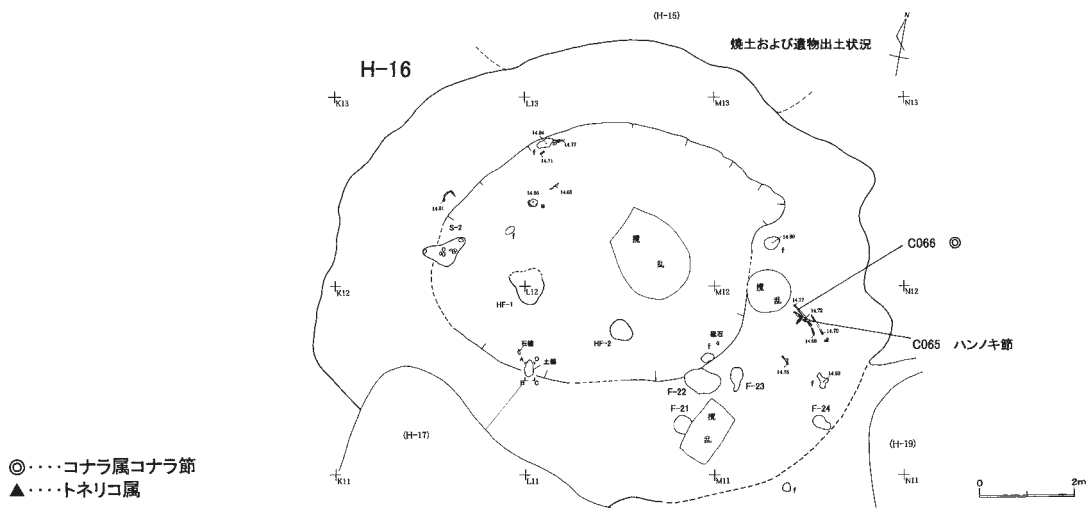
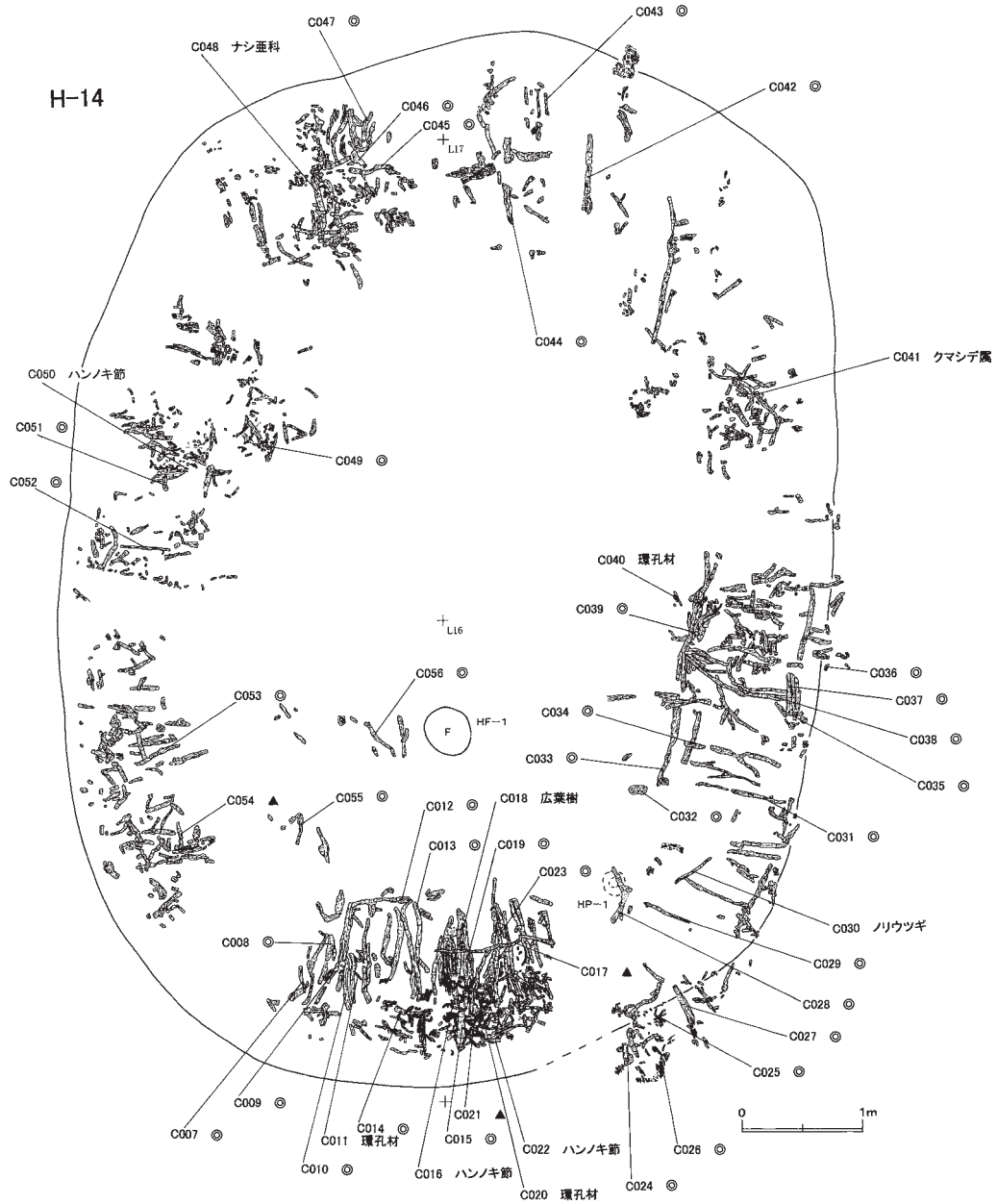
炭3 トネリコ属



接線断面 ————— : 0.2mm



図V-6 試料採取位置と樹種同定結果(1)



◎.....コナラ属コナラ節
▲.....トネリコ属

図V-7 試料採取位置と樹種同定結果(2)

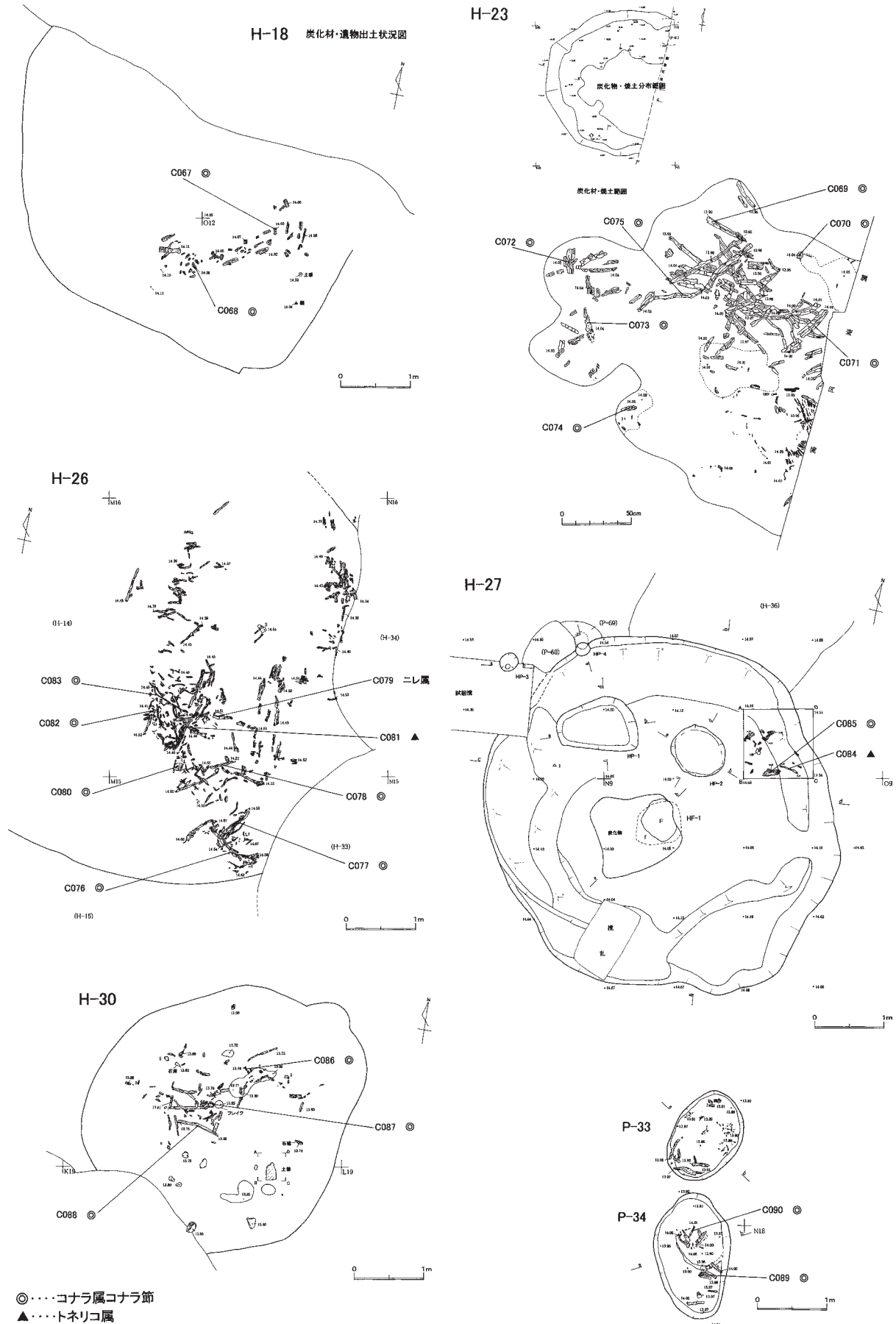


図 V - 8 試料採取位置と樹種同定結果 (3)

4. 下幌呂 1 遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

下幌呂 1 遺跡は阿寒郡鶴居村字幌呂原野に所在し、幌呂川右岸の河岸段丘上の平坦地に立地する、縄文時代早期～晩期にかけての遺跡である。下幌呂 1 遺跡では竪穴住居跡などが検出され、住居跡内より炭化材が出土した。ここではこれらの炭化材の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡である H-2 で 5 点、H-3 で 20 点、縄文時代後期中葉の竪穴住居跡である H-11 で 5 点の、計 30 点の出土炭化材である。確認できる試料については、樹種同定を行う前に割れ方と残存半径、残存年輪数の記録と、最外部が残る炭化材では直径の復元を行った。直径の復元は、1 cm 刻みの同心円に試料の最外面を当てて直径を求めた。残存半径については試料で残存している半径を直接計測し、残存年輪数については残存半径内の年輪数を計測した。また C094 の樹皮は、形状観察により樹皮巻製品の可能性があるかと判断されたため、別途全形写真を撮影した。

炭化材の樹種同定は、横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柁目) についてカミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台に両面テープで貼り付けた。その後イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡 (KEYENCE 社製 VE-9800) にて検鏡および写真撮影を行った。なお、同定試料の残りは北海道埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定の結果、広葉樹のハコヤナギ属とコナラ属コナラ節 (以下コナラ節と呼ぶ)、ニレ属、ニシキギ属、トネリコ属シオジ節 (以下シオジ節と呼ぶ) の 5 分類群が産出した。このほかに樹種不明の散孔材と樹皮がみられた。

コナラ節が最も多く 17 点で、シオジ節が 5 点、ハコヤナギ属が 3 点、ニレ属が 2 点、ニシキギ属と散孔材、樹皮が各 1 点であった。

年輪の計測結果では、残存直径で 1 cm 以上の試料をみると、竪穴住居跡である H-3 で出土した C107 のシオジ節で残存半径 1.5 cm 内に 4 年輪がみられるなど年輪幅が比較的広い試料もみられたが、大半の試料は残存半径 1.0 cm 内に 17 年輪がみられた C098 のコナラ節のように、年輪幅が狭い試料が多かった。また直径の復元では、確認できた試料はいずれも 1～3 cm に収まった。同定結果を表 V-10 に、一覧を表 V-12 に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、各樹種の走査型電子顕微鏡写真と樹皮巻製品? の全形写真を示す。

(1) ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科 図版 1 1a-1c (C091)

小型の道管が単独ないし 2～3 個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、道管放射組織間壁孔は大きく密で蜂の巣状となる。放射組織は同性で単列である。

表 V-10 下幌呂 1 遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種	時代 遺構	縄文時代 ~後期中葉			合計
		中期末 H-2	後期初頭 H-3	後期中葉 H-11	
ハコヤナギ属	1	2			3
コナラ属コナラ節	1	12		4	17
ニレ属			2		2
ニシキギ属	1				1
トネリコ属シオジ節	1	3		1	5
散孔材			1		1
樹皮	1				1
	合計	5	20	5	30

ハコヤナギ属には、ドロノキやヤマナラシなどがあり、代表的なドロノキは本州北中部、北海道の河岸の肥沃地または河床に多く生育する落葉高木の広葉樹である。材は軽軟で切削加工等は容易である。

(2) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 1 2 a - 2 c (C097)、3 a (C092)、4 a (C115)、5 a (C119)

年輪の始めに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた、角張って壁が薄い道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと同放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重くて強靱で切削加工はやや難しい。

(3) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版 2 6 a - 6 c (C111)

年輪の始めに大型の道管が1~3列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合して接線状~斜線状に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1~6列となる

ニレ属にはハルニレやオヒョウなどがあり、温帯に分布する落葉高木の広葉樹である。ハルニレの材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(4) ニシキギ属 *Euonymus* ニシキギ科 図版 2 7 a - 7 c (C095)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列となる。

ニシキギ属にはニシキギやマユミなどがあり、代表的なマユミは北海道から九州までの山地にみられる落葉高木または小高木の広葉樹である。材は強靱で韌性がある。

(5) トネリコ属シオジ節 *Fraxinus* sect. *Fraxinuster* モクセイ科 図版 2 8 a - 8 c (C093)、図版 3 9 a - 9 c (C116)

年輪の始めに大型の道管が2~3列並び、晩材部では径を減じた壁の厚い道管が単独または2個放射方向に複合して散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1~2列となる。

トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがある。現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に分布し、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の、河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する落葉高木の広葉樹である。材の性質はいずれも中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等も容易である。

(6) 散孔材 Diffuse-pored wood 表 V-11 下幌呂 1 遺跡出土炭化材の樹種と割れ方

図版 3 10 a - 10 c (C099)

小型の道管が単独ないし2~3個複合してやや密に散在する散孔材であるが、2年輪界をまたぐ試料が得られず、年輪界は確認できなかった。道管は単穿孔を有する。放射組織は平伏、直立、方形細胞が混在する異性で、1~3列となる。

(7) 樹皮 Bark 図版 3 11 a · 12

樹種	遺構	H-2		H-3		H-11		合計
		半割	みかん割り 樹皮	半割	みかん割り 芯持丸木	みかん割り	みかん割り	
ハコヤナギ属			1		1	1		3
コナラ属コナラ節			1		1	6	5	4
ニレ属					1	1		2
ニシキギ属		1						1
トネリコ属シオジ節			1	1		2	1	5
散孔材						1		1
樹皮				1				1
	合計	1	3	1	1	8	10	5
								30

(C094) 師細胞、放射組織で構成される樹皮である。樹皮は対照標本が少なく、同定には至っていない。

4. 考察

遺構別では、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡であるH-2でハコヤナギ属とコナラ節、ニシキギ属、シオジ節、樹皮が各1点、H-3でコナラ節が12点、シオジ節が3点、ハコヤナギ属とニレ属が各2点、散孔材が1点産出した。縄文時代後期中葉の竪穴住居跡であるH-11では、コナラ節が4点とシオジ節が1点産出した。

これらの試料は、出土状況から竪穴住居跡の構築材であると考えられている。試料の割れ方の観察でも、板状や削り出し状の木製品と考えられるような木取りの試料はみられず、確認可能なものはほとんどが芯持丸木か半割、みかん割りのいずれかであり、建築材であると考えられた。〔表V-11〕。

H-2で出土したC094の樹皮は乾燥しているが未炭化であり、形状観察では建築材や燃料材ではなく、樹皮巻製品の可能性が高いと考えられる。

下幌呂1遺跡で産出したコナラ節とニレ属、ニシキギ属、シオジ節は重硬な樹種であり、ハコヤナギ属は軽軟で耐朽性に乏しい樹種である。下幌呂1遺跡では重硬な材が多く産出しており、建築用材に重硬な樹種を選択していた状況がうかがえる。

下幌呂1遺跡からは距離が離れるが、標津郡標津町に所在する伊茶仁チシネ第3竪穴群遺跡では縄文時代中期の竪穴住居跡出土炭化材の樹種同定

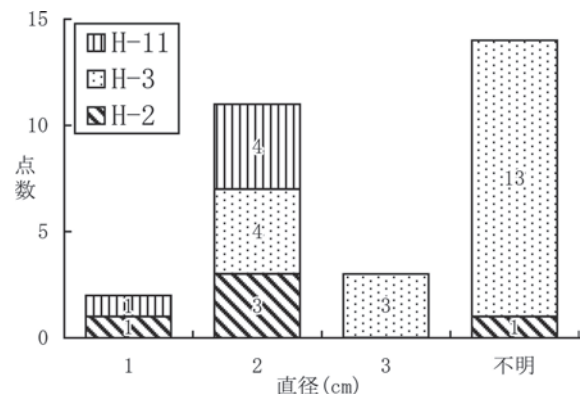
66点が行われ、トネリコ属が26点、広葉樹散孔材が16点、コナラ属が6点、ヤナギ属とハンノキ属、ニレ属が各4点、クルミ属が3点、針葉樹とシナノキ属、ササ属が各1点産出している（山田、1993）。下幌呂1遺跡ではトネリコ属はそれほど多く確認できなかったが、コナラ節やニレ属、トネリコ属が両遺跡共に産出しており、用材傾向は類似していた。

また下幌呂1遺跡では、最外部が確認できる試料を用いて直径の復元を行った。その結果、各住居跡とも直径2cmに復元できた炭化材が最も多くみられ、H-2とH-11ではそのほかに直径1cm、H-3では直径3cmの炭化材がみられた〔図V-9〕。確認できる試料ではいずれも直径1～3cm程度の材であった可能性が高く、復元が行えなかった試料でも大径木となりそうな破片はみられなかった。つまりほとんどの試料が枝材や細い幹材であり、それらを建築材の一部に利用していた可能性がある。また、1～3cm程度の枝材や幹材を、半割やみかん割り状に加工して建築材として利用するとは考えにくく、いずれの試料も元々の木取りは芯持丸木であった可能性が高い。

以上の事より、下幌呂1遺跡ではコナラ節やシオジ節などの重硬な樹種の1～3cm程度の枝材や細い幹材を芯持丸木のまま建築材の一部として利用していたことが確認できた。また樹種同定結果のみでは正確なことは言えないが、枝材や細い幹材を利用していたということは、遺跡周辺の森林に生育していた樹木を建築材として利用していた可能性があるといえる。

引用文献

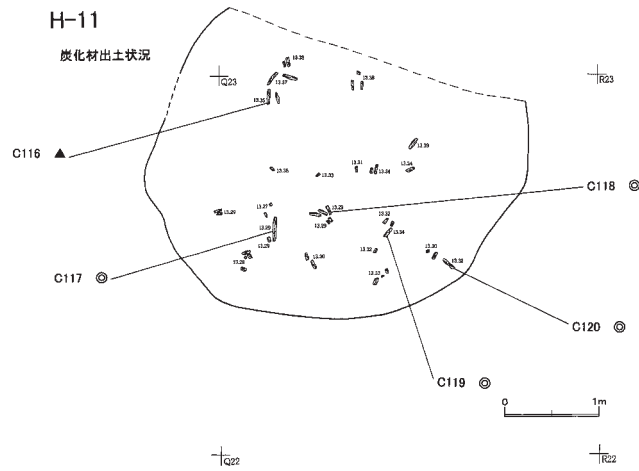
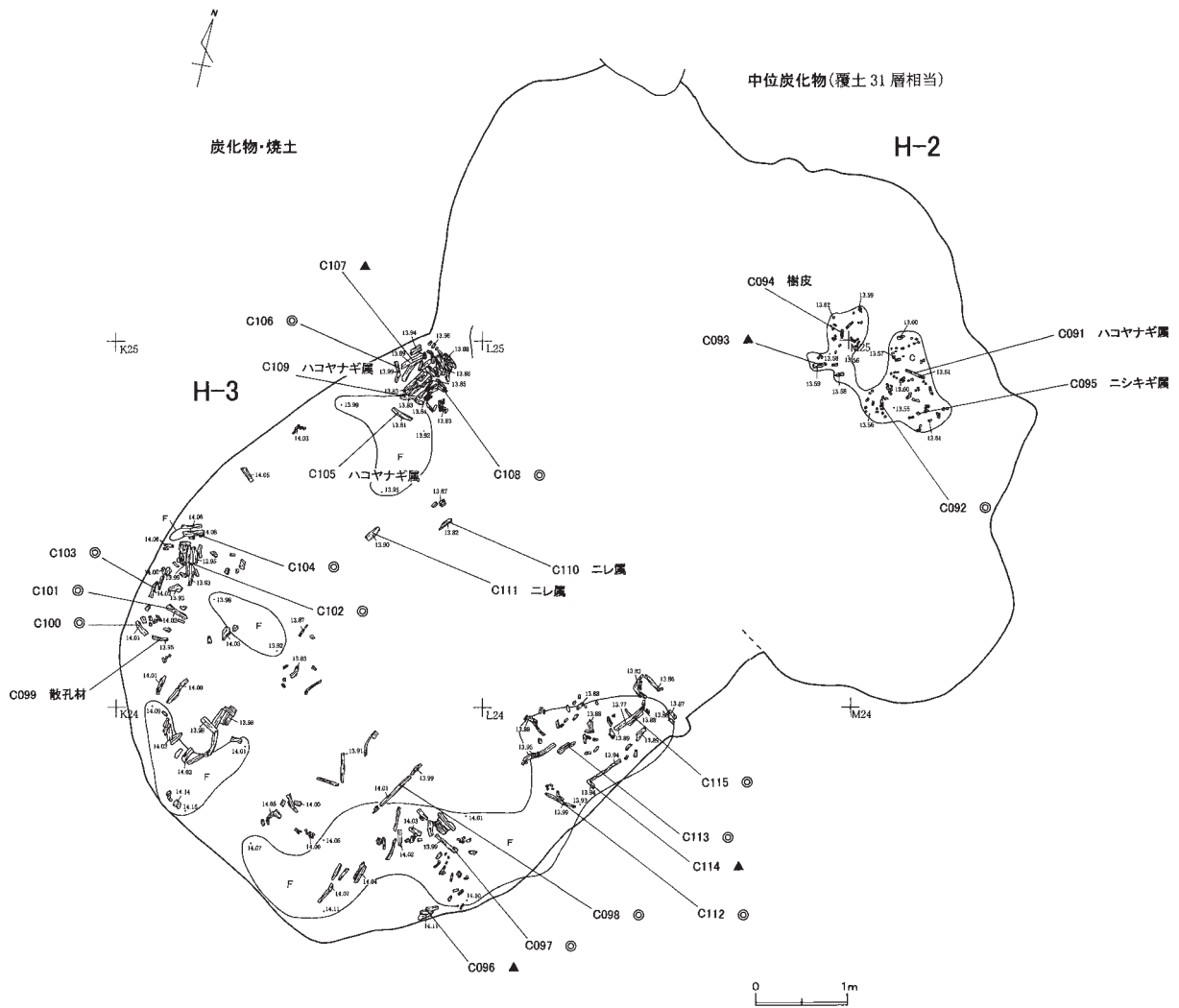
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史，242p、植生史研究 特別第1号。



図V-9 下幌呂1遺跡出土炭化材の復元直径

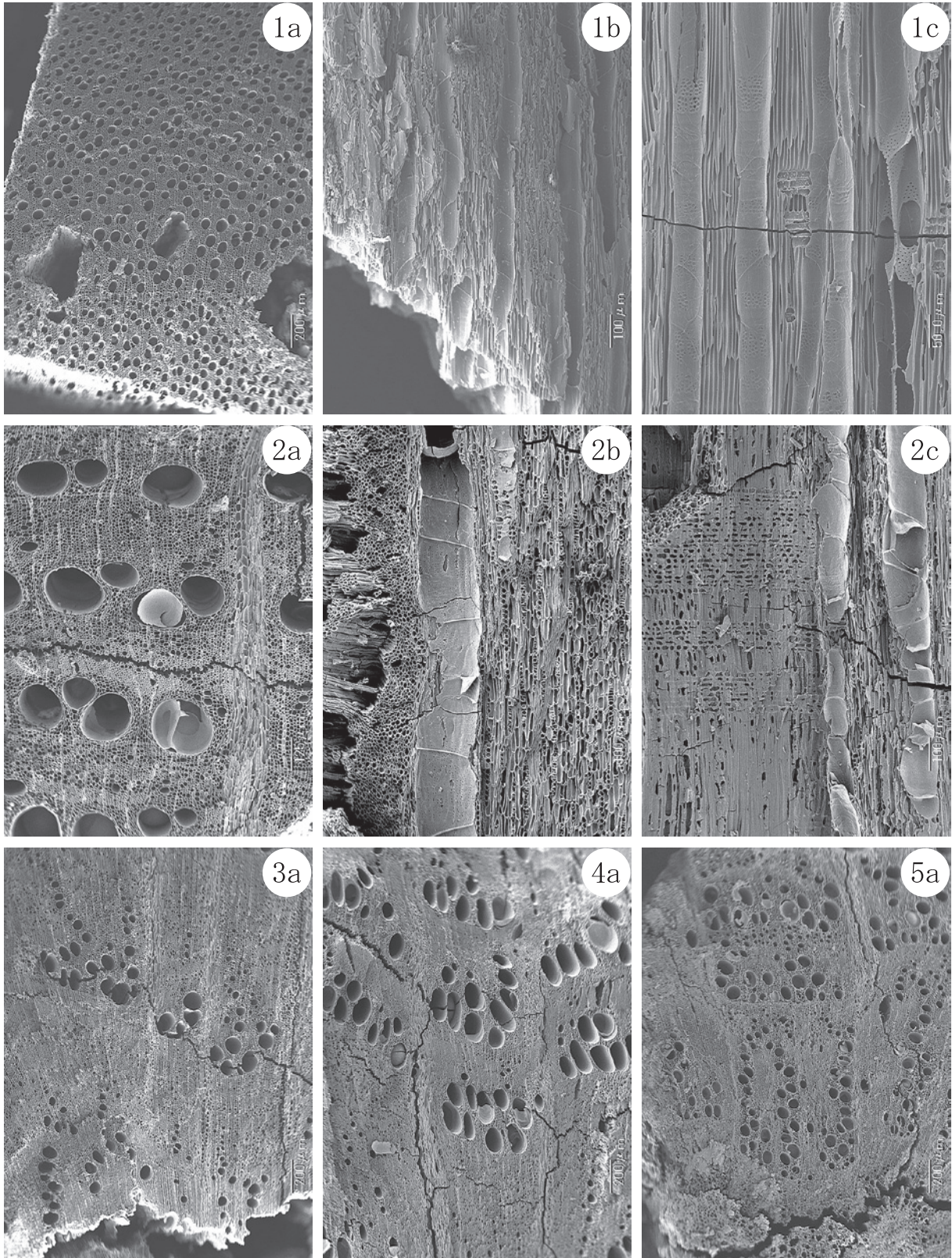
表 V-12 下幌呂 1 遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料番号	出土遺構	層位	遺物番号	樹種	割れ方	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	備考	時代
C091	H-2	覆土下位	2	ハコヤナギ属	みかん割り	1.3	5	2	最外面あり	縄文時代 中期末～ 後期初頭
C092			4	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.8	3	2	最外面あり	
C093			5	トネリコ属シオジ節	みかん割り	0.8	6	2	最外面あり	
C094			6	樹皮	樹皮	—	—	—	樹皮巻製品?	
C095			7	ニシキギ属	半割	1.0	15	1	最外面あり	
C096	H-3	覆土下位	2	トネリコ属シオジ節	割れ	—	—	—		
C097			3	コナラ属コナラ節	半割	0.9	9	2	最外面あり	
C098			5	コナラ属コナラ節	割れ	1.0	17	—		
C099			10	散孔材	割れ	—	—	—		
C100			11	コナラ属コナラ節	割れ	—	—	—		
C101			12	コナラ属コナラ節	割れ	—	—	—		
C102			13	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.9	9	2	最外面あり	
C103			14	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.4	3	—		
C104			15	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.8	4	2	最外面あり	
C105			16	ハコヤナギ属	割れ	—	—	—		
C106			17	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.9	4	2	最外面あり	
C107			18	トネリコ属シオジ節	芯持丸木	1.5	4	3	最外面あり	
C108			19	コナラ属コナラ節	割れ	—	—	—		
C109			20	ハコヤナギ属	みかん割り	0.9	2	—		
C110			21	ニレ属	割れ	—	—	—		
C111	22	ニレ属	みかん割り	1.3	5	—				
C112	25	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.6	9	3	最外面あり			
C113	26	コナラ属コナラ節	割れ	—	—	—				
C114	27	トネリコ属シオジ節	割れ	—	—	—				
C115	28	コナラ属コナラ節	みかん割り	1.3	6	3	最外面あり			
C116	H-11	床面直上	2	トネリコ属シオジ節	みかん割り	0.7	10	2	最外面あり	縄文時代 後期中葉
C117			4	コナラ属コナラ節	みかん割り	1.0	13	2	最外面あり	
C118			6	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.6	4	1	最外面あり	
C119			9	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.9	13	2	最外面あり	
C120			10	コナラ属コナラ節	みかん割り	0.6	10	2	最外面あり	



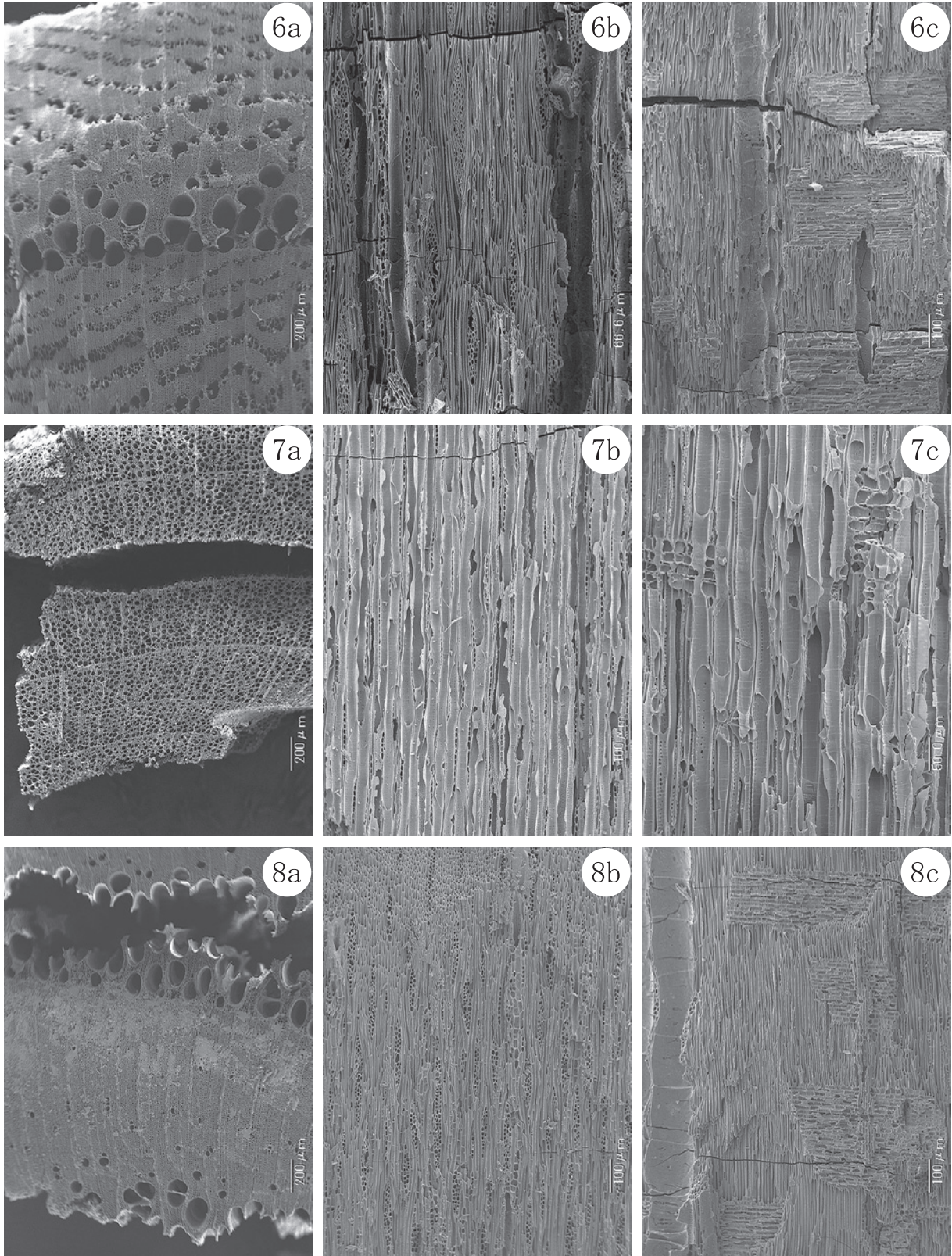
- ◎・・・コナラ属コナラ節
- ▲・・・トネリコ属シオジ節

図V-10 試料採取位置と樹種同定結果(4)



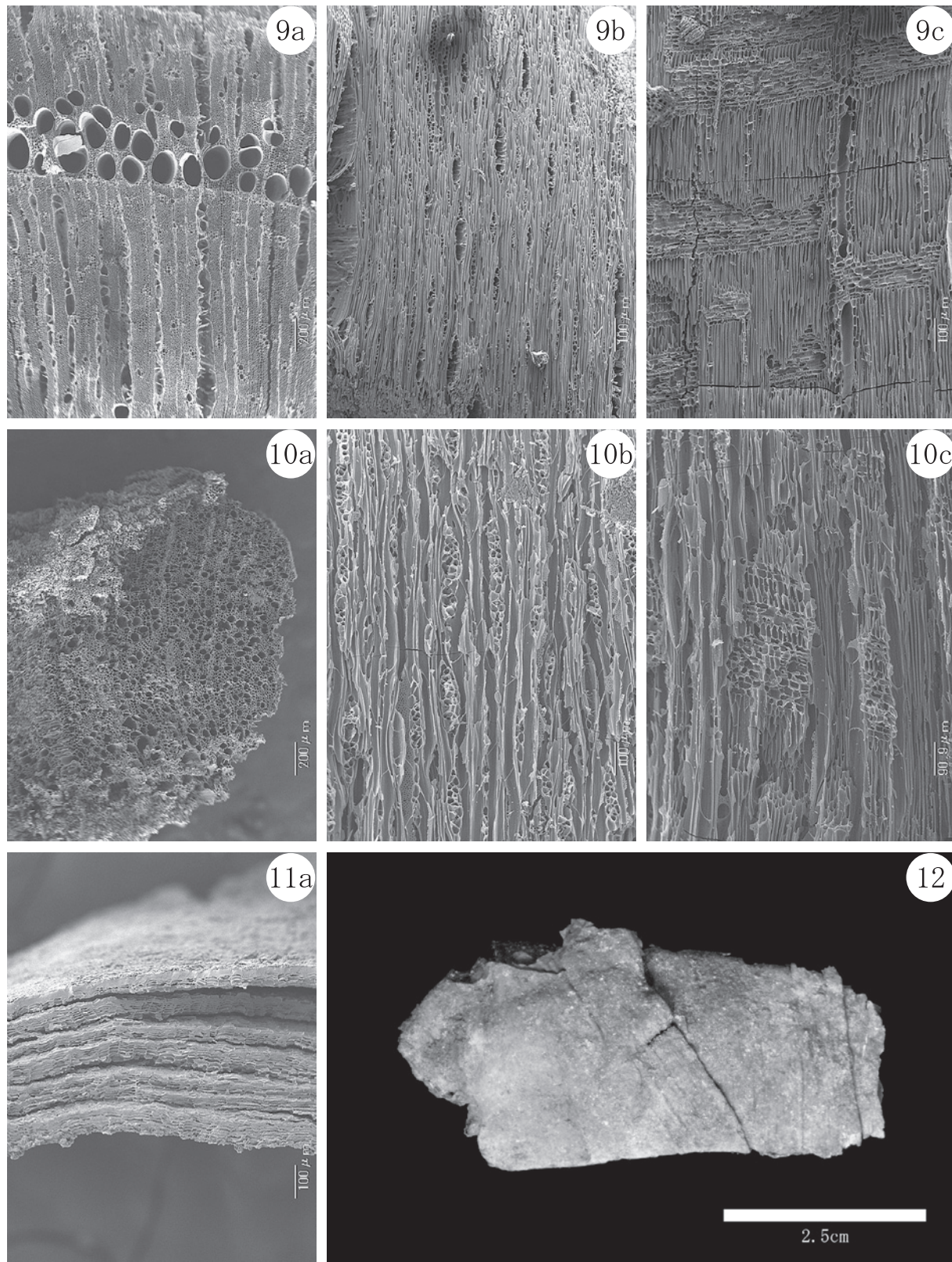
図版1 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1 a - 1 c. ハコヤナギ属(C091) 2 a - 2 c. コナラ属コナラ節(C097) 3 a. コナラ属コナラ節(C092)
4 a. コナラ属コナラ節(C115) 5 a. コナラ属コナラ節(C119)
a : 横断面・b : 接線断面・c : 放射断面



図版2 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

6 a-6 c. ニレ属(C111) 7 a-7 c. ニシキギ属(C095) 8 a-8 c. トネリコ属シオジ節(C093)
 a: 横断面・b: 接線断面・c: 放射断面



図版3 下幌呂1遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(3)・樹皮巻製品?全形写真

9 a - 9 c. トネリコ属シオジ節(C116) 10 a - 10 c. 散孔材(C099) 11a. 樹皮(C094) 12. 樹皮巻製品? 全形写真(C094)

a : 横断面・b : 接線断面・c : 放射断面

5. 鶴居村下幌呂 1 遺跡における種実同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

遺跡より出土する炭化物は、主に種実類と木材やその破片であることが多い。特に種実類は強靱なものがあるため残存しやすく、炭化するとより残存する。種実群集として構成や組成をとらえることができれば、過去の植生や群落の構成を明らかにし、古環境の推定を行うことも可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることもできる。

鶴居村下幌呂 1 遺跡では、縄文時代の焼土や床から炭化物（種実）が出土した。そこで、これらについて種実同定を行い、当時の植物利用について検討することになった。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代の遺構より出土した炭化物である。試料の内訳は、資料番号シー 1・H-1 床面直下、シー 2・H-2 36-46層、シー 3・H-2 床上、シー 4・H-2 HF 焼土下位、シー 5・H-11HF 1 焼土、シー 6・H-12 焼土上面、シー 7・H-14HF 1 焼土、シー 8・H-16HF 1 焼土、シー 9・H-17HF 1 焼土、シー 10・H-19HF 1 焼土、シー 11・H-22HF 1 焼土、シー 12・H-23、シー 13・H-23、シー 14・H-23、シー 15・H-24HF 1 焼土、シー 16・H-27HF 1 焼土、シー 17・H-34HF 1 焼土、シー 18・F-4 焼土、シー 19・F-6 焼土、シー 20・F-17 焼土、シー 21・F-19 焼土、シー 22・F-22 焼土上面、シー 23・F-28 焼土上面、シー 24・(M21区) Ko-C2 直下の計 24 点である。

同定は、試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

3. 結果

(1) 同定された分類群

樹木 1、草本 3 の計 4 分類群が同定される。学名、和名および粒数を表 1 に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載する。

〔樹木〕

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr 核（破片）クルミ科

炭化しているため黒色で、表面全体に不規則な隆起がある。

〔草本〕

タデ属 *Polygonum* 果実（破片）タデ科

炭化しているため黒色で卵形を呈す。断面は三角形である。

マメ科 Leguminosae 種子 マメ科

赤褐色で横楕円形を呈す。へそは円形で、その縁は高い。未炭化である。栽培種や有用植物ではなく、雑草の種子である。

アカネ科？ Rubiaceae？ 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。アカネ科と思われるが、炭化しており形態が変形しているため？とする。

不明 Unknown (破片・細片)

炭化した破片または細片であり、表面模様などの鑑別点が観察出来ないため、種実であるかは不明である。

虫瘤 insect gall

様々な生物によって形成される、植物の一部の細胞が異常に増殖したり、肥大したり、無核や巨大核、多核など核に異常が生じたり、あるいは、組織分化の過程が狂ったりすることによって引き起こされる、組織や器官の病理学的に異常な形状のことで、ここでは昆虫類によって形成されたものと思われる。

(2)検出された種実類

- 1) シー1・H-1 床面直下
種実とは同定されなかった。
- 2) シー2・H-2 36-46層
タデ属果実片1が同定された。
- 3) シー3・H-2 床上
種実とは同定されなかった。
- 4) シー4・H-2 HF焼土下位
種実とは同定されなかった。
- 5) シー5・H-11 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 6) シー6・H-12焼土上面
オニグルミ核片1が同定された。
- 7) シー7・H-14 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 8) シー8・H-16 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 9) シー9・H-17 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 10) シー10・H-19 HF1焼土、
種実とは同定されなかった。
- 11) シー11・H-22 HF1焼土
アカネ科?種子1が同定された。
- 12) シー12、シー13、シー14・H-23
種実とは同定されなかった。
- 13) シー15・H-24 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 14) シー16・H-27 HF1焼土
種実とは同定されなかった。
- 15) シー17・H-34 HF1焼土
種実とは同定されなかった。

- 16) シー18・F-4 焼土
種実とは同定されなかった。
- 17) シー19・F-6 焼土
オニグルミ核片2が同定された。
- 18) シー20・F-17焼土
種実とは同定されなかった。
- 19) シー21・F-19焼土
種実とは同定されなかった。
- 20) シー22・F-22焼土上面
同定されなかった。
- 21) シー23・F-28焼土上面
オニグルミの核片3が同定された。
- 22) シー24・(M21区) Ko-c₂直下
マメ科種子1が同定された。他の試料とは異なり、無炭化である。

4. 所見とまとめ

鶴居村下幌呂1遺跡において出土した炭化した種実類について同定を行った。その結果、樹木のオニグルミの核片を主に、草本のタデ属の果実片、マメ科の種子、アカネ科?の種子が同定された。オニグルミは在来種で温帯域の沢沿いなどの湿潤地に生育し、種子は食用になる。果実の最内層の内果皮が堅い核となるため遺跡では残存しやすく、縄文時代のみならず近世まで広く出土する。タデ属、アカネ科?は炭化しているが、特に利用は考えにくい。マメ科は未炭化であるが、利用できない雑草である。これらは周囲に生育していたと推定される。

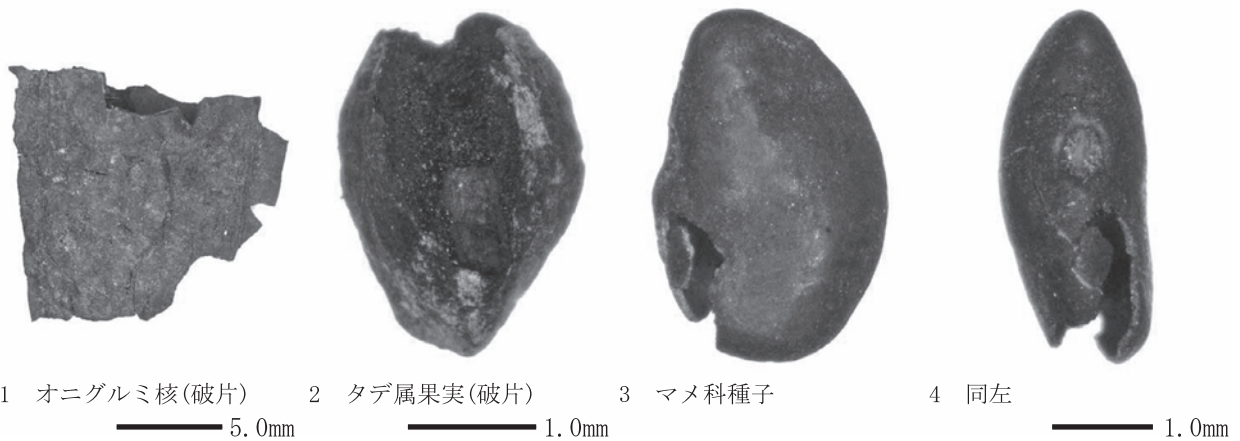
参考文献

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494 p.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編、第四紀試料分析法、東京大学出版会、p. 276-283.
- 渡辺誠 (1975) 縄文時代の植物食. 雄山閣、187 p.

表 V-13 鶴居村下幌呂 1 遺跡における種実同定結果

資料番号	遺構/ (発掘区)	層位	分類群		部位	個数	備考
			学名	和名			
シー 1	H-1	床面直上				1	芽
シー 2	H-2	36-46層	<i>Polygonum</i>	タデ属	果実 (破片)	1	虫瘤 2
			Unknown	不明	(破片)	4	
シー 3	H-2	床上					虫瘤 1
シー 4	H-2 HF	焼土下位	Unknown	不明	(細片)	6	
シー 5	H-11 HF 1	焼土	種実、動植物以外の炭化物			1	
シー 6	H-12	焼土上面	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (破片)	1	炭化材片 1
シー 7	H-14 HF 1	焼土	Unknown	不明	(破片)	1	
シー 8	H-16 HF 1	焼土					昆虫片 1
シー 9	H-17 HF 1	焼土					虫瘤 1
シー 10	H-19 HF 1	焼土	種実、動植物以外の炭化物			1	
シー 11	H-22 HF 1	焼土	Rubiaceae ?	アカネ科 ?	種子	1	
シー 12	H-23		Unknown	不明	(破片)	2	
シー 13	H-23		Unknown	不明	(細片)	10	
シー 14	H-23		Unknown	不明	(破片)	1	
シー 15	H-24 HF 1	焼土	種実、動植物以外の炭化物			1	昆虫片 1
シー 16	H-27 HF 1	焼土	種実、動植物以外の炭化物			1	
シー 17	H-34 HF 1	焼土	Unknown	不明	(細片)	(+)	
シー 18	F-4	焼土	Unknown	不明	(破片)	1	
シー 19	F-6	焼土	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (破片)	2	炭化材片 1
シー 20	F-17	焼土					石 1
シー 21	F-19	焼土					材片 1、虫瘤 1
シー 22	F-22	焼土上面					虫瘤 2
シー 23	F-28	焼土上面	<i>Juglans ailanthifolia</i> Carr	オニグルミ	核 (破片)	3	
シー 24	(M21区)	Ko-c直下	Leguminosae	マメ科	種子	1	未炭化、虫瘤 6

図版 1 鶴居村下幌呂 1 遺跡の種実



6. 下幌呂 1 遺跡における放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株)加速器分析研究所

1. 測定対象試料

下幌呂 1 遺跡は、北海道阿寒郡鶴居村字幌呂原野基線29-2 (北緯43° 9′、東経144° 17′) に所在し、釧路湿原西岸の標高約14mの段丘上、幌呂川右岸の平坦面に立地する。

【第1回】測定対象試料は、M-1 盛土出土木炭 (SMH1-1 : IAAA-91740)、H-1 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-2 : IAAA-91741)、H-2 31層出土木炭 (SMH1-3 : IAAA-91742)、H-3 覆土出土木炭 (SMH1-4 : IAAA-91743)、H-4 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-5 : IAAA-91744)、H-6 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-6 : IAAA-91745)、H-8 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-7 : IAAA-91746)、H-10 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-8 : IAAA-91747)、H-11床面直上出土木炭 (SMH1-9 : IAAA-91748)、H-12覆土5層出土木炭 (SMH1-10 : IAAA-91749)、H-12 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-11 : IAAA-91750)、H-14 HM2層出土木炭 (SMH1-12 : IAAA-91751、SMH1-13 : IAAA-91752)、H-15床面直上出土木炭 (SMH1-14 : IAAA-91753)、H-15 HM2層出土木炭 (SMH1-15 : IAAA-91754)、H-16覆土2層出土木炭 (SMH1-16 : IAAA-91755)、H-16 HM3層出土木炭 (SMH1-17 : IAAA-91756)、H-17床面直上出土木炭 (SMH1-18 : IAAA-91757)、H-17 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-19 : IAAA-91758)、H-18 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-20 : IAAA-91759)、H-22 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-21 : IAAA-91760)、H-23覆土出土木炭 (SMH1-22 : IAAA-91761)、H-23 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-23 : IAAA-91762)、H-24 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-24 : IAAA-91763)、H-26 HM層出土木炭 (SMH1-25 : IAAA-91764)、H-27覆土出土木炭 (SMH1-26 : IAAA-91765)、H-30覆土出土木炭 (SMH1-27 : IAAA-91766)、H-32覆土出土木炭 (SMH1-28 : IAAA-91767)、H-38 HF-1 焼土出土木炭 (SMH1-29 : IAAA-91768)、P-33覆土出土木炭 (SMH1-30 : IAAA-91769)、P-58覆土出土木炭 (SMH1-31 : IAAA-91770)、F-19焼土出土木炭 (SMH1-32 : IAAA-91771)、合計32点である (表V-14-1)。

【第2回】測定対象試料は、竪穴住居跡と土坑から出土した炭化物や木炭合計10点 (SMH1-33 : IAAA-102472~SMH1-42 : IAAA-102481) である (表V-14-2)。試料SMH1-33~35の3点はフローテーションで回収し、その他の7点は現場にて採取された。

2. 測定の意義

遺構の年代を測定し、縄文時代集落の変遷を推定する。

3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/ℓ (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから 1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表V-14に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器 (NEC Pelletron 9SDH-2) をベースとした¹⁴C-AMS専用装置を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表V-14)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表V-14に、補正していない値を参考値として表V-15に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表V-14に、補正していない値を参考値として表V-15に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、【第1回・試料名SMH1-1~32】IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。【第2回・試料名SMH1-33~42】IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表V-15に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6. 測定結果

下幌呂1遺跡出土試料の年代測定結果について遺構の種類ごとに述べる。

【第1回】M-1盛土出土木炭SMH1-1の¹⁴C年代は $4040 \pm 40\text{yrBP}$ である。縄文時代中期末葉頃に相当する。

竪穴住居跡出土試料には、縄文時代後期を中心に複数の時期のものが認められる。最も古いと考えられるのは、H-38 HF-1焼土出土木炭SMH1-29で、¹⁴C年代は $6760 \pm 40\text{yrBP}$ である。縄文時代早期後葉頃に当たる。次いでH-8 HF-1焼土出土木炭SMH1-7の¹⁴C年代が $5590 \pm 40\text{yrBP}$ で、

縄文時代前期前葉頃の年代値である。

この2点を除く竪穴住居跡出土試料の¹⁴C年代は、H-32覆土出土木炭SMH1-28の3980±40yrBPから、H-12覆土5層出土木炭SMH1-10及びH-12 HF-1焼土出土木炭SMH1-11の3280±30yrBPまでの間に入っており、これら28点はおよそ縄文時代中期末葉から後期中葉頃に相当すると考えられる。

同じ竪穴住居跡で複数の試料を測定した場合の¹⁴C年代を検討すると、H-12覆土5層出土木炭SMH1-10と同HF-1焼土出土木炭SMH1-11が3280±30yrBP、H-14 HM2出土木炭SMH1-12とSMH1-13が3860±30yrBP、H-15床面直上出土木炭SMH1-14が3800±30yrBP、同HM2出土木炭SMH1-15が3890±30yrBP、H-16覆土2層出土木炭SMH1-16が3750±30yrBP、同HM3出土木炭SMH1-17が3940±30yrBP、H-17床面直上出土木炭SMH1-18が3810±30yrBP、同HF-1焼土出土木炭SMH1-19が3710±40yrBP、H-23覆土出土木炭SMH1-22が3920±40yrBP、同HF-1焼土出土木炭SMH1-23が3850±30yrBPとなっている。H-12、H-14の試料はほぼ同じ年代値と見なすことができる。おおむね近い値を示したものが多いが、H-16の2点には若干差が認められる。

土坑出土試料の¹⁴C年代は、P-33覆土出土木炭SMH1-30が3840±40yrBP、P-58覆土出土木炭SMH1-31が3970±40yrBPである。P-33の試料は縄文時代後期初頭から前葉頃、P-58の試料は縄文時代中期末から後期初頭頃の年代値を示している。

竪穴住居跡覆土中に形成されたF-19焼土出土木炭SMH1-32の¹⁴C年代は3740±40yrBPである。縄文時代後期前葉頃に相当する。

以上、測定結果の概要をまとめたが、遺構の重複関係、層の堆積状況など個々の状況を踏まえた検討が必要となる。

炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

【第2回】竪穴住居跡H-2出土試料の¹⁴C年代は、覆土上位の焼土から出土したSMH1-33が3790±30yrBP、覆土下位の焼土から出土したSMH1-34が3820±30yrBP、SMH1-35が3830±30yrBP、覆土下位（床面付近）から出土したSMH1-36が3710±30yrBP、SMH1-37が3700±30yrBPである。5点はおおよそ近接した年代値であるが、覆土上位と下位の焼土から出土した3点の炭化物、覆土下位から出土した2点の木炭は、各々誤差（±1σ）の範囲で重なり、近い年代を示すのに対し、前者と後者の間ではわずかに年代差が認められる。暦年較正年代（1σ）は、SMH1-33が2285～2147cal BCの間に3つの範囲、SMH1-34が2296～2204cal BCの範囲、SMH1-35が2333～2205cal BCの間に2つの範囲、SMH1-36が2140～2036cal BCの間に2つの範囲、SMH1-37が2136～2036cal BCの間に2つの範囲で示され、いずれも縄文時代後期前葉頃に相当する。

その他の竪穴住居跡出土試料の¹⁴C年代は、H-3覆土下位出土のSMH1-38が3650±30yrBP、H-16 HM2出土のSMH1-39が3810±30yrBP、H-31覆土3層出土のSMH1-40が3840±30yrBP、H-33覆土3層出土のSMH1-41が3810±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、SMH1-38が2120～1965cal BCの間に2つの範囲、SMH1-39が2290～2204cal BCの範囲、SMH1-40が2342～2208cal BCの間に2つの範囲、SMH1-41が2290～2201cal BCの範囲で示され、いずれもおおむね縄文時代後期前葉頃に相当する年代値である。

土坑P-50坑底直上出土木炭SMH1-42の¹⁴C年代は3970±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は、2564～2465cal BCの間に2つの範囲で示され、縄文時代中期末から後期初頭頃に相当する。

一般に木炭については、樹木の最外年輪が枯死・伐採年を示し、内側ではより古い年代を示すことを考慮する必要がある。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表V-14-1 測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC (%)
IAAA-91740	SMH1-1	M-1 盛土	木炭	AAA	-25.29±0.35	4,040±40	60.49±0.27
IAAA-91741	SMH1-2	H-1 HF-1 焼土	木炭	AAA	-27.49±0.62	3,530±40	64.47±0.29
IAAA-91742	SMH1-3	H-2 31層	木炭	AaA	-26.44±0.65	3,730±40	62.89±0.28
IAAA-91743	SMH1-4	H-3 覆土	木炭	AAA	-26.77±0.47	3,810±40	62.24±0.27
IAAA-91744	SMH1-5	H-4 HF-1 焼土	木炭	AAA	-24.09±0.58	3,340±40	65.99±0.29
IAAA-91745	SMH1-6	H-6 HF-1 焼土	木炭	AaA	-25.88±0.51	3,730±40	62.85±0.27
IAAA-91746	SMH1-7	H-8 HF-1 焼土	木炭	AaA	-24.55±0.70	5,590±40	49.86±0.23
IAAA-91747	SMH1-8	H-10 HF-1 焼土	木炭	AAA	-26.35±0.71	3,490±30	64.77±0.27
IAAA-91748	SMH1-9	H-11 床面直上	木炭	AAA	-23.16±0.53	3,480±30	64.88±0.27
IAAA-91749	SMH1-10	H-12 覆土5層	木炭	AAA	-24.50±0.63	3,280±30	66.49±0.27
IAAA-91750	SMH1-11	H-12 HF-1 焼土	木炭	AAA	-25.43±0.65	3,280±30	66.47±0.28
IAAA-91751	SMH1-12	H-14 HM2層	木炭	AaA	-23.83±0.52	3,860±30	61.87±0.26
IAAA-91752	SMH1-13	H-14 HM2層	木炭	AAA	-23.44±0.45	3,860±30	61.82±0.26
IAAA-91753	SMH1-14	H-15 床面直上	木炭	AAA	-24.89±0.64	3,800±30	62.31±0.27
IAAA-91754	SMH1-15	H-15 HM2層	木炭	AAA	-25.75±0.43	3,890±30	61.58±0.25
IAAA-91755	SMH1-16	H-16 覆土2層	木炭	AAA	-23.57±0.60	3,750±30	62.74±0.25
IAAA-91756	SMH1-17	H-16 HM3層	木炭	AaA	-25.86±0.58	3,940±30	61.23±0.26
IAAA-91757	SMH1-18	H-17 床面直上	木炭	AAA	-26.18±0.51	3,810±30	62.23±0.26
IAAA-91758	SMH1-19	H-17 HF-1 焼土	木炭	AAA	-25.86±0.51	3,710±40	63.01±0.28
IAAA-91759	SMH1-20	H-18 HF-1 焼土	木炭	AaA	-26.44±0.61	3,800±40	62.30±0.27
IAAA-91760	SMH1-21	H-22 HF-1 焼土	木炭	AAA	-26.01±0.67	3,970±40	60.98±0.26
IAAA-91761	SMH1-22	H-23 覆土	木炭	AaA	-26.62±0.53	3,920±40	61.42±0.26
IAAA-91762	SMH1-23	H-23 HF-1 焼土	木炭	AAA	-24.55±0.67	3,850±30	61.89±0.26
IAAA-91763	SMH1-24	H-24 HF-1 焼土	木炭	AAA	-23.62±0.51	3,750±40	62.72±0.27
IAAA-91764	SMH1-25	H-26 HM層	木炭	AAA	-25.90±0.63	3,890±40	61.63±0.26
IAAA-91765	SMH1-26	H-27 覆土	木炭	AAA	-25.34±0.62	3,890±40	61.61±0.27
IAAA-91766	SMH1-27	H-30 覆土	木炭	AaA	-27.03±0.52	3,920±40	61.42±0.27
IAAA-91767	SMH1-28	H-32 覆土	木炭	AAA	-26.28±0.68	3,980±40	60.95±0.27
IAAA-91768	SMH1-29	H-38 HF-1 焼土	木炭	AAA	-28.24±0.57	6,760±40	43.11±0.23
IAAA-91769	SMH1-30	P-33 覆土	木炭	AAA	-25.71±0.55	3,840±40	62.01±0.28
IAAA-91770	SMH1-31	P-58 覆土	木炭	AAA	-25.68±0.65	3,970±40	60.99±0.27
IAAA-91771	SMH1-32	F-19 焼土	木炭	AAA	-25.00±0.64	3,740±40	62.76±0.28

[#3270]

表 V-14-2 測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102472	SMH1-33	H-2 上位焼土	炭化物	AaA	-26.94±0.55	3,790±30	62.39±0.22
IAAA-102473	SMH1-34	H-2 下位焼土	炭化物	AAA	-24.45±0.48	3,820±30	62.15±0.22
IAAA-102474	SMH1-35	H-2 下位焼土	炭化物	AAA	-22.98±0.47	3,830±30	62.10±0.21
IAAA-102475	SMH1-36	H-2 覆土下位	木炭	AaA	-24.60±0.40	3,710±30	63.03±0.23
IAAA-102476	SMH1-37	H-2 覆土下位	木炭	AaA	-27.12±0.47	3,700±30	63.09±0.23
IAAA-102477	SMH1-38	H-3 覆土下位	木炭	AaA	-23.72±0.44	3,650±30	63.46±0.23
IAAA-102478	SMH1-39	H-16 HM2	木炭	AAA	-25.00±0.38	3,810±30	62.22±0.22
IAAA-102479	SMH1-40	H-31 覆土3層	木炭	AAA	-25.79±0.54	3,840±30	62.02±0.22
IAAA-102480	SMH1-41	H-33 覆土3	木炭	AAA	-28.28±0.51	3,810±30	62.26±0.23
IAAA-102481	SMH1-42	P-50 坑底直上	木炭	AAA	-25.56±0.38	3,970±30	61.03±0.22

[#4025]

表 V-15-1 暦年較正

IntCal04・OxCalv4.1 (1995) 使用

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91740	4,040±40	60.46±0.26	4,037±35	2618BC-2610BC (4.4%) 2582BC-2548BC (23.8%) 2540BC-2489BC (40.0%)	2835BC-2817BC (3.2%) 2664BC-2646BC (2.2%) 2637BC-2471BC (89.9%)
IAAA-91741	3,570±30	64.14±0.27	3,525±35	1909BC-1869BC (24.2%) 1847BC-1775BC (44.0%)	1942BC-1751BC (95.4%)
IAAA-91742	3,750±30	62.70±0.26	3,725±35	2197BC-2167BC (18.0%) 2149BC-2121BC (16.5%) 2095BC-2041BC (33.7%)	2275BC-2256BC (2.1%) 2208BC-2025BC (93.3%)
IAAA-91743	3,840±30	62.02±0.26	3,808±35	2296BC-2198BC (62.8%) 2165BC-2151BC (5.4%)	2453BC-2447BC (0.3%) 2435BC-2420BC (1.2%) 2405BC-2378BC (2.9%) 2350BC-2137BC (91.0%)
IAAA-91744	3,320±30	66.11±0.28	3,339±35	1685BC-1606BC (52.9%) 1574BC-1558BC (8.5%) 1551BC-1538BC (6.8%)	1733BC-1717BC (3.3%) 1693BC-1526BC (92.1%)
IAAA-91745	3,740±30	62.74±0.26	3,730±34	2198BC-2164BC (22.7%) 2152BC-2126BC (16.0%) 2090BC-2044BC (29.5%)	2275BC-2256BC (2.5%) 2208BC-2029BC (92.9%)
IAAA-91746	5,580±40	49.91±0.22	5,590±37	4454BC-4436BC (15.6%) 4428BC-4369BC (52.6%)	4492BC-4352BC (95.4%)

表V-15-2 暦年較正

IntCal04・OxCalv4.1 (1995) 使用

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91747	3,510±30	64.60±0.25	3,488±33	1878BC-1840BC (26.3%) 1829BC-1767BC (41.9%)	1897BC-1737BC (93.2%) 1711BC-1696BC (2.2%)
IAAA-91748	3,450±30	65.12±0.26	3,475±33	1877BC-1841BC (24.9%) 1824BC-1795BC (18.6%) 1783BC-1747BC (24.7%)	1888BC-1734BC (90.1%) 1716BC-1693BC (5.3%)
IAAA-91749	3,270±30	66.56±0.26	3,278±33	1608BC-1570BC (31.6%) 1561BC-1516BC (36.6%)	1636BC-1491BC (92.1%) 1480BC-1456BC (3.3%)
IAAA-91750	3,290±30	66.42±0.26	3,280±33	1608BC-1517BC (68.2%)	1636BC-1492BC (92.8%) 1478BC-1458BC (2.6%)
IAAA-91751	3,840±30	62.01±0.25	3,857±33	2455BC-2419BC (13.8%) 2406BC-2377BC (12.8%) 2350BC-2284BC (35.8%) 2248BC-2233BC (5.8%)	2462BC-2273BC (80.5%) 2257BC-2208BC (14.9%)
IAAA-91752	3,840±30	62.02±0.26	3,862±34	2457BC-2418BC (16.4%) 2408BC-2375BC (15.3%) 2367BC-2362BC (1.9%) 2351BC-2287BC (34.6%)	2464BC-2274BC (82.9%) 2256BC-2208BC (12.5%)
IAAA-91753	3,800±30	62.33±0.25	3,799±34	2289BC-2198BC (60.8%) 2165BC-2151BC (7.4%)	2401BC-2382BC (1.4%) 2348BC-2135BC (94.0%)
IAAA-91754	3,910±30	61.48±0.24	3,894±32	2461BC-2345BC (68.2%)	2471BC-2288BC (95.4%)
IAAA-91755	3,720±30	62.92±0.24	3,745±31	2203BC-2132BC (53.7%) 2084BC-2058BC (14.5%)	2279BC-2250BC (6.2%) 2230BC-2220BC (1.4%) 2211BC-2111BC (61.5%) 2103BC-2036BC (26.2%)
IAAA-91756	3,950±30	61.12±0.25	3,940±33	2547BC-2541BC (2.2%) 2489BC-2433BC (36.4%) 2423BC-2402BC (11.8%) 2380BC-2348BC (17.8%)	2566BC-2524BC (11.3%) 2497BC-2337BC (81.7%) 2323BC-2307BC (2.4%)
IAAA-91757	3,830±30	62.08±0.25	3,809±33	2296BC-2199BC (64.7%) 2161BC-2153BC (3.5%)	2431BC-2424BC (0.5%) 2403BC-2381BC (2.3%) 2349BC-2139BC (92.6%)
IAAA-91758	3,720±30	62.90±0.27	3,709±35	2190BC-2181BC (4.4%) 2141BC-2111BC (18.7%) 2103BC-2036BC (45.1%)	2203BC-2018BC (93.3%) 1995BC-1981BC (2.1%)

表 V-15-3 暦年較正

IntCal04・OxCalv4.1 (1995) 使用

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91759	3,830 \pm 30	62.11 \pm 0.26	3,801 \pm 34	2291BC-2198BC (61.3%) 2165BC-2151BC (6.9%)	2428BC-2426BC (0.1%) 2402BC-2382BC (1.6%) 2348BC-2136BC (93.7%)
IAAA-91760	3,990 \pm 30	60.85 \pm 0.25	3,973 \pm 34	2566BC-2524BC (36.6%) 2497BC-2466BC (31.6%)	2577BC-2437BC (88.9%) 2421BC-2404BC (2.5%) 2379BC-2349BC (4.0%)
IAAA-91761	3,940 \pm 30	61.21 \pm 0.25	3,915 \pm 34	2470BC-2399BC (44.5%) 2384BC-2347BC (23.7%)	2487BC-2292BC (95.4%)
IAAA-91762	3,850 \pm 30	61.95 \pm 0.25	3,854 \pm 33	2452BC-2446BC (2.1%) 2437BC-2420BC (6.6%) 2405BC-2378BC (11.9%) 2350BC-2281BC (37.8%) 2249BC-2231BC (7.6%) 2219BC-2213BC (2.1%)	2462BC-2271BC (78.3%) 2259BC-2206BC (17.1%)
IAAA-91763	3,720 \pm 30	62.90 \pm 0.26	3,747 \pm 34	2204BC-2131BC (51.5%) 2086BC-2051BC (16.7%)	2281BC-2249BC (8.1%) 2231BC-2110BC (61.9%) 2104BC-2036BC (25.4%)
IAAA-91764	3,900 \pm 30	61.51 \pm 0.25	3,888 \pm 34	2460BC-2341BC (68.2%)	2471BC-2285BC (93.7%) 2248BC-2235BC (1.7%)
IAAA-91765	3,900 \pm 30	61.56 \pm 0.25	3,890 \pm 34	2461BC-2341BC (68.2%)	2471BC-2286BC (94.0%) 2247BC-2235BC (1.4%)
IAAA-91766	3,950 \pm 30	61.16 \pm 0.26	3,915 \pm 35	2470BC-2397BC (44.4%) 2385BC-2346BC (23.8%)	2488BC-2291BC (95.4%)
IAAA-91767	4,000 \pm 30	60.79 \pm 0.26	3,977 \pm 35	2566BC-2524BC (38.5%) 2497BC-2468BC (29.7%)	2579BC-2437BC (90.0%) 2421BC-2404BC (2.1%) 2379BC-2349BC (3.3%)
IAAA-91768	6,810 \pm 40	42.82 \pm 0.22	6,759 \pm 42	5706BC-5685BC (19.7%) 5676BC-5633BC (48.5%)	5730BC-5617BC (95.4%)
IAAA-91769	3,850 \pm 40	61.92 \pm 0.27	3,838 \pm 35	2396BC-2385BC (3.7%) 2346BC-2270BC (37.7%) 2260BC-2206BC (26.8%)	2459BC-2201BC (95.4%)
IAAA-91770	3,980 \pm 30	60.91 \pm 0.26	3,971 \pm 35	2566BC-2524BC (36.1%) 2497BC-2465BC (32.1%)	2577BC-2433BC (86.7%) 2424BC-2402BC (3.5%) 2381BC-2348BC (5.2%)
IAAA-91771	3,740 \pm 30	62.76 \pm 0.26	3,741 \pm 35	2202BC-2131BC (48.7%) 2086BC-2051BC (19.5%)	2279BC-2250BC (6.1%) 2230BC-2220BC (1.5%) 2211BC-2033BC (87.9%)

表V-15-4 暦年較正

IntCal09・OxCalv4.1 (2009) 使用

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102472	3,820 \pm 30	62.14 \pm 0.21	3,790 \pm 28	2285calBC-2248calBC (27.6%) 2234calBC-2196calBC (25.9%) 2170calBC-2147calBC (14.7%)	2333calBC-2326calBC (0.6%) 2300calBC-2136calBC (94.8%)
IAAA-102473	3,810 \pm 30	62.22 \pm 0.21	3,820 \pm 28	2296calBC-2204calBC (68.2%)	2433calBC-2422calBC (0.9%) 2404calBC-2380calBC (3.1%) 2349calBC-2195calBC (86.7%) 2174calBC-2145calBC (4.6%)
IAAA-102474	3,790 \pm 30	62.36 \pm 0.21	3,827 \pm 27	2333calBC-2326calBC (3.4%) 2300calBC-2205calBC (64.8%)	2457calBC-2443calBC (1.2%) 2436calBC-2420calBC (1.9%) 2406calBC-2377calBC (4.7%) 2350calBC-2197calBC (85.8%) 2166calBC-2150calBC (1.9%)
IAAA-102475	3,700 \pm 30	63.09 \pm 0.22	3,707 \pm 29	2140calBC-2112calBC (19.1%) 2102calBC-2036calBC (49.1%)	2199calBC-2161calBC (12.4%) 2153calBC-2025calBC (83.0%)
IAAA-102476	3,730 \pm 30	62.82 \pm 0.22	3,699 \pm 29	2136calBC-2113calBC (18.0%) 2101calBC-2036calBC (50.2%)	2198calBC-2167calBC (7.9%) 2150calBC-2018calBC (85.2%) 1995calBC-1981calBC (2.4%)

表 V-15-5 暦年較正

IntCal09・OxCalv4.1 (2009) 使用

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102477	3,630 \pm 30	63.63 \pm 0.22	3,652 \pm 28	2120calBC-2096calBC (14.6%) 2040calBC-1965calBC (53.6%)	2135calBC-2078calBC (25.6%) 2064calBC-1942calBC (69.8%)
IAAA-102478	3,810 \pm 30	62.22 \pm 0.22	3,811 \pm 28	2290calBC-2204calBC (68.2%)	2398calBC-2384calBC (1.2%) 2346calBC-2192calBC (85.5%) 2180calBC-2142calBC (8.7%)
IAAA-102479	3,850 \pm 30	61.92 \pm 0.21	3,837 \pm 28	2342calBC-2274calBC (39.1%) 2257calBC-2208calBC (29.1%)	2458calBC-2418calBC (7.1%) 2408calBC-2375calBC (8.3%) 2368calBC-2201calBC (80.0%)
IAAA-102480	3,860 \pm 30	61.84 \pm 0.22	3,806 \pm 29	2290calBC-2201calBC (68.2%)	2344calBC-2140calBC (95.4%)
IAAA-102481	3,980 \pm 30	60.96 \pm 0.22	3,967 \pm 29	2564calBC-2534calBC (30.4%) 2494calBC-2465calBC (37.8%)	2574calBC-2439calBC (88.9%) 2421calBC-2404calBC (2.6%) 2378calBC-2350calBC (3.9%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058
- Intcal04

IntCal04

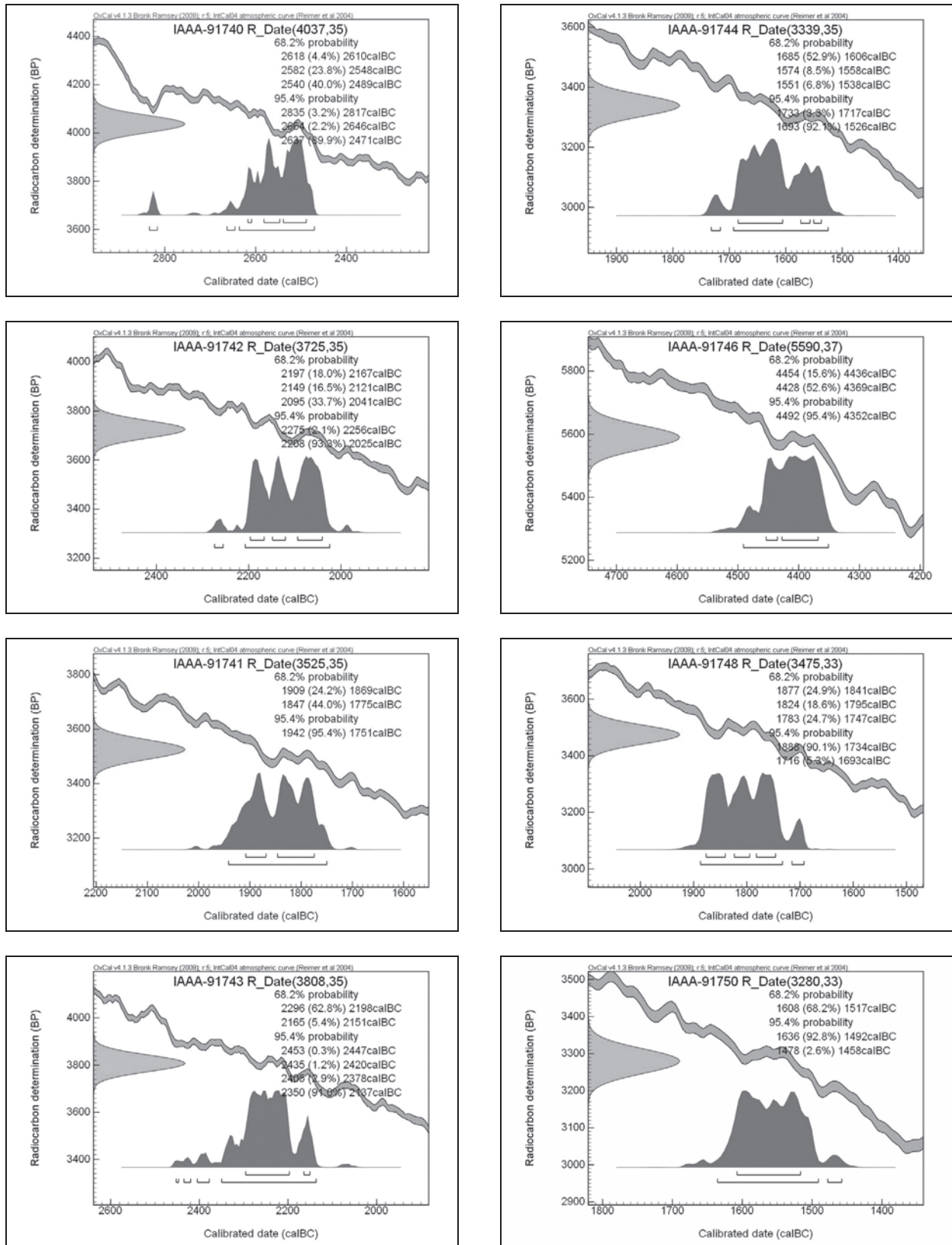


図 V - 11 暦年較正年代グラフ (1)

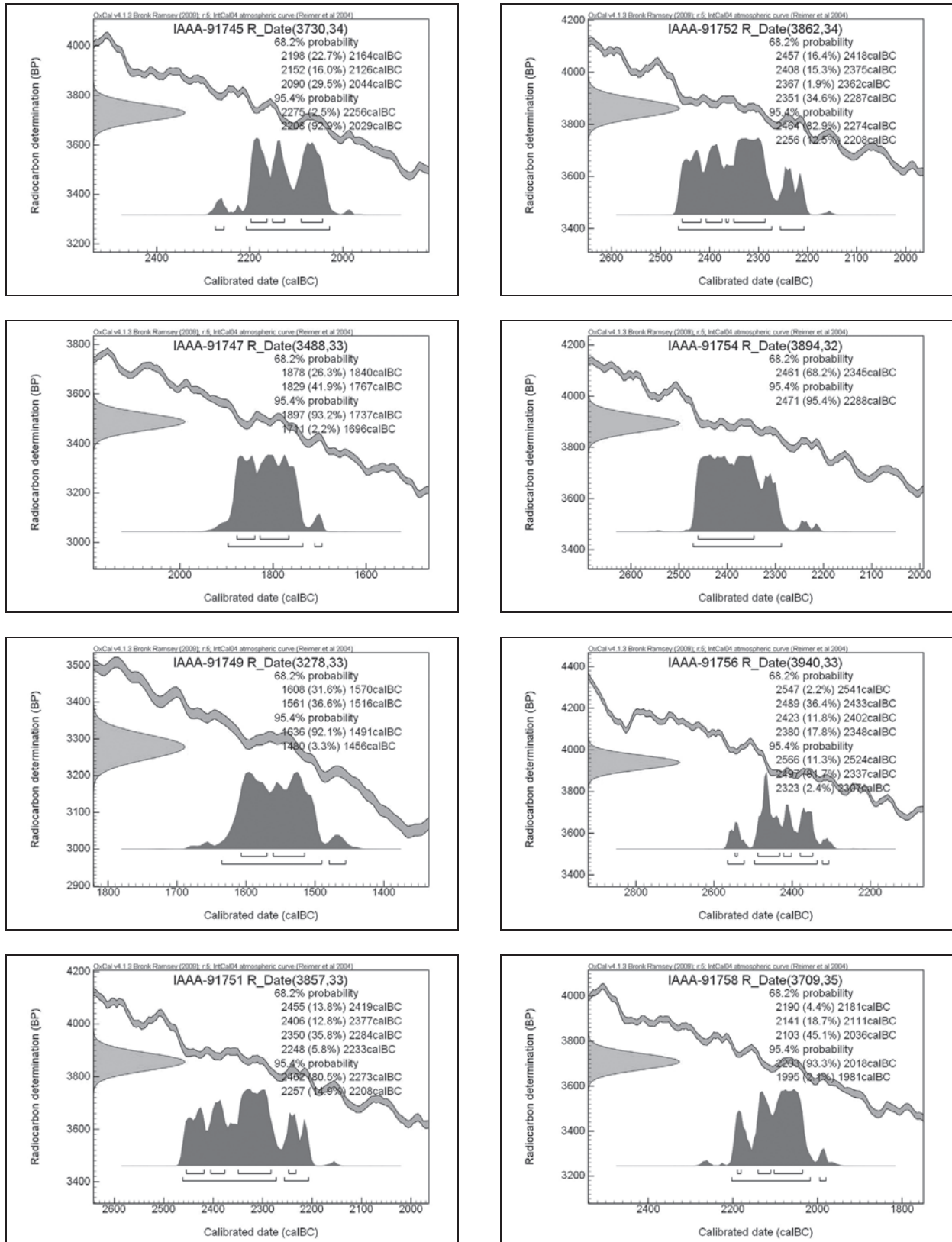


図 V-12 暦年較正年代グラフ(2)

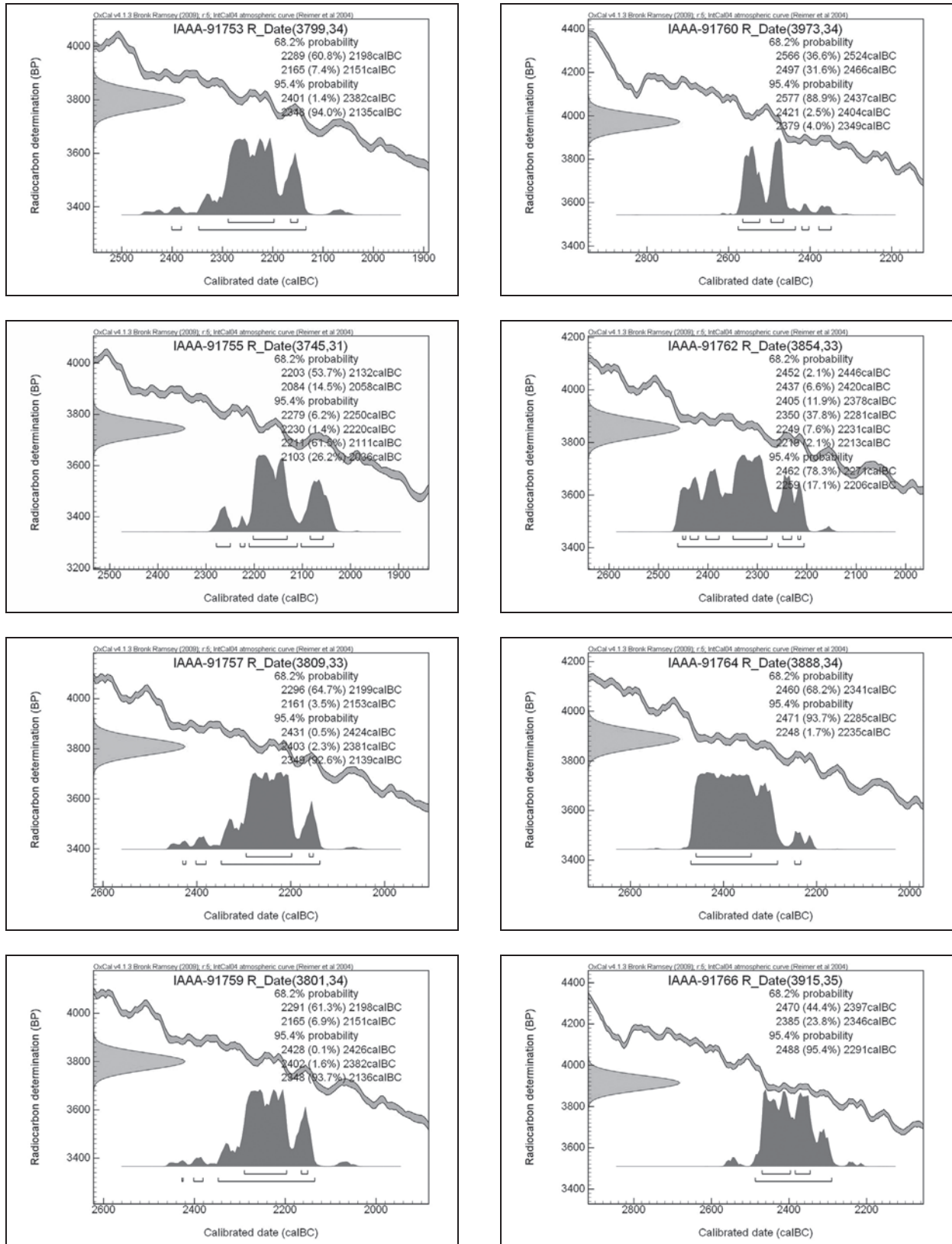


図 V - 13 暦年較正年代グラフ (3)

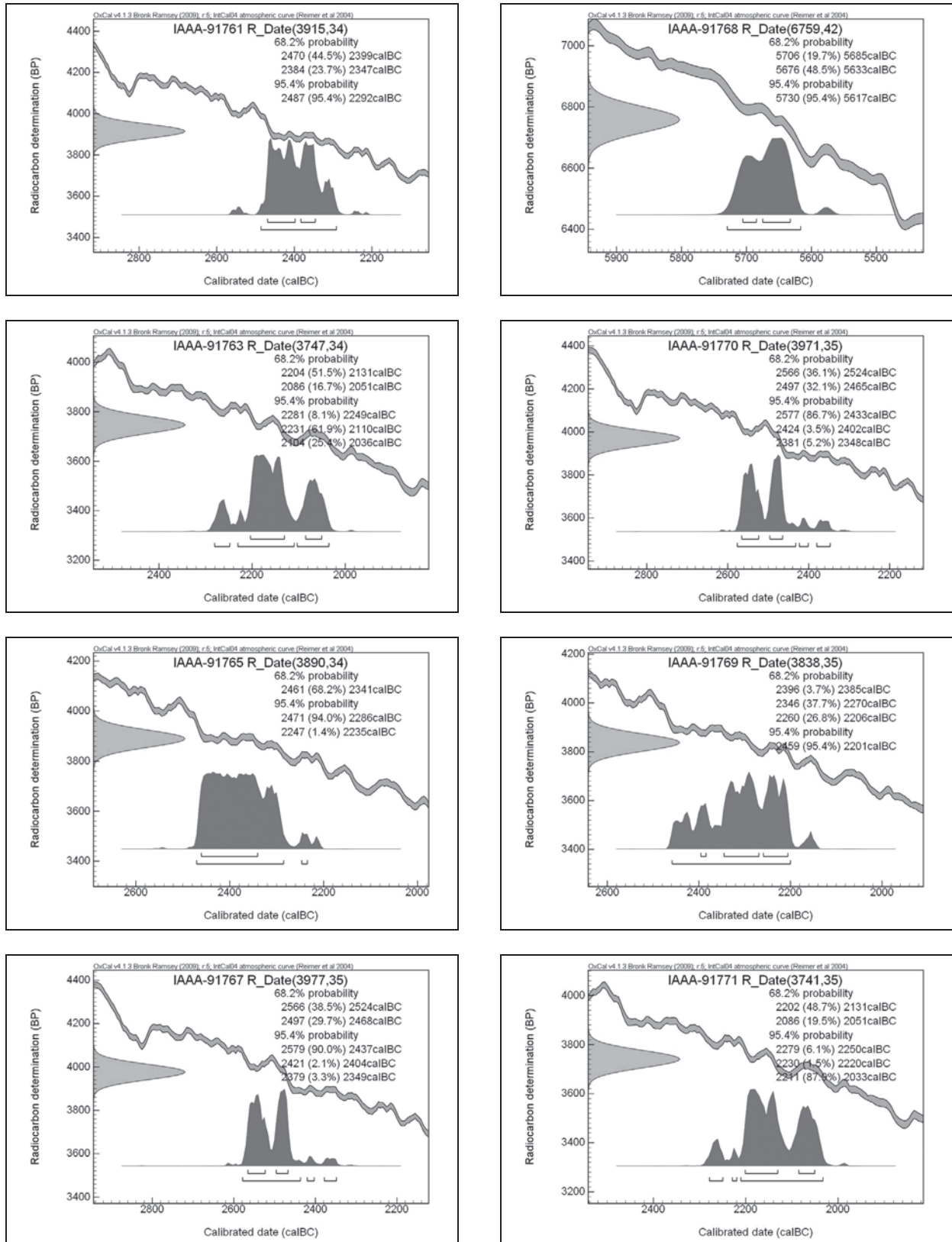


図 V-14 暦年較正年代グラフ(4)

以下 IntCal09

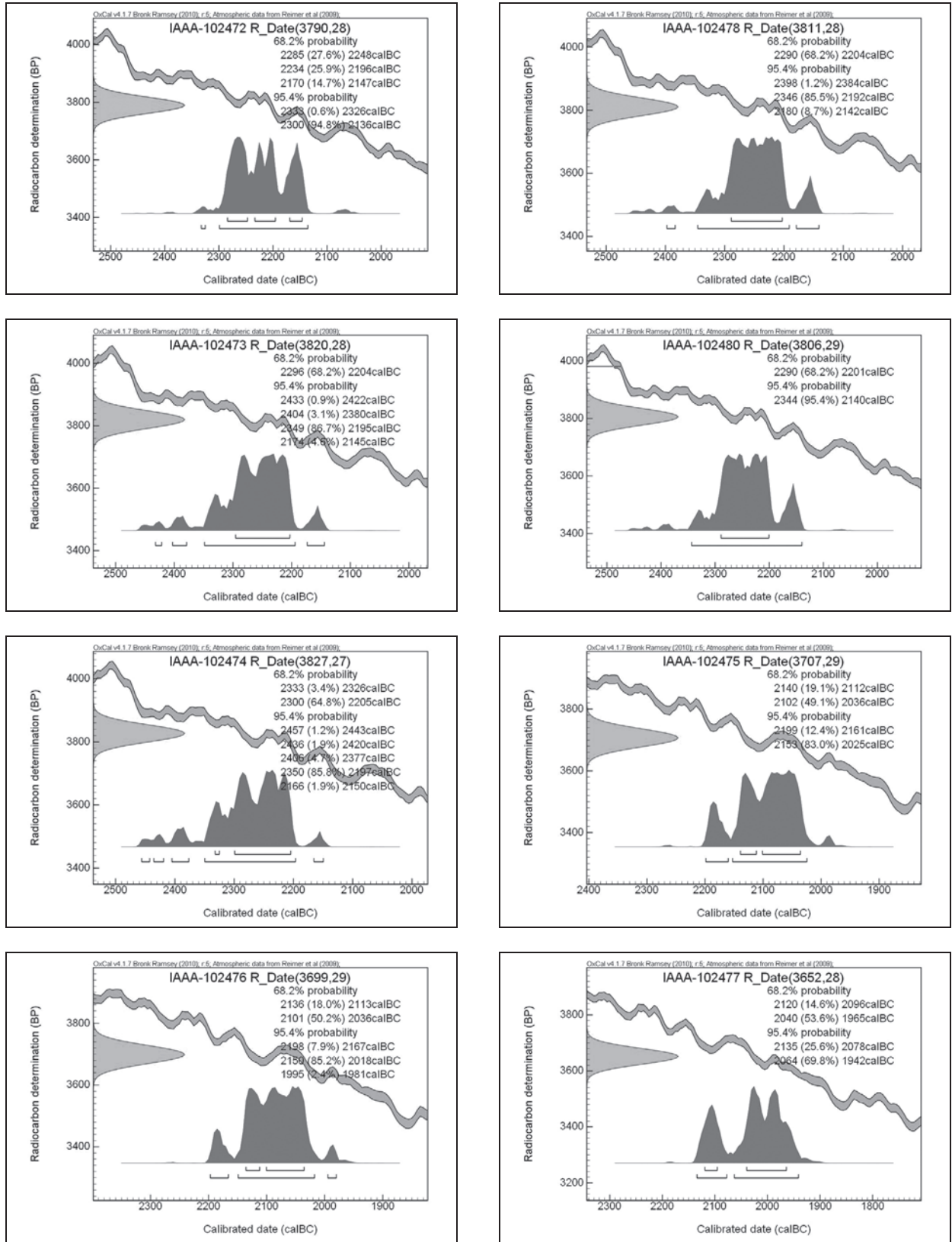
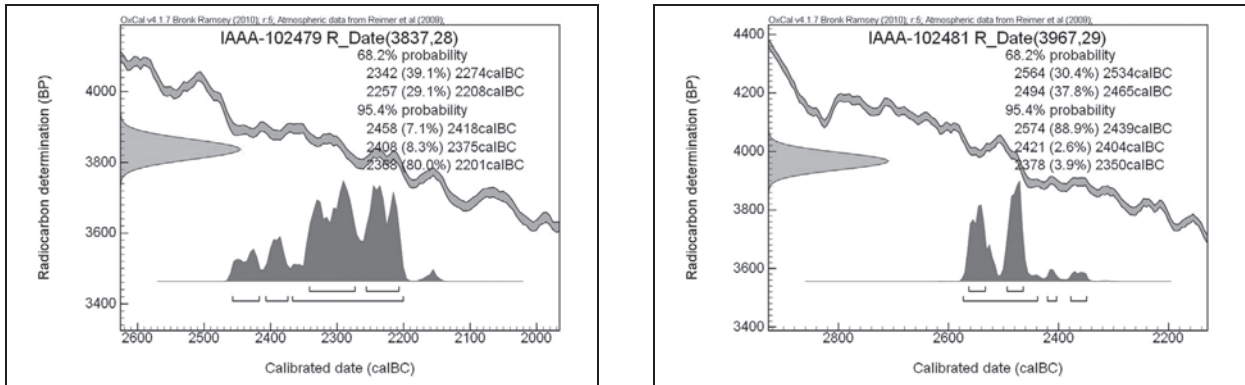


図 V - 15 暦年較正年代グラフ (5)



図V-16 暦年較正年代グラフ(6)

[参考] 暦年較正年代グラフ

编者註：

下幌呂1遺跡出土試料のAMS測定については、平成21年度と平成22年度の2回にわたり測定を委託しており、結果および報告を統合して掲載したものである。特に暦年較正年代値についてはバージョンが異なるので注意が必要である。

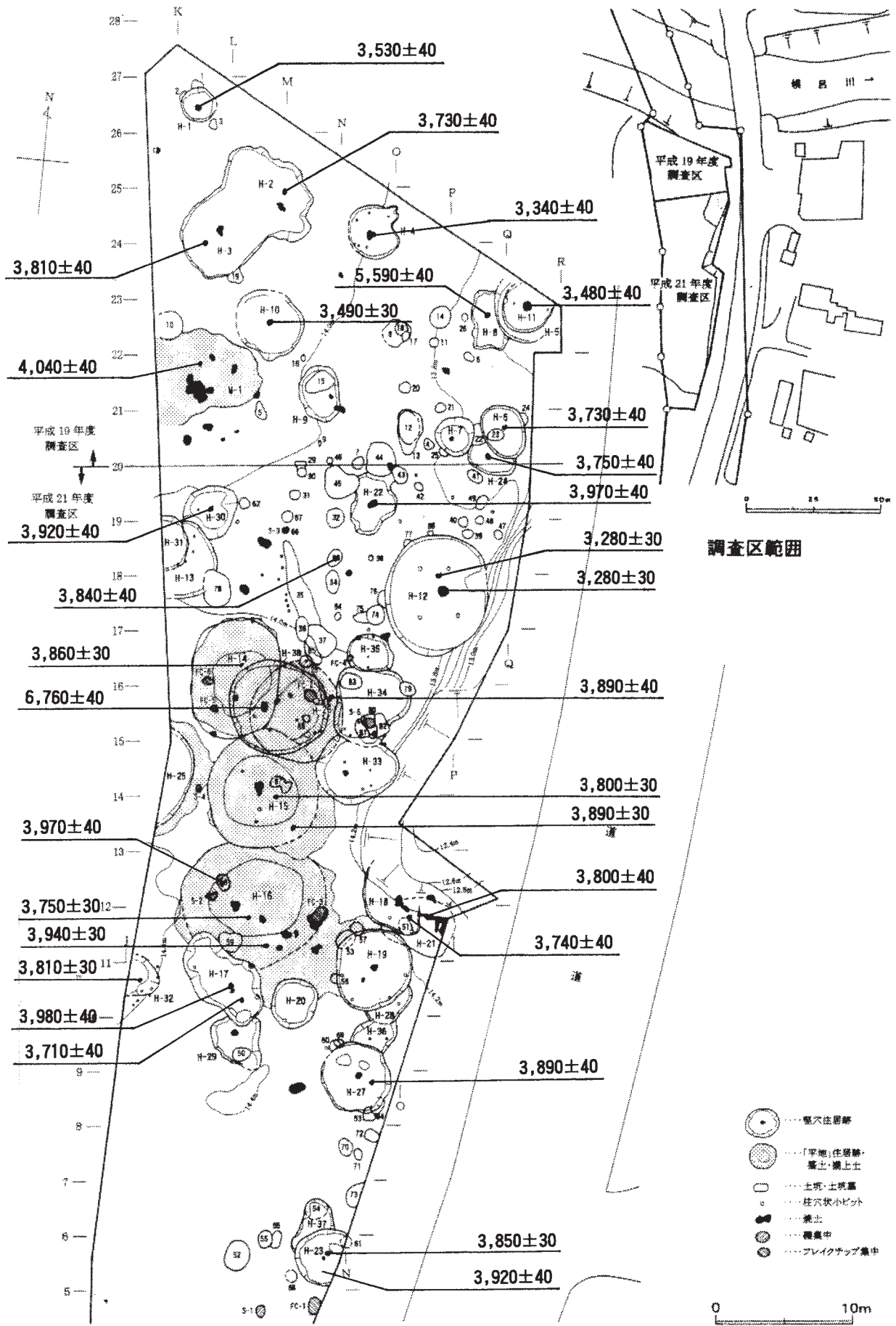


図 V-17 年代測定結果

7. 放射性炭素年代測定（液体シンチレーション法）

年代測定の経緯

日本大学小元久仁夫氏は、縄文時代後期～晩期における環境変動と遺跡の立地に関する研究の一環として、液体シンチレーション法による年代測定を行っている。当遺跡の整理作業中、同氏から資料提供の依頼が当センターあてにあった。AMS法など他の年代測定とのクロスチェックにより遺構の新旧をとらえる良い機会と考え、当遺跡の炭化材の資料を提供し、液体シンチレーション法による年代測定を行っていただく機会を得た。

対象試料

試料は以下の時期と想定される遺構出土の炭化材である（下表）。

- ①縄文時代中期末～後期前葉の竪穴住居跡（NU-2123・2129・2131）
- ②縄文時代中期末～後期前葉の平地住居跡（NU-2126～2128・2130）
・同時期と考えられる盛土遺構（NU-2122）
- ③縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡（NU-2124・2125）

予想された数値は、出土土器型式やAMS年代測定結果などから、①・②が4000～3700yrBP、③が3400～3200yrBPとみられた。

測定結果

以下の表は、小元氏から送付のあった測定データ等（ ^{14}C 年代測定値・ $\delta^{13}\text{C}$ 値・ $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代値・暦年較正年代値）を一覧表にまとめたものである。

表V-16 年代測定結果（液体シンチレーション）

code No.	番号	遺構	層位	遺物 番号	^{14}C age	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{13}\text{C}$ 補正 年代値	calBC	calBP	比較AMS age	備考
NU-2122	SMH1-51	M-1	盛土	炭1	3676±70	-24.530	3684	2074	4024	4040±40	
NU-2123	SMH1-53	H-3	覆土	炭18	3368±58	-25.370	3352	1651	3601	3810±40	
NU-2124	SMH1-56	H-12	覆土5	炭3	3059±77	-21.960	3108	1369	3319	3280±30	後期中葉～後葉
NU-2125	SMH1-57	H-12	覆土5	炭3	3150±55	-23.490	3174	1451	3401	3280±30	後期中葉～後葉
NU-2126	SMH1-59	H-14	HM2	炭18	3704±70	-24.380	3728	2132	4082	3860±30	平地住居
NU-2127	SMH1-61	H-14	HM2	炭73	3605±70	-25.400	3599	1958	3908	3860±30	平地住居
NU-2128	SMH1-66	H-15	HM2	炭17	3380±64	-25.070	3379	1673	3623	3890±40	平地住居
NU-2129	SMH1-71	H-23	覆土	炭4	3691±67	-24.966	3692	2083	4033	3920±40	
NU-2130	SMH1-74	H-26	HM	炭6	3952±81	-25.900	3960	2465	4415	3890±40	平地住居
NU-2131	SMH1-80	H-33	覆土3	炭3	3558±56	-24.543	3565	1912	3862	—	

※ ^{14}C ageの±は、 1σ の範囲の値である。「比較AMSage」は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正後の数値（yrBP）である。対象試料は同じ遺構の同じ層位出土の炭化材であるが、同一試料ではなく、あくまで参考数値である。

考察

①縄文時代中期末～後期前葉の竪穴住居跡（NU-2123・2129・2131）では、旧→新の順に、H-23（NU-2129）→H-33（NU-2131）→H-3（NU-2123）という結果が出た。これは現場での新旧関係の認識に相応する。しかし、年代測定値にやや大きな幅があるようである。

②縄文時代中期末～後期初頭の平地住居跡（NU-2126～2128・2130）・同時期と考えられる盛土

遺構 (NU-2122) では、H-14 (NU-2126・2127) は3600~3700yrBP前後であるのに対し、H-15 (NU-2128) は3380yrBP前後という新しい数値が得られ、H-14とH-15の関係について、現場での認識よりも年代差があることがうかがえた。H-26 (NU-2130) は今回のデータの中では大幅に古い数値で、何らかのエラーを含んでいる可能性がある。M-1 (NU-2122) は3700yrBP付近の数値で、古い数値の一つとなっている。

③縄文時代後期中葉~後葉の竪穴住居跡 (NU-2124・2125) では、同一炭化材で部位の異なる試料の測定を行った。3100~3200yrBPで収まり、やや新しいものの概期に相当する数値が得られた。現場での認識に沿うものである。

全体的にばらつきが見られ、予想よりも新しい数値となった。その中において想定に近いデータ (NU-2124・2127・2129・2131) と想定と大幅に異なるデータ (NU-2122・2123・2128・2130) がある。同じ遺構のAMS測定試料のデータと比較してもほとんどが新しい数値であるが、それでもなお古いデータ (NU-2130) については、その原因を考察する必要がある。たとえば液体シンチレーション法では試料の量を確保するため、やや太い材の表皮から中心部にかけての材全体を試料とし、中心部の古い数値が関係した可能性があることなどが一例である。

今回のデータは、現場での認識やAMS法などのクロスチェックにより遺構の新旧をとらえる上で参考となるデータとなった。たとえばM-1やH-26・H-23は現場での見解とあわせて、これら遺構群の中では最も古い可能性が高いとみられ、全体では特に縄文時代中期末~後期後葉の遺構群の形成過程を考察する上で有効な数値結果となったと思われる。

(阿部)

VI まとめ

1. 遺構

下幌呂1遺跡は、幌呂川右岸の河岸段丘上沿いに長さ約1.5km、幅250～300mの範囲に広がることが確認されている。調査区は遺跡の北西部のごく限られた範囲であり、今回の調査結果からも遺跡全体では相当な数の遺構・遺物が存在することが見込まれる。

平成19年・21年の2か年にわたる調査で、遺構は住居跡（竪穴住居跡および「平地住居跡」）38軒・土坑87基・焼土32か所・盛土遺構1か所・フレイクチップ集中8か所・礫集中5か所を検出した。以下に遺構の特徴を列挙する。

（1）各時期の遺構の特徴〔図VI-1・2〕

【縄文時代早期】〔図VI-1〕

調査区の北東部を中心に、北西部・南部にも遺構が分布する。遺物出土状況から、大部分は中茶路式期のものである。

調査区北部から、浦幌式土器と石刃鎌石器群がまとまりをもって出土しており、これらに伴う可能性のある遺構が少数検出されている（P-17・18ほか）。

東釧路Ⅱ式～Ⅲ式期の遺構は、竪穴住居跡が1軒（H-38）検出された。特徴は次の通り。

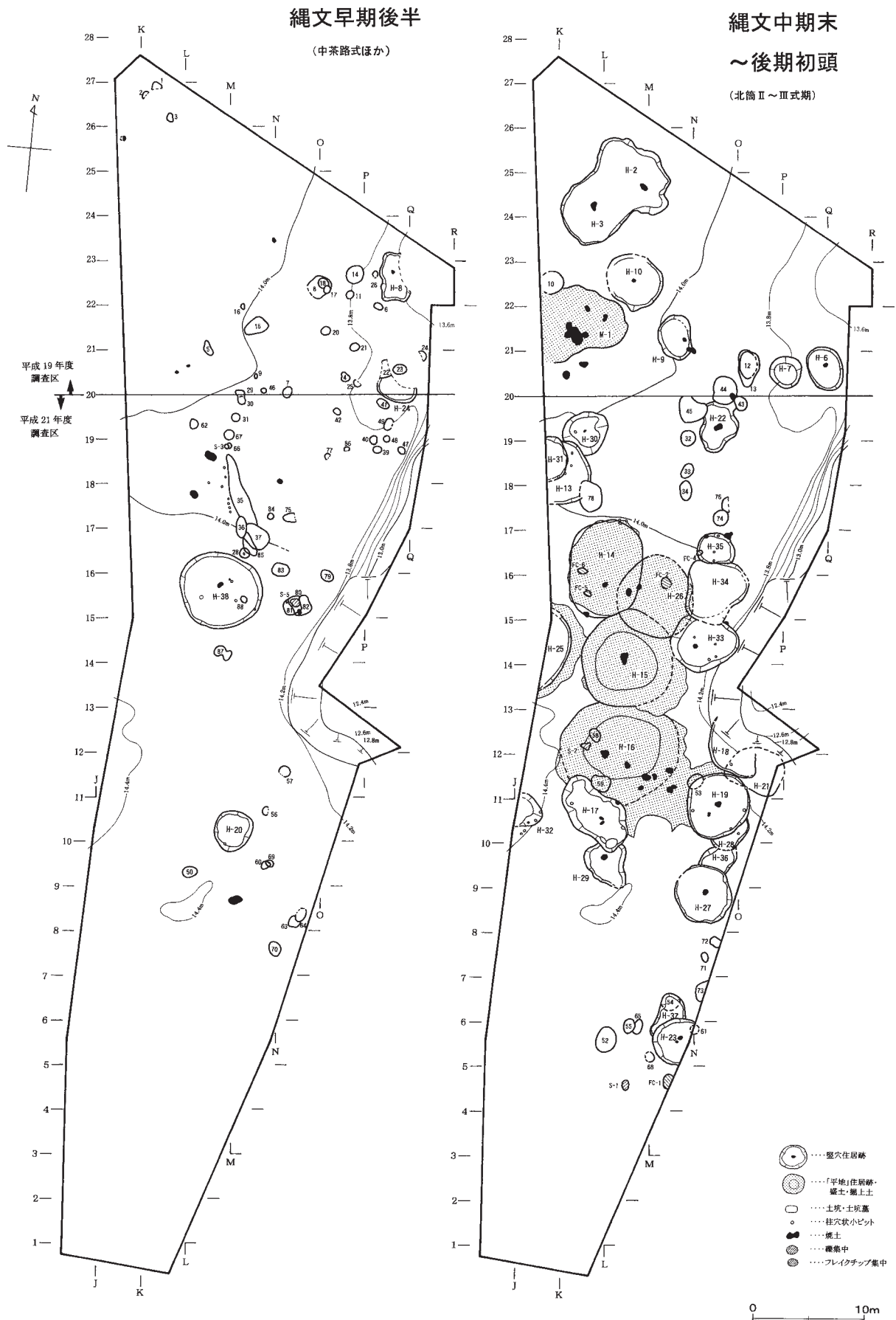
- ・ おおむね円形を呈し、遺跡内では中規模（径約5.5m、深さ約60cm）の竪穴である。
- ・ 地床炉、4本支柱穴、ゆるやかな段のベンチ状構造をもつ。
- ・ 覆土は黄色土が厚く堆積しており、その上面は起伏が大きい。一部が暗赤褐色を呈し、非常に硬質である。

覆土が被熱・硬化していることから、焼失住居の可能性はある（該期の類例は少ない）。覆土のロームは、周囲の土壌を竪穴内に埋め戻したか、屋根の被覆土（土葺き屋根）が竪穴に埋没したことが考えられる。

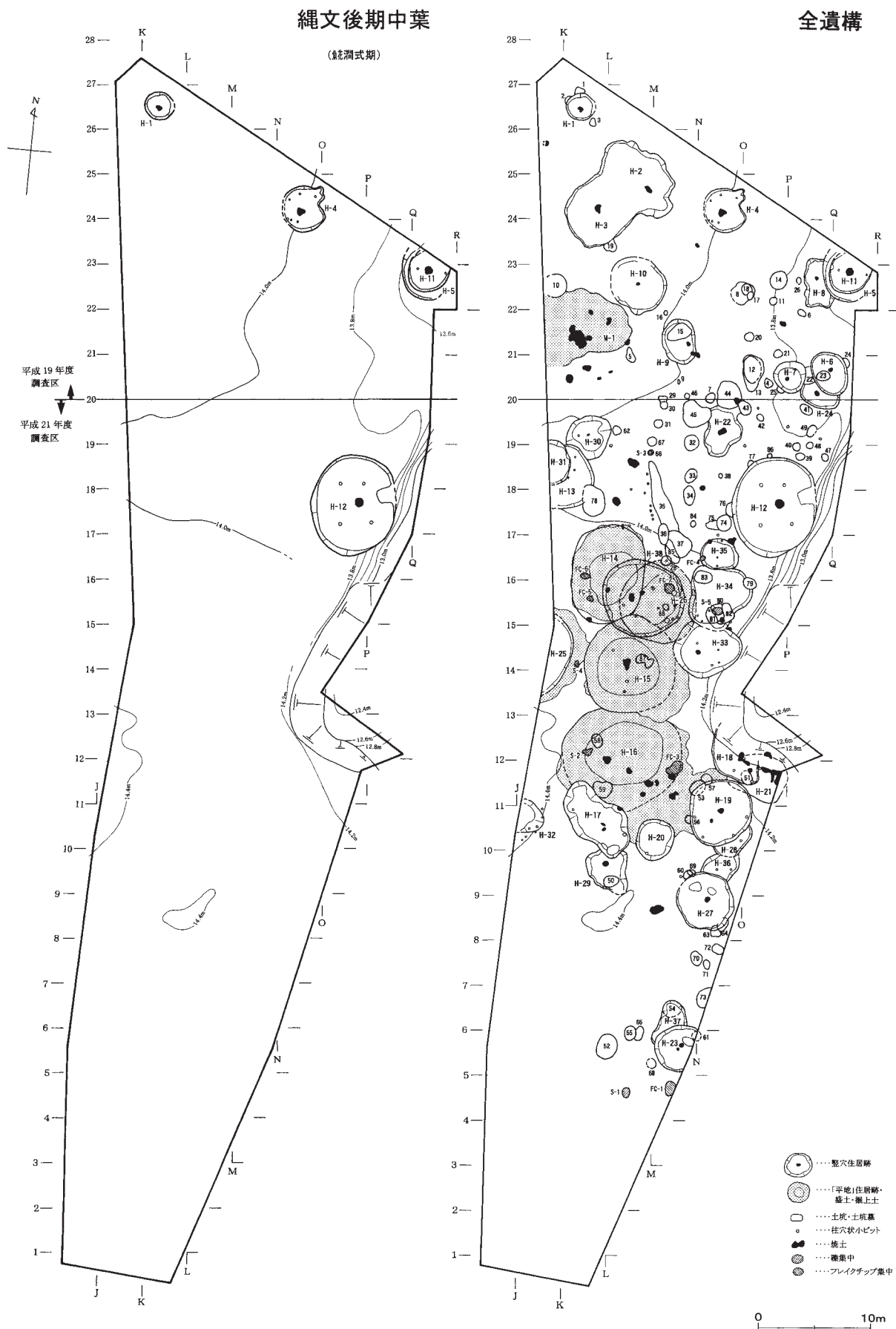
中茶路式期（あるいはそれ以前）と考えられる遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑が50基以上である。竪穴住居跡は、①小型円形で一本柱構造と推測されるもの〔H-20〕、②やや不整な隅丸長方形を呈するもの〔H-8・24?（H-24は後期の可能性もある）〕がある。前者は、床面壁寄りに住居跡中央部に向かって傾斜する径の大きい柱穴が1基ある。

中茶路式期の土坑には、以下の形状がある。

- ①「袋状土坑」……円形または楕円形で、坑底が丸みをもち壁がオーバーハングする。
〔P-4・6・7・11・14・17・20・21・29～31・39・41・42・46・47・66・67・84・86ほか〕
- ②楕円形の土坑で、坑底付近からまとまった遺物が出土する……土坑墓の可能性のあるもの
〔P-5・36ほか〕
- ③U字状の土坑……不整な楕円形の土坑が複数連結し、U字状あるいは「コ」字状になるもの。
〔P-37と85、P-81と82〕
- ④細長い、スロープ状の土坑……短軸に対し長軸が数倍に及び、坑底面が緩やかに傾斜する。
〔P-35〕
- ⑤その他の形状……円形・楕円形・不定形と多様な形状であるが、いずれも小規模である。



図VI-1 時期別遺構位置図(1)



図VI-2 時期別遺構位置図(2)

①の袋状土坑が主体で、中茶路式期の大きな特徴となっている。③および④は住居に関連する補助的な施設であることが考えられる。

【縄文時代中期末～後期初頭】〔図VI-1〕

北筒Ⅱ～Ⅲ式期の遺構は調査区北部～南東部に分布し、特に中央部が濃密である。該期と考えられる住居跡は29軒である。また墓2基を含む土坑25基が該期のものと思われる。土坑は楕円・円形で径1～2mの比較的大型のものが多く、炭化材が出土したものがある。

竪穴住居跡の主な特徴は次の通りである。

- ・平面形が楕円形を基本とするが、連結するものや不整形のものも多い。
- ・竪穴の深さは多様であり、床面は起伏があるもの、段をもつものなどが目立つ。
- ・炉は地床炉であり、小土坑の中に形成されたものもある〔H-18〕。
- ・柱穴は確認できたものが少ないが、小型で浅い柱穴が壁寄りの位置で検出されたものがある。
- ・屋根を構築していたとみられる炭化材および焼土が残る住居跡がある〔H-3・23・30ほか〕。炭化材の中には、繊維状のものも含まれている〔H-23・27ほか〕。焼失住居とみられる。
- ・屋根の葺き土と推定される黄色土が残る住居跡がある〔H-3・23・30ほか〕。黄色土が「掘上土」から住居内覆土にまたがる住居跡もあり〔H-25〕、土葺き屋根の住居跡と推定できる。
- ・覆土下位(床面付近)にベンガラとみられる赤褐色の土壌が堆積するものがある〔H-2ほか〕。

出土遺物やこれまでの調査例から、北筒Ⅱ式期～北筒Ⅲ式期では「比較的小型で不整形な住居→比較的大型で円形に近い住居」へ変遷するものと思われる。時期が判断できる竪穴住居は以下の通りである。

〔北筒Ⅱ式(古)〕 H-10・17・18・19

〔北筒Ⅱ式(新)〕 H-2・3・22・27・28

〔北筒Ⅲ式〕 H-30

一方「平地住居跡」を4軒検出した。それぞれ周縁部を重複させている。また「盛土遺構(M-1)」もその規模・構造から類似の遺構である可能性がある。平地住居跡には、屋根を構成していたとみられる炭化材や屋根の葺き土と推定される黄色土が残っており、炭化材は中央部にはほとんど残っておらず、周縁部に広がっていた。時期は、中期末～後期初頭の北筒Ⅱ式期にほぼ収まるとみられる。

各住居の特徴を構築順と考えられる通りに記載する。

〔H-26〕隣接する平地住居および竪穴住居に切られる。20～30cmと厚く堆積する黄色土上・中から炭化材がやや不規則に検出され、北筒Ⅱ式の个体土器・大型土器破片、大型の石槍が出土し、微細な剥片類が多量に含まれている。

〔H-16〕長軸11mに及ぶ。南東部で黄色土の中間付近から炭化材や焼土が検出された。黄色土がさらに南東側に広がることも含め、一部掘上土を基盤として住居が構築されている可能性がある。

〔H-14〕長軸8m以上で楕円形を呈する。東側は住居跡H-26の土壌を利用したと考えられる黄色土が周堤状に残存する。炭化材は周縁部の大部分に広がる。径3cm弱のやや細い縦列する枝材と横木が組み合わされた状態で1.2×2.2mほどの単位でまとまりがある。北側には径5cm程度の太い垂木がみられ、南側周縁部には径1cm前後の細い材が垂木に横たわっている。また南側の幅約1mは炭化材がまったく検出されず、出入口など別の構造であった可能性がある。

〔H-15〕長軸約10m。炭化材が東半周縁部に広がり、西半周縁部は混じり土の少ない黄色土が堆積していた。炭化材は北東側と南東側にまとまりがあり、比較的大いものや一部平板状のものが見られた。

【縄文時代後期中葉～後葉】〔図VI-2〕

鯨澗式期（～堂林式期）の竪穴住居跡が5軒検出された。調査区北部端の幌呂川河岸寄りと、調査区北東部の崖面付近にある程度の間隔をおいて位置する。いずれも段丘縁辺部である。住居跡の構造には、以下のような特徴がある。

- ・掘り込みが深い。床面はおおむね平坦で、壁は急に立ち上がる。
- ・出入口構造がある〔H-4・12〕。また出入口付近から中央部にかけて棒状・板状の炭化材が出土する〔H-12〕。
- ・壁際から完形土器や特殊遺物が出土する。

〔H-4〕注口土器および小型の深鉢形土器、〔H-5〕欠損箇所のない完形の小型注口土器、〔H-12〕完形の「四脚付浅鉢」のほか漆塗櫛・堂林式の個体土器

特にH-12では壁際に特殊な遺物を納め、出入口付近で建材を焼失させたとみられる。該期の竪穴住居内から完形や特殊な土器が出土する例は多く知られている。住居廃絶とともに埋葬を行い副葬品を供える「廃屋墓」の検討もなされる場所であるが、当遺跡の場合は覆土が流入土と自然堆積土と見られる土壌が大部分でマウンド状の乱れた堆積層がないことなどから、この可能性は低いと思われる。しかし「人送り」ではなく、特殊遺物や住居そのものを含めた「モノ送り」などの儀礼的行為が廃屋時に行われていたことが考えられる。

ところで、この時期の竪穴住居跡の調査は根釧地域では初めてとなる。しかし当遺跡の周辺では、幌呂川の対岸にある下雪裡第4竪穴群で手稲式の口縁部片、下雪裡第2竪穴群で鯨澗式の口縁部片が採集されており（澤1974）、ほかにも釧路湿原縁辺部の河川沿いに該期の遺跡があると思われる。

【縄文時代晩期】

縄文時代中期や後期の竪穴住居などの覆土から焼土が検出され、周辺から緑ヶ岡式土器が出土した。調査区内では、小規模な活動の痕跡が残っていた。

（2）根釧網地域の平地住居跡〔図VI-3〕

今調査で特筆されるのは、少なくとも4軒（M-1を含めると5軒）の縄文時代中期～後期の平地住居跡を検出したことである。

「平地住居跡」は「竪穴住居跡」に対して掘り込みのない（あるいはほとんどない）住居跡をさすが、その構造から検出が困難な遺構であった。道東地域の縄文時代の平地住居跡は、2004・2005年の斜里町教育委員会による来運1遺跡で検出・認識された（斜里町2006）。以降、それまで調査された類似の遺構を見直すとともに、その後の発掘調査により新たに発見されたものがある。

平地住居跡の類例（参照：村本周三2009ほか）

斜里町来運1遺跡では、「焼けた土葺伏屋式平地建物跡」1軒（FH）が報告されている〔図VI-3上〕。羅臼式（北筒Ⅲ式）期とみられ、下幌呂1遺跡の平地住居跡よりやや新しい時期である。楕円形で約13m×約12mとかなり大型である。緩傾斜地に建てられているため高い側（南）の一部を若干掘り込んでいる。黄色土は東-南-西側に周堤状に厚く堆積し、中央部付近は薄い。炭化材も同様の範囲でよく残っており、垂木と横木とで格子目状に組まれている。垂木は中心部に向かい間隔が狭くなっていることから、壁材ではなく屋根材と考えられている。また垂木尻付近で径1～2cmの細い材が密集する部分がある。格子目状の材は径5cm前後で、大型の住居を支えるには細いが、下幌呂1遺跡H-14の材よりは太い。また柱穴も比較的小型のものが多く、遺構中央部が希薄で西側周縁部に多く分布する。これらの結果から、復元想定図が作成された（東北芸術工科大学宮本長二郎氏）。

根室市穂香竪穴群では、JM-1・3・5・6が類似遺構である。トコロ6類式期以降で、下幌呂1遺跡に近い時期である。JM-5は東西のまとまりに分かれるが、それぞれが平地住居跡の可能性がある。特に西側は黄色土が約8×6mにまとまり、炭化材・焼土・ベンガラが中心部からやや外側に分布する〔図VI-3下段右〕。

根室市穂香川右岸遺跡では、JM-2が平地住居跡とみられる。またJM-1・3・4もその候補に挙げられる。JM-1からはトコロ5類の土器が出土している。JM-2は、黒色土中にドーナツ状の黄色土が検出された状況や、焼土を含む黄色土の堆積状況が下幌呂1遺跡H-14と近似する。これに加えて、焼土・ベンガラ・小型の柱穴が内周する。炭化材は、一部が格子状に見える〔図VI-3下段左〕。

近年では、斜里町オクシベツ6遺跡(斜里町2008 概要報告)・朱円48遺跡(斜里町2010 概要報告)で平地住居跡の可能性が高い遺構が見つかっている。朱円48遺跡では、平地住居跡が3軒検出された。弧状に巡る周堤状のローム質土〔PIT5・6〕、遺構中心部から放射状に分布する炭化材と焼土〔PIT6・7〕、炉跡と推定される焼土のほか弧状に巡る柱穴状小ピット群と周溝状の溝が確認された〔PIT7〕。トコロ6類の完形土器が出土している。さらに村本氏によれば、標津町伊茶仁チシネ第3竪穴群の一部でも焼土とともに一部直交するものを含む比較的細い炭化材のまとまりがあり、平地住居跡と確実視している。そのほか、釧路町天寧1遺跡の炭化材の広がる焼土(F-11)、標茶町茅沼遺跡第2地点の「盛土」についても平地住居の可能性のあるものとしている(村本2009)。

このように、縄文時代中期～後期の平地住居跡は検出例が増加しており、根釧網地域の該期における住居形態として位置付けられるものである。

下幌呂1遺跡の平地住居の構造

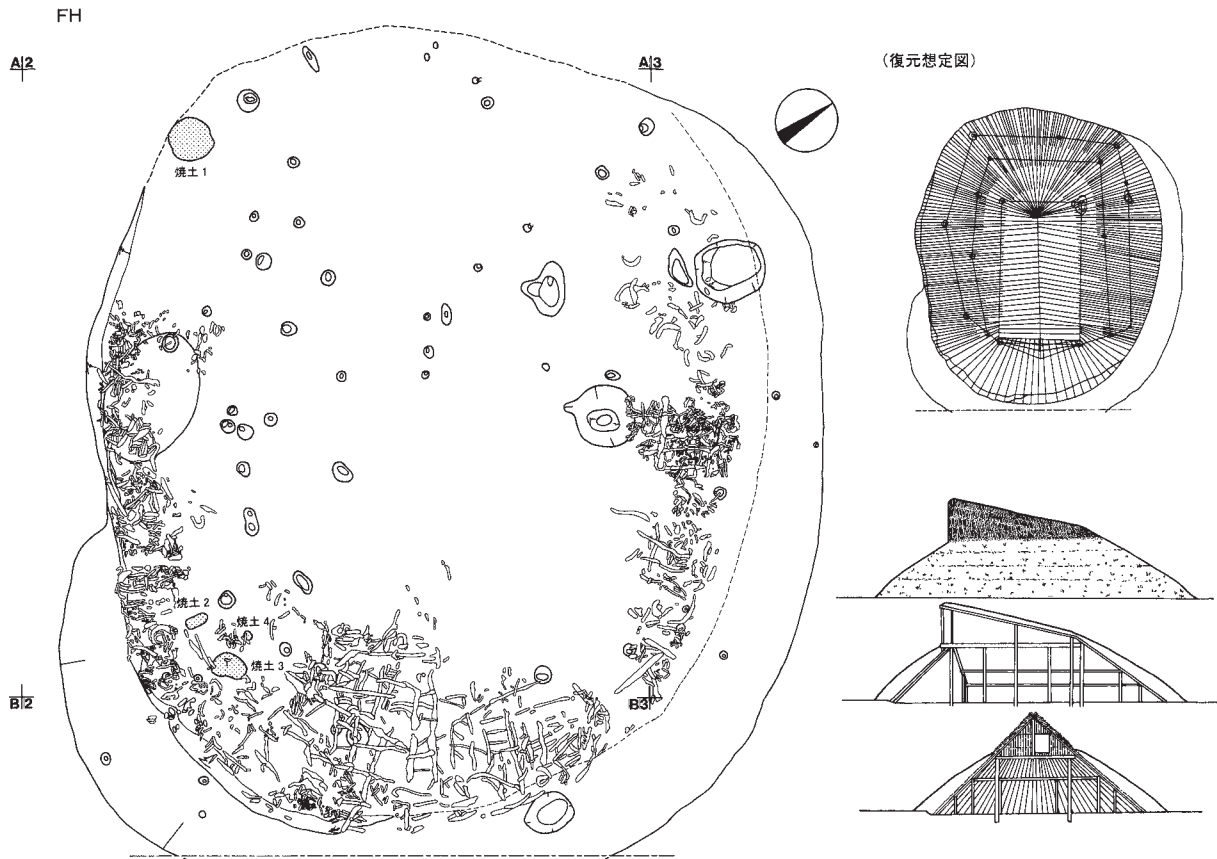
ふり返って下幌呂1遺跡H-14の構造をみると〔図Ⅲ-45〕、柱穴がほとんど検出できなかったため上屋構造を復元することは困難である。しかし黄色土や内周する炭化材の状況から推測すると、出土炭化材の単位間に住居の支柱を設け、住居中央に向かって傾斜する材が格子状に組み、周堤状の黄色土中に材の末端部を差込んだことが想定される。中央部で黄色土が薄く炭化材がほとんどないのは、葺き土が薄い上に火の勢いが強かったためとみられる(岩手県一戸町御所野縄文村での実験例など)。太い支柱はほとんど燃えずに腐朽・撤去されたことが想定される。下幌呂1遺跡の平地住居跡も、来運1遺跡復元図に近い構造をもつ、土葺き屋根の伏屋式平地住居跡であったと推測される。

ところで平地住居跡H-14は来運1遺跡FHと比較して、炭化材の径がさらに細い、径が垂木に相当する縦方向の材が遺構中心に向かってあまりすばまらない、縦方向の材に対して横木が少ないなどの相違点がある。このことから、材が細く上屋構造を支えるのに不十分であり、壁材でも屋根材でもなく床敷きの材である、という考え方がある。しかし、H-15で板状の材が出土しているものの少なく、床面に黄褐色土をはさんでいる点やH-14の東側の炭化材がH-26から傾斜するように出土している点など、慎重に検討すべき要素がある。

平地住居跡と竪穴住居跡

平地住居跡と竪穴住居跡は、下幌呂1遺跡の該期の遺構位置図〔図VI-1右〕をみても明らかなどおり、縁辺部を除き重複を避けて遷地している。このことは、穂香竪穴群など他の遺跡でもみられる。数軒は同時に併存している可能性があり、竪穴掘削時の土壌が平地住居または他の竪穴住居の屋根土に利用されたことが考えられる。不整形で小型の竪穴の一部は、土葺き屋根用のロームを得るために掘削された可能性もある。また竪穴住居は冬用、平地住居は夏用といった季節利用も考察されるところであるが、これらを推察できる根拠は明示できない。

〔斜里町来運1遺跡〕



(斜里町 2007 に加筆・編集) S=1/120

〔根室市穂香川右岸遺跡〕

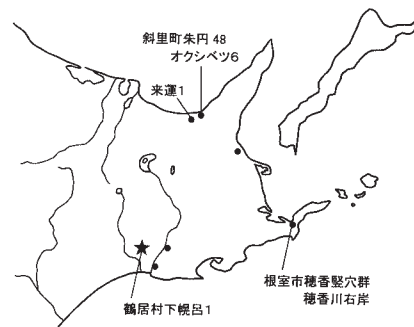
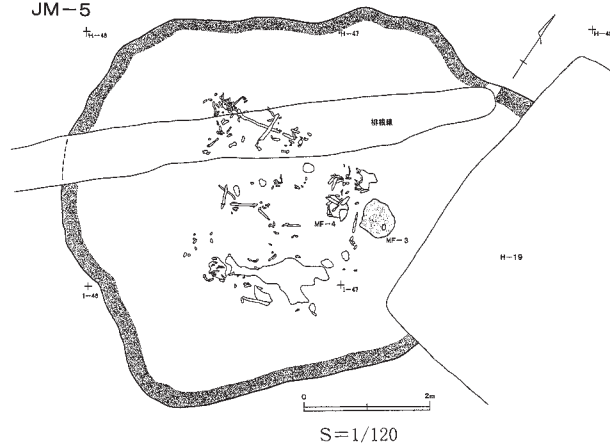
JM-2



(北海道埋蔵文化財センター2003 に加筆・編集) S=1/120

〔根室市穂香堅穴群〕

JM-5



図VI-3 平地住居跡例

2. 遺物

遺物は土器・石器等9万点あまりが出土した。主な土器型式の特徴を挙げ、石刃鍬石器群についてまとめ、特殊な土製品などについて類例をあげて特徴を検討したい。

(1) 土器〔図VI-4~6〕

出土点数が多い土器型式は、縄文時代早期後葉の中茶路式（約33%）、中期末~後期初頭の北筒Ⅱ~Ⅲ式（約25%）、後期中葉の鮎澗式（エリモB式）（約10%）である。

浦幌式〔図VI-4の1~4〕

上面観が隅丸方形の平底条痕文土器である。当遺跡出土の土器には、以下の特徴がある。

- ・内外面とも条痕文のみのものが主体で、絡条体圧痕が施されるものは数少ない
- ・胎土に繊維を含んでいるものがほとんどない。

浦幌式土器は、絡条体圧痕が主な文様要素で胎土に繊維を含んでいる。当遺跡の土器がこれらの件を欠くことは、澤がすでに採集資料から指摘している（澤1974）。しかし今回の発掘資料では、少ないながらも絡条体圧痕が主な文様の土器が伴っており、浦幌式の範疇でとらえてよいものとする。上記の特徴は、地域色ととらえられる。

また図VI-3の2は補修孔の2孔間を溝状に削ってつないでおり、浦幌式の特徴の一つである。類例が浦幌町共栄B遺跡資料にある。

中茶路式〔図VI-4の6~17〕

総じて土器破片は細かい。器壁が薄く、橙色を呈するものが多い。全体を復元できたものは少ないが、深鉢10個体以上のほかに上面観が楕円形の小型の鉢がある。大きく2つのまとまりがある。

①平行する細貼付帯間に波状の細貼付帯を組み合わせるもの、縦位の細貼付帯で杵状文やクランク状の文様を加えるものがある。細貼付帯間には絡条体圧痕・結束羽状縄文・撚糸文（・短縄文）で充填される。波状口縁の深鉢が含まれる〔図VI-4の6~10〕。

②平行（・波状）する細貼付帯が口縁部~底部付近まで全面に施されるもの。撚糸文（・短縄文）・結束羽状縄文が充填されるが、結束羽状縄文は地文となっているものがある。平縁・平底で急に立ち上がり、胴部のふくらみが弱いものが多い〔図VI-4の11~17〕。

①は前型式のコッタロ式の影響があるものとみられるが、①・②とも細貼付帯を平行・多段におおむね等間隔で設けることを基本としており、大きな時間差はないと考えられる。

北筒Ⅱ~Ⅳ式〔図VI-5の18~24〕

遺構の主体時期であり、住居跡に伴うものを中心に各段階の土器が少数ずつ復元できた。当報告では北筒Ⅱ式「古段階」（工藤編年の第1・2段階）までを縄文時代中期、北筒Ⅱ式「新段階」（同第3・4段階）から縄文時代後期としている。

北筒Ⅱ式「古段階」は比較的少ない。深鉢は胴部が膨らみ口縁部が外反し、平縁に突起がある。断面三角形の肥厚帯を有し、押引文や刺突列（・刻み列）が巡る。肥厚帯下の円形刺突は比較的深くて小さい。

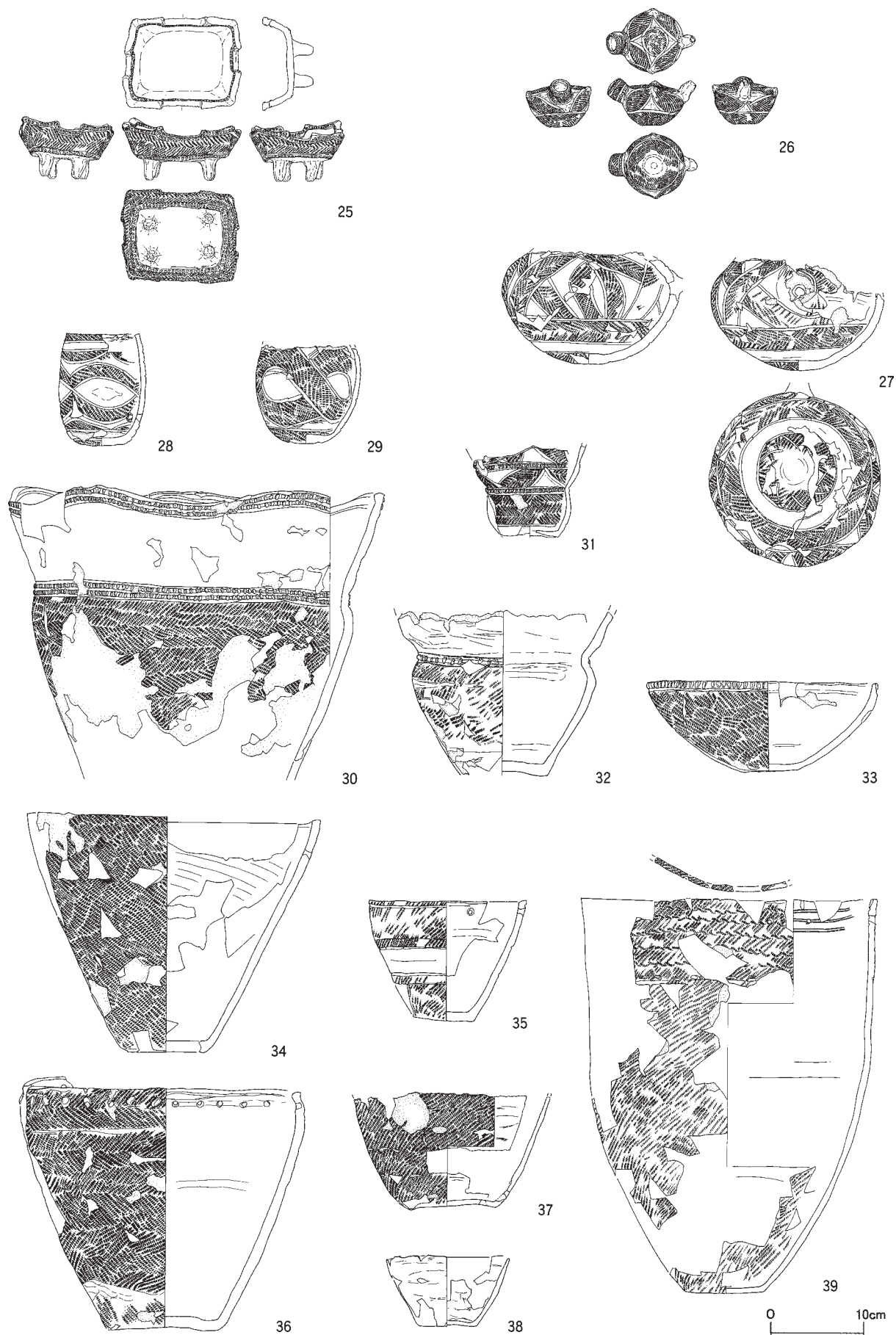
北筒Ⅱ式「新段階」は、北筒式の中では最も多く出土した。胴部のふくらみはほとんどなくなり、口縁部肥厚帯が発達する。肥厚帯下の円形刺突は浅く大きい。胴部は、結束羽状縄文や細い無文部を設け多段階構成をとるものが目立つ。当遺跡の該期の土器の特徴として、肥厚帯および口唇上の「沈線」が、茎などやや湾曲のあるへら状工具を連続押捺した「刻み列」というべきものが多いことが挙げら



図VI-4 復元土器集成(1)



図VI-5 復元土器集成(2)



図VI-6 復元土器集成(3)

れる。なお、文様がトコロ6類に近く器形が北筒Ⅲ式に近いトコロ5類はほとんどない。

北筒Ⅲ式は平縁・平底の円筒形で、器壁が厚く、やや脆い。幅広の肥厚帯が特徴であるが、徐々に目立たなくなる（図Ⅳ-5の22など、羅臼式に相当）。肥厚帯上に縦位の隆起帯を設けるものがあり、破片資料では隆起帯上に縄線が施されるものも含まれている。口縁部下は、磨消状の浅い凹帯上に円形刺突をめぐらせている。胴部は複節縄文が目立つ。

北筒Ⅳ式は、口縁部に円形刺突が巡り、耳状突起をもつものや斜め下方からの刺突文をもつなどの要素があるが、当遺跡では出土点数が少ない上、いずれかの文様要素が欠けたものが出土している。

鯨潤式（エリモB式）～堂林式〔図Ⅵ-6の25～36〕

該期のまとまった資料は、根釧地域では希少である。鯨潤式の新段階と堂林式の古段階の土器があり、前者はその大部分がエリモB式に相当するものと思われる。エリモB式は、①刻み列と突瘤が併存する、②太い曲沈線による区画の磨消縄文が主体である、③口唇上に小突起がある、などの要素で鯨潤式と区別される（鷹野1981）が、器形や刻み列、文様帯などは鯨潤式と同様である。鯨潤式が新段階へと進む中で、道央南東部から道東にかけて展開した型式である。

当遺跡近郊のまとまった資料は網走方面に求められ、北見市常呂町トコロチャシ南尾根遺跡・常呂川河口遺跡、斜里町オクシベツ川遺跡・オライネコタン3遺跡ほかがある。トコロチャシ南尾根遺跡では深鉢同様の広口の口縁部をもつ注口土器があり、胴部は帯状弧線文がえがかれている。常呂川河口遺跡では、刻み列と突瘤が併存する深鉢口縁部などが含まれる。オクシベツ川遺跡では、後期中葉手稲式～後葉栗沢式のまとまった資料があり、道東地域の該期の指標となる土器群がある。特にエリモB式～堂林式の資料が充実しており、刻み列と突瘤が併存する深鉢が複数個体復元されている。

当遺跡出土の鯨潤式（エリモB式）も器種が多岐に渡る。大小の深鉢・鉢・注口・壺のほか、単孔壺・四脚付・水差し形の小型注口といった特殊な器形がある。深鉢は、波状口縁のもの〔図Ⅵ-6の30〕や凸面体をもつもの〔図Ⅵ-6の31〕がやや古い。刻み列は2列を基本とし、1列のものは次第に間隔をあけたり、斜めに刻む〔図Ⅳ-12の109〕など崩れ、ついに沈線のみを痕跡的に残す〔図Ⅵ-6の35〕。壺・注口土器は曲線の帯状文による文様が展開する。

該期の土器は、胎土に赤色または黒色を呈する細かい丸みのある砂利が含まれている。これは釧路地域西方の豊頃山地から供給された「天寧礫岩層」が由来とされるもので、釧路湿原から海岸部にかけてみられる。これらの砂利を含む土器は、四脚付土器を含め地元で製作されていることがうかがえる。その中で、H-5出土の大型鉢〔図Ⅲ-18の5〕はこれらの砂利を含まず、白色の粒子を含み全体では茶褐色を呈しており、他所から搬入されたと考えられる。ちなみに類似の土器に、千歳市キウス4遺跡出土の深鉢がある（道埋文2003『千歳市キウス4遺跡（9）』第一分冊図Ⅴ-99の917ほか）。

（2）四脚付土器〔図Ⅵ-7〕

今調査で特筆すべき土器として、「四脚付浅鉢形土器」がある。①棒状の脚が4か所、②方形の浅鉢、という点で縄文後期の土器としては全国的にも希少である。

四脚付土器の類例

四脚付土器が確認できるのは、深鉢以外の器種が本格的に生じ始める縄文中期以降である。一例として、栃木県矢板市山苗代A遺跡〔図Ⅵ-7の1〕の有孔罎付土器の一種を挙げた。大型の広口壺を支えるように、底部縁辺に沿って湾曲する板状の脚が4か所設けられている。これに類する脚は、秋田県大湯環状列石周辺遺跡（4脚）・青森県六ヶ所村大石平遺跡（3脚）の縄文後期前葉の鉢（底部のみ）などにみられる。ここまでは、間隔をあけた高台といったような形状である。

下幌呂1遺跡例の時期である縄文時代後期中葉～後葉では、最も近似するものとして千歳市キウス4遺跡例〔図VI-7の2〕がある。堂林式期で下幌呂1遺跡のものよりやや新しい。椀に近い皿に小型で棒状の脚が付されている。2片のみが残存する。四隅に2か所ずつの突出部があり弧線文で結んでいる。管見では、動物形とみられる四足の土器を除いて、道内で唯一の該期の類例である。

東北地方では秋田県北秋田市漆下遺跡例がある〔図VI-7の3〕。上面観が楕円形でやや碗状を呈する、長軸径約22cmを測るやや大型の鉢に丈の短い脚が付される。弧線文を組み合わせた区画に0段多条の縄文が充填されている。その形状から、編み籠状の器を模したようにもみられる。

関東地方では、小型の浅い鉢に橋状突起が付され、やや太い棒状の四脚が取り付けられた「太岳院類型」(大倉1994)の土器が各地で少数出土している(神奈川県秦野市太岳院遺跡〔図VI-7の4〕・東京都町田市なすな原遺跡・埼玉県桶川市後谷遺跡・高井東遺跡・千葉県佐倉市江原台遺跡・市原市西広貝塚ほか)。栃木県小山市寺野東遺跡の小型円筒形の脚付土器〔図VI-7の5〕も同類型とみられる。注口土器にも大小の四つの脚が設けられるものがある(「有脚注口土器」、千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡〔図VI-7の6〕ほか)。いずれも曾谷式期前後であり、下幌呂1遺跡例の時期に近似する。また宮城県石巻市宝ヶ峯遺跡にも有脚注口土器がある。これらの例は下幌呂1遺跡例とは形状が異なり、系統を異にするものである。

縄文時代晩期になると、東北～関東地方に数多くの四脚付土器が出現する。東北の亀ヶ岡文化圏に多いものは、浅鉢や注口に付される瘤状の脚である。器の底部四隅を内側から外に押し出すようにして膨らませる手法で作出している。一方柱脚状をなすものは数少ない。①大型の皿に長く太い脚がつくもの(青森県弘前市尾ノ上遺跡・外ヶ浜町宇鉄遺跡〔図VI-7の7〕・茨城県稲敷市福田貝塚・埼玉県後谷遺跡ほか)、②鉢または浅鉢に短い棒状の脚が付されるもの(宮城県石巻市沼津貝塚〔図VI-7の8〕ほか)がある。道内では七飯町大中山地区における高橋秀夫氏による①のタイプの採集資料があり、径20cmの皿に棒状の太い脚が取り付けられている。柱脚状をなすものは、四脚の形状から縄文後期の脚の影響を受けている可能性がある。

四脚付土器の由来

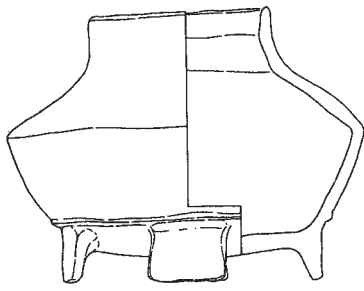
方形の脚付の器で想起されるものの一つに、青銅器がある。青銅器といえば、縄文時代晩期の「鬲形土器」が中国大陸の青銅器「鬲」に類似し、縄文時代の大陸系文物として石刃鏃・玦状耳飾・有孔石斧(玉斧)・青銅刀子(「内反刀」)などともに大陸から影響を受けたことを示す一例として挙げられることがある。中空袋状の3脚をもつ土器で、青森県に数個体みられる(外ヶ浜町今津遺跡・東北町虚空蔵遺跡ほか)。その前時代の殷・西周初期には、方形で四脚の「方鼎」と呼ばれる調理器が青銅器全体的には少ないながら盛行する(河南省安陽市殷墟出土例〔図VI-7の9〕)。深さが徐々に浅くなるものの、丸みをもつように変遷するようである。しかし長軸両端に把手があり、大型の調理器であることなど、直接の影響は考えにくい要素がある。

一方、縄文後期中葉～後葉において、土器以外の遺物で四脚のあるものでは石製品・木製品がある。一例として小樽市忍路土場遺跡では、小型石皿〔図VI-7の10〕やオロシガネ状石製品に脚を有するものがある。また同遺跡では木製品にも四脚付きの小型の皿があるほか〔図VI-7の11ほか〕、大型の石皿や長方形の浅い鉢形の木製品に四脚が付くものがある。千歳市キウス4遺跡でも、鯨潤式の新段階にあたる低地の層から同様の木製品が出土している。

下幌呂1遺跡の四脚付浅鉢土器は胎土から在地で製作されたと推定できるが、鯨潤式期あるいはそれ以前から存在する、方形(または隅丸方形)でしかも丈の低い四脚が付されるこのような石製品や木製品の影響を受けて成立した可能性が考えられる。

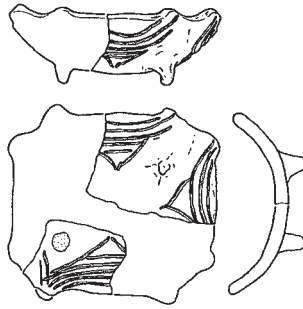
(阿部)

<縄文中期>

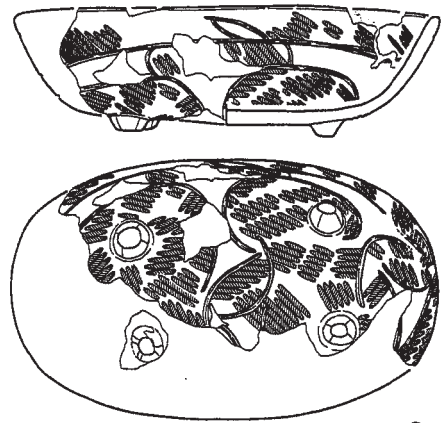


〔栃木県山苗代A遺跡〕

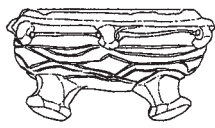
<縄文後期>



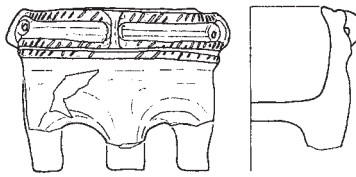
〔千歳市キウス4遺跡〕



〔秋田県漆下遺跡〕

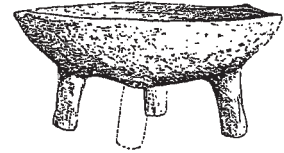


〔神奈川県太岳院遺跡〕

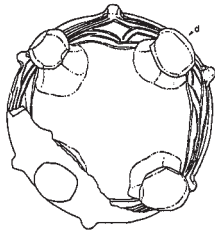


〔栃木県寺野東遺跡〕

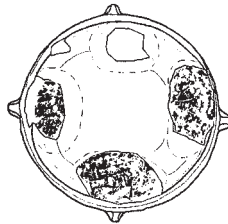
<縄文晩期>



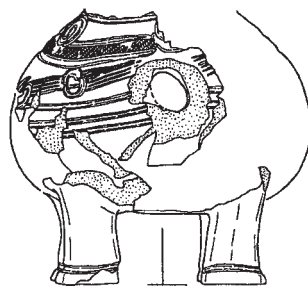
〔青森県宇鉄遺跡〕 ※縮尺不同



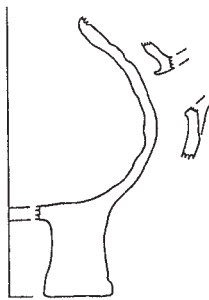
4



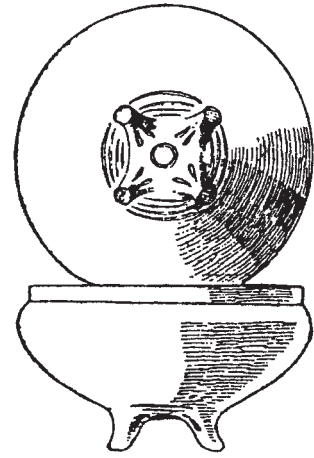
5



〔千葉県宮内井戸作遺跡〕



6



〔宮城県沼津貝塚〕 ※縮尺不同

8

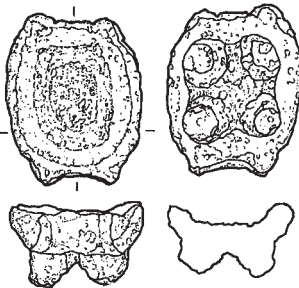
<青銅器>



〔河南省殷墟〕 ※縮尺不同
『黄河文明展』(1986)より

9

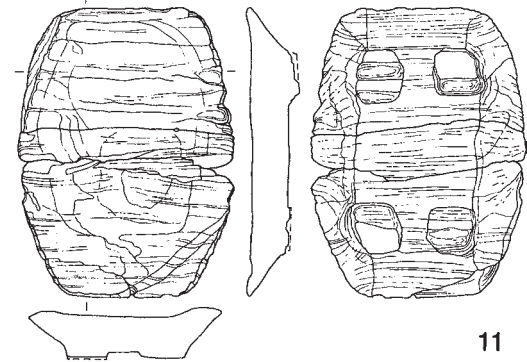
<石製品>



〔小樽市忍路土場遺跡〕

10

<木製品>



〔小樽市忍路土場遺跡〕

11



図VI-7 四脚付土器関連図

(3) 石刃鏃石器群〔図VI-8~11〕

石器組成〔図VI-8〕 定型的な石器は石刃鏃30点、彫器155点、彫器削片112点、削器43点、搔器12点、錐形石器9点、二次加工ある石刃88点、石刃71点、石刃核1点である。その他、同一集中域から矢柄研磨器、擦り切り技法による石斧などが出土している。また、遺跡からは打ち欠きのある小型の石錘が出土しており伴う可能性がある。石刃鏃は折損品が多く、完形品が少ない。彫器・彫器削片・削器・石刃類は比較的多く出土しているが、石刃核は折損品の1点のみである。

石器製作技術 石刃剥離技術が認められる。それ以外の剥片剥離技術が存在するかは不明である。

〈石刃剥離技術〉 石刃には稜付き石刃(75・76)や石刃核の側面調整痕が左右側縁に残るもの(32・56)、角礫面が残るもの(59・76・78)があり、また、石刃核(82)には裏面から側面への横位の調整痕や裏面に原礫面が残ることから角礫を素材として原石の角に稜を作成し、横位の剥離によって側面が形成される角柱状ないしそれに準じる形状の母型が準備される〔図VI-9工程1〕。石刃は完形品が長さ10~15cm程度、幅2~3cmであることから、原石の大きさは20cm程度と推測される。石刃剥離は打面調整を伴い、打面と作業面の角度は直角に近く、打点位置は作業面の二稜の中央、稜の頂部のやや内側に設定される。剥離される石刃の形状は、打面は三角形・菱形・台形状で、打面周辺の平面形は肩が張り、角形を呈する。側面形は直線的で、末端部は反りがある。途中、ヒンジにより悪化した作業面形状を修正する稜調整が行われる場合がある(63)。繰り返される打面調整、下端部を取り込む石刃剥離によって石刃核高は減少し、石刃剥離の進行に伴う石刃核の直径が減少し、剥離される石刃は相対的に長く幅広のものから短く幅の狭いものに変化する(工程2~4)。これらの石刃剥離技術の諸特徴はこれまで復元されたもの(高倉1997・1998、北沢2006など)と同様である。

〈二次加工技術〉 石刃鏃は、幅1.3cm前後、厚さ2~4mmが主体である。加工による変形の度合いが低いことから完形の石刃類に比べ明らかに小型のものが選択されている。剥離される石刃サイズが大型から小型へと変化していく石刃技法の特徴から小型石刃は石刃剥離の後半段階(工程4)で剥離されたものが主体である。石刃核の側面や原礫面を残すものが少ない点も後半段階の特徴を示している。

尖頭部は素材の打面側、先端側に作出され、打面側はバルブの膨らみを除去するように加工される。基部は腹面側からの急角度の加工により直線~やや内湾気味に整形され、加工前は切断面であったと思われる〔図VI-10〕。側縁の加工は腹面の両側縁全体に施されるものが多く、背面側は尖頭部に限定される。腹面側は反時計回りに加工が行われるものが多い。縁辺は鋸歯状で、先端部の細い工具で押圧剥離によって打点を横にずらしながら加工されている。他の器種と異なり線状痕がほとんど残らず、器種の変換が認められない。

錐形石器は石刃の打面側・先端側に背面への急角度の加工、腹面への平坦剥離による断面三角形の尖頭部が作出され、刃部には潰れが認められる。つまみ付きナイフは切断された石刃の端部に錯向剥離によるノッチが作出され、搔器は石刃の末端部に斜位に丸い刃部が作出される。

彫器・彫器削片は非常に多く、接合資料からは幅2~3cmのやや大型の石刃が利用され、石刃核の側面を残すものも多い。長さ4~6cmに切断された素材が多く、左右側縁で折れ面を打面として上下から削片剥離が行われる。削片の打点は縁辺から5mm程度内側で、背面ないし腹面側に偏る傾向がある。素材の側縁に加工のあるものや折れ面を切る側縁に平行方向の線状痕が残るものが多いが、削片剥離後に形成された線状痕や微細剥離は明瞭ではない。

削器・二次加工ある石刃は完形で長さ10cm前後、幅2~2.5cmのものが多い。幅は彫器とほぼ同じであるが、彫器には2.5~3cmのものが含まれ、より幅広のものが選択された可能性がある。石刃核

側面の残るものもあり、側縁に線状痕が多く残される特徴は彫器と一致する。加工は側縁に限定されるものから面を覆うものがあり、線状痕は加工を切るものが多く、基部側に加工が偏る56aは線状痕も基部側に偏る。

削器・二次加工ある石刃・彫器は素材・二次加工・線状痕などの類似から同一工程で捉えることが可能であり、次の4段階に復元される〔図VI-11〕。①素材石刃の側縁を加工が行われる（行われな場合もある）。②側縁に平行（一部直交もある）する線状痕や微細剥離の残る作業が行われる。③長さ5cm程度の短冊状に分割される。④左右側縁で背面ないし腹面の縁辺から5mm程度内側を加撃して彫刀面が作出される。

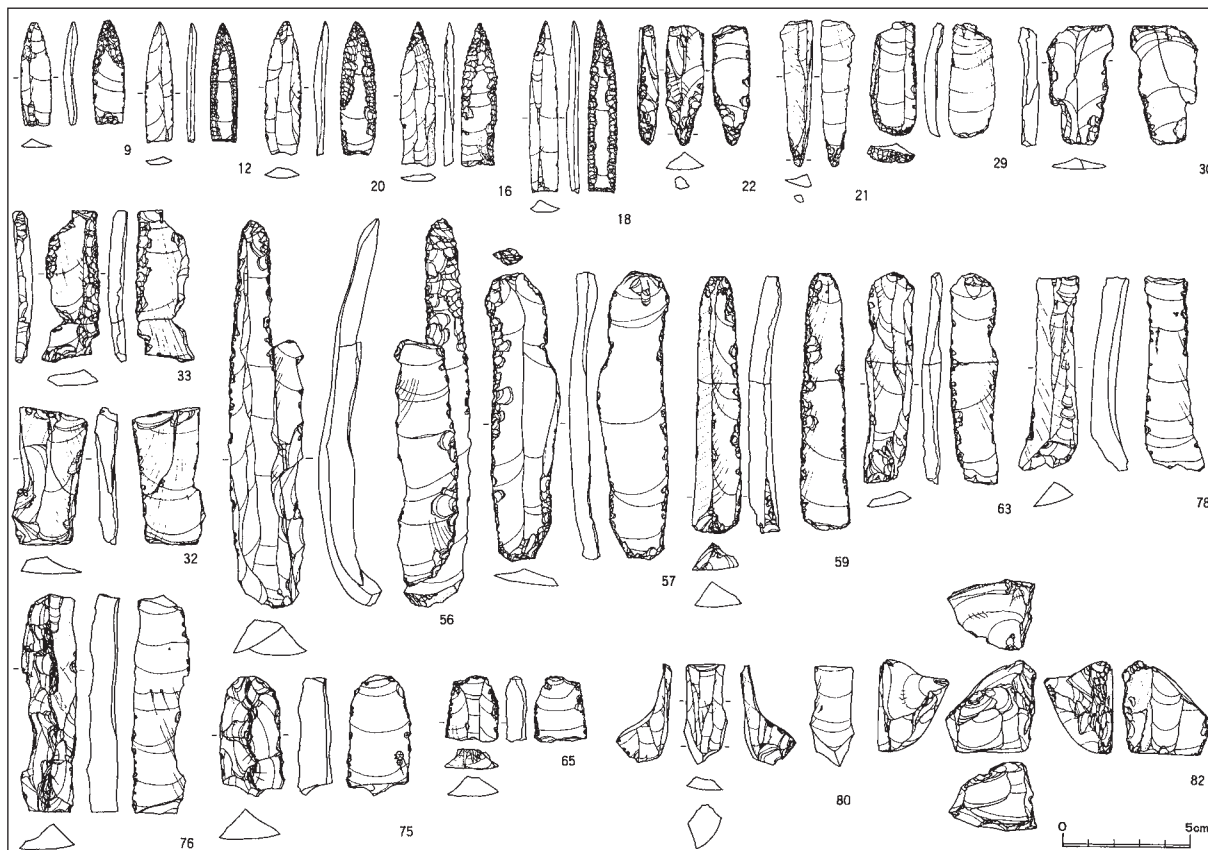
石材消費 出土遺物には以下の特徴がある。①石刃核母型作成段階で剥離される原礫面を背面に残す大型剥片がほとんど見られない。②工程4で行われる打面を大きく取り去る打面再生剥片が無い。③石刃核が1点のみである。④石刃類の剥離面同士の接合が非常に少ない。⑤石刃類の多くは線状痕が残り、削器や彫器・彫器削片が多い。

これらは以下のように解釈される。①原石から剥離される工程1が遺跡内では行われない。②石刃剥離工程4の作業がそれほど行われない。③工程1～4の石刃核が遺棄ないし隠匿されない。④同一母岩の剥離の連続した石刃が少ないことを示し、以下の3つの可能性がある。a：遺跡内で石刃剥離が行われ、多くの石刃が持ち出された。b：他の場所で剥離された石刃が持ち込まれた。c：遺跡内で石刃剥離が行われるが、母岩単位での剥離頻度が少なく母岩ごとの石刃が少ない。⑤石刃の側縁に線状痕が残る作業が繰り返し行われ、削器・二次加工ある石刃から彫器へのリダクションが頻繁に行われた。石材消費形態上④の解釈は非常に重要であるが、今回の資料のみで説明することは困難である。しかし、石刃核が非常に少ないことから④bの可能性が高いと思われる。但し、後述するが本遺跡は広範囲に分布するため地点ごとの偏りがある可能性があり、他の地点で石刃剥離が行われた可能性を排除することはできない。

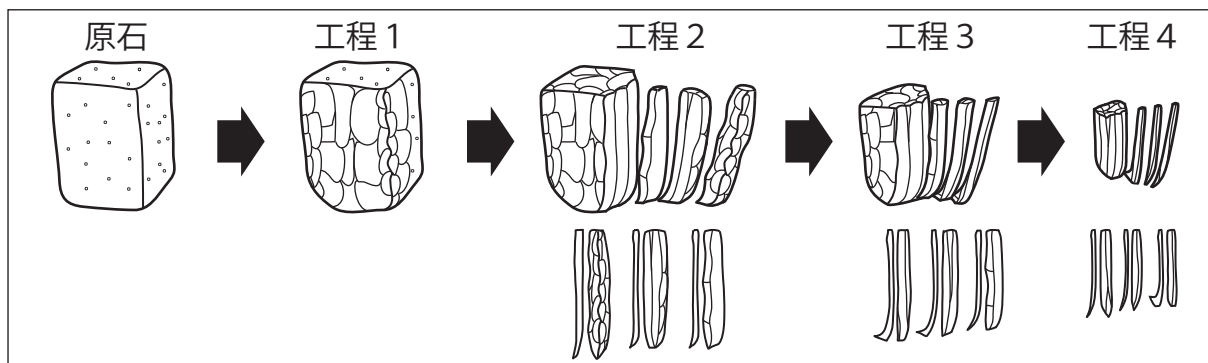
産地分析の結果、石刃鎌（9点）、彫器（1点）、削器（1点）、石刃核（1点）全てが「所山」と判定された。原礫面が残るものは全て角礫面であることから原石は置戸町所山周辺で採集されたと考えられる。

釧路周辺の遺跡の立地の特徴 下幌呂1遺跡は幌呂川右岸に沿って1.5kmの範囲に及び、今回の地点は北西部に位置する。1970年には今回の調査区から南東500mの地点（A地点）で条痕文土器と石刃鎌石器群が採集されている（澤・西1974）。また、幌呂川の対岸の湿原に突き出た舌状の台地上にはアシベツ川右岸遺跡があり、分布調査により条痕文土器と石刃鎌石器群が採集されており（澤ほか1986）、幌呂川右岸のみならず対岸までの広い範囲に当該期の痕跡が残されていたようである。両地点ともまとまった量の遺物が採集され、内容においても今回の出土遺物とは大きな違いは見られない。当時の環境は現在の釧路湿原に古釧路湾が広がっていたことが推定されており（澤1969）、これらの遺跡は古釧路湾北西部に注ぐ幌呂川の河口周辺の入り江状の段丘上に立地していたと考えられる。

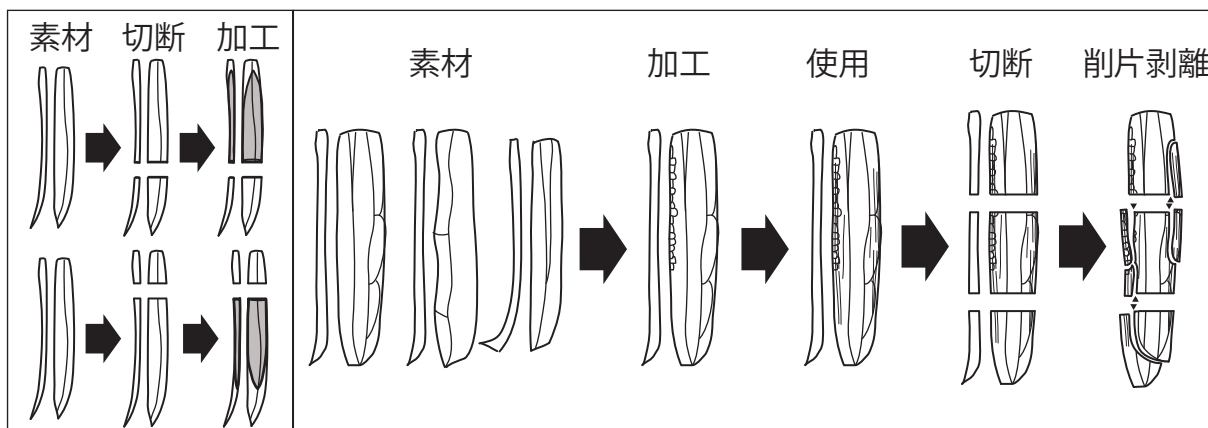
釧路周辺では、釧路市東釧路遺跡第Ⅱ地点（岩崎ほか1980）、標茶町二ツ山遺跡第1地点・第3地点（豊原1985）でまとまった量の石器類が浦幌式や女満別式土器とともに出土している。二ツ山遺跡は地点間に500mの距離があり、下幌呂の遺跡群同様規模の大きい可能性がある。これらの遺跡も古釧路湾に面し、それぞれ別保川・釧路川が湾に流れ込む入り江状の地形に立地し、特徴的である。東釧路遺跡は大型の石刃核を多く出土している点で下幌呂の遺跡群とは違いがある。二ツ山遺跡の両地点では小型の石刃核が出土している。これらの遺跡との関係性については今後の課題としたい。（鈴木）



図VI-8 石刃鋸石器群



図VI-9 石刃剥離技術



図VI-10 石刃鋸製作技術

図VI-11 石刃変形過程

(4) そのほかの石器群

定形的な石器のうち、剥片石器はほとんどが黒曜石製で、スクレイパー・石鏃・石槍が多く出土している。礫石器は多種の石材が用いられており、小型の石斧、砥石片、石錘などが目立つ。各時期の特徴的な器種の概要を記す。

縄文時代早期の浦幌式土器に伴う石器は、前項の石刃鏃石器群に加え、蛇紋岩に類するロジン岩製とみられる表面が赤色を呈する石斧がある。同様の石斧は、遠く恵庭市西島松2遺跡にも類例があり、近くでは浦幌町平和遺跡出土のいわゆる石斧形垂飾の一つとも関連があるものと思われる。

中茶路式土器に伴うとみられる石鏃は、小型柳葉形・五角形を呈する。薄身で、非常に細かい両面調整が行われている。

縄文時代中期～後期の北筒式土器に伴うとみられる石器では、石鏃は比較的大型で菱形に近い形状が特徴である。石槍は10～15cmの大型のものが数多く出土した。菱形に近い形状または木葉形を呈し、ていねいに両面調整が行われている。先尖部を再調整し細身になったものもある。つまみ付きナイフやスクレイパー類は、やや不定形な素材の剥片の形状をそのまま利用し、加工・調整をわずかに加えたものが多い。石斧は、小型でていねいに全面研磨されたものが目立つ。砥石は、角柱状の砂岩の各面を擦り面としているものが特徴的である。

縄文時代後期中葉の鮫澗式（エリモB式）土器に明確に伴う石器は少ない。石鏃はH-12で出土したような、薄身で有茎・無茎の二等辺三角形を呈するものが伴う。

(5) 漆塗櫛 [図VI-12]

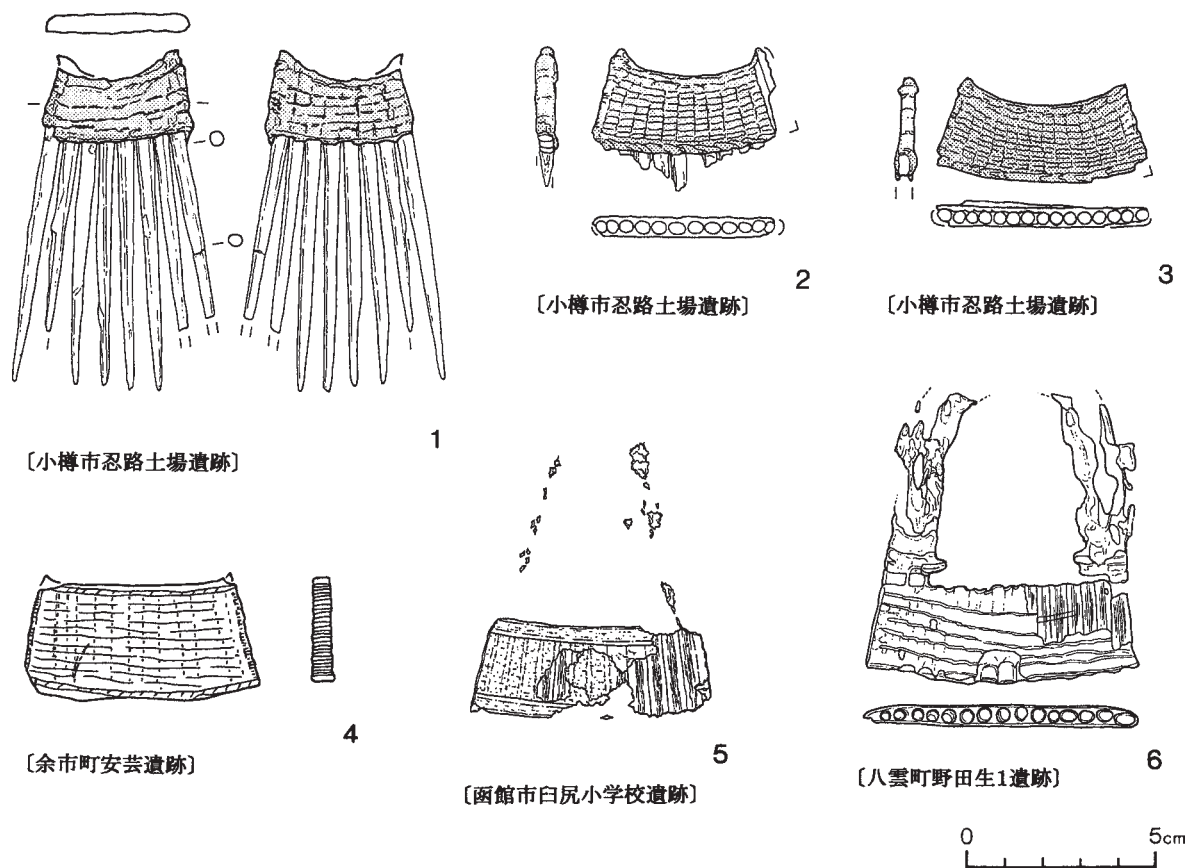
下幌呂1遺跡では、縄文時代後期中葉の竪穴住居跡から漆塗りの櫛が1点出土した。該期の道東地域では初例となる。結歯式の竪櫛で、櫛頭部が台形、櫛歯は残存していないが11本である。観察の結果、アメ色の漆樹液を数回塗り重ねたものとみられ、一部に赤色顔料が確認できた（V章1）。

漆櫛は福井県鳥浜貝塚など縄文時代前期から出土例があるが、後期になるとその数を急速に増やしていく。特に後期後葉は透かし模様入りが利用され始め、漆塗りの櫛が北海道で最も盛行する時期である（小林2008ほか）。その前時期の後期中葉では、これまでに下幌呂1遺跡を含め北海道内で6遺跡の出土例がある。

小樽市忍路土場遺跡では、19点が出土している。報告書に図示された15点をみると、櫛歯の本数に差が見られるものの、全体的には大きさ・形状とも同様のものが多い〔図VI-12の1～3〕。櫛歯は未広がり、残存しているものも6点含まれている。櫛頭部は台形に近く上辺がやや湾曲し、両端がわずかに突出している。櫛頭部の色調は、黒色系が多い中で赤色系が3点、黒地に赤彩があるものが2点図示されている。余市町安芸遺跡では1点〔図VI-12の4〕が出土している。光沢のある黒色の漆櫛。台形を基本とし、歯部は欠損するが16本である。函館市白尻小学校遺跡では、赤色の漆塗膜が残存する竪櫛の頭部が出土した〔図VI-12の5〕。櫛歯固定のための横架部がやや目立つ。台形状の櫛頭部の上辺両端に突起が付いていた痕跡があり、装飾部の塗膜の一部が残る。八雲町野田生1遺跡では、さらに上辺両端の突起が発達し、櫛歯3本分の幅をもつ「輪状装飾部」が残っている。

下幌呂1遺跡の漆塗竪櫛は、櫛頭部が台形を呈し、左右両端の櫛歯の上端が突出することや、非常に細い繊維で格子目状に密に編みこんでいることなど、忍路土場例や安芸遺跡例に非常に近似している。出入り口構造をもつ住居形態や土器の器種・器形・文様などともに、縄文時代後期中葉の道央部との関係が深いことを示す一例である。

（阿部）



図VI-12 縄文時代後期中葉の漆塗櫛

引用・参考文献〔I～VI章〕

(1) 報告書

釧路市郷土博物館 (1975) 『釧路湿原総合調査報告書』
 常呂町 (1976) 『トコロチャシ南尾根遺跡』
 標茶町教育委員会 (1979) 『茅沼遺跡群－釧路川中流域の遺跡－』
 財北海道埋蔵文化財センター (1989) 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』 北埋調報53
 栃木県教育委員会 (1996) 『小丸山古墳群 山苗代A・C遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第177集
 栃木県教育委員会 (1997) 『寺野東遺跡V』 栃木県埋蔵文化財調査報告第200集
 常呂町教育委員会 (2000) 『常呂川河口遺跡』
 釧路市埋蔵文化財調査センター (2001) 『大楽毛1遺跡調査報告書I』
 財北海道埋蔵文化財センター (2002) 『根室市穂香竪穴群』 北埋調報170
 余市町教育委員会 (2003) 『安芸遺跡』
 財北海道埋蔵文化財センター (2003) 『千歳市キウス4遺跡(9)』 北埋調報180
 財北海道埋蔵文化財センター (2003) 『八雲町野田生1遺跡』 北埋調報183
 財北海道埋蔵文化財センター (2003) 『根室市穂香竪穴群(2)』 北埋調報184
 財北海道埋蔵文化財センター (2004) 『根室市穂香竪穴群(3)』 北埋調報198
 財北海道埋蔵文化財センター (2004) 『恵庭市柏木川13遺跡』 北埋調報203
 福島市教育委員会 (2004) 『宮畑遺跡』 福島市埋蔵文化財報告書第173集
 財北海道埋蔵文化財センター (2005) 『根室市穂香川右岸遺跡』 北埋調報212
 財北海道埋蔵文化財センター (2006) 『釧路町東陽1遺跡』 北埋調報230
 鶴居村教育委員会 (2006) 『下幌呂15遺跡発掘調査報告書』
 斜里町教育委員会 (2006) 『来運1遺跡発掘調査報告書』 斜里町文化財調査報告XXVIII
 財北海道埋蔵文化財センター (2008) 『釧路町天寧1遺跡』 北埋調報254

- 斜里町教育委員会 (2008) 『朱円26遺跡 オクシベツ6遺跡 ウナベツ24遺跡』
函館市教育委員会 特定非営利活動法人函館市埋蔵文化財事業団 (2009) 『白尻小学校遺跡・豊崎C・D・F・O遺跡』
函館市埋蔵文化財事業団発掘調査報告書第5輯
(財)印旛郡市文化財センター (2009) 『宮内井戸作遺跡』(財)印旛郡市文化財センター調査報告書第266集
秋田県教育委員会 (2011) 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書第464集
(財)北海道埋蔵文化財センター (2011) 『釧路町天寧1遺跡(2)』北埋調報274

(2) 論文・報文

- 澤四郎・西幸隆 (1974) 「北海道鶴居村下幌呂遺跡A地点出土の遺物について」『釧路市立郷土博物館紀要』第3輯
岩崎隆人・畑宏明・澤四郎・西幸隆 (1980) 「釧路市東釧路遺跡第II地点の発掘調査—昭和41年—」『釧路市立郷土博物館紀要』
第7輯 pp. 57-70
鷹野光行 (1981) 「3. 後期の土器 北海道の土器」『縄文文化の研究4 縄文土器II』雄山閣
鷹野光行 (1984) 「特集：北海道考古学・回想と展望 縄文時代後半期」『北海道考古学』第20輯
豊原熙司 (1985) 「標茶町二ツ山遺跡第3地点遺跡の調査」『続北海道5万年史』pp. 153-161
澤四郎・西幸隆・松田猛・加藤春雄 (1986) 「釧路湿原西縁(鶴居村)の遺跡について」『釧路市立郷土博物館紀要』第11輯
澤四郎・三門準 (1986) 「北海道東部の「矢柄研磨器」について」『釧路市立郷土博物館紀要』第11輯
澤四郎 (1968) 「釧路市東釧路第II地点発掘調査概報」『釧路市東釧路遺跡調査概報』
大沼忠春 (1989) 「北筒式土器様式」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』小学館
大島直行 (1994) 「縄文時代の火災住居」『考古学雑誌』80-1
大倉潤 (1994) 「縄紋後期の有脚土器—秦野市太岳院遺跡採集資料の周辺—」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4
豊原熙司 (1996) 「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』第32輯
高倉純 (1997) 「石刃鎌石器群における石刃剥離技術」『北海道考古学』33 pp. 1-17
高倉純 (1998) 「北海道における石刃鎌石器群の研究—移動・居住形態の検討を中心に—」『考古学研究』44-4, pp. 55-78
高田和徳 (2000) 「土葺き屋根の竪穴住居」『季刊考古学』第73号 雄山閣
北沢実 (2006) 「第5章 第10節3 IV群土器期の様相」『帯広・大正遺跡群2』pp. 356
村本周三・高田和徳・中村明央 (2006) 「岩手県御所野遺跡における竪穴住居火災実験」『考古学と自然科学』53号
村本周三 (2007) 「北海道先史時代の火災住居跡集成」『セツルメント研究』6号
後藤秀彦・山原敏朗 (2008) 「条痕文系平底土器(道東地域)」『総覧 縄文土器』小林達雄編
工藤研治 (2008) 「北筒式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編
阿部明義 (2008) 「堂林式・御殿山式土器」『総覧 縄文土器』小林達雄編
小林幸雄 (2008) 「縄文文化の透かし模様入り漆櫛とその技術」『北海道開拓記念館研究紀要』第36号
村本周三 (2009) 「北海道における縄文時代中・後期の「平地住居跡」とその暦年代」『考古学研究』56-2

(3) 単行本・その他

- 澤四郎 (1969) 『釧路の先史』
釧路市 (1974) 『新釧路市史』第一巻
林巳奈夫 (1984) 『殷周時代青銅器の研究 殷周青銅器総覧一』吉川弘文館
中国对外文物展覽公司 (1986) 『「黄河文明展」図録』中日新聞社
鶴居村村史編纂委員会 (1987) 『鶴居村史』
小山正忠・竹原秀雄 (1994) 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
宮本長二郎 (1996) 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
浅川利一・安孫子昭二編 (2002) 『縄文時代の渡来文化 刻文付有孔石斧とその周辺』雄山閣
(財)北海道埋蔵文化財センター (2004) 『遺跡が語る北海道の歴史—(財)北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌—』
斜里町教育委員会 (2008) 『知床の考古学』しれとこライブラリー9

写真図版



下幌呂 1 遺跡遠望（釧路湿原細岡展望台より）



1. 遺跡遠景（空中撮影・合成）



1. 調査区近景（空中撮影）



2. 調査区近景（空中撮影）



1. IV層上面 (平成 21 年)



2. 基本土層断面 (I 5 区)



3. 21 ライン断面 (M 22 区・H-9 付近)



4. 中央部付近調査状況



5. 東側斜面部調査状況

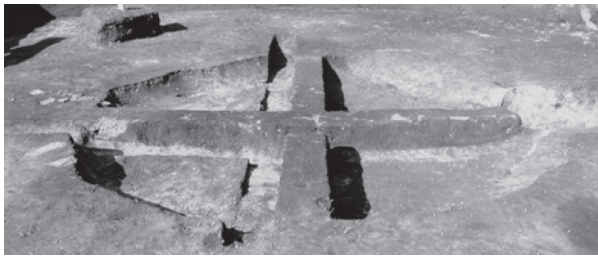
図版 4



1. H-1 検出



2. H-1 調査状況



3. H-1 東西断面



4. H-1 南北断面



5. H-1 完掘



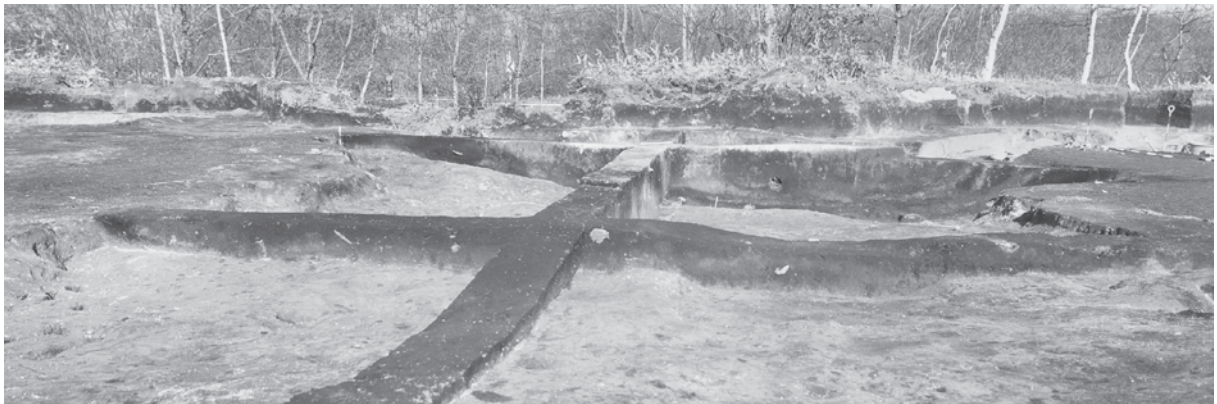
1. H-2・3検出



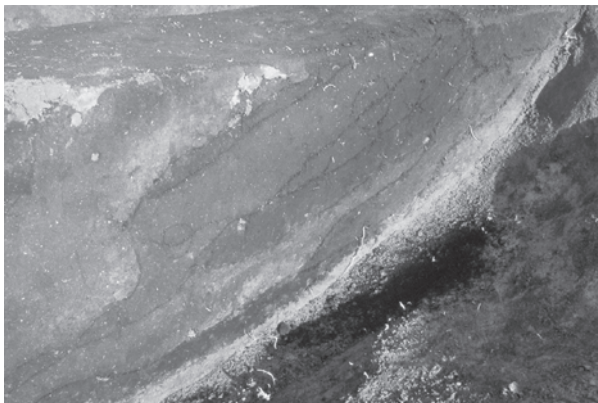
2. H-2・3覆土調査状況



3. H-2・3東西断面



4. H-3南北断面



5. H-2南北断面(1)



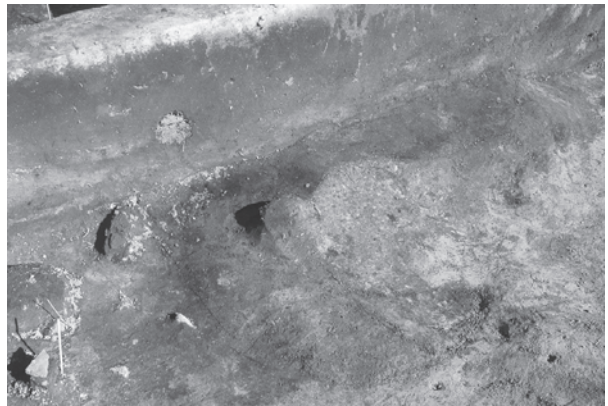
6. H-2南北断面(2)



1. H-3 炭化材出土状況



2. H-2 炭化材出土状況



3. H-2 覆土ベンガラ検出



4. H-2 床面ベンガラ検出



5. H-2・3 完掘



1. H-4 東西断面



2. H-4 南北断面



3. H-4 土器出土状況 (1)



4. H-4 土器出土状況 (2)



5. H-4 床面検出

図版 8



1. H-5 検出



2. H-5 覆土焼土検出



3. H-5 東西断面



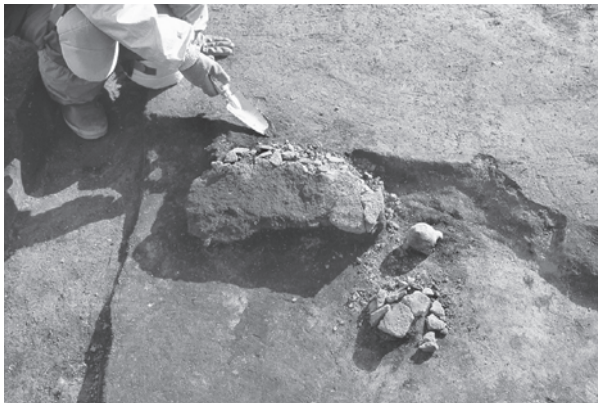
4. H-5 南北断面



1. H-5 小型注口土器出土状況 (1)



2. H-5 小型注口土器出土状況 (2)



3. H-5 遺物出土状況



4. H-5HF-1 断面



5. H-5 完掘 (H-11 検出)



1. H-6 南北断面



2. H-6 東西断面



3. H-6 完掘



4. H-7 南北断面



5. H-7 完掘



1. H-8 検出



2. H-8 断面



3. H-8 石刃出土状況



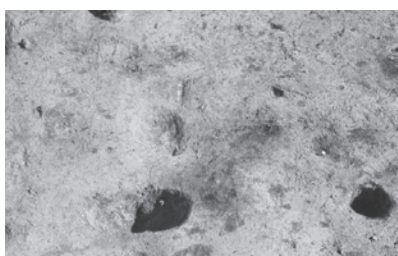
4. H-8 完掘



5. H-9 東西断面



6. H-9 南北断面



7. H-9HF-1 検出



8. H-9 完掘



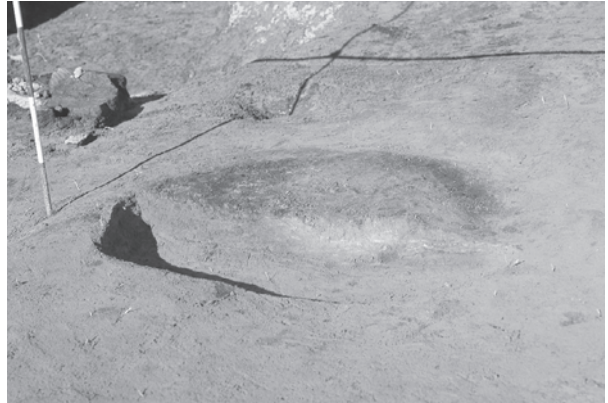
1. H-10 覆土遺物出土状況



2. H-10 断面



3. H-10 床面付近遺物出土状況



4. H-10HF-1 断面



5. H-10 完掘



1. H-11 炭化材出土状況



2. H-11 完掘

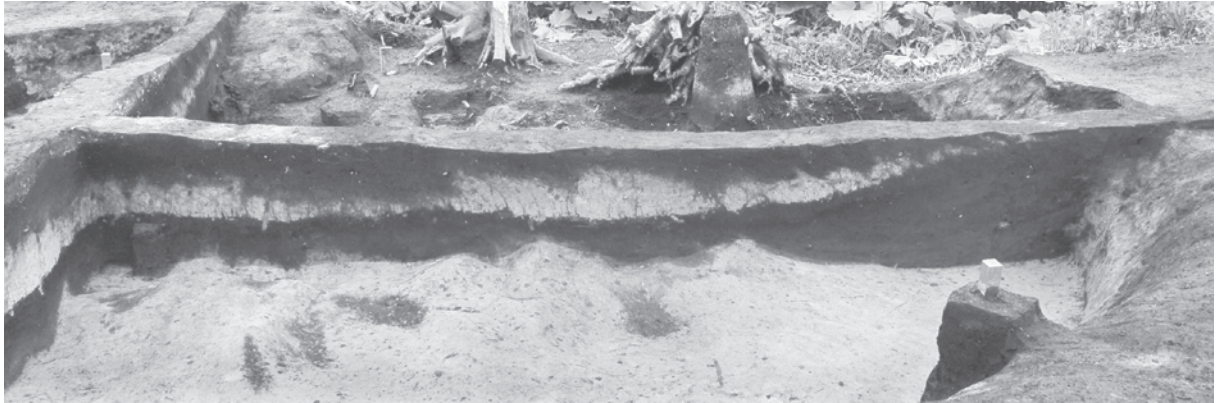
図版 14



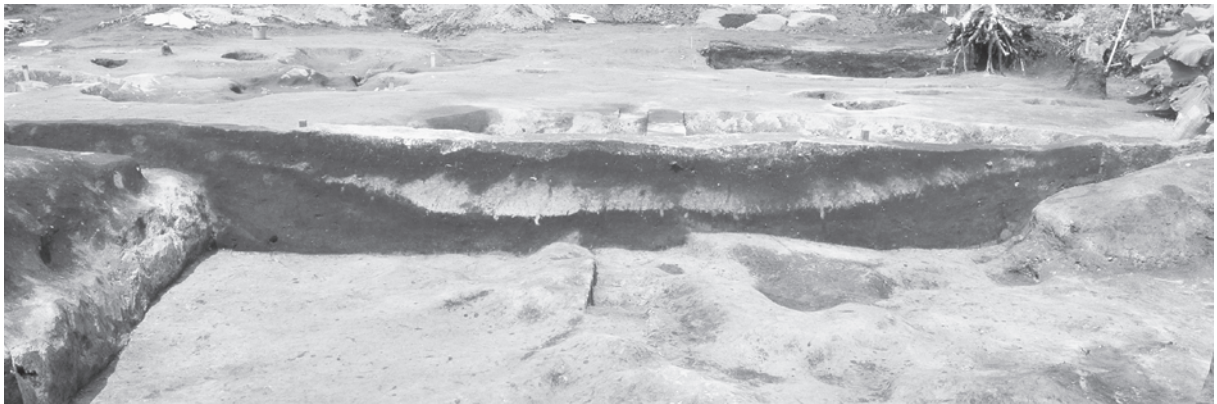
1. H-12 検出



2. H-12 覆土 Ta-c 検出



3. H-12 南北断面



4. H-12 東西断面



5. H-12 炭化材・焼土検出



6. H-12HF-1 断面



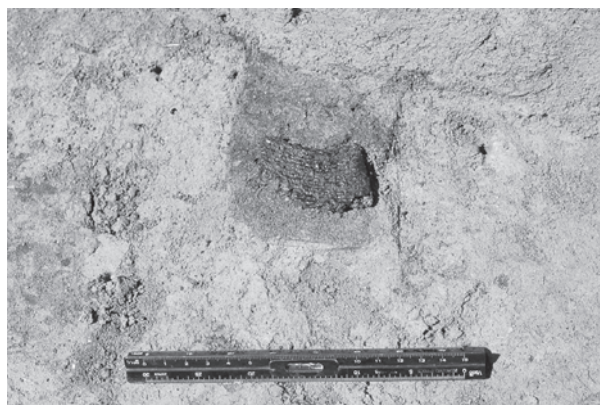
1. H-12 四脚付浅鉢土器出土状況 (1)



2. H-12 四脚付浅鉢土器出土状況 (2)



3. H-12 土器出土状況



4. H-12 漆塗り櫛出土状況



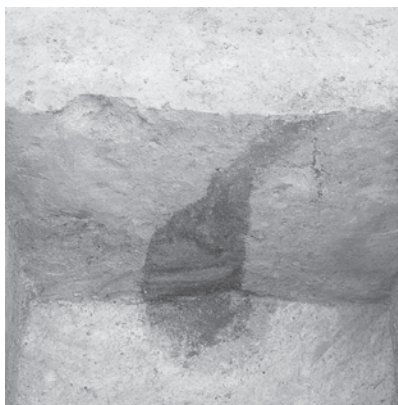
5. H-12HP-1 断面



6. H-12HP-2 断面



7. H-12HP-3 断面



8. H-12HP-10 断面



9. H-12HP-6 断面



10. H-12HP-7・8 断面



1. H-12 完掘 (1)



2. H-12 完掘 (2)



3. H-13 礫出土状況



4. H-13 東西断面



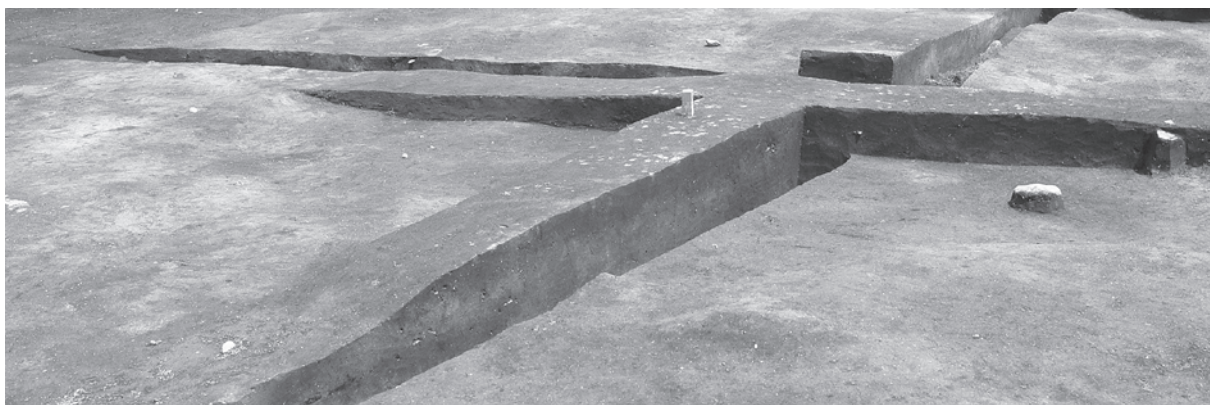
5. H-13 完掘



1. H-14・26 検出



2. H-14 ~ 15 断面



3. H-14 東西断面



4. H-14 黄色土検出



1. H-14 炭化材出土状况(1)



2. H-14 炭化材出土状况(2)



3. H-14 炭化材出土状况(3)



4. H-14 炭化材出土状况(4)



5. H-14 炭化材出土状况(5)



1. H-14 炭化材 (草本) 出土状况



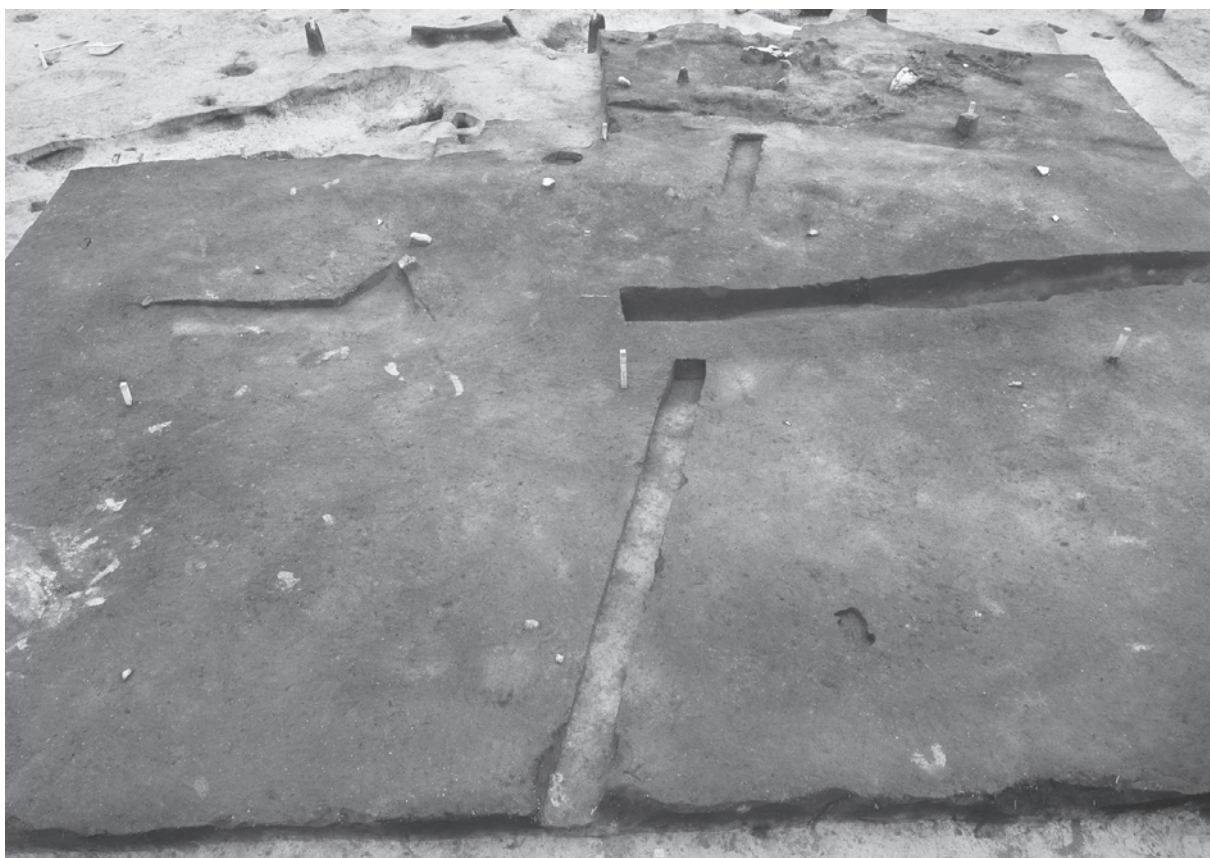
2. H-14HP-1 断面



3. H-14HF-1 断面



4. H-14HF-2 断面



5. H-14 完掘



1. H-15 検出



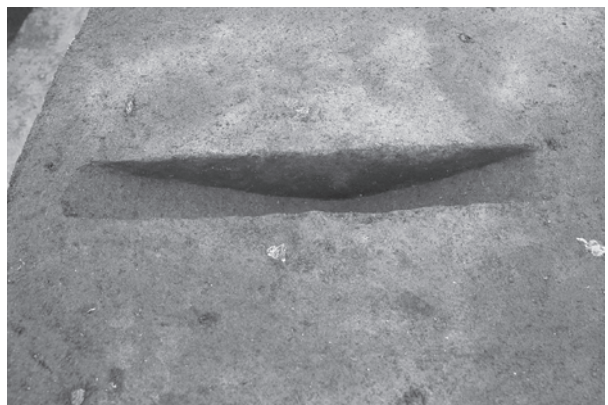
2. H-15 断面



3. H-15 炭化材出土状況(1)



4. H-15 炭化材出土状況(2)



5. H-15HF-1 断面



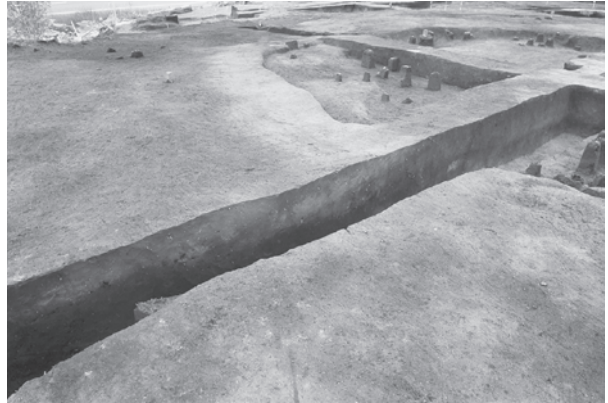
1. H-15・16 覆土調査状況



2. H-16 黄色土検出



1. H-16 南北断面



2. H-16 東西断面



3. H-16 ~ H-19 断面



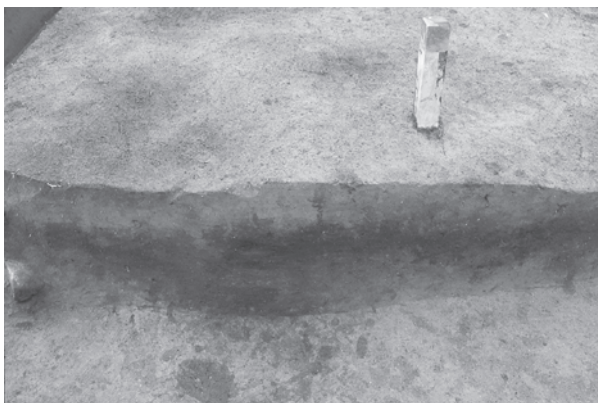
4. H-16 ~ H-20 断面



5. H-16 遺物出土状況



6. H-16HM3 層炭化材出土状況



7. H-16HF-1 断面



8. H-16HF-2 断面



1. H-17・20 調査状況



2. H-17 遺物出土状況



3. H-17 南北断面



4. H-17 東西断面



5. H-17HF-1 断面



6. H-17HF-3 断面



1. H-17HP-1 断面



2. H-17HP-5 断面



3. H-17HP-2 断面



4. H-17HP-3 断面



5. H-17HP-4 断面



6. H-17 完掘



1. H-18 南北断面



2. H-18 東西断面



3. H-18 石槍出土状況



4. H-18 炭化材出土状況



5. H-18HF-1 断面



6. H-18HP-1 断面



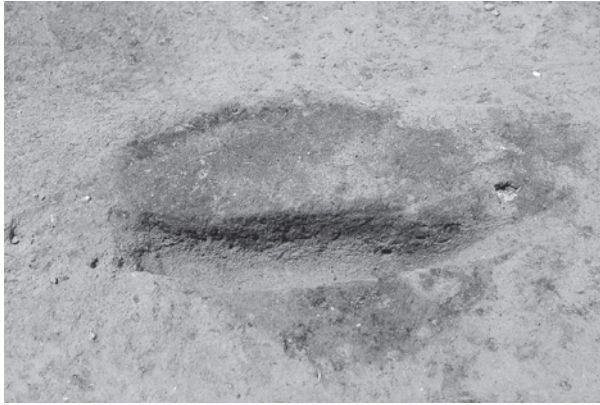
7. H-18 完掘



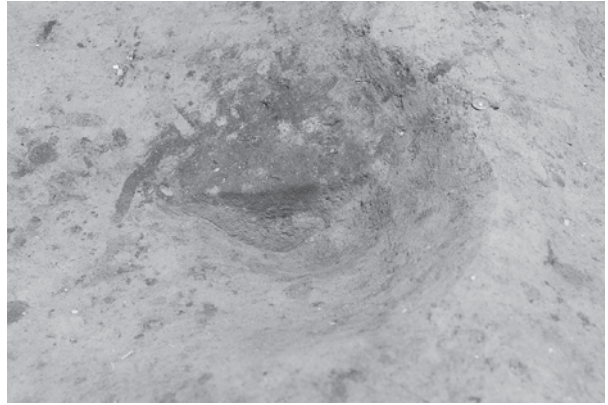
1. H-19 東西断面



2. H-19 南北断面



3. H-19HF-1 断面



4. H-19HF-2 断面



5. H-19 完掘



1. H-20 東西断面



2. H-20 南北断面



3. H-20 完掘



4. H-20HP-1



5. H-21 東西断面



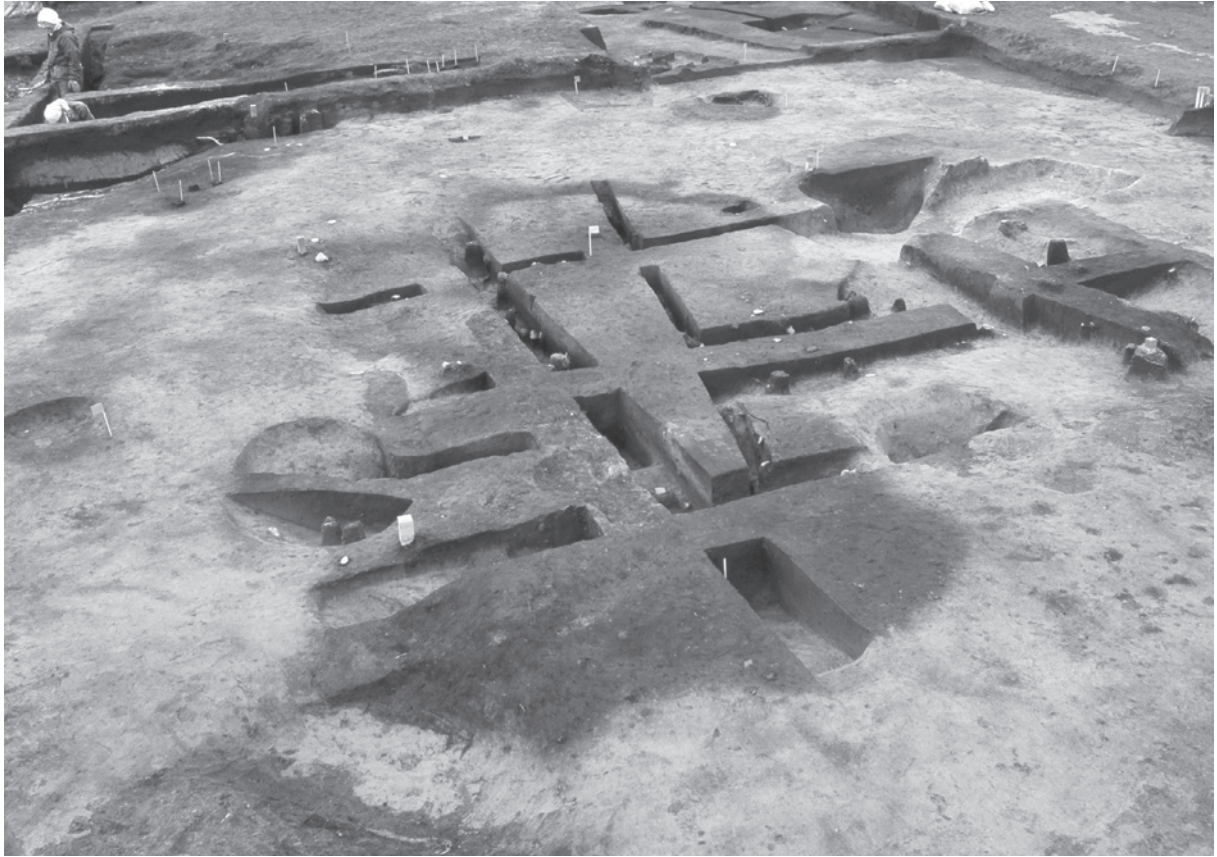
6. H-21 南北断面



7. H-21HF-1 断面



8. H-21 完掘



1. H-22・P-43～45 検出



2. H-22 東西断面



3. H-22 南北断面



4. H-22 遺物出土状況



5. H-22 床面



1. H-23 東西断面



2. H-23 覆土焼土・黄色土検出



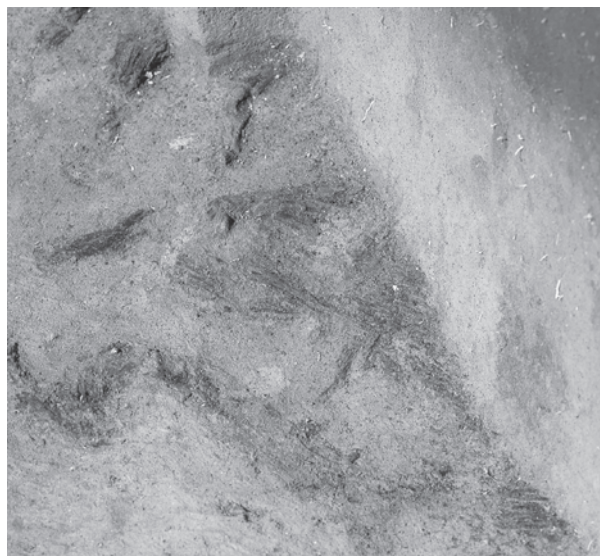
3. H-23 炭化材出土状況(1)



4. H-23 炭化材・黄色土断面



5. H-23 炭化材出土状況(2)



6. H-23 炭化材出土状況(3)



1. H-23 石槍出土状況



2. H-23 掘上土断面



3. H-23HP-1 断面



4. H-23HF-1・2 断面



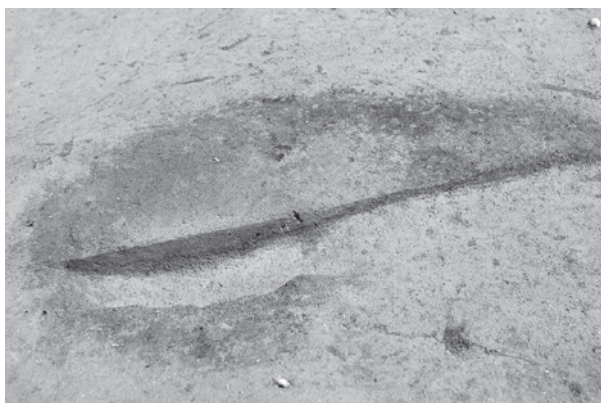
5. H-23 完掘



1. H-24 東西断面



2. H-24 南北断面



3. H-24HF-1 断面



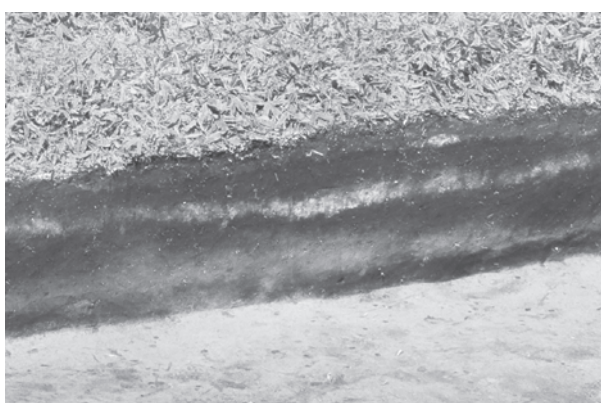
4. H-24 完掘



5. H-25 黄色土検出



6. H-25 東西断面



7. H-25 南北断面



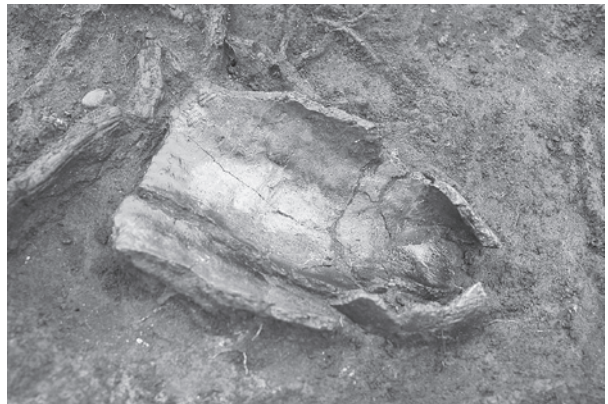
8. H-25 完掘



1. H-26 断面



2. H-26 土器①出土状況(1)



3. H-26 土器①出土状況(2)



4. H-26 土器②出土状況



5. H-26 フレイクチップ出土状況



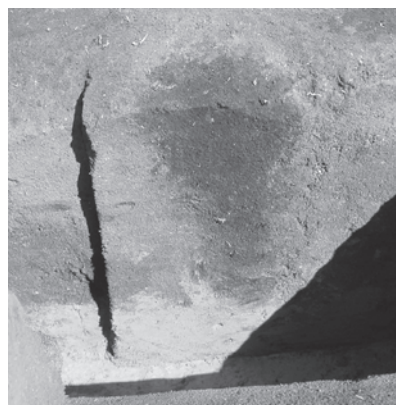
1. H-26 覆土烧土断面



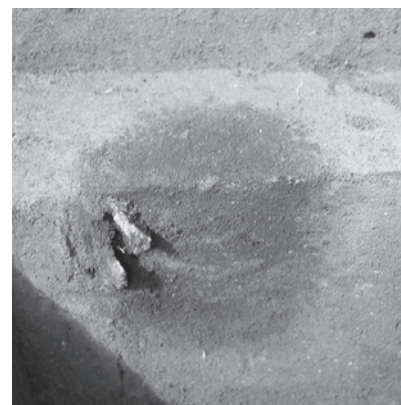
2. H-26HF-1 断面



3. H-26HP-1 断面



4. H-26HP-3 断面



5. H-26HP-5 断面



6. H-26 炭化材出土状况



1. H-27 南北断面



2. H-27 東西断面



3. H-27 床面



4. H-27HF-1 断面



5. H-27 炭化材出土状況



1. H-28 南北断面



2. H-28 完掘



3. H-29 東西断面



4. H-29HF-1 断面



5. H-29 完掘



1. H-30 検出



2. H-30 調査状況



3. H-30 南北断面



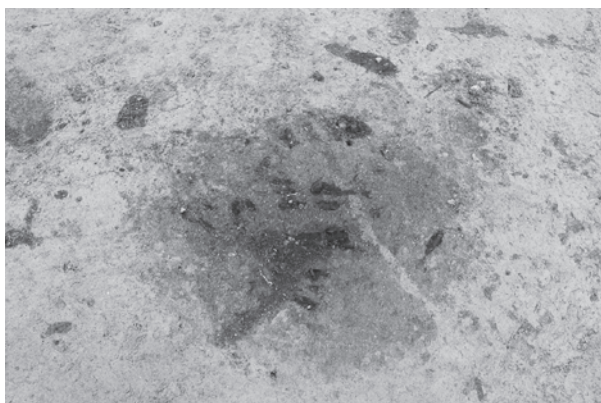
4. H-30 東西断面



1. H-30 炭化材・遺物出土状況



2. H-30 土器出土状況



3. H-30HF-1 検出



4. H-30HP-1 断面



5. H-30 完掘



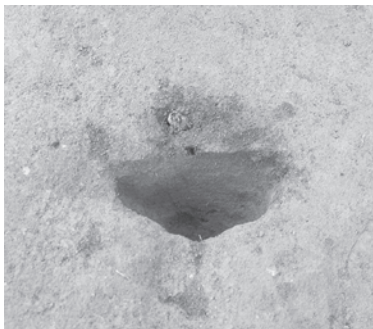
1. H-31 完掘



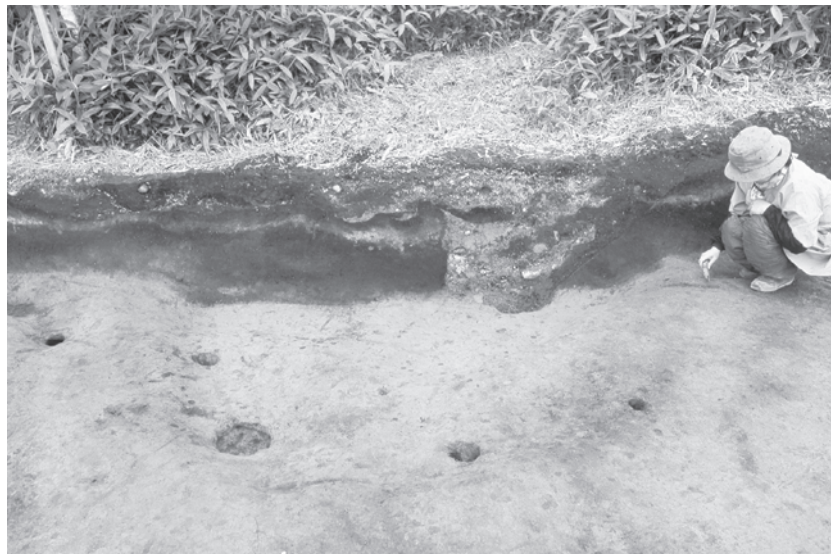
2. H-32 南北断面



3. H-32 東西断面



4. H-32HP-5 断面



5. H-32 完掘



1. H-33 南北断面



2. H-33 東西断面



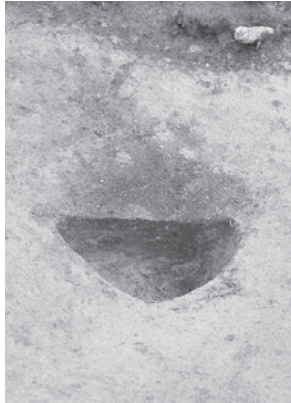
3. H-33 壁際炭化材出土状況



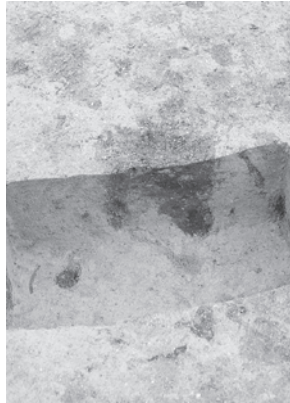
1. H-33 床面炭化材出土状况



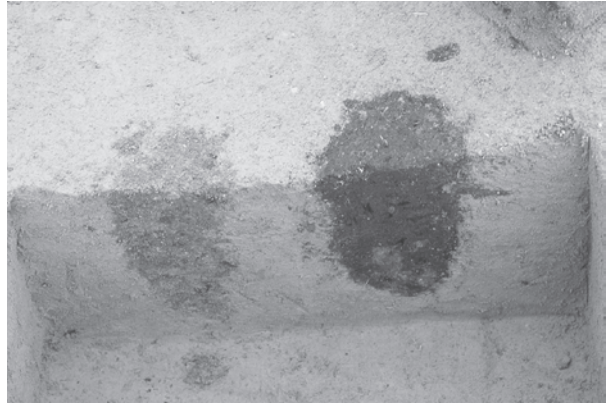
2. H-33HF-1 断面



3. H-33HP-1 断面



4. H-33HP-2 断面



5. H-33HP-3・4 断面



6. H-33 完掘



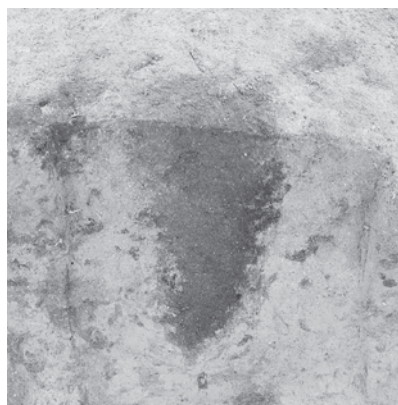
1. H-34 南北断面



2. H-34 東西断面



3. H-34HP-1 断面



4. H-34HP-3 断面



5. H-34HP-5 断面



6. H-34 床面



1. H-35 東西断面



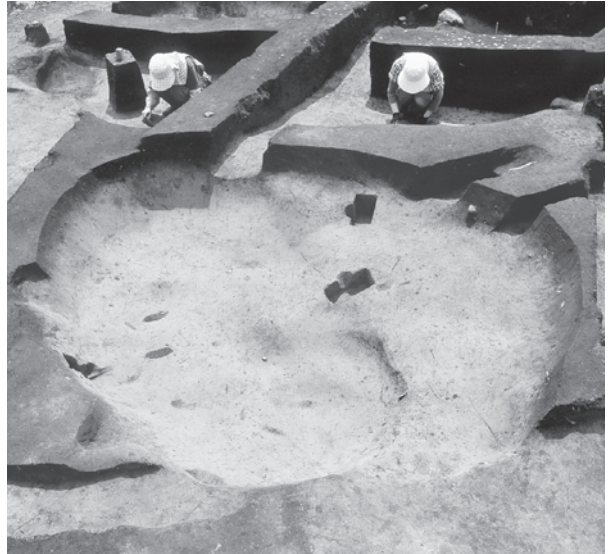
2. H-35 南北断面



5. H-37 東西断面



6. H-37 南北断面



3. H-35 完掘



4. H-36 完掘



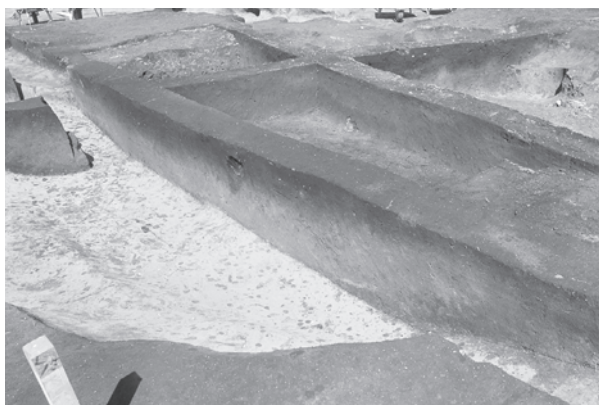
7. H-37 完掘



1. H-38 調査状況



2. H-38 東西断面



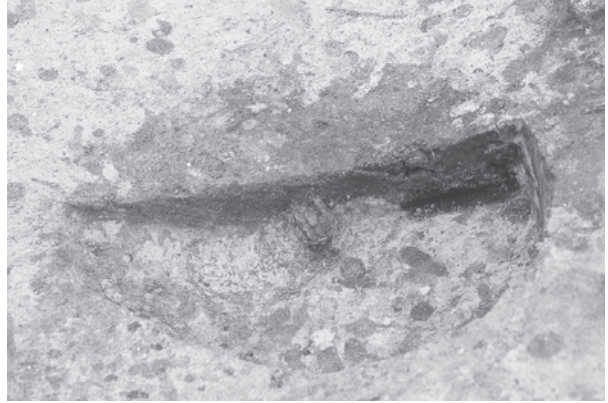
3. H-38 南北断面 (1)



4. H-38 南北断面 (2)



1. H-38HP-1 断面



2. H-38HP-2 断面



3. H-38HP-3 断面



4. H-38HP-4 断面



5. H-38HP-5 断面



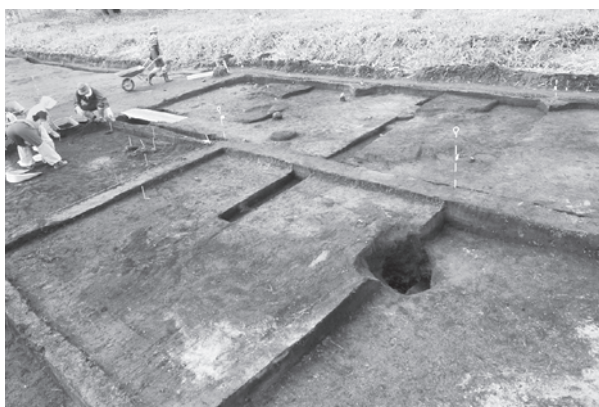
6. H-38HP-6 断面



7. H-38 完掘



1. 盛土遺構 (M-1) 検出



2. 盛土遺構 (M-1) 調査状況



3. 盛土遺構 (M-1) 焼土検出



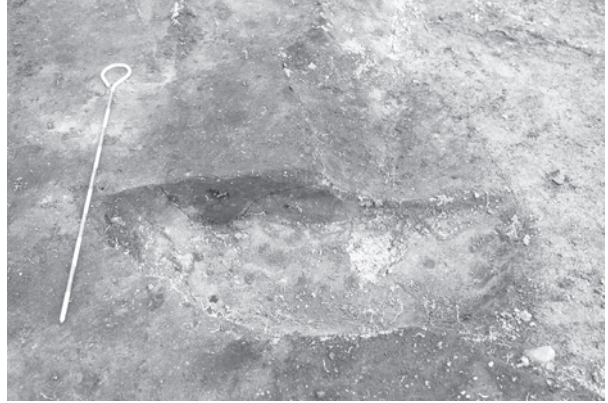
4. 盛土遺構 (M-1) 断面 (1)



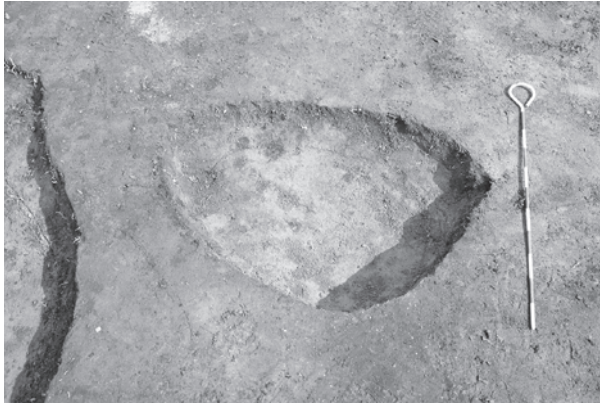
5. 盛土遺構 (M-1) 断面 (2)



1. P-1 断面



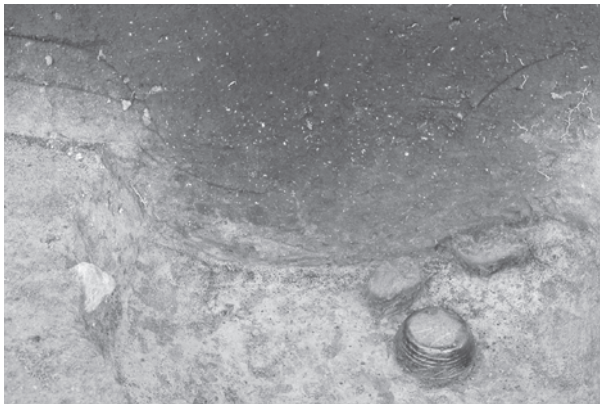
2. P-2 断面



3. P-3 完掘



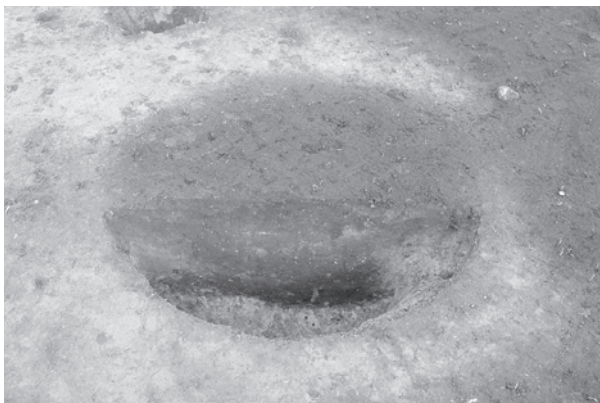
4. P-4 断面



5. P-5 断面・遺物出土状況



6. P-6 断面



7. P-7 断面



8. P-9 断面



1. P-8 断面・P-17・18



2. P-10 断面



3. P-11 断面



4. P-12・13 断面



5. P-14 断面



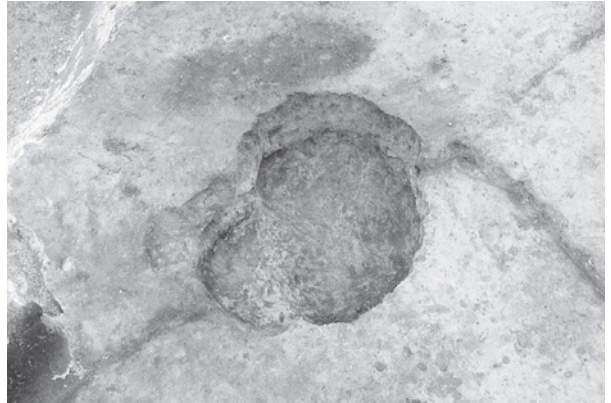
1. P-15 断面



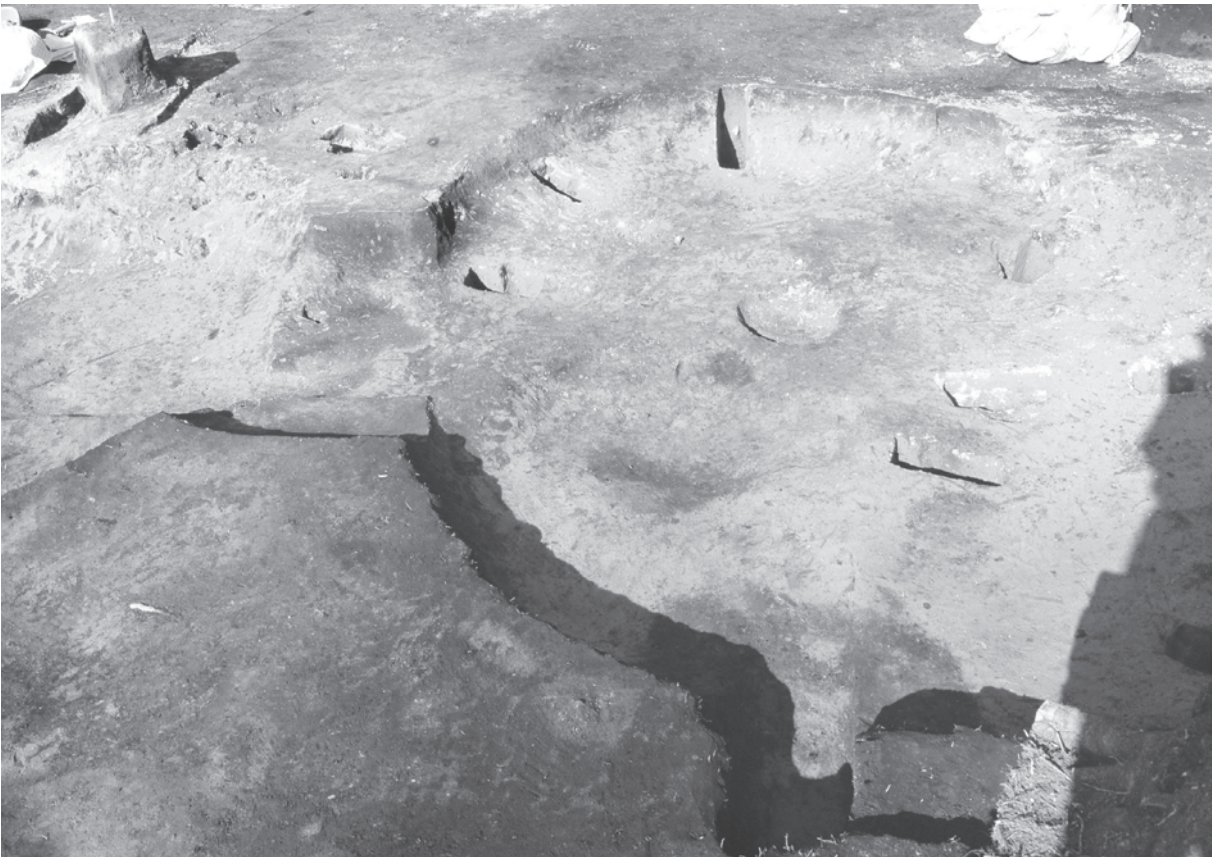
2. P-16 検出



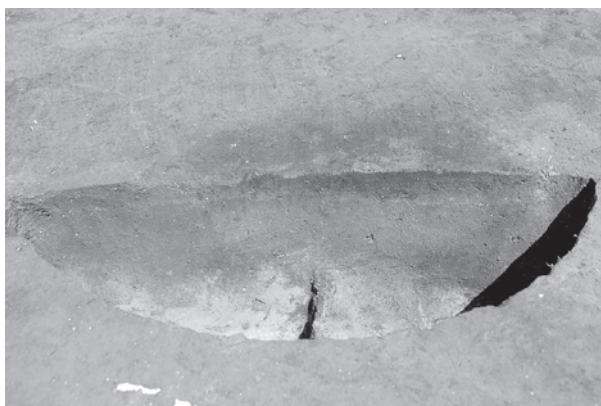
3. P-20 断面



4. P-21 完掘



5. P-22 ~ 24 完掘



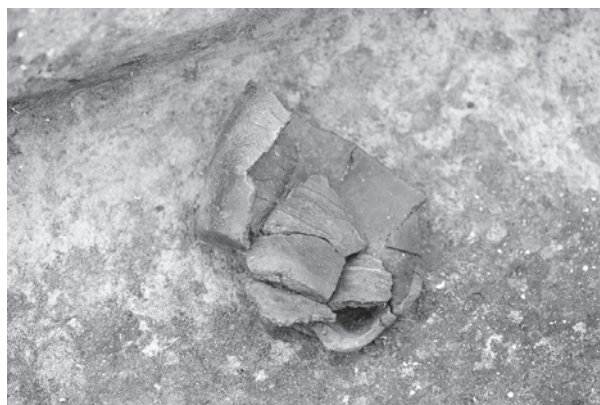
1. P-28 断面



2. P-28 完掘



3. P-29・30 完掘



4. P-30 土器出土状況



5. P-31 断面



6. P-32 断面



7. P-33 断面



8. P-34 断面

報告書抄録

ふりがな	つるいむら しもほろろいちいせき							
書名	鶴居村 下幌呂1遺跡							
副書名	釧路鶴居弟子屈線（A交-57）交付金工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書（北埋調報）							
シリーズ番号	第287集							
編著者名	佐藤和雄、笠原興、鈴木宏行、阿部明義							
編集機関	財団法人北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦 2012年3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもほろろ いせき 下幌呂1遺跡	ほっかいどう 北海道 あかんぐん 阿寒郡 つるいむら 鶴居村 あざほろろげんや 字幌呂原野 きせん 基線29-2	01667	16	43° 09' 20"	144° 19' 30"	20070906 ～ 20071031・ 20090507 ～ 20090828	2,200㎡	道道改良工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下幌呂1遺跡	集落跡	縄文時代早期 中期末～ 後期前葉 後期中葉	土坑 焼土 集石 平地住居跡 竪穴住居跡 土坑・土坑墓 焼土 集石 竪穴住居跡	土器（浦幌式・中茶路式ほか） 石器（石刃鎌・石刃・削器・彫器、 石鎌・石斧・石錘ほか） 土器（北筒Ⅱ式・Ⅲ式ほか） 石器（石鎌・石槍・ナイフ類・ スクレイパー類・石斧・ 砥石・たたき石・台石ほか） 土器（鯨潤式・エリモB式） 小型注口土器・四脚付浅鉢土器 石器 漆塗櫛	石刃鎌石器群 土葺き屋根と 推測される住 居跡 炭化材が良好 に残存する平 地住居跡 竪穴住居跡壁 際に特殊遺物			
要約								
<p>下幌呂1遺跡は、釧路湿原北西縁辺部の幌呂川右岸河岸段丘上、標高約14mに立地する。平成19・21年の2か年の調査で、住居跡38軒・土坑87基（墓含む）・焼土32か所ほかが発見された。遺物は、縄文早期～晩期の土器・石器等約9万点が出土した。</p> <p>縄文早期では、石刃鎌・削器・彫器など石刃鎌石器群と浦幌式土器が、ある程度まとまった範囲から出土した。また中茶路式期の袋状土坑が数多く検出された。</p> <p>縄文中期末～後期前葉では、20軒以上の竪穴住居跡のほか、検出例の少ない「平地住居跡」が4軒見つけた。中には、建物の一部を構成していたとみられる炭化材が良好に残存するものや、屋根の葺き土と推定される黄色土が残るものがある。</p> <p>縄文後期の鯨潤式期では、完形の小型注口土器が出土する竪穴住居跡や、「四脚付浅鉢」・漆塗櫛などの特殊な遺物が出土する大型の竪穴住居跡があり、廃屋時の儀礼的行為がうかがえる。</p>								

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第287集

つる い むら しも ほろろ
鶴居村 下幌呂1遺跡

—釧路鶴居弟子屈線(A交-57)交付金工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行 平成24年3月23日

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地1

TEL 011-386-3231

[E-mail] mail@domaibun.or.jp

[URL] <http://www.domaibun.or.jp>

印刷 株式会社 北海道機関紙印刷所

〒060-0806 札幌市北区北6条西7丁目

TEL 011-716-6141

